
義賊と貴族がメイドと主

U16

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義賊と貴族がメイドと主

【Nコード】

N6863V

【作者名】

U16

【あらすじ】

彼はたった一つを得る為に己の全てをかける。愛すべき者達さえも。

二十年の歳月を全て費やし、手にした一つの技術。

それが愛する者達を戦場に送り込むモノだったとしても、彼は躊躇わない。

得る為には、守る為にも、自分は無力だと知っているからこそ、躊躇えない。

そんな彼と彼を支える女達の物語。

「ご主人様、お慕い申し上げております」

「ゴシユジンサマ、大好きだよ？」

「御主人様、ウチ、愛してるで？」

「主殿、あたしを誰にも渡さないでくれよな？」

「当主様、私は、私は貴方の奴れ……」

「クルカ様、俺あ死ぬまでついていくぜ？」

「クルカ様、もう少しで構いませので主らしく毎日働いてください」

「お前ら、俺のこと舐めてるだろ？ 全員棒読みで感情こもってねえんだよ！ ついていくつて、お前もうジジイだろうが！ ……毎日って事は休みがねえ……全然少しじゃねえ！」

主人公の戦闘能力が上がったりはしません。「主人公無双」はありません。「ヒロイン無双」はあるかもしれませんが、性的表現が多少ありますのでご注意ください。

第01話 働きたくない主（前書き）

予告なく文章が変更、改訂される恐れがあります。ご注意ください。

第01話 働きたくない主

今、俺は危機に瀕している。

職が無いわけでも、金が無いわけでもないし、地位と名誉も多少ではあるが持っている。金はあるから、いくらでも娼婦は買える。だから女に不自由して飢えているわけでもない。

いや、嘘は良くないな。金はあるが娼婦は買えない。メイドが怒るから。

しかし、性欲が満たされていないわけでもない。

じゃあ、殺されそうなのか、もしくは病気や怪我で死にかけているのか、と言われればそれも違うがある意味正しい。

正しいが、少し違う。

働かされそうなのだ。

働きたくないのに。

働くのが死ぬほど嫌いなのに、だ。

「何かくだらない事をお考えになっているお顔ですね？」

問題なのは、ときおり心を読んだかのような発言をしてくる、油断のならないこの女だ。メイド達のまとめ役である侍従長であり、主である俺に絶対服従であるはずの、このメイドが。俺の自由を脅かし俺を働かせようとしてくる人間の筆頭なのだ。

「いい加減に起きてください。シーツを洗って干さないといけませんので。あと働いてください」

「二言目にはいつも、働け、だ。」

「ルシイ、俺はこの屋敷の主だぞ。だから働かなくてもいいんだ。俺が何もしなくても皆がちゃんとしてくれるから問題ない」

「ええ、ですからご主人様は炊事、洗濯などの家事はもちろん、屋敷の管理はされなくても結構です。ですが……」

『ご自分の領地の管理は、しっかりなさってください』

と、ルシイが言おうとしていたセリフを先読みして言葉を合わせると、ルシイは『温度が二十度くらい下がったんじゃないか？』というような冷たい微笑みをこちらに向けて

「わかっていらっしやるのなら、行動してください」

声は落ち着いているが、その綺麗な金髪の毛を逆立て始めたルシイに怯えながら、この場を乗り切る方法を必至で考える。

「いや、ほら。今日はちよつと体調が悪くて……」

「昨晩は夕方から明け方まで、メリーをお相手に随分と頑張られた様ですから、腰でも痛められましたか？」

『……………』

「なんでルシイが知ってるんだよ！」

「この屋敷で起こった事で、知らない事はございません」

「いやいや！ 昨日は王都まで出かけてだろうが！ 昨日の夕方に一般転移門の使用時間を過ぎたから、帰ってくるのは今日の朝になるって言ってたよな！？」

一般用の転移門は、10時から18時までしか運営していない。しかも一時間に一回しか動かない上に、都市、町、村の重要度により回数が決められている。

その為、王都とこの街とは一日一回しか往復出来ない。まあでも歩いて一週間の距離が『0』になるんだからすごいものだと思う。

「あれは嘘です。ご主人様を驚かそうと、シュリアス様のところで念話石を借りて連絡しました」

「シュリアスの！？　すぐそこじゃねえか！　ってか、念話石の表示は王都のベルモ屋敷になってたぞ！」

念話石とは、人間の腰ぐらいまでの高さの大きさの長方形の石で、表面に刻み込まれた魔方陣に魔力を流す事で、別の念話石と繋がって会話ができる様になるというものだ。魔方陣を刻む際に入れられた所在地と、登録された二十桁からなる番号はごまかす事が出来ない、とされている。基本的には。

「ええ、帰りにご主人様のお好きな何か甘いモノでも買って帰ろうかと、シュリアス様の奥様のお店に寄ったのです。そこで面白いお話を聞きまして」

嫌な予感がする……

「奥様がおっしゃるには、なんでもとある貴族の方がシュリアス様の機構師としての腕を見込まれて、ある依頼されたそうです。その内容は、念話石の所在表示を常に王都に固定できる機構石を作って欲しいとの事だったと」

ヤバイ方向に話が向かってる気がする……

「その貴族が言うには、税収監査官が脱税容疑のある貴族の屋敷に向かう前に、王都から連絡を入れたフリをして相手を安心させておき、いきなり現場に踏み込む為に必要だとか言っていたらしいのです。ですが、一般にはあまり知られていませんが緊急用転移門はいつでも使えるはずなので、連絡をいれたフリなど役人には必要無いはずだとは思いませんか？」

「がめついい税収役人の言う事だからなあ。色々と策を練らないと、捕まえられない領主が多いんじゃないかな。うん」

やばい、背中汗が止まらない。逃げる準備をしたほうがいいのかと思いい、ベッドから降りる。そして、ルシイが持ってきてくれたんだらう魔法のデキャンターの中に入っていた、冷たい水を喉に流し込む事で落ち着こうと努力する。

「ところで、ご主人様？」

「はいっ!？」

「近々、メリーが旅行に行くそうで、リシュアレ湖の畔の別荘の鍵を借りに来たのですが、どなたと行くのかご存知ありませんか？」

話の流れが少し変わった事で、落ち着いた様子を見せるルシイに、ほっとしながら応える。

「し、知らないが？ 何か問題でもあるのか？」

「誰と行くのかを聞いても秘密だとは言わないものですから。日程は、ご主人様が王都にお仕事で行かれる日程の範囲内ですので、お屋敷のお仕事には差し支えはありません。ですが、夕チの悪い馬鹿な男に引つかかかってないか心配で」

「だ、大丈夫だろう？ メルはほとんど屋敷から出ないし、屋敷には若い男はいないからなあ」

「ええ、この屋敷には人格者の老執事と、優しい庭師のお爺さんし

か男性の使用人はいませんが、夕チの悪い男というのは、虫のように何処にでも、この屋敷にもいるものですから……」

「それは、俺の事を、虫のように……湧いて出てくるって言うてるよな！ 絶対そうだよな！」

ちなみに執事の方はグリント、庭師はエヴァンという名前だが、二人とも目が細く起きているのか寝ているのかわからない顔をしている。

「いえいえ、まさか。どんなに好色で、侍従長である私を筆頭に手をつけた女性の数が2桁ケタになりそうなご主人様、とはいえ、一応はご主人様ですので、そんな失礼な事は言いませんよ？」

「いや、お前は普段からもっとひどい事言ってるから！ ヘタレとか色々言われたから！」

「そんな！ 言った事なんてごさいませんのに……。もしかして、ご主人様は人の心が読めてしまうのではないですか？」

「それは言っていないけど、思ってたってことか!？」

「私……は、ご主人様を心からお慕い申し上げております、よ？」
「そんな冷めた表情で、そんな事言われても、全く心が感じられねえよ！ しかも疑問系だよ！」

そんな俺の憤りは無視し、話を戻すルシィ。

「話を戻しますが、それで仕方なく他のメイドにも聞いてみたのですが、誰も知らないようで……」

「メルにもプライベートな時間はあるんだし、そっとしておいてやれよ」

「ご主人様がそう仰るなら、当日に跡をつけるだけにしておきます」

「待て、待て。俺はそっとしといてやれといったはずだが？」

「ですからそっと、見守ります」

「じゃなくて！ 尾行するのをやめろ、と言っただよー！」

「仕方ありません。では、当日は屋敷で無事を祈るだけにします」

「そうしてやってくれ」

「あと、ご主人様」

「ん？」

「明後日から王都へ行かれますよね？」

「ああ、帰りは1週後の予定だ」

「その事ですが、王都でのお仕事は一日で終わる程度のもの、とお聞きしましたので、ベルモ屋敷の方のお仕事も終わらせていただける様に、グリント老に同行をお願いしておきました」

「さて！ さて！ グリントはエヴァンと植木の会合じゃなかったのか！？ というか、なんで王都の仕事が一日で終わるって知ってるんだ！？」

再び、背中に流れ出した汗と嫌な予感止まりそうにもなかった。そこに目がつり上がり、危険な雰囲気纏ったルシイが口を開いた。

「ご主人様が、変装までしてシユリアス様に頼まれたと機構石と、メリーの様子から、二人でお忍びの旅行に行こうとされているのがわかったのですが、本当なら昨晩は私の予定でしたのに、あっさりとメリーを連れ込まれたり、私は今までに旅行になんて誘ってもらえさえしなかった事に気がついて、大変ご主人様に腹が立ちました。なので『ぶち壊しにしてやろうか？』と思い立ったので、グリント老とエヴァン老にご協力をお願いしました」

「ちなみに。メリーの方は、別荘に独りぼっちになるのはかわいそうですが、ご主人様が先ほど放っておけと仰られましたので、グリント老に帰りに迎えに行ってもらえる様に、お伝えしておきます。放っておけと仰られた事も、きつちりメリーには伝えておきますし、ご心配になられる事は一つございませんで、ごゆっくりお仕事に励んでくださいませ」

などと、少しおかしくなった口調で一氣に早口で言い切った後に、ベッドから手際良くシーツを剥ぎ取るルシィ侍従長。

「全部知ってたんじあねえかよ！ しかもぶち壊す気かよ！ 性格悪すぎるだろ、お前！」

ちなみにリシュアレの湖畔は、ただ湖と森があるだけの場所です。としてるのが苦手なメリーなら、一人で行ったら一時間もしないうちに帰ると言い出しかねない場所だ。

そんな所にそんな娘を連れて行くな、と文句を言われるかもしれないがそこはアレだ。何とかナニとか二人ならやっぱりいろいろあるし、問題ないはずだった。

しかし湖畔と森の三分の二は結界で覆われていない為、魔物に出会う危険性もあるので行ってしまえば勝手に帰ってくる事も出来ないだろう。

「私は、昨晚こそは可愛がって頂ける、とご主人様が約束して下さいだったので、好物の甘いものを買って帰って、二人で一緒に頂くと思っていましたのに。ご主人様はメリーと旅行に行く準備で頭がいっぱいになりながらも、私をごまかす為の機構石までしっかり用意していると聞かされて『嫌われたのではないか？』と不安になってしまいました。一度連絡してみようとと思い立ち、『帰るのが遅くなります』と嘘の連絡を試みたら、ご主人様は残念そうどころか喜々として『ゆつくりでいいよ』なんて仰る始末で。仕方がないので屋敷の自室に隠れてみたりなんかして。今朝になって帰ってくる予定時間を過ぎて、探しにも来ないご主人様に文句の一つでも、と思いい部屋に来てみたら、メリーの匂いを身体中につけたままで、全く起きる気配の無いご主人様が寝てらっしゃいます。その情事の後始末とお世話をしなければいけない私と、ご主人様ではどっちが

性格が悪いでしょうか？」

「またもや早口で言い切ったあと、散らばった服とシーツを手早く籠に詰めるルシイの侍従長としての行動と、それとは裏腹に、目尻にほんの少し光る何かを見てしまった俺は、何も言えなかった。」

「一昨日に約束をした時の、ルシイの嬉しそうな顔を思い出して、少し頭を抱えながら『いつの間にか働かされる危機から、泣かれる危機になっているなあ』などとくだらない事を考えていると、」

「ご主人様がどういう方かは、十二分に理解しています。その様子では約束もお忘れになっていたようですので、もう結構です。取りあえずお風呂に入って下さい。部屋の空気の入替えをします。そのあとで朝食、はもう下げましたので昼食をレイチエルに用意して頂いておきます。」

仕方がないので、とりあえず風呂に入るかと扉に向かっていると

「その後で、しっかりとお仕事をして頂く為に、お昼からはグリント老も書斎でお待ち頂けるように、とお願いしてあります。」

「やっぱり仕事させられる危機からは、逃れられない運命を呪いつつ、扉を出て行く。扉が閉まる時に『ご主人様の馬鹿……』とか聞こえた気がしたが、怒られるのも、呆れられるのも、文句を言われるのも、いつもの事なので諦める。」

「部屋の事はルシイに任せて、後は『どうやって機嫌直してもらうかな』と考えながら風呂へと向かった。」

「頭を左右に振って、首を鳴らしながら歩いていると、銀色っぽい猫耳と尻尾が特徴的なメイドが走って来た。俺は、この猫耳の獣人」

はロシアンブルーの血を引いていると思っっている。

「あ、ゴシユジンサマ、おはよう」

「おう、おはよう。ミル」

「もつすぐお昼だよ。早く身支度してもらわないとお昼ご飯食べずに仕事するの？ お出かけもするんでしょ？ 夜まで何も食べれなくなっちゃうよ」

「ん？ 俺は何処にも行かないぞ？ ついでに仕事もしない。今日は一日中、ゴロゴロするって決めてるんだ」

「え。今日はお仕事が終わったらルイ姉とお出かけするんだよね？ 今日の仕事を早く終わらせるぞってルイ姉頑張ってたよ」

「マジか。俺いつ約束したんだろ……」

頭を捻ってる俺の肩に誰かの手が置かれたか、と思っただ瞬間に激痛が走る。

「痛い、イタイ、いたい、ちょ、マジ、砕ける。死ぬる」

砕けそうな激痛を堪えている俺を無視し、会話は続く……

「ミランダ、私はご主人様をお風呂に放り込んで来ますので、お部屋のお掃除をお願いしますか？」

「はあ。い。あ、その洗濯物はカナちゃんに渡してくれればいい？」

「ええ、お願いします。あと、ご主人様のご飯は用意しなくてもいいと、レイチエルに伝えておいてください」

「わかったよ。ルイ姉、お置きも程々にね。ゴシユジンサマの肩、青くなってるよ？」

「大丈夫です。ご主人様ですから、死にはしません」

「じゃ、行って来ます」

「ちょ、ミル、助けてから行ってくれ。マジで。ヤバ……」

俺はミルに助けを求めたのだが。

「ヤバいのはゴシユジンサマの頭と、あと今のその匂いじゃないかなあ。他所の見ず知らずの誰かじゃないから、我慢できるけど。結構きついよ？」

そ・れ・と、約束忘れてるとかありえないよ？ 生きてたらまた一緒にお散歩行こうね」

そう言いつつ、銀毛の尻尾をフリフリさせながら行ってしまった。

「さて、愛しい愛しいご主人様？」

「な、何かな。ルシイ・イルリア侍従長」

ヤバい。ルシイの後ろに般若の影どころか本体と、切れ味の良さそうな真っ黒の刀まで見える。

さて、仕事をさせられるのも、泣かれるのも両方とも嫌だが、とにかく今は生き残る方法を考えないといけないな。

そう考えているにも関わらず、肩の痛みに耐えながら『お腹も空いてるんだけどな』なんて、どうでもいい事まで一緒に頭の片隅で考えている俺は、アホなのかもしれんと思いつつ、意識が遠のいていくのを感じていた。

第01話 働きたくない主（後書き）

この小説は筆者の自己満足小説です。

感想やアドバイスを頂いてもお返事出来なかったり、文章に反映出来なかったりします。

それでも私は感想を書いてやろうじゃないか！という方のみ感想をください。

類似のものが何処かに掲載されている場合はこっそりと教えて頂けると助かります。

盗作と呼ばれる様な類似性がある場合はこちらが削除、または改訂します。

（内容はともかく時期的にこちらが先の場合は検討します…）

第02話 可愛がらいたい侍従長（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第02話 可愛がられたい侍従長

私は今、危機に陥っています。

職があります。お給金も今では十分に頂いておりますし、何よりもやりがいには満ちております。

富や名声には興味はありませんので、食べるに困らなければ問題ありません。

副業の稼ぎも十分ありますので、こつそりお金を送っている孤児院も最近では子供達の笑顔が絶えないと、院長さんも喜んでいるぐらいです。

人間関係も、好きな方のお側にずっといられるので、満たされているのは間違いありません。

しかし、私は今、非常に危険な立場に立たされています。捨てられるかもしれません。

ですが、私はこの絆を守る為に、ご主人様に逆らいます。

死ぬまでお側に置いておいて、頂きたいのに。

側室と言われようが、愛人と言われようが、かまいません。

ご主人様にとって、有能で必要だと思っただけに過ぎません。

私は自分を取り繕い、気力を振り絞っていつも通りに声をかけます。

「何かくだらない事をお考えになっているお顔ですね？」

メリーの匂いが煩いぐらいに鼻に付く、ベッドの端に腰掛けて何かを考えているご主人様に話しかけます。

そして、いつも通りのお小言と昨日からの恨み言を散々まくし立てた後、ご主人様にはお風呂に向かつて頂きます。

空気の入替えをしようとして、開けた窓硝子に映るご主人様の背中が、ドアの向こうに消えそうになっているのを確認してから呟きます。

「ご主人様の馬鹿……今日だけは、おはよつのご挨拶からずっと一緒にいて頂きたかったのに……」

今日は私の誕生日なのです。

ご主人様のお側にいさせて頂く事になってから、四度目の誕生日です。

そこで、私は嫌な可能性に気付きました。

もしかして、ご主人様は誕生日と夕日の誓いの約束を、忘れておられるのではないかと。

まだたった四回目なのに、もう忘れられてしまったのではないかと。

私は走りだしました。カナリーさんに洗って頂くはずのシートと洗濯物を抱えたまま。

角の向こうから、ご主人様とミランダが話しているのが聞こえてきます……

「……ルイ姉頑張ってたよ」

そういうことはご主人様には言わなくていいんです！

ミランダの発言に少しイライラしながらも、全力疾走で乱れた息をゆっくり整えていると……

「マジか。俺いつ約束したんだろ……」

と、信じられない言葉が聞こえてきた次の瞬間には、私はご主人様の肩を掴んでいました。ええ、もうこれは有罪です。極刑です。捨てられるのは嫌ですが仕方ありません。

「痛い、イタイ、いたい、ちょ、マジ、砕ける。死ぬる」

激痛に堪えている表情で何か言っているご主人様を大げさな、と無視してミランダに後を頼みます。

「ミランダ、私はご主人様をお風呂に放り込んで来ますので、お部屋のお掃除をお願いしますか？」

「はあ〜い。あ、その洗濯物はカナちゃんに渡してくればいい？」

「ええ、お願いします。あと、ご主人様のご飯は用意しなくてもいい、とレイチエルに伝えておいてください」

「わかったよ〜。ルイ姉、お仕置きも程々にね。ゴシユジンサマの肩、青くなってるよ？」

「大丈夫です。ご主人様ですから死にはしません」

「じゃ、行って来まーす」

「ちょ、ミル、助けてから行ってくれ。マジで。ヤバ……」

と、ご主人様が何かミランダに助けを求めていますが無視して、これかどうして差し上げようか考えます。ちょうどいい事にお風呂に行く予定でしたね。拷も……もとい、お説教のプランが決まったところでミランダがいらないのに気付き、ご主人様に声をかけました。

「さて、愛しい愛しいご主人様？」

「な、何かな。ルシイ・イルリア侍従長」

何やらご主人様は体中から汗を流しておいでですが、これからお風呂に行くので問題ありませんね。

お風呂につくとなぜかご主人様は寝ていらつしゃいましたが、全て脱がせて湯船に放り込むと目が覚めたようです。

「殺す気か！」

「汗と汚れの匂いのひどい、ご主人様を綺麗にするという、ご奉仕です」

「いくらなんでも意識がない中で、湯の中に放り込まれば溺れ死ぬわ！　　たく……何で風呂で死にかけてんだ俺は……」

「日ごろの行いが悪いからでしょう。ご主人様の場合は、もっとまじめに働かれればいいことも起こると思いますが」

「いやだ、俺は働きたくない。ルシィ。俺の為に働かずに、いい目に逢う方法を考えてくれ」

「そんな方法はありません。と、そんなくだらない話では誤魔化されませんよ？」

ご主人様にはちゃんと約束を思い出して頂いて、きっちりと罪を清算して頂きましょう。

「ご主人様？　　昨晚は私とのお約束でしたよね？　　念話石で連絡をさしあげた際には、その事をすっかりお忘れになられていたんですよね？」

加熱の魔法で桶の中のお湯の温度を上げながら、にっこり笑ってお聞きします。

「はい……忘れておりました……」

「素直に認められるのは良い事です。こちらをどうぞ」

お湯の桶とは別の、水の入った桶をご主人様に渡します。

「水？　なんだこれ？」

「ですが、約束をお忘れになるのは最低です。」

訳がわからないといった表情のご主人様を無視し、頭から熱湯をかけます。

「熱ツツツツッ！」

ご主人様はすぐさま、水の入った桶を頭からかぶりながら、冷やしています。

「ご主人様？　私に内緒でメリーと二人で旅行に行く計画を立てておられましたよね？　しかも私にはれないように、シユリアス様に偽装の機構石まで制作を依頼されておられたんですね？」

「あの……ルシイ？　もしかして、この拷問まがいの行為は全部認めるまで続くのかな？」

「私は、ご主人様にお仕えするメイドです。ご主人様が綺麗になれるまで、入浴のお手伝いをさせて頂いているだけです」

「いやいや！　一人でできるから。手伝ってくれなくていいから！」
「いえいえ、ご主人様は体についた汚れもですが、心にも嘘という汚れを、たくさんつけておいでのようですので、全部綺麗になるまでお手伝いさせていただきます」

聞かなければいけない事は、ここからが本題なのです。終わらせる訳にはいきません。ご主人様の周りに2つの桶を浮かべながら、

再度お聞きします。

「それではご主人様？ お答えいただけますか？」

「ああー、はいはい。計画立ててました。行くつもりでした。ルシイにも秘密にしようとしてました」

何かをあきらめたような顔をされたご主人様は、しゅしゅといった感じで答えてくださいました。

「が、罰は罰です。水の桶を渡した瞬間に熱湯をぶちまけます。今度は2つ。」

「う熱ツツツツツツツツツ！」

「ご主人様」

「なんだよ。もう全部認めたる。ルシイの言ってた通りだよ。ったく。俺じゃなかったら火傷どころじゃ済んでないぞ、コレ」

「いえ、最後の質問が残っています」

そう言いながら私はこのお風呂場においてある全ての桶を空中に浮かべ、その中に熱湯を用意します。

「おい……待て、ルシイ。それはいくら何でも、やりすぎだ……」

「よく考えて、答えてくださいませ。ご主人様」

桶の数と私の表情から何かを感じ取ったのか、ご主人様の顔つきが神妙なものになりました。ですが、私が何を聞こうとしているかを測りかねている様子です。

「ルシイ、ちよつとま……」

「待ちません。私との今日の約束はなんでしたか？ 覚えておいで

でしたか？」

「ルシィ、それ以上、魔力を使うな。限界だろうが。」

ご主人様のおっしゃっていることは間違いありません。五十人から入れるこの風呂の桶の数は五十以上。水の魔術の適性の低い私では、これだけのお湯を用意するのにもかかる負荷は測り知れません。

「やめる。と、言ってるんだ。これは命令だ。怒りたいなら後でいくらでも付き合う。だから止める」

『無理なんです。だってあの約束は、ご主人様と私をつなぐ絆ですから』と、ご主人様に心の中で告げて、ご主人様につこりと微笑みました。

そこで私の意識は途絶えました。

第03話 お屋敷が大好きな猫メイド（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第03話 お屋敷が大好きな猫メイド

わたしは今、大変な問題に直面してます。

昨日のお昼までは何の問題もない、楽し日々が続いていくと思っ
てました。

ゴシユジンサマを支えるお仕事もお小遣いはちゃんともらえるし、
可愛い服や鞄や靴もルイ姉が怒らない程度なら買ってもらえます。
レイチエルの作るゴハンはいつもおいしいし、じいちゃん達は物
知りでいつも草花の事を面白おかしく教えてくれる。

カナちゃんの研究品はよくワカラナイ物が多いのでチョット怖い
けど、貸してくれる試作品の機構石や魔導具は、便利なものが多い
からそれでいいと思う。

みんなの仲がいい、このお屋敷がわたしは大好き。

でも、今日はお屋敷のフィンキが少しおかしい。

何がおかしいのかは判らないけど空気が変。

こんなコトはわたしがお屋敷に来て初めてだ。

でも、何かあるときはいつも声を掛けてくれるグリじいちゃんは
今日は何も言っていなかった。地震とか嵐とかが来る時は、エヴァ
じいちゃんが心配しなくていいって頭をナデにきてくれるけど、今
日は会っていない。

今朝から怒りながらもはりきっていたルイ姉のところに行って、
何があったのか聞いてみよう。

今日は廊下にゴシユジンサマの匂いがしてないからまだ寝てるん

だろう。きつとルイ姉が起こしに行くはずだし、ゴシユジンサマの部屋へ行けばルイ姉に会えるはずだ。

行ってみよう、と走り出すとちよつと先のかどからゴシユジンサマが曲がってくるのが見えた。

「あ、ゴシユジンサマ、おはよう」

「おう、おはよう。ミル」

ゴシユジンサマはいつもどおりにわたしを愛称で呼ぶ。

ゴシユジンサマは女の人をすべて愛称で呼んでいる。例外はルイ姉とゴシユジンサマのおばあ様だけだ。

お母様はすでに亡くなられていて、後妻さんとは仲が悪いらしく、口をきいているのを見たことがないとレイチエルも言っていた。

ゴシユジンサマの体から匂ってくるメリーちゃんの匂いがちよつと気持ち悪くて、ゴシユジンサマに離れてもらおうと催促してみる。

「もうすぐお昼だよ？ 早く身支度してもらわないとお昼ご飯食べずに仕事するの？ お出かけもするんでしょ？ 夜まで何も食べれなくなっちゃうよ？」

「ん？ 俺は何処にも行かないぞ？ ついでに仕事もしない。今日は一日中ゴロゴロするって決めてるんだ」

あれ？ なんかおかしな返事が返ってきたので、今朝のルイ姉との会話を思い出して聞いてみる。

「え。今日はお仕事が終わったらルイ姉とお出かけするんだよね？ 今日仕事を早く終わらせるぞつてルイ姉頑張ってたよ？」

「マジか。俺いつ約束したんだろ…」

すると、頭を捻ってるゴシユジンサマの肩を、いつの間にかそこにいたルイ姉の手が掴んでいた。

「痛い、イタイ、いたい、ちよ、マジ、碎ける。死ぬる〜」

いつものことっばいので激痛に堪えているゴシユジンサマを無視し、ルイ姉とお話する。

「ミランダ、私はご主人様をお風呂に放り込んで来ますので、お部屋のお掃除をお願いしますか？」

「はあくい。あ、その洗濯物はカナちゃんに渡してくればいい？」

「ええ、お願いします。あと、ご主人様のご飯は用意しなくてもいいとレイチエルに伝えておいてください」

持ち手がミシミシいつてる籐の籠を見ながら、今日中にもう一個作らなきゃいけなくなっちゃったなあ。なんて考えながらやるべきコトを反芻しながら返事する。

「わかったよ〜。ルイ姉、お仕置きも程々にね。ゴシユジンサマの肩、青くなってるよ?」

「大丈夫です。ご主人様ですから死にはしません」

「じゃ、行って来ます」

「ちよ、ミル、助けてから行ってくれ。マジで。ヤバ…」

と、ゴシユジンサマが助けを求めてきた。

けど、ちよっといつものメリーちゃんとは違う、下品な匂いに鼻が痛くなったり、ルイ姉の怒ってる様子からまた約束破ったんだと理解したわたしは、今日はいつもよりちよっとキツめの言葉を返す。

「ヤバいのはゴシユジンサマの頭と、あと今のその匂いじゃないかなあ。他所の見ず知らずの誰かじゃないから、我慢できるけど。けっこうきついよ？ そ・れ・と約束忘れてるとかありえないよ？ 生きてたらまた一緒にお散歩行こうね」

言いながら手がふさがっているので、尻尾でバイバイしてその場を離れる。

後ろから感じるルイ姉の暗い気配が強くなるのを感じつつ、尻尾でバイバイしたのを無作法だと怒られなかった事にほっとする。でもわたしに小言を言うのを忘れるくらいにもものすごく怒ってるな、とかシユリアス様のところのルガー君みたいに尻尾も鍛えて尻尾で運べないかなあ。どれぐらいの物まで持ち上げられるようになるんだろ？ などと思いつながら歩いて行くと野菜の入った籠を持ったレイチエルに会った。

「あ、レイチエル。待って」

「ん？ ああ、ミランダか。ちょうどよかった」

ん？ と少し首をかしげながらレイチエルに追いついて聞いてみる。

「何かあった？」

「大した事じゃないんだけどね。今朝、菜園の野菜もらいに行ったらエヴァン爺さんがいなくてさ。とりあえず勝手に持ってきた分のメモ、渡しとくから爺さんに後で言っというてくれよ」

そう言つと、野菜の入った籠を床に置いて、真っ白な厨房着のポケットからメモを取り出し、手のふさがってる私のポケットに入れてくれる。

「うん、いいよ。お昼からエヴァじいちゃんと籐の籠を1個作らないといけなくなっちゃったし。聞きたいこともあるから探して伝えておくね」

と言うと、レイチエルはわたしの抱えた取っ手の壊れかけた籐の籠と、その中身を見てちよつと片眉を上げたけど、その事については何も言わなかった。

「ありがとう。これで昼食の準備にかかれるね」

「レイチエルのご飯おいしいから楽しみにしてるね。」

「楽しみにしてくれるのは嬉しいんだけどねえ……ミラもエヴァン爺さんも、タマネギ食べれるようにならないかい？ あれを使えろと、もつとおいしい料理も作れると思うんだけどねえ……」

エヴァじいちゃん菜園にいないなんてどこ行つたんだろ、と思いつながら生のタマネギを嫌々持つエヴァじいちゃんを想像する。

「あはは、エヴァじいちゃん、タマネギだけは菜園で育ててくれなもんね」

「でも、買ってきてこつそり入れても必ずばれるしねえ。料理は美味しいが入れてくれるなって、30分も小言を言われちゃたまないしね。」

「でもエヴァじいちゃん、レイチエルのおかげで好き嫌いが減つたつて言つてたから、ちゃんと相談したら頑張つてくれるんじゃない？」

「そうなのかい？ あたしにや、エヴァン爺さんもグリグリ執事もめつたに美味しいって言わないんだけど？」

「あ、それはね。シャイだからだつて、ゴシユジンサマが言つてたよ」

「爺さん達がシャイ！？ あははは。ほんつと笑わせてくれるね、

あの主殿は」

「あと、レイチエルとルイ姉はツンドロだ、って言ってた」

「ツンドロ？ なんだいそりゃ？」

「ん〜。普段はツンツンしてるけど、甘えるときには砂糖を煮詰めたように、甘くドロドロになるんだって……えっと、具体的には…

…」

「ちょよ、ちょっとまちな！」

あわてたレイチエルに手で口をふさがれ、レイチエルは周りを見渡した後にちよつと怖くなった顔を近づけて、小さな声で聞いてきた。

「どんな話を聞いたんだい？」

「えと、先週の満月の夜の夜にベッド……」

「っ！？ もういい！ 何も言うな！ だまってその話は忘れな！」

「え〜」

「忘れないと生タマネギ食わせるよー！」

「むう。でもカナちゃんとメリーちゃんも知ってるよ？ 一緒に聞いてたし」

そう言うとレイチエルは、少し俯いてプルプルと震えだした。

「主殿はどこにいるか知ってるかい……」

「えっと、ルイ姉がお風呂につれていったよ。たぶん今頃、お説教だと思うよ」

「あ、それでね。今日のゴシユジンサマのお昼ご飯は、いらないうて言ってた」

「そうかい。じゃあ、あたしの話はみんなの昼食が終わってからにするよ。フフフフ」

そう言つとレイチエルは表情の読めない暗い顔をして、野菜の籠を持ちふらふらと歩いて行った。

「昼食抜きぐらいで、許すわけにはいかないねえ……」

そんな声が聞こえた気がしたけど、これはいつもの事だよねと心の中で呟いてわたしはカナちゃんとエヴァじいちゃんを探しに行こうとしてから気がついた。

わたしの大好きなお屋敷のフィンキがいつもと違うように感じるコトが全く解決してない、と。

第04話 研究したい白衣メイド（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 研究したい白衣メイド

ウチは今、とんでもない状況の中におるんや。

この屋敷に転がり込んだんもほんまは偶然やった。改めて考えてみるとココはほんまええトコや。結果さえ出せば資金は潤沢、自由に研究でけるし、魔力の素は山ほどあるし、試作魔導具の実験台はいっぱいおるしと文句のつけようもないわ。

前のシュリアスの兄ちゃんのトコにおった時は、第二夫人とかいう腹黒オバハンが費用を抑えろて、うるさくてかなわんかったんや。それに何よりウチはほんまモンの天才やから二流の天才でしかないシュリアスの兄ちゃんとは合わん。天才は孤独なんや、研究内容で他の天才と分かり合えるヤツは所詮二流や。

ほんまは、魔法都市プライムに屋敷を持つてる貴族のところで働きたかったんやけど、学院時代に他の研究員に妬まれて立てられた噂のせいで、魔法都市における有力貴族からは出入り禁止を食らつとるからしゃあない。

でも今ではここに来た事を満足しとる。御主人様は変やけど、こー一番つてトコで優しさを見せられる器量も持つとるし、何よりウチの事可愛いって言うてくれたし、初めてやったけどすっごい優しく包み込むようにしてくれまし……………

って！ ちゃうで！ 御主人様が研究者にとって、いいパトロンやっていう事やで。別に御主人様に惚れてるわけやないで。初めてをあげたんも、御主人様の魔力元素を自由に研究させてくれるのに、研究の成果が出るまでは何も返せるモンがないままやったからやし。チワカ地方の生まれの女は恩を仇で返すような真似はせえへんねん。

他意はないんやで、ホンマやで！

ウチは普段、全自動魔導洗濯機とか使って、メイドの仕事の一部をしながら魔力元素と機構石の研究してる。たまにじいじとルシイ姐さんが、魔導機とか機構石とか持って来て、鑑定とか使い方聞かれたりすることもあるし、ウチはこの屋敷のメイド兼専属魔導機構師ってとこやな。

でも、このじいじとルシイ姐さんは変なんや。鑑定してくれって持ってくるモンは、何故か鑑定書がついてないとおかしいくらい高価なモンが多いし。骨董好きなんやろか？

それと変なモンばかり、作ってくれって言うて来るんや。

じいじの真つ白な髪を金髪に変える機構石とか、御主人様に見つからずに素行調査する為の完全認識阻害マントとか。

じいじはもう七十歳超えてんねんから、白髪でもええと思う。それに、何で男やのにピアス型がええんやろ？ まあ。じいじも合わへんと思っただんか、作ってあげた時しか使ってるの見たことないけど。

ルシイ姐さんは気配消すのがうまいんやから、戦闘能力が一般兵並みの御主人様を尾行してもばれへんと思っただなあ。完璧主義なんやろうなあ。

ほんで昨日も研究室で、ウチのお気に入りの白衣がもつと白く綺麗に洗えるように、全自動魔導洗濯機の改良をしたんや。そしてらじいじがルシイ姐さんと一緒に帰って来て、この白い石を持って来た。そんなデカくはないねん。じいじ1人で胸に抱えられる程度や。でも、ウチじゃちつとも持ち上げられへんぐらい重い。じいじの腕力はどうなってるんやろ？ じいじって実は、モンスターの親戚やないやろか？

あかん、話がどつかにずれていつてまうわ。ちょっと話を戻すけど、そう、研究。研究の事なんや。

この変な漬物石みたいな石が問題やったんや。

この石、表面はツルツルしてて若干の弾力があるけど、でも中は芯があるみたいに硬いんや。

とりあえずナニなんか判らんから調べてくれって、じいじは言うてたけど。

ウチの作った解析機にかけてもナンも解れへん。何でできてるかは全く判らへん。

普通の鉱物やったら組成やら含有率やら色々わかるし、単一鉱物やったら稀少金属のミスリルからアダマントイト、オリハルコンまで判別できるはずなのに、や！

これは天才なウチに対する挑戦や。絶対調べ尽くしたる！

天才なウチに調べられへん事なんかあるかあー！！　って思ってた徹夜で頑張ったけど、解ったの事は三つだけ。

一部の魔力の素に反応してるって事と、反応させた分だけ表面が硬くなってるって事、それとお湯に浸けとくと白さが透き通るような綺麗さになる事や。

もしかしたら完全に透き通ったらなんかわかるかもしれへんと思つて、朝一番で起きて来たじいじに頼んで、今は風呂の湯舟に浸けてもつてる。

その間にチヨットだけ、小分けに削った欠片の解析を続けてる。

とりあえず魔力元素で反応させると硬くなる事から、この欠片がどこまで硬くなるかみてみようと思つ。

今、この屋敷ですぐに用意できる魔力元素のサンプルはオトコは御主人様、エヴァンじいちゃんと、グリントじいじ達の3人分、女はウチ、メイド長のルシィ姐さん、料理人のレイチエルはん、猫メイドのミランダちゃん、新人のナンとかいう女の5人分。

それ以外の使用人は全員王都へ送り返された。まあ、御主人様は実家における後妻さんとはかなり仲悪いし、しゃあないわな。

3ヶ月前からいてる新人の……そう、メリーとかいう女もそのうち帰されるとウチは思ってる。

ていうか、後妻さんは何で使用人ばかり、増やそうと送ってくるんやる？ 確かにこの屋敷は五十人くらいは生活できるほど広いけど、世話されるんは御主人様だけやから、使用人なんかウチらだけで十分やのに。

まあ、どうでもいい事はほっといて研究や。まずは朝食の時にもらった、みんなの魔力元素を試してみた。

ウチ、ルシィ姐さん、レイチエルはん、ミランダちゃん、メリーとかいう新人の5人の中ではルシィ姐さんの魔力の素が一番反応が良かった。

ルシィ姐さんの魔力の素で反応させた欠片は、アダマタイトのサンプルを切れるぐらい硬くなった。さすがにオリハルコンは切れへんかったけど……

オトナの魔力のほうが相性いいんやろうか？ オトコの魔力とも試してみたいけど……

じいじ達2人は石を湯舟に浸けてくれた後、一ヶ月に三回しか開かれへんっていう特別な市に出かけてるらしくって魔力元素を貰い損ねたから帰ってくるまでは我慢せなしゃあない。っていうか市って骨董市やるか？

あとは御主人様やけど、お昼ゴハンには起きてくるやるか？まだ

寝てるんやったら寝てるうちに貰おかな？

ウチが御主人様の部屋に向かって歩いてると、風呂場の入り口で御主人様を引き摺って入って行くルシィ姐さんを見つけた。

見つけたんやけど……アカン、アレはアカンで、めちやくちや怒つとる。後ろに冥い幽鬼みたいなのが見えとる。

御主人様、堪忍やで。うちは見捨てたんとちゃうで。二次災害を防いだんやで。

もし生き残ったらチヨットだけサービスしたるさかいに恨まんとつてや。

そんな風に風呂場に向かって手を合わせながら考えてると『熱ッッ』とか何か聞こえて来た。

しかし、御主人様の魔力元素も貰われへんし、湯舟に浸けたままの石の様子も見られへんとなると一旦、研究室に戻るしかないんかな。

そういや今日は、ルシィ姐さんもミランダちゃんも洗濯物持って来とれへんから、戻ったら溜まつてるんちゃうやろか。

一応仕事はしとこか、あの感じやと今日のルシィ姐さんは、かなり危険やしな。

お昼ご飯までに全自動魔導洗濯機の調子でも、見といた方がいいかもしれへんな。

そう考えて風呂場の入り口に背を向け、歩き出そうとした時。

いつも身につけてる、魔力の素計測器がビービーとうるさく鳴り始めた。

なんや！？ 計測器を見てみるとその表示はレベル9、下手した

ら屋敷の一部が吹っ飛ぶレベルや！

いくらなんでもやりすぎや。と、ルシィ姐さんを止める為、脱衣所に飛び込んだウチを待ってたのは風呂場から流れてくるものすごい魔力の流れやった。

立ってるだけで気分が悪くなりそうな魔力の流れに顔をしかめながら、風呂場の扉を開けた瞬間、ウチはものすごい轟音と魔力元素のうねりを感じた。

第05話 隠居したい老執事（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第05話 隠居したい老執事

私は今、本当に頭の痛くなる問題を抱えています。

この街はこの国の中でもある意味有名な街です。少し裏の事情に詳しい者なら誰でも知っていますが、このイメトウルの街を運営しているのは盗賊ギルドです。しかもこの国では盗賊ギルドは国営であり、国の収入源の一つとして成り立っています。

ですから実際には、このイメトウルの街の領主とは飾りであり、貴族の中でも野心も力も度胸もない、無能な者が選ばれるのが慣例でした。

そうです。慣例だったのです。

しかし、当時は若干19歳になったばかりであり、成人の儀すら済ませていない、クルカ・エルガルド様はその慣例をぶち壊しにしたのです。

経緯を簡単に申しますと、クルカ様はその稀有な才能で、国王陛下より直接褒美を頂戴できるほどの手柄を立て、『3つだけ、どの様な願いも叶える。但し、他の貴族の領地や物を奪う様な願いは認められない。王室にある物であれば国宝だろうと授ける』と、ここ二十年は聞いた事もなような破格の条件の褒美を頂く事になりました。

結果的にはクルカ様は国王陛下三つの褒美に陛下の褒美に次の3つを望みました。

- 一つ目は、エルガルド家からの独立。
- 二つ目は、ダントリン領主への着任。
- 三つ目は、ダントリン領主は現領主が死ぬまでは変えない事。

そして、王もそれを認められてしまい、エルガルド家が治めるリンセ地方にありながら唯一、エルガルド家の手の届かないダントリン領が出来上がってしまったのです。

国王陛下との謁見後、三日と待たずしてクルカ様は、私とメイドのルシイと庭師のエヴァン、そして見習い調理師のレイチエルを連れてイメトウルの街に引越しを済ませました。

もちろんエルガルド家では大きな問題となりましたが、エルガルド家の現当主であらせられるベルファスト様とクルカ様の間に、何らかの取引をされてクルカ様の領主着任は認められました。

そして、着任されてから四年経ちましたが、この四年間は実に平和な期間でした。

この四年間でルシイは、侍従長に相応しい屋敷の管理能力と、私のもう一つの職務を継ぐことのできる人材に育ちました。

領主となられたクルカ様は、成人の儀を迎えられた事からクルカ・ダントリンと名乗られ、この街の名物領主として知られるようになりました。

クルカ様は、街の人々に好かれる性格と前領主と変わらない自堕落な生活態度で、ダントリン領の領主を立派に務めておられました。しかし、今の私は昨日の夕方に、ベルファスト様から聞かされた御話のせいで、頭が痛くなるばかりでした。

「やっと、ルシイさんが独り立ちできそうなのですがねえ……」

と、市の立ち具合を見ながら呟いていると。

「そりゃあ、グリント。お前さんには隠居は早ええって事だろう。むしろカラツクの坊ちゃんが、よく4年も我慢したもんだと俺は思うがね」

少し乱暴な、しかし何故か嫌な気分させない口調と笑顔で、庭

師のエヴァンが話しかけてきました。

「そうなのでしょうか？ 私としては早く隠居したいのですが…」
「前から言ってるが、お前さん長命種だろうが…。俺と生まれた年は同じでも寿命は3倍ほど違うんだ、あと百二十年は現役でいやがれってんだ」

「私も前から言っていますが、長命種だからといって、年齢を三分の一で計算するのはやめませんか？ 寿命は長くても、普通の人間と同じように時間を過すぎしてるんですから…」

「ま、どちらにしるカラツク坊ちゃんが出てきたんだ。ルシィちゃんもクルカ様もみんな、ゆっくりはしてられねえだろ」

「やっぱり、そうなりますよね…」

いつの間にか慣れてしまったが、エヴァンが何故かクルカ様だけは様付けで呼ぶ事に改めて疑問を感じながらも、言葉には出さずに話を続けます。

「最悪、クルカ様にもこの街の真実をお伝えした上で、対策を練る必要があるかも知れませぬ…」

「そりゃあ、どうだろうな。何も伝えずに『アドバイスを頂けますか？』って聞いてみな？ 面白い答えが返ってくるとおもっぜ」

エヴァンが遠くに見える我らが主の屋敷に人の悪そうな笑顔を向けているの見て、聞いてみます。

「エヴァン。前から聞いたかったのですが、クルカ様の事で何か知ってる事があるのですか？」

「ん？ いや、知ってるって事じゃねえ。俺もミランダちゃんと同

じで獣人の血を引いてる上に、めったにいねえ風の系譜なんだ。だからなんとなく感じる事があるってだけだ」

「風の系譜ですか？ 確かに獣人の血を引くと、森か大地の系譜の力が強くなる事が多いと聞いています。ですが風がそこまで珍しい系譜でもないと思いますが……冒険者を目指す人間には、風の系譜になるものが多いと聞きますし」

「ああ、人間にはな。だが、獣人が風の系譜になるって事が珍しいんだ。獣人の巫女に選ばれるヤツは最低でも風、できれば水も。一番いいのは風・水・火の3つを持つてる事だって言われてるぐらいだ」

「どういう事です？」

あまり漠然とした聞き方は好みませんが、聞かないとエヴァンは途中でやめてしまう事があるので聞いてみました。

「自然との調和の問題さ。獣人の血が混じってれば、大地の系譜は嫌でも肉体に宿る。あとはどれだけ、他の4大系譜の音が聞けるかって事だ」

自然との調和と自然の力を大切にすると獣人たちの感覚からすれば、わからない事ではないのですが……

それとクルカ様の事が、どうつながるのかよくわかりません。

「わからないって顔だな。ま、あとの説明は今晚、ミランダちゃん
の授業の時に話すからお前さんも来いよ」

と、言外に話を切ろうとするエヴァンの行動で近寄ってくる人物がいる事を理解して私も話を合わせます。

「わかりました。では貴方の為に、とっておきのお酒を用意しまし

よう。」

「おいおい、俺はありがてえが、ミランダちゃんの分は別に用意しろよ?」

「わかっていますよ。ミランダにはちゃんと、アルコールなしのブルクの実のジューズでも持っていきます」

そこまで言ったところで後ろから声が掛けられました。

「エヴァンさん、グリントさん、何のお話ですか?」

「ああ、メリーさん。今夜はエヴァンとお酒を楽しもうと思いましたがね」

「そういって、メリー嬢ちゃん。今日はクルカ様のお世話は良いのかい?」

「クルカ様なら、たぶん、まだ寝ていらっしやいますので大丈夫です」

「それで何か私達に何か急な用事ですか? 市はちゃんと立ってるようですので、商品を預けたらエヴァンといくつかの苗を買ってから戻るつもりですが…」

「それがルシイさ、っと。侍従長がおっしゃるには、今日は夕方までにクルカ様のお仕事を終わらねたいそうなので、お昼からグリントさんに仕事の監督を、手伝って欲しいとの事です。」

あわてて言い直すメリーさんを見て、『本当にこの娘は向いていませんね…』と思いながらメリーを寄こした、ルシイさんの意図を考えてみました。

なるほど、メリーさんを家から追い出す口実とクルカ様へのお仕置きの一石二鳥ですか。

「わかりました。それではすみませんが、メリーさんはエヴァンの苗の買い物に付き合っただけですか? 私は屋敷に戻って、クルカ様

のお仕事の準備をしますので」

「はあ、それはかまいませんが……」

メリーさんが何かを考えて言い出す前に話をまとめてしまいます。

「では、エヴァン。あとはお願いします」

「おう。ちゃんと苗を見つけてから帰るから、心配いらねえぞ」

解ってくれているようですね。当たり前ですが。

それでは、とメリーさんにお辞儀をして二人に背を向け歩きだすとメリーさんが『え、あの、』とか言っている声が聞こえます。ですが、あとの事はエヴァンに任せてしましましょう。

そして、カラック様の件とお屋敷でお置ききされているはずのクルカ様の事を思い出して、どうしましうかねえ、と頭をひねらせながら屋敷に向かって歩いていきました。

第06話 覚悟を決めた庭師（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第06話 覚悟を決めた庭師

俺は今、人生の転機に立たされている

齢七十を過ぎたジジイが迎えるにはちょっときつい3度目の転機だが、仕方ねえ。

クルカ様の為なら、この残り少なくなっちまった人生をくれてやるのも惜しくねえ。

ホントなら4年前にカラック坊ちゃんに楯突いた時点で無くなってたかもしれねえ命だしな。

庭師の仕事の方はミランダにほとんど教えたから問題ねえハズだ。庭師の仕事で足りないトコはベルモ屋敷の妖怪ジジイに頼んどけばいいだろ。

なんせ俺が庭師になったときからすでにジジイで、今も生きてやる。

それでも普通の人間らしいから、ぜってー妖怪なんかには化けやがったんだ。

俺あ、物心ついたときから山賊だった。

山賊の一家に生まれ、クルカ様の母上、フローリア様に出会うまでの四十五年間ありとあらゆるものは奪う事で手に入れてきた。

そして一回目の転機は四十五歳の時。山賊の討伐隊が編成されちまって追い詰められ、崖から落ちて死ぬ寸前で妖怪ジジイに拾われた。

しかも拾ったジジイは言われた通りの場所で俺が落ちてくるのを待ってただけだと言いやがった。

そしてそれを指示したヤツの顔を拝んでやろうと思って付いて行ったら王都のでけえ屋敷でフローリア様に初めてお会いした。

そして俺が庭師になって五年目、クルカ様の誕生と引き換えにフローリア様はお亡くなりになった。それからの俺はフローリア様とクルカ様の為に庭園の花を咲かせ続けた。

フローリア様は変わったお方だったがクルカ様はもっとおかしかった。

赤ん坊なのに乳母が母乳をあげようとすると顔を赤くして嫌がった。

乳は哺乳瓶であげる事になったが、下の世話も泣き喚いて大変だったらしい。

きつと、乳母が自分の母親でない事を本能で理解していたんだろう。

赤ん坊のクルカ様はお伽噺よりくだらない話が好きな様だった。

どんなに機嫌の悪い時でも俺が背負って差し上げて、貴族付きのメイドや教育係が知らない様な一般人の話や冒険者の雑談をすると大人しくなってくれていた。

それからの俺はクルカ様のご機嫌伺いをベルファスト様に言いつけられ、フローリア様が亡くなられた事で追い出されるかも知れない不安から解消された。

クルカ様が大きくなるにつれて屋敷の中での評価もハッキリしていった。

クルカ様は言葉を、読み書きを覚えるのが遅かった。

教えた言葉と違う言葉を口に出したり、文字の練習の時は文字の周りに変な模様を色々書いていた様だった。

しかし、他人の言っている事だけは誰よりも理解している様だった。あれは旦那様と執事長がお茶の時間に庭園でフローリア様のお好きだった花壇を眺めておられた時だった。お二人の会話を話聞いていた当時三歳のクルカ様は、フローリア様の好きだった青い薔薇を手に怪我をしながらも刺を抜き、お二人に渡されていた。隣で

同じ様に聞いていたはずの一つ年上のクラック坊ちゃんをよく判らない顔をして、ただ眺めているだけだった。

それからのクルカ様は年を経ることに無能者と呼ばれるようになった。

屋敷の中はクルカ様にとって、辛い事ばかりだったのが原因かも知れない。

6歳になられたクルカ様が屋敷での勉強を嫌がり、外に出ようとする度に教育係に捕まった後は決まって庭園に来られるようになった。クルカ様が庭園に隠れられるように植木を調整するのが俺の密かな仕事になった。

ただ、クルカ様は勉強が嫌いなのではなく、『勉強の教えられ方が嫌なんじゃないか？』と俺は思っていた。

なぜなら、クルカ様が隠れられる様にと切り揃えた庭木の窪みには、俺では解らないような難しい本がいつも置いてあったからだ。

グリント・プライムに出合ったのもこの頃だった。

クルカ様の勉強嫌いを直そうと執事長が連れてきたのがグリントだった。

グリントは執事養成学校を首席で卒業し、執事長の命令でチワカ地方の没落しそうな貴族のところへ領地の立て直しに派遣された男だった。

何より執事長の実の息子であり、エルフなどではなく人間の長命種でもあるという事からエリート臭をブンブンさせる、気に食わない男だった。

しかし実際は、グリントはクルカ様の勉強を庭でやろうとしたり、実地だと言って二人で冒険者にこっそりついて行ったりと、面白い男だった。

二人が出て行くたびに執事長への報告をさせられる俺は、いつも執事長の愚痴を聞く羽目になっていた。

あれ？ 俺あ尻拭いばっかりさせられてねえか？
思い出したら腹が立ってきた……
今晚はグリントの秘蔵の酒を浴びるほど飲んでやるう……

メリーとグリントの会話をよそに、昔を思い出していた俺にグリントが声を掛けてきた。

「ではエヴァン。あとはお願いします」

「おう。ちゃんと苗を見つけてから帰るから、心配いらねえぞ」

と、返してやるとグリントは口の端を少しだけ上げて『それでは』と優雅にお辞儀して帰って行った。

「え、あの、」

「ん？ ああ、メリーちゃんは、俺についてきてくれればいいんだよ。今日、買う苗は二の腕ぐらいの大きさのモノが2つだけだしな」

「いえ、そうではなくって何処に売ってるか分からないんですか？」

「ああ、めつたに無い苗なんだな。市の中を片っ端から探す予定だぞ」

「あの、あと1時間もすればお昼時ですよ、ね？」

「心配すんな、ちゃんと飯も食わせてやつから。さ、行くぞ。ウロチヨロしてつといくらダントリン家のメイドでも、どっかに連れ込まれかねないぞ」

まあ、クルカ様の考えられたメイド服や執事服は普通の物とはかなり違った雰囲気醸し出していて、このイメトウルの街では有名なだし、ちよっかいを出してくる馬鹿はいない。

おっかなびつくり、といった感じについてくるメリーを見ながら『さて何時間歩きゃいいんだらうなあ』と考えていると。

「あの、クルカ様って19歳で領主になられたって、ホントなんですか？」

屋敷に戻るのをあきらめたのかメリーが聞いてきた。

「ああ、メリーちゃん、王都のベルモ屋敷から来たのに聞いてないのか？」

「ええ。私がベルモ屋敷に奉公に入った時には、カラック様がおられて執事長さんがクルカ様の話は絶対にするなって…」

「そっか、まだ1年経ってないんだな。エルガルド家に来てから。

まあ、みんな知ってる事だし、教えてやるう」

「カラック坊ちゃんが、王立第2騎士団に所属しているのは知ってるよな？ 王立騎士団は元冒険者とか色者ぞろいの部分もあるが、貴族であそこに入れるのは本物の実力を持ったヤツだけだ」

「はい、それは聞いています。ですがその話もするなって止められましたけど…」

ん？ どういうことだ。それを口止めされてるなんて意味がわかんねえな。

「まあ、とにかくカラック坊ちゃんが貴族の中でも、実力を示せる本物のエリートになれるチャンスを手に入れたのが20歳になる直前で、クルカ様は19歳になったばかりだった」

「ちょうど4年前ですか？」

「そうだな。そして問題が起こったのは王立第2騎士団への入団通知が屋敷に届いた日だな、カラック坊ちゃんは浮かれて、ひどく酔っぱらってな」

「はあ。」

それがどうしたんだろってツラしてるな。ま、その感想自体は間違っちゃいねえな。

「カラック坊ちゃんが、クルカ様に散々絡んだあげく、二人は殴り合いのケンカになった」

「え！？ クルカ様が殴り合い？ やり返そうとしたんですか？ ただ殴られたんじゃない？」

「ああ、そうだ。だが、もちろんクルカ様が武力でカラック坊ちゃんに勝てるわけがない。たとえ酔っぱらっていたとしても、な」

「勝敗よりも、あのクルカ様が、ケンカという行動をすることがビツクリです……」

「そこで、カラック坊ちゃんはクルカ様に言ったんだ。

『悔しかったら、俺よりも先に名を上げるんだな！ まあ、王立第2騎士団に入団が決まってる俺を超えるには、第1騎士団でも難しいとされるドラゴン退治でもするしかないだろうがな！ しかも3カ月以内に！ ハハハハハ！』

ってな。しかもそれができたら何でも言う事を一つ聞いてやるって条件まで言っつてな」

「もしかして……」

「ああ、クルカ様は当時、チワカ地方に出没してた10匹ぐらいのドラゴンの群れを追い払った。しかも、詳細は知らされてねえがたった一人で、らしい」

驚きに目を見開いているメリーに、さっさとついてくるように促しながら、これからの予定を考える。

さっさとグリントから渡されていた商品を地下オークションの受付に預けて、リヴアルの飯屋にでも行くか。あそこは個室があったから、あそこで話してりゃ夕方ぐらいになるだろ。そう考えつつ、市を見回りながらメリーに当時の話をして歩いて行った。

第07話 味見じゃ足りない料理人（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話 味見じゃ足りない料理人

あたしは今、死にそうになってる。

あたしや料理人だ。もし厨房で死ぬるんなら本望だと思ってる。思ってる……がまだ死ねない。こんな死に方したら墓の前で侍従長と主殿に何言われるか解ったもんじゃない。

どうせ死ぬのなら主殿の口だけは塞いでからにしないとね。

そっか、あたしや惚れた男と一緒に死ぬんだ。そう考えてみるとこないいい死に方も他にないかも知れない、と思った瞬間に気がついた。

ダメダメダメダメ！

こんな考え方してるから主殿にからかわれたり、恥ずかしい事をカナリーやミランダにばらされる羽目になるんだ！

いや、カナリーやミランダはまだいい。

(全然良くはないけどまだ我慢できる！)

けどメリーはだめだ！ あの子はきつと王都に返される。そんな雰囲気がある。

そしたらどうなる？ ベルモ屋敷の連中の耳に入るにきまつてる！

そしたら、前の満月の晩に酔っ払って主殿にしちゃった事も。満月の晩が主殿とあたしの特別な味見の日だってご事も……。もしかしたら味見のときだけは『主様あ〜』って呼んでる事も何もかも知られちゃう！

ああ。あたしやもう生きてられない。恥ずかしすぎる……

ダメだ、死のう……

ああ、でも主殿の口を塞がないと、死んだ後に人に言われるなんて恥ずかしすぎる……

主殿を殺して私も死のう……

あれ、これって愛する二人が心中？
なんか、ドキドキする展開だね。カナリーに借りた物語の主人公
みたいだ。

って！

思考が同じようなループしてるよ！

しっかりしな！ あたし！

まずは主殿に『誰』に『何』を言ったのかを聞き出そう。

そして、聞いた全員に口止めだね…

そこで、やっと目の前にいるミランダに意識を向けて聞いてみる。

「主殿はどこにいるか知ってるかい……」

「えっと、ルイ姉がお風呂につれていったよ。たぶん今頃、お説教
だと思うよ」

ああ、また怒らせたのかい。懲りないねえ。主殿も。

そっか、さっきから気になってたけど、ミランダの持つてる籐の
籠の取っ手を壊したのは侍従長かい。あたしも参加したいトコだけ
ど、侍従長がいるんじゃないねえ……

「あ、それでね。今日のゴシユジンサマのお昼ご飯は、いらないう
て言ってた」

「そうかい。じゃあ、あたしの話はみんなの昼食が終わってからに
するよ。フフフフ」

あたしはそう言うてから、自分の仕事をするべく厨房に向かいな
がら、主殿にどうやって聞き出そうかとか、どんな罰をくれてやる
うかとか考えていた。

「昼食抜きぐらいで許すわけにはいかないねえ……」

おっと、思考が声に出ちゃまずいね。
気を引き締めよう。あたしゃ料理人だ。厨房には雑念を持ちこん
じゃいけない。

主殿には雑念どころか邪念を持ち込まれた事があるけど。

『厨房でお前の味見がしたいんだ……』とか言い出したから、追い
出してやるうと怒ったのに。

ちよつと真剣な目で『ダメなのか？』『お前だから言ってるんだ』
なんて言われたら……

そんな風に言われたら女なら許しちまうよな？そくだよな！？
って！うがああああ。

こ・う・い・う思考してるから駄目なんじゃないかあ！

駄目！ダメ！今は、お昼の仕込みに集中しないと。

主殿はこの屋敷にはあたし以外の料理人を置こうとしないから、
あたしが作んなきゃみんながお腹すかせちまう。

えっと、今日のメニューは『ロールレタス』と『ミネストローネ』
か。この取り合わせはカナリーの希望だね、もうちよつとバランス
考えて希望を出してほしいもんだ。

ま、いいさ。さっさと済ましちまおう。

と、いつも通り下ごしらえから始めながら『レタス』を手を取っ
た。

「フフ」

『レタス』で思い出して、ちよつと笑みがこぼれてしまった。

このイメトウルの街では主殿は、変な領主として有名だ。そして
主殿は料理の事でもちよつと変だ。

『レタス』の事を『キャベツ』と言ったり、『ブロッコリー』を『
カリフラワー』と言ったり。

あとは、なんだつけ、そうそう。『パプリカ』で肉詰めを作ったんだけど、「美味そうな『ピーマン』の肉詰めだな」って言うんだよ。

他所で恥かいてほしくないから、その緑色の野菜は『パプリカ』って言うんだよって教えてやったら『またかよ！』『レタスとキャベツだけじゃねえのかよ！』って喚いてた。

主殿は、幼少期に言葉を覚えるのに難があつたらしく、グリ爺が生活魔法の中から翻訳魔法と認識共有魔法を使ってちゃんとした言葉を教えたらしい。

でも、レタスとキャベツ間違えるって、ちよつと子供っぽくて主殿にぴつたりだっと思ってるのはあたしだけの秘密だ。
なんて考えてると。

ドドドドドドドドドドドドッ！

屋敷のどっかからものすごい音が聞こえた。

「ん？ ああ、侍従長かな」

コンロに向き直ってみると、いつの間にかロールレタスを煮込んでる、あたし。

……………？

いつ作ったつけ？

ここ1年、こういう事がよくある。

考え事してる間に料理が出来上がってる。

しかも主殿の事を考えてた時は大抵…………

「すつごくよく出来てる…………」

ちゃんと測って作ってる時より美味しい…………」

ま、まあ料理が美味しくできあがるのはみんなにとっていい事だよ。うん。

とか思っていると、厨房の入り口にグリ爺が立っていて声を掛けしてきた。

「いい匂いですね。今日はロールレタスですか」

「そだよ。グリ爺も一緒に食べれるのかい？ 主殿の分が要らないらしいからね、ちょっと多めになりそうなんだ」

「それはちょうどよかった。クルカ様のお仕事のお手伝いに帰ってきたので夕方までは屋敷にいますから私の分の昼食を追加して頂くかと思っただけですよ」

「大丈夫だよ。任しときな」

「そういや、メリーは？ 朝食の後見ないけど、どこ行ったんだい？」

「ああ、そうでした。メリーさんにはエヴァンの買い物のお供を任せましたので、あの二人の昼食はいりません」

「あいよ。となると……」

もともと、あたし、侍従長、ミランダ、カナリー、メリー、主殿の6人分を作る予定だったハズ。

そこから主殿はお仕置きで抜き。メリーはいない、でもその分、グリ爺追加。

なんだ、主殿の分あまるだけだね。

「あれ？ 食材使いきってるね。なんでだろ。」

「大丈夫ではないですか？ 少々多くてもカナリーさんもけっこう食べますし、ミランダさんは成長期ですしね」

うん、まあ、そうなんだけどね。野菜は6人分持ってきてたしね。なんかさあ……こう、体が勝手に作ってるって言うか。

主殿の分、抜いたはずだったんだよ？ お仕置きだから。作ってやるもんかって。恥ずかしい目にあわせた分、お腹すかしゃあいいんだって怒ってたんだよ？

なのにさあ……

ちよつと主殿の可愛いトコロを考えただけで、今までで一番おいしい料理になってるし。

減らしたはずの量もちゃんと主殿の分も作っちゃってる。

あたしゃ、もうダメかな？

主殿に染められてるというか。

染みついちまってるというか。

「レイチエルさん！」

「はい！？ グリ爺、驚かさないでおくれよ。料理中なんだし」

「いえ、何度も呼んだのですが……」

「そ、そうかい？ 集中しすぎてたのかもね」

「ええ、うつすら微笑みながらすごい勢いでスープを作ってたのでそんなに急がなくても、と声を掛けたのですが……」

ホントだ、ミネストローネが出来てる……

しかもまた、すごい美味しそう……

「い、いいんだよ！ 昼食までにある程度の片付けも終わらせるんだから」

「そうですね。では、あと30分ほどで食堂に集まるように、みなさんに声を掛けてきますね？ どこにいるかご存知ですか？」

「あ、ああ。恐らく、主殿と侍従長は風呂場だよ。後は知らない。探しとくれ、頼むよ」

と言って、グリ爺が出て行くのを確認してからあたしは大きく溜息を吐いた。

「全部、主様が悪いんだからな……」

あたしゃもう、どうしようもないのかねえ……

第07話 味見じゃ足りない料理人（後書き）

これでプロローグは終了です。

第01話 侍従長壊れる？「1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第01話 侍従長壊れる？「1」

走馬灯や明晰夢と言う物をご存知でしょうか。

私は今、映画を見るように過去を見ています。

一般には走馬灯は死の直前に見る物と言われておりますので、何度も見ておられるという方おられないとは思いますが、おられるならその方はよほど死にかける運命にあるかわいそうな人か、生前の意識を持ったままゾンビにされた方だけなのでしょう。

しかし、夢かもしれないと認識できる事からコレは走馬灯ではなくて明晰夢というモノでしょうか、と嫌に冷静な自分が不思議で仕方ありません。

ともかく私は今、ご主人様に連れられて王都のお屋敷を出る事になった時の事を思い出していました。

急遽使用人たちが集められた屋敷の広間において、ご兄弟とご両親から使用人へ向けてのお話が始まりました。

「この度、我が次男のクルカはチワカ地方に出発していた、竜種の群れを追い払った功績により、国王陛下より褒美が頂ける事になった」

エルガルド家現当主であらせられる、ベルファスト様がそう言わ

れると使用人たちは『何を馬鹿な』といった顔をしていますが、何よりもベルファスト様は寡黙な方で御冗談をおっしゃるはずがありません。

その意味を使用人のほとんどが理解した頃には使用人達は口々に

「あの無能坊ちゃんが！」

「カラック様は第2騎士団、クルカ様は竜退治とくればエルガルド家は安泰だな！」

などと騒ぎ始め、八十人ほどの使用人が集まるこの大広間は、ちよつとした喧騒に包まれていました。

しかし、そこに波紋を投げかけたのはカラック様のお母上である、ルーデシア様でした。

「静まりなさい！ 褒美を頂けると言っても、所詮は一時のものです！ それに竜を退治したわけでも討伐したわけでもないのです。ドラゴンスレイヤーの称号が当家にありたわけではありません！」

それもそうです。あのクルカ様に竜退治などできるわけがないのです。

失礼ながら言わせて頂きますと、クルカ様は戦闘訓練は平凡、頭脳は普通。魔法は系譜適正ゼロ。やる気は皆無。

という平凡か無しという言葉しか出てこないような方でした。

その為、王立騎士養成学校、王立魔法院、果ては一般の商農学校まで入学を断り、先月の十九歳のお誕生日までグrint様が専属執事として教育の全てを担っておいででした。

そうするとクルカ様は、いったいどうやって竜種を追い払ったのだろう？ という声が上がりました。

しかし、クルカ様が前に出られてお話になられましたが、その疑問は解消される事はありませんでした。

「みんなも知つての通り、竜については国からの許可がなければ、研究する事は許されていない。その為、今回の件の詳細は秘匿する様、国王陛下からのお言葉があつた」

「しかし、追ひ払つた事實はチワカ地方のかなり人間が知つてゐる為、噂が立つのは止められない。だから、詳細だけは秘匿する様にとの事だつた。今回の褒美に関してはその事の口止めも兼ねてゐるんだらう。みんなも他家の者から聞かれても、憶測で話す事の無い様、気をつけてくれ。」

なるほど、使用人たちが勝手な事を噂して、王国から罰せられる事の無いようにみんなを集めてお話をされたのですね、と私達は納得して次のお言葉を待っていました。

するとクルカ様はカラツク様に向き直り声をかけられました、

「それじゃあ、カラツク兄さん。この間の約束した通り、俺の言う事を何でも聞いてもらうよ」

「好きにしるよ。何だ？　クルカ、使用人全員の前でお前に土下座でもしろつての？」

カラツク様は少し乱暴な口調で言いながら、クルカ様に向き直られました。

「待ちなさい！　カラツク！　貴方がそんな事をする必要はありません！」

ルーデシア様がヒステリックに騒ぎ始めます。

「母上、俺は王立第2騎士団所属になる男です。無能者とはいえ、家族との約束すら守らないなどと言われるような不名誉は背負えま

せん」

「しかし、ですね……」

「いや、カラック兄さんは何もなくていい」

「どう言う事だ。約束を守れと言っただんじやないのか」

「ああ、カラック兄さんには約束を守ってもらおう。何もしない事で、ね」

「どういう事だ。クルカ」

「クルカさん、ちゃんと説明なさい。場合によってはカラックが認めても私は許しませんよ」

クルカ様はルーデシアさまを無視し、それまで黙って見守っていたベルファスト様に向かってお話を始められました。

「父さん、俺はカラック兄さんが成人の儀を迎える前に、この家を出る。その時に使用人を何名か貰って行きたい」

「使用人を引き連れて、この家を出てどうする。今のお前では自分すら養えまい」

ベルファスト様は現実を見ると仰っているようでした。

「明日の謁見で、国王陛下から褒美を頂ける。頂いたモノを物売るなりすれば、生きてはいける」

次にクルカ様はカラック様に向き直り、次のように仰られました。

「カラック兄さん、成人の儀を受けるその日まで、俺のやる事に口出ししないと約束してくれ」

「……いいだろう。約束してやる」

使用人の何名かが『無茶だ。無謀すぎる』などと言い出しました。

「いいじゃないか。所詮、無能者で有名なお前だ。たった一度のまぐれで得た幸運を使い、好きなように生きて、どこぞで野垂れ死のうが構わんだらう。もちろん、俺はお前との約束通り反対はしない」

カラック様の物言いに、ベルファスト様は少しだけ眉間に皺を寄せられました。じつとクルカ様を見つめられていました。

「しかし、連れて行く使用人にも自由はあるんだらうな？ お前が何をもらえるのかは知らないが路頭に迷わせる為に、使用人をお前について行かせる訳には行かないぞ？ なあ、親父？」

そして何も仰らないベルファスト様に代わり、カラック様がそう言われると、ベルファスト様も諦めた様におっしゃいます。

「お前について行きたいと使用人が言う事が前提で、最低でも一年間雇っていられるだけの金額を用意しなさい」

「分かった、まずは一年分用意して、本人が行きたいと言えば連れて行っていい。この条件で良いんだね、父さん」

そしてクルカ様は使用人たちに向かって言われました。

「じゃあ、使用人のみんなは仕事に戻ってくれ。それと俺に誘われたらどうするのかを、考えておいてくれると助かる」

この時、全ての者が誰か一人を連れて旅にでも出られるんだらう、ぐらいにしか考えませんでした。

そして、陛下から褒美として頂けるモノの条件を、すでに聞いていたはずのベルファスト様、ルーデシア様、カラック様の三人は国

宝を頂くつもりだろうと当たりをつけ、それをエルガルド家が買い取り、自由に旅に出せばいいと考えられていたようでした。

しかし、クルカ様のお考えは誰もが想像し得ないものでした。

次の日、謁見から帰って来られたベルファースト様とクルカ様は、迎えられたカラク様とルーデシア様を執務室へと促し、話し合いをされている様でした。

謁見で何が起こったのか私達使用人は知らされませんでした。ベルファースト様のご様子からクルカ様がとんでもない事をしでかしたのではないか、という噂だけが屋敷中に流れていました。

そして翌日の朝まで一切の食事を取られず、執務室から出て来られたクルカ様達は再び、屋敷中の使用人を集められ、お話をされました。

「1週間後の翠玉の月の3日から、クルカ・エルガルドは、リンセ地方ダントリン領の領主になる」

ベルファースト様が、何も感じられない無表情なお顔で告げられた為、使用人達は喜んで良い事なのかはかりかねていました。

静まつてしまった大広間の雰囲気は、湯を入れるかの様に、クルカ様が前に出られお話を続けられました。

「俺は成人の儀を済ませていない為、一年はエルガルド家からの出向として。成人の儀の後は、ダントリン家当主クルカ・ダントリンとして領主を務める事になった。屋敷はイメトウルの街に構える。恐らくは空いているであろう屋敷がいくつかある為、すぐにでも向かおうと思っている。昨日、頼んでおいた筈だが、皆ついて来てくれるか考えてくれているか？」

私を含め、使用人達はいきなりの事に頭がついて行かない様子で

した。

しかしクルカ様はそんな私達を放って置いたまま、どんどん話を続けてしまい、ついには連れて行く使用人を決める話になりました。

「まずは最初に行っておく、今、ここで決める。ここで決めれないなら来なくて良い。恐らくこの一年は、忙しいなんて言葉では済まされないモノになる。だから迷っているなら一年迷っていてくれ。来年、クルカ・ダントリンとしてこの屋敷を訪れた時に、雇ってくれと言ってくれ」

その言葉を聞いて、一番最初に言葉を発したのはエヴァン老でした。

「クルカ様、給金はそこそこでいいから、俺を連れて行ってくれ」
「爺さん、あんたには母さんの好きだった庭園を、守って欲しかったんだが……」

「ここにはフローリア様の好みに詳しい妖怪ジジイがまだ生きてるし、腕の良い見習いが何人もいる。だけど、クルカ様の好みを熟知してるのは俺だけだ。それに、だ。クルカ様の連れて行きたい料理人に、しっかり腕を振るわせるには俺が必要になるんじゃないのかい？」

その言葉を聞いた時、私の隣にいたレイチエルが一瞬動いた気がしましたが、レイチエルは何も言わずじっとクルカ様のお顔を眺めていました。

結局、自分から行くと言ったエヴァン老と快諾されたグリント老、一年だけ手伝いに行くと言った三名の使用人以外は全て断られました。

それで終わりかと思われたのか、カラック様が声をかけられました。

「おいおい、良いのか？ クルカ。たった五人じゃ屋敷の管理が出来ねえんじゃないのか？」

「屋敷の管理に人数は関係ないよ、兄さん。この屋敷に住んでいたのなら解る筈だ。使用人は数じゃない、質なんだって」

それを聞いた使用人はみんな、少し嬉しそうでした。

「それに、まだ五人と決まった訳じゃない」

「はあ？ ここにいる使用人全員に聞いたじゃねえか」

「全員に聞いた訳じゃないし、初めからあと二人聞くつもりの方がいる。」

レイチエル・ブロッサム！ ルシィ・イルリア！

「ひゃい！」

まさか見習いである私達まで呼ばれると思っていなかった為、ビツクリして返事を囁んでしまいました……

この事で私は断るつもりでしたが、クルカ様はとんでもない事を仰いました。

「二人は、未熟だろうと構わない！ 必ず連れて行くつもりだ。俺専属で夜伽もしてもらうからな！」

「え、えええ！？ イヤ、えっと、あの」

訳のわからない事しか言えない私とは反対に、レイチエルはハッキリとクルカ様に文句を言った。

「そんな理由じゃ行けないね。あたしゃ料理人なんだ。女で仕事を

してる訳じゃない！ お情けで雇われるなんて真つ平だよ」

「じゃあ、言い方を変えよう。お前の料理に惚れたんだ。もちろん、お前自身も欲しい」

「料理の欠片も解らないような、坊ちゃんが何言ってるんだい」

「わかるさ。お前の料理なら」

「レタスとキャベツを間違えるのにかい？」

「それは言い間違えるだけで、味や種類が解らない訳じゃない」

「どうだか。あたしの料理の何が気に入ったのか言ってるらんですよ。」

納得出来たら、妾だろつがメイドだろつが料理人だろつが一人で何役でもこなしてやるよ！」

周りの使用人はクルカ様達に向かって、喧嘩を売る様な物言いのレイチエルに不審な目を向け、自分たちがとばかりを食わないように、少しずつ離れていきました。

レイチエルは熱くなると物言いが乱暴になりやすく、カラック様の第2騎士団の入団許可が出た日のお祝いの際もそのせいで問題を起こしていました。

「その言葉、忘れるなよ。料理長！ ちょっと来てくれ！」

クルカ様は料理長と呼ばれると『判定は料理長でもいいよな？』
と言いました。

「さて、料理長。この屋敷の料理は同じメニューでも、必ず数種類の味付けを用意してるよな。しかもエルガルド家一人一人の好みに合わせてだ。」

「はい。ソレはマチガイナイですね。」

「しかも全ての料理を、それぞれの好みの味付けにするのではなく、一品毎に誰かの好みの味付けで出してる」

「だったらおかしい事が一つある、今のこの屋敷にはエルガルド家

の人間は四人だ。なのに味付けは五種類。違うか？」

「最後の種類は誰のだ？」

「ソレは……」

「ああ、答えてくれて言ってる訳じゃない」

「分かってるんだ。母さんの好みだつて。」

「それを食べたって、最初に頼んだのは父さんなんだろう？ 料理長が、料理人の皆が俺たちそれぞれの好みを知っていて。死んだ母さんの好みを皆が忘れない様について考えたんだろ？」

「そのトオリです……」

「だから、いつも食事の時だけは四人で食ってる気がしなかった。父さんの雰囲気も違ってたしな」

その言葉に、ルーデシア様とカラック様は目を見開き、ベルファスト様は目を閉じて、何かに思いを馳せておられるようでした。

「料理人は料理で、俺たち四人と母さんの絆を繋ごうとした。料理人特有の、目には見えないが、感じられる工夫で」

「それが解らない人もいる様だけど俺にはちゃんと伝わったよ。母さんの好みを一番上手く再現できているのが、レイチエルだって事までね」

「だから、俺は貰っていく、母さんの好みの味を」

「父さん！ 父さんには母さんの庭園があるからいいだろ？」

ベルファスト様は静かにうなずき、レイチエルに優しくそんな微笑みを向けておられました。

私はこのお屋敷に来て一年経ちますがベルファスト様が笑ったお顔を初めて拝見いたしました。

「だからレイチエル、お前は俺のモノだ。誰にもやらん」

「あーあ、とんだマザコン坊ちゃんに、捕まっちゃった。」

ゴメン、料理長。料理でこの家をもり立てるって話、あたしは参加できなくなっちゃった。あたしや、この男について行くことと思う」

「カマイマせん。リヨウリニンが、リヨウリのコトでウソをツクワケにはイキマせん。ソレにアナタがイなくとも、このエルガルドだけのリヨウリはワタシがマモります」

「ワタシがナンネンえるがどケでリヨウリをしているとオモっているのです？アナタにデキで、ワタシにデキないリヨウリはアリマせん」

「ちえー。そんなだから料理長は、お腹がへっこまないんだよ。ちよつとは下の者を褒めろってんだ」

レイチエルは、口調だけは忌々しそうに言っていました。その顔はとても綺麗な笑顔でした。

そして、クルカ様はレイチエルの言葉に満足されたのか、今度は私をじつと見つめられていました。

第02話 侍従長壊れる？「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第02話 侍従長壊れる? 「2」

目を覚ますとそこは天国でした。

なぜなら、ご主人様がじっと私の目を覗き込んでいるからです。周りはなぜか霧のような、ちょっと暖かい水滴がふわふわ浮いていて。

ご主人様以外のものは何もなく、今は私のご主人様を独り占めです。

ご主人様は何故か上半身は裸で。下半身?見れませんよ。裸だったらどうするんですか!

きっと天国は、太陽に近いから暖かくてあまり衣服はいらないんでしょうね。

あ、じゃあは私も一緒に天国に来れたんですね。

私はどうやらご主人様に、首の後ろからあたりを支えられて上を向かされている様です。

ご主人様はちよっと困った顔をしてて、何かから言おうか迷ってらっしゃる様でした。

やっぱり魔力の暴走を起こして、ご主人様を巻き込んでしまったのでしょうか。

死んでしまったのは残念ですが、ご主人様が一緒なら別に何処でも問題はないですね。

天国の住人はどんな生活をしてるんでしょう。

などと考えながら、ご主人様に声をかけてみましたが

「ご主人様?」

「あーその、何だ。うん」

「ご主人様は何も意味のある事をおっしゃいません。」

そして、よくよくご主人様の目を見てみると。ご主人様の視線は私の胸と顔をチラチラ行ったり来たりしています。

こんな時くらいエッチな事を考えない様に出来ないのでしょうか？
ご主人様を殴ってやろうと思いましたが残念ながら腕が上がりません。というよりも体が全く動きません。

仕方がありませんので文句を言う事にします。

「ご主人様、いくら死んでしまつたからといつても、女性の胸をそんな風に見るのは感心できませんよ」

「いや、胸は見てない。てか見えてない。見えてたら死んでても見るけど」

「見ないで下さいと言ってるんです！ 見えてらっしゃらない？

その割にはご主人様の視線は、私の胸の方へチラチラ動いてらっしゃるようですが？ 私が動けないのをいい事に、胸を視姦されようだなんてご主人様はどこまでエッチな生き物なんですか？」

「どおせ、俺はエッチでスケベな生き物ですよ。てかルシイが動けない状態なのがわかってたら、見るだけで済ます訳がないだろ」

「それもそうですね、ご主人様なら触りになられますよね。って！ 何もしないで下さいと言ってるんです！」

「しないしない。する訳がない。今のルシイはそんな色っぽい状況じゃないんだよ」

「わ、私が色っぽくないとおっしゃるんですか！ 先週末は私の体はどこでも色っぽくて、俺を虜にしてやまないつて言ってるっしょったじゃありませんか！ 胸に顔を埋めて最高だと言いなながら寝てらしたくせに！」 「っ！ そうでした、ワタクシとした事が、忘れてしまつところでした。昨日はメリーのある『大きな大きな胸』をご堪能されたんですね。ワタクシごときの胸では物足りなくなつたと仰りたい訳ですよね！」

「違う！ そうじゃない！」

「何が違つとおっしゃるのですか！ 昨日の事は認めてらしたじゃないですか！」

「そうなんだけど違つ！ ルシイの胸は最高だ！ 張りといい、艶といい、この手に収まりそうで収まり切らないバランスといい……つて。違つ！ そうじゃなくつて！」

「な、何を恥ずかしい事を力説してるんですか！」

などと言いつつもご主人様に最高だつて言われて喜んでいる自分を隠そうとさらに怒鳴る。

「さつきからご主人様は何を仰られたいのか、かわかりません！ はつきりして下さい！」

「自分の胸を見てみる、ルシイ」

「首も動かないので見えません」

と言つた瞬間にご主人様は、私の首の後ろに回した腕に力を込めて私を抱きしめるようにされました。

ご主人様の顔が私の方に近づくにつれ、私はご主人様の綺麗な鳶色の眼とつつすらと赤い唇に釘付けになりました。

しかし、ご主人様は乙女心も女心も理解していらつしやいませんで、

「見る、ルシイ」

と、胸を見るように催促されました。

そして視線を落とした瞬間、訳の判らないモノが眼に映りました。

「ご主人様」

「何だ、ルシイ」

「天国では背中ではなく、胸に羽根が生えるのでしょうか？」

「知らん。そして、ここは天国でも地獄でもない。イメトウルの街の俺の屋敷の風呂場だ」

「ご主人様」

「何だ」

「魔力が暴走すると体が真っ白な毛皮になり、白っぽい蝙蝠の羽根のようなモノが生える病気にかかるのでしょうか？」

「俺が見つけた時はルシイの体は綺麗なままだった。魔力の暴走は確かに起こったが、その白いのは病気でもない。」

『メイド服が濡れて透けていて、実に良い目の保養になった』

「では、この白いのは何なのでしょう？」

『やっぱり胸を視姦しておられたんですね。後でお仕置きです』

「その白いのはルシイの魔力の暴走の後、急に湯船の中から飛び出てきて、ルシイに抱きついた。以来そのままだ。」

『視姦はしてない、心臓マッサージをしようとして見たただけ、お仕置きはエロいの以外遠慮しておく』

「コレが抱きついた、という事はこれは生き物なのですか？」

『視姦だけでは飽き足らず、触れようとまでなさったと。お仕置きでは済ませません、折檻です』

「ルシイの視点からじゃ、見えないかもしれないが、俺には背中に羽根の生えた白い大きな猫に見える。」

『ゴメンナサイ、許して下さい。でも、反省はしません』

「という事は見えている羽根があるところは背中ですか…顔が見えませんが…」

『許しません、拷問です。なぜ反省出来ないのですか！』

「首が少し長いみたいでな、ルシイの背中の方にきてるんだ。」

「だって、ルシイは俺だけの所有物モノだろ！？ それとも他に男がいるのかよ！」

「しかし、何故抱きついたらままなのでしょうか…」

「あ、いえ、それは間違ってるんですが…そういう事ではなくてもう少し、雰囲気をお大切にしてくださいと言いますか、道徳的な行動をとって頂きたいといたしますか…」

「頭でも殴ってみようか？」

「ルシイ、オレノモノ。オレダケノモノ。ドコデナニシテモ、モンダイナイネ。マチガツテル？」

「もう！ 先ほどから何なのですか！ ちゃんと喋って下さい！」

「ルシイだってノってた癖に…言い返せなくなってきたからって自分だけ素「ボクハ、パパチミタイニ、クチデハシヤベレナイヨ？」に戻るなんてずるいよな。ちゃんと答えるよ。どうなんだよ」

「は？ ルシイ意味不明な事言ってる誤魔化そうとするなよ。」

「え？ と、ご主人様？ 言ってるらっしゃる意味がよく分かりませんが？」

「ん？」 『え？』 【エ？】

ご主人様の顔が消えたと思った瞬間、空いていたご主人様の右手が私の顔の横あたりの何かを掴み引つ張りあげた。

「ルシイ！ この猫モドキ、起きてる！」

引つ張りあげられた猫のような生き物は、私の顔の前でその大きな鷲色の眼をパチパチと瞬きしている。真近で見るとちよつと怖い。いえ、そういう問題ではありませんね。と、いいですかコレは猫と呼んでいいのでしょうか。どちらかと言うと犬、いえ、狐でしょ

うか。

「あの、ご主人様。体が動かない私に猫モドキの顔を近づけるのはやめて下さい。それとコレは猫モドキではなく狐モドキではないでしょうか？」

「フーン」

ご主人様はそう言うと、狐モドキと私の顔を交互に見た後、ニタリと音がしそうなぐらいイヤらしい笑顔を見せて狐モドキの顔を近づけて来た。

「ルシイ侍従長、君は今どういう状況か理解しているかね？」

「ええ、概ねは理解していると私は思っております。その羽根の生えた、狐モドキの正体以外は、ですが」

「では、この狐モドキをどけて欲しいのなら、君のご主人様に対する言い方、というモノがあると思うのだよ、うん」

「ええ、ですので近づけるのはやめて下さい。とお願いしてるじゃありませんか」

「ルシイ侍従長、君は分かっている様だねえ。君は先ほどの君のご主人様との会話を途中で誤魔化してしまったダロウ？ アレをちゃんとやってくれないかね？ 君のご主人様にちゃんと聞こえる様に。そうすれば体の動かない君の希望通り、この狐モドキを君から剥がしてあげようじゃないか」

要するに、ご主人様は私に『私はご主人様だけのモノですので、お好きなようになさって下さい』と言わせたい訳ですね。いつもの事ですし、顔に書いてありますので分かりますよ。先週も夜には言われましたので、別に言うぐらいいはどうって事はないのですが、この勝ち誇った顔をしたご主人様に言うのは悔しすぎます……

何とか出来ないでしょうかと考えていると目の前の狐モドキが少

し首をかしげたと思ったら…頭の中に声が響いてきました。

【ナントカスレバイイノ？】

もしかして、この狐モドキは念話で喋れるのかしらと思い、心の中で『お願いできる？』と聞いてみると。

【ワカッター！】

と心に声が響いた瞬間、狐モドキの首が180度近くも回り、ご主人様の方に向き直ったかとおもつと、見た目には小さく見える口をリングゴくらいなら一口で噛み砕けるのではないかと思うほど大きく開けて…

スイカほどの大きさの初級魔法のような火炎球を吐き出しました。

第03話 侍従長壊れる?」3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第03話 侍従長壊れる? 「3」

頭が痛いです。

なぜなら、盛大に後頭部をぶつけたからです。

いつも、夜になると『愛してる』とか『お前は俺だけのモノだ』とかおっしやる癖に、お昼は全然言う事を聞いてくれませんしお仕事をサボられますし。

乙女心も女心も理解してくださいませんし、自分のモノになった女性の扱いがぞんざいなのです。

「男なら、火球ぐらいで愛する者の体を手放すなんて事しないはずなのです。なのに私のご主人様ときたら…」

「ルシイ！ 誰に説明してるのかは知らんが思考が思いつきり口から出てるからな！」

「しかも、火球ぐらいってあんなの顔面に食らったら死ぬっての！」

失敗しました。思考が口から出てしまうとは…修行が足りません。

「一度、死んでしまえばいいのです。ご主人様は、世界の半分以上の存在の敵なのですから」

「ねえ。俺、いつ世界の半分も敵に回した？」

「ご主人様がイヤラシイ事を考えるようになった瞬間です。具体的には5歳ぐらいですか？」

「なんで俺が性犯罪者みたいな扱い受けてんだよ！ しかも5歳つてどんだけ早熟なんだよ！」

【パパ、ワルイヒトナノ？】

「そうですね。世界中の女性と、女性の為に命をかけられる立派な男性の敵ですから、あんな風になっちゃいけませんよ?」

【ワカッタ、ナラナイ】

「って、何をさも当たり前のようにその狐モドキと会話してんだ…」

私に抱きつくのをやめて、私の横でお座りの姿勢を崩さずに、こちらを見ている狐モドキ（命名：ご主人様）。

そして、それを見て眉間に指を当て唸っているご主人様を無視して話を变えます。

あ、ちなみにご主人様はちゃんと腰にタオルを巻いていらっしやいます。

筋肉の塊というわけではないですが、目立った脂肪の付き方もしていないスラリとした綺麗なお身体です。

「ところで、私はいつになったら動けるようになるのでしょうか…」

【ウゴキタイノ?】

聞いてくるので素直に話しかけてみます。

「ええ、お風呂場も片付けないといけませんし、何より濡れたままでは風邪をひいてしまいます」

「そうだな、風邪をひいちゃいけないから、ルシイは俺が責任を持つて風呂に入れてやるう」

などと、ご主人様は言いました。私のメイド服にご主人様の手をかけようとするのを見て、私が心の中で

『この状況で、服を脱がして触ろうとするなんて、ご主人様はいつたどこまで女の敵なのでしょうか』

と、考えた瞬間。

『ガチン！』【パパハサワツチャダメ！パパハテキ！】

狐モドキがご主人様が差し出した手を噛もうとし、ご主人様はギリギリで避けておられました。

「なんだこいつ。炎は吐くし、噛みつこうとするし。猛獣だな。グリント呼んで駆除させよう」

「ご主人様より、素直で可愛いと思いますが。それにご主人様なんて野獣じゃないですか。このくらい可愛いものです」

「人をケモノ扱いですんな！ 見境なしに誰でも襲うわけじゃねえ！」

「襲うのは否定なさらないんですね。さすが王都からメイドが来るたびに、セクハラしようとするご主人様です。一応ご自分の事も理解されていたんですね。」

「それは単なる言葉の綾だ！ セクハラもして……ない事もない」

ご主人様とのお話に集中してしまっていた私が、ふと狐モドキを見るとその小さな額の真ん中に赤い光が灯り、その光が私の胸の間ぐらいに入ってきました。

「ルシイ！」

先ほどの炎を見ているだけに、驚いたご主人様は、今度は狐モドキを押しつけ私の体を抱えあげました。

そしてメイド服のブラウスのボタンを引きちぎり、私の胸をさらけ出して異常がない事を見てとつた後、

「何しやがる、この狐モドキ！ルシイに何かしたらぶち殺すぞ！

ルシイ、大丈夫か？」

普段のご主人様からは考えられない剣幕に、少しドキドキしながらもやはり体が動かせないので

「は、はい。体は何ともありません」

『ガブツ！』『ぐっ！？』

声を出した瞬間に、ご主人様の顔が苦痛にゆがみ、狐モドキがご主人様の腕に噛みついてるのが見えました。

【パパハテキ、サワツチャダメ！】

「だれが敵だ！俺はルシイの主だ。ルシイは俺のモノだ。狐ごときがガタガタぬかすな！」

私はご主人様の腕から流れる血を見て、

「やめて、お願いだからやめて！クルカ様を傷つけないで！」

と狐モドキに抱きつきました。

「ルシイ、動けるようになったのか？」

「あ……」

狐モドキは噛んでいた口を離し、私に抱かれるままに大人しくしていました。

「恐らくですが、この狐モドキが治してくれたのではないかと……」

「さっきの光か？」

「はい。詳しい事はカナリーさんに聞いてみないと分かりませんが

……」

「おい、狐モドキ。怒鳴って悪かったな。ルシイを治してくれたのか？」

【パパハテキ、オンナノテキ】

「ふふふ」

「チ、人が謝ってやってんのに。おい。ルシイ、笑ってないでちゃんとこの狐モドキに誰がご主人様か教えとけ」

「それよりもご主人様、腕を出してください。血が出てます」

「ああ？大丈夫だよ。舐めてりゃ治る。」

あ。いや、やっぱなんか巻いてくれ」

「……？ はい」

スカートのポケットからハンカチ取り出して巻いていると、大人しくしていたはずの狐モドキが、またご主人様に向かって睨んでいました。

「大人しくしてください。ご主人様は敵じゃないですから」

【パパ、メ、キモチワルイ】

「え？」

と、ご主人様を見るとニヤケた顔でさらけ出されたままの私の胸を注視していました。

『バキッ！』

ご主人様の頭を無言で殴り、ブラウスの前をかきあわせ片手で押さえます。

さっきのはちょっとカツコ良いじゃないですか、とか思ったらすぐコレなんですから。ご主人様は。

そして、少し落ち着いた私は先ほどから気になっていた事を聞い

てみる事にしました。

「ちなみに少し気になっていたのですが…」

「なんだ？」

「なぜ、ご主人様をパパと呼んでいるんです？まさかご主人様…」

そうですね、この狐モドキは最初からご主人様をパパと呼んでいるんです。これは絶対に確認しないとイケません。ええ、どんな事をしてでも吐かせて見せませうとも。グリント老より教わった数々の方法を全て尽くしても調べ上げて見せませう。

「待て待て、そんな体で物騒なオーラを出すな！俺にだってわからんし、こんな狐モドキは今日のはじめて見たんだ！」

「そうですねあくまでシラを切るのですね。仕方ありません。グリント老直伝の拷も…もとい尋問術で……」

「今、拷問って言ったろ！言ったよな！なんでそんな物騒なもんをグリントから習ってんだ！」

「お前もなんとか言え！狐モドキ！」

【パパハ、パパ】

「じゃなくて！なんで俺をパパって呼ぶんだ！」

【ボクハ、パパトママオカゲデウマレタカラ。ダカラ、パパハ、パ
パ】

「うふふふ、ご主人様？私達だけじゃ飽きたらず、先祖返りの獣人にまで手を出して、しかも子供を産ませていたんですね？」

ミランダのように普段は猫耳と尻尾など、一部しか獣の部分が出ていない獣人を ハーフ、人間と同じく2足歩行ですが、全身が体毛に覆われていたり、顔付きが獣そのものの獣人を 先祖返りと呼びます。後、めったにいませんが、人、ハーフ、先祖返

り、そして獣のどの姿にでも、自由になれる獣人は 純血種 と呼ばれます。先祖返り の子供は10歳ぐらいまでは獣と変わらない容姿をしています。

「ち、違う！ 獣人はルナル酒場のエリンちゃんと、ギザッド娼館のムファちゃんしか手を出してない！ 二人とも ハーフ だったはずだし、身籠ったなんて聞いてない！」

「あら？ ルナル酒場のエリンちゃんってどんな方なんでしょうか？ ワタクシ、初めてお聞きするお名前なのですが？」

「しまったあああ？！ でもホントなんだ！ 他には獣人の女性はミルしか知らないって！ 知り合いにも居ないって！」

「じゃあ、この子母親は誰なんですか！」

「俺が知りたいよ！ てかこいつに聞けよ！」

「ええ、聞かせて頂きましょう。」

「貴方のお母さんの名前を教えてください。」

【ママノナマエ、ナニ？】

「え…？」「…エ？」

逆に聞き返されてしまい、ご主人様と顔を見合わせ、名前を知らないのかもしれないのもう少し違った事も聞いてみる。

「えっと、ママはどんな獣人か知ってますか？」

【ママノコトアンマリシラナイ】

「母親が育ててねえってことか？ こいつも苦労してるんだな」

「ご主人様、無神経な言い方はおやめください。もし生まれたての子供なら、そういう事を覚えてしまいますから」

「おし、ママが何処にいるか知ってるか？」

興味がわいたのかご主人様が身を乗り出して聞いていらっしやいます。

でも、ご主人様の子供なんですよね？ 苦労させる原因はご主人様にあるんじゃないですか？ と横を向いて考えていますと、何やらご主人様がこちらを見えています。

「どうかされましたか？ ご主人様」

ご主人様と狐モドキの方に向き直ると、狐モドキが手の爪を一本出して私に向けていました。

「ルシイ、お前は俺に隠してる事があるよな？」

「ごいません」

ええ、沢山あります。ですが言うわけにはまいりません。というよりも、この子の母親の話はどうなったのでしょうか。

「今から俺が当ててやろう」

「いえ、ですから隠し事などごいません」

ご主人様、今回はえらく食い下がりますね…

「お前、実は 先祖返り なのか？」

「え？ そんなわけないじゃありませんか」

「じゃあ、なんでこいつは獣の状態なんだよ！」

「ですからそれは、母親が 先祖返り か、父親が 純血種 だけからではないですか？」

「父親が 純血種 でも、子供が 先祖返り になるのか？」

「いえ、父親が 純血種 の場合は、どのような子供が生まれるかわからないのです」

「そうか、という事はお前は俺を裏切ったんだな？」

「は？ なぜそういうお話になるのです？」

「お前は俺だけのモノだつて言つたよな！ お前もそれを誓つたよな！ 4年前のあの日、お前はまだ処女だった。それは間違いないじゃあ、なんでお前に 先祖返り の子供がいるんだよ！」
「ちよ、ちよつと待つてください。私はご主人様を裏切つたりしません！ まだ子供も産んでません！」
「じゃあ、なんでこいつはお前をママつて言うんだよ！」
「え！？」

私はご主人様の剣幕にさすがに焦つてしまい、狐モドキに問い詰めます。

「ね、ねえ？ 私があなたのママつてどどういう事？」

【ボクハ、ママトパパノ、オカゲデウマレタカラ。ダカラ、ママハ、ママ】

「ほら見る！ ルシイが 先祖返り じゃなきや 先祖返り が生まれる理由は一つじゃねえか！」

「違います！ 私はご主人様以外の男性に、身を任せた事はございません！」

「お前も知つての通り俺の母さんは 詠み姫 だからな、俺が 純血種 になる事はないんだよ」

「ですから、そもそも私は産んでいません。ご主人様がいつ奥様を娶られても困る事の無いように、ご主人様との夜の時も避妊には細心の注意を払っています！」

「そんな事気にするな！ お前が俺の子を産めばいいんだ！」

「私ではご主人様の奥方にはなれません！ ですから奥方になられる方より先に産むわけにはいかないのです！」

「お前が子供を産んでも誰にも文句は言わせねえ！ そんなに俺が甲斐性なしに見えんのか！」

私は身分の違いという事実を分かつてはいたのですが『パパ』や『

ママ』などの単語を聞いたせいでしょうか。自分の感情を抑えきれませんでした。

「普段のご主人様は、甲斐性なんて欠片もないではありませんか！」
「仕事もろくにされず、夜は甘い言葉ばかりおっしゃるのに、昼になると他の可愛い娘を見つけては手を出して。拳句の果てには、私との今日の誓いまで忘れてたじゃありませんか！」

私はいつの間にか自分の感情と、眼からこぼれ落ちる涙を止める事が出来なくなってしまうていました。

そして、私は自分の立場の悲しさと、まだ見ぬご主人様の奥方様になられる方への悔しさから、ご主人様の胸に飛び込んで背中につき爪を立ててしまいました。

「忘れてない。夕日の誓いは忘れてないぞ、ルシィ」
「嘘です。さつき聞いた時すぐに答えてくれませんでした」
「昨日は徹夜で準備したから、起きたてで頭が回ってなかった。それとルシィが無理やり魔力を籠めてるの見て、焦ってたんだよ」
「ついで言うけど昨晩は、メルと一緒に過ごしたが何もしてない。あ、いや、ちょっとだけおっぱい触ったけど。痛つつっう！」

その言葉にさらに爪を立ててしまいました。

「とにかくメルは来月の頭に王都に返す。本人にも言っていないけどな。旅行は報酬みたいなもんだ」

「何のですか。グスツ。大きな胸を触る為の報酬ですか」
「歌をな、教えてもらったのさ。今日の夕方、ルシィに聞かせたくてな」

「だから、最近、メリーとコソコソと出かけてたんですか」
「そんなに怒ると思わなかったんだよ」

「ご主人様は、女心がわかってません。」

「悪かった」

「乙女心もわかってません」

「悪かったってば」

「違います」

「？」

「ごういうときはだまって抱き締めて、口付けして欲しい時なんです」

『ンッ』

ご主人様は今までにないくらい優しく、でも深く強く唇を合わせて下さいました。

「もうそろそろ、ええと思うで。じいじ」

「そうですね？ 私はもうちよっと後の方が面白いと思えますが？」

「ごう言つのはな、正気に返る前に、正気に返すんが一番おいしいんや」

「そういうものなのですね」

「おお、この子が御主人様とルシィ姐さんの子かあ」

「これは変わった狐ですね。羽根があるとは」

「白い狐やなんてお稲荷さんみたいやな。名前はあるんやろか？」

「聞いてみましょう。君の名前はなんて言っんですか？」

【キューン】

「あら？御主人様とルシイ姐さんとは、ちゃんと喋れてたみたいやつたのに」

「何か理由があるのかもしれませんね」

「ウチの腕の見せどころやな。しっかり研究させてもらおうわ」

「そうですね。実験はしないでくださいね、何が起るかわかりませんから」

「生き物で実験はせえへんよ。あ、じいじ。たぶん湯船に殻が残ってるやろうから、あとで研究室に運んどいて」

「わかりました」

「さて、ご飯いこか。この子、何食べるんやろ？」

「クルカ様。ルシイさん。いつまでまってるのですか？もうすぐ食事の時間ですから早く着替えてください。その格好で食べるわけにはいかないでしょう？」

「い、い、い」

「胃？なんや、ルシイ姐さん、胃でも痛いんか？」

「いつからそこに居たんですか~~~~~っ!？」

「いつからでしょう？ カナリーさんは？」

「ウチは、ルシイ姐さんの魔力が暴走しかかっている時からやけど？」

「私は、ルシイさんが色つぽくないとかどうとか言ってるあたりです
すね」

「ほとんど最初からじゃないですか~~~~~!!」

そして、私は恥かしさのあまり意識を手放しました……………

「ったく。居たんなら手伝ってくれたらいいだろうが」

「ウチは、あの石から出てきた生きモンが、どんな行動するんか研究しとったんや」

「私は、カナリーさんに止められましたので……」

「カナリー……」

「堪忍や、ご主人様。今度、ちょっとだけサービスしたるさかいに許してや」

「お、マジで？ 痛タタタ！」

「うわ、さすがルシィ姐さんや、意識ないのに本能だけで御主人様にお仕置きしとる」

「そこは感心するとこじゃねえ！」

第04話 料理人燃える「1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 料理人燃える「1」

あたしや、今、拷問に耐えてる。

こんな苦痛は、今まで生きてきた25年の人生の中で初めてだ。この拷問の原因になってるグリグリ爺は涼しい顔をしてあたしの作った『ロールレタス』と『ミネストローネ』をすごく優雅で、丁寧な動きで食べている。

憎たらしいったら、ありやしない。

あたしは自分の目の前には、置かれていない料理を食べるみんなをよそに、拷問に耐えている。

「今日の『ロールレタス』と『ミネストローネ』いつものよりすごく美味しいよ。レイチェル」

ミランダが褒めてくれるけど、あたしやそれどころじゃない。

「ありがとう、ミラ」

簡単に返事してまた向き直る。

「レイチェルはん、ほんまにすごい美味しいで。どないしたん？なんかええ事あったん？」

「いや、何にもないよ」

「しかし、ホントに美味しいな。このロールキヤ、うんツ！『ロールレタス』。何か隠し味とか入れたのか？レチエ？」

「ゴシユジンサマ、隠し味ってなあに？」

「ん？ ああ、隠し味ってのは調理の時にメインの食材とは関係な

い材料や調味料を入れる事で味や香りを引き立てる方法でな。有名な料理人なんかは他の人間には絶対に教えないってくらい、料理の重要なポイントなんだ」

「へえ、私達も聞いちゃダメかな？」

「そうなんですか、ご主人様はご自分のお仕事に関係の無い事は詳しいいんですね。レイチエル、私も作ってみたいので教えてもらってもいいですか？」

「ん、ああ。また今度ね」

「私が厨房に行った時、この『ミネストローネ』を作ってもらいましたがね、それはもうすごいスピードと正確さで、あれは真似できそうにありませんでしたね」

「へえ。やっぱりレイチエルすごいね」

みんなが今日の料理を褒めてくれてるけど、あたしは手に持ったパンを一口大の大きさに、そおっと千切る事に集中している。

今日のパンはふっくら焼いたから、力を入れすぎるとつぶれて団子みたいになっちゃう。それじゃ美味しくないからね。

「レチエ、レチエ！」

「もう！ なんだい！ こっちは集中してんだよ、静かに食べれないのかい！」

「いや、そんな怒らなくてもいいじゃねえか……」

「主殿は大人しく食ってりゃいいんだよ。じっとしてられない子供じゃあるまいし……」

「御主人様、なんかレイチエルはん怒らすようなことしたんかいな？」

「普段から女性を怒らせる事においては王国一かもしれない御主人様ですからね……」

「なんか、俺の扱いあまりにも酷くねえか？ 一応、俺は領主で主なんだが……」

「いつもの事だよ〜？ 気にしちゃダメだよ？ ゴシユジンサマ」
「そうですね。いつもの事ですね。あ、ミランダさん、もうひとつパンをもらえますか？ このスープによく合うんですよ……」

テーブルの方じゃ、カナリー、侍従長、主殿、ミランダ、グリ爺がゴソゴソなんか言ってるけど気にならない。

今は目の前の事の方が大事だ。

でも、ずっとこのままだったらどうしよう？

もしこのまま何も食べれなくて飢え死にするなんてことになったら……

ダメだ、駄目だ！そんなこと許せるはずがないじゃないか。

まだやりたい事がいっぱいあるんだ。

一緒に森に散歩に行ったり、二人で街に行ったり、一緒にお風呂に入ったり、一緒に寝たり、ベッドでモフモフして遊んだり。

侍従長には任せず、いろいろお世話もしてあげたい。

朝起きたら、顔を綺麗に拭いてやって、目ヤニなんかも綺麗に拭いてあげて。

あ、耳掃除はされると気持ちいいって聞いた事がある。こう、頭をあたしの太ももに乗せて膝枕をしてやって、耳掃除……いいね。

でもあたしじゃ、こそばゆいのは苦手だから、太ももに毛が擦れるところばゆくなりそうだね。タオルケットが要るかもしれないね。

確か、ベルファスト様に料理を褒めて頂いたときにもらった、王都の首席装飾師が作った魔法のキルトがあっただはず。

探してみよう。

ああ！ そんなことは後でもいいんだよ！ 今はこの目の前の状況を何とかしないと！

全く、食事を口にしてないじゃないか！

「あの、レイチエル？」
「なんだい！」

侍従長まで食事の邪魔をするのかい！？　と思っただけで違っ
つようだね。

「そんなにじっと見ていたら狐モドキも食事しにくいと思いますよ
？」
「

『そんなにあたしの顔が怖かったのかい？』と眼で訴えかけてみ
た、すると。

【きゅーん……】

狐モドキが小さく鳴いて目をそらした。

……………

わかったよ！　見なきゃいいんだろ、見なきゃ！

こんなに可愛い生き物、見ないワケにはいかないじゃないか。
と少し涙目になりながら侍従長の方を睨みながら狐モドキから目
をそらす。

「そんなに睨まないでください。狐モドキの世話はレイチエルに任
せますから」

「ホントかい！　いやあ、侍従長は良いオンナだね。出世するよ！」
「あの、侍従長なのでこれ以上は出世のしようがないんですが……」
「ルシイ、やめとけ。レチエはもう周りの事は口クにわかってない。
狐モドキで頭がいっぱいだ」

「レイチエルはん、動物好きやったんやねえ。知らんかったわ。狐

モドキの研究の時は気いつけたらなあかな」

ッ！

「カナリー！ 今、何て言ったんだい！？」

「な、なんや、急に。動物好きで、ゆうただけやんか。動物好きで言われるのきらいなん？」

「そうじゃないよ！ この子を研究するだって！」

「そら、じいじが持って帰ってきた石から生まれたワケやからなあ。じいじに石の分析頼まれとったし、研究するけど？」

「そんな危険な事、あたしや絶対許さないよ！！！」

「でも、研究せえへんかったらこの子がタダの穎悟獣^{エイゴ}なんか、先祖返り なんかもわからへんで？」

「う、それは、そうだけど」

「しかも、ミランダちゃんやエヴァン爺さんみたいにタマネギ嫌いとか種族的な弱点とかわからんままにメシ食わすんかいな？」

「あああつああ！ もしかして食べないのは、何か食べられないモノでも！？」

気になって狐モドキにまた向き直ると、狐モドキはフルフルと首を横に振る。

食べれないわけじゃなさそうでホツとしたけど、じゃあ何で食べたくないんだい！ と言いたいのをグツと我慢する。

「もしかすると……」

侍従長が言い終える前に侍従長に先をせかす。

「なんかわかったのかい！？」

「あ、いえ。猫舌なんじゃないかな」とか……」

「 そうかな？ 」

「 ルシイ、こいつはおかしいけど一応、『狐』だぞ？狐が猫舌って意味わかんねえだろ 」

「 わからないじゃないですか！ それにご主人様だつてはじめは猫つておっしゃってたじゃないですか 」

「 そうかもしれない！ となると冷ましてやる必要があるんだね。スプーンですくって冷ましてやればいいかねえ 」

と、狐モドキに食べさせる方法を考えてみる事にする。

「 ねえ、グリじいちゃん。エイゴジユウって何？ 」

「 穎悟獣というのはですね。ただの獣とは違い、人間の言葉がわかったり、ドラゴンのように思念会話ができたりする獣の事です 」

「 ドラゴンって喋れるの？ 」

「 ミランダさん、ドラゴンは最も知性と気位の高い生き物と言われている、全ての魔獣、穎悟獣、魔物、獣の頂点だと言われています 」

「 知性が高いつて言われとるのに言葉も理解でけへんかったらかつこつかんわなあ 」

「 はい、そしてドラゴンを含む、魔獣は総じて言葉ではなく思念で話します。何故かという人間や獣人が声を出す為に持っている喉の振動を調整する部分に、ブレスを吐く為の魔力変換機関が備わっている為に、人間や獣人のように声が出せないんだそうです 」

「 ん？ まてよ、こいつ俺にむかつて火炎球吐きやがったぞ？ 」

「 てことはこいつは魔獣か？ 」

「 そうですね、魔獣か、先祖返り でしょうね 」

「 先祖返り じゃねえだろ。よく考えるとこいつは初めから知性がある。ガキ程度だけだな 」

「 そうですね、少なくとも私やご主人様と話をしてた時の様子では生まれたてには思えませんでした 」

「 しかし、私の記憶では魔獣の種類の中には狐はいなかったように 」

思うのですが・・・」

「そこでウチが研究して、調べるっちゅうワケやな」

「カナちゃん、あの子の事何かわかったらわたしにも教えてね」

「任しとき、ばっちり調べたるさかいに」

「クルカ様、ルシイさん、食事の後お仕事を片付けながらで構いませんのでこの魔獣についてお話をさせて下さい」

「わかった。どうするにしろ、このままハイ、飼いましょう。ってワケにはいかないだろうしな」

「そうですね、今この屋敷にメリーがいなくて、ちようどよかったですね。王都に知れると問題が大きくなりそうな気がします」

「というわけだ、レチエ。メシ食わせたら、カナと相談して、お前から二人以外の眼の届かないところに隠しとけ」

「あたしの部屋に居させとくよ！ 絶対誰も入れない！」

「レイチエルはん……一応研究もせなあかんねんけど、わかつとる……？」

「レチエ、この屋敷にずっとおいとくかもわからないんだ、あんまり感情移入しすぎるなよ」

「主殿……この子捨てるのかい？」

「レチエ、そんな恨みがましい顔で見るな…どうなるか分からないっただけだ。捨てるとは言っていない」

「わかつたよ……」

とこれからの事を伝えたあと、主殿と侍従長とグリ爺は食事を終えて食堂を出ていっちまった。

食事がほどほどに冷めたのか狐モドキが皿から直接食べ始めたのを見てあたしは嬉しくなってそれをずっと見ていた。

「レイチエルはん、自分の分この子にあげたんやろ？ お腹すかへんの？」

「いいんだよ、一回くらい食べなくても死にゃしないよ」

「レイチエル」。パン持ってきた」

「ああ。ありがとね。お、プルクの実のジュースもかい。気が利くね、ミラ」

「えへへ。わたしも一人前のメイドになる為、勉強してるもん。だからまた料理教えてね」

「かまわないけど、猫舌じゃ料理には向かないよ?」

パンをジュースで流し込みながらミランダに返事してやる。

「いいの、ピクニックに行く時のサンドウィッチぐらい作りたいだけだから」

「なんや、ミランダちゃんも猫舌かいな? でも、さっきの料理は大丈夫やったん?」

「わたしはそこまでひどい猫舌じゃないもん」

「ハーフ じゃそんなもんか。まあ、獣人や魔獣、獣なんかもは基本的にみんな猫舌やもんな。程度に差はあるけどな」

「そうなのかい? カナリー?」

「せや、理由ははつきりしとらへんけのやど獣は、大昔は熱して食うつちゅう習慣がなかったからそのせいやって言われとる」

「へへ。そうなんだあ」

「だからもともと火が使えるドラゴンとか、ファイヤーモンキーとかの種族以外は猫舌らしいで」

「カナリーは物知りだねえ……ん? ……ちよいとまちな。じゃあ、初めからこの子が猫舌かもしれない事分かってたってことかい!？」

「それはあれやんか、研究者の知的好奇心がやな……」

「カナリー!」

カナリーを殴つやろうかと向き直ると、カナリーは素早くミランダの後ろに隠れて言い訳を始めやがった。

「悪気はないねんって。御主人様に火炎球吐いたって言うと思ったから、ファイヤーモンキーみたいに猫舌じゃないのかもって思ったん

やしー！」

【キューン】

そこで食べ終わったのか、狐モドキが鳴いたのでカナリーの事はほっという話しかけてみた。

「美味しかったかい？」

【キャン！】

と狐モドキが元気よく返すのをみて頭をなでてやる。

「レイチエル、お母さんみたいな顔してるね」

「あれは母性をくすぐられまくつとるカオヤ」

「うっさいね。いいだる別に！」

「でも残念やな、その狐モドキ、ご主人様を『パパ』ルシイ姐さんを『ママ』って呼んでるみたいやで」

……………

なんだってー！！

侍従長め……………そんなうらやましい事を……………

し、しかも主殿がパパ……………

あたしじゃやっぱダメかな？主殿がパパであたしがママとか。

……………

デへへ

いいかもしれぬ……………

あたしの事をママって呼ぶように躡けよう！

動物を飼う時も子供育てる時も躡けは大事って言うしね！

「レイチエルのお顔が残念なことになってるよ?」

「しっ! 妄想に浸っとるだけや、こついつのは黙って見てるからおもろいねん」

「んゝつまんない。レイチエル。しゝいゝチエル」

「ミランダちゃんはまだまだお子様やな」

はっ!?

「な、なんだい? ミランダ」

「部屋に連れてくんじやないの?」

「そ、そうだね。じゃあ、片付けちまうからカナリーもミランダも手伝ってくれるかい?」

「了解や」

【キャン!】

「お皿運べばいい?」

「ん?」「え?」「お?」

狐モドキが鳴いたと思ったら、ちゃんとお座りの姿勢でこつちを見てた。

可愛い……

「手伝ってくれるのかい?」

【キャン!】

「気持ちは嬉しいけどね、片付けただけだからお皿運んで洗っただけなんだよ」

「その姿じゃちょっと手伝いはできへんわな……」

「無理だよな」

狐モドキは構えるように四肢を踏ん張り……

小さな額の真ん中に赤い光が灯りだした。
すると、テーブルに置いてあった食器類が全て宙に浮き始め重な
っていく。

「すっごーい」

とミランダがはしゃいでるが、カナリーは

「重力操作？ テレキネシス？ 魔法やとしたらあの額が発動体の
魔石の代わり？」

などつぶつぶつぶやき始めた。

「運んでくれるかい？」

【キャン！】

もうどうでもいいか、と諦めたあたしは体の周りに食器を浮かば
せた狐モドキを連れて厨房に歩いて行った。

第05話 料理人燃える「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第05話 料理人燃える「2」

あたしは料理人だ。

今の屋敷ではメイドや
も基本料理人だ。

ん？ わからない？ わからないのはわかる資格がないからだよ！

主殿だつてそれを認めてくれるからこそ、この屋敷にはあたし
以外の料理人がいない。

エルガルド家つてのは貴族の中でも特に変わった家系だ。色々
おかしなところはあるけど

料理人のあたしからすると一番おかしなのは、食事の習慣だ。

まず、価値観がおかしい。食材に無駄遣いを嫌う。

ケチつてわけじゃないんだが他の暴飲暴食^{ブタ}が当たり前のような貴
族から比べるとおかしいと言える。

貴族特有の高級食材^{ウマイモノ}を食わないわけじゃないが、食物を大事にし
てる。

次に一日一回は使用人とも一緒に食事をする。もちろん全員とじ
やなく交代で、ではあるけれど。

他の貴族や客がいる時はその限りじゃないが、あたしの知ってる
中でソレが行われなかった日はない。

だからこそ、エルガルド家に仕える料理人は、自分たちの主がど
んな顔をして料理を食い、どんな料理を好んでいるのかを自分の目
で理解する。

そしてトドメが、料理に対しての文句は言わない。

質問すれば、『もう少し薄い方が好みだ』などちゃんと答えてくれるが、文句は言わないし、それを理由に怒る事がない。

料理長の話では過去数十年エルガルド家に仕える料理人で料理の事で退職クビになったものはいない。

そのかわり、素行が悪い、ギャンブルに狂う、乱闘騒ぎを起こしたなどの理由がある場合は些細な事でも大きな問題になる。

特に今の大婆様その傾向が強く、料理人を大事にされる。

あたしがまだ12歳の頃、大婆様が来られていた食事の時だった。その時に運悪く、ベルファスト様の元に緊急の連絡が入った。

どっかの貴族がベルファスト様の邪魔をしたらしく、ベルファスト様は静かに怒られてた。

大婆様も「潰してやりな」と一言おっしゃっただけで、後は黙って食事を楽しまれていた。

やがてベルファスト様は何かをひらめいた様子で、食事を途中でやめて扉から出て行こうとした。

その瞬間、大婆様の姿が席から消え、食堂の隅にうつ伏せに倒れたベルファスト様とその上に腰かける大婆様がいたんだ。

何が起こったのか誰にも解らなかったし、大婆様が言葉を発するまでは誰も何も言えなかった。

「ベルファスト、あたしや『潰してやりな』とは言っただけど、料理を残していいとは言っていないよ」

「緊急なのです！ 王にもお話を通さないと……」

「どんな理由があろうと、食事は大事にしな。他人や食事のせいにするんじゃないよ。食事も満足にとれなくなる程度の能力しかない自分を責めな」

「っ！……申し訳ありません。食事に戻らせて下さい」

「しつかり味わって食べな」
「はい！」

20人がけのテーブルの、8割に座っていた使用人のうち、このエルガルド家の異常さを理解していなかったあたしを含む約半分は、驚きで手が止まっていた。

すると大婆様は自分の席に歩いて向かいながら

「よく覚えときな、食事は生きる為の第一歩だ。プライドを捨てても食事は捨てるな。生き抜く意思は必ず運命を切り開く。

食事を捨てるのは、自分の命を捨てる覚悟を決めた時だけだよ」

そして、席に着くとにっこり笑って

「さ、美味しく頂こうじゃないか」

と言って、食事に戻られた。

あたしはその日から大婆様のくる日には必ず、食事をこ一緒にさせてもらえるように料理長に頼みこんだ。

それから10年かけて大婆様の好みを覚えた。

いつしか口調までうつつちまたのはご愛敬ってところだ。

あたしが22歳の時、初めて一からすべて一人で作った料理を一品だけ出した日。

大婆様が夕食のあと、ベルファスト様と料理長とあたしを呼びだした。

「ベルファスト、あんた今日食べた夕食はどうだった？」

「いつも通り美味しかったと思いますか？」

「ふうん。いつも通り、ね」

話が最初から料理の話だった事に驚いていた。なぜなら、普段の口調や、態度の事で怒られると思っていたからだ。

あたしはその場に呼び出されたと聞いた時、料理が不味くてクビになるんじゃないか思った。

だけど、料理長が料理の事でクビになった者はいないって教えてくれていたから、大婆様を真似た口調と普段の態度を怒られるのだろうと料理長に言われて納得していた。

「あたしや、あなたの育て方間違えたかねえ……」

「母上、何をいきなり……」

「懐かしくなかったかい？」

「え………？」

あたしと料理長は口をはさむ事が出来なかった。

少なくともあたしは何が起こってるのか全くわかっていなかった。

「料理長、今日の夕食の『コロッツト焼き』、作ったのはその娘かい？」

「ソウです」

「いい腕だ。ポロポロ鶏とブルーローズの香りソースの合わせ方がよかった」

料理長に後ろ手で促され、あたしはお礼を言った。

「あ、ありがとうございます。大祖母様」

すると大婆様は。

「そう硬くならなくてもいいよ、普段通り、『大婆様』でいい」

あたしは心臓を掴まれたような気がした。『大婆様』なんていう呼び方は失礼にあたると他の料理人にいつも言われていたからだ。

「え、と、その。ご存じだったんですか？」

「あたしやこの家の事なら何でも知ってるよ」

「それで母上、本題はなんなのですか？呼び方の話をする為に呼んだわけではないでしょう」

「ほんとにせつかちな子だねえ。面白味がないって言われないかい？」

「面白味など求めないでください」

「まあいいさ、本題だ。料理長、あの味はフローリアの好きだった味で間違いないね？」

「ヨクおワカリにナられましたね」

隣で、ベルファスト様が目を見開き、『そんな……』などと呟いておられたけどあたしには何の事だかさっぱりだった。

「で、この娘はどこまでできる？」

「まだ、コのイッピンだけです」

「大事に育てな。特にクルカとカラツクの為になる」

「リユウをハナシテやつてもイイですか？」

「そうだね……一年仕込んでからにしな」

「わかりました」

訳のわかっていないあたしを置いて話はどんどん進んでいった。

「ベルファスト、お前は面白味がない上に、薄情な男になったんだねえ……」

「う……」

「嬢ちゃん、名前は、確かレイチエルだったかい？」

「は、はい。レイチエル・ブロッサムです」

「コレやるよ。何かに使いな。また、あんたのブルーローズのソースを楽しみにしてるよ」

と言って、どこかに行ってしまうれました。

そして、ベルファスト様が

「それは王都の首席装飾師が作った魔法のキルトだ。わたしが母上にと、買ってきたものだが褒美と言う事にしておこう。もらっておきなさい」

はぁ、とその価値の全くわからないあたしは部屋のテーブルにでもかけるんだらうかと考えていた。

「ところで、ブロッサム。」

「なんでしようか、ベルファスト様」

「明日からできるだけそのブルーローズのソースを使った料理を出すようにしてくれるか？」

「えと、私、今日初めて一から全部作らせていただいたので…」

「料理長、どう思う？」

「コンダテのケントウにコレいちえるをサンカさせましょう。ソレでブルーローズのソースをツカえそうナトキはワタシがシドウします」

「うむ、料理長、よろしく頼む。私は、母上の処に行ってくる、恐らく庭園だらうからな」

「わかりました」

「い、入れとくよ。ダンスに入れとく」

訳がわからないまま、訳のわからない状況に流されていたあたしは疲れ果てちまって、料理のことだけを考えられる厨房に早く戻ろうと駆け出して行った。

第06話 料理人燃える「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第06話 料理人燃える「3」

この手に伝わる感触がすごく気持ちいい。

あたしは今、カナリーとミランダに手伝ってもらって自室を片付け、狐モドキを膝に乗せている。カナリーは何かよくわからない機構石を狐モドキに向けたり、変なベルトを巻いたりして、ごちゃごちゃやっている。

結局、暇になったあたしとミランダが雑談してたんだが……

「それでどうなったの？ 結局なんでレイチエルは婆ちゃんおばに気に入られたの？」

「ブルーローズが問題だったらしいけど、その辺の事はよくわからないままなんだ。聞く前にこっちに来ちゃったから。」

でもグリ爺が知ってて時期が来たら教えてくれるってさ。そのまま伸びて1年で教えてもらえるはずが4年ちよつと経っても解らないままなのさ」

「まあ、やつと見習いから一歩飛び出した瞬間にいきなり一人前になれるなんてそんな夢物語あるわけないからさ。大婆様にブルーローズの味を認められて1ヶ月研究して。カラック坊ちゃんとケンカ騒ぎ起こして。主殿に無茶させて、で、こっちに来た」

「レイチエルがけんか騒ぎ起こすのはまだ想像つくけど、ゴシユジンサマが無茶したの？ ぐうたらで、いつも何もしようとしないのに？」

確かに、いつもの主殿からは考えられない無茶だよなあ。でもそ

ここにも惚れちまったから仕方ないよな。

「その時にウチと出会ったんや」

とカナリーが横から言ってきた。

「ゴシユジンサマ、何したの？」

あたしとカナリーは顔を見合わせてから、二人して意地悪い顔でミランダに向き直り声をそろえて言った。

『ドラゴン退治』

当時の事は今でもよく覚えてる。

クルカ様が19歳になった月、カラック坊ちゃんが成人の儀をお迎えになる3カ月前に問題は起きた。

クルカ様は相変わらず無能者扱いだったが、カラック坊ちゃんは騎士養成学校を3位の成績で卒業し、3ヶ月後の成人の儀をお迎えになった後は王立第2騎士団に入られることが決まっていた。

王立騎士団は王国軍の中でも珍しい、完全実力制で武力、知力、統率力などの一芸に秀でた貴族や高ランクの冒険者などが集まっていた。

しかも王立騎士団は王の直轄であり、第4騎士団から入団して実力でもって第3騎士団、第2騎士団、と上がっていくしかないのが

通常らしい。

その王立騎士団の入団試験でいきなり第2騎士団に入団を許されるという事実からカラック坊ちゃんの実力がすごい事はよくわかる。

そして、ベルファスト様は夕食後に屋敷の主だった者を食堂に集め、入団試験の結果をお話になられた。

第2騎士団に入団という結果を聞かされた後のカラック坊ちゃんは、あたしから見ても目に余る様な酔っ払いになってた。

カラック坊ちゃんはクルカ様を無能と無能と罵りながら、酒を飲み、メイド達に酌をさせながら悪戯しては、また飲むという事を繰り返してた。

旦那様も奥様も執事長も今日ぐらいは、と早々に食堂から退出され執務室へと向かわれたようだった。

そして普段は夕食後は食堂にいない、料理長や見習い料理人のあたし、見習いのルシイまでがそこにいたせいで問題は起きた。

酔っぱらったカラック坊ちゃんはエルガルド家の不文律であるはずの、食事に対する心構えを忘れ、料理長に酒のつまみを作れと言い、あたしが運んできた料理に文句をつけ、ルシイを抱き寄せて酌をさせ、それを嫌がったはずみでルシイは料理をひっくり返してしまった。

カラック坊ちゃんが浮かれていた事も使用人はみんな分かっていたし、悪いのはカラック坊ちゃんだとわかってた、

でもカラック坊ちゃんはそれを認めようとしなかった。

「ルシイー食事を大切にしろってのはエルガルド家の掟だぜえ。それを破ったやつがどうなったか知らんわけじゃあるまい？」

「で、でも、それは。カラック様が私を引っ張るから・・・」

「料理にあたったのは誰だ？ 俺が料理の方にお前を押ししたか？」

していないよなあ？ ック」

あまりにもいやらしい態度にあたしは我慢できず、

「カラック坊ちゃん、いい加減にしな！ あんたそれでも男かい。ルシイ、もうここは良いから片付けてきな」

「待てよ。お前が仕切るんじゃないよ。使用人が勝手に決めていい事じゃねえ。エルガルド家の掟の問題だ」

「兄さん、ルシイもわざとやったわけじゃないんだ。俺が父さんの処にルシイと一緒に行って謝ってくるよ」

「無能者は黙ってな！ 勝手なことするんじゃないよ。それとも何か？ お前が俺に逆らうのか？」

「ルシイは料理を無駄にした、それは許されない。だから謝りに行く。それだけじゃないか」

「ここには俺がいるんだ！ 第2騎士団所属のエルガルド家次期当主の俺がな。まずは目の前にいる俺に詫びるつてのが筋だろうがぁ！」

「……解つたよ。ルシイ、理由はどうあれ無駄にしたのは事実だ。

兄さんに謝るんだ」

「は、はい。カラック様、私はエルガルド家に仕える者としてあるまじき……『待て』……え。」

「待て、と言つた。エルガルド家の人間としては無駄にすることは認められん。お前がそのままそれを処理しろ」

「え、？ えと？ 片付けて調理し直せばいいんでしょうか？」

ちょっと形が崩れてるけど、何とか厨房に持って帰れば食べられるように出来るだろうと思つたあたしは、

「調理はあたしがしてやるよ、ほらルシイ。拾おう」

と言っただけど……………

「ああ？ レイチエル、てめえも勝手なことすんな！ 今すぐ無駄にしない方法があるだろうが。ルシィ、お前がその場で食べばいいんだよ！ 落とした罰だ。そのまま口でくわえて食べ！ 犬みたいにな！」

「そんな、で、できません」

「いい加減にしろ！ 兄さん！ それは人にさせる事じゃない！」
「お前は黙ってる！」

と、ルシィをかばったクルカ様をカラツク坊ちゃんは殴り飛ばしやがったんだ。

あたしの横に殴り飛ばされてきたクルカ様をあたしとだまって見ているエヴァン爺さんが起こしてやった。

「情けねえなあ、クルカ。ジジイと女に助けてもらわなきゃ起きる事も出来ない無能者が。なんなら介護でもつけてやるうか？」

「婆さんや父さん母さんが守ってきたエルガルド家の掟の意味も理解できない兄さんよりはましさ！」

と、クルカ様はカラツク様に殴りかかっていったけど……………

「ハエが止まるぞ。クルカ」

カラツク様は半身をずらすだけでクルカ様の拳をかわして、そのまま腕をつかみ今度はルシィの方に放り投げた。

「クルカ様！」

ルシイはクルカ様に駆け寄り、抱えるようにしてクルカ様を支えてあげてた。

「カラック様、もうやめて下さい。私が、私がちゃんしますから！！」

「駄目だルシイ。もう、そういう問題じゃあ、ないんだッ！」

「その通りですな。カラック坊ちゃん、そりゃあちよつとやりすぎだ」

「庭師風情が何を」

「エルガルド家次期当主ともあるうものが、こんな些細な事で兄弟喧嘩を起こして祖母様の耳に入らないとでも、思ってるんですかな？」

「エヴァン。てめえ何が言いたい」

「すくなくともここにいる全員が処罰されるでしょうな。もちろん、カラック坊ちゃんも」

「処罰されんのはルシイだけだ」

「いやいや、床に這いつくばらせて、食事しろとおっしゃったのをお伝えすれば、祖母様は確実にお怒りになられるでしょう」

「俺は料理を無駄にするな、と言っただけだ」

「ここに居る全員から、祖母様はお話をお聞きになると思いますよ」
「グッ」

「もういいでしょう。お酒の席の戯れでしたと、今日の事はみんな忘れましょう」

「チッ。しゃあねえ。気分が悪い、おい！ 誰か俺の部屋に酒と料理運んでおけ！ 部屋で飲み直す。ルシイ、覚えとけよ」

そう言っつて食堂から出て行こうとした時に、カラック坊ちゃんは思い出したように、クルカ様に向き直って、

「よかったな、女2人とジジイに守ってもらえて。無能者のお前に

はぴつたりのボディーガードだな」

それを聞いたクルカ様はカラツク様を睨んだけど何も言えず、

「悔しいか？ 悔しかったら、俺よりも先に名を上げるんだな！

まあ、王立第2騎士団に入団が決まってる俺を超えるには、第1騎士団でも難しいとされるドラゴン退治でもするしかないだろうがな！ しかも3カ月以内に！

はははははははははは！」

「どおした？ やってやるって言わないのか？ 言えないよなあ？

無能者のお前じゃ！ まあ無理だが？ できたら何でも言う事を一つ聞いてやるよ、はははははははははは！」

ってクルカ様を馬鹿にして食堂を出て行ったんだ。

悔しそうなクルカ様にあたしたち使用人は何も言えず、ただ黙って見守ることしかできなかつたんだ。

そしてクルカ様が悔しそうな顔の奥に一つの決意を秘めている事にも気付けなかつたんだ。

第07話 白衣メイド落ち込む「1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話 白衣メイド落ち込む「1」

研究に必要なんは才能でも頭脳でもないんや。

一番大事なんは諦めへん根性と出資者^{パトロン}や。

ウチは今、頭が狂いそうになってる。

目の前におけるこの男が原因や。何処の坊ちゃんか知らんけどシリアスの兄ちゃんが連れてきた。

シリアスの兄ちゃんはウチとお父^とんの大事なパトロンや。

パトロンの意向に逆ろうたら研究させてもらわれへん様になるかも知れんから、とりあえず話は聴いたるかいな？ ぐらいでお父さんと一緒に席についてった。

とりあえず話は分かったけどお父^とんはコメカミに青筋入っとるし、切れる寸前や。

何で怒つとるかかって？

この男なあ。考え方が無茶苦茶やねん。

必要な研究成果がある　ウチはソレを持つとる　ウチを資料ごとよこせ。

無茶苦茶やる？

そらな？　ウチは自分でいうのも何やけど、めっちゃ可愛いで？　しかもお父^とんは魔法と魔物の研究では世界一って言われとった、今は亡きガナツシユ帝国の国立魔法院の首席教授やったんや。ウチはその娘や。コレは内緒やで？　誰にも言つたらあかんで！

まあ、せやなあ。ウチらが研究に困らんぐらいの金持つてるか、

もうちょっとこう才能に溢れた人間やったら考えたつても良かったんやけどなあ。

どうみても騎士にはなれん中肉中背っぽい風体、聞いたら何処ぞの次男やっちゆうし。魔法の系譜適性は4大属性は全部あかんかったらしい。という事は亜流の変な魔法適性しかないちゆうことや。

才能ない。金なさそう。見た目ひよろひよる。まあ、顔は、中の上つてとこか？

お父^とんは一応、パトロンの前やから我慢しとるようやから言つた。つた。

「兄ちゃんなあ、言いたい事は分かつたけど、そら無理な話や。要約すると金はない、でも研究資料は欲しい。しかもウチをよこせつてソレはプロポーズかいな？ プロポーズするにしたかつて手ぶらで来る男なんて平民にもおらへんで？」

「娘の言うとおりです。我々もシリアス様のお陰で研究を続けさせていただいている身。なんの見返りもなく、成果を出せないまま、他人に研究資料を譲り渡すと言う事は出来ません」

プププ、お父^とん、頑張つてチワ力地方の訛り抑えて喋つとる。コレはおもろいわ。

まあ、お父^とんがおもろかつたから

楽しませてもうたちゆう事で、水に流したるか。

あとは、お引き取り願うだけや。

そこでこの坊ちゃんがおかしな事を言い出した。

「俺には確かに何も無い。けど、代わりに売るものがある」

はあ？ ナニ言つてんねん。自分で何も無い言つといて売るものがあるてなんや？ 家宝でも持ち出してきたんか？ そんじよそこらのもんじゃ、ウチらの眼鏡には叶わへんで。

「シユリアス、適性機かしてくれるか？」

「わかったよ。しかし、君も頑固だね。この親子が秘密を守らなかつたら、君はとんでもない事になるよ？」

「覚悟の上だ」

お父^とんとウチは意味が解らんまま、その坊^とちゃんが何か言つのを待^とつとつた。

「コレを見てください。俺はコレを貴女に売る。貴女は俺に人生の全てをかけて研究をしてくれば良い。その代わり貴女が持つてるドラゴンの資料を読ませて、生態の全てを教えてくれ」

坊^とちゃんはシユリアスの兄^とちゃんが持つてきた魔力の系譜を調べる適性機に両手をかざし、その結果をウチらに見せる様にした。

「これが何なん？ 兄^とちゃんが何の適性もないつちゅうだけやん、ウチらに適性探してつてお願いするんが兄^とちゃんの言^とつべき事や無いん？」

「なあ、お父^とん？」

ふと気がつくと、お父^とんは隣で無色^とに光る適性機の上部の水晶体を凝視しとつた。

「お父^とん？ どうしたん？」

「カナリー、ワイの研究室から10号適性機もつてこい」

「なんでやのん？」

「はよ行つてこい！」

「何やのん、もう」

仕方が無いのでウチは10号適性機を取りに行った。10号適性機ていうんは1〜10号まである適性機の中で一番詳しく適性を調べる事ができるもんなんや。

通常、魔力は一人一人いろがちがう。生まれただけの1卵性の双子ですら一緒になる事はない。

そして魔力の色が赤に近かったら火の系譜。青に近かったら水の系譜っていう風に大まかな系譜まで判断できる。ちなみに魔力を裸眼で見える人間が魔眼使いとして恐れられるんは、この魔力の色が見える為に相手の使う魔法の系譜が概ね分かるからなんや。

「もってきたで。お父^とん。どういう事なんや？説明してえや」

「お前はちよつと黙っとけ。坊ちゃん、こいつでもう一回やってみてくれ」

ウチは頬を膨らましながら目の前の兄ちゃんが適性機に魔力を流すのを眺めとつた。

真剣な顔はちよつとカツコいいかも・・・

な、何を考えとんねん、ウチは！？

「坊ちゃん、ワイにあんたの研究任せて見る気はないか？」

「ドラゴンの生態についてとことん詳しく教えてくれるなら構わな
い」

「カナリー教えたれ。命令や」

「はあ！？ 何でやねん！ 何でウチがそんな何の得にもならん事せなあかんねん！」

「ええから、この坊ちゃんはドラゴンより価値があるかも知れんぞ」

意味わからへん！ 何でこんな全く適性なしの、ひよろい兄ちゃん
んが……………

ッ！？ 全く適性がない！？ 完全に透明！？

ありえへん。今ここに、ドラゴンが落ちてくるよりありえへん。

「やっと気づいたか？ この坊ちゃんの魔力は無色や。混じりつ気なしの無色や。お前やったらこの意味分かるよな？」

「嘘やん。こんなひよろい兄ちゃんが……」

「ヒョロいはひどいなあ、それでも体が引き締まる程度には訓練もしてるつもりだけどね」

そんな事はどうでも良かった。ウチは黙って目の前の兄ちゃんを見つめるしか出来へんかった。

「坊ちゃんはかなり苦労したやろ？ 全く魔法を使われへんねやから」

「そうでもないですよ。家に恵まれましたから。世間では家から出れない無能者って言われてますがね」

「で、ワイにあんたの研究任せてくれるか？」

「貴方がそれでいいなら。俺が欲しいのはドラゴンの生態についてだから。それさえ手に入れば条件はどうでもいい」

「カナリー、ええな？」

「……かん」

「カナリー？」

「あかん！ 言ったんや！ お父んにはこの兄ちゃんはやらん！

ウチがもらう！ ウチが研究して、ウチはお父んを超えたるんや！」

「アホか、お前程度の腕でできる研究やないわ。お前はまだまだヒヨッコや」

「それでもウチがやるんや！」

「この兄ちゃんはウチが欲しいって言うたんや。ウチが研究して調べたドラゴンの生態の資料と一緒に。お父んの研究資料ちゃうでアレは！」

「坊ちゃんよ、何でドラゴンの生態についてなんや？」

「チワカ地方からドラゴンを追い払う為です」

「なんで坊ちゃんがそんなことをする？」

「お父んと！ ウチを無視して話し進めんなや！」

「やらなければいけない事だから、としか言えません」

その答えにお父んは両手を組み直し、ちよつとだけ天井を見上げてから。

「カナリー」

「なんや」

「お前がこの坊ちゃんを研究するて、何処ですんねん」

「え、それはここで……」

「ここはワイに、サルバルド・ブレイズに金を出してくれとる家や。カナリー・ブレイズにやないで」

「う……ズルいわ、そんなんズルい！」

「研究者はどんな手でも使うで、研究の為やったらな。研究続ける為には諦めへん根性と金があるんや」

「そんなんやから、お母はんに逃げられんねん！」

「うるさいわ！ それは今関係ないやろ！」

いがみ合うウチらを見てずっと黙ってたシユリアスの兄ちゃんが笑だした。

「あはははは。ホントに楽しい親子だ。クルカ君どうするんだい。

君はドラゴンの生態資料が欲しい、でも持っているカナリーさんはお金がない。ククク。」

シユリアスの兄ちゃんはいつもの人の悪い笑い方でクルカって呼ばれた兄ちゃんをみた。

「貴女は俺の魔力研究ができるんなら、この家をでれますか？」

「どう言う意味や？」

「研究する場所がここじゃなくても出来ますか？」

「かまへん！ 無色魔力元素の研究ができるんやったら、何処でもどんな事でもやる！」

「本当にどんな事でもするんですか、カナリーさん？」

シユリアスの兄ちゃんがいやらしい顔で聞いてくる

「やる！ 研究する為なら魂以外は売つたるわ！」

「らしいですよ、クルカ君」

「ホントに良いんですか？」

「チワカ生まれの女に二言は無い！」

「メイドでも？」

「やる！」

「……………妾でも？」

「やる！ ……え、ちよとま、『じゃ、決まりですね。クルカ君。準備が出来たら連絡ください。カナリーさんをお宅にお届けしますのぞ』ってって……………」

ふと気づくと『コイツ、アホや』みたいな顔してお父とんがウチを見てた。

「お前はとことん母さん似やのう……………騙され方まで一緒や……………母さんを騙したんはワイやっただけ……………」

「まあまあ、でもカナリーさんのドラゴンの生態資料は本物ですから。必要でしょうか?」

「まあな」

「じゃ、よろしくな、カナリーだから……カナでいいな。カナ、よろしく」

「わかったわ、しゃあないからなんでもやったる。でも研究資金ケチったらあかんで!」

「おう、いやあードラゴンの生態資料と一緒に愛人がついてきた。ラッキーだな」

「ちょ、ちよつと! なんでもって言うのはメイドとかそついで……」

……『チワカ生まれのオンナには一言は無いそうですから、良かったですね、クルカ君』……あんた等、ほんまいけずやな……」

「と、言うか、ワイおるんやで? シュリアス様も、親の前で娘を愛人にするとか言わんとつて欲しいんやけど……」

「先月のカナリーさんの研究費、ブレイズさんの今月の研究費から差っ引いていいですか?」

と行ってシュリアスの兄ちゃんはお父んに羊皮紙を見せると。

「クルカ坊ちゃん、カナリーを末長くよろしくお願いします。とうか連れてつて、もう戻さんという。ワイの研究でけへんようになるから」

と兄ちゃんに頭を下げた。

ウチ、先月そんなに使うたやるか……???

「しかし、クルカ坊ちゃん、ドラゴンの事やけど本気で追い返す方法考えるんやつたら、急がなあかんで?」

「どうしてです?」

「今、ドラゴンの出没してる地域周辺の村が、チワカの領兵に封鎖されていつてるらしいわ。近々、ここの国王陛下が王立第1騎士団連れてチワカのドラゴンのトコに行くらしくてな」

「せやで、ウチも研究の為に行こうと思つとったのに、暗殺者の防止とかなんとかいうて、閉鎖するから入れられへんって言われたんや」

「まあ、エルガルド公爵家なら入れるだろうから、申請だけは急いだ方がいいな」

「解りました。今すぐ帰って申請しておきます。どこへ向かえるようにすればいいですか？」

「ウチの乳母がおるフコクの村や温泉もあるいいとこやで」

「デタマ火山のちかくですな」

「解りました、申請に行つてきます」

「ドラゴンと会えるかどうかはともかくとして、行く準備はすぐにワイがしといてやるから。カナリーは坊ちゃん、転移門の使用許可とチワカへの入領許可を取つてこい。そうすりゃ、明後日にはフコクの村に着く」

「わかつたわ、お父^とん、いつてくるわ。ほら、いくで兄ちゃん」

「え、ちよつと。うわ、引っ張るな。カナ、待てつて。……シユリアス〜また後で〜」

「ブレイズさん、よかつたんですか？簡単に決めちゃつて」

「ん？ ああ、カナリーかいな？ どうせあいつにも研究者の血が流れとるからな。パトロンは必要になる。それがこの国の五大公爵家の一つやつたら、文句はない。ドラゴンに関してモカナリーの知識はドラゴンテイマー並みや、危険からはちゃんと逃げるやろ」

「いえ、クルカ君はかなり女癖悪いですよ？」

「なに！ そっちの意味でかいな！ シュリアス様！ そういう事はさきに教えてくれや！ …… まあ、でも大丈夫やるあいつも母さんの子や気に入らんかったら男捨てるくらい平気でしよるわ」

「ブレイズさんがされたみたいに、ですか？」

「そうや！ だからな？ シュリアス様。カナリーおらんくなるし、母さんここに呼んでいい？ やり直したいねん！」

「美人ですか？」

「手えだしたら、シュリアス様でもゆるさへんでえ！！」

「冗談ですよ。一応、妻に聞いてみます」

兄ちゃんと、移動しとる時に暇やったから聞いたんやけど。

「ところで兄ちゃん、何処まで無色魔力元素を扱えるん？」

「どういう意味だ？」

「何ができるん？」

「何もできない」

「は！？」

「空中に放出するだけ。それ以外できない」

「それって無駄に消費してるだけやん！ 戦闘は？」

「門番くらいならなんとか倒せるかも」

「門番って！ 下から数えた方が早い位やんか！ そんなんでどうやって、ドラゴン追い返すん！」

「だからカナリーの資料があるんだよ」

「あかん、お父ん。ウチ死んでまうかも……無色魔力元素はすごい

けど、何もできへんやなんて……」

「なんとかなるだろ？」

「なるかあ~~~~~!!!!」

第08話 白衣メイド落ち込む「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第08話 白衣メイド落ち込む「2」

お父^とん、お母^{かあ}はん、先立つ不孝をお許してください……
ウチは今、黄泉路への門をくぐろうとしています……

イメトウルの街から王都へと向かった、ウチと兄ちゃんは王都の転移門を抜けたところでお爺ちゃんな執事さんと合流してん。

「クルカ様？ こちらの女性は？」

「ん？ 愛人予定のカナリー。カナ、こっちはエルガルド家の執事のグリント」

「は、初めまして。魔力機構師のカナリー・ブレイズです」

「初めまして。グリント・プライムと申します。クルカ様の専属執事をさせて頂いております」

「カナリーさん、悪い事は言いません。クルカ様だけはおやめなさい。王都中に知れ渡っている『無能者』ですからあなたも変わり者だと思われてしまいますよ」

「いやいやいやいや、ウチは研究者なんで、この度お願いして研究に出資して頂けないかと……」

「ああ、なるほど。よかった、クルカ様にこんなに可愛らしい愛人ができるなんて、ドラゴンでも降ってくるのではないかと思いましたがそういう事でしたら安心です」

「グリント、お前絶対、俺の事、敬ってないよな？」

「なんと！ カナリーさん、お聞きになりましたか？ クルカ様は上辺の言葉に騙されて、このエルガルド家の執事である事に誇りと命をかけている、こ！ の！ 私がクルカ様を敬っていないなどと！ ああ、この世にはもう、女神も天使もいません。きつと神すらこの地上と私を、お見捨てになったのです」

「グリントうるさい。そして今すぐ、転移門管理塔へいくぞ」

やっぱり演技だったのか、執事はんは急に素に戻った。

「何故です？」

「カナと二人で温泉旅行」

「ちよつ、兄ちゃん、なにを……」

そこまで言った時に、兄ちゃんが執事はんに見えへん方の目で、目配せしてんのを見て、何も言うたらアカンのかな？ と空気を読む事にしたんやけど……

「さつきいったろ、チワカの温泉に今から連れていくつて。ちゃんと混浴だが貸し切れる処を確保するから心配するな。他人には見せん」

て、いきなりどない合わせていいんかわからへん、無茶振りしてきおってん！

「カナリーさん？ 本気でクルカ様と温泉旅行に？」

「えっと、はい。ほんまにチワカの温泉に行きます」

ウチは普通に返事するんでいっぱいいっぱいやった。

「クルカ様、男の責任の取り方、というモノだけはお忘れにならないようにお願いします」

「いい加減うるさい！ さっさといくぞ」

「ああ、お待ちください。クルカ様」

どこまでも演技臭い執事はんの行動をよそに、ウチらは転移門のあるホールの北側にある、転移門管理塔へ向かって行った

王都の一般用転移門は24ヶ所に繋がってる。

転移門のあるホールは、円形で中心にある案内板を王都に見立てそれぞれ24ヶ所の方角に、案内板を囲むように両開きのドアが立ってる。馬車が通れるくらいの大サイズのドアの位置は実際の王都から見た方角に合わせてある。

門自体は表も裏も観音開きで表から入ると向こう側へ、向こうから来る人は裏側へ出てくる。

そして、門は1時間ごとにくっつか同時に開く。今さっき、王都に門を抜けた時はイメトウルの街、ガルザツク都市、アケドウジの街、フロンド砦への扉と同時に4ヶ所への扉が開いてた。王都を経由しない転移門は8ヶ所ある都市にあるだけで街や村、国境砦にある転移門は必ず王都に繋がっている。

転移門ホールの付近には1時間後には次の門にはいる人がおる為北側は軍の屯所、西側は露天商通り、東側は休憩所（有料）、南側に宿屋などが集まってる。

次にウチらが行動するんはもう一度同じように開く、17時の開門の時。

一回開くと30分は開いたままやから、まず17時ちょうどにイメトウルの街への門をくぐる。

で、向こうでお父とんに荷物もらって、すぐにもう一回王都へ戻る。17時30分には閉まるからそれまでにアケドウジの街への門をくぐる。

そっからは歩きで2時間もすればフコクの村に着く。

それがこれからの予定や。

ウチらが転移門付近の個室休憩所で、今後の予定とドラゴンに関する話、無色魔力元素の話をしてるうちに、グリントさんが旅に必要なものを取りに行つて戻ってきはった。

「クルカ様、向こうで御泊りに？」

「野暮な事聞くな。カナが離すまで何泊でもする。下手したら1週間には帰つてこないかもな」

ウチが淫乱みたいに言うな！ ウチのせいにするな！ あ・ん・た・がドラゴンと会うんやろが！ と思つたけど我慢や。がまんや、ガマン！

グリントさんは非常食、着替えの量を兄ちゃんの言い方から調整してるようやった。

「チワカ地方には近々、国王陛下が行かれると聞いております。くれぐれも他の貴族の方との接触にはご注意ください」

「どおせ、国王陛下はアケドウジの街までしか行かねえだろ。王国の保養所もフコクの村とは正反对だしな」

「向こうの宿の予約はできませんでしたので、こちらをお持ち下さい」

と、言つて執事さんから重たそうな、カネが入ってるっぽい袋を貰つてる。後で、中見せてもらお……

「クルカ様、次に祖母様が王都に居らっしゃるのは9日後の予定です。それまでにはお戻りください。カナリーさん、よろしくお願ひします」

「あ、はい。できるだけはよ戻ります」

「行つてくるわ、あとよろしくな、グリント」

「では、行ってらっしゃいませ」

と、綺麗な姿勢でお辞儀する執事さんに見送られて、ウチと兄ちゃんは何も言わずに去っていった。

アケドウジの街に着いたウチらは、アケドウジの街の転移門管理塔で念話石を借りて、フコクの村におるはずの乳母に連絡を取った。

「婆ちゃん、久しぶり。今、アケドウジの街に着いたトコなんやけど、婆ちゃんトコ行くから部屋あけといて」

「カナちゃん、久しぶり。元気にしてた？ あと、お父さんも元気？」『どうでもいいけど』

「ドラゴンのせいで客なんか来よれへんからなあ。あけといたげるうちみたいな高級旅館じゃドラゴンに挑む冒険者でもほとんどは泊まりはらへんしなあ」

「婆ちゃんトコ泊まれる冒険者なんか知れてるやろ？ めっちゃお金持ちじゃないと」

「それよか、あんたはカネあるんかいな、身内やからまけたるけど最低限は払ってもらおうで？」

「大丈夫、ちゃんと出資者連れていくから」
バトロン

「そおか、ほな夕食の支度してまತ್ತるからね」

話し終わると待ってた兄ちゃんがドラゴンの事で話の続きを聞きたかったのか渡した資料を見ながら質問してきた。

「今回ドラゴンが来てる理由が、子供の為って言うのはどのくらい

の信憑性があるんだ？」

「ドラゴンは基本、単独行動やねん。ワイバーンとか下位種族はともかく。で、ドラゴンが群れるのは、メスに子供作らした時だけやねん」

「一夫多妻なのか？」

「そこはよく分かれへんけどメスばかりじゃなくて、生まれた子供の為に親の兄弟とかが集まってくるねん」

「子供が生まれるたびに集まってたら、すごい事になるんじゃないのか？」

「いや、特定の時だけ。ドラゴンの子供は、頭頂眼って呼ばれる第3番目の眼を頭蓋の頂点に持ってんねん。コレは目と似てるみたいで、水晶体、角膜、網膜があんねんけど、モノ見る眼じゃなくて特定の魔力を見て、念話するの為に機関らしいねん。この頭頂眼の眼は孵化してから6ヶ月ほどまでは確認できるけど、成長すると鱗で覆われて解らんくなるねん」

「なるほど、その頭頂眼は6ヶ月間だけ外から見えてるのか」

「それが、6ヶ月間で鱗に覆われへんかった場合が問題やねん。覆われへんかった頭頂眼は外気や光、もしくは戦闘なんかで壊れてしまったら、その幼竜は明確な思疎通の方法を失うって事になるねん」

「だから6ヶ月間で覆われなかった場合だけ、生まれた子供の為に親の兄弟とかが集まってくるのか」

「そや。意思疎通のできへんドラゴンは、ブレスの使い方も知らんままに育って、ただの魔物になり下がる。強さは魔獣やけどな」

「だから必死なのか、自分の子を魔物にしない為に」

「大抵のドラゴンスレイヤーの称号もつとるやつは、この魔物の方のドラゴンを倒したヤツやねん」

「魔獣の方を倒した場合は、頭頂眼が証明部位になるってことか」

「そや、しかも今、存在する魔法の発動体の中で最高のモンが竜玉。」

つまり成竜の頭頂眼やねん」

「今、この群れてる時にドラゴンに近づこうとする冒険者は、大抵子供の竜から頭頂眼奪うのが目的や」

「そりゃ、ドラゴンも怒って誰も近づけなくなるはずだ……」

「どうするん？ 一応、ドラゴンに意思疎通できるように準備してきたけど……どうやって、どっか行ってもらうん？」

「うーん、それを相談したくてカナと来たんだが……」

この兄ちゃん、結構行き当たりばったりで来とるな。

「たぶん国王はんも、国宝の頭頂眼はまっとうる道具持ってここにきてドラゴンと話しするつもりなんちゃうかな」

「先に会われたら終わりってことか？」

「たぶん、そうなるんちゃうかなあ」

そこまで話したところで、目の前に川があって橋渡しが居たのでお金を払って、渡る事にした。

「おっさん、ドラゴン出てるってのに仕事してんのか？」

「ドラゴンは私たちを襲いせんわ、襲うのはテリトリーに入ってきた者だけですんで」

「ま、そらそうやわな。ウチらより、ドラゴンの方が賢いし」

「しかも人間よりはるかに強いしな」

「そういう事です、最近、国王陛下が最強の騎士団連れてこられる事を聞いて、帰っていく冒険者が多いので、魚を釣ってる合間に橋渡ししてるんですわ」

「前はここに橋あつたよなあ？ おっちゃん知らん？」

「ここにドラゴンが集まって来はじめた時に小さめのドラゴンが橋に落ちてきましてなあ。つぶれてしまったんですわ」

「あーら。それで橋渡しの開業、か」

「ええ、おつと着きましたよ」

「おっちゃん、ありがとー」

「おっさん、帰りにまた頼むと思うから、そんな時まで続けといてくれよ」

「はい、ではまたよろしく」

川を渡ったウチらはフコクの村へ向かって歩き始めた。

それから30分もしないうちに、兄ちゃんが、『休もう、休もう』
と言い出した。

「兄ちゃん体力ないなあ」

「今は無理しないように気をつけてんだよ！」

「まあ、山賊ぐらいやったら、ウチの魔法で吹き飛ばしたるさかいに安心しときや」

「それはとても頼もしいな。出てきたらまかせるよ」

「でも、もうちょっと行ったら休憩しやすいトコあるのに」

兄ちゃんがその辺で一番でかい木の前に座り込もうとするのを視線の端に感じて、兄ちゃんの方を振り返って見ると……

「なんでかは解らないがここで止まらないといけない気がしたんだよ」

とかなんとか地面にに座り込んだ兄ちゃんが言い始めたけどウチはそれどころじゃなかった……

すぐそばの大木の枝の間から幼竜の（と言っても全長6メートルほど）顔がこつちを向いとつたからや。

「たまにあるだろ？ 勘が閃く？ 煌めく？ 時つてのがさ」

「そお、でも、ウチ、その第六感は二度と信じひん方がいいと思うわ……」

「なんでだよ！……？」

と叫んで兄ちゃんが顔を上げた瞬間、幼竜はビクツとおびえ、兄ちゃんはウチが震えてるんを見て、怪訝な顔をした。

そしてうちの視線の先を振り返って見て………

「うわあああああああつあああ……！」

「あほか！ 兄ちゃん！ 幼竜は戦闘経験が浅いし、知能もまだ低いから叫んだら、敵やと認識するやるが……！」

「カナ……お前の声のほうがかいぞ……！」

今度はこっそり囁くように言いよった。

【ギャオオオオオオオ……！】

幼竜は雄たけびを上げ、うちに噛みつきごとと首を伸ばしてきた。

あ、あかん、こんなところで死ぬやなんて、まだ研究もさせてもらってないし。

全部、兄ちゃんのせいや。兄ちゃんの無職魔力元素につられたせいで……

ハア、こんなことやったらお父んと一緒に研究しといたらよかつ

た。

ほんなら今頃まだシユリアスの兄ちゃんのトコでのんびり研究できとったのに。

まだお母^{かあ}はんにもお父^{とと}さんの仲直りしてもらってないし。

あ、宿に行くって婆ちゃんに言うたけど行けずじまいになってまうわ。

ごめんな婆ちゃん。

あとしたかった事は……

あ、まだウチ、乙女やのにこんなところで……

こんなことやったら王都にあるっちゅう、兄ちゃんトコの屋敷に一泊させてもらって、綺麗な部屋で兄ちゃんにでもあげれば良かった。

このまま死ぬなんてアホみたいや………」

「そりゃ、嬉しいね。生き残れたらすぐにでも貰うからな」

「あと、思考を口からダダ漏れにするのは死ぬよりアホっぽいと思っぞ………」

「誰があほやねん！ 死んでまうねんで！！ って………」

なんでや兄ちゃん！」

ウチの代わりに兄ちゃんが、右肩から胴体半ばまでを啜えられた………

第09話 白衣メイド落ち込む「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第09話 白衣メイド落ち込む「3」

なんでこんなに苦しいんか分かれへんかった。

ウチは自分がこんな人間やなんて知らんかった。

きつと自分の研究の為に色んなモン捨てる人間やと思ってた。

おかしい。合理的やない。割に合^あつてない。

今は、逃げるのが一番の選択のはずや。そうや、冷静になり。ウチとこの兄ちゃんはまだ出会って1日や。はつきり言つて赤の他人や。まだ何ももらってない。執着するほどの関係やない。

なのに、なのに！

なんで！ なんでウチは！

なんでウチの体は戦かおうとするんや！！

今のウチはおかしい。目の前におるんはさっきまでの幼竜やない。

完全な成竜や。挑んでどうにかなる相手と違つのに。

もう間に合わへんって頭が言つてんのに。

絶対間に合わせるって心が言う事きかん。

成竜の足元に『兄ちゃん』が横たわつてるから。

口は言葉を発するのをやめてくれへん。

心が逃げるのを許してくれへん。

『全ての母なる水と、涼やかなる乙女の無垢なる願いよ、』

ウチはお母はんが、いつかわかるて言うてた事を思い出してた。

『今こそ、その盟約に従い、我に仇なす全ての者を打砕き、無に帰す、無常の風と化せ、』

女は男にはできへん、子を生ず、全てを活かす存在やと。

『我を想う全ての者を守り、癒す、常住の河となれ！！！』

女はココ一番で男を守る生き物やと。

だから来るんや、ウチの全てを掛けて守らなあかん、男が今！
ここにおる！

『来るんや！！ 風水女王！！』

ウチの周りの時間が止まったかのように思える。

風が、水が、風の一時のように感じる。

風が、水が、風水女王を形作る。

それをゆっくりと流れる時間の中で見ながら昔の事を思い出していた。

お母はんから教えてもった。

上級精霊はみんな、精霊に通じる純粹な気持ちがないと呼ばれへん。

上級精霊は自分の持つ想いと同じような思いを持つ者にしか力を貸さん。

この精霊は処女の内に恋をして、呼ぶのに成功しないと呼べんよ

うになると。

お父^とんに懂れて、ウチは研究者になってもうた。

だから、精霊を研究対象^モとして見て、上級精霊はいつも答えてくれなかった。

どんなに精霊の持つ想いを知ってても、知ってるだけじゃダメやった。

この精霊の想いがどんなもんかは調べつくして、忘れられへんぐらい知ってる。

今なら分かる。自分が愛^{いと}しいと思う誰かを想う気持ち^が！
うちの中に、留まることなくあふれてる！！

「風水女王^{セイレーン}力を貸して！兄ちゃんを守るんや！」

【任せなさい、愛しい人を奪わせはしない。たとえそれが死神である^ろうとも】

上級精霊の声を聞いたんは初めてやったし、言うてる事はちよつと怖かったけど頼りになりそうな声に、ウチは安堵と魔力切れで気を失った。

【おいでなさい、ナイアデス、オレイアデス】

風水女王^{セイレーン}がそう言った瞬間、成竜と幼竜の周辺を水と風の二つの

竜巻が二匹の竜を身動きできないように縛り付ける。

2匹の竜は空気を奪われ、体の自由を奪われ、雄叫びすら上げられない状態に抑え込まれる

『何故だ！何故、人間ごときに呼び出された貴女がこの世界でここまで力を行使できるのだ！』

風水女王セイレーンはクルカとカナリーを抱き上げると二人に治癒の歌声を聴かせ、念話で竜に返答する。

【この娘がそれを願ったから。その為に、20年近くもこの娘が得られなかった気持ちの全てを私にぶつけたから。】

【ここまでの魔力と気持ちの全てをつぎ込む事はもう二度とできないでしょう。死ぬ覚悟がなければ。】

【ふふ、可愛い子。そこまでこの男が好きなのね。】

『人間の愛も捨てたものではない、そういう事か？』

【そうね、だから我々は、今でも彼女たちに力を貸すの。魔力と想いを対価にね】

『その男は、我が治そう。我も精霊とは争いたくはない』

【あら、もう降参なの？この子の想いまだまだこんなものじゃないわよ？】

『我にも守りたいものが居るのだ、今ここに』

【では、後は任せましょう、あそこに見える大きな屋敷に運んであげて？どうやら目的地のようだから】

『わかった。竜族の名に置いて約束は守る、娘が起きるまでの安全も保障しよう』

【あら、竜の掟で誓ってもらえるなんて。だったら安心ね】

【帰るわよ。ナイアデス、オレイアデス】

風水女王セイレーンがそう言った後、成竜と幼竜の周辺を囲んでいた水と風の竜巻は綺麗に消え去り、地面に大きな円形の後だけが残った。

『さて、約定を果たすでしょう』

ウチが起きた時はもう夕方だった。

周りは庭園でなんでウチがこんなところにおるんかが全く理解できへんかった。

周りを見渡そうとした瞬間、

『ゴアアアアアア!!』

と、真後ろから聞こえてきて、そおつと後ろを振り返り。

真ん前にある、ドラゴンの顔を見て、また意識をう失のうたんや

……

2度目の目覚めは婆ちゃんにたたき起こされてやった。

「ほら、おきな! もう体は良いはずだよ!」

『ニンゲン、いいのか、そのように乱暴にしても?』

「大丈夫だよ。ちよつとやそつとじゃ、死なないように育てたからね!」

「育てられたんは10歳までだけやんか! 今までずつとやないやろ!」

「ね？ 大丈夫だったろ？」

『確かに、ニンゲンもなかなか丈夫なのだな』

「つて、何、友達みたいにドラゴンとしゃべってんの！ 婆ちゃん！」

「失礼な娘だね。あんたとあの男を運んで来てくれたんだよ。」

「え、なんで？ ウチら戦っててんけど？」

『風水女王との我の名をかけた約定だ、娘。汝が起きるまでは守ると誓った』

「おかげで庭園はこのありさまだけだね」

見ると庭園は木々が半分ぐらい折れ、並んであったはずの庭石も壊れたり……

いや、現在進行形で幼竜が大きな庭石を爪で割って遊んどる……

『気にするな、自然はいつか壊れ、そして再生する』

「まあ。そうなんだけどね……」

『では娘、約定は果たした。我らは帰る』

「待って！！ 聞かせてほしい事があるねん！」

『何だ？ 娘。手短にな』

「なんでここに来たん？ やっぱりその幼竜の為？」

『そうだ、よくわかったな。娘』

「前に住んでたところに帰ってもらおう訳にはいかへんの？」

『この子の頭が治るまでは無理だ』

「どれくらいかかる？」

『あと1年ほどだ』

後ろで婆ちゃんが見込んで「ああ……旅館たたまなあかんかも……」とか言うてるけど今は無視や。

「なんとか短くできる方法はないん？」

『ふむ、長に聞けば何かわかるかも知れんが……何故、急がなければならぬのだ。自然に任せるのも自然の摂理だ』

「竜がいつぱい来たから、困ってる人がおんねん。ココに居る婆ちゃんもその一人や」

『ふむ、迷惑になっているのか。長に聞いてみよう』

「お願いするわ！」

『明日、一番日が高く登る時にもう一度来る』

「まってるで！」

『ではな、娘』

そう言うつと成竜は幼竜を抱えてどっかに飛んで行った。そしたら、後ろから声が聞こえてきてん。

「ふい〜。ビビった。起きたらいきなりドラゴンがいて、喋ってるとかマジでやめてくれよな。心臓に悪い」

「兄ちゃん……いつから起きとつたんや？」

「ドラゴンが帰るつて言った時」

「そか、ほんならしゃあないな、最後だけか。説明せなあかな」

「アホやな、カナちゃん、男に騙されるタイプやな」

「なんで？」

「ドラゴンが帰るつて言ったんはカナちゃんが引き留める前や」

「あれ？ ……ほんまや！ 最後には言ってない！ コラ！ 兄ちゃん！ ナニ自分だけ狸寝入りしとんねん！！」

「もうええから、カナちゃん。こういう男は言つても無駄やから。さっさと捨てればいいねん」

「それは無理な相談だな。カナはもう俺のもんになるつて約束した

「からな」

「してへん！ してへんで出資者バトロンなだけや！」

「なんでもするって言ってたよな？ 妾でもって言ってたし。ドラゴンと出会ったときは……『あ~~~~~！』……耳がいてえよ」

「なんでもない、なんでもないんやで婆ちゃん」

「まあ、もうどうでもいいわ。ドラゴンと風水女王セイレーンの話も聞いているし。離れられへんのはわかってるから、それよりあんたがカナちゃんの出資者バトロンで間違いないんやな？」

婆ちゃんににじり寄られちよつと焦りながら答える兄ちゃん。

「まあ、そうですが？」

「じゃ、コレは貰つとくから。」

と、言つて王都で執事さんにもらつてた袋を両手で抱えて、見せる婆ちゃんに兄ちゃんが食つてかかつてた。

「それは俺の金だろうが！」

「だから貰うんじゃないか。庭園の修復費と帰るまでの宿泊費にね」「それ渡したら所持金が0になるだろうが！」

「届けてもらえばいいんじゃないのかい？ 金持ちなんだろ？」

「そう簡単には……『兄ちゃん、兄ちゃん』……何だ。カナ」

「婆ちゃんは何を言つてもどうにもならん。諦めよ。ちよつとぐらいはウチ持つとるし」

「あの中は全部金貨なんだぞ……！」

「それでも婆ちゃんには勝てんから………」

「解つた。諦めよう」

「お、潔いいなあ。にいちちゃん。さすがエルガル……『ただし！』……え？」

「あれは、お前に払つた給金と研究費用だからな。今からお前には

メイドとか、その他色々働いてもらっからな」

「そんなん！ ずるいわ！」

「わたしやどつちでもいいよ。もう返さないからねえ」

「婆ちゃん！ 返して！」

「どうせ何でもするって約束したんだろ？ いいじゃないか何でもしてやれば」

「婆ちゃん！！」

「さて、婆さん、風呂はどこだ？」

「左の奥だよ。料理は期待しときな金額にみあう美味しいもんを用意してやるよ」

「ウチを無視せんとして！！ 婆ちゃん！！ 兄ちゃんも！！」

「カナ！」

「な、なんやのん？」

「もう給金も払ったんだ。兄ちゃんじゃなくて、御主人様！！」

「なんでやねん！！ まだウチは……『カナ！！』……うううう」

「女は愛敬。呼んだらいいねん、嫌じゃないんやろ？この兄ちゃん
で」

「うううう！！！！」

兄ちゃんは、唸るウチに近づいたかと思うとウチの手を掴んで引き寄せた。

「ほら、カナ。風呂行くぞ。婆さん混浴だろっな？」

「もちろんだよ。貸切さ。」

御主人様はそのまま、ウチを抱っこして風呂場へ連れて行くこととする。

「御主人様なんか、大っ嫌いや〜〜！！」

ウチの絶叫が旅館中に響き渡った……

第10話 老執事、悩む「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第10話 老執事、悩む「1」

はてさて、私はクルカ様の教育をどこで間違えたのでしょうかね。

なかなか、貴族の作法や風習に慣れないクルカ様のお世話は大変でした。

貴族に生まれ、貴族として育ってきたはずのクルカ様は知識は驚くほど吸収されるのですが、貴族の礼儀作法や習慣、言語については「どこの平民を拾ってきたのか？」と思うほど学習が遅かったのです。

そんなクルカ様を6歳の頃から、不断の努力で躰けて参りました。勉強で覚えるべき文字や知識を羊皮紙に書かせると、必ず訳の判らない記号？のような落書きを周りにたくさん書き、それを禁止すると禁止した授業での事はすぐに忘れてしまわれました。

おそらく、クルカ様は知能に障害があるのでは？と判断した私は、御当主であらせられるベルファスト様に相談しました。

一部の知能に障害のある子供は、その他の分野で天才的な才能を見せる事があります。そういった子供は独自の理解方法を持ち、他人には理解出来ない理論で物事を判断する、と聞き及んでおりました。

しかし、天才的な部分が現れる代わりにコミュニケーションに問題があったり、依存性が強くなったりと他人に利用されやすい人格形成をしてしまう危険性がありました。

それはこのラナルラ王国で5大公爵家として認知されている、エルガルド家としては非常に危険でした。

この国の王家と5大公爵家にはそれぞれの血を守る秘密があり、その血統の秘密を知っているのは王家と5大公爵家の御当主様方のみでした。

この国では誰もが知っている、ラナルラ王家の 聖鍵の守り人。一般にはあまり知られていませんが、私が存じ上げている血統の名前は、5大公爵家では

エルガルド家の 空の詠み姫、
ルードブラツシユ家の 時の語り部、
ソルフィツシユ家の 星の召き手
の3家。

現在では公爵家というよりも2大宗教となっておられるリスター教団（リスター公爵家）とメルベス教団（メルベス公爵家）については教団幹部の者でも知らされておらず、調べられませんでした。噂では 月 と 虹 の血統だといわれております。

（まあ、調べた事がばれればタダでは済まないのですが・・・）

広大なグランヴァイス大陸の中でも現在も保持されている血統は全てラナルラ王国に所属しています。

グランヴァイス大陸全体の100分の1ほどの国土しかないこのラナルラ王国が、立国から600年以上も王国を維持していられるのもこの6つの血統があるからだと言われています。

もちろん、それほどの力と意味を持つ血統を他の国が欲しがらないわけはありません。

しかし、何処の国も安直な誘拐などの行為に走らないのには訳があります。

この血統は、単純に血が繋がっていれば良いという訳ではないの

です。

血統を維持するには、限りなく濃い血統と血統の力を目覚めさせる育て方。

この二つが必要になります。それは10年、20年かけて行われるもので、血統の者をさらえばそれでおしまいという訳ではないのです。

ですから、血統欲しさにこのラナルラ王国を攻める国のとる方法は限られております。

単純な武力による制圧。

王国周辺の国々を制圧してからの経済的攻撃。

5大公爵家の勧誘、または洗脳。

（血統ごと王国を滅ぼすのであれば、圧倒的な数の暴力での殲滅が手段としてあげられますが、言うほど簡単ではありません）

しかし、

単純な武力ではソルフィッシュ家の 星の召き手 にはかないません。

（一人でドラゴン数匹と殴り合いができます）

王国はリスター教団とメルベス教団の血統により土壌が豊かで数十年にわたる自給自足が可能です。

（もちろん嗜好品や輸入品がなくなれば不満はどこかで出るでしょうが生きる、ということであれば問題ありません）

そこででてくるのが5大公爵家の勧誘となります。

（もちろん王家は勧誘など受け付けません。王家が滅びます）

他国には知られていませんが、王家を含め、5大公爵家は他国の貴族、王族との婚姻が決まった場合でも、絶対に王国を出しません。

それを知らない者たちは、婚姻による血縁関係の成立か、領地などを報酬とした勧誘を持ちかけていますが、ここ300年間成功した例はありません。

それでも、クルカ様とカラック様は幼少のころより誘拐されかける事も何度がありました。

ですから、もしクルカ様が知能の障害故に、依存性が強くなったり、他人に利用されやすい人格形成をしてしまった場合には暗殺、もしくは他の血統の末端者との結婚をさせてしまい、どこかの家に何不自由ない状態での幽閉という案が出ておりました。

そこで救いとなったのはのクルカ様は次男であらせられる事でした。

よほどの事がなければ当主にはなりませんので、どこかの血統の者との縁談、という事で決定されておりました。

ですから、クルカ様が、どのような女性とお付き合いなされようとも第一夫人となられるのは血統持ちの家の方のみ、と決まっておりました。

それを知ってか知らずかクルカ様は大変、気が多く、今も私の目の前でカナリーさんと乳繰り合っておられます。

どうして、こんなに気の多い方に育ってしまったのでしょうか。

「ちよ、ま、ちよつと！ まっつてば！」

「なんだ、カナ、いい加減覚悟決めろ」

「兄ちゃ、いや。御主人様、待つてって！」

「今、また兄ちゃんつて言ったな？ お仕置きだ」

「アカンつて、ちよ、ソコはあかんつて、あぁっ。もっお。聞いてつてば！」

あ、クルカ様がカナリーさんに殴られました。

しかし、カナリーさんもお馬鹿さんですね。不真面目さと色欲ぐらいしかとりえのないクルカ様と一緒に温泉など入られれば、こうなる事はわかっていたでしょうに……

「ほんまに今はアカンの！　ウチやつと風水女王呼べてん。魔力が戻ったらもう一回呼んで契約の確認とかへんとあかんねん」

「で？　それと俺を止めるのと何の関係が？」

ああ、クルカ様は御存じないのですね。風水女王を呼ぶのに必要な女性の肉体的な条件を。しかし召喚に関してもかなりしっかり教えたはずですが……

「せやからな、その、な、……してもうたら……呼ばれへんようになんねん」

「なんだって？　呼べなくなるんだ？？」

「もお！　わかってえや！　言うのかて恥ずかしいんやから！！」

仕方ありません、私がお伝えしましょう。

「クルカ様。風水女王は初めて呼ぶ時は女性は処女でないといけないのですよ」

「せやねん。だから今は堪忍して。呼べんくなったら困るから……え？」

「グリント、お前は知ってたのか？」

「一応、知識としては。水と風では男性が呼んでも水精霊か風精霊しか呼べませんが女性だけは両方を兼ね備えた風水女王を呼べるという事実は、実に興味深いものでしたから」

「な、な、な、なんで執事はんがココにおるん!!」

「混浴だからじゃないのか?」

「そうですね旅館の女将もエルガルド家の貸切なのでと案内してくれましたが」

「そやなくて!! 王都で別れたやん!!」

「おいおいカナ。いくら安全なルートだからって公爵家の俺が護衛も付けないわけないだろ?」

「そうですね、カナリーさん、ちなみにお二人が王都からアケドウジの街への門をくぐる時に一緒にこちらに参りました」

「そうでもなくて! 御主人様! 二人きりで入るんちゃうかったん!?!」

「まあ、どうせ入ってくるなといつても塀の外で待機してたりするしな」

「そうですね。そうしますね。ですが寒いので一緒にいらさせて頂ける方がありがたいですね」

「そういう事でもなくって、え、と、そや! ドラゴンに襲われた時は!?!」

「橋がなくなっている時は本当に困りました。舟渡しの方が戻ってこられるまで私は立ち往生してしまいましたから」

「ああ、それで幼竜が襲ってきた時いなかっただのか。お前そのうちクビに何るんじゃねえか?」

「それは困りますね。無事なのでから御内密にお願いします」

「で、婆さんには口止めは頼んでおいてくれたか?」
「はい、もしクルカ様がカナリーさんを愛人として困られるようでしたら全額持つていって構わないと伝えました。口止め料と修繕費と宿泊費にそれを当ててくれとクルカ様の荷物からお金を渡ししましたので」

「え？ どういうこと？ じゃあ……婆ちゃん全部知ってて御主人様とあんな話してたん！？」

「女将さん言ってるらしたでしょう。風水女王とドラゴンの話も聞いている、と」

「グリントが伝えたんだよな？」

「そうです。今まで呼び出した事がない事は女将さんも知ってたのしょう？ 風水女王の召喚条件を知っていたらわかりますよカナリーさんがクルカ様をどう思っているかぐらいは」

「条件？ 処女ってやつか？」

「いえ、対価の想いの方です」

「俺にも教えてくれよ」

「あかん！ 言うたらアカン！ ウチがいつかちゃんと教えたるから、今は聞かんとツて……！！」

「クルカ様、意地が悪いのではありませんか？ 知らないわけがないでしょうに」

「いや、焦ってるカナが可愛くて、つい、な」

「……………っ！ アホ……………！！」

あ、いい角度で入りましたね。王国一を狙えそんな良い拳です。

「ちなみにカナリーさんこちらをどうぞ」

「え？ バスタオル？」

「クルカ様の指示でしょうが、タオルでは隠れきつていませんので……………っっっ！ そういう事はもつとはよ言つて！！」

「男性に言われるのは恥かしいのでは？ と思ひまして」

「どつちもハズかしいわ！！ あんたら性格最悪や……！！」

「ちなみにな、カナ……」

クルカ様復活が早いですね。女性の裸体がそばにあると3倍強く

なるのでは？

それでもせいぜい部隊長ぐらいでしょうが。

ちなみに兵士は

一般兵

班長

隊長（門番）

部隊長

一般騎士

騎士班長

騎士隊長

騎士部隊長

王立騎士団員

王立騎士団班長

王立騎士団長

という風に上がってきます。

もちろんそれぞれに隊や団は複数ありますので数字が小さい方が
実力は上だとされています。一応。

「こいつは人間だが長命種だな。今は70手前のはずだが、基本3
分の1換算だから20歳ぐらいだ」

「なっ！ チカン〜！！ すけべ！！ 変態！！」

「年寄りになら見せても平気だったんですか……」

人間の長命種はエルフとは違い外見は100歳程度までは普通に
老けます。そしてその後、老けたまま350歳程度まで生きるの
です。

「見た目がじいじに似にとったから、安心しとったのに……」

「いいですね、じいじですか。私をグリントじいじとお呼びください」

「まだ20歳ぐらいなんやろ？ これから子供も作る気いやろうが！
なんでそんなんをじいじで呼ばなあかんねん」

「いえいえ、人間の長命種はもう60くらいで枯れますよ。もうすぐ私も孫ができますし」

「ほんまに!？」

「ああ、こいつの息子、こいつの血とは思えんぐらい真面目でかい甲斐のあるやつだぜ」

「真面目な人からかつたりなや……可愛そうやんか……」

「ところでカナリーさん、少し真面目な話ですが……」

「どないしたん？」

「避妊にはお気を付けください」

「ご、御主人様？ このじいじならぬ、爺いを殴っていいやろか……」

「カナリーさん」

私は声のトーンを落とし、威圧しながら話しかける。

「真面目な話です。クルカ様はラナル王国5大公爵家が一つ、
空の詠み姫のエルガルド家の次男なのです」

「あ、……………はい」

わかって頂けたようですねによりです。

「私はクルカ様がお望みなら、どんな手を使つても貴女がクルカ様のお傍に居られる様にしてさしあげましょう」

「え、そんなんでええのん？」

「ですから、貴女もいつまでもクルカ様のお傍にいられる、クルカ

様が傍にいる事をお望みになる女性でいて下さい」

「あ……………えっと。はい。がんばります」

さて、ではそろそろ食事の方を確認しに行きましょうか。クルカ様もカナリーさんも目の前で毒味などされたくはないでしょうから。

「ではクルカ様、先に失礼します。食事はお部屋に運ばれるスタイルだそうですので先にお部屋でお待ちします」

「部屋も一緒なん？」

「いえいえ、そのような野暮は致しません。食事だけ一緒にとらせて頂くだけです。私だけは一人部屋をお借りしていますので」

「そうなんや。って。ウチが御主人様と一緒に部屋って事!？」

「当り前だろうが。俺のメイドの仕事とかいろいろ手とり足とり教えてやる」

「いや、なんか今違うニュアンスな気がしたんやけど？」

「では、失礼します」

軽くお辞儀をしてから脱衣所に向かいました。

「なあ、御主人様、いつからついて来るって知ってたん？」
「最初から」

「じゃあ、ドラゴンに襲われた時、助けてもらえと思ったから身代りになってかばってくれたん？」

「それは逆だ。グリントが一助けに入ってこないから……………」
「…」カナの命が危ないってわかったんだ」

「だから飛び込んだ。お前を失いたく無かったからな」

「じゃあ、ええわ」

「ん？」

「御主人様、乙女心が分かれへんとか言われた事ない？」

「ない」

「きつとそれみんな、遠慮して言わへんねやと思うよ」

「そうか？ けっこう人の気持ちは分かっているつもりだが」

「にぶちん！ ウチの為に飛び込んでくれたんと、助かるのがわかってたから飛び込んだんでは全然違やんか」

「ああ。惚れ直したってことか？」

「もうちよつと、言い方ないんかいな……」

「言い方なんざ何でも一緒だろうが。それより……」

「あ、ちよつと。バスタオル返して！」

「誰がこんなの捲いていいって言った。それにカナはさつき言ったよな」

「今は堪忍してってな」

「だからアカンって、もう！」

「そこまですなけりやいって事だろうが。感触ぐらい楽しませろ」

「もお！ このスケベ！ そのうち誰かに刺されんで！」

「そうだな、だから刺される前に楽しんどくか」

「なんでそうなるんよお……」

「死んで後悔したくないからな。あの時、もつと揉んどけばよかつたってな」

「もう、すきにしいや……疲れるわ」

「そう言えば、執事はん先に行ってもうたけど、護衛はいいのん？」

「ん？ ああ。この大きさの建物だったらどこにいてもグリントなら気付くから問題ない。それとグリントの事はじいじって呼んでや

れ」

「呼ぶのは別にええんやけど……あれ？　じゃあ風呂に一緒に入ってきた意味はないんちゃうん！？」

「カナが気にいったんだろう。だから、からかう為に一緒に入ったんだろ」

「ほんま、二人ともいい性格してるわ、ウチは見られ損や……」

第11話 老執事、悩む「2」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第11話 老執事、悩む「2」

いつから私は、こんなに執事らしくなくなったのでしょうか。

執事養成学校を首席で卒業させて頂いた時には、数多くのそれこそ国内外を問わず、引く手あまたの状態でした。

しかし、私はエルガルド家以外の家に仕える気はありませんでした。それが我が家の宿命でもありましたが。

エルガルド家に入ってからには御祖母様には可愛がって頂きました。先代の 空の詠み姫 であられる御祖母様はとていい方でした。

御祖母様が赤ん坊のフローリア様を連れてこられたのは私がエルガルド家に入ってから数年経った頃でした。

そして、御祖母様はその時からフローリア様はベルファスト様の嫁にするとおっしゃっておられました。

それから19年、私は厳しくも優しい兄のようにフローリア様にお仕えし、ベルファスト様との婚姻を見届けた後、没落貴族の再興の為、別の地方に向かいました。幾度となく王都に寄った際にはエルガルド家に顔を出し、御挨拶はさせて頂きましたがフローリア様と庭園でゆつくりと過ごさせて頂く機会は2度と訪れませんでした。フローリア様との婚姻から5年後。お二人がお子様に恵まれなかつた為、ベルファスト様は第二夫人のルーデシア様を娶られ、そして2年後にカラック様を先にお産みになられました。

その一年後、クルカ様をお産みになったフローリア様はクルカ様と引き換えにお亡くなりになりました。

当代の 空の詠み姫 であられたフローリア様の訃報を受け取っ

た年から、私は20年計画だった再興計画を15年で終わらせて、フローリア様が亡くなられてから6年後にエルガルド家に戻り、当時6歳になったばかりのクルカ様にお会いしました。

その年はちょうどエルガルド家が「六血会議」から一時的とはいえ脱会が決まった年でした。

王家と5大公爵家の会合、「六血会議」は当代の血統者が集まって行われるものでした。

先代の 空の詠み姫 であられる御祖母様は不在の当代の 空の詠み姫 の代わりを務められました。ついにエルガルド家は一時的に「六血会議」を抜け、次の 空の詠み姫 への継承準備に入るとお決めになりました。

エルガルド家の 空の詠み姫 は女性にしかなれない為、エルガルド家の血縁の中から覚醒遺伝的に血統の濃い者を探し出すか、ルーデシア様は全くエルガルド家の血をひいていない為、ベルファスト様と励んで頂く他に方法はありませんでした。

その為に、第二夫人のルーデシア様が第一夫人として扱われる事になり、エルガルド家にとって 空の詠み姫 継承者の選定が急務となりました。

それから十数年、今では御祖母様もベルファスト様も血統の濃い者を探すよりもルーデシア様がお産みになるよりも、カラック様とクルカ様のお二人がどなたかを娶られ、娘が生まれる事に希望を託されているようでした。

カラック様とクルカ様、お二人の様子はまるで正反対でした。

文武両道でエリートと目され、名家の血をひく方のみと清廉潔白

なお付き合ひして子を生す環境を作られるカラック様。

やる気は皆無で無知無能と呼ばれ、誰かれ構わず、美しい女性に目がなく後先考えぬクルカ様。

そんな二人でしたが御祖母様は何もおっしやらず成り行きを見守っているようでした。

そしてカラック様の成人の儀を前にエルガルド家では珍しく兄弟喧嘩が起りました。

ですがクルカ様はその二日後に美しい女性と温泉旅行に出かけると言つて出て行き、家中の者を失望させました。

私とエヴァンを除いては。

「さて、そろそろ真意をお話し下さい。クルカ様」

「なにが〜?？」

「隣で酔いつぶれているカナリーさんのフトモモに手を伸ばすのはやめて、きちんとお答えください」

「みんなが娘を作つてほしそうだからこうやって可愛い娘と頑張ろうとしてんじやん。ねえーカナ」

フトモモをなでられるのがこそばゆいのか、眠ったままの状態でクルカ様の方に拳を突き出すカナリーさん。

「お隠しになられるのはもうおやめ下さい。フローリア様に誓つて、私はクルカ様について行きますから」

フローリア様のお名前を出した時、一瞬だけクルカ様の顔が真面

目なものに変わるのを私は見逃しませんでした。

「ふう〜。グリントは優秀すぎるから嫌いだ。隠すのも一苦労だ」
「ですから隠さないください。何の為の執事ですか」

「今は言えない、でも9日以内にかたをつける。それまでに何があつてもついてくるのかを、決めておいてくれ」

「ですから何度もいいますが……」なにがあつても、だ『……どの程度でしょうか」

「王国を敵に回すかもしれない。その時は国を出る」

「まさか、どこかの国にそそのかされて……」

「違う違う。母さんの中に勝手に転がりこんじまった俺が、母さんの息子である為に。母さんの命をもらって生まれてくる事が許された、俺こそが母さんの息子だと知らしめる為に行動するだけだ」

「別に反逆とか、転覆とか狙ってるわけじゃない。ちょっと、頑張ってみる気になったけど成功しても怒られるかもなあ、ってぐらいだ」

「よくわかりませんが、反逆や国家転覆を狙っていないのであれば問題は……」
『グリント、お前のもう一つの仕事』……え？

「もう一つの仕事だよ、俺が1歳の時に聞かせてくれた、もう一つの仕事」

「それ、は……」

「言えません。ですが何故クルルカ様がその事を……」

「今は聞かない。お前がついてくるならお前のその事も関わってくる、お前がついてこないならエヴァンをひきこむ」

「なぜエヴァンを？」

「元山賊だから、昔の力を借りることになる」

顔には出さないように必死に抑えましたが、その事實は、フロリア様と数名の方しか知らないはず……

「クルカ様、あなたはいつたい……」

「今は言えない。何年後かに動き始めるその時までには黙ってついて来てもらうしかない」

「カナはその為の重要な研究者だ。だからここにも連れてきた」

「……わかりました。これだけは教えて下さい。貴方はフロリア様を悲しませるようなことはしませんか？」

「しない。引き入れる者はすべて幸せにして見せる。他人には迷惑をかけちまうかも知れないけどな」

「ではもう一つ」

「おいおい、欲張りだなグリント」

「ドラゴンとの事をどうするかだけは私にも参加させて下さい。主に執事の不注意で死なれては面目が立ちません」

「わかった。だけど詳細は聞くなよ。抜けられなくなるからな」

今思えば、私がお仕えるエルガルド家の意向よりも、成人の儀すら迎えられていないクルカ様の意思を尊重するなど、あり得ない行動だったかと思いますが、何故かその時はそれが正しいような気がしたのです。

「ところで御主人様、いつになったらウチは起きていいん？」

「ん？ カナが俺に触られていたい間は寝とけ」

「そんなん最初っからないわ。アホ」

カナリーさんが話し始めた事で、初めて起きていらっしやる気配に気が付くなどと……どこまで私は、クルカ様の言葉に動揺しているのか……

「起きて、いらっしやっただんですか」

「ごめんなあ、じいじ。フトモモ撫でくり回されて、起きてんけど御主人様がフトモモに寝た振りしとけって書くさかいに……って、いい加減、撫でんのやめて」

しかし、これまた良い角度で顎をとらえていらっしやいますね。

「グリント、悪いがお前の見てたところからでいいからドラゴンの事話してくれ。カナも明日に備えて考えるぞ」

「わかったわ」

「わかりました。私が見たのは、幼竜にカナリーさんが中級精霊ですか？ を出して御主人様を吐きださせたあたりです」

「そこからなんや。えと、その時に攻撃あてたところが頭やったから、幼竜が喚き散らしてな」

「おいおい、頭頂眼があるって言ってたとこじゃねえか」

「じゃあないやん。吐き出させるのに必死やったし。で、声を聞いたからというよりもと迎えに来てたんやろうな。すぐそばに成竜が降りてきて」

寝てる振りで騙した、カナリーさんに仕返しを………

「カナリーさんが『兄ちゃんを殺させへん！』とかいろいろ叫んでましたね」

「うそや！ そんなこと言うてないで！ うちが『ウチの全てを掛けて守らなあかん、男が今ここにおる』って言うただけや！」

「そっちの方が恥かしいと、私は思いますが？」

「どっちでもいいんじゃないか？ カナリーが死ぬほど俺を愛してるのは伝わってくるから」

「ううううう！ もう話したれへん！」

少しすつきりしましたが、そのままでは話が進みませんので。

「では私が。セイレーンを呼び出したカナリーさんが倒れまして、セイレーンの二つの竜巻の攻撃が始まり、そのせいで私も近づけなくなっていました。その後、セイレーンがお二人を抱えあげて、何か話していたんですかね、両方全く動かずじまいで。

どうしようか迷っているとセイレーンが攻撃をやめて消えました。そして間をおかず、幼竜と成竜が背中にお二人を乗せて飛んでいたのです」

「グリント、全く何にもしてねえな。お前」

「いやはや、面目ない」

本当に。あれでクルカ様が万が一にも、お亡くなりになっていれば、私はフローリア様に顔向けできなくなるところでした。そういう意味でも、カナリーさんは良くやってくれました。

「二人の荷物を拾い、ドラゴンが飛んで行くのに追いついて、この旅館に入り女将さんと話をしてから、お二人を見るとドラゴンが傍を離れませんので安全かと思い、周辺の見回りを済ませてお風呂に向かったという訳です」

「なるほど、でどう思う。カナ」

「なにがや」

「ドラゴンだよ」

「知らん」

「おい」

「勝手に考えればいいやろ」

「何怒ってんだよ」

「研究資料は渡してるんやから詠んで考えや」

「カナ。怒ってんのか？」

「クルカ様、拗ねておられるのでは？」

「ちやうわ!!」

「怒ってんじゃないか」

「そのようですね」

「ちやう!!」

私は少し考え……

「恐らくですが……研究者として連れてこられたという事実から、クルカ様と自分の行動の温度差に気づいてしまったのでは？」

要するに、自分は命をかけてしまつぐらいに好きになつてしまつたと気付いたのにクルカ様の気持ちがそこまでではないように思えて拗ねている。といったところでしようが、それをそのままは伝えられませんしね。

「あくさっきの言い方が。グリント、お前すごいな」

何事にも言い方、というものがあるのでございますよ。クルカ様。

「これでも二人の妻と4人の子供がいますし、もうすぐ孫も生まれますので」

「伊達に年食つてねえなあ」

しかし、クルカ様は世話が焼けますね。

「クルカ様。こういう時は男が行動しないといけません」

「お、そういうもんか」

「じいじに言われてなんかしてもらっても嬉しくない！ なんでも執事任せにする気か！」

「悪い、グリント。食事、片付けてもらえるように女将さんに頼んで来てもらえるか？」

席をはずしてくれという事ですね。わかります。空気ぐらい読めませんと妻二人は娶れませんから。

「わかりました、では行った後何か書く物を用意してから戻ります」
「助かる」

そして、部屋を出て30分くらいは誰も部屋に行かないように部屋から少し離れたところで考えをまとめました。

とりあえず、クルカ様は幼少のころに聞いた事まで覚えている。

そして何かカナリーさんと研究をして自分たちを認めさせフロリア様の名声を取り戻そうとなさっている。

いったい何を考えていらっしやるんでしょうか…

第12話 老執事、悩む「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

と、クルカ様の続きをカナリーさんが楽しそうに続ける。

「クルカ様、私は執事として、あなたに6歳から知識をお教えしてまいりましたが、全てどこかに置いてこられたのですか？」

「はい、それ以上の説明はしない。あとは……お前の覚悟が決まってから聞け。いいなグリント」

「 わかりました……」

聞く資格が、今は無い。という事ですね……

「では、明日はどうすればよろしいですか？」

「部屋で待機だな。ドラゴンとはもう戦闘もないだろうしな」

「せやなあ、ウチは午前中に温泉でセイレーンの契約確認しないと」

「なんで温泉でするんだ？」

「クルカ様、精霊の元素が豊富にあるところの方が、使用される魔力の消費が少なくなり持続時間が長くなるのです」

「御主人様、今まで勉強ちゃんとしたん？」

「いや、俺は魔法使えないから知識が偏ってたんだよ。実際使ってみて、感じる事とかは全然わからないし」

「そういう事ですか。教えるときも、実践から実感できる事は、さっさと流す事が多かったですから」

そういう意味では前任者などの教え方も最悪でしたね。

「それじゃ、明日に備えて俺とカナは寝るから。お前もほどほどに休めよ」

「もう、ちょっとだけ理論書くから、羊皮紙とか借りていい？
じいじ」

「かまいません。では私も部屋に戻ります。おやすみなさいませ」
軽くお辞儀をし部屋を退出する。

扉の向こうから『さ、続きだ〜カナ〜、逃がすかあ!』とか聞こえましたが、セイレーンの事もあるので大した事にはならないでしょう、と考え部屋に戻る。

そして考えをさらにまとめる。

幼竜をクルカ様の魔力の素を使い、治す？

治癒魔法すら使えないクルカ様には無理だ。

頭をひねり魔法の基礎を思い出してみる。

魔法は一般的に大きく分けて

精神魔法

精霊には呼び掛けず魔力を直接放射する事で結果を引き出す

浮遊魔法・物体移動魔法など
テレキネシス

元素魔法

下級・中級の精霊に働きかけ魔力量に応じた元素の結果を引き出す
ファイヤーボール、サンダースピアなど

精霊魔法

上級精霊に魔力と想いをささげ力を借りる魔法、魔力量だけではなく籠めた思いが強ければそれだけ大きな結果を引き出す
精霊召喚など

神聖魔法

神に祈りと魔力をささげ力を借り精霊を介さない奇跡を呼び起こす
ヒーリングなど

暗黒魔法

悪魔に魔力と魂の一部を譲渡し様々な結果を引き起こす
隷属魔法、死の呪いなど

古代魔法

特殊な文字で物体に結果の指定を刻み込み、そこに流された魔力
の素の量が文字に行きわたった時に結果を発動する魔法

転移門、念話石など

の6系統に分けられます。

どの魔法にも共通して言えるのは全て魔力の素を必要とする事。
魔力の素に自分の思考を反映させ魔力として放出します。

魔力の素である段階では体の中にあり一粒一粒はごくごく小さな
ものだと言われています。

そこに自分の意志の力を反映させる事で魔力として増殖しどのよ
うに使うのかを意思の力で反映させて初めて放出されます。

放出された魔力は反映された意思に従い、結果を出します。

精神魔法、元素魔法、古代魔法は使用される魔力の素の量が結果
に直接反映されます。

火の球を一個しか作れない量の魔力で2個になったり大きくなっ
たりはしません。

精霊魔法、神聖魔法、暗黒魔法はそれぞれの対価となる『想い』
『祈り』『魂』を多くこめる事で魔力の量以上の結果を引き出しま

す。

精神魔法の治癒は自身の治癒能力を込めた魔力分だけ引き出しますが、神聖魔法の治癒は同じ魔力量でも治ったという結果を奇跡で無理矢理、引き出します。

どのようにしてか幼竜を治す方法を考えたという事か。

しかし、クルカ様の魔力の素を使うと言っていたが、魔力の素はすべての生き物で違う、他人の魔力を使って治癒させるなどは不可能に近い。

魔力の譲渡も不可能ではないが効率が悪い。

全く魔法が使えないのに魔力だけは山ほどあるといっても譲渡の段階でかなりのロスが発生する為、譲渡される力は一部だろう。

それでは1年かけて治すと言っていたものは治らない。

カナリーさんの研究が一体、なんなのかわかればもう少し判断もつくのかもしれませんが……

カナリーさんは確かイメトウルの街のシュリアス様の所にいた方ではなく、念話石で連絡し聞いてみましょうか……

いや、クルカ様は私に覚悟を問われた。

私がすべきことは、覚悟を決める事だ。

どちらの結果になるうとも。

翌日、お昼過ぎにドラゴンとの会談が終わったクルカ様は結果を教えに来て下さいました。

「喜ベグリント！ 万事解決の上に、一生できない体験ができるようになったぞ」

「どういうことでしょうか。それだけでは訳がわかりませんが」

「じいじ、御主人様にどんな教育して育てたん？ 普通じゃないで？ かなりヤバいで？」

「何か危険な事になったのですか？」

「危険などないぞ！」

「危険はないんや、確かに。危険はないけど！ 普通の神経じゃ無理や！」

「どうなったのですか。いったい何が？」

私は本当に訳がわかりませんでした。

「滞在日程はあと7日、今晚から作戦は実行される」

「ウチは帰らしてくれへん？ もあ、お父^とんのトコに帰るう…」

「何をいつてんだ。ただ温泉入ってるだけだぞ？ 暇でしょうがないからカナで遊ぶに決まってるだろ」

「そこはせめてウチ『で』、じゃなくてウチ『と』って、言うてえや…」

「毎日毎日、温泉で裸の付き合いだな、その間に研究できる事はやつとけよ。カナ」

カナリーさんの落ち込み様の意味がわかりません。クルカ様はこんなに楽しそうなのに。何故でしょうか？

「よく分かりません。毎日温泉に入るのが退屈そうなのは分かりま

すが……」

「ちやうねん！ 毎日時間が許す限りずっと温泉に入るねん」

「しかも！ ドラゴン数匹と一緒にやねん！」

「グリントも強制参加な。カナ。水着とか着用不可だから」

……え？……

ドラゴン数匹と温泉に入る？

7日間も？

私が？

「何故そうなるのか、今すぐ！ 教えて下さい。でなければ、私は今すぐに、ここを立ち、王都へ戻ります」

「覚悟、決まったか？ 聞かせてやってもいいけど。答えてもらうぞ？」

「うう〜じいじ、ウチ連れて王都に逃げて〜」

ええ、カナリーさん、それが可能ならすぐにでもそうしたいところですが。

「ちゃんと婆さんに頼んで、足だけつかる足湯とか、手だけとか、砂風呂とかいろいろ用意してもらおうから」

ですが、楽しそうなクルカ様には生贄えが必要なようですね。

「私は、まだ結果を出せていませんので、王都に帰って考えます」「じいじ。ずるい〜！〜！」

ええ、なんとも言ってお下さい。

「お前が護衛だって勝手にくっついて来たんだろっが。相手はドラゴンだからな。ちょっとした事故で俺が殺されないようにグリントは護衛だ」

「……………私はお仕える方を間違えたのでしょうか……………」

後悔がこれほど強く襲って来たのはこの時が初めてでした。

そして私は、今、あの狐モドキをどうするか話すというクルカ様に連れられ執務室へルシイさんと一緒にやってきました。

「さて、グリント。結果的に4年も待たせて悪かったな」

「いえ。では、やっとお話しして頂けますか」

「ああ、エヴァンも帰ってきたらメル以外には話す。ミルはエヴァンしただいな」

「ミランダさんの事も御存じでしたか」

「あの、ご主人様、グリント老、いったい何のお話をされているんでしょう?」

「ルシイ、お前にも俺のところの夜、来れない日に何をしているのかを、話してもらおう事になるから覚悟しとけよ」

「!!!!!! それは……………」

ルシイさんが不安そうに私を見ます。

相手がクルカ様になると途端に技術レベルが下がりますね。この娘は。もう少し指導が要りますか…

「さあ、まずはカナとの研究についてだ……………」

第13話 庭師は笑う「1」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

前で呼ぶといつも胸揉まれてる……」

「あつはっは！ 認められてねえんだよ。エルガルド家の使用人としてな。そして、認められなかったやつは大抵、ギャンブルでやめていくとか……問題起こすとか……実は盗賊か暗殺者だったとか……」

その言葉を聞いたメリーの瞳の中に動揺の色が混じったのを、俺あ、見逃がさなかった、 - 10点。

「ま、メリーちゃんの場合は、そのおっきな胸が気にいって、揉んでただけだろうがな」

「た、ただのスケベ妖怪だったんですね」

「その辺はクルカ様と一緒にだ。昨日は可愛がってもらったんだろ？」

後半は小声で聞いてみる。

「な！ ちょっと胸揉まれただけです……！」

感情が顔と声に出すぎ、演技でも大げさすぎだ、 - 10点。

「おいおい、飯屋で大声で言う事じゃないな。それに、ホントにちよつとか？ あのクルカ様が？」

「ううう。セクハラです！ ……確かに1時間ぐらいずっと揉まれましたけど……」

演技じゃないっばいな、追加で - 15点。

「それより、ドラゴンの話の続きは、どうなったんですか？」

話を聞きたい事に戻すタイミングは悪くない、+5点。

「よくわからんが結局、クルカ様がドラゴンに感謝されたらしくてな。で、帰って行った」

「え？ ソレだけですか？」

「教えてもらえなかったからな。詳しい事は」

「ドラゴンに襲われて、命拾いして、温泉に入ってドラゴンと仲良くなって、王様にご褒美もらって……」

「わけわかりませんよお！ それじゃあ」

まとめ方が雑。盗賊ギルドが欲しがってるキーワード飛ばしすぎだ、-20点。

この時点で、-70点。残りは30点。ちょっと辛口だがどっちにしる落第決定。

こりゃクルカ様は抱かなかったな、本気で。

クルカ様は鼻が良い。ロクに話してない相手でも自分にとって必要か、そうでないかをかぎわける。

きつとカンでメリーの事も要らないって判断してるだろうな。

「国王様が来たところはグリントから聞いてるぜ」

「ホントですか。教えてくださいっ」

食いつきすぎ。まださらに下げる気か？ま、どうでもいいが。

「わかったわかった、料理がひっくり返っちまう。エルガルド家の使用人なら気をつけるよ？ ったく」

「あ、すみません。その習慣、慣れないんですよ……」

「まあ、あのベルモ屋敷は異常だけだな。でもクルカ様の屋敷でもそう変わらんさ。なんせ、クルカ様の母上のフローリア様が『食事は大切に。みんなで楽しく頂きましょう。』って人だったからな」

「でも、使用人と一緒に食事する貴族って珍しいですよね？」

「あんまり聞かねえな。中級貴族以上じゃ。下級貴族だとけっこういるみたいけどな」

「なんだかさつきから話がずれてばかりな気がします・・・」

お、気がついた、+5点。

って、もう採点もやめだ。無駄だからな。話してやるか。どうなったのか。

「結局な、国王様が来た時、王立第1騎士団も全員ついて来てたんだがその時に残ってたドラゴンは一匹だけだな」

「他のドラゴンは帰っちゃってたんですか・・・」

「ドラゴンが国王陛下にチワカ地方にきてた理由を話してたらしい。何を話したかは王様以外わからん」

「なんでですか？」

「魔獣との会話方法についてしらねえのか？」

こりゃ、授業をしてやらんとダメかもな。

「いえ、念話で話せるって聞いてます」

「じゃ、その念話がどんな状態で行われるかは？」

「え、念話石みたいなもんじゃありませんか？」

「メリーちゃん、そんなだと、胸の大きいオンナは頭はバカだとか、言われっちまうぞ？」

「胸は関係ないじゃないですかあ！」

「じゃあねえなあ。ちゃんと覚えとけよ？ 念話石みたいに相手の名前とか場所とか顔が表示されるわけがないだろ？」

「じゃあ、単純に声が聞こえるんですか？」

「声が頭に響くんだ。ドラゴンが国王とだけ話そうとすれば、国王にしか聞こえないし、選べるのはドラゴン側だ」

「はあ。」

わかってない顔だ。アホだ。適当に切り上げるか。

「とにかくだ、人間が精神魔法で念話しようと思ったら、特殊な才能がいる。ドラゴン相手限定なら、竜玉を使うかだ」

「それ、国宝ですよ？」

「だから国王がわざわざチワカまで行ったんじゃないか。国宝をホイホイ貸し出せるわけがねえだろ」

「ま、こっちから声を投げかけるだけならワイバーンの飛竜玉でもいいらしいがな」

「それでも高すぎて買えないような宝玉ですよそれ……」

「で、だ。竜玉ひっさげて国王様が行ったが、ドラゴンは一匹で、クルカ様に感謝されてる事と褒美をやってってくれて事。それを守ってくれたら、次からドラゴンが勝手に来る前に何らかの形で相談してから、行動してくれるって事になった」

「つまり？」

ホント大丈夫か？この娘……

「結果的には、王国は多少ながらもドラゴンとの共存の形を取れたって事だ。その報酬にクルカ様が望んだのが、このダントリン領と家を起こす事だ」

「なるほど〜でも結局、何をどうしたのかはわからないままなんですな」

「だな、国王様とクルカ様しか知らんだろう。ドラゴンと仲良くなる方法なんざ、わかったらありとあらゆる人間が欲しがらるだろうしな」

メリーは残念そうにしながらも収穫がなかったわけではないよう

で。

「もっといろいろ聞かせてくださいっ」

と直球で言ってきた。直球過ぎねえか？ しかも聞き方が漠然と
しすぎだ。

俺の事を話が聞きだせる力もだとか思ってたんじゃないか？

甘いねえ……暇だから簡単に調べられる程度の事までは話してや
るけどな。

しかし、この4年で勘もだいぶ取り戻せたな。

グリントに『クルカ様が行動される日の為に山賊時代のスキルを
取り戻しなさい。戦闘訓練も面倒を見ます』って言われた時はビビ
ったけどな。

しかし70歳近くで戦闘訓練って……俺アグリントとちがって、
短命種族なんだがなあ……

獣人の血が少しだけ混じってて良かったぜ……

「エヴァンさん！エヴァンさん！」

「ん？ ああ。ちょっと考え事してた。なんだいメリーちゃん」

「あの、あそこの女性が……」

見ると酔っ払った冒険者風の男二人に絡まれている女性がいた。
体のラインがよく分かる、繊細で美しい甲冑を身に纏った女が冷
静に文句を言っているようだった。

「ぶつかったのはすまない」と謝ったではないか。何故私がお前たち
に酌をしなければならぬのだ？」

「なんだとおく、人にぶつかっつていて騎士様ってやつは誠意を見せ
るって事を知らないのかあ……っく」

あれはきつと受けた依頼を失敗したんだろうな。荒れてやがる。じゃあねえ。

「おい。お前ら。その辺でやめとけ」

「なんだとおく、爺いは黙ってる！」

「そうだと引つこんでろ！」

「ったくめんどくせえなあ……」

「御老人、私の事なら構わないでくれていい。このよう……」

『ゴ、ゴンツ』……………「やからは……」

二人の頭をテーブルに叩きつけて眠らすと店の親父に声をかける。

「リヴァル、悪いが奥で寝かせてやってくれ。こいつらの飲み食いの料金はダントリン家にツケといてくれればいい。グリントが後で払いに来てくれる」

「任せときな。おい新入り、あの冒険者奥に運びな！」

それを聞いた若い獣人の男が二人を抱えて運んで行った。

「じゃな、こんな下町じゃ歩き方にも気をつけな、騎士のねーちゃん」

と手を振ってテーブルに戻ろうとした。が。

「待つてほしい。貴方は今、ダントリン家と言われたのだろうか？

御老人」

「ああ？ そうだが？」

メリーと差向いに俺は座りなおしながら、聞いてくる女の方に顔

を向ける。髪は紺瑠璃で結構長めだな。邪魔になんねえのか？ 騎士のくせに。いや、逆か。髪を伸ばさないといけない程、いいこの嬢ちゃんってところか。

「私をダントリン家まで案内してくれないだろうか？ 当主のクルカ・ダントリン殿に用があつて王都から来たのだ」

「え、えつと？」

どうしようか困っているメリーを放っておいて考える……

いや。考えるまでもねえ。グリントがもう少ししたら戻ってくるはずだ、グリントに案内させる方がいいな。

「そりゃかまわねえが急ぎの用か？」

「そう言う訳ではないが……」

「なら夕方までちょっとばかり、俺とこの娘の買い物に付き合ってくれねえか？ その間イメトウル街についてぐらいなら話ししてやるぜ？」

「いや、私はダントリン家に用があつて……」

ま、逃がす訳にも行かんわな。

「それに夕方にはダントリン家の執事と合流するんだ。言ってなかったが俺ア、ダントリン家の庭師のエヴァンだ。でこっちがメイドの……」

「メリーです」

「そうなのか、確かに、いきなり尋ねるよりは執事殿に聞いて頂いた方がいいか…… 貴方がたがダントリン家の者だというのは偽りではないのだろうな？」

「おいおい。この街じゃ有名だぜ。放蕩領主の庭師のエヴァンってな。なあリヴァル！」

「ダントリン家の酒飲み爺イの間違いじゃねえのか!？」

店の親父は大声でそう返してきやがった。すると周りからも

「ダントリン家の酒飲み庭師は薔薇と酒では右に出る者はいねえよな!」

「あいつに酒飲み比べで勝ったらダントリン家が酒代おごってくれるもんな!」

などと証明されてるのかどうだかわからない声援(?)を送ってきた。

「な?」

とにつこり笑ってやると、安心したのか騎士の姉ちゃんも笑って答えてきた。

「確かに。これだけ有名ななら騙ろつとする阿呆もいまい。悪いがよろしく願います」

「任せときな。メリーちゃん、となり座らせてやりな。騎士の姉ちゃんも座って食いな」

メリーは騎士と相席するという事にどのような対応をしているのかわかりかねているようだった。

「ほら、座りな。リヴァル! この騎士の姉ちゃんの分も適当に料理よこせ」

「今やってる。ちよっと待ってる」

「わかってるねえ。リヴァルは。お前さんもああい親父になれよ」

と、さつき冒険者を運んで行った新人が3人分のエールを抱えて、こっちに来た時に言っただけでやる。

すると、『もちろんです。おやっさんは目標ですから!』と言ってエールを置いて駆けて行った。

不思議そうにこっちを見ているメリーと女騎士に笑いかけながら話す。

「あいつは、2ヶ月前まで孤児だった。王都のスラムの、な」
「え!？」

スラムの現状を知っているのだろう。メリーが驚愕に目を見開いている。

スラムは一度入ると出られない、といわれるほどに厳しい。どの町にもある暗部だ。無くそうにも無くせない。

どっかの領主が強制的にスラムを撤去、焼き払ったが、焼け跡にまたスラムができた。騎士なんだから、その事実を知っているであろう女騎士も何も言わない。

「俺が拾ってな、クルカ様が執事を連れて行って、話をつけてくださった。で、クルカ様はココであいつに飯を山ほど食わせた後。お前も誰かをスラムから拾って飯を食わせてやれるようになって言っただけな」

「その時から、ココで働かせてもらってるんです! 俺! 料理人になります!」

料理を持ってきてくれた新人が元気よく言って、また戻って行った。

戻ったのを確認してから。

「それは偽善ではないのか？ 全てのスラム民を救えるわけではあるまい？」

「そうだろうな、偽善だろうな。それでも一人も救わないよりはいい。見て見ぬふりをすれば何かが変わるわけじゃない」

「そういう事がしたいのなら貴族なんだ、上にながって………」
それで上に染まって下を見なくなる』……………」

「違うか？」

「この街のスラムはどんどん大きくなって、そして逆に王都やその他の都市は小さくなって」

「無くなったりはしないでしょうけどね」

だまっていたメリーが寂しそうに言う。もしかしたらスラム出身なのかもな。という事は身分も偽装か。グリントに言つとかないとな。

クルカ様が胸を1時間も揉む程度には安全な娘なんだろうしな。

だまってしまった二人に、空気を変えるように努めて明るく声をかける。

「さ、ジメジメしてんなよ。あいつはココで笑って頑張ってたんだ。

客の俺達が楽しんでやらなきゃ、あいつも頑張れないだろ！」

「そ、そうですね。生きてればいい事ありますって」

「それは慰めているのか？ だとしたらもう少し言葉は選んだ方が
良いと私はおもうぞ？」

「ははっちげえねえ。ま、とにかく乾杯だ」

「もうっ。二人して馬鹿にしないでくださいっ！」

笑えるうちは笑ってりゃいいんだ、どっかで無理しててもな……

第14話 庭師は笑う「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第14話 庭師は笑う「2」

毎回、俺とグリントの市での買い物は苗を買うことだった。

後は4日ほど前から2、3日に分けてのグリントとルシイが持つて帰った戦利品オタカラを捌くさば為だ。

実は野菜の苗の方は取りに行くだけだ。今回は

苗を探すつてのは仕事に今後役立つような機構石や、魔導機構を組み込んだ掘り出し物を探すことでグリントとの符丁だ。

戦利品オタカラとして手に入れた者をカナリーが鑑定。使わない物なら鑑定書をつけて地下オークションに。

見つけた苗も骨董品として収集したとカナリーに鑑定を頼み、思った通りのモノなら仕事に使う。

いらなきや次の市に出す。

それがこのイメトウルの町に来てからの習慣だ。

この街は1日、11日、21日と、月に三回、表向きは骨董市として開かれるが、実際は盗品市だ。

鑑定書のある物は地下オークションで、無い物は青空市で、といったように分けられている。

もちろん普通の市もあるが、盗賊ギルドのメンバーが国中から集まって客に紛れ込むから、この三日間だけはスリも出ねえしゴタゴタもほぼ起きねえ。

グリントがここの盗賊ギルド連盟に伝手があるらしくこの街で困った事は一度もねえ。

グリントが顔になってる分、クルカ様はタダの無能者として扱われているがグリントの忠誠は本物だつてこの街に来た一年目に知れ渡

ってるから、屋敷に手エ出す馬鹿は、地方やどっかの国のちっせえ組織か、はねっ返りだけだ。

ま、その程度なら俺や、ミランダで十分だしな。

この街のダントリン家の屋敷は俺とミランダの庭だ。

屋敷をぐるつと360度囲む塀の高さは人間4人分。その内側から屋敷の本宅までどっから入ろうが歩いて五分かかる。

塀に作られた門は3つちようど円を3分割する形だな。

それとは正反対に3分割する形で地下に抜け道があるが、こいつは知られちゃいねえ。

カナリーの機構、ゴーレムと俺とミランダで作った。

そのうちの2本は町の外に繋がってるが、一本はリヴァルのメシ屋に繋がってる。

この屋敷の庭は（庭っつーより森？）は盗賊ギルド連盟に所属する盗賊ギルドの幹部が決まった日に幹部への昇格者の試験に来たりする。

試験は簡単。どっからでもいいが、一人で入ってきて中で待つてる幹部のトコに辿りつければ合格。無理なら失格。

しかし試験は言うほど甘くねえ。

当日は俺とミランダが360度全方位警戒してるし（これは風の系譜の力でやってる）ミランダも植物の中の精霊からも情報を得てる。

この庭に生えてる草木は熟知してるから事前のシコミも不可。

当日、持ってきた道具と自分の力だけが勝負だ。隠れて侵入するには相応の隠形技術がないと無理だ。

と、いうか、その程度もできねえような弱っちいヤツが幹部になつたって暗殺されるのがオチだ。

知能があれば、金があれば、とかはいうのはあくまで表の世界だけだ。

裏の世界で自身に力がないのに幹部や首領でいられるような組織は所詮2流、3流だ。

例外があるとすれば、本人に常につきかず離れずで超一流がくっ付いてる奴だけ。

ま、そんな超一流は俺ア3人しか見た事がないが。

っと、いけねえ。また考え事に集中しちゃってた。掘り出し物を探さないとな。

「おっさん、最近質落ちてねえか？」

目の前の露店のおっさんに聞いてみる。

「なんでもねえ、南の方の連合国で帝国の残党がゴチャゴチャしてるらしくってそっちに品が流れてるみたいでねえ……」

「ったく、また革命だの戦争だのおっばじめる気が……」

「どついう事だ？ そんな話は聞いた事がないぞ？」

騎士の姉ちゃんが聞いてくる。

「商人さんは耳が早いですからね。魔導機構関係の物が一部の地域に集まれば何かあると踏んで、みんなできるだけ商売の場所を離れたとこに移しますから」

「メリーとやらは物知りなのだな」

「わたしら商人にとっちゃ死活問題ですからねえ。敏感にもなりませよ」

「というか、メリーはそんなことまで知ってる事を俺の前で言うてもいいのか？ この娘、ホントにバカなんじゃ？」

「騎士団では、各都市長などからおりてくる情報をもとに動いていたが……」

「ちなみに、向こうのあのとても安いですが質の大したことはないお店は、王立騎士団に依頼されて来てる情報収集の為の商人ですわな」

おっさんは何も知らなさそうな騎士の姉ちゃんの為に話を始める。暇だったのだろう。

「そんな事までわかるのか？」

「ええ、むしろ商売人は利益を出す事以外に顔と名を売って、大きくなっていきますから」

「ま、利益目当てでもない、名前も顔も売ろうとしない、じゃな。売りに来たというよりは買いに来たってバレバレだわな」

俺がそう言うに乗ってくるおっさん。

「そういう事ですなあ。そして、すぐに周り人間から……」
『どこかで見かけたヤツだ』……『王都にいたぞ』……『騎士団関係者とも一緒だったな』……なあって情報が集まってあつという間に知れ渡ります」

「そういうものなのか……」

「まあ、あれは囷でしょうから。本命の情報収集員は他にいますよ」

と、本命の収集員であるおっさんは何て事ない顔をして、しれつと言つ。良い根性してやがる。

ま、木を隠すなら森の中。隠す木は一本とは限らないって事だな。

「また来るぜ。次は良いモノ仕入れといってくれよ」

「御主人、勉強になった。ありがとう」
「いえいえ、また寄ってください」

メリーと騎士の姉ちゃんを連れて他の露店を見て回ろうとした時、後ろからぼそつと聞こえた気がしたがまあ、知った顔なのでほうっておく。

「これでもAクラス冒険者が喉から手が出るほど欲しがる品なんですけど……一体どれだけレアな物を集めてるのか……」

「しかし、この街には初めて来たがけつこうな規模の市じゃないか。有名な名物になってもおかしくないんじゃないか？」

「そうですね、でも何故かあんまり人も集まらないんですよ」

「王都の市に比べりゃあ、人の集まりはすくねえわな。ま、しょうがねえだろ。ほぼ骨董市だ」

「なぜ骨董市だと人が少なくなるのだ？」

ま、分かるはずもねえわなあ……

「目利きじゃないと物が買えねえからだよ。そのクワ、そうそれだ」

その辺の店の露店の商品を騎士のねえちゃんに手に取らせる。

「それ、農作業によさそうだろ」

「ああ、しっかりした作りをしている。武器にもなりそうだな」

「畑を耕すだけで害虫を殺せるっていう代物だな。金貨300枚す

る」

「え、えええええ???」

落とさなかったのはさすがだな。店の親父が落としたら買わそうと目え光らせてやがったが。まあ、落としても俺が受け止めてやってたが。

「そ、そうなのか……値段は見た目ではわからない物なんだな……」
言いつつ、こわごわとクワを元の場所に置く騎士の姉ちゃん。

「まあ、魔力を食いすぎて普通の人間なら10分でぶっ倒れるから売れないがね」

「欠陥品じゃないか!」

「それでも研究素材として買うやつもいるってことさ」

「あ。メリーちゃんそいつはやめとけ。ホントの姿よりも美しく見せる鏡だ。騙す以外に使い道が無え」

「綺麗な鏡だと思ったのに……」

「ま、ルシイちゃんがこの街に来たばかりの頃に間違えて買って来たからな。屋敷にもある。なんでも落ち込んだ時に見る用に使ってるとか」

「なるほどです……」

「さ、とつと次行くか。あと3分の1見ないといけないからな」

「あ、待って下さい〜」

露店を出している商人達とは明らかにちがう冒険者の集団をできるだけ避けて露店を見ていく……

あれは転移門を使ってではなく馬車で旅してきた商隊の護衛達だろう。などと商人と冒険者達の事を考えながら……

商人が転移門を馬車で通過する場合は審査がある。通行税が個人で渡るときとは段違いに取られるのだ。

だから旅してくる商人もいるが、しかし護衛が必要になる。護衛を雇えば結果、転移門を使うのと同等の金がかかる。

じゃあ、護衛を雇わずに旅すれば？と思うだろうが、そういう商隊は必ず途中で盗賊に狙われる。

抵抗しなければ確実に、死人が出る事はないが、商品はすべて奪われるし、身ぐるみは剥がれる。かろうじて付近の町まで行ける程度の荷物とカネを残してすべて奪われる。女がさらわれる事も犯される事もないが。

だが、冒険者ギルドで護衛を雇えばそういった心優しい盗賊は絶対に出ない。せいぜい魔物ぐらいだ。

そういった盗賊を商人が討伐してくれるように領主や国に訴えても、探しはしてくれるが騎士団や領兵には絶対に見つからない。冒険者ギルドはそういう盗賊を討伐する依頼は握りつぶす。

つまりそういうシステムなのだ。

冒険者ギルドの護衛を雇っていない商隊に関しては襲われても、国も誰も関知しない。

そのかわり冒険者を雇う為に各都市の通行税免除制度まである。商隊を動かすほどの商売がしたければ転移門の通行税をはらうか、自力で旅して、冒険者を雇う。これが絶対的なルールだ。

たまに欲の皮の突っ張った商人が元高ランク冒険者を直接雇用し、冒険ギルドを通さないうで護衛にする事があるが、そうするともっと厄介な事が起こる。

今度は盗賊ギルドの高ランクの盗賊に暗殺依頼が行くのだ。その商人を潰せと。1度目は命は取らずに略奪だけの警告。2度目は全滅させて略奪。

なので商人ギルドが存在し、商人もそういった情報を共有する。

商人ギルドに入ると、そのシステムも教えられ、知っているものは間違ってもこのシステムから外れようとはしない。

そしてその心優しい盗賊達の元締め達が集まっている街が、このイメトウルの町なのである。

第15話 庭師は笑う「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第15話 庭師は笑う「3」

人間の持つ感情つてのは厄介だ。

時には感覚を鋭くさせてくれるが、基本的には邪魔なモノでしかねえ。

特に、盗賊や山賊といった者たちの中では。

「この街が骨董の町だというのは分かったのだが、領主であるクルカ・ダントリン殿はどういった人なのだ？」

「クルカ様か……メリーちゃんどう思う？」

「ただのスケベです。私がこの街に来てから3カ月ほど経ちますが、歌を教えてくれって言いつつ、デートに連れ出したり……」

「ああ、昨日は一時間、胸揉まれっぱなしだったんだっただか？ククク」

「それは言わないでください！ もう！」

しかし、盗賊ギルドの人間が3カ月一緒にいてその程度しかわからんとは、この娘が駄目なのか、クルカ様が巧いのか……

「胸、か。胸には自信がないのだが……」

横で騎士の姉ちゃんが小声で呟いてやがるが……色仕掛けでもしたいのか？ まあ、確かにこの姉ちゃんじゃ、な。胸はミランダよりはあるだろうが……

「安心しな。女は一か所で決まるモンでもない事を、クルカ様は知ってるよ」

「そうなんですか？」

「ああ、間違いない。俺がちゃんと教えた。胸の良さも、尻の良さも、足の良さも、髪の毛の良さも、顔の良さも、唇の良さも……」

「結局スケベじゃないですか！ クルカ様があんな方になったのはエヴァンさんのせいだったんですか!？」

「冗談の通じない、感情が出すぎだなあ。グリントは落第つてすぐ言いそうだな。」

「冗談だ、冗談。まあ、全体的にはよく分からない人だつていうのが本当だ。胸に関してだけいえばこないだ行ったギザッド娼館じゃ、ムファちゃんつて胸のそんなに無い子を選んでたし、それで降ちよくちよく、会いに行つてるみたいだから別にこだわつてはいないと思つぜ」

「そ、そうか。まあ、女性をそういう部分で判断するのは感心できないからな。そうじゃないならいいだろう」

「私としては娼館にちよくちよく行く、クルカ様とそれを止めようとしないうエヴァンさんにお説教をしたい気分ですが？」

「メリーはけつこつ純粹なのかねエ……処女か？ この娘。」

「ま、手は出すが困えないほどの甲斐性はあるだろうし問題ないだろ。実家の実家だしな」

「それはそうですが、なんか侍従長も、レイチエルさんも、カナリーさんも、みんな美人ですし、みなさん愛人候補かなんか何でしょうか。さすがにミランダちゃんは無いと思いますが……」

「ミランダちゃんはあれでも19だぞ？ いつ嫁に行つてもおかしくない」

「えええ。私と2つしか変わらない……12、3歳ぐらいにしか見えないのに……」

「それ、言つたらミランダちゃんに爪で引つ搔かれるから。気をつ

けな」

「はい！ 気をつけます！」

「屋敷の女性はみんな美人なのか？」

「どうだろうな、絶世の美女ばかりってわけでもないな。それよりも個性がある方が好きって気がするが……あ、そういえば」

「ちょっと、からかってやっところ。この姉ちゃんだと面白い事になりそうだ。」

「なんだ！？ 何かあるのか？」

「いや、ガルザック都市に海の民の歌姫が来た事があったろ？ 去年だったか？」

「さすがに私も歌姫は知っているな。すごく美しい海のような青い肌と流れるような金髪 of 絶世の美女だった」

「それがどうかしたんですか？ エヴァンさん」

「いやなあ。その歌姫を見に行ったクルカ様とルシィちゃんが帰って来たときにルシィちゃんは『綺麗でした……』とうっとりしてたんだがな」

「？」「？」

「クルカ様は『なんだよアレ、美人かもしれないけど……青白いなんで通り越して真つ青だぞ……ありえねえ……もしかすると、ダークエルフなんかマジで灰色なんじゃ……』とか言ってますっごい落ち込んでてなあ……」

「クルカ様は濃い青色とか灰色とか暗い色がお嫌いなんでしょうかな？」

「私の髪は紺瑠璃で、騎士にしては珍しく長くて綺麗だとみんなが、褒めてくれるぐらいなんだが……」

「いやーそれまではそんな話は聞いた事無かったんだけどな。とに

かくいろんな意味でよく分からん人だな」

「そうですねー。私はタダのスケベだと思いますが侍従長は『真面目なトコもありますッ』って力説してましたし……」

何やってんだ……ルシィ……

「そ、その侍従長というのは？ どのような方なのだ？」

「んー。私から見ると『完璧を目指してる侍従長だけど、まだ途中です』みたいな感じに見えます」

メリー。鋭いな。女の事は良く分かるのか？ 同性だからか？

「少なくともクルカ様がこの領地の領主になった時からグリントの野郎に侍従長として仕込まれてやがるからな」

「この街に来た時か…もう少し早く騎士になっていれば私も、クルカ・ダントリン殿に会えたのだろうがな」

「ん？ どういうことだ？」

「さっき私は王立騎士団の者だと言ったが、私は第1騎士団所属でな」

「すごいですねっ！」

「ありがとう。で、クルカ・ダントリン殿が行った、チワカ地方の件は私が入団する直前に起こった事だったので、顔も拝見した事がないのだ」

「ま、そのうち会える。もう少し待ってな」

「でも、最初からお屋敷にいる人以外、みんな追い返されるって言うのはホントなんですか？」

「そりゃ嘘だ。ミランダちゃんはクルカ様がこっちに来てから。しかも、エルガルド家からダントリン家に家が変わられてから雇ったメイドだ」

ただ単にクルカ様の眼鏡にかなう人材じゃないだけだ、とは言えねえよな。来るのは一応エルガルド家の使用人だしな。

「まあ、それ以外は全部追い返されてるが……」

「4年で採用は一人ですか……私も追い返されるのかなあ……」

ツたくメイドが本業でもないだろうに。

「追い返されても王都のベルモ屋敷で働くんだ、大差無いだろうが。あ、それともアレか？ クルカ様に惚れたか？ 揉まれたのが忘れられねえのか？」

「そ、そうなのか、メリーとやら。その、なんだ。そんなにクルカ殿は、その、上手なのか？」

「違いますっ！ 惚れてもいませんし、忘れられなくなってもいません！ といかむしろ忘れたいのに、エヴァンさんが何度も掘り返すから思い出しちゃうんじゃないですかあ！」

「そ、そうか。何度も思い出してしまうほどののか……私はそんな事に耐えられるのだろうか……」

おいおい、姉ちゃん、お前さん揉まれるつもりなのか？

「それもちがいます！ 私、何度も思い出したりなんてそんなハシタナイ事しません！」

「わりいわりい。怒んなよメリーちゃん。てか姉ちゃんも顔が呆けてるぞ」

「ハッ!? これは、失礼。しかし人数が少ないのでは家の管理も大変なのではないか？ わが屋敷は使用人が70名は居るぞ？」

「そこは上手くやってるさ。それにクルカ様の使用人に対する持論は『使用人は数じゃない、質だ』だからな」

「確かに騎士団でも似たような事を言われる。戦争は数を必要とす

るが、それ以上に必要なのは個々の質だと」

まあ、質が大事って言いたいのとは分かるが戦争と一緒にするなよ

……

「真理だと思つぜ。量でいいって言えるのは、代わりが利くモノだけだ。家と家族は代えが利かないって事だろう」

感情に揺さぶられている二人に冷静に言葉を返しながら、俺がクルカ様について行く事を望み、グリントに決断を迫った時の事を思い出していた……

「クルカ様、給金はそこそこでいいから俺を連れて行ってくれ」

俺は誰が声を出すよりも早く声を上げていた。

「爺さん、あんたには母さんの好きだった庭園を守って欲しかったんだが……」

クルカ様はそういつてくれるが俺の気持ちは変わらない。

「この屋敷にはフローリア様の好みに詳しい、妖怪ジジイがまだ生きてるし、腕の良い見習いが何人もいる。だが、クルカ様の好みを熟知してるのは俺だけだ。それに、だ。クルカ様の連れて行きたい料理人に、しっかり腕を振るわせるには俺が必要になるんじゃないのかい？」

その言葉を聞いた時にクルカ様は少しだけ驚いた顔をしたが、仕方無いという風に首を振ってから

「こき使うからな、覚悟しとけよ」

と言って、連れて行ってくれることになった。

すると、グリントが使用人達から一歩前に出てくるのを見計らってから。

「覚悟は決まったか。グリント」

「どこまでも、というにはいささかクルカ様は頼りないですが。私がないと女遊びの後始末もできないでしょう?」

なんて皮肉を言ってやがったが顔は笑ってやがった。

残りはほとんどの使用人が断り、三人だけは一年経ったら王都に戻る事を約束での話になった。

ベルファスト様もそれを了承され、俺、グリント、3人の使用人の5人が決まった時にカラック坊ちゃんから声をかけられた。

「おいおい、良いのか? クルカ。たった5人じゃ屋敷の管理が出来ねえんじゃないのか?」

「屋敷の管理に人数は関係ないよ、兄さん。この屋敷に住んでいたのなら解る筈だ。使用人は数じゃない、質なんだって」

それを聞いた使用人やグリントは嬉しそうだった。

その後、レイチエルを引き込んだクルカ様は黙ってルシイを見た。

ルシイはだんだんとみんなから見つめられ、プレッシャーに負け

たのか、声を張り上げた。

「私ではクルカ様のお役には立てません！ 私は、カラック様付きのメイド見習いです！ わ、私は！ わたくしは、わたしは……」

俯いて声がどんどん小さくなる。そんなルシイに少しずつ近寄り、クルカ様は声をかけ始めた。

「ルシイ。お前が見習いでも関係ない。俺なんか無能者だぞ？それに兄さんは関係ない。昨日約束したからな。俺のすることに口出しな……い」と

「わ、私はレイチエルみたいに、美人じゃないですし、背も普通だし、胸もおつきくないし……」

ルシイは言って悲しくなったのかさらに落ち込んでいるように見えた。

「それに孤児だから、クルカ様に妾に貰って頂く訳にも行きませぬ！ 名前に傷がつきます！」

「ルシイ、俺に貰われたかったのか？ さっきの夜伽の話は冗談だ。お前が望むならそうするが？」

クルカ様がおっしゃった事とレイチエルとの会話から本気で夜伽を求めているわけではない言う事に初めて気がついたようだった。そして自分が愛人になる前提で話を進めてる事に気がついたのか顔を真っ赤にしてしゃがみ込んでしまった。

「ルシイ、お前はレイチエルと一緒に俺が貰って行く。反論は許さない。いいな？」

カラツク坊ちゃんが何か言いたそうな顔をしていたがさすがに空気を読んだのか何も言わなかった。恐らく、まだ先日の件でルシイを嫌っているのだろう。

「どうしてですか。レイチエルは分かります。彼女は立派な料理人です。ちよつと乱暴だけどいいお姉さんです」

「それに比べて私には何もありません。何にも無いんです」
「そんなもん、もともとエヴァン爺さんにも無かった」

俺はいきなり名指しされビックリした。

「自力で時間をかけて、母さんの青い薔薇を今の状態にもっていったと聞いている。いつも見てた。どう見ても庭師じゃないような、腕も。体も。背中も」

感情が高ぶるのが自覚できた。

クルカ様は分かかっててこういう言い方をしてるんだと気付いた。フローリア様が隠して下さった、俺が山賊だったという事実を知っている。

俺は感情が高ぶるのを止めるのが精いっぱいだった。

グリントがこっちを見て薄く笑ってた。それを見て気がついた。あいつが昨日言ってやがったのはこうなる事を知ってたのか。

だから俺に『クルカ様が行動される日の為に山賊時代のスキルを取り戻しなさい。戦闘訓練も面倒を見ます』って言いやがったのか

……

クルカ様が知っていて、俺の力を借りたがっていると。

そりゃみんなの前では言えねえわな。言われても困るが。そんな事を考えている俺をよそに話は続く。

「何も無くてもエヴァン爺さんはエルガルド家の庭師になった。そしてこれからダントリン家の庭師になる。そうだな！ エヴァン！」

「その通りですとも。クルカ様」

叫びたい感情を抑え。ゆったり、そしてしっかりと答える。

「ルシイ、お前は俺の傍にいて侍従長を務める。お前に使用人の全てを任せる。俺の仕事の事はグリントに任せるからな。グリントと二人でこれからの俺の家になるダントリン家を支えてもらう」

「私にはできません……」

「できるようになれ、俺は、俺が、必要とするから一緒に来いと言っている。ルシイ・イルリア。足りていないと分かっているなら手に入れる。自分の中に育て上げる。お前が俺の傍にしようと努力する限り、俺はお前を傍に置いて、こき使ってやる」

「本当に、……」

「本当に私が諦めずに頑張ったら、ずっとお傍に置いて頂けますか？ クルカ様が望む結果を出せなくても？ 失敗しても？ わたしいつもカラク様にご怒られてますよ。失敗ばかりしますよ」

「だからどうした。俺は失敗どころか才能がなさ過ぎて失敗の前に行動すらさせて貰えなかった人間だぞ」

その言葉にはさすがのベルファスト様も少し苦い顔をされていた。

「わかりました。ご主人様。わたくしは貴方の為に、わたくしの全てを捧げます」

クルカ様の傍に近寄り、そう言いながら綺麗なお辞儀をしたルシイは、いつもより少しだけ自信がついた顔をしていた気がする。そしてルシイへの返事にクルカ様がルシイの耳元に顔を寄せ、

「胸に自信がないなら、俺が大きくしてやるし、俺好みの可愛い女にだって賤けてやるから心配するな」

と小声で言ったその言葉を、俺の良く聞こえる耳は、聞き逃してはくれなかった。

第16話 猫メイドは怯える「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第16話 猫メイドは怯える「1」

わたしはこの身を焦がす、この衝動に抗うのに必死だった。
なぜこんなに苦しい思いをしなければいけないのか全くわからない。
い。

しかし、この衝動を隠しきらなければ私は汚されてしまうだろう。
だから私は一人、『風にあたりに行く』と仲間に声をかけ、部屋
を出る。

このイメトウルの町の二つある丘の一つにあがる。

私はこの何もないドルルの丘よりも、もう一つの丘の上にある屋
敷の屋根の上がお気に入りだった。

だが今は、新しい領主が住んでいて、屋根に上がる事は出来ない。
仕方がないのでドルルの丘で我慢している。

周辺の警戒を風の精霊に頼み、誰もいない事を確認しこの身を包
む、師匠の装束をはぎ取る

軽装になってこの丘を流れる風の流れに身を任せると、先程まで
の洗っていない師匠の装束の臭いから解き放たれすっきりした気分
になれる。

獣人である私には師匠の装束の臭いは鼻につく。しかしそれぐら
いでないと仲間を誤魔化せないのだから仕方ない。

私は一人だ。

家族もいない、師匠も仕事で命を落とした。

恋人なんかは作ろうとした事すらない。第一、背が低く下手する

と子供に間違われるわたしには無理な話だ。

このどこまで続いているのか誰も知らない、見た事もない世界で私は一人ぼっちだ。

風の精霊が、誰か来る事を教えてくれる。

素早く装束に身を包み、認識疎外と気温調節の機構が編みこまれた外套を羽織る。

すると来たのは、最近街に来たばかりのブランだった。

「ミルガルドー、いないかー？」

外套の認識疎外効果を切りながら返事する。

「いるにや。なんにやの用にや」

「幹部のルツさんが、仕事だつてさ」

「日が沈むまでに隠れ家ホームに集合だつて」

「わかったにや。ブランは先に行くにや」

「ミルガルドは冷てーよなー、もうちょっと仲良くしてくれても、いいんじゃない？」

「暗殺者目指す盗賊が、にやに言ってるにや。寡黙にして、にやにも語らにやい、秘密厳守が絶対条件にや」

「俺、前の町の盗賊ギルドじゃ上位の方だったんだけどなあ・・・この街に来て一気に下つ端だよ・・・」

ブランは私が所属する『闇夜の猫』でも地方でギルド入りしたメンバーだった。

しかし、地方で推薦されてこのイメトウルの街にやってきたのは良いが、ギルドホームに入って30分でその鼻をへし折られた。

地方とここではレベルが違う。

世間的にはここも地方なのだろうが盗賊ギルドの世界ではここが

世界を中心だ。

私が隠れ家^{ホーム}に入って30分ほどで私とブランを含む、今回集められた9人のメンバーがそろった。

幹部のルツソは他の9人が揃ったのを確認すると、

「今回はちょっと特殊な訓練だと思え。ターゲットはこの街の新しい領主の館だ」

「いいんですか？ 領主に手を出して？」

名前も知らない真っ黒な装束の男が聞く。

「特殊な訓練だと言ったろうが。今夜、月の満ちた頃に突入する。

目的地は屋敷中庭、そこに壺が10個置いてある」

「それを持ち帰れと？」

「いや、割ってもいい中身を持ち帰れ。気を抜くなよ。妨害は2人、

グリントさんとその相棒らしい」

一瞬にして場の空気が凍る。しかし、空気の読めないブランは。

「グリントってどんな奴ですか？」

「お前は黙るにゃ」

「そうか、新入りは知らんか。新しい領主の執事は知ってるか？」

「ええ、仕事で手紙を届けた時に何度か」

「なら話しは早い。その人だ。これで顔がわからないやつは居ないな。気を引き締める？ 場合によっては死ぬぞ」

「チームはどうしゆるにゃ？」

「2つに分ける。新入りがいるからな、新入りのいる方に俺が入る。後はお前らで相談しろ」

「わかったにゃ」

そう言つて、8人の中から3名と5名に分ける相談をする。

「おい、新入り」

「なんすか。今回も楽勝でしょ？ ルツソさんまで参加するんなら、全く問題ないですよね」

「そんな事だろうと思つたよ。言つとくぞ、下手すりゃ俺でも死ぬ」
「え？」

「グリントさん相手になら、俺を入れてもこの10名じゃ足らん」

「今回は戦闘目的じゃなくって物の奪取。要は潜入訓練だ。とにかく、逃げて、隠れて、欺いて。品物さえ手に入ればいい」

「決まつたにや」

「おう。お前らは分かつてると思うが、この訓練、俺達が失敗して他のチームが成功したら、格付けが変わるかもしれん事も忘れるな」
「入るのは俺達だけじゃないんですか？」

「新入り。もう一回地方からやり直すか？ 特殊な訓練だと言つたろうが……」

「日は変わるがこの街の有名どころはみんな参加するって事だろう」
「今日、明日、明後日は『闇夜の猫』だけだ。幹部3人に一回ずつ機会が与えられた。『闇夜の猫』の中での格付けもそつだが、ギルド連盟内での格付けも大きく左右する結果になると俺は読んてる。上手く行けばチームの名が挙がり美味い仕事が増える」

「冒険者のお供で遺跡に潜るのも飽きてたからちようどいい」

「それが悪い仕事だとは言わんがな。暗殺専門のうちみたいないなギルドにやあわねえよな」

「調子によつてる商人の暗殺によ方が楽で報酬もいいにや」

「そつ言う事だ。気合い入れていくぞ。準備を整え3時間後にルナル酒場の裏の家に集合だ」

「了解にや」

そしてみんな溶け込むように消えていくとわたしとブランだけが残った。

「にやにしてるにや。さつさと準備しに自分のアジトへ帰るにや」

「なんでみんな、あんなに消えるように移動できるんだ？」

「おみやえはアホにや？ 歩法の訓練と認識疎外の装備にや。教わつてにやいのかにや？」

「習った気もする……」

「地方に追い返されたくにやかつたらがんばるにや。内緒にやが新入りは半年で芽が出にやいと強制送還にや」

「マジで！ 知らなかった……急いで家戻ってくる！」

「足手まといににやらにやきやいいのにやが……」

不安を胸に、わたしも準備の為にアジトに戻る。

領主の屋敷に近づいた私達は声をださず、指と手の動きのサインだけで行動を開始する。

しかし、わたし達5人の方はあっけないほど簡単に中庭に辿りついた。

わたし達は周囲を警戒しながら、まずはブランが壺を一つ取ってくる様にルツソが指示を出す。

ブランは中庭に作られた東屋のテーブルに置かれた壺をとる為、周囲警戒とトラップに注意しながらそれなりのスピードで駆けて行

く。

と、その瞬間。

ブランの周りの床が黒い光を放ったかと思われた瞬間にブランの姿は消えていた。

「強制転移トラップだと？この屋敷、前は廃墟だったはずだが昔の人間は何を考えてあんなもん備え付けてやがる……」

小声で言うルツソとわたしは違う驚きに戸惑っていた。

この事は誰よりも知っていたはずの自分が知らないトラップだ。

領主が来るまでは仕事の無い時は毎日のようにここの屋根に上り風を感じていたはずだ。

ここにはトラップは無く、地下に結構な広さの隠し倉庫があり、以前のわたしはそこをアジトにしていた。

わたしの師匠が死に、わたしが『闇夜の猫』に入るまでは師匠と私のアジトだったのだ。もちろん誰にも言っていないが。

ルツソにもう少し周りを調べてから、と言う前にルツソは次の二人を違う方角から向かわせる、が。

その次の瞬間、同じように東屋まであと数歩というところでまた一人が飛ばされる。

そして歩みがゆっくりになったもう一人は同じ辺りで数歩だけ進み、止まったからか飛ばされていない。

「ッ！！」

気付いた私はルツソに近づき、残った一人に動くなと伝えさせる。

そしてルツソについてくるように伝えるとかなりの速さで移動し、そのまま残った一人を蹴り飛ばし東屋に突っ込ませその瞬間、わたしとルツソはゆっくりと歩いて東屋に入る。

すると蹴り飛ばされてスピードの乗った男はさつきと同じ様にどこかへ消えさる。

思った通りだ。

「どづいつこった？」

「恐らく、このトラップは一度に複数発動できにゃいのかもしれにゃい。そして、ゆっくりと歩いている人間には絶対発動しにゃいにゃ」

「両方をいつぺんに確認する方法をとったってことか」

「そうにゃ、一個ずつ条件を確認するには、人数がギリギリにゃにゃ」

「確かに一人だけ残ってもな……よしつ。とりあえず壺ごと持っていくぞ。割ってなにかトラップがあると危険だからな」

「了解にゃ」

恐らくもう一つのチームにグリントさんは向かっているのだろう。もう一つのチームの来る気配が全くない。

もしかしたらもう、全滅させられているかもしれない。

そう思いながら入ってきた北側の扉ではなく、違う場所の扉を越えてこの屋敷を出る為に二人で走る。

そして、南側の門が見えるあたりまで来たときに気がついた。

なぜ自分達は門の前にいる？

さつきまで事前に南西側の塀に用意して、垂らしておいたロープを使って出ると決めたはずだ。

おかしいと気付いたのか、ルツソに止まるように手で制され、わたしも初めて南門の向こう側にいるに人の気配に気がついた。

南門の向こうには優雅な佇まいでこちらを見据えながら立っている二人の老人と、我々のチームだった8人の人間が横たわっていた。

第17話 猫メイドは怯える「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第17話 猫メイドは怯える「2」

失敗しても死ぬ事はない、そう分かっているも立ち向かう気力が起こらない。

どれほどの絶望であれば、そんな風に感じてしまうのだろうか？

彼我の差が、わたしではわからないほどに圧倒的だ。

この門は抜けられない。迂回しろ。逃げる。判っていたはずだ。今回は潜入だと。

しかし私は動けない。

まだもう少し距離のある相手なのに、見てしまった瞬間。気付かされた。

次元が違う、と。

そして気がつくとお爺さんにしてはやたらとゴツイ腕の方の老人がわたしの目の前におり。

わたしのお腹には老人の拳がめり込んでいた。

「わりいな。子供が相手でも手エ抜けねえんだわ。眠ってな」

そんな言葉を聞きながら意識を失いかけたわたしは、倒れきる直前に切り札を出そうと意識を保つ。

このまま気を失っても問題ないはずだった、命は取られない。しかし、目の前の老人はともかく向こうでルツソが相手になっている老人は別格だ。

ルツソが牽制でナイフを投げると、ほん少しだけ動いてナイフの軌道から体をずらし、ナイフをかわしながら後ろから包むようにして掴む。

手に持ったナイフでルツソが仕掛けてくるダガーでの攻撃を、弾きながら体を前進させている。

すると攻撃しているはずのルツソが間合いを制しきれなくなり後退を始める。

老人は涼しい顔でルツソを後退させながらこちらに向かってくる。

あんなものの傍には一秒たりとも居たくない。

その恐怖がルツソにも誰にも見せなかった、わたしの切り札を引きずり出す。

『頼むにや！シルフ』

そして、シルフの風が目の前の老人をふき飛ばし、後退させ、わたしはシルフの言うままに逃走ルートをとる。

【コツチダヨ、コツチダヨ】

シルフはわたしの周りにまわりつき、案内してくれる。これなら何故か南門に誘導されてしまった罠も意味をなさないはずだ。

走り出した私の後ろからルツソが足止め役を買って出た声が聞こえた。

「こちとら、穩形、潜入、暗殺が専門なんでね。戦闘じゃあ、お宅らにゃあかなわんが、あいつの逃げる時間ぐらいは稼いでみせる！」
「エヴァン、何をやっているのですか？ 後でお仕置きか訓練3倍を選ばせてあげます」

「あほか、こっちの年齢考える。そんなの俺あ、死ぬぞ。しかし、無詠唱でシルフ呼び出すとはあのガキいい才能してやがる」

「あれでは『迷いの森』の効果も出ませんね。急いで追いかけてみよう。シルフ相手では探知も聞かないでしょうし、見失うと厄介です」

「ああ、じゃア行くかグリント。そっちのお前さんはココでお寝んねだっ！！」

シルフの言葉が、数分の足止めが精いっぱいだったルツソが地面に沈んだ事を理解させてくれる。

【クルヨクルヨ。フタリ。クルヨ】

【ミギダヨミギダヨ】

【マツスグダヨマツスグダヨ】

次々に言うシルフの言葉を信じ、ただひたすらにわたしは逃げ続けた。

そして屋敷に到達してしまっただが、シルフが今までに間違った事はない。信じて建物の中に入り込む。

【ソコダヨソコダヨ】

【タスケテクレルヨ】

小さな窯のついた部屋に飛び込むとそこを通りぬけて大人ならしやがまないといけないような扉を通り抜ける。

するとそこで魔力が足りなくなったのかシルフが消えてしまった。そして、もう一度呼び出そうとしたところで

「おい、お前は誰だ」

と声がかげられた。

振り向くとそこには「全裸」の男が立っており、さすがにわたしも驚いてしまった。

「怪しいもんじゃないにや」

しまった。それでは怪しい人に聞こえてしまうだろう。しかも、今の恰好は上から下まで黒をベースにした服装で外に出ているのは、風を感じる為の頭の猫耳と眼だけだ。

「いや、そりゃ自分で怪しい奴だという馬鹿はいないだろうが……」

ああ、やっぱり……

「しかしお前……」

「な、なんにや？ なにをじつと見てるのにや」

「猫耳かあ……いいなあ。くうくこないだのルファちゃんの黒も良かったけど、ロシアンブルーの猫耳かあ」

「ロシアンブルーってなんにや？ というか邪魔しちやにや。失礼するにや」

わたしは逃げようとしたが、外套を掴まれ風呂に引きずり込まれた。

「あにや！ にやにやにや！ あにやにやにやにや！……」

猫科の血をひく獣人は、熱い風呂が苦手って知らないのか！
こいつは。

「大人しくしろ。どうせ泥棒なんかだろ。ウチの執事やメイドに見つかったら殺されるぞ」

そこで自分のしてた事を思い出し、湯船の中でたち上ってすぐに逃げようとして……

壺が無い事に気がついた。

「この壺。先週からウチの執事が大量に持ち込んでたやつだな」

「それを返すにゃ！」

「いや、これウチのだろうが。お前こそ返しやがれ」

「そう言う訳にもいかないによにゃ！」

「これ。本気でほしい？」

「もちろんにゃ！」

「じゃ。言う事聞け」

「奪えばいい話だにゃ」

「俺が叫ぶのとお前が奪うのとどっちが早いかな？」

奪う方が早いに決まってる。

でも声を出されてあの老人に追いつかれると、どの道つかまる……

……

こいつを気絶させるか？

でも万が一、こいつをここで傷つけると、訓練のはずなのに、本気で殺しに来られたらあんなのにはかなわない……

しかし……と考えると『ポチャン！』と音がした。

見ると、壺は大きな湯船の中に沈んでおり、目の前の男が壺の上に足を組んでいる。

「ゆっくり考えんのもいいが、たぶんすぐに誰か来るぞ
「にゃ!?!」

「言う事聞くからそれを寄こすのにゃ!」

「それでどうやって逃げる気だ? すぐに捕まるぞ?」

「ううう、にゃんとかするにゃ!」

「この壺持って絶対に逃げられる方法が一つだけあるけど?」

「にゃにい!?! 教えるのにゃ!」

「今晚ずつと俺と一緒にいて、明日の朝。俺と一緒に堂々と出て行く」

「むりにゃ! ばれるにゃ!」

「ばれても問題ない。俺がこの家の主だからな! 俺の言う事は絶対だ」

「nyanya!?! nyanya nyanya nyanya!?!」

「おい、何言ってるかわからんぞ。お前名前は何?」

「……………ミルガルドにゃ」

「俺はクルカだ」

「よし、じゃあ……………ミル! ミルはなんでこの壺盗みに入ったんだ?」

「仕事の事は話せないにゃ」

「まあ、そうか。じゃ、別にいいにゃ」

「いいのにゃ!?!」

「聞いてほしいのか?」

「……………そういう訳にゃ、ないんにゃけどにゃ……………」

「俺が良いっついていてるんだ。いいだろ」

「それは助かるんにゃけど……………」

「よし、じゃあミル、服脱げ」

「にやにや!?! なんでそつにやるにや!?!」

「なんでもいう事きくつて言ったじゃねえか。それにお前だけこの風呂で服着てると明らかに不審人物だぞ? 誰か来ても庇う事も出来ん」

「それはそつかもしれにやいが……もしかして男色家にやのかにや?」

もしかしてこいつは男色家で男にしか見えない私を……

「普通に女が好きだが? 心配するな。お前みたいなお子様には手は出さないよ。10歳くらいか?」

「失礼にや! これでも16歳にや!」

「マジか!?! ……ならちよつとロリコン気味だが問題無くね? ラッキー!」

「全然ラッキーじゃないにや! 危険が増したにや!」

ん? 何かおかしくないか?

「ちよつと待つにや」

「なんだ」

「クルカから見て、俺はどう見えてるにや?」

「なんだ? 急に。俺なんて男みたいに言いやがって。お前女だろ? せめてあたしとかわたしにしとけ。意表について僕でもいいけどな」

「ッ!?!」

なんで? この完全に男物の服装で匂いまで男性の師匠の物なのに。どこで女だつてばれてるんだろつという事を確認するよりも早く。

「ああ。もうめんどくさい。脱がす」
「っ!?! やめるにゃー!!」

わたしはそのまま全て脱がされ、タオルを巻く事も許されず、湯船の中で壺で体を隠すのが精一杯だった。

「ご主人様。何か騒がしいようですが、深夜にお風呂に入りたいたいなどわがままを言ったあげく騒ぐのはやめてください。………

…」

「ご主人様」

「なんだ？」

「そちらの少女はどこで誘拐してきたのですか？ さすがに犯罪です。死んで悔い改めてください。というか何故一緒にお風呂に？」

「ああーこいつの名前はミル。ギザツド娼館のムファちゃんの友達で俺が恋しくて、忍び込んできたんだ。だから一緒に風呂入ろうと思って、それでルシイに風呂頼んだんだ」

「そおですか。私に内緒で女の子を忍び込ませたあげく、その女の事と入る為のお風呂の準備を私にさせたと！ しかもその子はこんなに小さな子なのに！」

「いちおう、ミルはそれなりの年齢らしい」

「そおですか、さすがに実年齢が10歳程度の子に、手を出すのは良くないとは分かっていたんですね。ご主人様。だからって10歳ぐらいにしか見えない娼婦を連れ込んでいい訳がありません！」

「ちよつとまつにゃ！ 娼婦じゃ……ムグツ『そう、娼婦じゃ売れっ子だもんなー？ 舐めんなよって言いたいだよなー』……!!?! ?!」

「もう結構です！ 好きになさってください！」

「ルシィ！」

「なんですか！」

「このミルの濡れた服、洗濯頼む。後、脱衣所にミルの分も含めバスタオル多めに用意しといて」

「~~~~~！！ わっかりました！！！」

そう言つとメイドさんは散らばつた服などを籠に一纏めに入れて持つて出て行つた。

メイドさんの視線が痛かつた……私、娼婦にされちゃつた……

「いいのにな……すつごく怒つてたにな……」

「いつもの事だ。気にすんな。それより、も。触らせてもらつかな、と」

「にゃ！？ だめにゃ！ だめにゃ！？ ……ふあ、ふにゃあ

……にゃあ……ふにゃあ……」

耳と尻尾の触り方がうますぎるのにゃ……気持ちいいのにゃ……

……

「ご・主・人・様！ こ・ち・ら・に・置・い・て・お・き・ま・す……！」

「ありがとおく気持ちいいなあ」

「ッ、あまり汚されないようにお願いしますね！ おやすみな

「さいますせー!!」

扉を閉める大きな音がして

「うにゃあゝ、きつと誤解されたにゃあゝいいのかにゃあゝクルカ怒られるんじやにゃいのかにゃ?」

「怒られるのはいつもの事だ。それよりも。ミル、ここに入って来た時、精霊連れてたよな」

「やっぱり見られてたのにゃ。そうにゃ。シルフが呼べるにゃ」

「よし、ミル、今回の仕事が終わったら、ギルドやめて俺のトコで働け」

「にゃあ? それは無理にゃあゝ?」

あまりにも気持ちいい触り方に身を委ねながら言葉を返す。

「なんでだよ」

「盗賊ギルドを抜けるのは、簡単じゃないのにゃあゝ」

「では死んでいただければ問題ないのでは?クルカ様?」

「にゃ!?!?」

「お、グリントお前いたのか。盗賊つてやめにくいのか?」

「そうですね、幹部に近ければ近いほど。あ、それではごうじましよう」

「にゃ?」

「なんかいい方法あるのか?」

「今回のこの壺をギルドの方に差し上げて、こちらの方を誤って私が殺した事に致しましょう」

「ご主人様を巻き込みそうだった、ので火球で焼き尽くしたという事にしてしましましょう。それならば死体を取りに来る者もない

でしょうし」

「しかしそんなに価値のある壺なのか？ それは」

「もちろんです！ とて……とても価値のあるものですから。どこの誰がなぜ狙ったかは私どもには全くわかりませんが盗賊ギルドと事を荒立てたくはないので壺で手を引いてくれ、という交渉を盗賊ギルドに依頼します」

さつきから執事が余計なことと言っなよという視線を送ってくるので触られるままに話を聞いている私。

「上手くいくのか？」

「あとは、こちらの方が外で見かけられたときにバレないように外見を変える必要がありますが……」

「それはだめだ。このシルバーっぽいロシアンブルーのこの耳と、毛と、手触りが良いんじゃないか？」

さらに、弄りまわされて、私は、私はもう……

「ふにゃあああああ〜」

「どうしましょうか」

「大丈夫なのにやあ〜。誰にも素顔は見せた事がにやいのにやあ〜」

やっとの事でそれだけ言っつと体から力が抜けて行くのを感じた……

「で、あれば問題ないですね。そうですね。念の為、話し方は私が矯正して差し上げます」

「そうか。任せるわ」

「おや、クルカ様」

「ん？」

「そちらの方、伸びていらっしやいますよ？」

「あらら、部屋に連れて行くわ。バスタオルいっぱい取ってくれ」

「はい、後この壺は片付けておきます」

「よろしく」

私はクルカに体中を拭かれ、まっさらのバスタオルにくるまれて御姫様抱っこで部屋に連れて行かれました。

ずっと意識はあつたけど、全く力が入らずボーっとしたまベッドに寝かされそのまま眠ってしまいました。

翌朝、目が覚めると昨日のメイドさんが私の頭の上でクルカのほつぺたをつねっていました。

「で・す・か・ら！　そう言う事はちゃんとやって下さい！」

「だってルシイに言うと思つたし、話がややこしくなりそうだったし……」

「全く。ちゃんとグリント老にお話は聞きましたので。問題無ければ明日からメイドの仕事を教えます」

なんでそんな事になつてるんだろうと思ひながら、昨日の事を思い出し、クルカに声をかける。

「おはよう、クルカ。昨日言つてた事は、本気にゃのかにゃ？」

「おう、ミル。おはよう。本気だぞ。まあ、一回ここでメイドの仕事を軽く覚えて、それから王都の屋敷へグリントに連れて行かせて。そしてここで働くつてめんどくさい手続きは必要だけどな」

「んゝ迷惑にならにゃい？」

「気にすんな。なんとかしてやる」

そう言いながら私の頭と体を優しくクルカの手が這いまわる。

「ふにゃあゝ」

「ご主人様！ 朝から何をなさっているのですか！！」

怒られたクルカが逃げるように部屋を出て行くと代わりに執事が入ってきた。

「昨夜ぶりですね。ミルさん」

「ちょっと怖くて後ずさると。」

「大丈夫ですよ。ご主人様からメイドにするつて、お話は何つてますから。危害は加えません。私もグリント老も」

と優しく笑ってくれるメイドさんにほっとしながら、ちゃんと話をしようとお二人に向き直りました。

第18話 猫メイドは怯える「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第18話 猫メイドは怯える「3」

私には手に入らない物だと思っていた。

風に流されるままに、一人で生き、そして風の行きつく墓場に眠ると思っていました。

私は師匠に拾われるまでどのように生きていたのか覚えていません。

ですが何となくロクでもない物だったのだ、と自分で感じています。

師匠が言うには、私はたった一つの指輪のようなものを除いては何も持物を持っておらず衣服もボロボロだったという事です。

そして、あの日。

今度はゴシュジンサマに拾われたあの日から、師匠につけてもらった『ミルガルド』ではなく、ミランダに戻りました。

その次の日から、私の、ミランダ・アルハンゲルのメイドとしての生活が始まりました。

「へえ。せやったんや。ミランダちゃん暗殺者やったんや」

「主殿らしい事だねえ。与えられるとホイホイ使い捨てにするくせに、自分の拾ったものならすぐく大事にするんだからねえ……」

レイチエルは炊事で荒れているとは思えない、その綺麗な薄い褐色の肌の手で狐モドキの顎の下を撫でている。恐らく荒れないようにゴシュジンサマが何か用意をしているのだろう。

「ゴシユジンサマはそんな感じだね。私のアルハンゲルって名字もゴシユジンサマがくれたの」
「それもかい？」

レイチエルは綺麗な褐色の指をつい、と動かし私の尻尾の先についている輪っかを指した。

「それ綺麗やなあ。御主人様にもうたん？」
「ううん。これはいつから持ってるか分からないくらい前から持ってた。孤児だった私の名前がわかった唯一の物だったの」
「へえ。でも不思議やなあ。どうやって止まってるん？それ」

「尻尾の先が足の小指の長さほど折れてるの。だから『し』の字みたいになってるから勝手には落ちないの。むしろ外そうと尻尾をまっすぐにしようとするとなんかすごく痛いの」

「ああ、骨折してそのままくっついちゃまった感じなのか……」
「うわ、イタそ……、今は平気なん？」

「このままなら、触られても何かにあたっても平気」
「せやけど、今まで黙ってたのに言うてよかったん？　じいじやエヴァンじいちゃんに怒られへんの？」

「そうだねえ。グリ爺やエヴァン爺さんに怒られそうになったら、あたしに言いな。飯を盾に守ってあげるからさ」
「大丈夫なのよ。いつでも言うて良いって、こないだから言われてるよ」

そうだ、メリーが来た日から。どこかの盗賊ギルドをそそのかし、誰かがこの屋敷を探り始めた時からゴシユジンサマ以外には言うてもいいと言われている。

「そっかー、みんな色々あるんやな、今度いつかい、みんなの秘

密暴露大会でもせなあかなあ」

「あたしゃ、秘密なんて無いよ」

「それは嘘なのよ。主様あゝって猫科の獣人もビックリの猫なで声で甘えてるの知ってるよ」

「せや。レイチエルはん、もつとごう。『あたしについて来な!』
みたいな姉御肌やと思つとつたのにビックリや」

「そ、それはもう忘れなつて言つろ! ミランダ! 生タマネギ食
わせるよ!」

レイチエルが薄い褐色の肌を真っ赤にして怒ると膝に抱かれて撫でられていた狐モドキがビクツと体を震わせた。

「レイチエル、狐モドキがおびえてるよ?」

「うゝ。後で覚えておきなよ、ミランダ」

「忘れるに決まってるの」

「しかし、そんな毛皮だらけの状態でレイチエルはん、暑くないん?
? 今まだ夏やで?」

「あたしゃ、南の方の血が少しだけ混じってるみたいだからね、暑さには強いのだ。まあ年中、厨房の窯の前にいるせいもあると思っけどね」

「そつか。レイチエルはんの肌、綺麗な褐色やもんなあ。踊り子連中とは違つて汚い感じせえへんし」

「南の方の血が入つてると褐色になるの?」

「南の方にはそういう人が多いつてことなんだろ、きつと」

「喋り方もそうなの?」

「これは大婆様の真似だね。いつの間にか染みついちまった」

「ウチとしてはミランダちゃんの、にゃーにゃー言葉の方が気になるけど」

「あれは拾つてくれた、師匠の奥さんがそんな感じだったから。でもこの屋敷で働く時にルイ姉に直しなさいつて言われたの」

「なんでなんやろ？にゃーにゃーでもいいと思うけど」

「きつと、主殿のお客様の前に出る事があるからだろうね。結構な身分の方が来られれば、侍従長に全部任せらるってわけにはいかないだろうしね」

「そおか。一応、御主人様は公爵家やもんな。忘れるわ、普段を見てると」

そして、少しだけ話し方の矯正を言われた時の事を思い出す。

すこし、怯え気味の私に執事さんが話しかける。

「昨晚は大変でしたね」

「早朝から『闇夜の猫』の所には行ってきました。ルッソさんとは話が済んでいます」

「ミルガルドさん。貴方のアジトの道具は諦めてください、取りに行けば怪しまれます」

「一つだけ回収したいモノがあるんだがにゃあ……」

「なんです？」

「指輪、みたいなリングにゃ。生まれた時から持ってたものみたい
にゃのだにゃ」

「わかりました。後で形状などを教えてください。取りに行きます」

「あちやしが行っちゃダメにゃのかにゃ？」

「できるだけ情報はこの街に残したくないのですよ」

「他に高価な道具や貯えがあっても諦めて下さいね。その方が死ん

だ事にしやすいですから」

「重要にや道具はほとんど持って参加しちゃうから困るのは貯えぐらいにゃ」

「それではルシイさん、後をお願いできますか？私はちょっと出かけてきます。ミルガルドさん、そのリングの形状を教えてください。あとアジトの場所と、どこに置いてあるのかも。時間が立つと情報が回り誰かが根こそぎ取りに来るでしょうから」

それを執事に伝えると執事はすぐに出て行った。

すると今度はメイドさんが挨拶を始めた。

「ご挨拶が遅れましたね。私はこの屋敷の侍従長を務めております、ルシイ・イルリアです。これから宜しくお願いしますね」

「えっと、ミルガルドにゃ。性はないにゃ。孤児だったにゃ」

「そうですね、私も孤児でした。ですので一緒に頑張りましょう？
ご主人様の為に」

領主の侍従長が元孤児？ それでいいのか？と思っただが、特には何も言わなかった。

「あちゃしはどうすればいいにゃ？」

「まずは、言葉のの矯正ですね。盗賊ギルドの方と聞いていますので変えるのは問題ないのでしょうか？」

「もちろんにゃ、潜入やなり済ましもやった事あるにゃ」

「ではそのしぐさと言葉からメイド本職のきっちりしたものに仕上げます。そしてどの状況でも今と同じ言葉が出ないようにする訓練ですね」

「わかったのにゃ」

「それが終わったら、王都のベルモ屋敷というところにグリント老と行って頂き、そこでメイドとして採用して頂きます」

訳がわからなかった。ここで働くのになぜ、王都に行くのか？
私は不思議そうにしていたのだろっ、ルシィと名乗った侍従長が話を続ける。

「実はご主人様は王国5大公爵家のエルガルド家の次男です」

「にゃ！？ にゃによにゃにゅ?!?!」

「ふふ。落ち着いてください」

びっくりしたのです。この街に来る領主はみんな大した事が無い人物ばかりで遊び呆けている人間ばかりでした。

そしてクルカも同じような評価を盗賊ギルドではされていましてので名前すら記憶していませんでしたから。

「話を続けますね、先程のベルモ屋敷はエルガルド家のベルモ地区にある本宅の事で、ご主人様のお父上であらせられるベルファスト様とお約束で、使用人は必ず、一度ベルモ屋敷仕事をさせてみます。そして、その後はこちらに連れて来て、ご主人様が気にいるかを判断されるようになっていきます」

「無能者と名高い、ご主人様が誰かに利用されないようにとのご配慮なのでしよう」

執事さんがあのグリントさんなんだからそんな心配はいらないんじゃないかな？ とは思ったけど一応黙っておくとすぐにその疑問は解決された。

「そして、グリント老の裏の顔は本家では当主のベルファスト様で

すらご存じありません。御存じなのは先代の 空の詠み姫 であられる祖母様と一部の方だけです」

「そうにゃのにゃ……ややくしいにゃ」

「ふふ、そうですね、この屋敷でもご主人様は何も存じ上げる事が無いようにしております。ですので、ミルガルドさんはすっぱり忘れてメイドとして、気をつけて頂ければ問題無いと思いますよ」

「わかったにゃ。その方が楽っぽいにゃ」

「では屋敷の中を案内しながら、続きをお伝えしますね。あ、服がいりますね、もう王都に戻った使用人のが合うかもしれませんで持ってきますね」

と頭の中が整理できていない私を置いてルシイさんは出て行った

……

記憶の中に意識を引つ張られていたあたしは、目の前で狐モドキが大きなあくびをしたのをきっかけに顔を狐モドキに向け、二人との会話へと意識を戻した。

「しつつかし、主殿はこの狐モドキをどうするんだろうね」

「まあ、研究の結果しだいやわな」

「一緒にいられるといいね、おまえも」

という狐モドキが【キャン！】と元気良く返事した。

「問題無いと思うで。ウチの研究では恐らく、この狐モドキも戦力になるはずや」

「戦力を欲しがってるのかい？ 主殿が？」

「んー、ちよつとちやうんやけど、証明のための戦力ってことかな？」

「よくわからないよね。カナちゃんの研究。レイチエルわかる？」

「あたしに料理以外の事聞かないでくれよ。こないだ、あたしなんか牛一頭を捌く練習とかさせられたんだよ？ あれはナイフのテストだっけ？」

「あーあれな、あれはじいじがやらせたって言うてた牛の丸捌きと、ウチの作った魔導ナイフのテストの両方のやってん」

「それ以降はグリ爺に定期的に剣術教えられるし……意味わかんないよ」

「あたしはエヴァじいちゃんが精霊の事と、大地と植物の関係を教えてくれる事が多いよ？」

「まあ、ミランダちゃんは庭師見習い兼メイドやからなあ」

すると爪を研ぎたくなったのか、にゅつと手を伸ばして指から爪を出している。

「？」

レイチエルが不思議そうな顔をしているので教えてあげる。

「きつとね、爪を研ぎたいんだよ。猫もそうだけど内側に新しく鋭い爪が出来て、上の古いのを爪研ぎする事で剥がすんだよ」

「へえ。そうなんだね。どこで研がしいんだい？」

「んー鋭さがすごそうだから、普通の木じゃ、研ぐどころか削れちゃうんじゃないかな……」

「ほんならうちの研究室いこか爪研ぎに使える金属見つけてどっかに設置したるわ。落ちた爪も研究したいし」

「じゃ、先行つてなよ。あたしや飲み物とって後から行くよ」

「はぁーい、カナちゃんいこっ」

「せやな」

いつの間にか屋敷がいつもの楽しいフィンキに戻っている事を感じ、なんだったんだろ？ と思いながらカナリーと一緒に歩いて行った。

第19話 ご主人様は語る「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第19話 ご主人様は語る「1」

俺は母さんを犠牲に生まれてきた。

誰かに言われた訳ではなく、それを知っていた。

母さんと話した。

生まれてくる俺に、父さんを愛してあげて、と。兄さんと仲良くね、と。ルーデシアさんを慕ってあげて、と。義母さんを労わってあげて、と。

願いを込め、俺に語りかけていた。

私は貴方が生まれてきた時にはもういないから、と。

俺は叫び、暴れた、そんな命はいららない、と。

他人を犠牲に生まれたくなどは無い、と。

他人じゃないわ、血を分けた親子なんだから。

貴方は、私達に望まれてこの世に生を受けるのだから、と。

父さんは、元気な子が生まれそうだな、とお腹を撫で見当違いの事を言い。

母さんは、そうね、私達の大事な大事な息子なのだから、とあやす様にお腹を撫でた。

その記憶が、俺がクルカ・エルガルドとしての最初の記憶だった。

さあ、それじゃあ、始めるとするか。

俺の愛すべき家族と共に。
諦めかけていた、願いをかなえる為に。

目の前にいる、ルシィとグリントに言葉を投げかける。

「さあ、まずはカナとの研究についてだ。カナに頼んだ研究は俺の魔力の素についてだ」

「魔力の素、ですか？ご主人様は魔法が使えないのでは？」

「ルシィさん、先に話を聞きましょう」

「はい……」

たしなめられるルシィに少し、微笑みを向け説明を続ける。

俺はこの世界に住む人がみんな使えるはずの魔法が使えない。

魔力が少なくて使えない人もいるが、俺はそうじゃない。

魔力は山のようにある。

上手く扱えば、普通は一年かかる治療を7日で終わらせられるほどに。

その上手く使う、という事が問題だった。

俺の魔力を俺が使えない。

では、他人には扱えないのか？俺の魔力を他人に譲渡はできないのか？

可能だった。しかし普通の人扱える魔力は自分の物だけ。

他人の魔力を受け取るときに拡散、霧散してしまう。

それでは大した意味は無い。

そこで目を付けたのが血統だった。

血統の力を使えばなんとかなるんじゃないのか？

それぞれの系譜の魔法よりも強力な結果を引き出す血統の力なら。

血統についてはなにも調べても何もわからなかった。
しかし、魔法が使えず悲しむ俺を慰めてくれた、婆さんが言っ
た事を思い出す。

空の詠み姫 は青き薔薇に導かれ、青き薔薇に守られる、と。

その日から俺は庭園に入り浸るようになった。

青い薔薇を食べてみた。

青い薔薇を焼いてみた。

青い薔薇を砕いてみた。

青い薔薇に魔力を流してみた。

青い薔薇に魔力の素のまま流してみた。

流れる魔力の素は薔薇を活性化させ、美しく花開かせ、刺が伸び
俺の指を傷つけた。

まだ、蕾の薔薇を開花させ、刺をおり、母さんを懐かしむ、父さ
んと執事長のガーランドに渡す。

優しくほほ笑んでくれたが、びっくりした様子も、喜んでくれて
いる様子もない。

この程度は他の誰でもできるのか、とがっかりした。

しかし、唯一俺の魔力を使ってできる事だ。これしかない。

俺は、ひたすら青い薔薇に魔力の素を流す練習をした。

俺が隠れられる様にエヴァンが気を利かせて庭園に秘密の茂みを作ってくれた。

街の女の子に薔薇を開花させて渡した。手品だと思われたようだ。

諦めず、繰り返し、繰り返し。

エルガルド家でありながら魔法が使えない事実は、俺を屋敷に閉じ込めた。

王立騎士養成学校、王立魔法院、一般の商農学校ですら、家名の大きさが俺の負担になる、とグリントが家庭教師になった。

分かっていた。父さんが俺を愛するが故にそうしてくれたという事は。

それからは、グリントが外の世界を見せてくれた。

この世界は美しかった、街の女性も美しかった。

俺は薔薇だけでなく他の花も開花させられるようになっていた。

女性の気を引く為、花を贈った。家から薔薇で持ち出し、開花させて女性を喜ばせた。

ある日、間違って金髪の綺麗な男に声をかけ、目の前で薔薇を開花させた。

その男はシュリアスと名乗った。魔眼使いであり機構師だと名乗った。

その男は初めて、屋敷の人間以外で俺の魔力が無色透明である事に気がついた。

そして、手折られて命を失っていくだけの花を活性化させた事に驚愕した。

精霊に頼む訳ではなく、神の奇跡に祈る訳でもなく、悪魔に魂を売り渡しもせずに。

そこから、シュリアスとの無色魔力元素の研究が始まった。だが、学校にも行っていない俺と、加工しかできない機構師では限界があった。

しかし、信頼できる研究者の知り合いはいなかった。

そんな時、カラック兄さんの王立騎士団入団が決まった日の事件が起きた。

悔しかった。悲しかった。母さんに頼まれた事は、何一つ成せていなかった。

そして俺はシュリアスに相談し、賭けに出た。

チワカ地方にいるドラゴンの来襲理由が、カナリーの資料の通りなら、とシュリアスに言われた。

命をかけた。初めてだった。足が震えた。でもグリントとの訓練は俺を走らせてくれた。

カナリーの為に死にかけた。だがカナリーがいないとこれからの研究ができない。

生き残った。賭けに勝った。

俺の無色魔力を温泉に流し込む事で、ドラゴンすら治癒能力の向上と生命の活性化を成功させた。

いや、ドラゴンは知能が高く、そういう事が出来る種族だ。人間で可能か分からない。

ドラゴンにすら教えを請い、自分の生命の活性化だけはできる様になった。念話の精神魔法も手に入れた。

念話の仕組みはいかに魔力を話したい相手に同調させ、魔力での

ラインを作る事にある。

無色の魔力を持つ俺にはもってこいだった。

だがそれ以外は全く、ドラゴンすらお前には他は魔法は使えないと断言した。

構わない。

目標としたのは、『無色魔力元素による他人の性能強化』なのだから。

「なるほど、『無色魔力元素による他人の性能強化』ですか・・・」
「そうだ、ヒントは古代魔法で作られた念話石と精神魔法の念話だった」

「確かに、古代魔法である念話石は、そこに使う者が流した魔力が反応し、実行されます」

「あれは誰にでも使えるからな。おかしくないか？ 魔力の系譜にも左右されずに発動する魔法」

「誰もが使える多種多様な魔力を何かに変換し実行する術式を持っている、と考えた訳ですね」

「ああ、念話石が一番の疑問だった。魔法の使えない俺も念話石は使えるんだからな。俺から魔力を吸い取って」

「それについてはカナリーが教えてくれた。膨大な術式と魔法陣の数をもって魔力を分解し、魔力の素にして、増幅しているのだと。だからあんなに大きい石になってしまっただと」

「それがクルカ様の場合は元々無色なのだから膨大な術式は要らない、という訳ですか」

「それで、だ。細かい説明は後にして。グリント、ルシィはお前から見てどの程度の強さだ？」

「そうですね、私に追いつくにはあと20年は研鑽が必要でしょうが、冒険者や騎士で言つとBランクぐらいでしょうか」

「カラック兄さんは？」

「S、といったところでしょうか。さすがに私でも判りかねますが」「それじゃあ……」

さっきから置き物になっているルシイの手を取り引き寄せる。

「きゃっ」

そして有無を言わず、唇を重ね、舌で唇をこじ開ける。訓練した通りに魔力元素のまま、ルシイに流し込む。

そして同時に念話で話しかける。

【ルシイ、夜のように俺を受け入れる。俺自身を流しこむ】

【何も考えるな、ひたすら受け入れろ、ルシイ。お前は俺のモノだ】

ルシイからは『いきなり何をするんですか！』とか『グリントさんがいる前なのに！』とかそんな感情が伝わってくるが、無視し、魔力元素を流し込むとルシイがふやけてくるのがわかった。

やがて、ルシイの体から完全に力が抜け、長い長いキスを終わらせると、グリントに向き直る。

「グリント。ルシイの意識を奪ってみろ」

「ルシイ、全力で抗え」

そう言った瞬間、グリントの姿が目の前から消える。

もう俺では、この二人の姿はとらえられない。

驚きました。

クルカ様の考えていた事にも驚きですが何よりも、その結果に、です。

私はクルカ様に言われた通り、ルシイさんの意識を奪う為、後ろに回りましたがすでにルシイさんはいません。

速い！！

かろうじて追えた目の端にメイド服の一部が映り、そちらに向かって飛びます。

ルシイさんの腕が、体が、溶ける様に消え、私の後ろに回り込もうとします。

それを止めようと、ルシイさんの腕を掴……む事が出来ず、私はソファに座らされていました。

仲良く、ソファに座っているグリントとルシイに声をかける。

「おい。お前らには手加減って言葉が無いのか？」

「申し訳ありません。ルシイさんがあまりにも強くなっているので手加減ができませんでした」

自分もソファのルシイの横に座る。そして俺は、床を指さしながら

ら言っ。

「どうするんだ？ これ」

ルシイとグリントが足を滑らせるように歩いたのだろう、床はその歩法の型どおりに絨毯が剥げていた。

「後ほど街に行き、修繕を手配します」

「ルシイ、どうだ、今の気分は」

「えっと、良く分かりません。でも気分は良いです。ご主人様と一緒に湯船に浸かっている時のような。包まれるような感じがします」

「クルカ様の無色魔力元素に包まれている、という事でしょうか」

「その辺はまだまだ研究しないとわからねえが、今の段階では底上げもされてると見てる」

ルシイは夢を見ているような顔をしている。

「はわあ……」

「ルシイさんがおかしいようですが……」

「初めてだからな、俺の魔力に酔ってる。何回かすれば慣れる。これでほしい全魔力の20分の1を込めた」

「ちなみに、カナリーで試した時は肉体じゃなくて魔力が底上げされてた」

「人により特性がある、という事でしょうか？」

「たぶんな。しかし、副作用が無いとも限らないから、俺の魔力が切れる前には休ませる必要がある、と考えてるがどう思う？」

「そうですね、ここまで急激な身体強化に体が耐えられるとは思えません、それは精神魔法の身体強化と同じなのでしょう。魔力を使いきるまで、今のままで動き続ければ体はもたないでしょうね」

精神魔法の身体強化は体に自分の魔力を纏わせ基礎体力、筋力、柔軟性などを引き上げる魔法だが魔力が切れると体中の細胞が一気に元に戻る為、細胞が死滅する場合もある。だから身体強化は、魔力を温存し、身体強化後には生命活性で体を慣らしながら整え、元に戻す必要がある。

格上の魔獣に出くわした冒険者が仲間の為に、死ぬ気で身体強化を使い活路を切り開いたのち、廃人同然になるのはよく聞く話だ。

「逆に言うと、俺の魔力が残ってる間に休めば問題無いし、俺が傍で整えてやればいい」

「ルシイの目を見る」

ルシイの顔をグリント側に向ける。

「金色、ですか？確かルシイさんは碧眼だったはずでは？」

「もう少し、よく見てみな。目の真ん中が金色になってるのわかると思うが、上の方だけ少し青いだろ？」

「そうですね、これは？」

ルシイは隣に座りなおした俺の胸に顔を擦り付け『ふにゃあ』『ほにゃあ』と甘え始めた。

「恐らく、残留魔力の容量だと思う。あと8〜9割はまだ入ったまままだ」

「なるほど、完全に元の色に戻るまでに魔力を身体強化から、生命活性に回せばいい訳ですね」

「まあ、実験段階だから、まだまだ確認はいるがな」

「さて、グリント。今のこれで約20分の1だ」

「たとえば俺が、後先考えず20人に同じ事をして、その20人が

エルガルド家に攻めてきたらどうなる？」

「！！！」

「止めれるか？ カラック兄さんとガーランド執事長と父さんで？」

「止めるのは、恐らく不可能です……………ルシイの熟練度程度の人材なら、冒険者で20人集めるのは不可能ではないですね」

「そういつこった。まあ、そんな事をするつもりもないし、できないんだが」

「何を、考えていらっしゃるのです？」

「第七の立ち上げだ」

「まさか…………」

「7番目の血統としてダントリンを認めさせる。ソルフィッシュ家の星の召き手を破ってな」

「…………」

「俺の子供が生まれて、その子がこの力を引き継がなければ血統としては認められないかもしれないが、まずはエルガルド家の『六血会議』への復帰だ。そして、この国の影の部分の長には戻れるだろうか？」

「それでどうするつもりです？」

「スラムに秩序を作る」

「この街が盗賊ギルドの街だって事もお前が盗賊ギルド連盟の幹部だって事も分かってた」

「お前が教えてくれたんだ、俺が赤ん坊のころにな。お前が言っていた事、俺は忘れていない。『私はガーランド父さんの後を継ぎギル

ド連盟の幹部になるよりもクルカ様をお育てして差し上げたいので
す『ってな」

グリントはさらに驚きに目を見開き、体をこわばらせ、どうして
いいのか分からない子供のように少しだけ震えていた。

第20話 ご主人様は語る「2」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第20話 ご主人様は語る「2」

人は生まれを選ぶことはできない。

しかし生き方を選ぶことはできる。

そんな事、考えれば簡単にわかるはずなのに、その本当の意味に気付く人は少ない。

俺は気付いている人間なのだろうか。それとも……

もう少し、グリントと突っ込んだ話をするつもりだったが、後一時間でこっちに来ると婆さんから連絡が入った。

あとあの狐モドキの話もできてない。

「グリント、もうすぐここに婆さんが来る。それまでに全員を食堂に集めておいてくれ」

「メリーさんも、ですか？」

「ああ、つたく。忘れてた。寝てもらっとけ」

「わかりました。しかし、なぜ御祖母様を？」

「どおせ、あの婆さんが知らない訳はないんだ。お前も婆さんの許可が無いと判断できない事があるだろう？」

「その通りでございます」

「ホントは屋敷の人間には話してから婆さんにも話を通すつもりだったんだが。ま、問題無いだろ」

「じゃ、頼んだぞ。俺はルシィを正気に戻してから食堂に行く」

「わかりました。まずはエヴァンを迎えに行ってください」

そしてグリントが退出するのを見届けてからルシィに声をかける。

「ルシイ、ルシイ。ほら、しっかりしろ。呆けてるぞ〜」

「クルカ様あ〜」

「駄目だな。しゃあない、抜くか。ほらルシイこっちこい」

「ふあい……」

とろん、としたルシイに再度口付け、さっきとは反対に、自分に自分の魔力元素が戻る様に巡らせる。

すると、徐々にルシイの表情が引き締まっていき……『バキツ！』……殴られた。

「も、もう！　なんでグリントさんがいるとこであんな事するんですか！　クルカ様は！　自重してください！」

「ルシイ、言葉使い、グリントが『さん』になってるついでに俺も『クルカ様』になってる」

ルシイはあわてて口を押さえると、『コホン。』と少し可愛らしく落ち着きを取り戻す。

「ま。言わずにやったのは悪かったけどな、婆さんの行動が思ったより早かった。今日は夜は二人きりになれるが夕日はみんなで見ると事になりそうだ」

「かまいません。約束を覚えて頂いていたことが重要なのです」

「すまないな。しかし……」

「……………」

「それとこれとは別だな。お前、グリントに盗賊の技を習ってる事とか、その他もろもろ、俺に黙ってたよな？」

「　　ッ！！　え、と。それは、その。なんといいですか、そう！　職務上ですね！」

「危ない真似はするなって言ったよな？　しかもお前は俺の物だかモ

「もっと早く言っとくれよ」

俺だって聞いたのさっきだよ。と思ったがカナの方に向き直る。

「カナ、例の資料準備。婆さんに見せるからな、実演はルシイでいい。さっき上手くいったからな」

「なあーんや、ウチがやったげるのに……」

「お前は説明の補佐、もし間違ってたら言ってくれよ。それととりあえず狐に関しては時間が足りないから、そのままペットの狐でいい」

「よかったね。おいてもらえるよ。一緒に遊ぼうね」

何やらミルが話しているが放っておく。

「主殿、食事の準備初めていいかい？」

「任せるよ。ただ、話の流れ次第じゃ食べるのはかなり遅くなるぞ」

「わかったよ、それも含めて考えてみる」

「頼む、場所は……そうだなテラスにするか」

「了解や、資料はそっちに運ぶな」

「お茶の準備もそっちで良いね、ミラ、先に食器運ぶの手伝ってちようだい」

「はあ〜い」

「あの、ご主人様、レイチエルが……」

「ああ、こっちにいた。言ってるから、お前も準備しとけ。あと、さっきのもう一回やるから覚悟もな」

「ええ！ 御祖母様の前でもやるんですか！」

「もちろんだ。他に証明のしようがない」

「そんなあ〜、あの、他の人じゃ……」

「今晚。お仕置き。楽になるかもな〜。今からルシイが頑張れば」

「うう〜。ご主人様のオニ！ヘンタイ！スケベ！」

「全部正解。だからやめない。準備急げよ」

そしてまた一人で、テラスへと向かう。

テラスで一人、長椅子に腰かける。

少し頭を下げ、地面を見据えながら考える。

上手くいくだろうか。婆さんは理解してくれるだろうか

そんな事はさんざん考えた。後はぶつかっていけ。この壁を越えられなければどうにもならない！

そこに声がかかる。

「クルカ様。お客様をお連れしました」

「グリント、悪いが帰ってもらえ、今日は立て込んでるのは分かってるだろ？」

言いながら顔を上げると、婆さんと見知らぬ甲冑女がいた。

婆さんがグリントにひらりと手を振ると、グリントはエヴァンとメリーを連れて屋敷に入って行った。

「婆さん、この女性は誰だ？ 今日じゃなきやだめなのか？」

「いきなり押しかけてすまない、私は……」『少しは、良い面構えになったね鼻垂れ色欲坊主が』……ソルフィツ……」

「嬢ちゃんはおちょっと黙ってな。……」『ハイ。』……で、話があるっていうから予定全部キャンセルしてきたやつだよ。とつとつ言いな」

「婆さん、家の人間以外の前では言えない」

「お前にそんな大事な話ができるようになるたあね。構わないから言いな。いざとなったら口止めぐらい簡単さ」

「後悔すんなよ、婆さん」

「はつ。後悔なんざ、したくてするもんじゃないさ。勝手に出てくるもんだ」

「エルガルド家の 空の詠み姫 の話でもか？」

「ほう、お前がそんな話に興味があったとはね……しかし、その前にお茶にしようか」

するといつの間にか、メリーとを除く全員がテラスに集まっていた。

レチエが婆さんのお茶を入れ、ミルが騎士の女性へ、グリントは俺の後ろに控え、カナが資料とお茶を俺のサイドテーブルに置く。

そして、エヴァンがブルーローズを一本手早く手折り、ルシィに預けると、ルシィが一輪挿しに挿して、茶菓子と共にテーブルを飾る

「さて、それで？ 空の詠み姫 がどうしたんだい？ お前がなれないのは分かってるだろ？」

「その力の一部を手に入れた、と言っただら？」

「不可能さね。あれは女性にしかなれないものさ。お前じゃ無理だ」
「俺にはなれない、だが、成らす事が出来るとしたら？」

と言いつつ、婆さんに資料をわたす。

さつきから騎士の女性がチラチラと視線がうつとうしい。グリント俺の心を読め。そしてあの女を眠らせる。と思ってみるがグリントには伝わらない。

当たり前だ。念話も使っていないのだから。

「こりゃ事実かい？」

「ああ。実演がいるか？」

「いや、このお嬢ちゃんの前じゃさすがにまずいね……」

「言つたろうが、後悔すんなよ、つてな」

「待つてくれないだろうか」

「なんだ、部外者は黙つてろ」

「すまなかつたね、クルカ、このお嬢ちゃんはお前の許嫁だ」

などと、婆さんはとんでもない事を言いだしやがった……

そっちの方が俺には死活問題だ……後ろから危険なオーラが3つ？ 4つか？

「いかん、これは逃げなければいけないオーラの質だ!!」

「まあ、まちな。まだ決まった訳じゃない。本来はクルカにやあ選
択権は無かつたんだが、これが事実なら話は別だ」

「で、そちらさんは何方さんなんだ？」

「私は、ソルフィッシュ公爵家の長女、フィーリア・ソルフィッシュ
ユだ」

「初めましてフィーリア嬢、私がダントリン家当主、クルカ・ダン
トリンです。以後、お見知りおきを」

「ああ。宜しく頼……『頼まれてもよろしくするつもりは無い』……
…なんだと？」

「最初に言つておく、貴族の嫁を取るつもりはない。貴女には申し
訳ないがね。無礼だ、ふざけるなと怒つてもらつて構わない。やり
込めたいなら黙つて殴られよう。誇りはないのかと罵りたければ罵
れ。俺は自分の目的の為に、自分の考えは変えない」

「クルカ、話も聞かずにそんな事を言うもんじゃないよ。この嬢ち
ゃんも事情があつてここにいるんだ」

「聞いていた話とずいぶん違うな。クルカ殿は」

「どんな話を聞いていたのかは想像に難くないがね」

「とにかくだ、どうするかねえ、こりゃ婚姻の話も白紙かねえ……」

なんだか今度はすごい喜びのオーラが感じられる……

俺の人生は、婆さんの発言に左右されているのか……

「そんな！ それでは困る！」

「しかしね、ソルフィッシュの嬢ちゃん、あんたがウチのクルカと結婚できなくても、あんたは次の 星の召き手 の嫁になれると聞いている。内のクルカよりそっちの方がいいんじゃないのかい？大陸最強の男の嫁だよ？」

「私はそれが嫌だから、クルカ殿に賭ける為にここに来たのだ！」

「それは、お前の都合だろうが。俺には関係ない」

「クルカ殿は最強を倒すかもしれない可能性を作り出せると聞いた！ それが私には必要なのだ！」

「なるほどねえ、最強を奪われたソルフィッシュの嬢ちゃんはエルガルドに最強を求めた、か」

「言うておくが、俺と婚姻してもお前は 空の詠み姫 にはなれんぞ？」

「なに！？ ならばなぜクルカ殿に最強が作り出せるなどと……」

「どう思う、婆さん」

「たぶんこの嬢ちゃんは、現ソルフィッシュ家当主と王の駒ってとこだねえ。この資料誰にも見られてないのかい？」

その質問にカナが答える。

「それは無いで、今朝までウチの頭の中やったからな。大婆ちゃんが見終わったら廃棄予定や」

「そりゃいいね。燃やしちまおう。グリント、やりな」

「はい、御祖母様」

グリントは手に持ったお盆を婆さんに差し出し、婆さんが資料の羊皮紙の束を乗せると半球状の蓋をした。

そして次に開けた時には中にあるのは消し炭だけだった。

その横で、騎士の女性……フィーリアがブツブツと何かをつぶやいていた。

「で、婆さん、話するのかしらないのか？するならそのお譲さんにはお引き取り願った方がいいんじゃないか？」

「待ってくれ！ クルカ殿、本当に、最強を倒す方法は無いのか？」

婆さんに目で『俺は無いとは言っていないよな？』と言うと婆さんは『思い込みの激しい娘なんだろっ』と憐れんだ目を向けた。

「こりゃあ、あたしにも責任が無い訳じゃないからね……嬢ちゃん
「なんでしょうか。先代様」

「ここで見た事は誰にも言わない、忘れる。そう約束ができるのならクルカの持つてる可能性とやらを一緒に見てて良い」

「では！……『ただし！』……」

「それと婚姻は別だ。クルカが嫌だと言えば終わる。クルカの持つ可能性が本物ならね。偽物ならあんたの好きにしな。クルカには娘を作る選択肢しかない」

「いいね？ クルカ」

「俺は問題ない」

「わかりました……」

「じゃ、クルカ始めてくれるかい。……相変わらずレイチエルの口
「ズティーは美味いね……」

「ありがとうございます。大婆様」

と婆さんは紅茶を楽しみながらレチエに話しかけている。

「じゃあ、またグリントとルシイでいいかな？」

とルシイとグリントに顔を向けるとそこにフィーリアが声をかけてきた。

「クルカ殿、すまないが相手が必要なのなら私にさせてもらえないだろうか」

すると婆さんが

「そうだね、嬢ちゃんはこれでも第1騎士団所属だよ、相手にとって不足は無いだろ？」

などと言いフィーリアとルシイで模擬戦を行う事になった。

「まずは、ルシイの今の戦闘力を見ておいてくれ。ルシイ、ナイフでの直接攻撃だけ行え」

「わかりました。フィーリア様、よろしくお願いします」

「よろしく頼む、ルシイ殿」

そしてルシイが軽くお辞儀をし、フィーリアが構えるとフィーリアの背後に回る形でルシイは擦り足で進む。

その早さは速くないのだが、時折り緩急がつけられているのかルシイの姿がブレて目で追いにくくなる。

しかし、相手はさすがに第1騎士団所属なだけありその動きになんとか対応し、迫るナイフを上下左右にそらす。

どう見ても、攻めが本来のスタイルっぽいフィーリアに、守れとつらいようだ。

「そこまで…」

声をかけるとルシイは事もなげに俺の隣に戻る。
それを見たフィーリアが

「彼女は本当にメイドなのか？ カラック殿の動きを知らなかったら私は守り切れなかったぞ……」

なるほど、兄さんと一緒に訓練した事があるのか。だから防げたんだな。

しかしルシイは機嫌が悪いな。いきなり正面じゃなく背後を狙うとは。御機嫌とつとかないとな。

「ルシイ、よくやった。第1騎士団所属の方にそこまで言わせるんだ。主としては鼻が高い」

とミエミエだが褒めてやると。

「ありがとうございます。仮にもエルガルド家で教育を受けたメイドですので」

と優雅にお辞儀した。

「さて、次は本番だ。ルシイは今と全く同じ攻め方を繰り返してくれ。そちらは自由に攻めて構わない。攻めれるなら、だが」

「言うねえ、クルカ。そこまで自信があるのかい？」

「婆さんに後悔させてやるさ。もっとこっさり見とくべきだったってな」

「私としてもそこまで舐められては手を抜けないな。たとえ最強になれなくてもソルフイツシュ家の人間だ。無様な姿は晒せない。本気で攻めさせてもらおう」

「では、ルシィ、おいで」

と、ルシィの手を引き、今度はゆっくりとフィーリアに見せつける様にルシィの唇を塞ぎ、舌でルシィの唇をつつく。まだ戸惑いがあるのか、少しだけ唇が開き、舌を受け入れる。

そして今度は先程の倍、俺の全魔力の1割をルシィに流し込みながら念話を行う。

【そうだ、しっかり受け入れる精霊と同じだ、ルシィへの俺の想いの強さが、ルシィの俺への想いが、お前の強さに変わる】

『私の想いとクルカ様の想い……』

【そうだ、お前は今から俺を守る盾に、俺の為の剣となる】
『私の想いがクルカ様の剣と楯に……』

【上手くいったら今晚のお仕置きは無しだ。ゆっくり、時間をかけてお前が望むようにしてやる、だから応えて見せる。ルシィ】

『私の望むままに……』

そしてゆっくりと、唇を離れた……

第21話 ご主人様は語る「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第21話 ご主人様は語る「3」

ヒトとヒトは分かり合える。求め合ってる。

そんな事を言った人がいたらしい。

本当にそうか？分かった振りを、求める振りをしてるだけじゃないか？

そんな風にひねくれて、疑問を持つから分かり合えない、求められないんだ。

それに気づくまでにどれだけの気持ちが無駄にしたのだろう。

ただ黙って信じればいい。どこかにきつと本物はある。

今、この瞬間に感じている気持が本物であると感じられる様に。

目の前の光景に、その場にいた全ての人間が驚いているようだった。

俺は前から感じていた、きつとこうなると。

恐らく、レチェも、カナも、ミルもこうなる。

感じる。

目の前の女性に惹かれれば惹かれるほど輝く姿が幻視できる。

そうやって傍におく女性を選んだ。

だからこの結果は必然だ。

ルシイに関して言えばまだ途中だ。籠めた魔力はたった1割でしかない。

じゃあ、2割なら？ 3割なら？

だが無理はしない。させない。俺が愛し、俺を愛する者を実験台にはできない、ゆっくり慣らしていこう。

さあ、ルシィ、この世界にしかない想いの力を見せてくれ。

『ギイイイイイン！！！！』

中段に構えられたフィーリアの剣が鈍い音を立てて反対側に弾かれる。

どうやら欠けてしまったようだ。

「クッ」

「これが、これがさっきと同じ攻撃なのか!？」

すまない、フィーリア。俺には答えられない。だって見えないから。

全く見えない。

見えるのはフィーリアの鎧と剣が光り、削れ、ボロボロになって行く様だけだ。

なんだい、これは。

ルシィの綺麗な金髪は輝くように光っているし、目の色まで金色になってる。

いや、目は若干、青が残っているのかねえ。

クル力は一部と言ったが、これじゃ本物の 空の詠み姫 と変わ
らないよ。

しかも威力なら上回ってるかもしれない。

いや、ちがう、本来の 空の詠み姫 の持つ切り札を持ってない
みたいだ。

だから、一部なのかい。そのかわり戦闘に特化してるのか。

まさか無能者と言われたあの子がここまでの物を見つけるとは…

……

あの擦り足に緩急をつける歩法はエルガルド家の使用人にも教え
ている歩法だ。

しかし、あれはその上。使用人には教えていないモノにまでその
スピードだけで到達してる。

底上げでナイフの強化がさらに厄介な事になってるね。ミスリル
のはずの鎧と剣が、木切れみたいに削られてる。

やばいね、止めた方がいい。

『グリント！ ルシィの目はどうなってる！』

ん？ どういうことだい？

「グリント！ ルシィの目はどうなってる！」

俺は無理をさせないように止める為に確認する。

「約半分ですね。かろうじてしか見えませんが」

【「ルシイ！ そこまでだ！」】

声と念話の両方で叫ぶ。

すると俺の前に「ふわり」とルシイが現れ、聞いてくる。

「ご主人様のお役に立てましたでしょうか？」

「ああ。ルシイ。お前は最高だ。今までにないほどに役に立ってくれた。

今夜はお祝いだ」

「少し休め。ほら座れるか？」

「大丈夫です。まだまだ動けます」

「いや、もう終わりだ。ゆっくり深呼吸して、身体強化を解くように生命活性してみる……」

「はい。ご主人様……」

そこでルシイはゆっくりと眼をつぶり、深呼吸を始めるのを見て婆さんに話しかける。

「どうだ、婆さん、ルシイはこれでもまだ2回目だ。カナは系統が違うがもう少し先までいってる。

……俺はこれを同調エントレインと名付けた」

「……なんてモノ見つけるのかねえ、この子は……」

悲しそうな声を出す、婆さんに心の中で謝る。俺は婆さんより先に死ぬかもな。

空気を読めない女だったのか、フィーリアが

「すばらしい！ メイドであそこまでなのだ！ 私やもつと高ランクの者ならどうなる！ 星の召き手すら倒せるぞ！」

「頼む！ クルカ殿！ 私にも同じ様にしてくれないか！」

そう言った瞬間、婆さんは先程のルシィと同様に髪と眼を輝かせ、フィーリアを殴り倒してその上に座った。

「クルカの言う通りになったね。あたしゃ後悔してるよ」「なぜだ！ 先代様！ あれだけの力だ！ すばらしいじゃないか！」

「これだから、力を求めるバカは嫌いだよ」

「な、後悔するって言ったろ？」

「クルカ、悪い事は言わない。この事は忘れな」

「何を言ってるんだ！ 誰もが欲しがる力だぞ！」

「黙りな！ この脳筋娘が！」

さすがは婆さん、怒り方まで威圧感が半端じゃない。

「だから資料も残してない。今はこの屋敷には誰も入れないようにカナに結界を頼んである」

「その用心深さは正解だよ」

俺は意地の悪い笑い方で、フィーリアに聞く。

「脳筋騎士のお譲さん、あれを攻略する方法を考えてみな」

「私は脳筋ではない！ これだけの力だ簡単に攻略されるはずが無

い！」

婆さんは笑いながら言う。

「脳筋だねえ、そりゃ 星の召き手 から外れるわけだよ。当代も自分の娘がこれでは諦めるしかないさね」

「いくら先代様とはいえ、その言葉は取り消してください！！」

「脳筋なお嬢さんに教えてあげよう。攻略法は簡単だ。

……………俺を殺せばいい」

「ッ！！」

簡単に黙らせるのに成功したな、多少は脳みそが働いてるか？

ま、大事なのは婆さんとの相談だ

「クルカ、どうしてそこまでするんだい？」

「婆さん、これから生まれてくるかもしれない自分の娘に、婆さんみたいな苦勞をさせるってのか？させるんなら息子に苦勞させるよ」

「だからってあんたがやらなくても……………いや、それこそ同じかねえ

……………」

そういうこった。婆さんは頭の回転も速い。ルシィやみんなもそうなってほしいもんだ。性格は似なくて良いけど。

「で、だ。婆さん、この四人を鍛えてほしい。それと、『エルフの秘仙薬』が欲しい。婆さんも使ったんだろ？」

「あたしやクルカを舐め過ぎていたかねえ……………どう思っ？グリント」
「それに関しましては同意します。しかしなぜ『エルフの秘仙薬』
なんです？」

わからんか？ そうかグリントは長命種だもんな。分かるはず無いか。

「グリント。たとえば、これが新たな血統として認められたら、その血統の生産手段は誰が守る？ 知ってる人間が、2代3代と最低数代は監督しなきゃいけないんだよ」

「クルカはね、どこまでも自分が囿になるつもりなのさ。そして、その護衛が4人の女だって事だね」

きつと生産手段を俺しか知らないって話になれば狙われるのは俺だけだ。

「その通り、もう一つ言えば俺は裏に沈む。この街でな。まずはエルガルド家の『六血会議』復帰、そしてダントリン家が裏を取り仕切る七血目になる」

「その為の、数百年計画。で、その為に『エルフの秘仙薬』で寿命を延ばす、か。あたしと同じ事考えたんだね、クルカ」

「言われたんだ。母さんに、婆さんを労わってやってってくれって。生まれる時にそう言われた」

「婆さん、元気づきたよ。いくらなんでも。だから、何かやってるなって思った」

「まったく、自分の息子より孫に先に気づかれるとはね」
「父さんは黙ってるだけだと思っただけ？」

「分かったよ、任しときな。クルカ、お前の計画に手エ貸してやるさ。かわいい孫の頼みだ」

まあ、俺はできるだけ死なないように頑張って、放蕩領主やっ

くよ。どうせ戦闘とかできないしね。

「で、裏に潜ってなにするんだい？」

「え？婆さんとグリントがやってる、盗人の真似事とスラムの管理。どっかで盗んでスラムの子供の為に金使ってるよな？」

「グリント、あんたばらしたのかい……？」

「面目次第ありません……」

「婆さん、攻めてやるなよ？ 聞いたの赤ん坊の頃だし」

「それを覚えてるクルカの頭はどうなってるんだい……」

「とりあえず疲れたよ、お茶のお代わりくれるかい？」

そう言っつて茶を要求する婆さんをよそに、みんなに話しかける。

「こんな感じだ。みんなに説明するのが遅くなったのは悪かったけどな。まあ、成果が出るまでどうしようもなかったしな」

「私はご主人様のお傍にずっといますので問題ありません。置いて行かれてもついて行きます」

「ウチは知っつて協力してたからなく、今更、置いて行かれへんとは思っつけどついて行くで？」

「あたしゃ、黙つてたのは気に食わないけど、『エルフの秘仙薬』つて飲んだ時点で年齢とめれるんだろ？来月までにくれるならついてくよ。」

「レイチエル、止めれるんじゃないかって死ぬ数年前までその時の姿になるらしいよ。あと寿命が3〜5倍になるって。私はみんなと一緒になんかいいなあ」

耳をピコピコさせて説明し、尻尾をフリフリさせ喜ぶミランダ。

欲望がダダ漏れた。

「どうなるよ、今更長生きすんのか？ お前とさらに同い年続ける事になるらしいぞ？ グリント」

「私は今までと変わりませんよ。仕事もお仕えする方も。ね。まあ、後悔しないかと言われれば微妙ですが」

さて、これからの事をしっかりと決めていかなきゃいけないな。狐モドキの件もあるしな。

みんながいるんだ、なんとかなるだろ。

俺が何もしなくても。

「私は、どうなるんだ??」

あ、フィーリア忘れてた。色々知っちゃってるし、拉致監禁して口止めだな。よし問題無い。よく見ると結構美人だな。これは調きよ……もといお話が必要だな。グフフフ。

「な、何故か嫌な予感しかしないんだが……」

夢みる騎士と激昂する兄（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

夢みる騎士と激昂する兄

俺は今、一心不乱に模擬剣を振るっている。

許せなかった。自分が男に生まれてしまった事も、母上を軽んじる他の貴族も、養成学校で次席にすらなれなかった自分自身も。

「怖い剣だな。まるで、この世の全てを叩き伏せたがっているように見える」

気がつくと、俺の後ろには普通の騎士の甲冑よりも体のラインに沿った作りをした、繊細で美しい甲冑を身に纏った女がいた。

「君はいつも何かに追い立てられるように剣を振っているね。カラク・エルガルド」

「そんな事はないさ、ただ強く、そして誇りを手に入れただけだ」

「ふむ。誇り、か。私にはもう手に入らない物だな」

「何を言う、大陸最強と名高いソルフィッシュ家当主のご令嬢が」

彼女の名は、フィーリア・ソルフィッシュ。当代の 星の召き手の一人娘だ。

「その公爵家という冠も、ただの餌になる事が決まってしまったのだよ」

「どういう事だ？」

「君は私の従兄弟君と直接面識はあったのかな？」

「いや、訓練試合で剣を合わせた時だけだ。友人といえるほどに話した事はない」

「そうか。剣の申し子、ルード・ソルフィッシュ。今年、君や私を

抜いて首席で養成学校を卒業した訳だが」

「それは知ってる」

「彼は、王立騎士団入団試験を受けない」

「どういう事だ？ 何故受けない。ヤツの実力なら第2騎士団、いや、第1騎士団にすら飛び込み入団が可能だと言われていただろう」
「彼は次の 星の召き手 になる事が決まったのさ。これで5年は顔を見られなくなる」

「次代の最強はルード・ソルフィッシュか……何とも強さを求める者からすれば夢を壊される出来事だ」

5年は顔を見られない、という事はそれが 星の召き手 を生み出す為の必須条件の一つなのだろう。

「文字通り、私は 星の召き手 になれない事が決まったからね。後はどこぞの貴族と婚姻し、子を生す為に生きるのみだ」

「それでいいのか？」

「いいわけがない。故に王立騎士団への入団試験は受ける。父上とも約束もした。少なくとも私に負けるような男とは婚姻しない、とね」

そりゃあいい。フィーリアは腐ってもソルフィッシュだ。こいつに勝てる男なんて王立第1騎士団にしかないだろう。

「くしくも、カラック、君が私に交際を申し込んだ時と同じ条件を、今度は私が使う事になるうとは、ね」

「うるせえ。俺はまだ諦めた訳じゃねえ。お前が言ってた 星の召き手 になるから、次期当主の俺とは交際はもちろん、婚姻もできないって理由は無くなったわけだ」

「そうなるな。しかし、今の君じゃ私には勝てないさ」

「見ている、すぐに追い抜いてやる」

「君のそういう向上心が旺盛なところは、嫌いではないよ」

「ふん、言ってる」

「では、一手揉んであげようじゃないか」

そして、フィーリアと俺は模擬戦を開始した。

あれから4年が経ち、俺は今、父上に書斎に呼び出されていた。

「カラック、お前に縁談だ。メルベス公爵家のシャルティア・メルベスだ」

「待ってくれ。俺は……」

「知っている。お前がソルフィツシュ公爵家の令嬢に今だ、挑んでいる事もな」

「なら！俺は今年、第1騎士団に上がったんだ！もう少しなんだ！」

「第1騎士団に上がろうとも、ソルフィツシュ公爵家の令嬢との婚姻はできなくなった」

「なぜだ！もう少しなんだ。もう少しで……」

「……先週の六血会議で、ソルフィツシュ公爵家の令嬢はクルカとの縁談を進める事になったとの通達があった」

俺は父上が何を言っているのかわからなかった。

「どうやら王家とソルフィツシュ公爵家が極秘裏に計画していたようだ。クルカがドラゴンを追い払ったあの時から」

「どついう事だ！ あいつは！ クルカはドラゴンを倒したわけじゃない！ なんになんで！」

「私にも解らん。王も他の公爵家もこの決定にはソルフィッシュ公爵家に任せるとの事だ」

「フィーリア次第ってことか」

「そうだ。フィーリア嬢が自ら選定役を買って出たのは間違いないが。恐らく単なる武力の問題にはしないだろう」

「あいつは自分より弱い男とは婚姻しないと、それを当代の星の召き手も認めたと聞いているが？」

「そうだ。そして次代の星の召き手のお披露目が来年行われるが、それまでに見定めらしい」

「ルード・ソルフィッシュが戻ってくるのか……」

「クルカとの婚姻が成立しなかった場合、次代の星の召き手との血族婚姻を考えているらしい」

「馬鹿な！ そこまでしてソルフィッシュは最強にこだわるのか……」

「二人は従兄弟らしいからな。兄妹という訳でもない。王も承認された。フィーリア嬢にはクルカとの婚姻が血族婚姻のどちらかしか選択肢はない」

俺は、何もかもが崩れていくような気がしてならなかった。

しかし、俺にはまだエルガルド家の次期当主であるという自覚と覚悟が残っていたようだ。

俺は貴族だ。婚姻相手が自分の自由になるなどと本気で思っていたわけじゃない。

ただ、条件があうフィーリアに恋をしていただけだ。

貴族として、エルガルド家次期当主として、空の詠み姫を生み出す為、にメルベス公爵家の令嬢を愛するだけだ。

「わかりました。メルベス公爵家のシャルティア・メルベス嬢ですね」

「詳しい事は執事のガーランドに聞け。それと……」

「なんでしよう?」

「すまない、とは言わん。私も母上に決められた婚姻を受け入れた男だ。しかし私はフローリアもルーデシアも本気で愛した。空の詠み姫の血統には関係なく、な」

「お前もそうなってくれる事を祈る」

「……はい、では失礼します」

「カラック、久しぶりだな。もう第1騎士団に上がってくるとは、驚いたよ」

「フィーリア、帰ってきてたのか」

「ああ、ここ半年の遠征では少しきつかったが、なんとか無事で帰ってこれた」

「フィーリア、半年間いなかったのなら知らないかもしれないが、俺の縁談が決まった」

「そうか！ おめでとう！ これで君も私も縁談がまとまったか。第1騎士団には未婚者がエルビスだけになってしまったな。かわいいそうに」

やはり、フィーリアにとって俺は友人でしかないのだな。

「フィーリア、自分の縁談も知っているのか?」

「ああ、半年前に遠征に出る前に聞かされた。詳しい話を聞いたの

「は一昨日の事だ」

「前から知っていたのか」

「すまないな、わざと言わなかった訳じゃないんだ。ただ聞かされたのが出立直前だったからね」

「そうか、兄の俺が言うのも何なんだが、弟は無能者だ、嫌かもしれないが婚姻血族を選んだほうがいい」

「そうだ、フィーリアをあいつに、クルカに奪われるならいっその事その方があきらめもつく……………」

「星の召き手 としては歴代最強に近く仕上がっているらしいのだが、ルードは無愛想で戦闘狂な男だからな……………」

「それに弟は女にだらしない。数人の女とも関係を持っていると聞いている」

「王家とソルフィツシュ家を納得させた理由が本物ならそれでいいのさ。私は君の弟に期待しているんだ。私の夢を取り戻してくれるかもしれない男に」

「どういう事だ!? 王家とソルフィツシュ家を納得させた理由? そんなものは聞いていない。クルカにいったい何があるというんだ?」

「私は明日から騎士団を休み、イメトウルにいる君の弟の所へ向かう。次に会う時は、君の妹になる事が決まっているかもな」

「フィーリア、理由って何だ? 聞かせてくれ!」

「そう言った俺をフィーリアは本気で不思議そうに見る。」

「君は知らないのか? ……………君が知らないなら聞かせる訳にはいかない」

何故だ、俺はお前にとってその程度の男でしかなかったのか！

「フイーリア……」

「それよりも君は私の義兄になるかもしれないんだ。今から呼び方を練習しておこうか？ ……御義兄にいさん？」

よしてくれ、冗談じゃない！ 何なんだ！ 何が起きているんだ！

「そんな怖い顔をするな、カラク。私はもう行くが、君も婚約者の所にこまめに顔は出しておけよ。騎士団はいつ引っ張り出されるかわからないからな」

そう言って俺に背を向け、ヒラヒラと手を振るフイーリアに、俺は何も言う事も出来ずにただ立ち尽くしていた。

夢みる騎士と激昂する兄（後書き）

この話を一章に入れるのが納得いかなかった為、章間へ移動しました。

呼んで下さっている皆様には御迷惑をおかけしますが御理解下さい。

乙女達と二人の一夜（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

乙女達と二人の一夜

空には月が鈍く光り、そのまわりを煌めく星達が色どり、ガラス張りの屋根から差し込む光を照明代わりに乙女達の声が流れる。

昼間はその中では一番、膂力にあふれ、自信に満ちていたはずのフィーリアが力の無い表情で言う。

「私は力ばかりを求めていた脳筋だったのだろうか……？」

「しゃあないんちゃう？ 家の環境もあるし。ウチかてお父んに影響されて、研究者になっただけ」

慰めるように言うカナリーはその行動とは裏腹に、どこか投げやりだった。それに便乗し、自分とは関係ないとばかりにそっぽを向きながらも、一応は声を出したレイチエル。

「あたしや、自分の生きてきた道に疑問を感じた事はないし、主殿も認めてくれてるしねえ……」

「この屋敷にとどまる事を許された人間で、必要とされてない人っていないもんね？ 半年間、ここに居られれば問題無いと思うけど。でも、今まではみんな追い返されてるよね」

言葉と口調はあくまで軽いが、言っている事はかなり厳しいミランダは面白がっているようだ。

ここにいる者の口に出している事は会話が成り立っているようだが、本心では考えている事は大きく変わらぬ。今日のような大事な日に主人であるクルカを独り占めできるルシィが羨ましいのだ。

フィーリアは自分が欲する物を手に入れた事を羨み。

レイチエルは単純に嫉妬から。

カナリーは研究成果を出した自分がまだ褒められていない事に憤り。

ミランダは自分はまだ手を出されていないという事実から。

しかしフィーリア以外の3人だけがこっそりと、しかし確実に思っている事もある。『お前、邪魔』と。

クルカが言わなければこの屋敷に泊まる事も許可しなかっただろう。なんせ、この4人の中で唯一、許嫁という立場を手に入れる事のできる人物だったからだ。

「私は、今まで何をやってきたのだろうか。無能者と呼ばれていたクルカ殿も、十数年かけてアレを完成させたと言っていた。ただ闇雲に剣を振り、駆け抜けた私とは違いしっかりと未来を見据えているように見える」

内心、カナリーは『やばい』と思っていた。この女はきっとクルカに惚れる。カナリーの直感がフィーリアの表情と言葉から未来を予測し、警鐘を鳴らす。そして、カナリーは牽制の一手を打つ。

「でも気をつけた方がええわな。」

御主人様は今日は特別やったけど、普段は全くやる気ないように見えるし、言われた事にも渋々は従ってくれるけど強制されるの嫌いやもんなあ」

「そうだね。自分で選んだものはすっごく大事にしてるけど、それ以外のモノは人も、物も何もかも要らなくなったら、すっぱり切り捨てるよね」

「あたしや、自分が大事にされてるし、料理で手いっぱいだから切り捨てられたモノの事、考えてる余裕なんてないね」

獣人だからか、元暗殺者だからなのかトドメを刺そうとするミランダと二人とは全く関係なく、ただ大事にされている事を自慢しただけのレイチェルとは温度差が激しいようだ。

フィーリアは脳筋と呼ばれるだけの事はあるのかそんな意図に気付きもしない。しかし、『明日になれば自分は帰らなければならぬ。そしてクルカに認められる事はないだろう』と、いう事には気付いているようで彼女たちに相談、と言うより縋っているだけなのだ。

「私は貴女達が羨まし……『それは言うたらあかんで』……え？」
「自分の持つてない物を、持つてる人を羨ましがるのは仕方ないと思うよ〜でもね〜フィーちゃんのは違うよね〜。カモ立場もあつたのに有効に使わなかっただけみたいだし〜」

「愛される努力をせえへん女ほど、愛されたいってうるさいのと同じやわな。ウチみたいないええ女は愛する研究^モの為にできる事ならなんでもするで」

「料理もそうだねえ。努力もなしに結果はないし、ただ毎日料理をしてるだけでうまくなる訳じゃないしね。どれだけ愛情を込めて、創意工夫を凝らして、それでも結果が出せなくても諦めずにまた頑張る。それが当たり前だしね」

「レイチェルはんの努力には頭が下がるわな。ウチさすがに『主様あ〜』なんて猫なで声だされへんわあ〜」

「わたしも無理かな〜。拾われた時に撫でられたりしたけど、あんなのされたら何も喋る余裕ないよ〜？」

「か、カナリーあんたっ。忘れるって言うてるじゃないかっ！ 怒るよっ！」

「そ、そんなにすごいのか？ メリー殿も1時間揉まれて忘れられずに、何度も思い出すと言っていたが……」

だんだん標的の変わってきた女二人といつの間にか話の方向が変

わっている乙女二人。屋根の上から、その姿を見て何かを決意するように軽くうなずく老婆。その決意は彼女たちの今後を左右する物なのだが4人はそれに気付く事はない。

そしてここにはいないが、1時間揉まれた事を暴露されたメリーはそれらの事実気付く事も無く、昼間にグリントに眠らされた状態で存在を忘れられたまま、自室にて寝息を立てていた。

体の中に他の誰かがいる感覚。水に浮かぶ木の葉のようにゆらゆらと揺れる心地よさ。その二つを同時に感じながらルシイはもったいない気持ちから眠れずにいた。

「眠らないのか？ルシイ」

「少し。もう少し。このままでいたいです。明日になったら、また侍従長として頑張らないといけませんので」

「……そうだな。お前がいてくれるから、俺は無能でいられる。実際、取りえは無いんだが、そのせいで何も返せていない気がするよ」「そんな事、おっしゃらないで下さい。私はご主人様に必要とされている事実だけで頑張れます。十分です」

「そうか？ ならもう少し必要としてみよう」

そう言ったクルカの手が少し強くルシイの体を抱きしめ、肌の上を撫でる様に登っていく。その感触に眉を寄せ、少しだけ何かに耐える表情をしたルシイは『ふあ・・』と声をもらしながらその行為に身を委ねる。

「ご主人様のスケベ心には見境がありませんね」

「否定はできそうにないな」

「そういうところは自重して頂きたいのですが？」

「ルシイにもか？ やめると？」

「……また、言わせたいのですか？ 聞き飽きないので
すか？」

「ルシイの口からは何度でも聞きたいね」

「……。」

私はご主人様のモノです。ご主人様が、クルカ様が望むように可愛がって下さい。私がそれを望んでいます」

「ああ、お前は俺のモノだ。離しはしないし離れる事も許さん。それが俺の為だとしてもな。俺から離れる事で俺を救えると思うな。それだけはあり得ない」

「では、クルカ様のお命と私の命が天秤にかけられたら、私はどうすればいいでしょうか？ 私としましてはクルカ様に生きて頂きたいのですが……？」

「俺も、お前も助かる方法を探せ。何をどうしても絶対無理だ、と判断したら俺と共に死ぬ」

「一人でも生きては下さらないのですか？ んっ……あっああ」

クルカは言葉を吐きつつ、ルシイの肩に唇と舌を滑らせ少しだけ強く吸う。その刺激にルシイの中に残るクルカの魔力が反応し、ルシイの胸の奥を刺激する。

「無理だな。無能者の俺では生き残れんよ。誰かの傀儡になるのが精一杯だ。お前はそれでも生きると？ そう望むのか？」

「そうではっ……はあ。ありません……が。んう。」

ルシイは耐えきれないのか、体をこちらに向けると表情を隠す様に、胸に顔を寄せ『ほう……』と息を吐く。

「俺は、この世界の誰もがなしえなかった、無色魔力元素を表に出すと決めた時からお前達に守られるか。もしくは誰かの傀儡になるか。どちらかしか生きる道はなくなった」

「あ……あッ！ もう！ そこは。今だけは私にとおっしやって下さい！ 女心がわからないご主人様ですね」

そう言つて、クルカの背に伸ばした手に力を入れ、さらに爪を立てるルシィ。

「すまないな」

「ですからそこは……ンッ……はあ」

「謝らず、黙つてキスをしろ……だろ？」

そう言つて微笑みを向けるクルカに『少しは乙女心は分かるようになられましたね』と小声で言い、だがやはり爪は立てたままクルカとの時間に身を委ねるルシィの表情は妖精の様に儂げで、美しいものだった。

老人酒宴と乙女の願望（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

老人酒宴と乙女の願望

「まさかクルカ様があのような事をお考えだったとは……エヴァンはあまり、驚いてませんね」

「俺あ何かはわからねえがやらかすって思ってたからな。しかし、ありゃあそこまでの物なのか？ 御祖母様よう」

「全く驚かせてくれるよ…秘薬で伸ばしてるとはいえ、あたしの寿命を縮める気かね。あの子は」

大婆様がそう言うと、グリントとエヴァンは手に持ったグラスの中身を少しだけ口に含んで、喉を潤してから続ける。

「同調 エントレインで籠められた魔力が1割未満で私との通常戦闘をこなします。先程はきつちり1割との事でしたので、2〜3割で体が耐えられるなら、ルシイさんは私を超えますね」

グリントの本気を知っているエヴァンには驚きの事実だった。

「マジか……クルカ様も無茶するな。これはマジで俺も死ぬ準備があるかもな」

「阿呆な事をお言いで無いよ。あの子の周りは誰も死なせやしないんだよ。これ以上はね。その為に秘仙薬で寿命も延ばしたつてのに……」

「そうですね、クルカ様まで延びてしまったら元通りですしね。…ですが、御祖母様。これでいいのではありませんか？ クルカ様はフローリア様のお言葉をお守りになられているようでした。御祖母様をねぎらってあげてくれ、と」

少し、本当に少しだが悩むようなそぶりを見せた大婆様は気を取

り直したのかガラスの中身をおおる。

「どちらにしろ約束しちまったからね。『エルフの秘仙薬』も用意してやらないとね。あたしの有り金で納まるかねえ……」

「エルガルド家のお金に手をつけるわけにはいきませんからね」

「というよりもよ、そんなものホントに5、6人分も存在するのかよ？」

「ハイエルフの城に行きやあ、あるよ。あそこの先代とは茶のみ仲間さ」

「お金を用意するよりも、代価を『エルフの秘仙薬』にしてもらい、何かハイエルフから依頼を受ける方が良さそうですね」

「そうだねえ、何人分かぐらいにはなるかもねえ……。あの子たちにやらせるかい。修行も兼ねて」

そう言う大婆様とグリントの顔は悪い大人の顔になっており、エヴァンは内心で『こりゃ、苦労するぞ』と思っていた。

「しかし、エヴァン。何故、クルカ様が何かすると分かったのです？」

「何故、と言われると、明確にはできねえかもしれねえがな、風の系譜が応えてくれると言うのが一番しっくりくる言い方だな」

自分でもよく分からないが手探りで答えている、といった風のエヴァンに大婆様が聞く。

「風の流れを身に受けて誰ともなく、尋ねると漠然とした答えが返ってくる。そんな感じじゃないかい？」

「なんでわかるんだ？ 御祖母様よお」

「そりゃ、それが 空の詠み姫 の秘術の初歩の初歩だからね」

「そうなのですか？ 何故エヴァンが……」

「ああ、そりゃあ、ブルーローズのせいさ。ウチの風の系譜持ちの庭師は皆同じ感覚持つてるはずさ。いちいち教えてはやらないけどね。空の詠み姫の育て方に関わる話だからあんたにも言えないうが、少なくとも空の詠み姫が同じ事をするすべての系譜が応えてくれるのさ、本来はね」

全ては話せないが、他の血統者も知っている程度のさわりだけを話す大婆様。

「ただ、風の系譜持ちは系譜の言葉を聞くのに長けてるからね。他の系譜持ちよりはちよつとだけ、声が聞こえるんだろつさ」

「しかし、そうなるとミランダちゃんは大祖母様に見てもらった方がいいな」

「どうしてだい？ 何かあるのかい、あの娘」

「ええ、ミランダさんは初めて会った時、私達との戦闘で無詠唱で風精霊シルフを呼び出しました」

「ほんとかい？ 詠唱させたら何を呼び出すんだいその娘は。はあ、レイチエルといい……なんでこんなトコにそんな娘が集まるんだい……」

「風水女王セイレーンを呼ぶカナリーさん、風精霊シルフを無詠唱で呼ぶミランダさん、レイチエルさんの事は私は分かりませんが……ルシイさんもそうですね……」

自分の孫を取り巻く環境に頭を悩ませながら、今後を考える大婆様は不安で仕方がなかった。

「偶然、って訳じゃないんだろつな、きつと。どうなんだ？ 御祖母様？」

「恐らく、クルカが一番空の詠み姫の影響を受けてるんだろ。そのせいだろつね」

「ですがクルカ様の戦闘資質や魔法使い等としての才能は全く皆無ですよ？」

「そうだな、なりたての盗賊にも殺されるぞ。あの弱さじゃ」

「本来の 空の詠み姫 は運命の先を聞き出せるからね。クルカは知らないうちに運命を引き寄せてるのかもしれないね…死ななきやいいが…」

さらに不安が増し、三人の上にとんよりした空気が流れる。しかし、一番楽観的なエヴァンが空気を交える様にグリントに話を振るが。

「とにかく一度、全員確認してもらった方がいいんじゃないか？」

グリント

「そうですね……あ！」

「なんだい。まだ何かあるのかい？」

「どうした、グリント？」

声を出した事を悔み、言つのを少し躊躇う様なしぐさを見せた後、

「忘れていました。実は白い石から羽根の生えた白い狐が生まれました…」

「なんだいそりゃ!？」

「ん?クルカ様とルシイちゃんにくっ付いてたペットの狐か?」

「もういいよ! 今日。ややこしい事は全部明日に回すよ。頭が痛くなるったらありゃしないよ」

さらにややこしくなりそうな雰囲気で大婆様は頭を抱え、グリントに向かってグラスを差し出し、酒を注ぐように顎をしゃくった。

「もう今日は、飲むしかねえな。グリント秘蔵の酒だが」

「ああ、次は誕生日まで置いておくつもりだったのですが……」
「エルフの酒をあの子らに取りに行かせりゃいいんだよ！」

そして、三人は浴びる様に酒を飲む事に集中し始めた。

ルシイが目を覚ますと、目の前にはカナリーとメリーの顔があり、周りを見るとルシイはまだクルカに後ろから抱きしめられており腕の中から出れなかった。

「ルシイ姐さん。ちよーつと寝すぎやで」

「御祖母様は一度、ベルモ屋敷に行くと、もう出られましたよ。侍従長」

ルシイは真つ赤になりながら起きようとしますが腕から抜け出せず、しかも困った事に今のルシイは裸だ。暴れると見えてしまう。腰の後ろにあたるモノやカナリーとメリーに見られている事のせいで、頭が回らず声も出せない状況のルシイをカナリーはさらに追い詰める。

「ほら、見てメリーはん。ルシイ姐さんの腕。もあ、赤ちゃんみたいな柔らかさになつとる。顔も」

「うわっホントです。なんですこれ。ルシ、うん！ 侍従長。昨日、私と洗顔料のお話した時、こんなじゃなかったですよね」

「よう、見ときゃ。ルシイ姐さん、すっぴんやで今は」

化粧すらしていない肌を見られ、さらに赤くなるルシイだがメリ

ーにすれば、何故か一日でゆで卵の白身のようにツルツルすべすべになっているルシイの肌が許せなかった。

「侍従長！ 昨日言っていた洗顔料なんかどうでもいいですから！ どうやったたらこうなるんです！？ 教えてください！」
「どうやったらって…それは…えっと…」

ルシイは今の肌はクルカとの行為によってそうなったのだと思い込んでいる。だが、実はクルカにエントレイン同調で注がれた、無色魔力元素の残留による生命活性の若返り効果なのだが、昨日初めて試したばかりのルシイはそんな事は分からない。

もちろん、カナリーは知っていて黙っているのだが。
クルカとの行為を説明する訳にも行かず、意味のある言葉を返せないルシイの上から声がかかる。

「えっと、だから…クルカ様に…」
「俺が思いつきり触ったから、こうなったんだよ。それはもう触ってないトコが無い位にな。なあ。ルシイ」
「は、はい……………ボツ」

自分の返事の意味を理解しさらに赤くなるルシイ。

カナリーがそろそろやめないと頭に血が上がりすぎてルシイが倒れるのではないと思い始めた時、メリーによって爆弾は投下された。

「そんなはずありません！ 昨晩はクルカ様、私の胸を一時間近く揉みいただいたじゃないですか！ 私の胸はそんな肌になりませんでした！」

その言葉を聞いた瞬間、隣にいたカナリーは扉の外で楽しんでいるはずのミランダとレイチエルの所へと一目散に逃げた。

その事にも、ルシイの変化にも気付かないメリーは、クルカにさらに詰問を続ける。

「本当にクルカ様にこんな風にできるんですか？　こんな全ての女性が望む事じゃないですか！　こうなれるんだったらどんな事されても構いませんので私にもして下さい！」

「いや、それはちよつとまずいというか、その前に俺が死ぬというか、ね？　わかるだろ？　そろそろ気付こうよ？」

「ご主人様は一度、死ぬべきだと私は思いますが。どう思われますかご主人様？」

「個人的な意見では、まだ生きていたいかなと思うのですが……」

ルシイの背負う、人間よりも大きな暗い影の様なモノの中に赤く眼が光る骸骨を見たメリーは恐怖のあまり、その場で意識を手放した。

「あらあら、メリー。メイドがご主人様の部屋で倒れちゃだめよ？　また、ケダモノなご主人様に胸をちよつとどころか1時間も揉まれたいかしら？」

その言葉に『ああ〜おれ、ここでしぬんだ〜』とクルカは悟ってしまう。

「ご主人様。侍従長たるこのワタクシが、黄泉への旅路のお手伝いをさせて頂きますが、ご希望はございますか？」

「せめて、そのツルツルすすべ最上級のルシイの柔らかい胸の中で天国へ行かせて下さい……」

「この期に及んでまだ胸胸胸と……メリーの胸と言わないところは評

価して差し上げます。ご希望どおり、ご案内いたしましょう」

その言葉を聞いた後、クルカは顔に柔らかい感触を感じつつも、首が螺旋切れる程の強烈な痛みを意識を手放すのだった……

「結局どついう事なんだい？カナリー」

「あの肌はな、御主人様とのエントレイン同調で残った魔力が生命活性させるの影響でああいう風になんねん」

「レイチエル、ちよつと目が怖いよ？」

「ミラにはまだわかんないのさ！あと10年もすりゃ、嫌でもわかるさ」

「まあ、ミランダちゃんはまだ問題無いはな。でもあれは1週間ほどで元に戻るからなあ。ウチが試した時もなったで？」

「あたしもなれるのかい？」

「じゃあ、カナちゃん、レイチエル……」

「なんだい？ミラ」

「なんや？」

「あの状態で、昨日、ご主人様が言ってた『エルフの秘仙薬』飲むとどうなるの？ずっとツルツルすべすべ？」

『「それだッ！』』

「あれ？ルシイ姐さん、いつのまに？」

「そんな事はどうでもいいのです！御祖母様はどこですか！効果が切れないうちに……」

「もう帰った後だよ。侍従長。次回を待ちな……次の満月には用意してくれるように頼もう……」

「レイチエルはん自分の事だけかいな……結構腹黒いなあ……」

「でも知ってて、カナちゃんも黙ってたんだよね？」

「っ！カナリー……」カナリーさん？」

「う、ウチはあれやで！ 黙っとかなアカンかってんもん！ エントレイン同調自体が、御主人様が隠してる事やったし！」

「俺はそこだけでも言おうかって言ったぞ……カナが

黙っとして！ 今はウチだけに堪能させて！」

つて一週間ごとにエントレイン同調で魔力供給させたんじゃないか

「ほほお……？」

「御主人様の裏切りもーん！ ええよ。ホンならウチも言うたるわつ。すべすべつるつる最高級になったウチの胸に挟んで、堪能させてくれたらそうするって言うたんは御主人様や！」

「侍従長、これはどうだろうねえ」

「死刑です。レイチエルさん」

「ま、待て。レチエ！ お前には満月の晩に少しだけやってやったる？ だから手荒れもおさまったる？」

「あ、アレはエントレイン同調だったのかい。アレ以上は無理なのかい？」

「いや、あの時のエントレイン同調は手から流したからな。粘膜接触な
らもつと効果はある」

「ん……」

「どうしたんだい、ミラ？」

「簡単にもできるなら、メリーちゃん、起きたら自分もって言い出ささない？」

「それはまずいね……」

「これ以上増やしたらアカンとウチは思う」

「それには私も賛成ですな」

「わたしはちゃんとゴシユジンサマが決めるまでは今のままでいいかな」

「あの、既に聞いてしまったのだが……私は一緒させて頂いていい

だろうか…」

「フィーリア様、居られたのですか？」

「おったんや？」

「いたのかい…」

「気付いてやれよ…」

「居たの知ってたよ？」

「わ、私だって剣振ってるよ肌が荒れて…私だって…私だって…綺麗になっただって良いじゃないかあゝ！」

「わっ、アホ。大声出したらメリー起きるやろ」

「カナリーさん、フィーリア様を運びますよ。口押させて！」

「よっしゃ！」

『ムグッ！ モゴモゴッ！』

「レイチエルさん、ご主人様を連れていってください」

「了解さ。どこにだい？」

「お風呂で良いんじゃないかな」

「分かったよ。ほら行くよ」

「抵抗する気も起きねえよ…」

「さ、いこつか。狐モドキ。【キャン！】」

「ミル。そいつの名前、狐モドキにしちまうつもりか？」

その後、メリー以外の女性全員は何故か、肌が綺麗になっていた。その事をメリーは不思議に思ったが、怒ったルシィのあまりの恐さに朝の記憶が抜け落ちたメリーには知る術はなかった。

老人酒宴と乙女の願望（後書き）

これで一区切りです。

流石にプロットや小説の基礎など守るべき部分を無視し、書きたい事象だけを、書きたい表現で書きなぐってきたツケが溜まっており
ます。

修正も同時進行で行いますので、掲載は続けますが執筆速度は落ち
ると思われます。

この駄文を気に入って頂けた方にはご迷惑をおかけしますが更新は
気長にお待ち下さい。

あと評価を頂けると筆者が大変喜びます。

よろしくお願い致します。

第01話 騎士は夢を捨てる？」1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第01話 騎士は夢を捨てる？「1」

信じられなかった。

私は信じたくなかった。

私の努力が次の世代を産む為の供物でしかないと言う事を。

「くッ」

一呼吸ずらせたはずなのに躲すのが精一杯だった。

目の前にグリント殿の拳が迫る。それを頭を右にずらす事で避け、首を左に戻す動作と右側に構えた剣を左側に切り上げる動作を重ねる事で剣速を上げる。

刹那の瞬間、何故か後方に迫る風を感じ、切り上げた剣を置き去りにしたまま膝を曲げ、体を無理やり下ろし、その動きを反動にして後方に飛ぶ。

前を見ると、先程、呼吸をずらして躲したはずの投擲されたナイフがグリント殿の胸の前にあり、私がかわした事で自分に向かっていた刃を、グリント殿は指で受け止めているようだった。

「今のを、躲しますか。流石ですね。第1騎士団というのも伊達ではない様です。しかし、何故……ああ、ワイヤーの風切り音に気付かれたのですね。流石でございますな、フィーリア様」

自分すら理解していなかった行動に、説明を付けられ『この執事は格上だ、2段以上は確実に』と、認識する。

「避けたはずのナイフが誰もいないはずの背後から、襲ってくるのは……模擬戦ではなかったの？」

「もちろん模擬戦ですとも、当たっていけばフィーリア様はそこで終了です」

「何とも、物騒な模擬戦だな　ッ！」

言った瞬間に、グリント殿の足元に飛び込み、天に上るかのよう
に上体と右手のみで支えた剣を跳ね上げる。そして　躲すのを確
認しては間に合わないッ　切り上がりつつある剣をそのまま
に、左の拳を目標も立てずにつき出す。流石に読めなかったのか驚
いた表情をしながらも躲すグリント殿に、切り上げた剣を勢いのま
ま、自分の左肩へと振りおろし、肘を前に向けて体ごと突き出した。
読み切れなかったのか、一瞬で2、3歩下がるとグリント殿が体
制を整える。

「いやはや、今の肘からの体当たりは冒険者の格闘術ですか？」

「ああ、威力は無いに等しいが、何が起こったのか分からなければ
相手の動きが止まるのだ。牽制でしかないし、一度しか使えないが」
「そうでしょうな、力が乗らない事がばれば避けようともしませ
んから」

「しかし、初見で避けられるとは思わなかった。流石はエルガルド
家の執事、というところか？」

「簡単に敗北しては、御当主様をお守りする御役目など果たせませ
んの。しかし、フィーリア様の模擬戦はこれにて終了でございま
す」

……？　意味が分からない。

「フィーちゃん、御団子」

「ミランダ殿？」

言われて、頭の後ろに結った御団子に触れるとナイフが刺さっていた。驚き、グリント殿の方を見ると手には何も無い。やられた。しかもいつ刺されたのか全く分からない。

「フィーちゃんが肘立てて突っ込む時にグリじいちゃん刺しながら下がってたよ。ちょっと刺しにくそうだったけど」

「そうか……む？　これは。このナイフは偽物じゃないか！　木か？」

「そうです。木でできた物に色を塗っただけのものですよ」

だから当たったら終わりだったのか……

「さて、ミランダさん。訓練を始めましょう。」

「はあ〜い。いっきま〜す」

「では」

なんだこれは。まるで二人が何人もいる様に見える……

「これは特殊な歩法によるものです。人間はみたい物しか見ません。いえ、見えているのですが常識から外れると認識しづらくなるのです」

グリント殿が訓練をしながらも説明してくれる。

「例えば、右手を振り上げようとすると勘のいい人は気付きます。そして実際に右手が振り上がるとその予測進路が認識されます。下から右上へなのか、左上へなのかその予測を裏切るタイミングで逆方向に動かすと人間は認識できず、消えてしまったように見えます。」

その行為を何度も繰り返すと、一瞬だけ見えて、また見えなくなる。という状況が続き、何人にも見える、という現象を引き起こします。

「これは、私にも可能なのか？」

「歩法を学べば、ですが可能です。フィーリアさんがやってもクル力様ぐらいになら消えたように見えますよ」

「相手の力量によって変わるのか？」

「消えた、見えない、と言うのは相手の認識ですから。行っている者の意図通りになるかどうかは分かりません。もちろん相手の視線や表情で判断できるようにもなりますがね」

「実際に実感して知っている者には効き難いですね、あとかなりの速度に慣れた方など。まあ、これを蠅の動きだと思えば分かりやすいですか？」

「なるほど……知りたい、が」

「修練あるのみ。でございますよ」

「だろうな。しかしカナリー殿は魔法使いですか？ 先程から、ずっと瞑想に耽っておられるようだ」

「カナリーさんは精霊と話をしておいでなのでしょう」

「カナリー殿は精霊術師なのか」

「それもできる、というだけです。本職は機構師ですから」

それを聞き、私は驚いた。機構師という職は古代魔法に精通する為、古代語の翻訳や刻印する技術の研鑽に時間を割く為、他の事が出来ない者が多い。なのにカナリー殿は機構師であり、精霊術師であり、メイドもこなしていると聞く。

天才、か。いるな、そういう人物も。世の中は広い。

すると、屋敷の方からレイチエル殿が歩いてくるのが見えた。レイチエル殿は私の傍まで来ると全員に声をかける。

「みんな、もう少ししたら、昼食の時間だよ。今から調理始めるから、そろそろ切り上げて、後1時間ほどで食堂に集まっておくれ」
「分かりました。ミランダさん仕上げです」

「はあ〜い」

「レイチエルはん、手伝った方がええ？」

「いや、大丈夫さ。フィーリア様もその鎧、脱いでおきなよ？」

「ああ、そうさせてもらう。では、私は着替えてこよう」

私は鎧を脱ぎ、汗を拭く為にお借りしている客間へと向かう。途中で、少し石鹸の香りのする狐に出会ったが、何も無くただ通り過ぎる。

客間に入ってすぐに鎧を脱ぎ、体を拭いて、お借りした部屋着に着替える。

ここは不思議な屋敷だ。家の中で部屋着で歩いていても、咎められる事もなければ不審な顔も向けられない。

私の本家の屋敷で執事に見つかるものならお説教が待っているだろう、はしたないと。すぐさまドレスを着せられ、いつでもどなたにでもお会いできるように、と言われる事だろう。

髪にしてもそうだ。模擬戦や修練の邪魔になるので短くしたいのだが、ドレスを着た時の事を考えて伸ばす様に言われた。まあ、髪は綺麗だと褒められるので悪い気はしないのだが。

この屋敷では食事も使用人と一緒にとる。これも私の本家ではありえない光景だ。だが、何故か少し心地よかった。

『コンコン、コンコン』

乾いた木を打ち合わせる様なノックの音がし、扉の向こうから声がかかる。

「フィーリア様、おられますか？」

「ああ、今、体を拭かせてもらっている。何か用だろうか」

「お食事の御用意が整いましたので、準備ができましたら食堂にお越しください」

「ルシィ殿、すぐに出る。少し待って頂けるか？」

「了解しました。こちらでお待ち致します」

部屋を出る時にふと脱ぎ捨ててある鎧が目に入ったが……後でも構わないだろう……そう考えて置いたまますぐに出る。

「お待たせした」

「いえ、ではまいりましょうか」

「うん。それで、ルシィ殿。今日はクルカ殿はどちらに？」

「今は食堂におられますが午前中は、エヴァンさんと庭園におられたようです。恐らく、薔薇の状態を見に行かれたのでしょう」

「クルカ殿は花や植物がお好きなのか？」

「いえ、別段、そういう嗜好があるとは聞いておりませんが、亡くなられたクルカ様の御母上様がお好みになられていたそうです」

「そうか、それは申し訳ない事を聞いたな」

「構いません。ご主人様も気にはなされませんので。軽んじるようなお言葉だけお気を付け頂ければ、結構かと思えます」

そして、一番気になっていた事を聞いてみる。

「ルシィ殿は、その、やはり私がクルカ殿の許嫁になる事は反対なのだろうか？ その割にはこう、嫌な雰囲気を感じないと言っか、その」

「不思議、でしょうか？ フィーリア様がどのような御環境でお育ちになられたのかは存じ上げませんが、貴族というものは婚姻相手を自由に選べるものではない。私はそう認識しております。ですので、私の個人的感情や想いがご主人様に御迷惑をおかけすることの

無い様に、とはいっても考えております。ご主人様が納得されてフィリア様を娶られるのであれば問題はありませぬ」

そう言うルシィ殿の口調や表情は前もって準備されていたかのよう
に淡々としたものであった。そして、その事がクル力殿の前では
明るく澆刺としたルシィ殿との違いをはっきりとさせており、彼女
の心の内とは違うものなのだと理解させてくれる。

「そういう、ものなのだな。やはり。……私は才能があると言われ
育てられた為か、私が夫を選ぶものだと思つて生きてきてしまつた
ようだな。自分ではそんなつもりは全くなかつたのだが……いざ、
婚姻の話を進められると納得できなかつた。私も貴族の娘だ、婚姻
相手を選べる、などと思つていたはずではなかつたのだがな」

「フィリア様の目には、ご主人様が眩しく映つておられるのでし
ょう。フィリア様が望んだ、最強への欠片を持ち、自分が望まな
い結婚などしないと言いきれる、ご主人様が羨ましく感じられるの
ではないでしょうか」

「そうなのかもしれないな……」

「失礼を承知で言わせて頂ければ、そのような羨望は、貴族社会に
生きていくとすぐに消え去ると思われませぬ。周りがみな同じなので
すから。むしろ、ご主人様のような方が異端なのです」

確かにそれは正論だ。だが納得できない自分がここに居る。

「私は、ご主人様を敬愛し、心の底からお仕えさせて頂いておりま
すが、貴族の中での良い主なのか？ と聞かれましたら、はっきり
と『いいえ』とお答え致します」

「そう、か。私は懂れているのだな。自由に振舞うクル力殿に」

私はそう言いながら、恐らくルシィ殿はクル力殿のそういった部

分にも安らぎを感じているのだろうと察する事が出来た。そして、会話に集中し過ぎていたのだろう、後ろから声がかかるまでその人物の接近に気付く事が出来なかった。

「俺に憧れようが、惚れようが構わないがな。一時の火遊びで終わる覚悟があるのなら好きにすればいい。お相手しよう。だがずっと居られるとは思はないでいた方が良いでしょう」

「なッ!？」

驚き、振り向く私の横を通りすぎ、クルカ殿は立ち止まることなくそのまま一人で先に食堂へと向かう。

「まあ、クルカ様も親切も込めてああ言ってるんだ。踏み込むには覚悟した方が良いでしょう。騎士の姉ちゃん」

「エヴァンさん! フィーリア様になんて呼び方をされるのですか!」

「まあ、そう言うなよ、ルシィちゃん。ちゃんとした場では気を付けるさ。ほら行くぞ」

「もう! 知りませんよ、いつか失敗して手打ちになっても」

「へいへい」

クルカ殿の背中が先の角を曲つたのを見てか、軽口をたたきながら歩いて行く二人について行きながら声をかける。

「親切と言うのはどういう意味なのだ?」

「そのまんまさね。ルシィちゃん、カラック坊ちゃんとルーデシア様を送ってきた使用者で送り返したのは合計何人だ?」

「ですから、使用人はカラック様とルーデシア様からではないとベルフアスト様が仰っていたではありませんか! 34人です!」

今この屋敷に居る人数と、追い返された人数。そのあまりの数の違いに驚いて聞き返してしまった

「34人!? そんなにもこの屋敷には居たのに追い返したのか?」
「まあ、34人中、クルカ様を心配して来たのが20人。残りの14人はクルカ様の籠絡か、情報収集か。どちらにしろそのたぐいだ」
「ですから、証拠はありませんから軽々しく言わないでください!」
「あの時の結果を知っていれば納得できるのだが、こちらに来た当時はただの無能者だと思われていたのだろうか?」

カラツクは友人だ、よく知っている。性格も力量も貴族の中では有数のモノを持っていると言える。きつと当主になるだろう、クルカ殿のアレを見ていなければ、だが。それ故に知らないはずの人間にそこまで警戒される理由が分からず聞いてみる。

「それでも、さ。ドラゴン追い払うなんて無茶するんだ。何か起きてエルガルド家そのものを取りこまれちゃカラツク坊ちゃんを当主にしてやれないって思ったんだ。子供思いのお母様は」

「エヴァンさん! 言いすぎです! たしかに4年で、いえ、実質3年で34人は多いかと思いますが…」

「3年?」
「ああ、クルカ様がダントリン家当主として襲名されるまでは送られてこなかったんだよ」

何かあったのだろうか? 3年前に? 他家の事だ、私に分かる訳もないが、少し気になる。

「エヴァンさんもそこまで分かっているんですから、ご主人様に遊ばない様に言って下さい。後始末も大変なんですから……」

「はッ。抱きたい盛りの男に誘惑されても我慢しろって方が酷

だろ？ それかルシイちゃんが毎晩、夜伽に行けば何もしないんじゃないか？
「やねえか？」

「もう！ エヴァンさん！」

……ひ、ひ、火遊びとはそういう事か！ な、なんてことを言うんだ！ クルカ殿は！ やっと先程の意味が分かった私は、恐らく真っ赤になっているであろう顔を振り払い誤魔化すように話しかける。

「そ、それでは、今は私が送り込まれた者だとクルカ殿に認識されているという事か？」

「そうだろうな、しびれを切らして大物を送り込んできたって思っている。クルカ様はあんまり他家には詳しくないからな」

「お二人は違うと言う事か？」

「ええ。私はカラツク様がフィーリア様に、ご執心だった事を存じ上げておりますので」

「俺あ、今も後ろからこっそり話を聞きながら着いて来てるメリーちゃんはカラツク様に、クルカ様と騎士の姉ちゃんの婚姻が、どうなりそうか報告してるの知ってるからな」

そう立て続けに驚く内容を言われた私は、ルシイ殿の言葉に驚き、エヴァン殿の言葉に驚く前に振り向いてから、さらに驚くという奇行に走ってしまった。振り向いた先には先日、イメトウルの街で案内をしてくれたメイドが、諦めたかのように少し上を向きながら歩いてきた。

「なんでエヴァンさんは分かったんです？」

「エルガルド家に仕える使用人舐めんなってこった」

「メリー殿は、その。間者なのか？」

「その話は後にしましょう。せっかくのレイチエルの料理が冷めてしまいます。それでは料理に失礼ですから」

そう言っていていつの間にか到着していた食堂の扉を開くルシィ殿に促され、私達は食堂へと入っていった。

第02話 騎士は夢を捨てる？」2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第02話 騎士は夢を捨てる？「2」

知らなかった。

自分を取り巻く世界がこんなに汚い感情にあふれている事を。

甘えていた。

自分の恵まれた家系とその才能に目を曇らせて。

先程までのやり取りなど、無かったかのように何食わぬ顔で食事を始め、食べ続けるエヴァン殿とルシィ殿。

それも意味が分からなかった。彼女は間者だったのだぞ！？ 何故詰問しない？ 何故、彼女を放ったまま……………

「どうしたんだい？ フィーリアさん。口に合わなかったかい？」

「そんなこと無いやんなあ？ 今日もめっちゃ美味しいで。レイチエル」

「美味しいよ？ フィーちゃん、嫌いななの？」

「いや、そうではない。とても美味しいのだ。美味しいのだが……………」

……………こんな気分の乗らない食べ方はレイチエル殿に失礼だな……………と考えるとクルカ殿がおかしなことを言い出した。

「俺はこの『シチュー』すごい好きだけどな〜」

「ご主人様……………こちらの料理は『ポトフ』です。恥をかかないうちに料理のお話は避ける様になさってください」

「マジかよ！ ルシィ……………じゃあ！ 煮込んだ野菜とか肉を皿に盛って、スープを別に出す料理は！？」

「ルシィさんの言っている事は本当です。そしてクルカ様がおっし

やっているのが『シチュー』でございますが？」

「何でだよグリント！ またなのかよ……次は『シチュー』と『ポトフ』かよ……油断した……」

「御主人様。なんか頭良くなる薬でも研究したるか？ ウチもちよつとかわいそうになつてきたわ。ここまで間違つと」

「わたしがこないだ聞いたのは、『レモン』と『ライム』だったよね？ ゴシユジンサマ？」

「うわつ。それはあり得へんで。色全然違うやん。緑の『レモン』に黄色い『ライム』が正解やろ？」

「あつてるよ。カナリーは大丈夫」

「クルカ殿は、その、失礼だが物覚えが悪いのか？」

一応、遠慮しながら聞いてみる。

「そうじゃねえんだ。騎士の姉ちゃん。クルカ様は覚える時に間違つて覚えてるんだ。『ブロッコリー』と『カリフラワー』を逆に覚えたりな」

「私もここに3カ月前に来て聞いた時はびっくりしました。『レタス』と『キャベツ』を逆に思つてたつて聞きましたよ」

何か子供がよくするような間違いばかりだな？……と思つていると。

「今、なんか子供っぽいなつて思つたら？」

「ッな！」

「あたしも思つたからね！。初めて聞いた時には。この主殿は子供か？ 精神年齢幾つなんだい？ つて思つたもんさ。はっはっはっ。」

「でも可愛い間違いだよ。ゴシユジンサマ」

「そうだねえ。可愛いね……『夜のレイチエルはんは、もっと可愛

いらしいで。甘え方が『……そうだねえ可愛いねえ……』って！ カナリー！！」

「おう、それはめっちゃめっちゃ可愛いぞ。『アルシサマ主様あ〜』なんて言っすり寄ってくるからな」

「言っなあ！！ ぶっころすよ！」

レイチエル殿、可愛いと言ってもらえるなら良いではないか……と思っているとレイチエルに強く肩を掴まれた。

「忘れな！ 忘れるんだよ！ いいね！」

「は、はい。忘れます」

応えるのが精一杯だった……レイチエル殿も実はすごく強かったりするのだろうか……

そんなことを言ってる間にみんなが食事を食べ終えたのを確認したのか、クルル力殿が話を始めた。

「さて、レイチエル。今日も本当に美味かった。御馳走様。

さて、みんなに大事な話がある。来月の頭に婆さんがこっちに来て、この屋敷で暮らす事が決まった。そして入れ替わりでメリーには王都の屋敷に戻ってもらう」

「やっぱりそうなりますよね。なんとなくわかってましたが」

「悪いな。後はグリント、説明して」

「はい。御祖母様は御自分の専属メイドと執事を連れてこられますので、生活は今まで通りで構わないとの事です。エヴァンは野菜の消費だけ注意して下さい。レイチエルさん、食事はレイチエルさんの料理を食べたい時に事前にお伝えして頂けるとの事です。その際はお願ひします」

そこで言葉を切った、グリント殿の後に続くように、ルシィ殿が

みんなに話しかける。

「グリント老にもお伝えしましたが、今回の件で男性の浴室が壊れてしまいました。修理をお願いした時に、御祖母様用に南側の浴室も使える様、復旧を依頼しております。修理と復旧が終わるのは御祖母様が来られる1週間前です。御祖母様と使用人の方々が来られましたら、その日から屋敷の南側をお使い頂きます」

「そして、今回の事で、メリーさん、フィーリア様、御祖母様にクルカ様の秘密をお話になられました」

「ん？ メリーちゃんにも話したのか？ クルカ様」

「ああ、実演付きで、ここに居る全員の肌をツルツルすべすべにしてやった」

「これが他家や他の女性にはねますと恐らく、お肌の曲がり角どころか下り坂を下りきってしまいそうな方々がクルカ様を奪おうとされるかも知れません」

彼女は何を言っている？

「その為、御祖母様が一緒に生活をして下さる事で、ガードを固めるという事になりますね。そして、メリーさん。貴女が、カラツク様かルーデシア様の依頼により盗賊ギルドより派遣されている事は知っています。ですからカラツク様かルーデシア様にこの内容をお伝える分には、クルカ様にも目を瞑って頂きますので、貴女もギルドの方には広めないでください。でないと女性が押し掛けてこの屋敷がとんでもない事になります」

「……分かりました……ですが……『条件を増やしてやる』……え？」

「メル、お前が恋人を作った時、その恋人との『この日だけは！』って日の前にここに来い。最高級のツルツルすべすべにしてやる。」

あちこち触られるのは覚悟して来いよ？そうしないと出来ないからな。

ついでに教えてやると、本家の今の料理長の料理は老化防止対策アンチエイジングがいつぱい詰まった料理だ。なんとかあの屋敷に残ると、普通に年とるよりは若く生き永らえられるぞ」

「ほんとですかッ！？ 分かりました！ 守ります！ 残ります！」

彼らはいったい何の話をしている！？

『ダンッ！！！！！！！』

机を叩いてしまった私にクル力殿は片眉を上げただけで、私と視線を合わせたまま、他のみんなに話しかける。

「じゃ、みんな。仕事に戻ってくれ。ルシィ、グリントはちょっと残ってくれ。良いよな？ 脳筋お嬢さん？」

「構わないッ！」

脳筋脳筋とツ。そう言えばからかわれる時しか名前で呼ばれていない。私は所詮その程度の相手と言う事か。そして4人以外が出て行くのを確認してからクル力殿が話しを始める

「で？ 何を怒っている？」

「何をだど？ 彼女は間者なのだろう？ 問い詰めて誰がよこしたのか、吐かせればいいではないか！」

「フィーリア様。本家の方がお認めにならなければどうするのです？」

「それはッ……『それに……』……え？」

グリント殿はたしなめる様に淡々と言葉を投げかけてくる。

「それに、下手に食いついてしまつて本当の事まで辿り着かれたらどうするのです?」

そう言う事かッ! 相手の小手先の偵察の目を眩ませる為に、大切な部分は隠して中途半端で実用的な部分を明かすのか……

「恐らく、本家に戻つたメリーさんが報告する事で、クルカ様は自分の欲望を満足させつつ、女性を味方につける方法を発見した。という風に思われるのではないですか?」

「そして、私達四人はそれを四人だけのモノとする為に、次々来るメイドを追い返している。と捉えて頂ければ、完璧なのですが。そこまでは無理でしょうか? グリント老?」

ルシイ殿はその内容に自信が無いのか、グリント殿に確認を取る。しかしそこで答えを返したのはクルカ殿だった。

「いけるんじゃないか? ただ問題はこの脳筋姉ちゃんの評判が悪くなるって事だな」

「ど、どういう事だ! 何故、私の評判が悪くなる!」

「グリント、ちよつと脳筋ほぐして差し上げて」

「何だとッ!」

「落ち着いて下さい。フィーリア様。説明いたしますと、今回貴女様は、独断で当家に来られました。そしてクルカ様が帰れと仰られたにも関わらず、当家に滞在しておられます」

「そうだな。それがどうした」

「そこから、帰りたくない何か、もしくは得たいモノがある。と、判断されます」

「うん。その通りだからな。問題無い」

「しかし、誰もエントレイン同調の事は知らず、しかもメリーが知つて

いるのは多少のクルカ様からのセクハラを引き換えにした、肌を綺麗にする技術です」

………つまり何かッ！ 私はクルカ殿のセクハラか、肌を綺麗にする技術に惚れこみ居座っている女という風に見えるという事かッ！………！

私はよほどすごい表情をしていたのだらう、目の前の三人がそろって可哀想な子供を見る目で私を見ている。

「まあ、婆さんが帰ってくるまでの辛抱だ。婆さんのシナリオだからな。伊達に長生きしていないというか、駆け引きが巧いというか」「いい。構わない。それでもエントレイン同調に私が成功できるなら構わない」

「出来ないぜ」

「え？」

「出来ないのです」

「なぜ？ 腕と足の肌は綺麗になったじゃないか。恥かしい思いをして耐えたのだぞ！ 何故エントレイン同調できないんだ！」

湯浴み着の裾を自分からまくりあげて、男性に足を触らせるなど、生まれてこの方した事無かったのだぞ！ たとえ相手が目隠しをしていて目が見えてなかったとしてもだ！ それが無駄だったというのか！？

「ミランダさんで試したのですが、なれませんでした」

「彼女は ハーフ だからじゃないのか？」

「いえ、カナリーに調べてもらったのですが、体を重ねる行為など、ご主人様の記憶にかなり焼きついている状態か、よほど強く想い合っていないと、受け取る側の奥の方まで魔力が浸透しない様です」
「ちなみに、クルカ様はルシィさんのほくろの場所を目をつぶって

ソラで言えるほど熟知されております。

ルシィさんもクルカ様のどんなモノでも無条件で受け入れて行^{行為}いますので、相性は全く問題ありませんでした」

「グリント老！ ほくろの場所は今は関係ありません！」

「って事だ。何の信頼関係もない脳筋姉ちゃんじゃ、肌を綺麗にするので精一杯だ。本格的に諦めてくれ」

「レイチエルさんとカナリーさんも問題はありませんでしたね。クルカ様」

「そうだな。レイチエルはあの甘え方だ。忘れられる訳無いし。カナリーとはドラゴンの時に死線くぐったからな。二人で」

「そうなんですね？ やはり、そういった強いつながりが、何か必要になるのでしょうか？」

私はまたダメなのか？ 手に入らないのか……ああ……もう、あの嫌な従兄弟殿と婚姻するしかないのだろうか……

「しかしクルカ様、手段が無い訳では無いですよね？」

「どういう事です？ グリント老？」
「ないだろ？」

っ！！ 何か手があるのかッ！ ないのか？ どちらなんだッ

！！

「どうすればいいッ!？」

「お、お待ちください。フィーリア様、まだ色々と検証段階なのですから……」

「どつでもいいッ！ どつやったらできるッ？」

「で、では。よろしいですか？ ミランダさんは、男性を受け入れる、というところで躓きました。それは恐らくフィーリア様も同じでしょう。この辺りはお二人がどこまでクルカ様を受け入れるか、

という問題になりますのでご自分で解決して頂くしかありません」

「そこもなんとかして欲しいのだが……一週間前は顔も知らなかったのだ。そんな簡単に体を開けと言われても……胸も好みじゃないだろうし。青は嫌いかも知れないのだから、髪だって好みじゃないだろうし。いや、私は何を考えている？ クルカ殿が好みだと言えば、受け入れられるという事か？ そんなはずは……」

「ま、まあ、いい。今は続きを聞こう。」

「そして今度はクルカ様の問題です」

「俺か？ なんにも問題ないが？」

「ミランダさんに関してはそうでしょう。しかしフィーリアさんは？」

「受け入れる気が無いからどうしようもないな」

「そこです。そこを何とかしなければ他の方への実け……ウオツホン！ もとい他の方でも強化できるようにはなりません」

「……グリント殿、私は実験台なのか？ ……いやッ！ エントレイ
ン調できるのなら私は四の五の言わないぞッ。」

「で、私はどうすればいいのだ？」

「ルシイさん、クルカ様がよくお望みになる事を、抽象的に教えてください」

「えっと……」

「ああ！ 性的な事は結構です。行為は後からでも出来ますので」
「お前にとってはそれすら実験行為なのか？ グリントよ……」

「そうですね、よく私に『自分だけのモノだ』と『好きにして下さい』と言わせようとされますね」

「つまり、その存在が全て、自分のモノでなければ気が済まない。という事ですね。そして、レイチェルさんの場合から、大事なもの

でも苛めたいという願望がある事が窺えます。そして、お二人に共通する事ですが、とても甘えられるのを好まれるということですよ」「で？　そういう風に俺の願望を暴露されるのは、結構うっとうしいから早く話を進めてくれ」

「まだ、カナリーさんの例があるのですが……」

「結果から行こう！　ルシイのフィンキがキケンダ！　結論で言え！」

「結論としては全ての条件を踏まえた結果、ここに居る女性全員と対等かつ、奴隷のようにクルカ様に仕える人間になればいい、という事ですね。」

は！？

「私に使用人と同等になれというのか？」

「はい、でなければ諦めて下さい」

「私は、ソルフィツシュ家の……」

グリント殿に睨まれて続きを言う事が出来なかった……

「貴女がどこの誰だろうと、そんな事は知った事ではございません。クルカ様は、今ここに居るルシイさんを筆頭に4人全てを妻とし、子供をおつくりになる覚悟を決めておられます。」

……少々気が多い様に思わない事も無いですが……

しかし！　一応貴族の風習の問題もありますので、私に命じられ、どこの馬鹿娘でも娶ろうかとお探しになっておいでです。あくまで、5人になろうとも誰かが上になる事が無い様な方をという条件付きで」

「ご主人様……」

大事にされて嬉しいのか、ルシイ殿は目に涙を溜めているが、クル力殿は顔が引きつっていないか？

だが、まあ言っている事が分からない訳ではない。大事にしている人間とだからこそ、あそこまでの力を引き出せる、という事には納得できる。

「フイリア様、貴女がその『5人が対等で居られる貴族の嫁』になられるのであればエントレインも不可能ではないでしょう。ですが表面的にそうしたところで結果が得られないのは目に見えていますからな」

「あとは私の努力次第、ということか」

「そういう事です」

「努力次第といっても、分からないのだが、具体的にどうすればいい？」

「そうですね、花嫁修業期間としてここで明日から、クル力様に絶対服従のメイドでもなさってみては如何ですか？」

「それであれば皆さんとも対等ですし、クル力様と過ごされる時間も増え、絆が強くなれば早く成功するのではありませんか？

お仕事とクル力様の扱いはルシイさんは教えてくれますので」

「そうだな。よし、分かった。私は明日から花嫁修業を行う！」

「では形としては、御祖母様との花嫁修業という事にされて、一度、本家に連絡を入れられた方が周りからの要らぬ御世話も減ると思いますすが？」

「そうだな、ちょっと念話石を借りられるだろうか？」

「向かいの左側の部屋でございます。積もる話もありましょう、お邪魔は致しませんのでごゆっくりどうぞ」

「すまないな、助かる」

さて、本家に連絡するか。これでうまくいけば、私はあの男と婚姻しなくて済むし、本当に叩きのめして、最強を奪い取る事もでき

るかもしれない。

無くしたはずの希望だったが、思わぬところで拾い直せるかもしれないな。

「グリント……」

「なんでしよう。クルカ様」

「お前結構ひどい奴だよな」

「何故ですか？ ご主人様」

「よく考えるよ？ ルシィ。結局、あの脳筋姉ちゃんは公爵家令嬢なのに何をする事になるんだ？」

「え？ ……私達と同じようにメイド？ ……ッ！」

「そうだ。ルシィやレチエやカナと同じようにメイドをするんだ」

「私は彼女の希望を叶えるお手伝いをしていただけでございます」

「しかも、絶対服従とかグリント、付け加えてたよな？」

「ご主人様？ 調子に乗ってフィーリア様に悪戯などされたら……」

分かってますよね？ いいですよ？」

「まあ、待てルシィ。それでグリント本当のところはどうなんだ？」

「何がでしょう？」

「何を考えてる？」

「……仕方ありません。正直。手が足りません。主に前衛系統の」

「どういう事だ？」

「ルシィさん、ミランダさん、レイチエルさん。残念ですが三人には『盾』になれる強さはありません。『剣』や『槍』にはなれますが。カナリーさんに至っては魔法使いです」

「『盾』にする、か。正直それも怖いんだがな？ すぐに乗せられそうで」

「しかし、奥様の候補としては理想です。後はクルカ様がお望みの

『他の方と対等で居られる女性』という条件さえ、クリアして頂ければ問題はありません」

「たしかに、な。だがこり固まった公爵家の令嬢だぞ？」

「先程の様子から、最強になる事に執着が偏っていますので問題ありません。むしろクルカ様はフィーリア様を苛めて、悪戯して、服従させる事が肝要です」

「そんな……ですがッ」

「ルシイさん。これが上手くいけば、一番年齢の高いレイチエルさんが非常に、助かります」

「何故です？」

「第一夫人が認めないのに子は成せないからです」

「っ！」

「レイチエルさんが何歳かご存知ですか？ 子を成すのにはそれなりの時間がかかりますよ？ 『エルフの秘仙薬』に頼ろうとも経過した時間は戻せません」

「それに妾が先に子を産むのは、ルーデシア様が前例を作っておられますので、問題はありません」

「ルシイ。俺、初めてグリントを解雇したくなった……腹黒過ぎる……」

「これはルシイさんとクルカ様の為に、御祖母様がお考えになったお話です……」

「婆さんが……」

「御祖母様……」

「まだ、どうなるかは分かりません。どのような状況になるうとも様子を見て動きがとれるように、上手く立ちまわれる努力をいたしましょう」

第03話 騎士は夢を捨てる？」3「(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第03話 騎士は夢を捨てる？「3」

誰もが言った、貴女の家系は最強なのだから当然ね、と。

私の努力は当たり前のものであり、その結果が出るのも当然だと思っていた。

もう、私には私が持っているものが才能によるものなのか、努力によるものなのか分からない。

「クルカ殿、お願いだ。私にもエントレイン同調を試してくれ」

「無理だな。フィリには分からないかもしれないがアレはかなり心の中をさらけ出すつもりでやらないと効果が薄い。しかも、肌同士であればどこでもいい訳でもなく、粘膜接触が今のところ一番効率の良いやり方だ」

「構うものか！ どんな行為も受け入れて見せる。私は、私はソルフィッシュ家の第一子として強くあらねばならないのだ！」

「下らん。フィリが昨日、婆さんと約束したように今回の事を他の人間に黙っててくれればそれでいいから、とつとと帰れ。いい加減しつこい。ここ一週間で何度目だ？ この話は」

「私はクルカ殿の嫁になるのだ！ 私も彼女達の様にしてくれたらいいじゃないか！」

瞬間、クルカ殿の雰囲気が一変した。

「何度も言うが、それは違う。フィーリア・ソルフィッシュ。許嫁になる予定だっただけだ。そして君がどうしても言うので、先日のお話でここで花嫁修業という名のメイドをする事になっただけだ。婆さんがなんで一度、打ち合わせに戻って来て、またすぐに今朝か

ら王都のベルモ屋敷　　エルガルド本家に向かったままだと思う？」

「ただ。またクルカ殿は私をソルフィツシュ家の人間として名前を呼んだ。この瞬間が嫌でも理解を強いてくる。私がこの家のお客様でしかないのだと。」

「何？どういう意味だ？」

「父さんと話し合いに行ったんだよ。婚約の白紙か、もしくは婚約を保留し、フィーリア・ソルフィツシュが相応しいか検討するのかわちらにするかって事をな。あとは婆さんがこっちに滞在する事による仕事の微調整だな」

「な。私は愕然とした。それでは、先代様のお話次第では、私は………先日見た希望が、今日には私の手からすり抜ける。またか。またなのか。私はまた、手に入れ損ねるのか……」

「この際だ、もう一度はつきり言っておこう。俺はこの四人だからこそ傍に置いている。もし万が一、誰かを娶る事があつたとしても屋敷の中でこの四人同等以上に扱うつもりは無い」

「だ、だがしかし！ 私も含め、公爵家の者がそんな風にするなど認められるはずがない！」

「今の俺は、エルガルド公爵家出身のダントリン領主、クルカ・ダントリンだ。心配してくれるのは嬉しいが、公爵家では無いんでね。問題は無い」

「その為にこの小さな領地を選んだんだからな。ちなみに、ルシイ。ダントリン家の爵位はなんだった？ どうでもいいせいか？ 最初から覚えてない」

「子爵です。ご主人様。せめてそれぐらいは覚えておいて下さい」

侍従長殿がクルカ殿の背中側に回り、世話をしながら応える。

「ルシイ……この目隠し取っちゃだめか？ 目が見えない状態で話すのにも限界が……」

「駄目です。私達はともかくフィーリア様の肌をお見せする訳にはまいません」

「じゃ、レチエ。俺の前に来て洗ってくれ。それならレチエの肌しか見えない」

「な、な、なッ！ あたしやそんな事しないよっ！ カナリーがやってやりなッ」

「レイチエルはん、うちがやってええの？ ウチは別に嫌じゃないからするけど？」

「う、ううう……！」

「私は！ 真面目な話をしているんだ！」

ついて来た私にも問題はあるのだろう。今、我々がいるのはクル力殿の屋敷の風呂場だ。この屋敷は、男性用の風呂場が壊れているらしく、ここにいるルシイ殿が壊したとの事で、風呂場が直るまでは風呂の世話をするという罰が与えられたそうだ。しかし、私だけがメイド服で風呂場に居る訳にもいかず、袖の無い、湯浴み着を借りて一緒に入っている。

何故私がメイド服を着ていたのか？という事ならば、先日から私はメイドとして働いているからだ。騎士の訓練とは違う体の動かし方に筋肉が痛くなった事があつたが、今はもう慣れた。そして、少しだけ関係も変わったのか、クル力殿は私を『フィリ』と呼んでくれるようになったのだ。私がルシイ殿を『侍従長殿』と呼ぶようになったのは単純に仕事を教えてもらっただけからだ。そして、今、クル力殿は侍従長の希望により目隠しをされている。

「俺も、言っている事は真面目だ。俺は君が変わらない限り、君を受け入れない。分かったか？ フィーリア・ソルフィッシュ」

「ご主人様、公爵家の方の家名をも呼び捨てにするのは……」

「喧嘩を売り買いたいのなら好きにさせてやるよ。俺はただ、黙って殴られてやるだけだがな」

「貴方はそれでいいのか……殴られて蔑まれても構わないと言うのか？」

「構わん。無能者と言われるのは昔からだからな。我慢できない事ではない」

「貴族としての誇りは、公爵家としての矜持は無いのか？」

「そんなもので本当に欲しいものが手に入ったのか？ ソルフィッシュユ家当主の第一子であらせられる、フィーリア・ソルフィッシュユ殿？」

「私をツ。私を馬鹿にしてツ！ くツ……」

しかし、クルカ殿の言う事は間違っておらず、私が欲しかったものは私の手には何一つ無かった。だから、何も言い返せない。

そんな私とは裏腹に、強さなど何一つ持ち合わせていなさそうなクルカ殿は彼女達から本当に慕われており、家族同然だと言う事がこの数日でよく分かった。

公爵家並みの貴族の家とは違い、メイドは人数が少ないので一つの仕事専属の者はおらず、全員が持ち回りで仕事をしている。本来なら湯浴みにしても当主なのだから、クルカ殿専属の湯浴み係が2名いてもおかしくないぐらいだ。

普段は、クルカ殿は執事殿と酒を持ち込んで入るか、一人で入っているらしい。湯浴みは一番無防備な状態になるので、徒手空拳の腕が立つメイドを湯浴み係にする貴族も多い。なのにここではそんな事は全く気にしていない様だ。

「しかし、あれだけの力だ。少なからず知れ渡れば湯浴みとて安全なものではなくなるぞ？」

「ご心配には及びません。御祖母様がお戻りになられたのち、結果機構石の構築具合などからこの屋敷の防備の確認を致します。御祖母様のお言葉にもよりますが、必要とあらば、ご主人様の湯浴み等お世話は全て私が致します」

「レイシイ姐さん、それはずるいわ。ウチもする。順番交代な。レイチエルはんは？ どうする？ やめとく？」

先程から、カナリー殿はレイチエル殿を挑発し、遊んでいるようにしか見えない。

「あ、あたしやらないよ！ カナリーには羞恥心つてもんが無いのかい！」

「わたしはする〜」

「ミランダッ！ 駄目だよあんたは。成人の儀を終えてからにしなッ！」

「成人の儀を受けたらしてええんやったら、別に変わらんやんなあ？」

「ねえ〜？ カナちゃんもそう思うよね？」

「カナリー！」

「はいはい。ミランダちゃん、コレはな御主人様を洗う役を今日は取られたからって機嫌が悪んやで。そういう時のレイチエルはんには気いつけや？」

「はあ〜い」

「ッ！」

顔を震わせて怒るレイチエル殿は桶にお湯を入れると、何故かそれをクルカ殿の頭にかける。

「熱ッッッ！ コラ！ 誰だ！ 俺が何したってんだ！」

「レイチエルさん、八つ当たりはさすがに駄目ですよ」

「八つ当たりかよ！ レチエ！ 頭を火傷したらどうしてくれる！」
「火傷する様な温度じゃないよ！ 男なら我慢しな！」

などと言いつつ洗髪剤でクルカ殿の頭を洗い始めるレイチエル殿に……やらないと言ったのではなかったのか？……と思わないでもなかったが、指摘するとレイチエル殿は怒るので（最近慣れて分かってきた）黙っていたのだが。

「ミランダちゃん、コレがツンデレって言うんやで、覚えときや」
「へ〜そうなんだ」

「カナリー！ 何の事言っただか分からないけど馬鹿にされてるってのは分かるんだよ！ あとで覚悟しときな！」

本当はもつとクルカ殿にエン同調トレインを試してくれる様に言いたいがこれ以上言っても無駄なものも最近分かってきた。

「ところでフィーはん。鎧と服の調子はどうやった？」

「ああ、かなり良かった。ただ少し、肩周りの生地が突っ張る時がある。もう少し余裕があればいいのだが」

カナリー殿が言っているのは私の新しい鎧とメイド用の仕事着の事だ。私の本来の鎧は、ここに来た初日にエン同調トレインをした侍従長との手合わせでボロボロになってしまった。まあ、その後のグリント殿との訓練でもかなり傷ついたのだが。

そしてそれを見たクルカ殿が、メイド服と鎧をカナリー殿に制作依頼してくれたのだ。私の分のメイド服の色は青藍で、私の髪が紺瑠璃なのを意識し、合わせてくれたのだろう。初めて見た時はコレはメイド服なのか？ と思わないでもなかったがどうやら大陸の北東地域ではよく見かける物らしい。おかげで、使用人になるといいう事に対する忌避の感情が少しおさまったのは良かった事かも知れな

い。この服は前は重ね合わせになってブラウスなどにあるボタンなどはなく、お腹から腰辺りまでの幅の『帯』と呼ばれるもので締められている。下の肌着も同じだった。私は今日、初めてこの服を着たのだがこれは大変着方が難しい。この北東地域では『着物』と呼ばれる物をベースにメイド服を作った様だ。この屋敷にいるメイド全員に言える事だが全員の服装に統一性がない。

侍従長は、どこの貴族の所にもいる様な白と黒を基調としたメイド服を。

カナリー殿は前掛けがない紺のメイド服に研究者特有の白衣を羽織っている。

レイチエル殿は料理人の白い厨房着とメイド服を混ぜ合わせたような服を。

ミランダ殿は、侍従長の着ている物をワンピースにしたような物を着ている。

ただ、私が来ている物を含め、他の屋敷などにいるメイドと大きく違うのは着るもの全てが体のラインがはつきりと出してしまうデザインになっている事だ。しかも私の物は騎士の動きを行うからかスカートの邪魔にならない様に両側に大きくスリットが入っている。

それでありながらこれらのメイド服には、鎧で言うところの手甲の部分、胸当ての位置、腹、スカートの全面に加工が施されており、専用の防具が仕込まれたり装着できたりするようになってる。

しかし、この色欲と機能性を突き詰めたようなデザインが、全てクルカ殿の趣味を全面に押し出して作られた物だと言うのだから、私は嫁ぐ人を間違っているのかもしれないと言う不安は拭えない。まあ、このままだと嫁ぐ事もままならないのだが。

「しかし、あの『帯』と言うのは結ぶのが難しい。どうにかならぬのか？」

「 やっぱりそうなるわな。それに関してはもう一案があるから、試してみる？ 脱衣所には持って来てあるから先に上がるか？ 着けたるわ」

「 ありがたい。出る時に誰に手伝ってもらおうか考えていたところだ」

「 ほな、先上がるわな。御主人様ものぼせん内に上がりや」

「 おう。もうちょっとレチエとイチヤイチャしてから上がるから」

「 そんな事しないよ！ あたしも上がる！」

そう言つて、洗いかけのまま放つて、一緒に来てしまった。

「 いいのか？あのまま放つておいて」

「 いいのさ。残りは侍従長とミラに任せるよ。それよりも、先にごらないと飲み物の用意をしてやれないからね」

何だかんだと言つて、レイチエル殿はクルカ殿の事を考えて行動しているのがよく分かった。

「 そうか、レイチエル殿はクルカ殿の事を良く分かっているのだな」

「 そ、そんな事無いよ！ 風呂に入りやあ喉が渴くのは当り前さ！」

「 ほら、フィーはん、体拭いたらこっち来て」

「 フィーリアは綺麗な足をしてるねえ……」

「 せやなく。だから、作るメイド服のスカートには必ず、スリット入れろつて御主人様が煩かつてんで？」

「 そ、そんな事は無い！ 第一、クルカ殿は青が嫌いらしいではないか。私の髪は紺瑠璃だし、この服も青系統だし……」

「 誰が御主人様が青、嫌いつて言うたん？ レイチエルはん聞いたことある？」

「 いや？ あたしと風呂に入る時はいつも青か白の湯浴み着を着ろつて煩いぐらいだよ？」

「え、では？ あれ？」

「ああ！ 青って、青い肌の事？ それは聞いたことあるわ」「どついう事だい？」

「大した話やあらへん。御主人様は薄い色の肌しか生理的に受け付けへんねんて。レイチエルはんも褐色やけどかなり薄い方やる？」「そうだね、濃くならないように、主殿から太陽を浴びる仕事の時用の塗り薬まで貰ってるね」

「海の民の青肌とかダークエルフの灰肌とか竜人の赤肌とか、あ、竜人は色々おるんやっつけ？ 緑とかもおったよな？ とにかくああいうの見る分にはいいけど、食指が動かんって言うとなわ」「へえ。ありのまま受け入れてくれる主殿にしては珍しいね」

二人がここまでいうのだ。嫌いではないと言うのは間違いないのだろう。しかしならばなぜエヴァン殿は青が嫌いなどという様な話をしたのだ？

「フィーはん、コレ試してみるから着物、着てみて」

「うむ。わかった」

下着を身に着け、そして上着を重ね合わせる様に腰辺りの紐で締めて体のラインに合わせる。後は帯を巻くのだが……

「これや。普段から鎧着てはったフィーはんなら大丈夫やる」

「これは？ このまま腹に当てればいいのか？」

「そう。で、この帯紐の先の青い石にちょっとだけ魔力流してみて」

「？ ござうか？ おお！」

帯のような物は、私の腹周りにぴったり形の形に変化するとそのまま固定された。

「ん。サイズも問題ないな。後は念の為、帯紐で締めて。完成や」
「これは楽だな。何なのだ？ これは」

「これは、フィーはんのウエストあたりのサイズを形状記憶させたアダマンティンの板に、帯の生地巻いたもんや。帯紐の先の青い石に魔力を少し流すと事前に設定したフィーはんのサイズに自動で締まる。で、逆に赤い石に魔力流すと少し開くから脱ぐときに使う」
「そうか、この袖と同じだな？」

「そや、袖の端の青い石に魔力流すと袖が腕に巻きついて邪魔にならないように勝手に調節するようになってると同じ仕組みやねん」
「まあ、両方にアダマンティン使ってるからちよつと重いかもしれんけど。」

「大丈夫だ、普段から手甲や鎧を着けていたから、これぐらいなら軽いぐらいだ」

「それなら、『帯』締めなくていいもんねえ。カナリーは流石だね」
「カナリー殿はすごいな、王立魔法院で学んだのか？」

「いや、ウチは違う国の魔法院におってん。両親の関係やねんけどな。今はもう二人は一緒におられへんけど………な」

「そ、そうか、聞いてはいけない事だったか……」

「フィーリア、騙されちゃだめだよ。一緒にいないだけでちゃんと御両親は生きているよ」

ん？ どういう事だ。一緒に亡くなられたのではないのか？

「カナリーの両親は一緒に住んでいないだけだ。別居中だとさ」

「だからちゃんと、一緒におられへんって言うたやん？」

「言い方が紛らわしいのだ！ 最後にあんな『間』まで設けて！」

「冗談やん？ フィーはん、そんなんやと何時までたっても変われへんで？」

ッ。時々、こうやって核心を突くように言ってくるから

カナリー殿は油断できない。

「それと気いつけや……………」

「な、あ。何をだ？」

何なのだ、まだ何かあるのか？ くそう、怖いじゃないか。さっさと行ってくれ。

「そのアダマンティンの帯。太ったら苦しくなるで。今のフィーはんの体形に合わせてるから」

「ッ！ 余計な御世話だ！ 真面目に訓練してるから太ったりなどしない！」

全くなんなのだ！ 驚かせるようにもったいぶっておいて……………でも、太らない様には気をつけよう……………

「カナリー、あたしゃ先に行って飲み物用意しとくから、ほどほどに来なよ？」

「分かったわ。ほな、フィーはん脱いでみて、確認するから」

「あ、ああわかった。帯じゃなくて服なのか？」

レイチエル殿は出て行き、いったい何を確認するのだろうか？ と不思議に思いながらもカナリー殿に脱いだ服を渡した、その時。

『ガララララッ』

脱衣所と風呂場の扉が開いて目隠しをしていないクルカ殿が入ってきた。

……………あれ？ 私は今、カナリー殿に服を渡して……………

「きゃあああああああああああああああああああ！」

私は、悲鳴を上げてしゃがみ込みながら手に持ったアダマタイトの固定帯を思いつきりクルカ殿に投げつけた。

ガスッ！！ドサッ！

「きゃあ！ ご主人様！ 大丈夫ですか！」

「いや、コレはさすがに死んだんちゃう？」

「そうかも。でもカナちゃん、狙ったよね？」

「あれ、ミランダちゃん鋭いなあ。でもまさかアダマタイトの帯、投げるとは思わへんやん？」

「カナリーさん！ なんて事を！」

「ふ、ふ、ふざけるなあ！ わ、私は、専属の侍女にすらほとんど下着姿など見せた事が無いんだぞ！ せ、責任を取ってもらうからな！！ …… うううう。ふええええ。こんなトコで下着姿みられたあ~~~~」

「ご主人様は気絶していて全く聞いておられませんが、そんな事よりもフィーリア様……」

「泣いてると、子供にしか見えへんな」

「泣いてる方がゴシユジンサマの好みに近い気がしない？」

「確かに、ミランダちゃんホンマ鋭いなあ」

「それは言えてるかも知れません」

うるさあ~~~~い。そんなトコ好かれたって嬉しくなんか無いに決まってるじゃないか！ 私はそう心の中で叫びながら、涙目のままカナリー殿の手から服を奪い、すぐさま身につけるのだった。

第04話 猫メイドはお留守番「1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第04話 猫メイドはお留守番「1」

みんなが思ってたとおり、メリーちゃんは返される事になった。

私がメリーちゃんの立場なら、絶対に納得出来ずに引つかかった部分にも、彼女は気づかない。

私がそれを教えて上げる義理はないので、何も言わないが。

「メリーちゃん、向こうのお屋敷でも頑張ってね。今度、遊びにくね」

「ミランダちゃんも頑張ってね。クルカ様のえっちな悪戯には気を付けてね？」

「ああ？ 何つー事言いやがる。俺がミルにえっちな悪戯なんてする訳ねえだろ！」

そう、ゴシュジンサマはわたしにはえっちな悪戯はしない。この屋敷に忍び込み、拾われる結果になってから一度しかされていなかったって、その一度でゴシュジンサマは死にかけたから。

「メリーさん、お気をつけて」

「料理長によろしくな」

「メリーちゃん、次くる時は王都の良い酒頼むぜ？」

「メリーさん、ベルファスト様によろしくお伝え下さい」

「メリー殿、また食事にも行こう。王都へ行った際は声をかけさせてもらおうよ」

そういつてみんなに挨拶されると、メリーちゃんはちょっと涙目になった。

「皆さん……短い間でしたが、お世話になりました。王都のお屋敷では本採用されるように頑張ります」

でも、情報収集に来たはずの盗賊ギルド員が、こんな事で良いのかしら？と、思わないでは無かったけど、今ではもう暗殺者じゃないわたしにはどうでも良い事かな、と気分を切り替える。

「またね」

その一言の後、そこでちょうど転移門が開いて、光り輝く枠の中にメリーちゃんは消えて行った。

「さあって、戻るかあ！」

「あ、クルカ様。私とルシイさんとエヴァンで、市に荷物を取りに行きますのでここで失礼します」

「そうなのかい？ あたしゃ、エヴァン爺に手伝ってもらって、野菜の足りないのを買いに行こうかと思ってたんだが……フィーリア、手伝ってくれるかい？」

「ああ、わかった。一緒に行こう」

「ウチもついて行ったるわ、ついでにこの狐モドキの好物と嫌いな物も探そう。ほんならこれからの献立に役立つやろ？」

「その子、いつまで狐モドキって呼ぶの？」

いい加減、可愛いそうに思っていた私は聞いてみたのだが……………

「せつかく俺とルシイが考えても、みんなが却下するんじゃないかよ！」

「コンコンとか可愛いと思っただんですけど……………」

「ルシイ姐さんそれは流石にないわ……………」

「ルイ姉、センスないね」

「ーーーーッ！」

そこでガツクリうなだれるルイ姉。ちよつと可哀想だったかな？

「じゃあ、ゴシユジンサマ一緒に帰るっか？」

「ん？あ、ああそつか。二人だけだしな。どこにも行かないのは」

「ん、じゃあ。また後でね。みんな」

そして、ゴシユジンサマと手を繋いで、屋敷へと歩き出しました。

「ミル、婆さんとの訓練はどうだ？」

「ゴシユジンサマ？ そんな事を聞きたいんじゃないよね？ 言葉、選ばなくって良いよ」

「ーーーーッたく。外見は子供っぽいのになあ……痛ッたあ！」

握った手に爪を立ててやりました。

「悪かったよ。ゴメンゴメン。」

「同調 エントレインでしょ？」

「出来なくても問題はないけどな。気にしてるんじゃないかと思っ
てな」

「気にしてるよ？ フィーちゃんに先越されたら、目も当てられないもの」

「あー、そういう捉え方が」

「うん。だから、帰ったらゴシユジンサマのお部屋行くね」

「え？ 何それどういう事？」

「鈍感だね、ゴシユジンサマ」

「え！？」

ちよつと私は楽しみになって鼻唄混じりに風を感じ歩いて行く。

きつと今頃、頭の中はえっちな事とか考えてるんだろっけど、そんな訳ないのにね。お馬鹿さんなゴシユジンサマも大好きだなあ。

大婆様が本格的にこっちにくる頃には、私は成人の儀を迎える。そうしたらやっぱりゴシユジンサマと、えっちな事もするようになるのかな？ ゴシユジンサマは知ってるのかな？ 獣人が成人の儀を迎えるといきなり肉体が成長したり、何かの系譜に目覚めたりするのを。

早く大人になりたい。でもちよつと怖い。だから、ゴシユジンサマとのエントレイン同調も成功しない。

うっん。わかってる。

ホントはゴシユジンサマを一度、殺しかけたから怯えてるだけだつて。

だって好きなんだもん。殺しちゃったら自分が許せないよ。だから受け入れられない。

屋敷につく迄の間、『俺は露離婚じゃないはずだ』『いや、ミルはもうすぐ成人だから号砲露離婚？』とか一人で唸ってるゴシユジンサマはアホだと思うけど、でも大好き。

ところで露離婚とか号砲露離婚ってなんだろ？ 夕食の時にレイチエルか、カナちゃんに聞いてみよう。

屋敷の使用人部屋は使ってる人数が少ないから一人一部屋ある。王都のお屋敷は共同だった。

色々装備して、メリーちゃんの見送りに行ったけど、もういらないので装備は外す。

さて、頭が茹で上がってるゴシユジンサマのところにも行くかな。

『コンコン、コンコン』

ノックするけど返事がない。……？ 何でだろ？

「ゴシユジンサマ？ いないの？」

「いや、いるが……」

「入るね〜。返事してくれてもいいのに〜」

扉を開けて中に入るとゴシユジンサマはベッドに腰掛けたまま話しかけてきた。

「なあ、ミル、考え直さないか？」

「なんで？」

「なんでって……」

「わたしをメイドにしたのは、ゴシユジンサマだよ？」

「いや、確かにそうだが……」

「これから家族になるんだって言ったよね？」

「言った。確かに言った。だが……」

「わたし、いらなくなつたの？ フィーちゃんが来たから必要なくなつたんだ……」

「ちがう！ そんなことはない！」

「じゃあ、どうしてそんな事いうの？」

「一応、俺にも最後の良心が残つてるといっか」

「両心つて、ゴシユジンサマ。そんなにぶっっちゃけなくてもいいよ。二心どころかルイ姉、レイチェル、カナちゃん、わたし、フィーちゃん。五心もあるよ？」

「ごめん、その返しは高度過ぎて、俺にはどんなりヨウシンなのか全く解らないが浮気者と言われている事だけは理解できた」

仕方ないなあ。ゴシユジンサマは。ルイ姉の言う通りヘタレだね。

「わたしがここに初めて忍び込んだ時は、わたしが蕩けるまで色々したよね？」

「それもそうなんだか表現と実際が微妙にずれているというか……」

「どう違うの？」

「こつ、猫と戯れてるつもりだったというか……」

「わたしは家族でもペットなんだね。遊びたい時だけ弄ばれるんだね」

そろそろ許してあげようかな。

「そうじゃない！………ミランダ！」「ンッ」

あれ？おかしいな。もうちょっとだけからかったら、許してあげるつもりだったのに。なんでわたしは抱き締められてキスされてるんだろ？

「いいんだな？ 万が一俺を爪で傷つけても気にするな。生命活性はできるから死にはしないから」

「ゴシユジンサマ。熱くなっちゃったね。ちよつと、頭冷そつか」

サイドテーブルに置いてあった魔法のデキャンターの中身をゴシユジンサマの頭にかける。

「冷たッ！」

「ゴシユジンサマ、先走り過ぎ。今日はね、波長の同調を試してみようと思って来たの」

「え？」

「ん？」

「ん、なんじゃそりゃあー！」

波長の同調は手を繋いでゴシユジンサマの魔力に慣れる訓練で、グリじいちゃんが考えたモノだ。これをすると繋いだ場所の周辺の肌が生命活性はの効果で綺麗になる。わたしはまだ若いのでしなくてもいいかな?と思っただけでやっただけでなかった。

「ん〜でも。ゴシユジンサマがわたしのコトちゃんと考えてくれるのは分かったから。キスもちよっと嬉しかったよ?」

頭の上の耳をペタンと前に倒し、少し首をかしげて言ってみる。

ゴシユジンサマが本音で向き合ってくれたので、わたしもちよっとだけ本音で返した。

「ミル〜〜〜〜!」

するとゴシユジンサマが叫んで飛びついて来たので避けて足を引っ掛ける。

「真面目に手伝ってくれないなら帰るよ〜」

「痛たた。ツたく。ミルはその口調で騙されるよな。知ってるはずなのに引つかかっちゃう」

「口調、前の方がいいかにゃ?」

「それも悪くはないんだがな」

「ゴシユジンサマはエロエロだにゃ」

「それ以上はやめる。キケンな香りがする」

「真面目にやっただけ。ゴシユジンサマ」

「ハイハイ」

ゴシユジンサマと向かい合わせに座り、両手を繋いで意識を手に集中する。

すると少しずつ、ゴシユジンサマの方から魔力が流れて来て触れた手が少し熱くなる。そして触れている部分がすごく気持ちいい。なるほど。だからセクハラとか言われるのね。と理解するが、暗殺者として訓練を積んだわたしは手ぐらいいでは我慢できる。そして心地良さを我慢しながらほんのちよつとだけ、体の中心へと受け入れていく。そしてそのままの状態を維持する。

体が熱くなる。でもゴシユジンサマのだから心地いい。それを維持する。感覚が敏感になつてるのがわかる。風の流れと一体化し、部屋にいたまま屋敷の気配を探る。屋敷の中に人がいる。これは恐らく、ルイ姉だ。後ろの二人はグリじいちゃんとエヴァじいちゃんだ。

ルイ姉がこつちに向かってくる。あと2分もかからないだろう。と、そこでちょうどゴシユジンサマの魔力が途切れた。一回目の分が消えたのだろう。だが体が心地よさを求めて勝手に動き出す。ゴシユジンサマへと。

「おい、ミル？」

「ふにゃあ〜」

わたしの心は冷静なのに、体だけが暴走しているようだ。

私は我慢できていただけで、克服はできていなかった。

ご主人様の魔力を求めて顔を体を擦り付ける。

「つたく。落ち着け」

そう言つてわたしを、ゴシユジンサマは自分の前に後ろから抱く様にして座らせて落ち着ける様に冷たい水をいれてくれる。

コップを受け取り飲んだが、ちよつとふやけているせいで唇からこぼれてブラウスの前が濡れてしまっている。

「落ち着いたか？」

「ふにゃあにゃあ」

「だめか」

言葉を返しているつもりなのに、口から漏れるのは意味不明な鳴き声だけだ。

そこに、アホなゴシユジンサマは、何を血迷ったのかわたしの耳ごと頭を撫で始めた。前にわたしが耳を弄られて、フニャフニャになったのを忘れているのだろうか。

もう、心まで冷静ではいられない……………

「ふみゅあゝ、みゃああ、ふみゃあ、みゃああ」

「お、おい。ミル！」

何時の間にかブラウスの前もはだけ、ゴシユジンサマの方に向かって座り、もつと撫でると催促する様に、顔を胸に擦り付ける。

『バタン』

「フミヤッ！」

木で出来た扉がへし折れるんじゃないかなあ、と思う様な音を立てて空いた瞬間。わたしが尻尾と耳を立て扉の方を振り向くと、ルイ姉がすごい暗いオーラを纏って立っていた。

「ミランダ、何を……………ご主人様。なぜミランダのブラウスが空いているのでしょうか？」

「し、知らん！」

「……では、なぜミランダのブラウスは濡れているのですか？」
「水を飲ませたが、ミルはフニャフニャになってて口からこぼした」
「……………何故、ミランダはフニャフニャになっているのですか？」
「あ、そうか。耳を弄ったからだ」
「白々しい……………前にどうなったか、覚えていますよね？」
「発情した猫になりました……………」
「……………手っ取り早く、襲ってしまうお心算りでしたか……………しかも、みんながいない時を狙うなんて……………」
「ち、違う！ミルが訓練でっ！」
「……………で、何時の間にか襲ってしまった、と」
「ミル！起きて〜お前の大事なゴシユジンサマ死んじゃう〜」
「ふにゃあ、ルイ姉〜ゴシユジンサマは半分くらいしか悪くないよ……………」
「……………」
「そうなのですか？ 大丈夫？ ミランダ」
「最初は、訓練前は、やつちゃう覚悟を決めた瞬間もあつたみたい……………」
「……………」

暗いオーラが瞬間的に広がる！

「ミ〜ル〜ウ〜マジで俺が死ぬから！」
「これはホントにわたしの失敗。大丈夫。落ち着いてきたよ、ルイ姉」
「大丈夫？」
「みんなと一緒にの訓練じゃ意味ないの。ゴシユジンサマを受け入れる覚悟と迎え入れる怖さを乗り越えなきゃいけないから」
「それにね」
「……………？」
「……………？」

二人は不思議そうな顔をしているが、迷惑をかけたのでもうちょっとだけ本音を伝えておく。

「みんなに置いていかれるのも嫌だし、女としても負けたくないの」
「ミランダ……………大丈夫。ミランダはすぐに大人になって追いつきますよ」

「間違つても置いて行ったりはしないさ。女としての勝ち負けはよく解らんがな？」

ゴシユジンサマはアホだね。1人だけ抱かれていないなんて見方を変えれば放置と同じじゃない。

「とにかく、ミランダの部屋に戻りましょう」

「はあ〜い」

「ちよつと、休んでおけよ。体は大事だからな」

「心も大事だよ。今は体が追いつきたがってるけど、ね」

ルイ姉に支えてもらって部屋に戻る。

「ミランダ。無理はしない方が……………」

「多分ね、成人の儀の前だから、体がちよつとだけ不安定なの。負けたくないのもホント。もっと可愛がってってという気持ちだが、いっぱいになる事もあるもの」

「ミランダ……………でも……………」

わかってるよ。一度、ゴシユジンサマを殺しかけたから不安なんだよね。

わたしも不安。だから。今は休もつかない。

だ・か・ら、成人の儀が終わったら覚悟しておいてね。

ゴシユジンサマ。

第05話 猫メイドはお留守番「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第05話 猫メイドはお留守番「2」

今はみんなの隣には並べない。

だから、わたしはわたしにできるコトをしよう。

わたしは今、エヴァじいちゃんと一緒にお仕事だ。

「ミランダちゃん、そろそろ着くぜ。用意はいいか？」

その問いに少し頷くだけで返事をし、足元に見える森へと視線を向ける。

わたしとエヴァじいちゃんは、大きくなったソウハクに乗ったまま
ま空を翔ける。

最終的に『ソウハク』という名に落ち着いた狐モドキは、実は大
きくも小さくもなれるように。

小さい時は掌に乗るほど。大きい時は、人間が10人くらいは乗
れるんじゃないだろうか、というほどの大きさになった。

今はソウハクの体毛は黒くなっている。日が沈んだこの闇夜に、
輝くような白い体毛の魔獣が空を翔けていれば、自然と目立ってし
まう。なのでカナちゃん製造の機構石ピアスで色を変えている。

エヴァじいちゃんとわたしも、闇に溶け込む様な黒い装束に身を
包んでおり、わたし達を見つけるのには、同等の隠形技術や相当高
い探知スキルが必要だろう。

ソウハクが森の中に降り立つと、少し跳ねてそのまま小さくなり、

わたしの服の胸元に入ってくる。見るとエヴァじいちゃんは地図を片手に木の上に登っており。いや、ソウハクから降りる時に木の上に降りたのだろう、方角を確認している。

わたし達の今回のターゲットは昨日までガルザック都市に滞在していたはずのスローネという商人だ。

スローネは王国の南側にある連合国の中のギャンザ皇国というところの商人らしい。ギャンザ皇国の商人はよくこの王国に奴隷と機構魔術品を売りにくる。スローネはガルザック都市を出る時に冒険者の護衛を雇っていない。どうやら余程、金に困っているのか、欲をかいているのだろう。

この王国では一般人による奴隷の生産は認められてない。国庫が潤っているから、奴隷になるのは犯罪者だけだし、民は身売りなどをしなければいけない状況に陥れば国に身を売る。

そうすれば、ひどい扱いも受ける事はないが、女で技術のない者は娼館での労働になるし、男は魔獣討伐などに駆り出される。

他所の国の奴隷に比べれば、扱いはマシなのだが、やはり奴隷よりはマシという程度だ。

貴族は奴隷の所持を禁じられてるみたいで、万が一、奴隷の所持や代理所有が発覚した場合は貴族階級の剥奪とその貴族の二親等までの家族全員の奴隷化という罰が待っているらしい。

娼館は国営であり、表の管理は娯楽院の貴族が、裏での管理は娼館ギルドが行っている。

この娼館ギルドは表向きは奴隷商人ギルドとされており商人ギルド連盟の一部だと聞いている。

商人ギルド連盟の本拠地が、ガルザック都市であり娼館ギルドもそこにある。

わたし達の目的は、そのスローネという商人の商品である機構魔

術品と奴隷だ。

本来ならば、盗賊ギルドの仕事だが、今回の担当である『死神の羽音』というギルドは最近何やらきな臭いらしい。すでに何件か、『警告』のはずなのに『全滅』している商隊が出ているようだ。グリじいちゃんが言うには、王国の外の盗賊ギルドの息がかかっているとかないとか。だから先に襲い、その後には『死神の羽音』がどうするのかを確認する意味もあるらしい。

私たちは気配を消し、商人の野営地へと近づく。すると首に奴隷の首輪をした屈強な戦士が見張りをしているのが見えた。

なるほど。行きは護衛、そして商品として売り飛ばし、帰りは転移門で帰るつもりか。

少し離れた位置にいるエヴァじいちゃんと視線と手話で会話し、わたしが速攻。エヴァじいちゃんがバックアップと役割分担が決まる。

わたしは懐からソウハクを取り出し、エヴァじいちゃんの方へ放り投げると、野営地へと近づきながら完全に気配を絶つ為、自分の存在を更に稀薄なモノにしていく。

氷の上を滑る様に、焚き火の前に座っている見張りの戦士の背後に回る。逆手に持った麻痺効果のあるダガーを構え、一瞬で鎧の空いた部分を斬りつける。すると驚いた戦士は振り向き、立ち上がるが、わたしは既に戦士の目の前にダガーを突き出しており、戦士はそれを見て固まったままだ。

気配を絶ったまま少し時間を置き、戦士に歩く様に促すが動けない様子だ。

麻痺が効いているのを確認してから、戦士の膝の裏に軽く蹴りを

いれて足を曲げさせ座らせる。

あとはテントの中に気配が3つ。馬車の中にも3つ。馬車へと向かう。

馬車の中には拳士風の軽装の中年男の奴隷と同じような格好の青年、普通の平民の服装をした女の奴隷がいた。3人共眠っている。1人ずつ、口に気絶させる効果のある薬と麻痺の薬を染み込ませた布を当て、様子を見る。

問題なく動けなくなった様だ。

次にテントの方へ向かう。

そこでテントの中から出てきた女戦士風の髪の赤い奴隷が見張りをしていた戦士に声をかけた。

「ブルザ、スローネ様も寝ちまったから来てやったよ。あんたも溜まって、処理して欲しかったんだろ？」

しかし、ブルザと呼ばれた戦士はもちろん答えるはずもなく。

「ブルザ？ あんた座ったまま寝てんのかい？」

そう言っつて戦士に触れようとした瞬間に、女戦士の後ろからその顔の横にダガーを添える。

恐らく戦闘経験が豊富なのだろう声を上げる事もなく、全く動そぶりも見せない女戦士が小さな声で話します。

「あんたの目的は商品かい？ なら好きにしていいいから、命だけは助けてくれないかなあ。私は何も見なかったし、気が付いたら気絶させられてたつて事で」

恐らく、こういう経験が何度かあるのだろう。もしくは元冒険者だったのだろうと当たりを付けると、女戦士の口に先程と同じ布を当てつつ言う。

「安心するにや。生き残れるにや」

女戦士は安心したのか、ゆっくりと音を立てないように自分から膝を曲げ、地面に寝転がる。そしてエヴァじいちゃんがいるはずの方向に『残りはおと2人、女奴隷の回収お願い』とサインを送り、テントへ向かう。

テントの入り口を布擦れの音も立てないように少しだけ開くとほんのかすかにだが情事の匂いがする。恐らく、商品に手を付けるのは価値が下がるので、女の部分には手を付けず、手や口で処理させたのだろう。

木の葉が滑り落ちる様にテントの中に入り込むと少し太った男とまだ少女ともいえるような外見の女奴隷がいた。2人共に先程と同じ布を当て、少し待ってから少女の方だけを運び出す。すると、外ではエヴァじいちゃんが男戦士と拳士の2人をそれぞれ木に縛っている。平民の女奴隷と女戦士は縛られて転がされている。私もその場で素早く少女の奴隷を縛り上げると、同じように寝かせる。エヴァじいちゃんがテントの中に入っていくのを確認し、馬車の荷台の中から全ての荷物を下ろし始める。

エヴァじいちゃんが商人を先程の男性3人と同じ木に縛り付けているのを後目にカナちゃんから預かった転移陣の機構石を地面に挿していく。

転移陣の機構石の数は8本で1セット。機構石の形は、ちょっと細めの杭といった感じだ。それで四角形を二つ、90度ずらして重

ねる様に作り、それぞれに魔力を流す。すると、地面に機構文字で書かれた魔法陣が展開され、黄色い光を放つ。

その中に、恐らく商品だと思われる物、商人の鞆、戦士や拳士の軽鎧など、食糧以外のありとあらゆるものを放り込み、残った食糧と最低限の道具だけを、馬車の中に戻す。

この機構石は強制転移トラップの応用品だ。放り込まれた物は強制的に、イメトゥルの街の屋敷の地下室に飛ばされる。地下室にはクッションが敷いてあり、飛ばされてきた物を受け止める。(それでもいくつかは壊れる事もあるが)

この機構石をカナちゃんは転移陣と呼んでいる。これはゴシユジンサマが2日かけて一本一本に魔力を入れていった物だ。かなり前から魔力を込める練習に使っていたのだろう。本数はかなりある。生物での実験が済んでいないので、人間が通れるのかは分からないらしい。グリじいちゃんは、拷問してでも吐かせる必要のある相手を見つけたら、実験しましょう。と、怖い事を言っていたが、確かに動物で実験するよりは良心的かな、と私は思っている。

そして機構石を回収し終わると、木に縛られた4人から見えにくい位置に移動する。そこでソウハクが一番大きくなってもらい、女奴隷3人を乗せる。私も乗り移り、女奴隷が落ちないように調整を終わらせると、エヴァじいちゃんが商人の足元にナイフを一本刺し、見張り役だった戦士に気づけ薬をかがせて、起こしているのを見る。

「おい、起きろ」

「ん？ 誰だ。んん？」

「黙れ。お前は黙って、言う事聞いてりゃいいんだ」

エヴァじいちゃんは何故かこういう役がすごくうまい。コツとか

あるのかな、今度教えてもらおう。エヴァじいちゃんが、ダガーを見せつける様にして話を続ける。

「あの商人の足元にナイフを刺しといた。頑張っで起こして助けてもらいな。馬車の食糧は残しておいた、後は知らねえ。よし、じゃあ、お前は俺とは話さなかった。気が付いたら縛られてた。商人を起こして助かった。いいな？」

ダガーを顔に押し当て、傷は付けない様に滑らしながらどんどん伝える。そして相手が頷くのを確認してから、付け加える。

「いそがねえと獣や魔物に出くわすかもな。その状態で」

そう言っでソウハクの所まで走っで来て、飛び乗ったのを確認してからソウハクに伝える。

「屋敷に戻るにや」

【キャン！】

そして、空の散歩が始まる。

ソウハクが一緒にいる様になっで一番嬉しいのが、この空の散歩だ。

風が踊る。風が舞う。風と遊ぶ。風と一体になったかのように風を感じる事が出来る。ソウハクのおかげで、あんまり楽しいと思えないこのお仕事も、ちよっで楽しみになった。遠くへ行ければ、なお楽しい。

でも、今日はちよっで不満だ。奴隷を三人も乗せてるせいで自由に飛べない。

ソウハクはカナちゃんの作った首輪に魔力を流して話しかけると、

私のイメージだけで飛んでくれる。それが一番楽しい。エヴァじいちゃんは、年寄りにはきついつて言うけど。

今日も早く終わった。エヴァじいちゃんと奴隷の3人を屋敷に下ろしたら、ソウハクと夜が明けるまでお散歩だ。

夜の空は真っ暗だけど邪魔になる魔物もないし、誰かに見られる心配もないので、自由だ。

この後の散歩の事を考えてわくわくしていると、不意に女戦士が少し動いて、エヴァじいちゃんが女戦士の顔を、片手で目隠しするように正面から掴んだ。

「嬢ちゃん、悪い事は言わねえ、黙って寝ときな。悪い様にはしねえ。いいな？」

そう言つて、口にさっきの薬の布を当てる。かすかに女戦士の首が縦に動いた気がした。

「ミランダちゃん、冒険者や元山賊、元盗賊には麻痺に耐性のある物も結構いる。だから、かがせる時は長いめにするのを、忘れねえ様にな」

「わかったにや」

「……その猫語？　はどうにかなんねえのか？」

「ならにやいにや」

「　　まあ、いつか」

失敗しちゃった。暗殺者の頃は殺せば済む話だったので、ちょっと加減を間違えたみたい。次は気をつけなきゃ。

エヴァじいちゃんは口調を変えてほしいみただけど、これは変えない。師匠の技を使う以上は、師匠の奥さんがそうだったように様に感情を殺す。わたしは師匠よりも奥さんを尊敬していたぐらい

だ。普段はあんなに明るかったのに、仕事の際は正反対だった。普段はあんなに礼儀正しく優雅だったのに、仕事の際はニヤーニヤー口調だった。どっちも彼女の本性だったのだらう。どっちかが演技なのではなく。

私もあなりたい。普段はゴシユジンサマとみんなと、一緒に楽しく過ごせるように。でも、必要ならそれを脅かすものは、すべて排除できるように。躊躇わないでいられる様に。ここが私の居場所だから。絶対になくしたくないから。

イメトウルの街と屋敷が見えてきた。ソウハクが来るまでは、移動は街の転移門でしていた。だけど、往復に1日ずつかけていたこの仕事も、今では行って帰って1日だ。カナちゃんの転移陣のおかげで、荷物を運ぶのも楽になった。

婆ちゃんがいるのが見えた、グリじいちゃんも一緒だ。今日は珍しくお出迎え付きだ。

「早かったね、ミランダ」

「うん、今日はみんな大人しかったにや」

「ミランダさん、口調が……」

「あ、そだにや。ううん！……ただいま。婆ちゃん」

仕事は終わったのだ。婆ちゃんに挨拶しながら切り替える。

「おかえり。ミランダ。それで？ 奴隷が3人かい？」

「だなあ。ちよっと若すぎるお嬢ちゃんもいるようだ。問題はこの戦士の嬢ちゃんだな。元冒険者かなんかだ。知り合いに会わなきゃいいがな」

「そうかい、とりあえずウチの執事に任せるよ。グリント、ウチの執事呼んできとくれ」

「わかりました。御祖母様」

グリじいちゃんは婆ちゃんの執事さんを呼びに行った。名前はたしか……シヤスバルバロロッサさん。言いくいから、みんな執事さんって呼んでる。

「ミランダ、成人の儀が近い、もしソウハクに乗ってくるんなら、ゆっくり時間をかけて風を感じてきな。急ぐんじゃないよ」

「はあ〜い」

「じゃ、下に来た品、見定めに行くかな。カナリーちゃんがいないと鑑定が滞るから困るな。そろそろ木箱に5つ分も溜まつてる」

「あんた等も目を養つときな。一応、あたしも見てやるからさ」

「機能がはつきりしてる物のはわたしも分かるんだけど……」

「早くミランダも『鑑定』できるようになればいいけどねえ……」

『鑑定』は精神魔法の一つで、その物に込められた思念や情報から、どういった物なのかを読み取れる魔法だ。もちろん動物や人間にも効くが、よほど信頼されていないと読み取れるものは少ない。神聖魔法にも『鑑定』はあるが、こちらは神に聞くのでありとあらゆる情報が読み取れる。リスター教団やメルベス教団などの宗教が『鑑定』で鑑定書を発行し、お金儲けができる程に、神聖魔法の方は精度が高い。

「わたしじゃ、『検知』ぐらいの精度しかないよう」

「同じ『鑑定』でもカナリーちゃんみたいに、知識があるのと無いのでは、天と地ほど違うからなあ……」

「ま、うだうだ言っても仕方ないさ。後は任せて、ミランダ、行つといで」

「婆ちゃん、ありがと。いってきます。ソウハク、行くよ〜」

【キャウーンー】

婆ちゃんにお礼を言って、ソウハクと一緒に駆けていく。途中で大きくなり始めたソウハクに飛び乗って、首輪と毛皮を掴んでしっかり握るとソウハクがスピードを上げ、そして飛びあがる。

婆ちゃんに言われた事を忘れないように、ソウハクに出来るだけ風の流れにゆつくりと乗ってもらおう。

ソウハクの背中に仰向けで寝転がり、両手を上にあげて首輪と毛皮を掴みなおす、と同時に風に乗ったのか『ふわり』と浮遊感がある。風の流れに流される感触を楽しむ事にした。

流れる。

凧がれる。

和がれる。

その感覚に、少し心が温かくなり、ゴシユジンサマの顔を思い浮かべる。

今は、レイチエル、カナちゃん、フィーちゃん、ルイ姉の4人と一緒に出かけている、ゴシユジンサマの帰ってくる頃には、成人の儀は終わっちゃってるなーなんて事が頭に思い浮かんだ。だが、すぐに思い出したゴシユジンサマ達の顔を頭から追いだし、また空の散歩へと意識を流した。

第06話 猫メイドはお留守番「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第06話 猫メイドはお留守番「3」

私の前にはとても不味い料理が並んでいる。

エヴァじいちゃんも我慢しているので私も我慢する。

レイチエルがいなくなるという事がこんなに辛いとは思わなかった。

帰ってきたらレイチエルの為に何かしてあげよう。

ああ、また不味い料理が来た。

エヴァじいちゃん頑張ってる……

「はい、料理おまたせ。それで、あたしに何が聞きたいって？」

「えっとね、成人の儀の時どうだったかなって」

ここはイメトゥルの街のルナル酒場。お料理のほとんどが、お酒に合わせた味なのであんまり美味しくない。しかもここは、レイチエルみたいにタマネギに気を使ってはくれないので、特に不味いと感じる。

獣の猫ほど、タマネギがダメとかそういう訳ではないが、獣人はどうしても血を引いた動物の好き嫌いが食べ物に顕著に表れるみたい。

しかし、目の前にいるエリンという猫族の獣人は平気そうだ。慣れもあるんだろうか。

エヴァじいちゃんは猫族の血は薄いはずなのにタマネギが嫌いだ。私よりも。

「成人の儀かあ。あたしの時は大したこと無かったけど……色が黒くなつたかな。耳と尻尾の。それ以外は無かったね」

「色、変わっちゃったりするんだ……」

ちよつとシヨック。ゴシユジンサマは、この色がすつごく好きみたいだった。薄い灰色っぽい色。何故かゴシユジンサマはこの色をロシアンブルーって呼ぶ。ブルーって青だよな？ 灰色っぽいのに青？ とか思わない訳じゃなかったけど、でも気に入ってくれてるならそれでいい。そう思ってたんだけど。ゴシユジンサマは色変わっちゃつたらイヤかなあ……

「あ。でも、あたしのお姉ちゃんは色が変わらずに、身長が異様に伸びて体つきがすつごくエロくなった。線も細くなつたしね」

それは私も聞いた事がある。そうなつてくれると良いかもしれない、私はフィーちゃんよりも胸が無い。ぺつたんこだ。ゴシユジンサマはきつと大きな胸が好き、それは間違いないはず。

いけない。ホントはそういう事を聞きに来たわけじゃないのに。

「そういうのじゃなくって、魔法の系譜とか変わつたりした？ 成人の儀の前と後で、全く別の系統に変わったとか」

「それは無かつたかな。あ、でもちよつとだけ使える魔法は増えたよ。精神魔法だつたけど」

「そつか、魔法に全く影響が出なかつたワケじゃないんだ」

「そうねえ。お姉ちゃんの時は属性魔法がちよつと上手になつたつて言つてたし、やっぱり親じゃないかな？ 親の影響は受けてる感じはしたよ」

「そつか、ありがと。参考になつた」

あたしの場合はどうなるか全く分からないという、参考にはなった。孤児だから親の事が分かんない。

「ううん、いいよ。ねね、それよりも。ミランダちゃんってクルカ君のトコのメイドだよな？」

「うん。そうだけど……？」

「クルカ君って……上手？」

後半はこつそりと囁くように聞いてくる。これって何て答えていいのかなあ……エヴァじいちゃんを見るとタマネギの不味さをお酒で誤魔化してるようだ……聞けないや。

「ううん。他の人にもゴシユジンサマにも、あんまりなにもされた事ないから、何とも言えないけど……」

「けど？」

「初めて会った時に、耳と尻尾を触られた時は、フニヤフニヤになったよ？」

「そっかそっか。こんなトコで働いてるとき、お客さんでも触ってくる人いるんだけど。結構ね、逆撫でする人多いんだあ。ほら、ここで仕事してる時、お尻触ろうとする人って下から手を上にあげてくるじゃない？ だから尻尾も下から上に、先っぽから根元に向かって撫でようとするのよね。毛の向きは逆なのに」

「それは気持ち悪いね」

私はそんな状況になった事ないから、気持ちは全く理解できないけど、なりたくないとは思っよ？

「それに鳥肌立ててるとき、感じてると勘違いして、さらに続けようとするアホも多いのよ？ 気をつけてね？ 酒場に来る時は」

うん。二度と来ない。絶対来ない。今日一番の収穫だね。感謝しないと。

「そっかーでもいいよねー。触り方が上手で、貴族で領主。無能者って言われてるらしいけど、困ってもらうには良い人かも」

「なんでえ、嬢ちゃんはクルカ様に気に入られてたんじゃないのかい？ 手エ出されてないのかい？」

やっと食べきったのか、エヴァじいちゃんが横から聞いて来た。ごめんね。不味い料理、ほとんど任せちゃって。

「んーん。声はかけられて、良いトコまでいきそうだったんだけどね。クルカ君部屋入ったら寝ちゃったから。ムファも上手だったって言うてたし、今度来たら頑張ってみようかな。太ってないか確認しとかなきゃ！」

大丈夫。二度と来させないから。そんな心配は無用だよ、どんどん太ってエリンちゃん。

「でも、ゴシユジンサマ当分帰ってこないよ」

「そうなんだ。お仕事？」

「そうらしいが、俺たちや詳しい事は聞かされてねえからなあ」

「帰ってくるまでに成人の儀は終わっちゃうもんね」

「そっか。ミランダちゃんはどんな服着るの？」

「えっ？」

服って何のことだろう……？

「そりゃ、当日まで秘密らしい。エリン嬢ちゃんありがとな。話聞かせてくれて」

「いえいえ。お昼はお酒目当てのお客さん少ないし、暇なんでちよつどよかったです。じゃ、またねミランダちゃん」

「ありがとう。エリンちゃん。またね」

エヴァじいちゃんが誤魔化してた内容を帰り道を歩きながら聞いてみる。

「エヴァじいちゃん。服って何のこと？」

「獣人には基になった部族があるのが普通だ。だから成人の儀の時は部族の服を着るのが一般的だ」

そんなのあつたんだ。知らなかった。でも、私は孤児だから……

「そつか。ありがと、隠してくれて。きつと、エリンちゃんも領主のメイドなのに、まさか部族も分からない孤児だなんて、思わなかったんだよね。知つとかなきゃいけない事、もつとありそうだなあ」
「それもそうなんだがな。あそこで、あんな話になるとは思つてなかつたからなあ……じゃあない。いいか」

エヴァじいちゃんが意味のわからない事を言ってる。なんだろ？

「聞いたつて言うなよ？ 当日まで内緒だつたんだが、ミランダちゃんの服はみんなで、用意してあるんだ。だから誤魔化したんだよ」
「みんなが、私の為に？」

「正確にはクルカ様が、かもしれないがな。さつき話に出たムフアちゃんつていたろ？ あの娘に聞いたんだと。そういう部族毎の部族服があるつてな」

『あの文字通りの泥棒猫！』つてレイチエルとルイ姉が言つてた娼婦の子だよな？ そつか。そこで聞いたんだ。ちよつと複雑な気

持ち。怒っていいやら喜んでいいやら。言葉を出せないわたしに、エヴァじいちゃんは続ける。

「で、ミランダちゃんは孤児だから、知らないかもしれないから、部族服は自分が用意するって、言いだしてな。どうせ何をどうすればいいのかわかんねえ癖にな。で、みんなで当日まで、隠しておこうって事になった」

「ありがと。エヴァじいちゃん」

「礼ならみんなに言っておくれよ？ 帰ってきた時は部族服で迎えてやりな。きつと喜ぶぜ」

「うん！ そうする。あ、でもグリじいちゃんにも黙ってないといけないから部族服見れるのはやっぱり当日？」

「に、なるな。まあ、我慢しな」

そっかーちょっと残念。でもみんなにお礼はちゃんと言わないとね。みんな今頃何してるかな？ なんて考えながら、今はいないみんなが出発した日の事を、ちょっとだけ思い出してた。

じいちゃん達以外が揃った食堂で、みんなでお茶している時に、急に婆ちゃんが良く通る声で言いだした。

「決めた。あんた達にや、明日からデフスの森に行ってもらおうよ」

「どこ？ それ？ この国じゃねえんじゃねえか？ 婆さん」

「クル力は知らないのかい……」

「騎士団の任務の説明で聞いた事がある。エルフ族の都市が中にある森ではなかったですか？ 先代様？」

「ウチはなんか記憶が……アカン。ちっさい頃に行ったことあるハズやけど、覚えてへんわ……」

「大婆様、そりゃあ、どこの国なんです？」

「レイチエルも知らないのですか？ デフスの森は東のストレイタム共和国の中にある森です。ストレイタム共和国は、エルフ、ドワーフ、ワータイガー、ワーウルフなど亜人、獣人と呼ばれる種族の種族会議により治められている国です」

「さすがルイ姉だね。じゃあ私も、たどればご先祖様はそこにいるのかな？」

「かもしれねえな。で、婆さん。なんでルシイ達がそんなトコに行くんだ？」

「クルカ、何を言ってるんだい？ あんたも行くんだよ」

「それに御主人様、エルフっちゅうたら、御主人様が頼んだ『エルフの秘仙薬』の為ちやうのん？」

『エルフの秘仙薬』の名前を聞いたとたん、ルイ姉とレイチエルの目が光った気がした。

「そういう事ですか、では御祖母様、私は旅行の準備をします。ミランダ手伝ってください？」

「わかった」

「あたしも食糧を調整しに行ってくるよ。出掛けてる間の事もグリ爺に相談しないとね……」

「あんた達……どこまで欲望に忠実なんだい……？ ったく……」

いいから座りな！！」

返事はしたけど、婆ちゃんの行動に気付いて動かなかったわたしと、カナちゃん、ゴシユジンサマは耳を押さえ、気付いていなくてさっさと席を立っていたルイ姉、レイチエル、そしてこっそりどこ

かに行こうとしていた、フィーちゃんはびっくりして、急いで自分の席に戻った。

「話は最後まで聞きな」

『「はい！」』

三人は声をそろえて返事してる。ちよっとおかしい。

「で？　なんで俺がそんなトコに行くんだ？」

「だから、『エルフの秘仙薬』貰いに行くんちゃうん？」

「カナリーさん、それは私達でもいいはずですよ。何故、ご主人様なのか？という事をお聞きになられているんですよね？」

「クルカは察しのいい時とアホな時の差が激しいねえ」

「普段アホでいるからこそ、ここ一番で察しが良くなれるんだよ！」

などと、わけのわからない事を言うゴシユジンサマ。

「私としては、察しが良いところは無くても構いませんので、普段の行動をもう少し普通にして頂きたいです」

「そりゃたしかに。言ってるねえ。もうちよっと真面目にできりゃ、男前も上がるってもんだと思うんだが」

「レイチエル？　ゴシユジンサマだよ？　そんなの無理だよ」

「あ、あの何気なく、ミランダ殿が一番ひどい気がするのだが……」

「フィーはん。コレがここでの常識や。よう覚えときゃ」

「な、なるほど！　勉強になるな」

「なるほど！　じゃねえ！　いい加減にしろ！　お前ら後で覚えとけよ、すごい事になるからな……」

「す、すごい事か……　どんな事になるのだろう……」

「あかんわ、御主人様、フィーはんどっか行ってもうた。妄想の中でえらい事なってんちゃう？」

「脳筋はほつとけ。結局どういう事なんだよ。話進んでねえよ!」

ゴシユジンサマのせいで脱線した気がするけど、黙っとこう。私は空気の読めるいい子だから。

「だからねえ、あんた等全員分の『エルフの秘仙薬』を貰うのにあんたがそこに行って向こうで、貰えるように説得してきな」

「それが難しそうだから婆さんに頼んだんじゃねえかよ」

「しょうがないだろ、流石に6、7人分も金が無いんだよ!」

「あ、フィリの分いらなからなんとかならない?」

「それはあまりに酷くないですか! クルカ殿!」

「え、ウチもそれは賛成やけど?」

「私もいいと思います」

「カナリー殿! ルシィ殿まで!」

「わたしもそう思うよ? ねえ? レイチエル?」

「そうだな……うん、いいじゃない?」

「ミランダ殿!? レイチエル殿お!?!」

空気は読みます。ちゃんと。いいい。

「冗談はほどほどにしときな。どっちにしる相手が見たがってるんだよ。クルカが見つけた力をさ。秘密の保障は問題ないよ。相手はハイエルフの女王様さ。先代のだがね」

「行かなきゃ、どうにもならないってか」

「そうさね。いつて解る事もあるだろ? きつと」

「それでは、ここにいる全員ですか?」

「いや、クルカとレイチエルだけは確実に行きな」

「あとは、夜の仕事もあるだろ? 全員じゃ、行けねえわな」

「ミランダちゃんは成人の儀があるもんな」

そつだ、私は行けないや。成人登録もしないといけないし。

「あとはルシィ、任せる。婆さん、ちょっと話がある。いいか？」

「いいよ。テラスで良いかい？」

「ああ、助かる」

そつ言つてゴシユジンサマと婆ちゃんは出ていった。

「後はどうするん？ みんな行つて問題ないん？」

「一番行かれると困る、レイチエルが行きますからね。予定が問題

無ければみんな行きましよう」

「私も行つて良いんだよな？」

「フィーリア、大丈夫、今度はからかつてないから。連れてくよ」

要するに、夜のお仕事を知らないフィーちゃんは、連れていかな
いと邪魔になるのよね？ 知らないつて幸せね？

「みんな何かお土産買つてきてね」

「甘いもんとか、売つとるんやるか？」

「ミランダは甘い物、そんなに好きじゃ無かつたよな？」

「うん、レイチエルは美味しく作つてくれるけど、甘いつていう味
覚つてあんまりわからないから」

「そうか、それはなんだかもつたいたい気もするが……何か探して
買つてこよう。期待していてくれ。ミランダ殿」

みんなに向かつてにつこり笑う。

フィーちゃんには期待できないけど楽しみにしよう。

そしてみんなは準備を始めた。

翌日の朝、王都へ寄るらしく、色々と大きくなった荷物をまとめ

て馬車に詰め、旅立っていった……

第07話 料理人は己を知る「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話 料理人は己を知る「1」

何故、大婆様があたしに行けと行ったのか。
そんな事深く考えなかった。知ろうとしなかった。

この栗色の毛も、薄褐色の肌も、琥珀色の瞳ですら。
あたしを構成する全てのモノが信じられない。

ああ。あたしは一体誰なんだい？

「……………ル！」

ああ、鳶色の瞳。焦げ茶色の髪。

あたしの大好きなちよつとだけ切れ長な眉。

主殿。主様。

離さないで。

あたしは貴方が知ってるレチエじゃないかもしれないけど。
離さないで、強く、もっと強く。

「……………エル！」

叫んでる。何でそんなに叫んでるの？
聞こえないよ。聴こえない。

「……………ル！……………チエル！」

主様が怒ってる。起きなきゃ。起きて抱きしめてもらわなきゃ。あたしはこの人の傍にいて決めたんだから。

あたし達がストレイタム共和国に着いたのは、日が沈む直前だった。

ストレイタム共和国の玄関、エメルローザの街は各部族の集落へ行く為の中継地の様な街だ。この国の一般転移門はすべてここを経由しているらしい。しかも各部族への訪問許可が下りなければ後は自分で歩いて行くしかない。しかし、それは自殺行為だ。

特にデフスの森は、精霊魔法の『迷いの森』の元になったとも言われている、『方角、認識、感覚』を狂わせる『彷徨う風の誘い』という大規模結界に覆われているらしく、歩いてデフスの森の中心にあるエルフの都市、通称『デフス都市』へ向かった者は、辿り着くまでに魔物の餌になるらしい。

このエメルローザの街に来るまでの道のりも大変だった。王都のベルモ屋敷でひと悶着あったりもした。でも、主殿はこの街に来て、獣人、亜人を見るのが楽しいらしく、ドワーフを見て目を輝かせ、『マジで背、ちつせえ。高い所の物を取るの大変そうだな』とか。どうでもいい事ばかり考えているようだ。

翌朝、宿を引き払った後すぐに転移門の管理塔へ赴いて、大婆様から預かった紹介状を見せると、デフス都市への通行管理のエルフは驚愕し、すぐく丁寧に移門まで案内してくれた。

デフス都市はとても大きな木が真ん中に立っており、木に寄り添

うように城が建てられているとの事だった。あたし達は転移門で迎えてくれるから、ずっと案内をしてくれたグラッフという名のエルフの騎士にすごく丁寧に、この街の一般常識などを教えられている。大婆様はこの街でも有名で、先代のハイエルフの女王が認められた友人で、ハイエルフに受け入れられている数少ない人間であるらしい事も教えてくれた。

グラッフさんの案内で城にたどりつくと、まずは今のハイエルフの女王に会う事になっているらしく、城の謁見の間へ行くそうだ。グラッフさんに聞いたのだが、今の女王はまだ300歳らしく、女王にしては若いらしい。主殿は顔に『妖怪ババアじゃねえか』と書いてある様な表情をしてたけど、グラッフさんには見られなかったようで、あたしやホツとした。そして謁見の間であたし達は久しぶりに、主殿の真面目な態度を見る事になった。

「お初にお目にかかります、女王陛下。ラナル王国はエルガルド公爵家が当主、ベルファスト・エルガルドが二子、クルカ・ダントリンにございます。今はダントリン領を任され、ダントリン子爵を拝命しております」

「うむ、ようまいったの。ダントリン子爵。わらわはエメルローザ・ストレイト、このエルフの都市の女王じゃ。母上は今、一人で神樹の中で沐浴をしておる。母上は沐浴が好きでのお……つまり事に一日の半分以上は神樹から出てこんのじゃ」

「エメルローザ様、そのような事を仰ってはいけません。メルフェイユ先代王女様は我々の為に……」

「わかった、わかっておる」

「……」

「グラッフは、いちいち細かい事にうるさいのじゃ。ダントリン子爵とやらも細かい事は嫌いじゃろ？」

「そうだねえ。嫌いだよねえ。なんて思いながら主殿を見てみると、

以外にも真面目な顔をしていたのでちよつと胸が高鳴った。

『いつもあんなら』あたしやもう……いやいや。あたしやこんなトコで何考えてんだい。失礼のないように気をつけなきゃ。

「そのような事はございません。我々貴族も、細かい事ではありませんが、伝統や格式を守るが故に貴族と呼ばれ、その矜持でもって、民を率いる領主となるのです。誇りに固執し、目を曇らせるのはいささか本末転倒、と申し上げねばなりません。しかし、それが民を守る盾となる事も多くございます。女王閣下のお立場と子爵程度の私を同じと申しますのは、御無礼かと存じ上げておりますが、上に立つ者とはかくあるべきなのだ、私は考えております」

主殿はとても優雅に頭を下げながら、心地よい抑揚で全てを言いきった。

「エメルローザ様。お聞きになられましたか？ 人であっても、上に立つ者とはこのように考える物なのです。それをふまえ、普段からの行動をもう少し自重して頂いてですな……」

びっくりした、あたしや心臓が止まるかと思ったよ！ 主殿の身が実はグリ爺だって言われても今なら驚かないよ！ 侍従長なんか石になつてる。

「うるさいのじゃ……！ 母上は出てこぬし、楽しみにしていたお菓子は無くなるし、グラスフは口うるさいし、子爵は堅苦しいし……」

完全に子供だな、ありや。300歳とか言つてなかったかい？
ハイエルフってのは一体、幾つで成人なんだろうね……

「それでしたら女王陛下、私はちょうど我が家の料理人を連れております。当家にしかない食材も持参しております。厨房を少しお貸し頂ければ何か作らせますので、お茶でも飲みながら、ごゆっくりとお話させて頂けませんか？」

なにに！ 主殿！ 何てこと言いだすんだい！ しかも当家にしかない食材って、先代女王様用に持ってきたブルーローズじゃないか！ 確かに結構量はあるけど……

「おお！ それは名案じゃな！ ほれ、グラツフ！ 子爵達も旅で疲れておるじゃろ？ 堅苦しい場はこれぐらいにして、細かい話は茶をしながらでもかまわんじゃろ？」

「まあ、確かにそれぐらいはかまいませんが……しかしですな、エメルローザ様。茶会といつても羽目を外しすぎる行動はお控えください」

そこでグラツフさんはメイドに指示を出し、あたしと侍従長が厨房に向かい、カナリーとフィーリアが主殿の傍に残る事になった。

「侍従長、侍従長！ いつまで石になってんだい。ローズベリーパイを作るから手伝っとくれ」

「……え、はっ！ あれ？ レイチエル？ さっき私はおかしな夢を見たの。ご主人様が礼儀正しく挨拶して、主に相応しいまともな事を喋って、顔がとてもりりしくて素敵で……」

最後のは別に、普段もたまにあるし、おかしくはないんじゃないかい？

「それは現実だよ、女王陛下にお菓子を作る事になっちまったからね、手伝っておくれ」

「ああ、夢じゃなかったのですね……グリント老にお見せしたかった……」

「グリ爺が死んでるみたいな哀愁漂わせて言うんじゃないよ……」
「たく」

侍従長に手伝ってもらい、ブルーローズティーとローズベリーパイを作ると、エルフのメイドに味見してもらって絶賛され、それを持って案内されるままに茶室へと向かった。

「それはそうだろう。ある程度の勉強は、俺も執事に無理矢理やらされたもんだ」

部屋に入ると、主殿がいつも通りの調子で女王陛下と話しており、侍従長は

『ああ、さっきのはやっぱり夢なのね……』なんて呟いてた。

「お。レチエ来たな。それじゃ、グラッフさん。フィリとカナをお願ひします」

「うむ。私も王立第一騎士団の噂は聞いているからな。是非一手ご指南頂こう」

「そんな、グラッフ殿。ご指南などと言える程の物ではないのだが……」

「まあまあ、フィーはん。こつちも胸借りるつもりで、やったらええやんか」

「カナリー殿……ではグラッフ殿、こちらこそよろしくお願ひします」

あたし達が、お茶の準備をしている内に何かが決まったのか、何を言ってるのか分からないまま3人はどっかに行ってしまった。そしてテーブルに一輪のブルーローズを飾り、お茶の用意をはじめ。

「ご主人様、カナリーさんとフィーリア様はどちらに？」

「ん？ ああ、グラツフさんとフィーリアが模擬戦だ。カナは俺の代わりに見届け人」

「ほう。これが大陸広しといえど、エルガルド家にしかないと言われるブルーローズじゃな？」

「女王陛下、実際にはエルガルド家にしか無い訳ではございません。ただエルガルド家の物が一番美しく、薰り高いと評判だけなのです」

「エメルローザでよい、女王陛下などと堅苦しい呼ばれ方は、謁見と会議だけで十分じゃ。しかし、噂通りいい香りじゃな」

美味しくできてたから、気に入って頂けりゃあいいんだけどね……

「して、クル力殿、母上には何故会いに来たのじゃ？」

「何故って言われてもなあ。会って依頼を受ける、としか婆さんにも言われてないしな。まあ、『エルフの秘仙薬』が欲しいってのが目的になるのか？」

「私にお聞きにならないでください、ご主人様」

「ふむ、何の事じゃろうか………母上は何が見たくて人間なんかを呼んだのじゃろうか………見る価値のあるモノがあるなら見てみたいの………」

「なんだか失礼な事を言ってる気もするけど、主殿が何も言わないんだ、あたしや黙って見とくだけだね。」

「しかし何故、人間は我々エルフの『秘仙薬』を欲しがるのがじゃ？ 寿命なぞ長くなっても、日々は変わらんから退屈じゃぞ？ おお、お、なんじゃ、このパイは美味しいのお！」

「エルフらしい感覚だな、人間からすりゃ、たった100年じゃ短

すぎるのさ、大事なものを守るには、な」

「お気に召されたようですねによりです。エメルローザ様。そちらはローズベリーをブルーローズのソースで味付けし、煮込んだ物を生地で包み焼き上げた物です。ローズティーにあわせ、少しだけ甘さを控えめにさせて頂きました」

そう言って説明をするあたしを、エメルローザ様はじっと見つめ、不思議そうに聞いて来た。

「やはり、お主が使うのか？ 名前を聞いておらなんだの？ 料理人」

「こちらは、ダントリン家の料理人、レイチエル・ブロッサムです。そして私は侍従長を務めさせて頂いております、ルシィ・イルリアと申します。エメルローザ様」

な、なんでこのエメルローザ様はあたしが秘仙薬を使ったがってるってわかるんだい？ そんなに顔に出てるのかね？

「ふむ、レイチエルにルシィ、の。覚えたぞ。してレイチエル、やはり寿命が長い方がいいかの？」

「どうでしょうか。必ずしも、とは言えませんが長ければ、よりよい料理の研究はできますね」

「そうか、確かにの数十年でこれだけうまい物を作るのじゃ、百年も研鑽すればどれほどの物が作れるのやら……しかし、血が薄くなつたとはいえそれほど寿命が短くなっておるのか？」

ん？ 何か良く分からない話だな？ 短くなる？ 人間なんだ。エルフよりゃあ短いさ。いまさら聞く事かい？ まあ、話合わせとこう……

「私は人間ですから。どうしても百年生きればいい方ですよ」
「ふむ、よし！ わらわがおぬしの寿命、伸ばしてやる。女王自ら行つなぞ、なかなか無い事だぞ！ このパイの礼じゃ」
「ありがとうございます？ えっとどうやって伸ばすのですか？」

いいのかね？ でも、肌を綺麗にしてもらってからの方が……いや、してくれるって言うのに断るのも失礼なのか？

色々と考え始めたあたしはエメルローザ様が近づいた事も手に触れて何やらし始めた事にも気付かずに意識を失った……

「主様……」

「レ……ル！ レチエ！」

「傍にいておくれよ……」

「居る！ ここに居るぞ！ レチエ！」

「約束……」

「レチエ！」

「……………グウ……………」

「は？」

「寝てるだけのようですね」

「何？ 寝てる？」

誰かがあたしの手首をつかんでる気がする……

「はい。脈拍は正常。恐らく、体には全く異常ありません」

「ルシイ。このまま捨てて帰ろうか」

「それは流石に……」

「ちよつと、カナとフィリのトコ行って、出発する準備しておいてくれ。頼む」

「わかりました。では失礼します」

扉の閉まる音が聞こえる。主様……いなくなったりしてないよな……

「さて、ババア。説明しろ。返答次第じゃ、どんな手を使っても、このエルフの城ごとぶち壊す」

「困ったのお、わらわもこの娘がここまで、今の自分にこだわってとは思わなんだわ。そのせいかの、因子の拒絶を起こすなど、普通ではあり得ん。この様な事、わらわでもできんのじゃが……」

「分かりやすく説明しろ。ババア、お前は何をした？」

「おぬしらは寿命を伸ばしたかったんじゃろ？」

「それで？」

「じゃから、この娘の中にあるエルフの因子をな、活性化させてハーフではあるが寿命を伸ばしてやろうとしたんじゃ」

「なんで、エルフの因子なんかレチエにある？」

「この娘、ハーフエルフ、いや、もしかしたらもうちよつと薄いかも知れんが、エルフの血を引いておるじゃろうが。わからんのかえ？ それを起こしたのじゃ。しかしじゃな、この娘は今の種族がいいのか、環境を壊したくないのか、自分の因子が変えられるのを拒んだのじゃ。結果のう、変わろうとする因子と変えたくない精神力がぶつかって、今この娘の精神は不安定になっておる。ヘタすると人格が変わってしまうの」

「よし、わかった……」

「おお、分かってくれたか。お主の背中に暗い危険なモノが見える気がしての、ちよつと怖かったんじゃが、話せばわかるもんじゃの。

良かった良かった」

「てめえの勝手のせいでレチエがムチャクチャにされそうだった事が、よおーくわかった。今すぐ死んで詫びろ。口答えも反論も許さ
ん」

「な、にやお！ 全然分かり合えておらんではないか！」

「分かり合えるわけがないだろうが！ 自分の女がめちやくちやに
されてるんだぞ！」

「いやの？ わらわも親切心での？」

「知るか！」

誰かが何か話してる。一人は主様。もう一人は誰だろう。

あ、扉が開いた。あ、ルシイだ。あれ、ルシイって呼ぶのやめな
かったつけ？ そうだ侍従長って呼んでって頼まれてたんだ。

「ご主人様、準備ができました」

「どないしたん？ そないに怖い顔して」

「助けてたも！ こやつが怒って許してくれんのじゃ！」

「どうしたのだ？ 話をしていたのではなかったのか？ クル力殿
？」

「ご主人様？」

「このままだと、レチエの人格が消えてなくなるらしい」

「はあ？ 何でそないな事になつてんねん？」

「それがじゃの、因子を起こしたら、拒否されての……」

「はあ！？ 無理矢理、因子起こしたんかいな！？ アホちゃうか
！ そんな事、人体実験でも軽々しくせえへんで！」

「ハイエルフは、下位のエルフの霊格を上げれるのじゃ！ アホじ
やないのじゃ！」

「それで失敗しとつたら世話ないわ！」

「カナリーさん？ よくわからないけど、どうなるのでしょうか？」

「最悪、この状態のレイチエルはんを赤ん坊と思って育てる事にな

るで」

「ほんの20年ぐらいで元通りなのじゃ」

「死ね！ いや、殺す！……無理だな俺には。よし、ルシイ！ 殺せ！」

「いやいや！ クルカ殿、相手は仮にもハイエルフの女王だぞ！？ エメルローザ様、何か治す方法があるのでしょうか？」

「わからん、因子を起こすのを失敗した事なぞ、無いしのう。じゃが、たかが料理人じゃろ？ 他の者に料理を作らせればよいじゃろうが？」

「ばかな！ エメルローザ様！ それはあまりにも……まってる！ グラツフ殿を呼んでくる！ クルカ殿も落ち着くのだ！」

「知るか。ルシイ、カナ。今からレチエとエント^{同調}レインして意識を引つ張り上げてみる。そして魔力の底上げをいつもの要領で安定させられるか試してみる。その間にこの城ごと、このババア殺せ」

「了解や。あーあ、悠々自適の研究生生活とも、これでおさらばかあ。まあ、しゃあないな、ご主人様について行行って決めたし」

「カナリー殿！？ 何を言っている！ エルフ全体を敵に回す気が！？」

「申し訳ありません。フィーリア様。今回ばかりは私もご主人様に従います。いつもの自堕落で、やる気のない、いい加減なご主人様の戯言ではないのです。貴女にはわからないかもしれませんが、私たちにとってレイチエルは大切な家族なのです」

「な、何を言っておるのじゃ？ 殺すなどと、冗談じゃろ？ たかが料理人じゃろ？ エルフの血を引いていて、多少珍しいなど言っても、代わりはいくらでも居るじゃろ？ しかも、おぬしらは母上に会いに来たんじゃろ？ わらわを殺したら会えなくなるのじゃぞ？」

「ああ？ 黙れ、ババア。てめえさつき言つてたな、何が見たくてこんな人間なんか呼んだのか分からんと。見る価値のあるモノがあるなら見てみたいってなあ」

「おお！ 見せてくれるのかの!？」

「ああ、見せてやるぞ。」

見るだけじゃつまらんだろ？ 身をもって味わえ」

「ルシイ。来い」

「はい。ご主人様」

侍従長はあたしを抱きしめたままの主様に、控えめに顔だけを寄せて唇を重ねる。

『同調 エントレイン』

その数十秒後、いつもの侍従長の綺麗な金髪が震える様に煌めき、瞳の色が青から金へと変わる。そして侍従長の体を炎の系譜の魔力の層が覆う。本来見えないはずの魔力の層が一般人でも見えるのではないかという密度をはじき出す。

「カナ」

「まかしとき、きっちりかたつけたる」

カナリーは侍従長とは逆側から、主様の頭を奪う様に抱きしめ唇を合わせる。

『同調 エントレイン』

カナリーの方にはあまり変化は感じられなかった、普段から綺麗な濡れ羽色の髪は特にそのままだし、瞳の色は元々淡褐色の色彩が変化する体質なのでどう変わったのかは判断がつかない。しかしカナリーの周りは砂漠の真ん中にある様に景色が揺らめき向こうがぼ

やけて見えない。それがどんどん周りへと広がっている気がする。

『ああ、ズルい。二人だけキスしてる。あたしもお』意識がぼやけたまま、あたしは主様の首に手を伸ばし、思いつき唇を奪った。

第08話 料理人は己を知る「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第08話 料理人は己を知る「2」

自分の中に、今まで眠っていたもう一人の自分を感じる。

ソレには力を感じる。ソレは主様の役立つ物だと理解できる。

でもそれを受け入れるのは怖い。主様が愛してくれる、今の私を変えたくない。

本音で話す事はなかなかできないけど、今のままで十分幸せだ。

いつもの満月の晩のように、あたしに注がれた主様の魔力が、あたしの感覚を数倍にも引き延ばす。周りの状況が手に取るようにわかる。なのに何故か体は動かない。主様の横で圧倒的な存在感を放つ二人に、意識を向ける。

内側からあふれる主様の魔力に、二人の魔力が押し上げられている。

二人の中で2つの魔力が掛け合わせる様に反応し、量が圧倒的に増えていく。

侍従長はそれを体内に圧縮し、身に纏っている。カナリーはそれを媒介に何かを成そうとしているのが感覚でわかる。

「今日のご主人様の魔力は少し痛いですね」

「それだけ怒ってるちゅう事やるな。普段のが甘く感じられるんは、頭のどっかでウチらを気持ちよくさせたらう、ちゅう意思があるんとちやう？」

「なるほど、だからいつもはあんなに蕩けてしまうのですね」

「へ〜、ルシイ姐さんも、普段の時は蕩けてるんや。なるほど」

「カナリー！ もう。冗談を言っている場合ではありません」

「ごめんなあ。冗談でも言うとかんと、魔力暴走させそうでなあ。

御主人様が怒ってる事にウチも引っ張られて怒りに身を任せてしま
いそうになるんや」

「その感覚はは分かりますが……」

二人も主様も何にそんなに怒ってるんだ？ なんだかよくわかん
ないねえ。

「二人とも、レチエに集中するからな、任せたぞ」

「ほな、ウチはちよつとゴツイの呼びだして、城にとことん撃ちま
くるわな？」

「では、私はご主人様とレイチエルの護衛と女王陛下のお仕置きを」

二人のエントレイン同調に見とれていたフィーリアが二人を止めよう
とする。

「二人とも待て！ これ以上続けたら、本当に冗談ではすまなくな
るぞ！ 帰りを待ってるミランダ殿達はどうするのだ！」

「ここにいるのがミランダちゃんでも、きつとおんなじ事するで」

「フィーリア様にはその程度の事が分からないから、エントレイン同調
できないんですよ。そんなに自分の地位や名前が大事ですか？ 今
の貴女は誰の為に、何をしてるんです？ 自分にとっての一番大切
な事、理解されていますか？ 私達に、ご主人様を愛する事よりも
大切なモノがあると思うのですか？」

侍従長は間違った事は言っていないね。あたしでもきつとそう思う。

「ッ！私は……………」

「今日のルシイ姐さん。毒舌モードやな」
「カナリーさん、さっさと始めてください」
「はいよ！」

『大いなる大地を汚し、その大地の底深くに沈みし、闇に根付くモノ達よ。私の敵が汝の敵なり、生きとし生ける物の全てを奪い……』

あれ、聞いた事のない詠唱だね。なんたるすごい嫌な雰囲気があるけど。

「な、な、何をするのじゃ！ 何を呼び出そうとしておるのか、分かっておるのか！ そんなモノを呼び出せばこの大地はただではすまんのじゃぞ！」

『こい！ 森の契約精霊よ！ あの女の詠唱を止めるのじゃ！』

流星はエルフの女王、中級精霊と契約まで済ませて、無詠唱で呼びだすなんて人間にはできないね。でも、出てきた精霊が、侍従長の持つてるショートソードに切り裂かれた。

「貴女はそれだけの事をしました。邪魔はさせません。悪い事をした子にはお仕置きをするのが当たり前でしょう？ 全てを失つてから、ゆつくりと反省してください」

「な、わらわの契約精霊が、唯の剣で切れるはずが……」

「この程度、カナリーさんの道具なら余裕です」

そこにグラフさんが騎士四名と共に扉を壊す勢いで入ってきた。

「何事だ！！ なんだこの魔力は！」

「おお！ グラフ！ 止めるのじゃ、この者たちを止めるのじゃ！！！」

「これはいつたい何事なのですか。エメルローザ様！」

「フィーリア殿、貴女方は刺客だったのですか！？」

「そうではないのだ！ グラッフ殿！ だが、今は王女を連れて逃げてくれ！」

「それは私が許しません。フィーリア様。邪魔をするのなら、たとえ貴女といえども、眠って頂きます」

そう言った瞬間、侍従長の体がブレた。

フィーリアに見えたのかはわからないが、侍従長の体は滑るように弧を描き、入ってきた騎士たちの背後に回り込む。そして、それぞれの兜と首を守る部分の隙間に、鞘に納めたショートソードを叩きつけ、昏倒させていく。

かろうじて反応できたグラッフ殿は躲そうとするが避けきれず、受け止める様に剣を上げるがそれでも弾き飛ばされ、フィーリアと抱き合う様にして壁に激突する。

「これが、ルシィ殿のエント^{同調}レインの本気……………先程の倒れた騎士は、模擬戦をさせて頂いた、私と同等の方ばかりだったはず……………」
「その通りですな。あのメイド達はいつたい何者なのですか？ 先程はあれほどの力を持っているように見えなかったのだが……………」

その間もカナリーの詠唱は続く。

『……………その全てを我と共に、そして我等の敵を討ち滅ぼす為の力と……………』

「グラッフ！ 拙いのじゃ、あの娘の詠唱を止めるのじゃ！ 数を呼ぶしかないかの！」

『火、水、風の契約精霊よ、群れを成せ！来るのじゃ！ 女の詠唱

を止めよ！」

「そんな事はさせません。エメルローザ様、女王陛下らしく、御自分の失態の責任はご自分で御取り下さい」

「エメルローザ様が何をしたというのだ！ 侍従長殿！」

「ご主人様の家族であるレイチエルを廃人に追い込み、危険に晒しています。しかも治せるかどうかもわからない方法で。それを悪びれもせず、他の者に代えればいいではないかと仰いました。愚かだと貴方は思いませんか？」

その程度の精霊では私を抜く事はできませんよ」

今度は、数体ずつ現れた火、水、風の契約精霊を、またもや紙の様に切り裂いていく侍従長。それでもグラツフ殿はなんとか立ち上がり、剣を向けている。

「グラツフ様、その騎士たる態度は、尊敬すべきものですが、残念ながら道を開ける訳にはまいりません」

「こちらも、どれほど愚かでも、主は主。守らぬ訳にはまいらぬ。

エメルローザ様、申し訳ありませんがここでお別れです」

「グラツフ！？ そのような事！ わらわは許さぬ！」

『出でよ！ 我が番犬！ 犬妖精！』

すると牛ぐらいのでっかい犬が現れ、侍従長を排除しようと滑るように突撃する。しかし、それでも侍従長は止まらない。

「エメルローザ様は相手の力量は読んだ方がいいですね。魔力の無駄遣いになります。ほぼ、詠唱を許されない中で、これ程の格を持った精霊や妖精を呼べるのは流石ですが」

フィーリアが、『そんなもの読めるか！』といった顔をしている

のがわかる。わからないよねえ、普通の人の相手ならともかく。今の侍従長は相手にあわせて、自分で身体強化を調節してるもんなあ。

犬妖精^{クワンシー}は足を落とされ壁に激突し、大きな外傷はないが、激突の衝撃で満身創痍のグラッフがエメルローザ様の盾になるように立つ。それを見た侍従長がグラッフ殿に向かおうとした時……………

『我の意思において汝を解放せん！！ 出でよ！』^{ガル}冥府の番……………
【お待ちください】……………

カナリーの詠唱も侍従長の行動も存在感だけで押しとどめようとする強力な存在感に、全ての者の行動が止まる。だが姿は見えない。

【今一度、お話の場についてはいただけませんか？】
「誰だ、お前は」

主様が声に対し、話しかける。

【その馬鹿娘の母親です】
「馬鹿だとわかってるって事は話す意味はある様だが？」
【ハイエルフの名にかけて、その女性は治して見せます】
「当たり前だな。あんたの娘がしでかした事だ」
【あなた方が望む物を無条件にお渡ししましょう】
「ヒビロカネ、オリハルコン、アダマントイトこの三つをカナの言う分だけ用意しろ。あと腕のいいドワーフを一人」
【分かりました。ですが秘仙薬についてはこちらの依頼との交渉次第でという事で御願います】

「内容による。それで殺されてはたまらん」

【では話し合いたいと思いますので、お話しはテラスの方でお願い

します】

「わかった。行こうか、カナ、ルシィそのままエントレインは解くな。カナ、レチエを揺らさないように浮かせられるか？」

「分かりました。ご主人様」

「大丈夫や、詠唱も途中で止めたしな。魔力はまだまだ余ってるで」

あたしの体が宙に浮くのを確認した後、フィーリアに向き直った主様は決別を告げるように言う。

「フィリ、好きにしていそ。帰ってもいいし、ついて来てもいい。好きな様にしろ、ここ数年順調に事が進むから、勘違いをしていたようだ」

「ご主人様？」

「やはり、周りにいる人間が全て、いい方向に導いてくれる訳では無い様だ」

「あの、私はどうなのでしょう？」

「ウチは？」

「心配するな。お前らは最高だよ」

あたしはどうなんだろう。聞いてみたいけど体は動かない。

【グラフ。私は貴方に、エメルローザが勝手な事をしないようにと、監督を頼んだと思いますが？ なぜこのような事に？】

「面目次第もございません。客人との模擬戦にうつつを抜かし、持ち場を離れてしまいました。私の責任です」

「グラフは悪くないのじゃ！ わらわが勝手に……それにあの程度で怒る、子爵が狭量なのじゃ！ 料理人ぐらいっぱい抱えておるはずなのじゃ！」

その瞬間。主様、カナリー、侍従長の順に怒気が大きくなってい

き、それに気圧されたフィーリアとグラツフ殿は何も言えないようだった。怒気に押されて気が付かなかったけど、いつの間にか、部屋の本真中に大きくて真っ黒な立方体があった。

【……エメルローザ、貴女はまだわからないのですか？……愚かな行いで、私の友人の孫の家族傷つけ、更には城ごと危機に晒しました】

「メルフェイユ様！ 私がきつく叱りますので、せめて『闇の匣』だけはお許しになって頂けませんでしょうか！！」

「グラツフ殿？『闇の匣』というのは？」

「あそこにある黒いのがそうだ。見る、聞く、考える以外の全ての行動が不可能になる。『闇の匣』自体が目になって、それがある部屋だけは見える。もし、だれも訪れず放置されると眠る事もできず部屋をずっと見続ける事になる。以前に陛下がお仕置きで3ヶ月入れられた時は、その後の半年程、何もしようとしなくなっていました」

主様用に教えてほしい魔法だね。何魔法だろうか？

【人の気持ちというものがわかるまで、その中で反省しなさい。あと賠償にかかる費用は、貴女のお小遣いから天引きです。足りない分は、貴女の私物を売りに出します】

「は、母上、それはいくらなんでも、わらわはこの国の女王で……」
【だからなんだと言うのです！！ その様に立場を誇るばかりで、周りが見えていないから、この様な事が起こるのです！ 反省なさい！『開け！闇の匣！』】

吸い込まれるのを耐えようと、柱にしがみついてダダをこねるエメルローザ様は、背後に主様が近づいている事も気付かず、天井に

向かって抗議を続けてる。

「嫌あ、嫌じゃあ〜あそこだけは嫌じゃあ〜！」

「何か知らんがとつと行け。『ドゲシッ』」

「嫌じゃああああああ〜！」

主殿に蹴飛ばされ『闇の匣』に放り込まれたエメルローザ様は、
いつ出てこれるのだろうか……

「クル力殿、仮にも女王を足蹴にするなど……」

【構いません。私が親として許可します】

「親が良いって言ってるんだ。問題ないだろ」

「しかし……『フィーはん、あんた甘すぎや』……」

「自分の大事なモンに置き換えて想像してみたら？」

あのガキ婆のせいで、あんたは最強になれず、結婚したくない男
と結婚して、奴隷の様に扱われる人生。どや？ 想像でけたか？

それでもアレが可哀想やって言えるんか？」

そりゃあ、確かにそうだ。あたしだってエメルローザ様が主殿を
殺したり、奪ったりしたら絶対許さないだろう。

「しかし……それでも人として……」

「
フィーリア様。失礼ですが言わせて頂きます。貴女様の
想いは全て軽いのです。」

嫌がる気持ちも、必要とする気持ちも、何もかもが軽いのです。
命をかけるとは申しませんが、他の全てを捨てても欲しいと思う
ものや、嫌だと思う事はないのですか？」

「私は、軽い……のか……」

「もう良い、ルシィ、今回の王都の一件と今日の事でよく分かった。」

時間ももつたいない。行くぞ」

【……グラフ、皆様をテラスにご案内して下さい。あとそこにあるローズベリーパイも持ってきて。ではお待ちしています】

喜んでもらえるのは嬉しいけど……もうちょっと空気読みなよ、
先代女王様……

第09話 料理人は己を知る「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第09話 料理人は己を知る「3」

あたしが居るのは時の漂泊の世界。

全てが白く彩られ、精神が湖面の木の葉の様にたゆたう。

そして、静かに、ゆっくりと、確実に、沈む。

主様の心へと、沈む。

「起きたか。レチエ」

「あれ？ 主様？」

「ああ、俺だ。あまり心配させるな。次の満月は覚悟しとけ？」

「え？ 満月？ 十日後だっけ？」

「そうだ、今月最後の3回目の満月だ」

「そっかあ。楽しみにしとく」

「おいおい、お仕置きだつて言ってたぞ」

「主様は優しいもの。酷い事するはずない」

「ったく。しょうがない女だな。ほら、起きられるか？」

「うん」

そして気付く。そこは庭で。二人きりじゃない事に。

冷ややかな目の侍従長とニヤニヤした目のカナリーと。

恥かしげに眼をそむけるフィーリアと微笑ましげな視線を向ける見知らぬ女性。

でもあたしは頭が回っていないのか、碌な反応もできないままだ。

そこに見知らぬ女性が声をかけてくる。

「気がついてよかった。貴女の主様のおかげよ？ 無色魔力元素で

精神を支えるなんて方法普通はできないわ。普通は精神力で魔力を作るものなのにな」

「えっと？」

「初めまして、私はメルフェイユ。エメルローザの母よ？ よろしくね？」

「はい、メルフェイユ様」

「レチエ。少しだけ残して、ゆっくりと魔力を放出してみる。今の自分の感覚に合わせて調節するんだ」

「なんで？ なんだか今、とても気持ちいいよ？」

「気付いてないんだろ？、話し方。変わってるぞ？」

「……………っ!？」

気付いた。理解した。今あたしが何をしてたのか。主様って呼んでる事も、主様の前でしかしない、甘えた声で話てる事も。

そこで意識がはつきりしたあたしは、恥かしさのあまり、主殿を突き飛ばそうとするが体はゆっくりとしか動いてくれなかった。仕方が無いのでゆっくりと立つ。

「おいおい、無茶するな。ゆっくり、魔力を少しずつ吐き出すように……………」

言われた通り、深呼吸しながら魔力をゆっくりと調節する。

何故か、主殿の魔力が結構残っている状態が当たり前前の状態に思えて、そこで止める。

「安定したようね。本来なら、神樹や大気から魔力を吸収し、今の自分の霊格に合わせて魔力量を安定させるのだけど、無色魔力元素でも同じ事ができる様ね」

「じゃあ、これからは、この魔力の量がレチエの基本になるのか？」

「そうね、体がついてくるまでは、様子を見て、足りない分を補ってあげるといいわよ？」

何の話をしてるのか、全く分かってないあたしを他所に、他のみんなはわかっているようだ。だから聞いてみる事にした。

「あたし、どうしたんだい？」

「レイチエルは、エルフの血を引いていたみたいなんです」

侍従長が応えてくれる。

「それをな、エメルローザはんが無理矢理引き出そうとしたらしくて、レイチエルはんの精神が拒絶反応を起こしたんや。失敗しとったら精神が崩壊して、赤子に戻るところやったんやで？」

カナリーが軽い口調で、侍従長に続いてそんな事を言うが、それって結構やばかったのでは？ と思ったが、まだ続きがある様なので聞いておく。

「で、だ。レチエ。お前。エルフになった。ハーフらしいけど。いや、ちよつと違うのか。エルフの血の特性が表に出てきた。と言うべきか？」

「そうだな。レイチエル殿は、元々、血を引いていたみたいだからな。なったというのはただしくないのだろう。外見もエルフの様になっているな」

え、外見変わってしまったって？ どう変わったんだろう。主殿は変に思っていないんだろうか……

「そんな不安そうな顔するな。ほとんど変わってないよ。俺の可愛いレチエのままだ。ほら、わかるか？ 耳が長くなってる」

そんな恥かしい事を言いだした主殿が、あたしの顔の横に手をやると耳が触られた。何これ。やばいなんてもんじゃない。くすぐったすぎる。やめて〜。

「クル力殿。エルフは耳が性感帯になるものもいるのよ。そんなに触っては今のレイチエルさんでは耐えられませんよ？」

「ああ、すまん。レチエ。くすぐったかったか？」

あたしはやつとの思いで頭を縦に振り、返事する。驚きとか不安とか、聞きたい事とか言いたい文句とか、色々あるけど、とりあえず今はメルフェイユ様が居るので大人しくしておこう。

「これで、レイチエルはんも落ち着くやろうし、後は依頼やな」

「そうですね。メルフェイユ様。お話の続きをお聞かせ頂けますか？」

「そうね、レイチエルさんもお座りになって？ 貴女の作ったパイ。とても美味しいわ」

まだ少し耳がピクピクしているので喋りにくいが、椅子に座らせてもらって話を聞く。

「どこまで話したかしら。……そうそう、エルフの行方不明者が増えてきているの。神樹に尋ねたから、この国を出ていない事までは分かるのだけど、私たちじゃ見つけられないのよ」

「神樹って……この樹は話ができるのですか？ メルフェイユ様」

「ルシイ姐さん、植物にも知性はあるんやで？ 話すぐらいがなん

やねん、ドライアッドなんか襲ってくるやんか」

「カナリーさん、流石に魔物に分類されるものと同列に扱われるのは、神樹が怒りそうなのでちょっと……」

「ま、その辺はどうでもいいがな。そうになると、ミルを置いて来た

のは失敗かもしれん。ちょっと時間がかかるかもしれないな」

「ミランダ殿を？　どういう事だ？　彼女が居れば早く済むのか？」

「ミランダちゃんも野生の勘が鋭いからなあ。おるとやっぱり話にはよ済む事が多いねん」

「そついうものなのか……」

フィーリアは夜の仕事を知らないのでミランダが暗殺者だった事も知らない。街に潜んで裏事情を調べて欲しかったなどと言えるはずもない。

「主殿、やっぱり奴隷目的なんだろうかねえ？」

「そつだな、確かにエルフは線が細くて美しいしな。まあ、それ以上は魔力と機構術師としての腕も欲しいのかも知れんが」

「問題はそこなのです。いなくなつた民はみな、それなりの機構術師なのです。特に機構術師はその性質上、戦闘に不向きなものが多いので……」

「誘拐されやすい、か。対策はしてあつたんだろ？」

「結局は、イタチごつこなのよ。対策する、破られる。その繰り返しなのよ。人がみなそつだとは、言いわないけどね？　人間は欲望にかける情熱が、歪んでいるから……」

あたしを含む4人が主殿の顔を見て頷く。

「オイ。その目と仕草は何だ、お前ら？　俺がそつだつてことか！？」

「ご主人様、そのような事は言っておりません。ええ。」

「そつやで？　ウチがどないやつて嵌められて、モノにされたんか忘れた訳やないけど。でも、そつやとは言つてへんで？」

「あたしも色々、思いあたる事がない訳じゃないねえ。厨房でされた事とか。まあ、けど歪んでる、とまでは言わないよ？　うん」

「く、クルカ殿。今はメルフェイユ様の話の続きを聞きましょう！」
「お、お前ら……はあ。まあ、そういう事も後回しだ。で、居なくなつたのは何名だ？ 男女別で教えてくれ」

「女性が3名。男性は1名よ」

「多いな……という事は、さらわれたのかどうかすら分からないエルフもいるとすれば、その人数を入れるともう少し増えるか……なら、考えると急ぐ方がいいな。」

転移門を通らずに国を出るなら、一気に運び出せる飛竜フイバーンか、鷲獅子グリフォンでの強制夜間飛行ぐらいか？ 移動手段としては。それが大人数での馬車移動……は無いな。人目に付くし、エルフの探知に引つかからないはずがない。」

「御主人様、それってそんなに多い数字なん？」

「そうですね、こんな言い方は許されないかもしれませんが、スラムなどに身を置く羽目になる人間は毎年、かなりの数に上ります。そこから考えると、4人は大した数とは思えないのですが……」

「みなさんがそう思われるのも仕方ないと思うわ。でも我々エルフは個体数の管理だけはかなり徹底しているの」

「あんまり、エルフの奴隷って見かけないだろ？ なんてだと思っ？」

「そりゃあ、高貴な種族だからじゃないのかい？ 主殿」

確かにラナルラ王国じゃ、結構な数のエルフを見かけるが、奴隷では見た事ないねえ……なんでなんだろ？

「レイチエル殿、それは違うのだ。種族が理由なのではない。エルフの国自体が、全て買い戻すからだ。必要とあれば国に圧力をかけてでも、な」

「場合によつちや、犯罪を犯したエルフすら買い戻す。犯罪者を国が引き渡しを渋ると、死刑をエルフの使者の前で実行するか、金銭での引き渡しかの交渉になるらしい」

なぜそこまでして種族を保護するのだろうか？ 良く分からない……

「その通りよ。」

我々エルフは、ハイエルフになれる個体を探す為にそうしているの。ハイエルフは、ハイエルフとして生まれてくるのではなく、エルフが霊格を上げることでハイエルフへと成るのだから」

「ラナルラ王国は血統を抱える唯一の国だからな。エルフがそこまで拘るのも理解できるのさ。あとは、国が貴族に奴隷の所持を禁止してるのは知ってるな？ その一因の一つに、エルフの奴隷を持たせないって事も入ってるのさ」

「そっか、無理矢理奴隷にされる危険も少ない、万が一があっても国がしっかり対応してくれる。だから、ラナルラ王国にはエルフが結構おるんか。そら知らんかったわ」

「そうですね。エルフにとって我々のラナルラ王国は比較的安全な外国、という事なのでしょうね」

なるほどね。ならあたしも個体数管理される対称になるのかな？
ハーフ以下だとならないのかな？

「それはエルフに限った話ではないわ。部族としての滅びを危惧する獣人や亜人はみな、ラナルラ王国とは親交を保っているようによ」
「外の世界を見るにも、自分が襲われるかもしれない国よりも安全な国の方がいいのは当たり前だな」

「しかし、解らない事がある。先代女王。何故俺達に頼む？」

「っ！」

「問題はやはりそこなのだな？ クルカ殿はどう思う？ 私は、我が国が関わっていると思われているのではないか、と読んだのだが？」

「国、というよりも暗部、盗賊ギルドが関わっている可能性がある

んじゃないか？　しかもエルフの中でも地位のある者まで関わって可能性があるから、両方の不信感を煽りたくない。だから秘密裏に処理をしてしまう。その理由がしっくりくる気がする」

「どれも確証がある訳ではないのよ。だからこそ、関係に亀裂を入れぬよう、民の不安を煽らぬようにする為に、秘密裏の処理を頼むしかなかったのよ」

「それを頼まれてたのが、先代までの　空の詠み姫　。婆さんって事か」

要するに、大婆様は今まで、大人の事情の処理ってやつを担ってたんだね。それを今は主殿がしようとしてる、か。あたしや主殿がするって言うのなら手伝うだけさね。

「もし、エルフが人間に連れ去られた事が分かると、人間への不信感が抑えきれなくなるわ。逆にエルフの高位の者が関わっていた事が公になると統率がとれなくなるの」

「関係の維持には、見えない真実を隠せ。でも犠牲は出したくない、か。そつちにとつて都合のいい話だが、だからこそ　エルフの秘仙薬　なんて準国宝級の物まで報酬に出してでも、なんとかして欲しいって事だな」

「そのとおりよ。いなくなつた人達の似顔絵や特徴、解る範囲の状況などは後でグラフィックに持ってこさせるわ。

そろそろ、みなさんも疲れたでしょう？　部屋を用意させるから、今夜は泊っていつて。私は神樹の中に、もう少しだけ籠ってきますので」

そう言うと、メルフェイユ様は席を立たれ、あたし達は後から来た使用人に連れられて、客室へと向かった。

主殿様の一部屋とあたし達4人用の一部屋にわかれて入る。でも

すぐに全員が主殿の部屋に行き、これからの事を相談する。

「とりあえずは、グラッフさんが持って来てくれるはずの資料待ちだな」

「そうですね、御主人様。しかし、そうなりますと情報が欲しいですね。特に盗賊ギルド関係のものが」

「そうだな、できれば最近、首長飛竜や鷲頭獅子グリフォンを買った話や、儲け話の予定とか、そういう話が出回っていないかが知りたいな。一回婆さんに連絡入れて、盗賊ギルドからの情報でも買ってもらうか？」

「それは私がグリント老にお願いしましょう。ここで念話石をお借りしてすぐにでも連絡を入れます」

「ウチはグラッフさんのトコ行くわ。資料とやらを貰うのと、希少金属貰う話せなあかんし。もし会えるんなら、加工を手伝ってくれるドワーフにもいつペン会っておきたいしな。フィーはんも行く？ 模擬戦で相手してもらった人とかに一応、頭下げに行くけど？」

「そうだな、その方がいいかもしれないな……私が倒してしまった訳ではないが、彼らからすれば同じようなものだろうしな……」

「まあ、何にせよさ。お昼食べてからだね。あたしゃちょっと厨房借りて、食事の用意するよ」

今のあたしには、それぐらいしかできる事が無さそうだし、そう言ってみただけだ。何故かみんなに反対された。

「お前は、もうちょっとゆっくりしとけ、レチエ」

「そうですね。食事の件は、用意して頂けるのか私が聞いてきます」「せやな、エルフの料理つちゅうのにも興味あるしな」

「ふむ、私はレイチエル殿の食事も好きなの……」あんたは黙つき。行くで、フィーはん『……はい……』

そう言つてカナリーはフィーリアを伴つて部屋を出ていった……

「それでは、ご主人様。グリント老に何かお聞きになられたい事はございますか？ ありましたら聞いておきますが？」

「そうだな、うちの全員に装備させるなら、武器と防具はどんなモノが良いか、聞いていてくれ。カナが希少金属について聞いてくるはずだが、可能ならこの国で装備一式揃えてしまいたい。戻ると近場には腕のいい鍛冶はいないからな」

「わかりました。では行つてまいります」

「　　ちよ、あたしもいくよつ。侍従長！」

「レチエ、待て」

「ご主人様、レイチエルをお願い致します」

侍従長はあたしを無視し、主殿にそう告げて部屋を出ていった。

あたしには、料理以外にできる事なんて大した事がないから、できる事はしたいのに。

「　　ったく。普段は人の事を、鈍感だなんだと色々文句言つくせに、自分も鈍感じゃねえか。ルシィとカナは、お前の体に気を使つてるんだよ」

「そんな……もう大丈夫なんだよ？ さっきまではちよつと感覚がおかしかつたかもしれないけどさ、今はだいぶ落ち着いてんだし……」

「そりや魔力流しこんでるからな。ほら、ちよつとこっちこい。もう少し足しといてやるから」

「あ、ちよつと。待ちなつて」

こんな時の主殿は何を言つても聞いてくれないのは分かつてる、ただど一応抵抗してみる。別に抱きしめられたいと思つてる訳じゃないよ。主殿に負担はかけたくないからね。そんな事考えてようが

主殿があたしを離してくれるはずもなく。あたしは主殿に後ろから抱きしめられ、主殿はあたしの後頭部に自分の額を当てて魔力の感触を探っているようだ。

「レチエ」

「なんだい？」

「レチエが、エルフだろうがドワーフだろうがそんな事は関係ないぞ」

ッ！ そんな事は……あたしや何も言っていないじゃないか。

「だからそんなに不安そうにするな。変わってしまったおうがそうでなからうがレチエはレチエ。レイチエル・プロツサムだ。俺を変態マザコンだと罵って、妾でも愛人でも何でもやるって言ったレイチエル・プロツサムだ」

「愛人なんて言っていないよ！」

「妾は言ったる？」

「言っただけど……いったけど……」

「もう少し待ってる。エルフの秘仙薬 も手に入れて。四人が一緒にいても文句を言わない嫁を探して……」

「あんまり増やすなよ……寂しい日だってあるんだ……」

「分かっているさ……それで、お前に一番に産んでもらう」

「誰がだよ。そんな事、してやるもんか」

「レチエ」

「うるさい」

「レチエ。レチエ」

「うるさい、うるさい」

「言ってる事と表情がずいぶん違うようだ？」

「……うるさい……うれしかったら……わるいのかよお」

「よしよし。お前は素直な時も可愛いな。レチエ」

「……ダメレ……ばか……」

変わってしまった自分では、受け入れてもらえなかったら？ そんな疑問はずっと残ってた。拒絶されなくなかった。だから聞けなかった。侍従長にもカナリーにもそれが分かっていたんだろう。だからあたしを置いて、主殿と二人にしてくれたんだろう。

嬉しかった。あたしの体は少し変化したけど、主殿は変わらなかった。気持ちは何も変わっていない。それが本気だと伝わってくる。魔力に乗せて心が流れ込んでくる。体を安定させておく為だと、分かっている。今、抱きしめてくれている事がたまらなく嬉しかった。

「レチエ。この耳。いいな。触っていいか？」

「……すきにしろよ……ヘンタイ……」

「変態はひどいな。でも。好きにする」

主殿はあたしの髪を軽くまとめ左に流し、右耳を啜えた。そんな事して良いって言うてな……好きにして良いって言うっちゃった……

「ひいやあん！」

「を。ふぁんどすふおいふぁ」

「~~~~っ！」

駄目、だめ、ダメ！ 甘噛みされると耐えれないってばあ……ダメエ……

舌ダメ！ ホントに！ 耐えられないからあ！

「さて、心配かけた分と、ちょっと変わったくらいで不安になった

罰だ。十日後の予定だったが変更だ。大丈夫、耳以外何もしないから。でも誰か戻ってくるまで繰り返し返してやるからな？」

無理、ムリ、むり！ そんなの耐えられないって！ 言いたいけど口にも力が入らない。返事もできない……

後ろから覗き込んでいる主殿の顔はとてオイイ黒い大人の笑顔だった。

「　　っ！ だからといって、ここまでする人がありますか！」

「だってよ、あのままじゃ、勝手に自分を追い込みそうだったし」

「それでもなあ。これ、腰砕けとるんちゃう？」

「眠ってるだけだよ。あと頼むぞ？ ルシィ」

「ええ、ちゃんと寝かせておきます。が、何でしょう、あまりにも良い顔で寝ていると腹が立ちますね。こっちは心配したっていうのに……」

「確かになあ。ホンマに気持ち良さそうに寝てるもんなあ。起きたら絶対、弄りたおしたろ」

「それは可哀想なのではないか………？」

「……ゴク」

「フイーはん、今、ちょっとうらやましいなーとか思たやる？」

「そ、そそそそんな事はない！　　ちよつと………興味が出ただけで……」

「残念だが、コレもお前にゃ無理だ、フイリ。ここまで耳が弱いのは、エルフぐらいだろ？　　きつと」

「そ、そつだな

ハア……」

第10話 ご主人様は惑う「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第10話 ご主人様は惑う「1」

俺はクルカ。クルカ・ダントリン。

ラナルラ王国の王都より少し南東にあるダントリン領の領主だ。エルガルド公爵家の次男に生まれ、今は子爵を拝命している。

俺は恵まれた家系に生まれたが、才能には恵まれなかった。

家系に恵まれるだけで十分だと、妬む者もいるだろう。

だが、人とは思議なもので、妬む時は上の者を見るが、自身を顧みる時は下の者を見る。あいつよりは自分はましだ、と。

所詮、人生は自己評価だ。

恵まれていなくとも、自分が恵まれていると思えば満足するし、恵まれていようと恵まれていると認識できなければ満足などできない。

俺はご主人様だ。御主人様で、ゴシユジンサマだ。主殿で主様だ。クルカ様と敬われ、クルカ殿と付き従ってくる人間がいる。そんな存在だ。

なのに、なぜ俺は、目隠しされたあげく、風呂で柱に縛られているのか！

なんだこの扱いは！

「ご主人様、少しだけ我慢して下さい。フィーリア様やエルフの皆様が上がられましたら目隠しも解いて、お世話差し上げますから」「侍従長、それはちよっと甘いんじゃないかい？ もう全員が上がるまでこのままでいいじゃないか」

「コラ！ レチエ！ 主様に向かつてなんて事を！ 覚えてるよ！
ん？ ああ、そういう事か。わざとそういう態度を取って、後で
じつくり苛められたいんだな？ レチエはツンドロだか……………」
死になッ！』……………グハッ！」

『ガコッ』 コレは……………桶か？ 痛え……………

「ご主人様！ レイチエルも！ ここは屋敷のお風呂ではないんで
すから、自重して下さい！」

「俺を自重させる前に、俺を興奮させようとしてる、その二人を
止めるよ！」

「ッな！ 私は、クルカ殿を興奮させようとしているので
はない！」

「せやんなあ。ちよつとした、女同志の軽いスキンシップやんなあ」

「カナリー殿お、そんなあ、湯浴み着の脇から手を入れないでッ！
ンふう！ アアッ！」

だから、その微妙に艶めかしい声と音を出すな！

「伝授してるんやからしゃあないやん？ 胸を大きくするには、
胸支えとる筋肉と乳房の周りの皮膚に張りが必要やねん。覚えとき
や？」

声は聞こえないが、どうやら他のエルフの侍女たちも居るらしく、
フィリは逃げられない様だ。

「大きくなるのには、年齢は関係ないのかしら？」

オイ！ 先代女王！ あんたまで居るのかよ！ 高貴な種族なん
じゃねえのか！

「子供はまだ産めるんやろ？ 関係ないみたいやで？ 子供でけたら乳飲ます為にも、子供安心させる為にも、大きくなるし」

「そうね。エメルローザを産んだ時はそんな感じだったわね」

「ほら見てみ？ ウチとルシイ姐さんとレイチエルはんの肌。赤ちやんの肌みたいやろ？ この神樹から得られる魔力を、とにかく無条件に受け入れて、それを下地にして生命活性に回してみ？ 自分の魔力は上乘せにするイメージな？ ほんなら同じ様になるから。そのままこう、乳房の土台のラインに沿ってマッサージすんねん。ほんなら張りが出るで〜。この二人も、これでちよつと大きくなったし」

「あ、ちよつとカナリーさん！」

「や、あ、やめなカナリー！」

「皆さん！ 神樹に沐浴に参りますわよ、すぐに準備して！」

「私達もご一緒していいでしょうか！ メルフエイユ様！」

「構いません、今日は特別です。皆で行きましょう！」

「『ハイ！』」

何人いるんだよ！ 返事で風呂場がビリビリ言ってるよ！ くそ

お、見てえ！

お前らホントにエルフかよ！ つか、先代女王、アンタこれが聞きたいが為に、俺達を城に泊ませたな！？

「ルシイ姐さん、フィーはんがのぼせてもうたから、頼んでええ？」

「しょうがないですね。カナリーさん、ご主人様をお願いします」

「あたしも手伝うよ。侍従長は足持って」

「ウチ、扉開けたるわ」

くそう。なんだこいつら。俺をほったらかしにしゃがって。

しかも絶対見えない様に柱の反対側に縛られてるし……

「お待たせ。御主人様。寂しかった？ でも興奮でけたやる？」

「逆に辛いわ！ 覚えてるよ。カナ」

「覚えとくほうがええのん？ なんやせつかく、二人きりになる為にしたったのに。ほな、ウチも上がってええ？ ちゃんと覚えとくさかいに」

「まて、忘れていい。だから今すぐほどけ」

「ンふふ。正直な御主人様の方が可愛えなあ。でも解いたれへん。最近ほったらかしな罰や。ウチが御主人様を満足するまで堪能したら、解いたげる。安心して？ ちゃんと体も綺麗に洗ろうたるから」

そう言つて、カナは俺の色んなところを、それはもう、ほんとに色んな所を。カナのすべすべになつた全身の色んな所を使って、綺麗にしてくれた。

月明かりに魔法で冷えたグラスをかざし、淡い赤色を楽しんでから中の水を飲み干して、体の火照りを覚ます。すると、間借りしている部屋の外側に備え付けられたテラスの向こう側から誰かが来る気配を感じた。今度はグラスに酒を入れるとテラスに出て、こちらに来る気配に意識を向ける。

「あら、なんだかお疲れの様ね」

「そつちは異様に艶々してるな？ やつぱり、エルフなら神樹の魔力元素でも同じ事ができたのか？」

恐らく、それが知りたかったのだろう。まさか本気で先代女王が豊胸にハマるとは思えない。確かにエルフは、ほかの種族に比べて胸が薄いらしいが。

「そうね、可能性はある。だけど、貴方達ほどの力を手に入れるには、やっぱり神樹との意思疎通の関係もあるから。私と巫女の何名かはできそうよ」

「まあ、そうだろうな。これは世界で俺だけの技術ってわけじゃないからな。」

俺が初めて実践できたってだけだ」

「同系統の魔力元素による魔力増幅ね……」

「そうだ、俺はこれをエント^{同調}レインと名付けた。だが元は他人の理論さ。精霊が俺達の魔力で召喚できちまって、俺達の魔力で活動するんだ。きつと個人の魔力を自分に合わせて取り込む方法がある。そう主張した研究者の本を何冊か読んだからな」

ちょっと寂しげな眼になった先代女王の雰囲気と視線は無視し、手に持ったグラスの酒を、少し口に含んで話を続ける。

「実際、普通の人間同士でそれができる様になる為には、魔力の波長を合わせる為の機構石か魔導機が要るだろうな。作らないけどな」
「あら？ 作らないの？ 無敵の軍隊ができるわよ？」

そう言いながらも、先代女王はホツとしたようだ。暴力による侵略の危険性を考えていたのだろう。

「王になりたい訳じゃない。ただ、母さんとの約束を守りたかった。その為には力が必要だった。それを目指していたら、いつの間にか俺を支えてくれる愛すべき女達がいた。何があっても、そいつらだけは守りたい」

そうだ。俺には世界も何もかも要らない。必要なのはほんの少しの満足と家族との安寧だ。

「世界はちよつと俺の懐には入らんよ。大きすぎるし、重すぎる。

愛しい女達で精一杯だ」

「貴方みたいな人ばかりなら、人間はきつと千年王国ミレニアムでも作れたのでしょうね」

「古代王国つてのは、初めはそんな感じだったんじゃないか？ 転移門は今みたいに一ヶ所同士しか繋げられない転移門じゃなく、どこにでも行けたって聞いている。そんな技術がありながら、何故滅ぶのか。

「簡単だ。欲にまみれて腐るからだ。人も、獣人も、亜人もな」

そこで先代女王は、俺の手からグラスを奪い、中身を飲み干す。

「エルフの国に来る？ 先代女王わたしの情夫として」

「ハハッ！ 冗談が上手いな」

「あら、本気よ？ 夫は無くなって二百年は経つし。文句も言わないでしょ。それに王になれて、言ってる訳ではないしね」

先代女王は八百歳を超えているとは思えない艶めかしさで、視線を投げかけ、体を寄せながら聞いてくる。

「まったく。カナはお仕置きだな。要らん事教えちまいやがって。肌が瑞々しすぎる。流星、神樹の魔力を入れてきただけの事はある。」

「全くもって、魅力的なお誘いだ……『じゃあ……』……だが、断る」

「……何故か聞いてもいい？」

「ホントに自堕落なだけになっちまうと、腐りそうだな。それに…

…」

「それに？」

「何故か分からないが、断らないとお前は数分後に死ぬぞっていう
フンイキが、後ろから、だから、ドロドロ、漂ってくるので、今
すぐ離れて頂けませんでしょうか。先代女王陛下様」

「あら？ 貴方のお手では私の肌を堪能したいって、自己主張して
るわよ？ 私が感じてしまいそうな程に」

確かにいつの間にか、先代女王の背中と腕に触れた手は、すべす
べの感触を離したくないと言ってるかも知れませんが、それ以上密
着するとマジで死ぬから！

「いや、もうマジで死ぬから！ お願いだから離して！」

「ご主人様。お話があります」

「ちゃんと断ったから！」

「御主人様。ちよつと見境なさすぎへん？」

「いやいや、カナの方がいい肌だったから！……『ほな、ええわ』

……ヨシ」

「主殿、一回死ぬかい？ 介錯は任せな？」

「俺が誘った訳じゃない！」

「クル力殿、言葉はともかく、体が正直すぎやしないか？」

「お前の位置からじゃ俺の手は見えてねえだろ……『あら、撫でま
わしてたわよ？』……うが………すいません」

こんな他国まで来て、俺は死ぬような目に会うのか

「ウフフフ。貴女達。ホントに楽しいわね。クル力殿、本気で考え
てみて？ 二百年くらいなら待っててあげるから。みんな一緒にい

らっしやい？」

「そりや気の長いこった。ラナルラ王国に居られなくなりそうなら、ここに逃げてくるよ。こいつらと、その子供たち連れてな」

「その時は覚悟してね。エメルローザの弟を作ってもらわないとね」

ソレは流石に本気なのか、冗談なのか分からなかったが。ルシイがつねっている二の腕がかなりヤバい事になっている気がするし、レチエとフィリに踏まれている足の甲もかなり痛い。というか激痛だ。さっさとこの話は終わらせよう。

「なんかのしがらみや、理由ができて俺達を止めなくなったら、家族全員そろって、無傷でここに幽閉って条件を出してくれたら従うからさ。覚えといてくれ」

「いいわ、覚えておいてあげる。それと、どうでもいい事だけど……」

「ちょっと上目づかいで聞いてくる先代女王。畜生！ 可愛いじゃねえか！」

「海の民とダークエルフが嫌いつてホント？ ハイエルフとは仲が悪いのよね。何故か分からないけど」

「嫌いつてワケじゃないだが……肌の色が生理的に受け付けない。ぶっちやけちまえば、抱こうと思えない」

「判断基準はそこなのね。ウフフ。あ、もう一つだけ」

「まだあるのか……いい加減色々痛いから解放してくれよ。」

「なんでしょうかあゝ先代女王陛下」

「もう。女のわがままには付き合うものよ？」

「クル力殿は上も下も守備範囲が広がって、十歳くらいにし

「か見えない獣人困ってるってホント？」

「……………誰だ！ そんな、俺が犯罪者みたいに聞こえる情報流したやつは！！」

「クシユン！ 風邪かねえ？ 腰にクする前に温めておくかね……………」

「ったく。獣人はいるが、ちゃんとしたレディーだよ。今頃、王国で成人の儀の準備中のはずだ。可愛く着飾って、な」

「婆ちゃん、見て見て！ アレ、なんか褒められた気がする……………」

「ああ、ミランダにとても良く似合ってるよ」

「そうなの？ じゃ、若い方が好み？」

「そういう事じゃねえさ。必要だつて俺が感じたら、それでいい」

ん？ フィリがやってる足以外の痛みが少し引いた様な…………

「じゃ、私も十分範囲内なんだ？ さっきの手つき、いやらしかったモノね？」

「マジで、もう勘弁して……………」

さっきとは全く逆に痛くなってるから！

「ごめんなさい。貴女達と一緒に話すのは楽しくって。エメルローザはいつまでも手がかかるし。頭が痛い事も多いのよ。私はここを出られないしね」

「そうか、なら暇になったら遊びに来るさ。ローズベリーパイの材

料持つて、レチエもみんなも連れてな」

「そこは嘘でも、クル力殿が一人で、御土産にローズベリーパイを持って来るって言うところよ？ 乙女心を勉強なさい？」

「俺の大切な人の乙女心を読んでそう言ってるんだよ。分かってるだろうが」

「ふふ、じゃあ、そろそろ行くわ。エメルローザの様子も見ないといけないし、肌も自慢しないと」

自慢の方が本音っぽいぞ、先代女王。

「子供のしつけはしっかりしろよ。仮にも女王なんだろう？」

「ええ、気を付けるわ、おやすみなさい」

去っていく先代女王の、大きく露出した背中とその後ろ姿は、月の光のせい肌綺麗になったせいかは分からないが、きらきらと輝いているように見えた

「で、やっぱり、エルフもできるって、メルフェイユはん言ってた？」

「んん？ ああ、そこは聞いてなかったのか。できるらしいな。エルフの巫女も何人かは可能だろうって事だ」

「ちゆうことは、精霊の宿つとる樹や湖を崇めてる部族にやったら、交渉のカードにできそうやね」

「だな。カナの理論は正しかった。それでも女性限定だがな」

「男は受け入れるっていう感覚が分かりにくいんとちゃう？」

「そういうもんかもなあ……」

「ご主人様、そろそろお休みになりませんか……」

「あたしもなんか眠いよ……なんにもしてない気がするんだけど……」

「レイチエルはんは、体が急激な変化で疲れとるんやろ」

「そうだな……」

同意し、寝る為に部屋に戻ろうとしたのだが……

「待つてくれないか。クル力殿。少し話がしたい」

「明日じゃダメなのか？ 今日色々あつて眠い……」

「風呂でも頑張ったしなあ？」

「っ！ 真面目な話なんだ！」

「なんだ、実家に帰る気になったか？」

「二人で話したい、ダメだろうか？」

ルシイをちらりと見て確認してみたが……

「分かりました。では、ご主人様。明日も起こしに参りますのでお早めにお休み下さい。いきましよう、レイチエル。カナリーさん」

「了々解。ほな、御主人様お休み」

「ちよつと、侍従長！ ああ。もう！ じゃ、主殿、フィーリア、お休み」

そして三人は部屋へと入っていった。

「で？ 何だ、話つて」

「クル力殿、私は、私は、貴方の事が……」

第11話 ご主人様は惑う「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第11話 ご主人様は惑う「2」

目の前の女は何を言っている？
それこそ意味がわからない。

目の前に立つ、フィーリアの瞳を見つめる。

フィーリアの紺瑠璃の瞳は、月を背にしているせいか黒にしか見え、その意思は読み取れない。

「もう一度言おう、私は貴方の事がわからない。異常だ。

貴方自身には大した力もなく、才能も無い様に思える。だが貴方はメイド達を含め、先代の 空の詠み姫、ハイエルフの先代女王と次から次へと、強力な手札を増やしている。国でも起こすつもりなのか？」

「俺がそんな柄に見えるのか？ 冗談はほどほどにしてくれ。もう寝る」

俺は話を打ち切る為に背を向け、寝室へと入る。そして、サイドテーブルに置かれたデキャンターから手に持ったグラスに水を注ぎ、一気に喉へと流し込む。

「何だ。まだ話があるのか？」

「話は終わっていない。クル力殿、今日の一件は危うく、王国とエルフの戦争を引き起こしかねなかった。貴方は何を考えているのだ？ そんな事になる事は分からなかった等と言ってくれるなよ？ 貴方は始めは王国貴族としての対応をしていたじゃないか。分からなかった訳ではないのだろう？」

以外にも状況をすっかり見極め、危険性を感じ取っているだけではなく、ある程度は俺の心情まで考察できているフィーリアに、俺は驚いていた。腐ってもソルフイツシユ家第一子、か。第一騎士団所属つてのも鼻屑目無しの結果なのかもな。

「脳筋だと思っていたが、なかなか考えているじゃないか」

「茶化さないでくれ。真面目に聞いているんだ」

「わかっていて王国を危機に晒したのだと言えば、どうするんだ？」

「最悪、第一騎士団に戻り、討伐隊を編成する事になるだろう」

「おお、怖い。王国最強の王立第一騎士団の討伐隊か。怖い怖い」

「それは私を侮辱しているのか？」

「いや、本当に怖いと思っっているさ。後に待っているのは、家族を危機に晒す事と、国外への逃亡だけだろうからな。安息の日々が無くなる」

「っ！ …… そうだろうな、あれだけの結果を出すのだ。第一騎士団自体は怖くないというのは本音だろう。だが、その後に待つ国の対応が困る、という事か。今日の彼女達で何割ほどだ？」

言葉の裏も読んでいる。何故、普段はあんなに脳筋なんだ？ 意味がわからん。

「教える義理はないが…… まあいい。1割だ。まだ、それ以上に増やした事はない」

「馬鹿なつ。今日の侍従長殿は、私と手合わせした時よりも、さらに強くなっていたではないか」

「フィリ。お前は魔力での身体強化を覚えた日から、強化にかかる負荷や展開速度を訓練で軽減し、強さは上がらなかったのか？」

「だが……」

「同調 エントレインは掛け算なんだ。魔力同士の足し算じゃない。俺の無色魔力元素を下地に、自身の魔力元素を想いの力でかけ合わせる。

お互いが想い合えば、想い合うほど力は上がる」

「……………それで、何をするつもりだ？」

「言つたる？ エルガルド家の『六血会議』への復帰と七番目の血統の認知。それが目標さ」

「では、先代殿とグリント殿の行つていたという、盗人の真似事とは何だ？」

良く覚えてるじゃないか……………脳筋だから聞き流してると思ってたが…………

「そのままの意味さ。肥え太つた屑な国外の貴族や商人から、禁制の奴隷や商品を奪う。盗賊ギルドのお仕事さ。知ってるんだろ？ 盗賊ギルドが国営である事も」

「ああ、それには気付いていた。何故か、討伐が許可されない盗賊団がいる。その事が分かつた時に、第一騎士団団長に聞いたのだ」

「そういう事だ、ラナルラ王国にだって暗部はある。誰かがその管理をしなければいけない。それを担うのが 空の詠み姫 だって事だ」

「ッ！」

流石にそこまでは知らなかったのか。まあ、いずれ聞かされる話だ。

「私では、私では貴方の力にはなれないのか？ だから私には、夜にこそそそとやっている事について、話してくれないのか？」

「お前の目的は、最強の称号なんだろうが。それには関係のない話だ。だから言わないし、手伝わせる気もない。」

それに、騎士が盗賊の真似事をする気か？ 騎士の矜持に反するんじゃないのか？」

そうだ、フィーリアはまだ民を守るべき騎士団の騎士なのだから。

「 わからない。解らない。分からないんだ。胸が苦しくなる。」

あの美しいエルフの先代女王に、誘惑されている貴方を見て、胸が締め付けられる想いだった。みんなに混じって、貴方の足を踏みつけていた自分に気付き驚いた。私は一体何をやっているのか!と

ああ、確かに、両足踏まれてたもんな。フィリもやってたか。

「錯覚だ。みんなの行動を真似ただけだろう。気にするな。俺は怒っちゃいないし、気にしてもいない」

「気にしてくれ! 私をもっと見てくれ! 私を必要としてくれ! 何故、なぜ……何故、私では駄目なのだ……」

「フィリ、お前はあのエント^{同調}レインの効果を見て、憧れているだけだ。お前には俺が、勇者に聖剣を授ける御使いに見えているだけだ」
「ちがう! チガウ! 違うんだ……王都でカラックと手合わせした時に気がついていたので……私はもう、変わってしまった事に。あの時に気がついた。貴方に腕や足を触られた時も、下着姿を見られた時も、恥かしかつたが嫌じゃなかったという事に。そんな風に感じている自分を信じなくなっただけなのだ!」

フィリ。お前は

「私にとってカラックは養成学校の時から、互いに切磋琢磨した友人だった! 騎士団にいれば、肌が触れるなんて日常茶飯事だった! それなのに、そんなカラックの手に嫌悪を感じたのは初めてだった!

他の男には触れられたくないなんて、思った事も無かったのだ!」

フィリ、お前は俺の女なのか……？

「どうすればいい？ 私はどうすればいいのだ？ 教えてくれ！」

くそつ。カラック兄さんが絡むと、いつも思いどつりにならない事が起きる……

「黙っていないで、私に何か言ってくれ！ 私に何か伝えてくれ……私に気持ちを囁いてくれ……私は、私は……！……！」

俺はどのあたりからぼうっとしていたのだろう。

聞こえていた、フィリの慟哭。

見えていた、子供の様に流す涙。

感じていた、胸を叩く拳に宿る想いを。

失態だ。ここがせめて屋敷だったなら、逃げる場所も、フィリを任せられる人間もいるのに……ここに来る前に、屋敷に寄るべきではなかったか……

騎士団の甲冑を纏ったフィーリアと正装した俺が並んで扉の前に立つ。大事な話になるかも知れないので、メイドには下がってもらっている。

少し呼吸を整え、俺は意を決し、父さんの執務室の扉を叩く。

「入れ」

「失礼します、父さん。フィーリア・ソルフィッシュ殿をお連れし

ました」

「初めまして、エルガルド卿。私が……『ああ、堅苦しい挨拶はしなくてもかまわない』……それでは。私がフィーリア・ソルフィツシユです。フィーリアとお呼びください」

「よく来てくれた。フィーリア殿。今朝、お父上に会ったが、次代の星の召き手の文句ばかり言っておられたよ」

「相変わらず、父上らしい事です。父上は褒めて伸ばす、という事をなさらない方ですから。お話になるだけ期待されているという事なのでしよう」

「そうだな、彼も公爵家当主故だな。そして、我がエルガルド家としても、フィーリア殿には期待していない訳ではない。我々も貴族だ。取り繕う言い方はしないで率直に言おう。正直なところ、私は女子を生んでくれるのであれば、誰でも構わない。だから気に入らないのなら、君が無理をしてクルカと一緒にいる必要はない。それだけは伝えたかった」

母さん達を本気で愛している、父さんらしい話だった。

「そのような事はありません。クルカ殿は多少、奇抜なところはありますが御心は真つ直ぐな方なのだと、ここ数日で理解させて頂きました。故に私も、先代様の元で勉強させて頂いているのです。私は剣一筋で生きてきた身。至らぬ事が多すぎて先代様には迷惑をかけるばかりです」

「そう言ってくれると助かるのだが……『親父、下らない話は抜きにしよう』……カラック。どういう意味だ?」

「聞きたい事は一つだろう? フィーリア、クルカの何が気に入ったんだ? 前に言っていた理由とやらも確認したんだろう? 一体何だったんだ?」

……そりゃあ、気になるよなあ……

「カラック殿、私は仮にも貴方の弟君の妻になるかもしれない女だ。せめて、呼び捨ては止めてくれないか？　今は、君の友人としてこの場に立っている訳ではないのだ。」

それに、教えると言われても、君に晒す訳にはいかない。仮にも未来の夫の前だからな」

「それではやはり？」

「そうだよ、父さん。フィーリア殿にも、きちんと体験してもらった。手と足だけだけどね。剣の稽古で荒れたはずの掌ぐらいなら、構わないんじゃないのか？　フィーリア殿？」

「ふむ、君がそう言うのなら構うまい。」

どうぞ、エルガルド卿、カラック殿」

そう言つて、小手と手袋を外して見せるフィーリアの手は、赤子の様に綺麗なものだった。剣の稽古で荒れた部分など微塵も感じられなかった。

「確かに……綺麗なものだ。これをクルカが？」

「ええ、少々恥かしい思いもしましたが、未来の夫であると思えば、どうという事はありませんでした」

そんな事を言う予定じゃなかったはずなのに、平然と言い出すフィーリアに心の中で文句を言いつつ、話に割り込む。

「今ではだいぶ訓練も進んだからね。服の上からでもできる。これで貴族の奥様方から出資を頂けるようになるよ。ダントリン領は安泰さ」

「しかし、妻になる立場から言わせてもらえば、妻の居ない所で他の女性の肌を触ってばかり、というのは気分のいいものではないぞ

「？」

「そ、その時は同席してくれればいいさ」

「そうだな。妻なのだから」

くそつ。妻、妻、妻と強調しやがって、俺を結婚させるように追いかけてるのか？

「　　フィーリア殿、本当に君はそれでいいのか？　そんな手で剣が振れるのか？　空の詠み姫　の母もそれなりの強さが必要となるぞ？」

「カラック殿、私とて貴族で女だ。貴方と訓練にて切磋琢磨していた頃のように、いつまでも最強という夢だけを追いかける訳にはいかないのも理解している。」

であれば、早く結婚し、そして生まれてくる子が　空の詠み姫となれるかもしれないのなら、その為に全力を尽くそう。剣も私が教えよう」

「そうか、フィーリア殿はカラックよりも剣の腕が立つのだったな。女性を侮るつもりはないが、その手を見てしまうと信じられんよ」

「エルガルド卿。心配頂かなくとも、この手のお陰で、剣の動きの繊細さが増したぐらいなのです。後でカラック殿との模擬戦でも、お見せしましょう。」

幸い、クルカ殿が傍にいれば怪我をしても、大きな傷は残りませんし、いつまでも美しく年を取れる様です。女として、これほど得難い物ありません」

フィーリアは散々練習させられたうっとりとした視線を自分の綺麗な掌に向ける。それを見るカラック兄さんは、信じられないといった目を向けている。

「何にせよ、フィーリア殿がクルカを気に入ってくれたのであれば、

私に言う事はもうない。後は母上にお任せする。フィーリア殿が空の詠み姫の母親に相応しいのどうかは、母上にしか判断できないからな」

「それについて、お聞かせ頂きたいのだが、相応しいか判断されるのは私だけなのですか？ カラック殿も婚約者を得られたとお聞きしていますか？」

「メルベス公爵家のシャルティア・メルベス殿の事だな。彼女に関しては母上の判断を頂いた後、お互いに告げているので問題ない。そして、エルガルド家の空の詠み姫は女性にしかなれないが、一人しかなれない訳ではない」

ああ、なるほど、だから婚約が同時に進むなんて無茶が成り立ったのか。

「私とシャルティア殿が、共に女子を産もうが問題ないという事ですか」

「ああ、色々と制約はあるが、十五歳までは空の詠み姫に選ばれる事もない」

「エルガルド家の方が周期は短い様ですね。ソルフィッシュ家の星の召き手は成人の儀を終えた者しか選ばれませんし、そこからさらに五年はかかりますから」

「そういう訳でもないのだがね。空の詠み姫は選ばれたその瞬間から、死ぬまでずっと修練だ、と。母上はそう言っていたよ」

だからこそ、俺は空の詠み姫の親にはなりたくないんだ。何が楽しくて自分の娘を、苦しめる選択をさせなければいけないのか

……

「クルカ、どうした？ 何か心配事か？」

「いや、婆さんに認められるか心配だっただけさ」

よつぽど嫌そうな顔をしていたのだらうな。カラック兄さんが本気で心配そうに声をかけてくるぐらいだ。しかし、俺の言葉を聞いて喜んだ振りをしているフィーリアが、先程と同じうっとりした視線を、俺に投げかけているのを見て、不機嫌そうに席を立つカラック兄さん。

「では、フィーリア殿。中庭で一手ご指南頂こう。クルカのソレが、騎士の女性にも希望を与える物なのかを知りたいのでね」

「了解した。ではエルガルド卿、失礼致します。次にお会いできる時には御義父上とお呼びできると信じております」

「フィーリア殿。母上のお使いとの事だから、無理難題があるだろうがクルカ共々、よろしく頼む」

そして、カラック兄さんとフィーリアは部屋を出ていき、残された父さんに声をかける。

「悪い女性ではないと思う。だが恐らくは婚姻は成立しない」

「何故だ？ ならば見せるべきでは無かったのではないのか？ アレは」

「いずれ知られる物なんだ。かまわないよ。父さん」

「クルカ。お前が母上と何を隠しているのかは知らないし、聞かない。だがフィーリアの想いだけは忘れないでやってくれ」

やはり、父さんは黙って待っていてくれるんだな。すまない。

「分かっているさ、父さん。『家族仲良く幸せに。笑顔の絶えない楽しい食事』母さんは、貴族にはとんでもなく難しい事を望んだもんだよ」

「それがフローリアの良い所でもあったのだ」

「それも分かってる。じゃ、父さん、カラック兄さん達がやりすぎないように見てくるよ。嫁入り前だ、怪我をされてもかなわないしね」

「ああ、カラックとも仲良くするんだぞ」

「それは兄さんに言ってくれ」

そう言い残し、扉を閉め、中庭へと向かう。

中庭にはハイエルフの元へと向かう全員がそろっていた。

「さて、クルカ殿も来たようだ。始めようか。御義兄さんッ」

「まだ、そう呼ばれるのは勘弁してほしいな。フィーリア殿ッ」

俺が到着したのを合図にしたのか、二人が動き出す。

兄さんはエルガルド家特有の、円の動きで死角に入り込もうと迫る。

フィーリアはここ最近で覚えたと言っていた弧の動きと、元々のスタイルなのだろう、瞬間的に速さが増す直線の動きで入り込ませない。

剣を右に薙ぎ、左にできた空間にわざと自分の左腕を上げ死角を作り、そこに誘い込まれた兄さんを、左腕ごと貫くタイミングで剣を返し貫く。

いや、左腕はずらされて貫かれていない。俺の目では全ては追えない。

いつの間にか、兄さんは少し離れて立っており、軽く唇の端を上げている。

そこで攻防が止まると、その全てを見切れない自分の力量に腹が立ち、悔しい思いが拳を握らせる。強く、指が掌を突き破らんばかりに握りしめた手に、横から誰かが触れる。

見ると、ルシィが俺の拳を手で優しく包み込んでくれた。
た。

「ご主人様が得られなかった物は、私達が得てみせますから。ご主人様はご自分をお責めにならないで下さい」

そつと囁くように言われた言葉の意味を理解し、それでも悔しさは残るが諦める。自分にはあれほどの才能はない。自分にできる事は愛する者を戦わせる事だけなのだ、もう一度自分に言い聞かす。その罪深さも一緒に。

そして、もうすでに動き出している二人に目を向けるのだった。

第12話 ご主人様は惑う「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第12話 ご主人様は惑う「3」

才能が欲しかった。努力が実る事を信じた。

そんな事が誰にでも起こるのなら、人はみんな幸福なはずだ。

才能も、努力も結果が出せるのは一部の人間だけだ。

だから、人とは違うところを伸ばそうとした。

誰もが結果を出せていない事でなければ、結果を出せない事を知っていたから。

それは逃避だったのかもしれない。他人の才能がこんなにも羨ましいのだから。

剣が走る。

剣が煌めく。

手合わせ程度だったはずの模擬戦は真剣なものになっていた。

『二人とも脳筋かよ』

そう言い捨てたかったが、二人が持つ才能がそれを許さなかった。そして、理解する。フィーリアが居るべき場所はあるのだと。

彼女自身が望んだ最強への道は、彼女の手で辿り着くべきモノだと理解した。

「御義兄さんおにいッ。だいぶ腕を上げたのではないかいッ！」

「そうだろうよッ！ 目標がいたからなッ！」

薙ぎ、払い、突き、切る。
受け、流し、避ける、躲す。

もう、俺の目では残像が重なり合うようにしか見えない攻防は、
全くの互角に見えた。

が、違った様だ。

「カラック様が負けます」

隣のルシィが、そう言ったのに対し、何故と聞こうとした、その
時。

『ガランッ!』

金属特有の重い音を立てて、フィーリアの右手の手甲が落ちた。
そのフィーリアの手には、カラック兄さんの首に添えられた剣が
あった。

「ふう、やはり俺では届かない、か」

「私にも、ソルフイツシュ家としての面目がある。残念だが負けて
はやれんよ」

「フィーリア、腕は大丈夫か？ 血は出ていない様だが……」

そう言って、手を伸ばしたカラック兄さんの手が触れる前に、フ
イーリアは身を引き、背を向けながら留め具の壊れた手甲を拾う。

「大丈夫だ。留め具が壊れただけだ。カナリー殿にお願いして、直
してもらおう」

「……そうか、ならいいが。……さて、俺は着替えに戻る。クルカ、

お前達はすぐに出るのか？」

「あ、ああ。もう少し荷物の確認をしたら、すぐに出る」
「そうか。では、またな」

カラツク兄さんは、少しだけ寂しげな表情をフィーリアに向けた後、自室に戻っていった。

「フィーリアは流石に第一騎士団所属だけあって強いな。俺では何が起こっているか、ほとんど解らなかつたよ」

「そうだろう？ 惚れるか？」

「あいにく、『自分より強い女だから惚れる』なんて趣味をしていないんでね」

「それは、残念だ……………本当に」

少し落ち込んでいる気がしたが、勝つたのだ。きっと腕でも痛むのだろう。

「ルシイ。一応、フィーリアの腕、見ておいてやってくれ。これから旅に出るんだから準備はしっかりしておきたい」

「解りました。ご主人様」

「すまない、出発前に迷惑をかけてしまうな」

「大した事ないし、ええやん。どっちにしろ甲冑着替えるんやし。

いこか？」

「何故着替えるのだ？」

「その壊れたの着ていくつもりなん？ それに御主人様の用事で行くんやで？ メイド服に決まってるやん？」

「あ、あれは屋敷の中だけの服装じゃないのか！？」

「何言つてんねん。ウチかて、この服で転移門通ってきたやんか」

まあ、メイド服で行かせるつもりだったが、カナめ。なんか企ん

でるな？

「待つてくれ！ そんな恰好で王都を歩いて誰かに見られたら……」

「はいはい。ちやつちやつといこか」

「離せ〜〜！」

まあいい。ルシィとカナに後は任せよう。

「ルシィ。後は任せる。ちよつと庭園に行つてくるよ」

「分かりました。ではレイチエル。用意を済ませましようか」

そして、庭園へと向かいながらフィーリアの事を考える。

どうやって帰そう。

せつかくの婆さんの考えだが、あの才能はもつたいたない気がする。俺には正確な強さは分からないが、女性であそこまでの強さを持つ者は、滅多にいないのではないか？

フィーリアには努力と才能で、より高みを目指せるようにした方が良いだろう。

俺が戦闘という才能に恵まれなかったからこそ、手に入れた無色魔力元素だが、そんな裏技で簡単に努力を覆すような真似をしても良い存在か？

あれを見ていると、嫉妬心を抑えられそうにない。何故、あれだけの才能を持って生まれる事が出来たのが、自分ではなかったのだと。

婆さんに相談して追いつく方法を考えよう。俺の傍にいる存在が全て、俺に良い影響を与える存在という訳ではない。それに気づけただけでも収穫だ。

俺は、嗚咽しながら俺の胸を力なく叩き続けるフィリに、優しく話しかける。

「フィリ。お前は俺の自由さに憧れているだけなんだ。お前のそれは誰でもかかる麻疹の様なものだ。そんなものでお前の心を曇らすな」

「……この気持ちか偽物だというのか？」

「そうじゃない、だがソレはすぐに冷める。放っておけば覚める夢の様なモノの為に、お前の才能を無駄にするな」

「私の才能？ そんなものはない。あるのは努力だけだった」

「フィリ。そんな事はない、お前の才能は大したものだ。きっと努力を積み重ねたその手で、才能をより高みへと押し上げたのだろう。だからそれを裏切るような行為はよせ」

「私はそんな言葉が聞きたいのではない！ 私の努力は当たり前前の物だった！ そうしなければソルフィッシュという名でいられなかったのだ！ だから努力した！ そして当たり前前の様にそれを取り上げられるのだ……目指した所に辿り着く前に！」

「誰も取り上げたりはしない。だからお前は、お前の道を目指せ。俺達のように、邪道で辿り着こうとするな。お前のその努力と才能はとても美しい。俺達の誰にも手に入らなかった物だ」

「貴方は！ …………… 貴方がそれを言うのか。最強に至る道を持ちながら！ それを持ちえぬ、私に言うのか！」

フィリは今興奮しているだけだ。落ち着けば分かってくれはすずだ。しかしどう言えば落ち着くのか……

「どれだけ私がそれを望んだと思う！」

「それは俺も同じだ。剣の才能、努力が実る瞬間が欲しかった……」
「最強に至れぬ、この才能は！ この努力は！ 次代の最強を産む為の苗床として生きていく事になるのだ！ その気持ち貴方に分かるか！」

「わからない、わからないのさ、フィリ。俺の魔力が無色であるという事以外、何の才能も持ち合わせていない俺は。お前の立場にも立てないんだ」

「……………」

フィリの涙を拭いてやり、そつと話を続ける。

「俺から婆さんに頼んでなんとかしてもらおう。フィリが剣の努力を続けられる様に。俺がどれだけ欲しくても、手に入らなかった物を汚そうとするな。その美しさを捨てようとするな」

「どうして……どうして、そんな事ばかり言うのだ……まだ私は見えぬものを追いかける必要はないのか？」

「フィリ？」

「私は楽をしてはいけないのか？ 女の幸せも得たいと思っただけはないのか？ 一体いつまで続けられ、この努力の渦から解放される？ もう嫌なのだ！ 先も見えぬのに走り続けていられないのだ！ 見えたはずの終わりはルード・ソルフィッシュに奪われた！そして次は次代の最強を産めと言われた！ 女であることすら道具だと言われたのだ！ あと何十年走り続けられれば、私は終われるのだ……………」

俺は勘違いをしていた。フィリにとって、最強とは己が望んだ物

だと思っていた。あれだけの才能なのだ、周りに褒められチャホヤされて、育つたのだらうと勝手に思い込んでいた。

……それがここまで重い枷だったのか。壊れそうになる程に……

「……ファイリア……」

「お願いだ、お願いだから……この気持ちが無駄な物であったとしてもかまわない。私はこの気持ちだけを抱いて生きる。」

……何でもする。どんな、どんな事にだって耐えて見せる。絶対服従だと言っただけならさうしよう。貴方が王国を裏切るといふのなら私はそれに従う。

だから、だから。私を貴方のモノにしてくれ。私に女でいさせてくれ！ そしてルード・ソルフイツシュを倒させてくれ。

もう、もう、他のモノからは解放してくれ……」

失敗した。カラック兄さんに会わせ、騎士である事を取り戻したいようなら、騎士として去ってもらおうと思っていた。その才能がもう少し取るに足らないモノなら、納得し、利用する事もできた。

フィリは違う。俺が付き放せば壊れる、それこそ次代の最強の為の苗床として虚ろな人生を送るだらう。この輝く様な才能が？ 虚ろな人生を送る？

いいだらう。やってやる。

この輝く様な才能を 星の召き手 よりも輝かせ、ルード・ソルフイツシュを倒させてやる。

だが、フィリ、お前も楽にはなれないぞ。悪魔に魂を売ってもらおうか。

「フィリ、解放されたいか？」

「……ああ。自由にしてくれるのか？」

「そこには自由なんてない。お前がしようとしているのは、悪魔との契約と同じだ。自らを奴隷にし、俺に捧げる事で、今の苦しみから逃れようとしている。俺の為に生き、俺の為に死ぬ。お前のその輝く様な才能を糧にして、得られる幸福は僅かだぞ？」

「構わない。ルード・ソルフイツシュを倒し、私がソルフイツシュから解放されるのならば。その先にあるのがほんの小さな幸せでも構わない」

その契約。交してやろうじゃないか。

「ならば、俺が悪魔になってやる。フィリ、お前の心を喰らい、身体を喰り、才能を使い潰し、努力で満たされてやる。今日からお前は俺のモノだ。妻で、愛人で、妾で、メイドで、そして奴隷だ。刃向かう事は許さない。そのかわり、俺がお前を最強へと導いてやる」

「いいな！」

「はい、我が主」

涙で濡れたフィリの顔を、髪に指を絡ませ後頭部を掴んで引き寄せ、無理矢理唇を奪う。

『同調
エントレイン』

【フィリ、聞こえるな】

【はい……】

【受け入れる、俺がお前の主だ】

【はい……当主様……】

【……まあいいか……】

【フィリ、こぼれてる。全て飲み干せ。そして自分の内側に敷き詰

める】

【ふあい……とおしゅしゃま……】

「成功は、したか……」

「ふあい？」

「ちっ。ルシイ達と違って肉体経験が無いから耐性が無いか…

……」

「ふああ」

少し荒療治になるが仕方ないな。躑けて見るか……

「フィリ！ しっかりしろ！ また無くしたいのか！！」

「っ！ そえだけふあ……いやらあ！」

「フィリ！ 言ってみる、お前の主は誰だ？」

「わたすいのあるじは、キュルカしゃま……」

「そつだ、主の命令だ！ しっかりしろ。真っ直ぐ立て！」

「ふあい！」

ふむ……ましになったか。騎士も厳しい世界だろうからしっかり命令する方がいいのかもしれないな。まだ自分じゃ消費させたりできないだろうし、抜くしかないか。

「来い。フィリ。少し抜いてやる」

「ふあい！」

『んんッ』

さて正気に戻った時にどうなるか？ ルシイの時は殴られたな……

「あれ……私は……」

「気分はどうだ、フィリ。わかるか？ 魔力が残っている感触は」

「これが……同調エントレインなのか……」
「さっきまでは二十分の一ほど入れていたが、お前が正気にならな
いんで抜いたからな。かなり微量のはずだ」
「そうか……これで私は……」

意識を取り戻すのは早い方だな。やはり鍛え方が違うか。

「お前は、自分がどういった選択をしたか覚えているな？」
「覚えている。私は貴方に全てを捧げる。どんなことでもこなして
見せる」

「なら今日は、お前が俺の夜伽だ」

「そ、その。いきなりなのか？」

「魔力の様子見も兼ねるんだよ。定着のさせ方を忘れて、また失い
たいか？」

「それは困る！ のだが……もう少しだけ、その、心の準備を……」
「アホか。奴隷でも何でもやると言ったのはお前だ。好きにさせて
もらう」

「ああつ。ちよつと。待って、今は……」

「ん？ ……なるほど。これは流石に予想してなかったな」

「~~~~~っ!!」

「準備ができてるんだ。問題ないだろ。ほら」

「~~~~~っ~~~~」

「フィリ！ 言う事を聞け！」

「ひゃい！」

恥かしい事は後になればなるほど厄介だからな。

さっさと初めから終わらせておかないとな。

「クルカ殿、その、できれば優しく……」

「心配するな、忘れられないくらい優しくしてやる」

「……………それは本当に優しいのか？ クルカ殿」

「フィリ！ 今は勘弁してやるが、呼び方を朝には変えておけよ」

「あ、はい……………ひゃあ。……………あぁッ……………ちよっ、あ、あぁっ……………」

「起きたか？」

目をうつすら開けたフィリに話しかけると、此処がどこかもわかっていない様だったが、だんだん目の焦点が合ってくるにつれ、顔どころか肩ぐらゐまで真っ赤になった。

「あにゃ、あにゅ、あにえ、あによ……………」

「……………？ 猫語か？」

「違っつ！ 私は昨日……………その……………えと……………う」

「心配するな。ちゃんと可愛かったから」

「それはよかつ……………ちがう！ そうではなくて！ 同調 エントレインは成功だっただろうか！」

まだ可能って事が分かったぐらいだからな。成功って言うのは、どこからの事を言ってるのか。俺がわからんのにこいつに分かるのか？

「とりあえず、最初の一步は踏み出したな。後は訓練次第だ」

「そうか、私は踏み出したのだな。最強への、解放への一步を」

「嬉しそうなところを悪いが、次は数日開くからな。順番もあるし、

お前の体の調整もあるしな」

「構わない、もう一人で闇雲に走り回っている訳ではないのだ。クル力殿とゆっくり前に進めていける事にも安心できる……………ひゃあつ、な、なにを、いきなり揉むなんて……………ああんツ」

「まったく。朝までに呼び方も変えろと言ったろつに。躑けが必要だな。

「ご主人様、主様、御館様、何でもいいが、誰が主かちゃんと理解して呼べ」

「……………そのお、クル力殿ではだめだろうか……………一応、嫁にしてみらえるのだろうか？」

「婚姻が済めば、外では旦那様でも貴方様でも好きにしる。だがお前とは、主従契約みたいなもんだ。悪魔に魂も売れって言ったしな。それでも飲んだんだ。ちゃんとしろ」

「……………わかった……………うん！ 当主様。今日から宜しくお願い致します……………これで良いだろうか……………？」

「よし、じゃ、ルシイ達が起こしに来るまで、このまま続きな」

「えつ。あつ、ちよつと、ウン。そんなつ。まだちよつと痛いのに……………」

「慣れる」

心配するな、どうせ、すぐに……………」

「ご主人様！？ 流石にそれはどうかと思えますが！」

「やっぱりな。聞いてると思ったよ。ルシイだからな」

来ると思ったよ。昨日のフィリの様子でルシイがほっとく訳ないしな。

「ほら、見てみ。ルシイ姐さんの行動はすぐばれるんやから、聞き耳立ててんと、さつさと入ったら良かってん。昨日からこつちにはまる聞こえやし」

「それは悪かったな、でもカナもレチエも昨日はある程度、発散してたろ？」

「だ・か・ら、ルシイ姐はんだけ辛かったんやと思うで？」

「そんな事はありません！ そんなハシタナイ……きゃあっ……あ、だめっ……」

「ふうん。ルシイは嘘つきだな。こんなになってんのに」

「侍従長、だから逃げようと言ったじゃないか、それならばなくて済んだのに」

「~~~~~っ！」

しかし、こいつら一体どこからどこまで聞いてたんだろっな？

まさか貫徹して今日は行動できないとか言わないよな？

「で？ どれぐらい聞いてたんだ？ カナ」

「ん、ウチとレイチエルはんは、フィーはんが解放してって頼むとこぐらいで寝た。もう結果聞かんでもわかるし。で、朝起きたら昨日のままの姿勢で、ルシイ姐はん壁にもたれて寝とったで。起きてからもまたそのまま」

「カナリーさん！ 私の事まで言わなくても良いじゃないですかっ！！」

「ルシイ……そんなにシてるの聞きたかったのか？」

「違いますっ。私はただ、少し抜いていても暴走しないか心配で…

…」

「抜いたトコも聞いてた訳か。ならその後ナニしてたのかも聞いているよな？」

「〜っ！」

「まあ、ルシイ姐はん。どうせ墓穴掘るんやから。ウダウダ言わん

と抱いてっ！て飛び込んだ方がマシやろうに……」

「しかし、カナリー、フィーリアが、全く反応しないんだがどうするんだい？」

「ご主人様がなんとかするやる？ なぁ？」

あらまあ、ほぼ全身真っ赤つかだぞ？ コレ戻るのか？

「フィーリ！ 目え覚ませ！ 命令だ！」

「ふあい！ あれ？」

「おお。すごいね。主殿の言葉には反応してるよ」

「条件反射ちゆうつやつやな。ほら、ルシイ姐さんも。どうせ寝てなくて辛いんやろ？ 御主人様とフィーはん連れて、風呂行つといで今日でける事は、レイチエルはんと二人でやつとくから」

「あの、レイチエル殿、カナリー殿……」

「いいよ、どうせあたしの場合は、満月明けは役に立たないし、お互い様さ」

「ウチは不定期やから、被ったらごめんな？ 譲らへんで？」

「え？ あの？ う？ 侍従長殿？」

「そういう話はご主人様の居ない所ですもんです！」

「フィーリア様……いえ、フィーリアさん。お風呂で汗を流しましよ」

「え……あ。うむ。御一緒させてもらおう」

ふー。説明する手間が省けるのは良いが、呼び方一つでちゃんと伝わるって事は、脳筋つてのも撤回しなきゃいけねえかな。

「せや、フィーはん」

「なんだろうか」

「屋敷に戻ったら、ミランダちゃんに怒られるのと、謝るのはフィーはんの仕事やから」

「なぜだ！ 何故私が…… 『先越されたって、怒ると思うで？』 ……
はい……………」
「少なくともここに居る三人は認めてくれたんだ。今は喜んでけ」
「ああ！」

それがそんなに嬉しかったのか、涙を流すフィーリア。その笑顔に流れる涙は希望に満ちあふれ、輝いており、俺はそれを止めようとは思わなかった。

「しかし、主殿？ ミランダに殺されないかねえ？」
「言うな。わかってるが考えない様にすることしかできん」
「それは問題の先送りちゃうかな、ウチは知らんで」
「助けてくれよ……………」

『……………何か、悪い事があつた気がする』

『念話石で確認しますか？ ミラン』

『いい、すぐに分かる気がするから……………』

第13話 白衣メイド頑張る「1」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第13話 白衣メイド頑張る「1」

御主人様は誘蛾灯や。蚊帳の中に置かれた誘蛾灯。
美しくもない、役にも立たん虫でも惹きつける。

まあ、ウチらも惹かれてきたんやから、人の事は言えんかもしれんけど。

（ウチ、騙された記憶があるような……まあ、ええか）
蚊帳の中に入れるんか、そこから蝶になれるんか蛾のままなんかは、ウチらの努力次第うちゅうこつちゃ。

言葉で言うほど楽やないんは、なんでも一緒。

御主人様は、ウチらに心を求めとる。

カラダは二の次や。

……普段の態度からは、そうは思われへんかもしれんけど、そうやねん。

そんな御主人様の為に、一生懸命頑張ってるウチらは、健気やと思わへん？

ウチの思た通り、フィーリアはんは身内になった。

今も、行方不明になったとかいうエルフ探して、てんでこ舞いや。

「カナリー殿、どうだ？ 何か分かった事はあるか？」

「あかんな。他種族、と言うより、人間嫌いが多すぎる」

「そうだねえ。あたしも耳を見せるまでは、ロクに話も聞いちゃくれないよ」

「レイチエルはんは、それで話聞けるからええけど、ウチらはアカ

ン。全滅や」

「そうだな。話を聞くのは、レイチエル殿に任せた方がいいのかもしれん」

せやなあ。もう一個の用事を、先に済ませよう。

この街は広大な森の真ん中に立ってる樹とその樹を守るように作られた城が中心や。その城を囲むように街が作られとる。獣人もやけど、森の民で言うだけあって街中でも林？ 森？ って聞きたいぐらい樹が立ってる。地面に家建てとるエルフは商売してるモンがほとんどで、住居は樹の上に建てとるエルフが多いねん。樹自体が家のモンもおるくらいや。人間じゃ、話聞こうにも、家の前にも上がらして貰われへんからなあ……

「ほな、フィーはん。ウチと一緒にドワーフのトコいこか？」

「何故だ？ ドワーフの所で聞く事もあるのか？」

「ちやうちやう。御主人様が先代女王はんに請求した、レアメタル希少金属でみんなの防具と武器、作ってもらっねん」

「なるほど、それは付き合おう。手に馴染むモノの方が良いからな」

フィーはんでないと困るんや。ドワーフは偏屈なオッサンが多いらしくて、自分の趣味で作るモン以外はめったに注文通りに作らへんらしい。しかも腕が良い職人ほど頑固になるっちゆう訳解らん種族や。先代女王が頼んだらしいけど、「使う人間の腕も解らんに作れるか」って言っとなるらしい。

同調 エントレインしてない状態やったら、フィーはんが戦闘能力と技術熟練度が一番高い。それをドワーフどもに見せつけて、ええもん作って貰うっちゆう寸法や。

「しかし、あたしだけで話聞いて回るのかい？」

「大丈夫や。ルシィ姐さんが、エルフに化ける道具借りに行っとる。

レイチエルはんは、ルシイ姐さんと御主人様と3人で情報収集を続けといて」

「それなら大丈夫だね。わかったよ。まかせときな」

「ほな、人間の聞き込みもこつちでやるし。頼むで」

「人間だけなら、すぐ終わりそうだな。何せ数が少ない」

確かに人間がえらい少ない。割合で言うたらエルフ四割、ドワーフ、獣人で合わせて五割。人間は一割おるかおらんかぐらいらしい。その大概が、ドワーフの鍛冶師かエルフの機構師に弟子入りして人間や。見つけるのは楽やけど、師匠に影響されるんか、人間のくせに人間嫌いになるちゅう厄介なのが殆どやって聞いている。

「簡単にいきそうにないんは、人間も一緒やけどな……」

「そうなのか？ 同じ人間なのだ。話し合えるだろう？」

「フィーリア、アンタはもうちょっと人の機微つてもんを理解した方がいいよ？ でないと何時までも脳筋って言われるんじゃないかい？」

「せやなあ……御主人様は必要なところは分かってるから大丈夫。つて言うてたけど、ホンマに大丈夫？」

「な、だ、大丈夫だ！ 私だつて成長しているんだ！ ……そうか、当主様が大丈夫と……えへへ、がんばる……」

「レイチエルはん。ウチ、めっちゃ不安」

「大丈夫。あたしは不安どころか絶望してるよ」

「さあ！ カナリー殿。ドワーフの所へ行こう！」

なんかフィーはん。幼くなつてへんか？ 不安やわあ。

「ほな、レイチエルはん。また夕食前ぐらいに城で合流しよ」

「わかった。主殿達にも伝えておく」

「ではレイチエル殿、行ってまいります」

ウチらは街の中でも平屋の多い、ドワーフが多く住んどの地域に向かった。この地域は平屋が多く。鍛冶の窯が設置されてるから、木造はほとんど建ってない。道に生えてる樹も、せいぜい人間の腰ぐらいまでの植木ばかりやった。

「して、どの様な武器を作ってもらったの？」

「フィーはんはバスタードソードとか大剣やる？ ルシイ姐さんは投擲ナイフ、ダガー、ショートソードあたり。あ、ミランダちゃんもじいじも同じや。御主人様とエヴァンじいさんが、ブロードソード。レイチエルはんが……あれ？ 包丁と弓？ じいじ何考えてるんやろ？」

ウチはルシイ姐さんから預かった、じいじの要望武器リストを見て頭を悩ませる。ウチは仕込み杖みたいな、機能のついた杖にしてもらっつもりや。まあ、一番大事なんは武器との相性って事らしいから、できればドワーフにイメトウルの街に来てもらえるのが良いけど……無理かなあ……

「しかし、当主様も無茶を言ったな。オリハルコンにアダマンタイトはいいとして、ヒヒイロカネなど王国でも王鍵に使われている物しかないのではないのか？」

「オリハルコンもアダマンタイトも、ドラゴンしか生成方法を知らん金属や。年老いたドラゴンに頼んで、美味い家畜との物々交換で入手するか、若くて強いドラゴンに決闘で力を見せたら、たまにくれるらしいから、高位の貴族とか上位ランクの冒険者は持つとるもんな」

ちなみに家畜との交換が一番喜ばれるんは最上級のロードカーフつちゅう仔牛や。牛の中でも一番美味いと評判の家畜や。育てんの

が半端なく難しく、一部の獣人が数百頭飼つとるだけって聞いている。

「ヒヒイロカネの武具自体を見た事ないからなあ。何とも言えんけど、どれぐらい先代女王はんが持つとるかやな。どんだけ貰うかはウチに任せるて言うてたから、持つとる量見て考えようかな」

「カナリー殿、ほどほどにな。先代女王様是最悪の場合、ここに我々を置いて下さるかもしれんのだ。できれば迷惑はかけたくない」
「でもあの、ガキ婆の財布から出すって言うてたから、それがすっからかんになるまでは貰うつもりやで？ お仕置きやし」

「可哀想に……だが、仕方ないか。それだけの事はしたのだ……」

ちよつと意外やった。人間、支えにしてるモンが変わると此処まで変わるんやるか？ こないだの晩の話は大体聞いてたけど、変わるの早すぎへん？ まだ二日しか経ってないで？

「フィーはん。ちよつと解つてきたんちやう？」

「そうか？ 自分では変わらないつもりだが……」

「きつと前なら『しかしそれでも、常識的な範囲というものが……』とか言うつとつたと思うで？ レイチエルはんにした事に怒れるようになつたつて事やる？」

「そうか。……そうだな」

「ちよつと試したるか？ 今一番大事なモノ、目エ瞑って頭に思い浮かべてみ？」

「……？ うむ……」

「大事なモノにフィーはんが抱きつく」

「……えへ……」

「それにキス」

「……………えへえへ……………」

「ソレに拒絶される!」

「ッ! うう……………ぐすつ。ふえええ。ぐすつ……………」

「ソレが死ぬ……………」

「ッ! いやああ! 当主様あ!」

アカン。どつぷりや。妄想だけで泣ける女なんて初めて見たわ。

「……………はっ!? 私は何を?」

「大丈夫、ある意味でフィーはんが正常やっていう事が、よお分かった」

「そうか。それならば良いのだ。しかしなんだかちよつと心が痛いのだが……………」

「大丈夫。夕食の頃には元に戻るから……………御主人様に会うから……………」

そんな事喋ってる間に、ドワーフの居住区域についた。そこにはグラッフさんが立ってて、ウチらが来るのを待っててくれたみたいや。

「カナリー殿、フィーリア殿。お待ちしていました」

「わざわざ待っていてくれたん? そんなんよかったのに」

「いえ、街でレイチエル殿に会いましてな。こちらに来るとお聞きしましたので、先回りさせて頂きました。ドワーフは気性が複雑で、私も武器を作って頂く時には武器に対する姿勢や心構え等で、苦勞

しましたから」

「そうなのか。やはりドワーフの鍛冶職人にとって、武器というのは心を込めて作るモノなのだ。失礼のない様に気をつけよう」

「鑄造と鍛造の違いもあるんやろうけどな。ミスリルも鍛造の方が丈夫でしなりもあるもんな。機構文字も中に刻みやすいし。鑄造で作られたミスリルは中身のバランスが悪くて機構文字刻むのが難しいねん。偏りもあるし」

「姉ちゃん、人間にしちゃ賢しい事言うじゃねえか」

ウチらが話てる背後から、野太い声の小さいオッサンが話しかけてきた。ドワーフの中でも典型的なドワーフみたいやな。背はウチの胸までぐらい。茶色い髪の毛に茶色い髭。着てるもんは耐熱性がありそうな毛皮の作業着。灰色のグローブに同じく灰色のブーツ。肌が出てるんは顔だけや。あ、頭も前と天辺は剥げてるから見えるけど。

「おい、グラフィ。この賢しい事言う姉ちゃんが、武器の依頼者か？」

「そうです。ガルグ殿。この御二方が試しにやってみられるそうです」

「何とも、腕の振るい甲斐がねえな。姉ちゃん、剣振れるのか？」

「ふむ、女と見くびられるのは構わんが、見くびるだけの腕は見せて頂けるのか？ ドワーフの御仁」

「言うねえ、そっちの姉ちゃんは術師か？」

「ウチは機構師と精霊術師を兼ねとる。試したいんやったら風水女セイレイ王呼んで、見せるけど？」

「なるほど、そりゃ口だけじゃなさそうだな。ついてきなメイドの姉ちゃん達」

悪いオッサンではなさそうやけど。……腕はどうにも、作ってみ

てもらわんと解れへんし。オッサンの工房に案内されたウチらは、そこにおった弟子三人にそれぞれミスリルの武器を渡された。

「試しに振ってみな、それ次第で作り方を変える。頑丈さか、精密さか。恐らく頑丈さ重視になると思うがな」

「どういう事なん？ どう違うん？」

「カナリー殿、我々は、力任せに振るうしか脳のない者だと、言われているという事だ。本気でこの武器を、潰すつもりでやった方が
良い」

あ、潰した方が良いんや。コレもなかなか良いモノやと思うけど。まあ、ここはフィーはんの言う通りにしよか。

「いくでっ！！」

そしてウチはめいっぱいの魔力を杖に込めると。ミスリルでできた杖の先に付いていた宝玉が真っ二つに割れた。

「あらら。ガルグのおっちゃん。コレ不良品。宝玉の機構

文字が少なくてバランス悪いから、ウチの魔力に耐えられへんで」

「さすがはカナリー殿だな。では私も。ふむ、私の方はバランスは悪くない剣だが……そのミスリルを切っても良いだろうか？」

「あ、ああ。構わねえが……」

フィーはんが渡されたブロードソードでミスリルの塊を真っ二つに切る。すると真っ二つには切れたが、柄と刃の中間で壊れてしまった。

「悪いな、バランスは悪くないのだが、機構文字の増幅が無いと切れ味が鈍いし、切れ味に耐えられる頑丈さが無い。この程度の物し

か作れぬのなら、カナリー殿の鑄造品の方がましだ」

「そんなもんなん？　ウチは鑄造品しかでけんからわからんけど」
「そんなものだ。我々、騎士は消費も激しいからな。できるだけ全力に耐えられる物が欲しい。今はまだ、父上から貰った剣でももっているが、ルシイ殿の剣戟には耐えられん」

「じゃ、ガルグのおっちゃんじゃあアカンのとちやうん？」

「いや、グラツフ殿の剣はもっと良い物だった。この人が打った物なのなら、腕はもっと良いはずだ。舐められているだけだろう。我々が」

まあ、ソレは解つとったけどな。あれ？　弟子の人が二人苦そうな顔してるけど……あ、コレの作者か。なるほど。

「悪かったな、舐めて。じゃあ、こいつはどうだ？」

そう言っただけのような武器を、また渡される。試してみると……

「いや、さっきのよりは悪くないんやけど、何やろう……」

「そうだな。モノが良い気はするのだが、何というか、モノの良い鑄造品のように感じる。鍛造だと思えないな」

「あゝそんな感じ。フィーはん、ようそんなハッキリ分かるなあ」

「騎士として遠征に行くと、最後に頼れるのは己の武器だけだからな。武器に対しての目と感覚が自然と肥えるんだ」

そろそろ本題に入りたかったから、さっさと終わらせる為にガルグのおっちゃんを催促する。

「ガルグのおっちゃん。もう弟子の作ったモノの品評会はええやる？　さっさと本題に入ろうや。時間がもったいないわ。ヒヒイロカネの鍛造がでけんねやったら、でけへんて言うて？　他の鍛冶師

探すし」

「いや、カナリー殿。その言い方はちよつと……」

「グラッフはん。ウチらも遊びで来てるんとちゃうねん。あんたの武器、アダマタイトやったやる？ ルシィ姐さんの攻撃でどうなつた？ あれに耐えられる武器が要るねん」

「どういう事だグラッフ？ そんな話は聞いてねえぞ？」

「あ、その、実は……打って頂いたアダマタイトの剣は、この方々の連れの侍従長殿にボロボロにされまして……」

「侍従長殿のミスリルのダガーでな」

「……冗談じゃねえんだな？」

「冗談なんはガルグのおっちゃんのやつてる、この三文芝居のテストやる？」

もお、いい加減話進めようや。ドワーフのこだわりとかあるんかも知らんけど、そんなもんに関わってる時間ないねん。と思った時、弟子の二人が叫んだ。

「師匠！ こんな武器のなんたるかも解っていない、人間なんかの言う事を聞く必要はありません！ 断つてやればいいんです！」

「そうですよ。ミスリル切れたのも、宝玉が割れたのも偶然ですよ。大体、下っ端の物の方が出来が良いだなんて、おかしいですよ」

そう言われて、一番若そうな三人目のドワーフの弟子は小さくなっている。こいつら一回、自分の武器で魔物と戦ってきたらいいのに。と思いつつ、グラッフはんに話しかける。

「グラッフはん、他にはもうおらへんの？」

「いえ、そのような事はないのですが。わたしはガルグ殿がこの街で一番だと信じていますので……」

「グラッフ殿、それだけではないのだろう？ 身内の事で、この国

を敵に回そうとさえした我らだ。カナリー殿が本気を出した時で街が半壊しかけたのだ。ガルグ殿の行為で、同じような事が起こればただでは済むまい？　そこまでしてガルグ殿に拘った理由が知りた
い」

なんで、ファイはんなこんな鋭いんやろ？　脳筋やったはずなのに。もしかして偽物？　いや、御主人様効果かな。あの方の為ならばとかでパワーアップしてる感じかいな？　愛の力は偉大やな。それよか、さっきからガルグのおっちゃんは、何も言わんけどええんかいな？

「……ガルグ殿はヒイロカネを核に使った武具の制作が、夢だと仰っていたからです」

「なるほどね。だから、決裂されても困るから、一応ついて来たよ。あの時はグラッフはんには迷惑かけたから希望は聞いてあげたいけど、それで御主人様に使ってもらおう武具の質は下げられへんねん。特に防具は。だからごめんな。ウチら、ちゃう人を探すわ」

「いいのか？　カナリー殿？」

「この街でガルグのおっちゃんが一番でも、ドワーフの都市に行ったらもつと腕のいい人があるかもしれんやろ？」

「」

弟子達もウチらが言うてる事が、事実やって気付いてはいるみたいで。誰も声を出せない沈黙が重くのしかかり、ウチがファイはんを目で促して、工房を出ようと扉に手をかけた時に、初めて真剣身を帯びたガルグのおっちゃんの声が響いた。

「ちよつとまってくれねえか？　姉ちゃん達」

「嫌や」

即答で言い捨てて、扉を出る。

つもりが。一番若い弟子がウチとフィーはんの足にしがみついた。コイツ何してるんか、分かってるんやろうか？ 聞いてみよ。

「なあ、アンタ、師匠の前で客に痴漢行為はたらくって、ココで何習ったん？」

「婦女子の肌に、いきなり触るなど男としてどうかと思うぞ。君」「すみません！ で、でも待って下さい！」

フィーはんは鳥肌が立ったのか腕をさすりながら。さっさと足を抜いてる。ウチの方は放置かい。ていうか、今のフィーはんは御主人様以外の誰にも、触られたくないだけやろ？

「ちなみに！ 私は女です！」

……………ごめんな。男やとばかり思ってたわ。振り返って、よう見たら微妙に胸もあるし。ホンマごめん。フィーはん、その顔はちよっと失礼や。驚きすぎ。

その後ろには土下座してるガルグのおっさんがおった。

第14話 白衣メイド頑張る「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第14話 白衣メイド頑張る「2」

誰も知らん間に決まっちゃってしまつとる、自分の立ち位置がある。ウチはどこやろう。

前？ 右？ 左？ 後？

どこでもいいけど、置いていかれへんように頑張らないと。

新参者には、譲れん立場もあるっちゅうこつちゃ！ フィーはん！

「で、土下座してどないしたん？ ウチらの下着でも見たいん？」

「いや、それは流石に…… 『アンタは黙つとき』……はい！」

グラッフはんを黙らせ、ここでの主導権を握るべく、話を続ける。

「どつちやでもええねん。ウチらはな。貰うもんは先代女王はんから貰う。ドワーフの職人の腕借りるのも条件の一つや。でもな、アンタやなくてええねん。あんたがどれだけ腕の良い職人で。どんだけ認められてるんかなんか知らん」

「カナリー殿？」

何を言おうとしてるんか流石にわからへんのか、フィーはんが不思議そうにこつち見て、視線で聞いてくる。

まだまだ甘い、それがフィーはんの今の立ち位置や。

「今回の話は、ウチの御主人様の大事なモンを、ココの国の女王が無断で再起不能にしようとした。その代価に貰うもんや。それはこの街の半壊を防いだ代価や。それで間違いないやんなあ？ グラッ

「フはん？」

「その通りです」

「アンタは聞かされてるんかどうかは知らん。聞かされて無かったんやったらゴメンな？ 勝手な話に巻き込んで。元々無関係やさかい、全部忘れて？」

「ヒヒイロカネの件も、な？」

グラツフはんには意味がわかったんやろな。辛そうな顔しとる。ガルグのおっちゃんは何か言おうとするけど、視線で黙らせる。恐らくこれは伝えとる顔や。うん。たぶん。……ちやうかつたらハズいなあ。

「んで、聞かされてるんやったら……」

「あんた等！！ 人間舐めんのも、ええ加減にしときや！！」

ウチは全魔力を此処で使いきるつもりで全力で放出、この部屋に固定。隣に立ってる、フィーはんが一番しんどそうや。顔には出さるのは流石やけど。

「百歩譲って、力量が知りたいんは解るとしてや。なんで、ウチらが、呼びつけられて、試されなあかんねん！ 先代女王は条件を飲んだ。ウチらに頭下げて、話し合ってくれませんか？ 言うたんや。ウチらが『お願いします。ドワーフさん紹介して下さい』て言うた訳やないで！」

あ、一番若い子。ウチの足にしがみついたまま、気絶しとる。その弟子二人、氣い利かせて片付けてや。足にしがみついたままやで？ めっちゃ重いわ。

「ウチらは今から城に戻って、『ドワーフの国から腕の良い職人呼びよせて。先代女王の権限で』ってな風に伝えるわ。舐められたまま、『相手の腕はロクに分かりませんでしたので手ぶらで帰ってきました』なんて、御主人様に申し訳なくて言われへんから。さ、一緒に行くで。グラッツはん」

「カナリー殿。まってくれ！」

「なんや？ グラッツはん。あんたも解ってないクチか？ こないだの詠唱止めたんはな、先代女王のお陰やないで。御主人様が待って、ウチを見たからや」

「グラッツ殿。今回はカナリー殿の言う通りにさせてもらうぞ。私は」

「フィーリア殿！？ 何故貴女まで！」

「少なくとも、ガルグ殿はやりすぎた。挨拶も紹介もなかった。その上で私の腕を舐めていた。騎士の甲冑を着ていたら決闘を申し込むところだ。ミスリルを切って見せたじゃないか。それがどの程度の腕なのか解らぬほど、ガルグ殿の腕と眼は悪いのか？」

「そうではない！」

「そうではないのだが……職人には職人の矜持というものが……」
「ソレは何か？我々には、」……あつて」

「我々のようなメイド服を着ている使用人風情には、矜持もないだろうと言っているのか！？」

うーん。メイド服で外歩きたくないって言うたのに。同じ人間のセリフとは思われへんで？ フィーはん。

「フィーはんの言う通りや。ウチらはメイドや。だからウチらの腕を舐められるのはまだ我慢できた」

「それなら何故いま……」でもな？」……」

「今、ウチらは御主人様の代理で此処に立ってる。だから許されへ

んねん。この街来てからなあ。女王は無断で家族壊そうとする。先代女王との約束は果たされるどころか部下の騎士と鍛冶職人には舐められる」

「私は舐めている訳では……」

「軽んじているのは事実だろう？ ドワーフがどういった性格の種族かは、聞き及んでいる。であれば、細心の注意を払うべきだったのではないか？ この腕試しが失敗すればどういう事になるのかは想像がついたのではないか？ 少なくとも、貴方はあの場にいたではないか、グラッフ殿」

「じゃ、エルフの騎士殿とドワーフの鍛冶職人はん。あの時はこの街を半壊させるかどうかの問題やったから、その辺をふまえてよく考えた上で答えてくれる？

御主人様を舐められるのを、ウチらはいつまで我慢したらいいと思う？」

放出した全魔力を速やかに戻せるだけ戻す。威圧感も何もかもなくなり、全くの静寂と何もない軽い空気が、その部屋を死刑台の前の様に静まらせる。恐らくウチとフィーはん以外は、何の拘束もされてへんけど動くに動けんやろ。

「じゃ、フィーはん。いこか」

「そうだな。グラッフ殿、貴方と次にお会いする時に、貴方が騎士を罷免されていない事を祈る。ドワーフ殿、貴方の矜持は貴方の自由だ。だが、自分が誰の依頼で仕事をする予定になっていたか、ぐらいは考えるべきだったな」

部屋を出る前に声をかけたってるフィーはん。さて、あのアドバイスが役に立つかどうか……

部屋を出て、城へと向かう途中で、少し狭い周りからは見えない路地へはいり、腰を下ろす。するとフィーはんが、いつの間にか買っ

ていたのか、飲み物を差し出してくれる。

「魔力の出し過ぎだ。そこまでする必要があったのか？」

「うん。でもなあ。グラスフはん、ちょっと甘すぎやる？」

「確かにな。当主様に捧げるまでの私も、同じだったのだろうが。」

子爵とはいえ元公爵家だ。最悪、国同士の戦争もありえた。それを収める為の取引で手を抜くとはな。まったく他人事に思えないのが辛い」

「ウチらの仕事はこういう事も含まれる。嫌な役目かもしれないけど、御主人様が何不自由なく、歩みを止めて済むようにするのも仕事。ウチとフィーはん以外は元から使用人やから、こういう政治的圧力からみの事は、ウチとフィーはんでこなすんやで？ 覚えといてな？」

「そうか。私が公爵家の第一子であった事も、こういう所で当主様の役に立つのか……何が良い事に繋がるかは分からんモノだな」

少し嬉しそうなフィーはんに、ちょっとだけ嫉妬する。ウチは公爵家ほど影響ある家系やないからなあ。少なくとも王国と此処じゃ。

「本当に大丈夫か？ 一度本当に城に帰ろう。休まなければ聞き込みもできまい」

「せやな、帰るか」

フィーはんに飲み物を返して、城への道を歩き出すと、少し気分が良くなったのかあまり疲れは感じなかった。この時の飲み物が、疲労回復のヤモリのエキスを薄めたモノだと知るまでは。

「取り敢えず、私はメルフェイユ様の元へ急ぎ、謝ってまいります。その後、ドワーフの都市に向かいますので紹介状をお願いできますか？ ガルグ殿」

「人間つてのは、あそこまでのモンだったか？」
「そのような事、どうでもいいでしょう。」

少なくとも、彼女らの主人はラナルラ王国の公爵家出身で、メルフェイユ様が話し合いについてくれと、止める程の力の持ち主である事は事実です。それに騎士の彼女もラナルラ王国の公爵家、ソルフィッシュ家の第一子です」

「もう関係修復は無理だと思ukai？」

「判りません。私の失態でもありません。貴方にも、もう少しきちんと理解して頂くべきだった。それを怠ったのは私です。メルフェイユ様をドワーフ都市に出向かせる訳にはいきませんので、お早く紹介状をお願いします」

「俺がヒイロカネを触る機会は、もうないと見た方がいいか？」

「そうですね。今、城にあるヒイロカネは、メルフェイユ様が魔獣の誕生に、立ち会われた際に頂いた物だと聞いています。そんな機会は貴方が生きている内には、回ってこないと思います。寿命を延ばせば別ですが」

「悪いがグラツフ。俺と一緒にあの二人に会いに行ってくれねえか？」

「何をする気です？」

「俺の最高傑作をくれてやって、謝る」

「最高傑作って……まさか！ アレを！？」

「ヒイロカネを十分に使った武器ができりゃ、少ししか使えていないあの試作品は、二番目になる。くそ。人間相手に後悔したのは初めてだ」

「行くのなら急ぎましょう。メルフェイユ様はめったに沐浴からお出になりません。会えるのも夕食直前でしょう」

「今から行けば二時間は猶予があるか」
「それでダメなら、紹介状すぐに書いて下さいよ」
「わかってらあ」

なんでやる？ エルフの都市って何かおかしくないか？ ちょっと寄り道したけど、まっすぐ帰って来てんで？ せやのにまた、グラツフはんに先回りされとる。
今度はドワーフの鍛冶職人も一緒に。

「グラツフはん、転移門なんか使ってる？」

「確かに速すぎないか？ どうやって先回りしてるんだ？ グラツフ殿？」

「樹の上を飛び渡っているだけです。急ぐエルフはみんなそうしますよ」

「ガルグのおっさんも飛んできたん？」

「俺あ運んでもらった。足が短いからな、飛んでも届かねえ」

それよか疲れたから休ませてほしいけど……そう言う訳にはいかんはな。

「とりあえず中に入って、座ってでもかまへん？」

「そうだな。グラツフ殿、応接室など借りれるか？」

「案内しよう。こつちだ」

「オイ、行くぞ。起きろ。カレン」

そう言ってガルグのおっさんが、一番若かった弟子の頭を殴る。

「ふあい！ 親方！」

「親方じゃねえ！ 師匠だ！」

「はい、師匠！」

「さて、何が出るやら……」

「特大のバスタードソードの様だが……」

フィーはんとウチは、弟子のカレンと呼ばれた娘が背負ってる大きな包みを見て、コソコソ言いながら付いていく。

部屋に入るといきなりカレンが包みを広げ出した。中から出てきたのは、恐らくオリハルコンの延べ棒数本と、まださらに布にくるまれた大剣だった。

「これが今の俺の最高傑作だ。これをあんた等にやる。これが気に入らなければ諦める。気に入ったなら俺に仕事を任せてくれ！ 頼む！」

「直球で来たなあ。どおしよ。コレどお思う？ フィーはん」

「うむ、何故、鞘に入れていないのかは分からないが……剣なのだ試してみんと解らんな。」

「いや、剣だけじゃなくて……行動の意味とかやな、対処とか……」

「それは分かっているのだが、それを踏まえた上でグランプ殿が許可する程、価値のある剣なのではないか？」

「なるほど、そう言う事かいな。ほな、フィーはんに任せるわ」

「うむ。見てみよう」

「試し切り用に持ってきたのは、オリハルコンです。四本重ねておきますので、床を切らないように注意して下さい」

「オリハルコン置いても注意せなあかんで、どんだけやのん……」

その剣に巻いてあったのは布ではなく、どうやらドラゴンの皮だった。皮を剥がすとウチらの胴体より、少し太いぐらいの幅広のバ

スタードソードが出てきた。特徴的なのが、柄と鰐より先は水晶のように鈍く透き通っており見通す事は出来ないが綺麗な剣身やった。フィーはんがそれをオリハルコンに向けると一番上の一本だけを切り裂く。二本目には傷も付いてない。

「いい見切りですね。その剣を振るには問題無さそうです」

「だな。そいつに火の系譜の力を込めて切ってみな」

「うむ。やってみよう」

すると少し目をつぶり、魔力を込めたのか剣身の石が赤くなる。さっきと同じ様に二本目だけを切ると落ちた二つの破片が炎に包まれ溶け始める。気になるから聞いてみた。

「何なん？ この剣身。オリハルコン切れるって、コレがヒヒイロカネ？」

「いや、違う。こいつは水晶山脈に住む、オリハルコンを作ってた水晶竜の鱗で作った。鱗数百枚を鱗晶石に鍛え直し、さらにを剣に鍛えた物だ」

「オリハルコンより硬いん？」

「同程度らしい。切れるのは機構文字刻んでるからだな。こいつの特徴はもう一つあってな。今度は鰐の宝玉に小さくなれて念じて魔力流しな」

「よし。わかった」

すると、剣身の鱗晶石が薄くなり消えていく。そして最終的には持ち手の長いけったいな、ショートソードになった。

「これは？ どういった機能なのだ？ ガルグ殿」

「そいつは内側に鱗晶石の剣身を取りこんでるのさ。持ち手が長すぎるがショートソードとしても使える。」

昔、まだ帝国があつた頃にな、首席機構師とやらのアイディアをエルフの機構師5人がかりで付けてもらった。その状態の剣身と持ち手なんかは、全部オリハルコンと水晶竜の骨と牙と角の合金でできてるから、取りこみの反発などもなかった」

「その状態でも、切れ味は変わりません。コレがその状態の鞘です」

カレンがフィーはんに鱗晶石リンシヨウセキを使った鞘を渡してる。あー。もうこれは気に入ったんやろな。顔がめっちゃ嬉しそうになってるわ。いやあない、このオツサンに任せよか。

しかし、首席機構師つて首席教授の事やるか……あかん、思い出したらアカン顔や！ うむ、フィーはんは嬉しそうに、鞘から出したり、剣身出したり、鞘に納めたりしてる。

「で、浮かれてるトコ悪いけど。どうなん？」

「うむ、コレは良い剣だ。機構文字がどうなのかはカナリー殿が見てくれ」

ウチは刻まれた機構文字を見る為に、モノクル片眼鏡を着けて、魔力の流れと機構文字を見る。斬撃強化、剣身吸収&復元、魔力特性付与、空きスペースが三百文字分あるな。一個は何か追加できるなあ。

しかし、コレを刻んだ機構師が一人やったら天才やな。まあ、実際には五人やっみたいやけど。

「なんで硬化は刻んでないん？」

「鱗晶石リンシヨウセキの特徴の一つに若干のしなりがあるんだ。それを残す為だな。大地の系譜魔力を流して硬化はできるからな。敢えて入れてない」

「コレを一人で刻んでたら刻んだモンは天才間違いないわ。芸術的な配置や」

「気に入ってくれて何よりだ。俺に任せてくれるか？」

せつかちやなあ、ガルグのおっさん。

「その前に一個だけ。コレにもヒヒイロカネ使ってるん？」

「ああ、良く分かったな。見た事あるのか？ ヒヒイロカネを」

「ん〜たぶん。そっか……完全ヒヒイロカネの防具って可能？」

「そりゃ不可能じゃないが、お勧めしないな」

「何でなん？」

「ヒヒイロカネはその特性上、神の金属とも呼ばれてる。神性の高さが高い方が良いんだ……」

要約すると、魔物との戦闘や対人戦などで、何かを殺す時に表に出ると神性が下がる。だから核にするか、大剣なら芯に入れる。この剣みたいに。

あとは聖水に浸けて、神性を上げるメンテナンスもするから、錆びる金属との併用はできへんって事やねんけど。

この金属……ソウハクって呼んでる狐モドキの生まれた石、
というか卵の殻というか……とにかくソレにそっくりや。……え？
もしかして。何もせんでもヒヒイロカネ約十キロ入手？

「で、どうなんだ！ 姉ちゃん！」

「カナリー殿？」

「カナリー殿？」

「お姉さん？」

「え？ あ。うん、ええんちゃう？ ご主人様にも言うとかわ。ちなみにヒヒイロカネって宝玉とか芯に使って事は、貰える量も少ないかな？」

「良くて一キロあればいい方だと思いますが……」

「何かさっきまでとは打って違って。やけにあっさりと任せてくれ

「たな、姉ちゃん」

多くて一キロというのがグラフはんの予測。うるさいわ、ガलगのおっさん。今はそれどころやないんや。空気読み。空気。

「十本ぐらい剣やダガーを作る予定では無かったのか？ フィーリア殿」

「そりやさすがに無理だな。その鱗晶剣ですら百グラム位しか使つてねえよ。」

武器十本か、できれば五キロは欲しいな。防具もなら、さらに五キロつてとこか」

「それはいくらなんでも無理だろう。無いモノは貰えまい。なあ、カナリー殿」

いや、もしそうなら話も納得がいく。この世にヒビロカネがあるのに中々出回れへん理由と、その製造法がひたすら隠される理由も。

「ある、かもしれん」

「は？」

「え？」

「なにが？」

「どこに？」

「ヒビロカネ十キロや」

「『ええ~~~~~!!』」

この四人はコントでもしたいんか？ っと思うほどベタベタな驚

き方を揃って披露してくれた。

第15話 白衣メイド頑張る「3」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第15話 白衣メイド頑張る「3」

自分の本性が目的や手段を忘れさせる。

そんな事になれば本末転倒、それは解つとる。

でも、どうにもならん事もあるわな。人間やし。

やっぱりウチは研究者やった。ソウハクの生まれた殻の事に頭が一杯になつて、ガルグのおっさんとの話をあつさり決めてもうた。

まあ、それは今も目の前で『いや、コレは竜の鱗なのだから、竜の文字を入れた名前にすべきでは?』とか『水晶の鱗だから鱗晶剣にしたんだよ!』とか話し合ってるアホ二人のせいにしとこう。

「で、グラツフはん。先代女王はんはいつ出てくるん?」

「恐らく、夕食前かと」

「そっか。せやったら時間あるな、念話石貸してくれる? ちよつ

と情報も集めときたいから、イメトウルの街に連絡入れるわ」

「そうですね。それではこちらへ……」

「フィーはん、此処でちよつと待つといてな」

「ああ、分かった。戻るまでには名前を決めておく」

いや、それはどうでもいいねんけど……まあ、ええわ。仲良くやつといてもらおか。できたらガルグのおっさんには、イメトウルの街で武具作つて欲しいからな。

「こちらの部屋です。それとカナリー殿、先程までの件。本当に申し訳ありませんでした。ガルグ殿には私から、もつときちんと事情を理解してもらつべきでした」

「ああ、その事な。もつええよ。フィーはんも御機嫌やし。それに

今はヒヒイロカネの方が大事やし」

「先程言っていた、十キロのヒヒイロカネですか……詳細はお聞かせ頂けませんよね？」

「無理やな。さつきも言うたけど、思い過ごしかもしれない。もしそうやとしたら、なおの事言われへん」

「ヒヒイロカネは魔力増幅だけならば、竜の宝玉にも劣らない宝玉が作れる代物です。この城以外で口に出される時は、お気を付けください」

「ありがと、でも大丈夫。ドラゴン連れてこないと、奪われへんぐらいの人間が守つとるから」

「では私は先に、先程の応接室に戻ります」

念話石の置いてある部屋に入り、イメトウルの街の領主の館を呼び出す。誰も出えへん。イライラすんな……何で出えへんねんな……

じいじはおらへんのやるか？ ……あれ？ そういえば……

っ！ 今日ミランダちゃんの成人の儀やん！ 居る訳ないし！

「はあ、無駄やった……確認したかったのに。って、確認で。ウチ誰か知ってるかもと思ってサンプル持って来てるがな！ 何を忘れてんねん！ 若年性健忘症やるか……アホらし。荷物取りにいこ」

独り言で文句言ってる恥かしさは、敢えて見いひんかった事にした。部屋を出て自分の荷物の中から、ソウハクの殻のサンプルを取りだして、応接室に向かう途中で言い争う声が聞こえ、とりあえず柱の陰に身を隠す。

「ですから！ 今は女王陛下には会えないのです！」

「何故だ！ 私は会う約束を取り付けていたのだぞ！ グラッフ殿、例えば貴方が女王陛下の筆頭近衛騎士でも、説明ぐらいは聞かせてく

れてもいいだろう！」

「メルフェイユ様からの勅命です。今回の件は『何人にも洩らすな』と申し付けられておるのです」

「またか……先代、先代と。いつになったら女王陛下は親離れが出来るのだ！」

「それは失言ではありませんか？ ベリドッグ殿、サーフェン家の代表としてここに来られたのならば、訂正して下さい」

「チツ！ 分かった。取り消す。先程のは私の失言だ。すまない。だから剣に手を掛けるのはやめろ。夕食後に出直す。私が来た事を、メルフェイユ様に伝えておいてくれ」

「わかりました」

足早に去っていく、壮年という感じのエルフを見送ってから声をかける。

「アレ、どないしたん？ 揉め事？ ガキ婆に用事やったみたいやけど」

「カナリー殿も、そのような言い方はおやめ下さい。悪かったのは女王陛下ですがこの城の主でもあるのです。お願いします」

「他の人がおる時はちゃんとするから、大目に見てえな。で、誰？」

さっきの

「評議会に議員の一人、ベリドッグ・サーフェン殿です。評議会の序列は四位を授かっておられます」

「ちよつと、嫌な感じのあるおじさんやったな……何もなかったらええんやけど……」

「もう、これ以上の問題はこりごりです。メルフェイユ様に御伝えしないと……機嫌が悪くなるな。きつと……」

「あ、先代女王はんも、今のおじさん嫌いなんや。意見合いそうやな」

「このような所でそんな事を言わないで下さい！ メルフェイユ様

は公平であるようにと、務めておられるのですから！」

「はいはい。じゃ、ウチみんなのトコ行くけど？」

「私はメルフェイユ様の元に向かいます。では」

急いで先代女王はんの元に向かう、グラツフはんを後目にウチはのんびり応接室に戻る。戻ったウチが見たのは、何故か小さく切られたオリハルコンをどこまで積めるか勝負をしてる、フィーはんとガルグのおっさんやった。

「アホが二人で何してるん？」

「何故か、名前の決定権を賭けて勝負になりました……」

「あんたも苦労するな……カレンはん……」

「お互い様だと思います。カナリー様。止めてきますね……」

どうやって止めるのかな？ と思って見るとガルグのおっさんの積み上げてるオリハルコンを下から崩しよった。やる事が極端やな。

「はい、親方の負けです。カナリー様も戻ってこられましたのでおやめ下さい」

「カレン！ てめえ！ 何てこ……『良いんですか？ 仕事させてもらえなくなっても？』……さて、どうだったんだ？ ヒヒイ口カネはあつたのか？」

「よし、勝ったぞ。カナリー殿。これでこの剣は『竜晶剣』だ！」

「フィーはん。ネーミングセンスないで、アンタ。ルシィ姐さんと同じレベルやな。それ、馬鹿にされると思うから、嫌やったら誰かエルフに相談しときな？」

「ッ！ そうか……侍従長殿と同じレベルか……『コンコン』と……」

落ち込んだるアホはほつといて、ガルグのおっさんにサンプル渡しながら説明する。

「とにかく、コレがそうなら十キロくらいはあるはずや。どない？」

「ふむ……魔力を流しながら打つてみると、絶対とは言えんが恐らく間違いないだろう……しかし、何故……」

「詳しい事はココでは教えられん。イメトウルの街に来てくれたら、素材全部つぎ込んで装備作るの任すけど？」

「しかし、此処の環境が一番いいんだがなあ。空気中の魔力の含有率も考えるとな。一旦はそっちに行くが、鍛造の工程の中でも大事な部分はこつちでやりたい。どの道、完成すれば定期的な手入れも必要になる。専用転移門は作れねえのか？ 領主なんだろ？」

「それは分らんわ。王国にも許可とらなあかん内容やからな。そこまでいくと」

そうや、誰かれ構わず転移門の設置許可しとつたら、いきなり王都の中心に大軍送られる羽目になったら困るからな。簡単には許可降りんやろな。

「それと悪いが、使う人間全員に会いたい。何を造るかもそこで決めたいんだが？ 可能か？」

「それこそ、イメトウルの街に来てや。向こうから動かれへんのもおるから、四人で来たんやし」

「よし、カレン。お前先に帰って、お前の分と俺の分の旅の準備して来い。道具は一式持っていくぞ」

「わかりました。親か、たじゃなくつて、師匠！」

言い直すのが少し遅かったのか、拳骨で殴られるカレン。『コブばっかりになるとお嫁に行けなくなるう』とか唸ったまま、走って出て行くけど、たぶんそれが理由にはならんのとちゃうかなあ？

もつと大きな理由が……男の子にしか見えへんちゅう問題が……
まあ、カレンの結婚はどうでもいいねん。

「すぐ来てくれるんはありがたいけど、ウチらも依頼終わらせなあかんし。実際の出発はもうちよつと先になるで」

「ああ？ そうなのか？ チツ。もう行かせちまったな。で、どれぐらいかかるんだ？」

「わからんけど……エルフの機構師が数名、連絡が取れなくなってる話、知ってる？」

「ああ、俺も機構文字刻むのを依頼したヤツと連絡が取れなくなつたからな」

「その解決を頼まれてんねん」

「ああ、そうなのか？ 結構時間かかりそうだな……三ヶ月後ぐらいか？」

「なんで？ 三ヶ月後なん？」

「ん？ 俺あ、いなくなつたエルフの機構師のトコに行った時に、その機構師の旦那さんに、半年以内には帰ってくるから心配するなつて言われたが？」

「はあ？ 何やそれ？」

「ん？ 女王陛下の頼み事で、何でも技術を習ってくるって話だと言つてたぞ？」

どういうことやのん？ なんでそんな事になつてるんやろ？ 女王が安心させる為に家族にそう言った？ それやったら、先代女王はんが知らんのはおかしい。いや、単純にガルグのおっさんの言ってるエルフとは、別人ちゅう事も考えられる。それをまず確認せなな。

「その人だけ？ いなくなつた人の事知ってるんは」

「いや、女三人、男一人だ。全員機構師だからな、俺らの耳には必

ず入る。機構文字の刻印が滞るからな」

「カナリー殿！ それはおかしくないか？」

うわ、フィーはん復活した。なんかええ名前でも、思いついたんやるか？ いやそれよりも行方不明の話や。おかしい。おかしすぎる。

「おかしいと思うわ。先代女王はんが誘拐されてるって言うてた。でも本人らは女王の依頼やって、まわりに言うてる」

「はあ？ 誘拐？ そんなはずねえだろ？ この国で生まれたエルフは管理がしっかりしてるんだ。いなくなりや、すぐわかる。」

「そう我々も聞いています。ところが把握できなくなったのが、その四名だと伺っているのだ。そしてそれを探す命を受けた」

「探す？ 緘口令みたいになってんのか？」

「どういう事？」

「たしか……女王の依頼とはいえ、誇り高きエルフが人間に技術を習うんだぞ？ そんな事大ぴらにやあ言えねえ。だから黙るところ。みたいな話だったはずだ」

「なんだか嫌な予感がするのだが。カナリー殿」

「ウチもそう思う。下手するとホンマにこの城消えてなくなるかも」

「とりあえず、グラツフはんにも話そ。話はそれからや」

「よくわからねえが、俺はもう良いか？ とりあえず俺は鍛冶場に戻るぞ？ 出れるようになったら、使いでもよこしてくれや」

「了解や」

「その時はよろしく頼む。ガルグ殿」

出て行くガルグのおっさんを後目に、フィーはんと話し合う。

「もしもだ。この一件がああ女王の我が儘のせいだとしたらどうな

る？」

「うん。まずは順序立てて考えようや」

「うむ。わかった」

「まず、女王が内緒でエルフに技術習得の依頼を出した。それを先代女王は知らん。この時点ですでおかしい。なんで知らんねん、ていう話や」

「そうだな。しかも、先代女王陛下はそれを我々に依頼する程、危惧してる。にも関わらず、家族は全く心配していない。女王陛下からの依頼だから安心しているのだろう」

「女王の名前を騙るにしては、この国では女王は有名すぎる。という事は本物の可能性が高い。しかも女王はこないだの通り、我が儘や」

「女王が、先代女王陛下に黙って何か行動していると考えるか。もしくは、とてつもなく用意周到な犯罪に利用されてるか。どちらかな」

うん。ウチは我が儘で怒られるんが嫌なだけやと思うなあ……

先代女王はんが神樹にまで聞いてんねんで？ 危ない話なら教えてくれるはずやろ。という事は危険が無いか、もしくは…… 『カナ、いるか？』……御主人様？

「お、いたな。カナ。どうだったドワーフの方は」

「それは大丈夫やねんけど……」

「当主様！ 見てください！ このような剣を頂いたのです。これはすごいのですよ！ まずはですね…… 『フィーリアさん、少し落ち着いて』……はい」

さつき一回泣きそうになったからやな。御主人様にじゃれつきたくてたまらなくなって顔や。ウチは視線で『頭でも撫でたって』と御主人様をお願いする。御主人様は『なんでだ？ 別に良いけど』とい

う風に片眉を少しあげ、それから肩を竦めてフィーはんに声をかける。

「まあ、そう言うなルシィ。座って話そうか。フィリ、ほらこつち来い」

「はいっ！」

元気良く返事し、御主人様の横に陣取るフィーはんに膝枕するよ
うに太ももの上に寝かし、頭を撫で始める御主人様。ルシィ姐はん
は、エルフ耳になったまま御主人様を睨んでるけど、エルフ耳の方
がさらに知的に見えるな。教えたる。しかし、御主人様……………

そこまでしたらんでもええんちゃうかなあ……………

「もう。ご主人様は甘すぎます。レイチエルさん、お茶の用意をし
に行きますので手伝って下さい」

「はいよ。何か茶菓子もさつと作るかね」

「お、いいな。甘さは控えめで頼む」

「はいよ。カナリーは？ 要望とかあるかい？」

「いや、ウチは何でもいいわ」

「では、少しお待ちください」

出て行く二人を後目に、ウチもソファーに向かいながら、忘れら
れた小さなオリハルコンのブロックを三つ程拾う。それを持ったま
ま御主人様の向かい側に座った。

「どうやった？ 聞き込み。ちょっとウチらの方は訳がわからん方
向に話が進んでて、困つとってん」

「そりゃ、こつちも似た様なもんだな……………『あつ』

「そうなん？ 今回の件、先代女王はんと関係者の認識が違いすぎ

るねん」

「確かにこつちでも、同じような感触だった」………「ああつ」
「そっか、そつちも同じ……」『あッああつ』………「って何の感触やねん！」

『ガスツ！！』「痛エエエエエエツ！！」

全力で、オリハルコンの小さなブロックを投げつける。御主人様の事やから、なんかすると思つてたけど、ここでフィーはんの服の中に手え突つ込むとは思わんかったわ。

「い。いやな、撫でてるとちようどいい位置にな………」

「フィーはん！ アンタもちよつとは空気は読み！ 今は真面目な話するとこ！」

「ひゃい！」

「何だこれ？ すつげえ痛かつたんだが」

「当主様。それはオリハルコンです」

「はあ！？ そんなもん投げるなよ！ 下手したら死ぬじゃねえか！」

「大丈夫。前にフィーはんの下着姿見たやろ？ あん時のはアダマナイトや。あれも大丈夫ならコレもいけるはず。うん」

「当主様、あの時はすみません。次は投げません。ちゃんと見てもらいます」

「『うん』じゃねえ！ アダマナイトもオリハルコンも、硬度幾つだと思つてんだ！ 頭蓋骨割れるだろうが！」

今度ゆつくり見せてもらうからな？ フィリ」

「はい……」『ガスツ！』『ガスツ！！』………「いたアアアア！」

「ぬおおおお！！ 割れるうううう！！！」

「二人ともええ加減にしいや？ 冗談じゃ済まされへんようになる

で？」

「『ハイっ!!』」

「まったく。そんなことやってるからルシィ姐はん帰って来てもうたやん。レイチエルはんがまだやから、まだもうちょっと用意に時間かかるかな？ でも結局、御主人様には何にも話せてないわ……」

第16話 庭師は晒し、隠す「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第16話 庭師は晒し、隠す「1」

人に顔向けできねえ様な事も、山ほどやった。
クソつたれな人生でも、生きてりゃ良い事もある。

だから、今は生きていられる事を感謝してる。
俺の人生は、ここから罪を清算する為に酷工事になるんじゃないかねえか？

そう思えるほど、コレが恐らく人生最大の良い出来事だと思う。

「エヴァじいちゃん！」

おお、来たようだ。

「どお？ 似合ってるかなあ？」

北東地域の『着物』と呼ばれる民族衣装を着たミランダが走ってきた。

『着物』と呼ばれる民族衣装の中でも、獣人が神聖視する巫女衣装で基本色は白。

裾や縁、その所々に獣人の祖先の古代文字をあしらった模様が入っている。

文字や模様は銀系で縫われており、ミランダの髪や耳と尻尾の毛の色に合わせてある為、白が引き立てられている。『着物』と大きく違うのはお腹周りを締める帯がベルト程の太さしかない事。それと手足には髪や耳と同じ、銀毛の毛皮の靴と指無しグローブをはめ

ている。

そして尻尾の先には、いつもの碧い石のはまったリング。

「ああ、すごくよく似合ってる」

「そうですね。とても良くお似合いです。これならば獣人の神も鼻
屑して、何か多めに授けてくれるかもしれませんよ」

「そうだといいなあ。できれば、高火力系の系譜が良いんだけどな
あゝ」

隣にいるグリントが褒めると、ミランダは少し手を合わせる様に
して祈るポーズをとりながら、そんな事を言い出す。

あまり美味く褒められねえが、本当によく似合ってる。

「ミランダ、浮かれるのも良いけど、準備は終わったのかい？ 終
わってるんなら屋根の上行って、風を感じときな。儀の後じゃ、今
までと同じようには感じられないだろうからね。子供時代最後の風
との対話だよ」

「そっか。色々変わったちゃうかもしれないもんね。わかった。行
つてくるね、婆ちゃん」

「ああ、終わったら祈祷館に向かうんだよ」

御祖母様に言われ、屋根の一番高い所へ向かうミランダ。

「祈祷館にはあたしも行くところかねえ……」

「行かれますか？ 私もエヴァンと向かう予定ですが……」

「あんたら、暇なのかい？」

「いや、本当ならこの時期はめっちゃくちゃ忙しいぜ。だがまあ、一
生に一度しかないモノだからな。一緒に祝ってやりてえじゃねえか」

「毎月、誰かが儀を迎える度に祝って、酒場で飲んだくれる。成人
の儀の月に一度という頻度は、商人ギルドの酒場部門と王国の策略

なのでは？　と思う事がありますね」

グリントの言う通りだ。確かに年一回にすると結構な人数になり、小さな酒場しかない所では、その日だけ酔っ払いがあふれ、刃傷沙汰が増えるだろう。月に一度なら、人数も少ない。問題が起こるのを避けているのだろう。

同じ年、同じ月生まれの者だけなので人数もかなり少なく、みんな家族連れでくる事が多い。ちなみに今月はミランダだけだ。

小さな村じゃ、記念に転移門で王都へ向かい、王都で儀を済ませた後に観光して帰る、そんな旅行をする地域も多いそうだ。

成人の儀は毎月最後の二日間で行われる。その月に二十歳を迎える全ての者が、それぞれの信仰の教会か、祈祷館へ行って祈りを捧げる。そして役所に成人登録を済ませるのだ。

リスター教団やメルベス教団等、教会を持つ宗教は教会で。獣人や亜人など大地や精霊などの教会を持たない信仰の場合は祈祷館で行われる。祈祷館には宗教のシンボルは設置されておらず、講堂というのが正しい様な建物だ。各領主等が管理し、どの宗教でも使う事が許可されている。

純粋な人間にとって、この成人の儀は一人立ちを意味するモノではない。だが、獣人や亜人にとっては違う。信仰する神や自然から何らかの恩恵を受ける事がある。血が少しでも混じっていると恩恵を授かる事があるらしく、庶民ではかなり血が混ざっている。

その為、獣人や亜人に対する差別はない。しかし血を入れる為に結婚相手に欲しがる人間がいる為、人間が獣人や亜人に嫌われている、というのが現状だ。

「たしかに、王都なんかで獣人、亜人、人間と全部酔っ払いが発生してみる、種族毎に抗争が起きるぞ。人口が多いからな」

「それを抑える為の処置と、あとは酒場や料理屋では毎月月末は家族連れのお客さんが増える様ですよ」

「なるほど、だから月末は安い店が多いのか。稼ぎ時になる事もあ
るってことか」

「あたし達純血種の人間にや、あんまり関係ないんだけどねえ」

御祖母様はこう言うが、人間にも変化はある。子供の内は罪を犯すと、親も一緒に処罰を受けることになっているが、今後は一人で受ける事になる。これは人間だけでなく、全ての種族に言える事なのだが。

「それでもめでたい事にはかわりねえさ」

「私も孫の成人の儀を見るのが、楽しみになってきました」

「あたしや、次は曾孫の時だよ」

年寄り三人の会話はどうしても花がねえ。ジジイくさくなっちゃまうな。御祖母様が自分の若い頃の話が始める前にとっとと行くか。

「グリント。俺あちよつと先に行くぞ。寄りてえトコがあんだよ」

「わかりました。後ほど祈祷館前で落ち合いましょう」

「あたしも出る用意をするよ。グリント、30分後に出ると、ミラ
ンダに伝えとくれ」

「はい。御祖母様」

話す二人を後目に、さつさと屋敷を出て目的の店へと向かう。イ
メトゥルの街でも真つ当な職人の店に向かう。

「ロイド、居るかい？」

「おお、エヴァン。来よったか。あれじゃな？ できとるよ」

ロイドは裏の稼業には全く就いていない、堅気の金属職人だ。年は俺と同じくらいで七十前後。金にならない仕事も引き受けているから貧乏だが、腕はいい。

「この獣人族のギメルリング双子尾輪の部族文字は分かり難い。構造はパズルのようにややこしい、二重に苦勞したんじゃぞ？」

「ちゃんとその分、報酬は増やしただろうが」

このギメル双子尾輪リングはある一部の獣人族の工芸品だ。

その部族では子供が生まれるとこのリングを作り、尻尾の根元付近に嵌める。

その子供が大人になると、そのリングを二つに分割して片方を親が、もう片方は子が同じように尾に嵌める。

このリングは元々、二つのリングからできており親の名前と子の名前が刻まれている。子は親の名前の刻んだリングを。親は子の名前の刻んだリングを持っている。子が男なら父親の名を、女なら母親の名を、というのが風習らしい。

結婚の時にも使われ、男性と女性が一つずつ持つ。部族の者なら尻尾に着けるが他種族との結婚の場合は指に着ける場合など様々だ。縮小、拡大の機構文字が刻まれており、大きさはある程度変化するモノが一般的だ。

「ミランダちゃんも、もう成人の儀か……早いう。しかし成人の儀と共に結婚か、子供が出来たということか？」

「違いよ。ミランダちゃんはな、孤児でな。あの娘は自分の持つてくるリングの意味も風習も知らないんだよ。それを教える為に渡すだけだ」

「成る程の。もし、あのミランダちゃんに手を出す阿呆がいたら、どの年下狂いかと思ってる。気になったんじゃが、そう言う事か」

「ああ、ロイド。お前の事伝えとくからよ。もしミランダちゃんに

子供が出来たらコレと同じ物を作ってくれて言ってくると思うからよろしくな」

「それは渡すんじゃない？」

「ああ、だから子供の分からは、作ってくれて言いに来るだろ」

「まかせておけい。ちゃんと弟子にも仕込んでおいてやるわい。ワシが死んでも大丈夫なようにな」

「ありがとよ。ロイドがくたばる前に、良い酒持って来てやるよ」

「ふん、期待せずに待つとするかの」

ロイドの店を出ると、まっすぐ祈祷館へ向かう。そこにはすでにミランダとグリント、御祖母様が待っており、ミランダは少し緊張しているようだった。

「待たせたか？」

「大した時間じゃないさ。ミランダは少し肩に力が入っちゃったがね」

「ミランダさん、落ち着いて下さいね。過去に悪しきモノに落ちた例などありません。きつと良い祝福が得られますよ」

「うん。グリじいちゃん。わかってるけど、ちよつとね」

「ま、ウダウダ言っても始まんないよ。行こうかい」

すっぱりと、いつもの調子の御祖母様に切り捨てられ、その雰囲気気に落ち着きを取り戻したのか、ミランダは祈祷館へ入って行く。

中は窓から差し込む光だけで、十分に明るくなっている。壇上は差し込む光がそこに集まるように窓が設置されており、神秘的な雰囲気漂っている。

「さ、行つといで」

そう御祖母様に促されると、ミランダは無言のまま頷き、歩いて

いく。

壇上で跪き、胸で手を合わせ、頭を下げ、目を瞑っている。恐らく精霊達に話しかけているのだろう。

静かに見守る三人だったが、御祖母様が何かの変化に気付いたのか、少し身を前に屈めたので俺もグリントも、ミランダを注視すると……

ッ？ 影が濃くなっている？ 何だあれは？

「影の系譜……」

御祖母様のほそりと呟いた言葉は俺の知らないモノだった。意味は後で聞けばいいと、今はミランダを見る。すると、体がほんの少し淡く光ったと思った瞬間に、足元から木枯らしが小さな竜巻を起したような、少し黒い風が吹き荒れるがすぐに収まった。

「終わったようだね」

「大丈夫なのですか？ なんだか黒い風だった気がしましたが」

「それに、影の系譜って何だ？」

「説明は、後でゆっくりやったらげるよ。ミランダのトコに行くよ」

三人でミランダの所に向かうと、ミランダは自分の体を抱きしめる様な形で、目を瞑っていた。

「大丈夫かい？ ミランダ」

「婆ちゃん、もうちょっと待って。もうすぐ……んッ……」

「……？」

「大丈夫なのか？」

グリントは、無言で解らないといった顔をしているが……どうなっただんだ？

「なんだい。エヴァン、お前は肝が小さい男だね」
「御祖母様。流石にそれは……私もどうかと思いますよ……」
「私は婆ちゃんって呼んでるけどダメかなあ？」
「ミランダ。アンタはいい娘だねえ……そのままいいんだよ」
「おい、エヴァンにグリント。俺は結局、何て呼べばいいんだ？」
「御祖母様、御祖母さんが無難かと思いますが……」
「そうだろうな。俺も他の呼び方できねえよ……」
「そおか。ま、いいや。ヒース！ 奥に案内して差し上げな」
「分かりました！ こっちです！」

ヒースは元気よく返事すると御祖母様を案内していく。

「ミランダちゃん、良く似合ってるぜ。その衣装」
「ありがとうございます！ みんなが私の為に用意してくれたの。大事にしたいと」
「なかなか、着れる機会はないかもしれませんが、部族の正装でもありますので、置いておくといいと思いますよ」
「そおだな。クルカ様のお供をする時に着る事があるかもな」
「そだね。一回きりじゃ、服が可哀想だしね」

嬉しそうに袖をつまみつつ、奥の部屋へと三人で向かう。御祖母様はさつさと奥に座っており、ヒースに何かを注文している。
御祖母様の話の前に、渡すモンを渡しておくか。

「ミランダちゃんよ。改めて成人おめでとう」
「ありがとう。エヴァじいちゃん」
「で、渡す物がある。こいつだ」

肩にかけてた袋から、ロイドに頼んでた双子尾輪ギメルリングの入った木箱を取り出すとテーブルの上に置いた。

木箱を見ながら思う。俺の娘のミランダは成人の儀を迎えられたのだろうか。民族衣装を着たり、旦那やその家族に祝ってもらったりしたのだろうか、と。

「なにこれ？ 貰っていいの？」

「ああ、開けてみな」

「っ！ これっ！ 私のと一緒のリングー？」

「そうだ。そいつはアルハンゲル族のギメルリング双子尾輪っていう民族工芸品でな。子供が出来た時や結婚の時に使われる物だ」

大まかに内容をかいつまんで説明し、ミランダが持っている物が、片割れであることも伝える。

「えっと。そつか。じゃあ。私の本当の名前はミランダじゃ、ないんだね」

聡い子だ。良く分かってる。取り乱しもしない、か。

「そうです。ミランダさんの身に着けておられる、ギメルリング双子尾輪の片割れに刻まれているのは、御母上のお名前だという事です。ですが……」

「ミランダちゃんの母親はな、もうこの世にはいねえ。それは間違いない」

「そうなの？ なんでわかったの？」

「あたしがこの街に引っ越して来る前に、メルベス教団に行つて、夢見の姫に見てもらったのさ」

夢見の姫つてのは、過去や未来を透視できるって有名な姫さんだ。してもらうにはコネか力ネが必要だがな。

「婆ちゃんが、調べてくれたんだ……」

「それにな、ミランダちゃん。その部族はもう、四十年近く前に滅んでる。獣人同士の部族抗争でな」

「ですから、私達は今まで通り、貴女はミランダ・アルハンゲルで良いと思っっているのですよ。ミランダさん」

「クルカ様もそれを望んでるみたいだったしな。何せミランダちゃんが孤児になったのが、生まれたての頃だ。その時点でちゃんとした名前が付けられているかどうかも分からない。母親も死んでいるかもしれない。だからミランダでいいじゃないかってな」

「ゴシユジンサマが？」

「ええ、ミランダさんのその民族衣装に名前を刺繍して頂いた時の事です。その時、全てを知った上で、ミランダ・アルハンゲルと入れる様にとクルカ様は仰いました。私達もそれでいいと、全員納得して決めたのです」

「アルハンゲルっていう家名も、ちゃんと調べて付けてくれてたんだね。ちよつと変だから、センスないのかと思ってた」

「そりゃ、酷えよ。ミランダちゃん。クルカ様走り回って調べてたんだぜ？」

まあ、大筋はグリントが調べたんだがな。結局は。

「そうですね。ムファという獣人の女性が入っていた事も原因でしょうが、調べる為と称して一時娼館通いをしておられましたね……」

「それはまた、喜んでいいのか微妙になっちゃったね……」

そう言う事は別の時に言えよ。グリント。

だが、まあ、みんなそのままでもいいと思ってるのは事実だ。俺だって娘の顔すら覚えてないんだ。いまさら、どうしようもない。

あの頃の俺が、女に産ませた子は一人だけじゃないからな。珍し

く獣人の子が生まれたから、覚えてただけだしな。

「そっか。だからゴシユジンサマはミルって呼ぶんだ。そっかそっか。うん、みんなが頑張ってくれたのは、すっごく嬉しい。」

ちよつと今は、心の整理が追いつかないけど。大丈夫」

「無理はすんなよ？ 今じゃなきやいけない話じゃないしな」

「ただ、早めに話しておきたかったのも事実です。クルカ様は反対し、成人の儀が終わるまでは言わないと、決められていましたが」

「何にせよ、ミランダが身に着けてるギメルリングの片割れのお陰双子尾輪で部族も分かったし、その衣装もほぼ本物さ。だいぶ前からわかってた事実の最後の裏付け。あたしやその裏付けをメルベス教団で取ってきただけさ。」

その時に合わせて分かったのが、『影の系譜』だよ」

そつだ。祈祷館に居た時から気になってたんだよ。聞いた事ない系譜だ。

「御祖母様、さつき祈祷館でその名前言ってたよな？ 何なんだその系譜は？」

「私は良く分からなかったけど、ちよつと黒い風だったよね？」

「私もあの様な風は見た事もないですし、言葉も聞いた事はありません」

「『御祖母様？』婆ちゃん？」

「ま、料理が来たらゆっくり話してやるよ」

そう言う、御祖母様の顔は何となく表情が読み難かった。

第17話 庭師は晒し、隠す「2」(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第17話 庭師は晒し、隠す「2」

力は意思に宿る。

意思のない力は人を狂わせる。

誰もが力を求める訳じゃねえが、求める者は多い。

そして、際限がねえ。一つの限界を超えた時、それは狂気となる。

何故、ミランダの部族が減んだのか。それが関わってくるようだ。大陸の最北部に里を置いたアルハンゲル族は、最北部に身を置く全ての者が抱える問題に直面したらしい。すなわち、冬の到来だ。

最北部では泳いでは渡れないぐらいの大河が凍る。大陸中心にあるマヨウジ山脈から流れ、北部を縦断し西と東に分けている大河は、最北部に住む者達にとって生命線だった。

農作物を作りにくい大地。

獣、家畜等の食料を魔物に食い荒らされる環境。

そんな環境の中で、唯一豊富にとれる食料は魚だった。

しかし、問題は冬季に起こった。魔物の大量発生により魚が乱獲され、凍った川の上を強力な魔物が徘徊するようになった。それだけでは済まず、大量発生した魔物達は食料を求めて里を襲う。

なんとかアルハンゲル族を含むいくつかの部族との協力により、危機を脱し春を迎えたが、問題が無くなった訳ではない。各部族は話し合い、移住をする部族、他の国から傭兵を雇う部族など、色々な手が打たれる。その中でもアルハンゲル族は移住ではなく、他人の力を借りる訳でもなく、自分達の中に更なる力を求めた

「その結果が、影の系譜か……」

俺がそう言うと、御祖母様は少し気が重くなった様な口ぶりで続ける。

「夢見の姫に、影の系譜に注意しなつて言われたのさ。それで調べただけどねえ……王国には詳しい資料は残つてないからね。どんな力で、どんな効果があつたのかが、解らないのさ」

「危ない力、なのかな？」

「そうではないでしょう。恐らく、強力な力であるが故に戦争に用いられ、恐れられて滅ぶ。その様な末路だったのでしょ」

不安そうに聞くミランダと、それを庇うようにグリントが結論付ける。力なんてものはみんな同じだ。使い方一つでどうとでもなる。

「その通りさね。王国内での資料であたしに分かる範囲じゃ、暗殺に使われる事が多かつたみたいだねえ。その結果、暗殺を恐れた領主が、獣人の軍を上げて一族を滅ぼした。その領主も帝国と共に滅んだ。そう資料には載つてたよ」

「その程度の系譜なら腐るほどあるだろ？ 大地の系譜の派生の泥の系譜とか、火の系譜の派生の浄火の系譜とか。泥の系譜なんて使い手が強かつたから、一時期は有名になつたがなあ。すぐに浮遊での対策が練られて、対人戦じゃ役立たずになつた。そんな系譜はいくらでもあらあな」

系譜は四大系譜である火・風・水・土から派生したものが山ほどある。

その殆どを把握できている研究者は少ない。土と水の素質で泥の系譜なんてのも、結局はその系譜でしか行えない、泥の発生という事象があるから系譜として認められるだけだ。

普通は火と水、風と土の対極に位置する系譜を持つ事はねえ。

火と風。

風と水。

水と土。

土と火。

大体の者がこのそれぞれの間の系譜を持つ。完全に火のみ等という者の方が珍しく、強力な力を振るうぐらいだ。

あとは神聖魔法と火の系譜との混合による浄火の系譜と呼ばれたモノもあるが、結局のところは使い方次第で、クルカ様の無色魔力元素の様に、大幅に力が増す物ではなかったはずだ。

「単純に四大系譜に属さないモノである、というのは確かに珍しいです。ですがそこまでの脅威は感じられませんでしたね」

「目覚めたばかりだからねえ……あたしにや、何に気を付けなければいいのかさっぱり分かんないよ」

「いや、御祖母様もグリントも二人共、この国で十指に入るぐらい強えじゃねえか……それを基準にすんなよ……」

「そうだよね。あ。でもいざとなったら、無理矢理止めてもらえらる程度って事だよ。暴走とか気にせず、訓練できそうであれば」

そこでやっと安心したのか、笑顔になって目の前の料理に手を伸ばすミランダに、グリントと御祖母様は優しい視線を投げかけている。

だが、そんな二人とは裏腹に、俺は御祖母様達が言っている事を真剣に考えていた。実際、浄火の系譜もただ単に神聖魔法の不死者の浄化と、火の系譜を合わせたモノにすぎなかったはずだ。本当の意味での『神聖の系譜』や『魔の系譜』などという四大系譜に全く属さないモノが発見された、何て事は聞いた事がねえ。

しかし、発見しているが国が隠している、という事はよくある事だ。全く無いと言える訳じゃねえ。

『影の系譜』とやらが、四大系譜に全く属さないモノなのかどうか。それが問題になってくるな。

こういつ時に昔から勉強なんざやらずに、やりたい事をやっていたツケが回ってくる。知識が足りねえ。

山賊として、戦闘や取引等にかかわる事柄はできるだけ知識を吸収していたが、それとは関係が薄くなっていると全くわからねえ。魔法なんざ使いりや問題なかつたし、詠唱が長い物なんざ戦闘じやあ不向きだ。詠唱している間も走り回り、身を躲し、相手の攻撃を凌ぐ強さを持った魔法使いでなければただの固定砲台だ。護衛がいれば別だが。

そんな事ばかり覚えてるからミランダに教えてやれることも限られてくる。

庭師になってからは草花の事ばかりだったからな……そう言う事も教えちゃいるが、今は系譜に詳しくなけりや意味がねえ。カナリーがいりやあ話はもう少し変わってくるんだが……

「エヴァじいちゃんどうしたの？」

「ん？ いや、なんてこたあねえ。クルカ様達は、今頃何してんだろうなと考えてたんだ。まあ、飯食ってるだろうが……」

「そうですね。一昨日のルシイさんからの連絡では、ハイエルフの城を叩き潰しかけたと言っていましたから、今日は街でも壊してるんじゃないですか？」

「グリント。その冗談は笑えないよ。本当に起こりそうだから控えとくれ……」

ちよっと、考え事に没頭しちまったな。しかし、ハイエルフか。

ハイエルフなら、影の系譜についても何か知ってんじゃないか？
長生きはしてるはずだしな。

「御祖母様よ。ハイエルフは系譜にも詳しいのか？」

「ん？ そうさねえ……まあ、そういうエルフもいるだろうが……
神樹なら何か答えてくれるかもしれないねえ」

「神樹ですか？ しかしあれはエルフの御神体。部外者が神樹の中
に入れてもらえるとは思えませんが」

「グリじいちゃん。御神体って何？」

「ああ、ええと。そうですね。エルフが神の使いとして崇めている
モノというのが分かりやすいでしょうが」

そういうモノはこの宗教にもあるわな……

「まあ、実際はどうか分かんないがね。あたしや生れてこの方、天
使や悪魔とか神様や魔神なんざ見た事ないよ。せいぜい精霊が精一
杯さ。御神体も精霊が宿った樹つてとこじゃないのかねえ。」

「御祖母様が見た事がないのですから、我々では見た事がないのは
当然です」

「私も精霊は風精霊シルフしか見た事ないよ」

「俺あ。カナリーちゃんの風水女王セイレーンを見た事あるが、ありゃあ綺麗
だったな。何より溢れ出してる精霊力が半端じゃなかった」

精霊に聞けば系譜の事も分かるのか？ 教えてくれるのか？ そ
の辺の知識はやっぱりカナリーがないとな……

「まあ、そうだね。ミランダ、クルカのトコ行くかい？ 向こうで
ならもう少し何かが分かるかもしれないよ？ 今日の成人登録が終
わった後、屋敷で体と系譜の試験してからだがね」

「うん！ 行くつ。この民族衣装も見せたいし。自分の事も知って

おきたい」

まあ、それが手っ取り早いわな。今晚は仕事は無かったはずだから、明日の晩だな。明日の晩の仕事はグリントと二人だな。楽できそうだな。

「明日の晩の仕事はエヴァンにお任せしますね？」

「おいおい。顔色から心読むのは止めろってんだ。それをミランダちゃんが真似するから、クルカ様が泣いてたぞ？ 『最近ミランダの当たりがキツイ』ってな。見てることちが可哀想になってくらあ」
「ふん。顔に出すなんざ、未熟者の証拠だよ。エヴァンもクルカもちゃんと精神を鍛えときゃあいいんだよ」

そこにリヴァルとヒースが何やらでかい皿を抱えてやってくる。

「料理はいかがでしたか？ みなさん」

「おう。美味かったぜ。ヒース。お前も手伝ったのか？」

「下拵えと野菜の皮むきだけですけどね」

「新人なんだ。それでもやらせ過ぎなぐらいだぞ。ヒース」

「分かってますよ。おやつさんの味を盗むまでは我慢します」

「はは、こりゃいい料理人になりそうな子だね。獣人は猫舌だって聞くけど大丈夫なのかい？」

御祖母様は料理人が好きだからな。リヴァルとヒースの会話から良い関係だと気付いたんだろう、気に入ったみたいだった。

「大丈夫です。そういうのは、俺にはあまり影響出てないみたいですよ」

「ま、コイツもまだまだこれからでさあ。それよりも、ミランダちゃんコイツを食いな。お祝いだ」

そう言って、リヴァルとヒースが持つて来た、でかい皿の蓋を取ると中から綺麗に焼きあがったパイが出てきた。

「ミランダちゃんは甘すぎるのは嫌いだって聞いたからな。リンゴ、モモ、プルク、ペロンの四種類の実で作ったパイだ」

「すっごく綺麗な模様だね。食べちゃうのがもったいないくらい」

「それ、俺の部族の文字で成人の儀を称える時の紋様なんだ」

「ヒースの部族はストレイタム共和国に集落があるらしい。まあ、ミランダちゃんの部族の事は分からなかったからな。ヒースに絵で描かせてそれ見て作ったんだ。気に入ったか？」

「うん。ありがとう！ リヴァルのおじさん！」

そう言うとミランダはリヴァルの横に行き、頬つぺたにキスしてやってる。きつと、獣人の部族の事などほとんど知らないミランダにとっちゃ、そういったお祝いがしてもらえるだけで嬉しかったんだろうが。

ミランダに何もしてもらえなかったヒースが、その隣で羨ましそうに見ているのがなんとも……可哀想というか、哀愁が漂っているというか。

「いただきま〜すっ」

そんなヒースを他所に、美味しそうにパイを食べ始めるミランダ。悪いなあ、ヒース。可哀想に……

「こりゃ美味しいね。レイチェルの作るパイに似てるよ」

「そうなのですか？ 確かに美味しいですが、私ではそこまでは解りませんね」

「流石、公爵家の方はすげえな。レイチエルちゃんに作り方を習ったんだ。このパイは。あそこまでは美味しく作れなかったんだが。料理人でもないのに良く分かるもんだ」

「恐らく、クルカ様も分かるぞ。貴族がすごいんじゃないよ、この一族は特別だ。エルガルド家は料理に対する姿勢が半端じゃないからな」

「そうなのか。エヴァンがそう言うんだ。間違いないだろうが、貴族と言えば高い食材だって言えば、満足するもんだと思ってたぜ」
「そんな腐った豚みたいな貴族と一緒にするんじゃないよ。でも、レイチエルの料理を食べてるミランダやエヴァンが、美味いって言う店だ。アンタの腕も一流だって事さ。がんばって味を盗みなよ？
坊主」

「はい！ 頑張ります。ミランダさんも料理は好きですか？」

若い奴つてのは元気いっぱい。夢もいっぱいだな。しかしヒース、そのミランダに向ける感情には希望はねえぞ。ミランダはクルカ様のお手付きだ。惚れてもどうにもなんねえぞ？

「レイチエルの料理は好き。この街にはあんまり美味しいお店ないよね。この間も、エヴァじいちゃんとルナル酒場ってお店に行ったけど、不味くてほとんどエヴァじいちゃんが食べてくれた」

「酒飲むには良いかもしれねえが、飯食いに行くにはちときついな、あそこは……」

「そうですね、私もできるだけ屋敷で食べる様にしています」

「ココの奥が、空いてる時なら来てもいいんだらうけどね」

「そうだなあ。夜なんかはやっぱりウチも、この街に初めて来た冒険者や盗賊が多いからな。揉め事を避けるなら、昼間ぐらいしかお勧めできねえな」

「俺も毎日のように、冒険者とか酔っ払いに絡まれますもんね。夜は」

ヒースは獣人にしちゃ少し小柄だが、体格も最近良くなってきたし、困らんだろう。二カ月前とはえらい違いだからな。

「ヒース君も大変だね。そういえば、ヒース君は成人の儀はいつなの？」

「俺は後一年以上あります。それまでには一度、ストレイタム共和国にある部族の所に一回帰って、民族衣装を買いに行こうと思ってるんですけどね」

「そっか。みんなで祝いできるといいね」

「ぜひっ！ お願いします。前もっていつか言いますんでっ！」

「んふふ。楽しみなんだね。ヒース君」

……………。クルル様よお。俺あミランダを育ててねえから、言える事は少ないが、きっと苦労するぞ……………。絶対悪女になる。そういう雰囲気はプンプンしゃがる。下手な娼館の女どもよりもしたたかだぞ。きつと。

「ミランダはいい女になるね。この子の母親が見てみたかったね」
「そういうレベルでは無い気もします。が、私からすれば苦労するのはクルル様なので別にかまいません。どちらにしろ同じ事ですから」

「おめえらよお……………。まあ、ヒースにもいい勉強になるだろ……………」

「リヴァル、落ち込んだ時は、ガツンと殴ってしゃっきりさせてやれ。そう遠くない未来の話だ」

「分かってるんなら、その前になんとかして欲しいもんだがなあ……………」

……………」

そんな事を言いながらも俺達年寄り四人は、『コレはこれでいいか』と考えが一致したみたいだ。何よりもミランダが幸せそうなん

だ。それに満足し、花の様な笑顔を向けるミランダに、微笑みを返すのだった。

第18話 庭師は晒し、隠す「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第18話 庭師は晒し、隠す「3」

可愛い子には旅をさせろ、なんてよく言うが有りや危険だ。
魔物や山賊がうろつろしてる旅路に子供を行かせる親はいねえ。

そういうのはしつかり鍛えてからやるもんだ。

魔獣は敢えて過酷な環境に子供を放り出すが、それも十分な力が備わってからだ。ドラゴンも頭頂眼が隠れるまでは子と一緒に住むしな。

今はミランダの成人の儀の翌日、グリントと二人でミランダの旅の出発を見送りに行った帰りだ。旅って言ったって、転移門を通り継ぐんだ。実際にゃあ、ストレイタム共和国の玄関、現在の女王の名前がつけられたエメルローザの街から、エルフの都市までが本当の意味での旅だ。

「しかし、このタイミングで『死神の羽音』の名が出てくるとは思いませんでしたね。大したギルドではありませんので、ルシイさんとミランダさんがいれば問題は無いでしょうが……」

「そうだな。今は問題にはならねえが、いずれ行動を起こすだろうと思っちやいたが。思ったより行動が早い。ルシイちゃん達の調べてる、エルフの行方不明者にも絡んでるのは確かかもな」

「そうだと分かっていれば、話は簡単なのですが……」
「なんだ？」

グリントが判断に困るなんざ、珍しいな？ 何か不安要素があるのか。

「分からないのは、小麦粉、果物、砂糖を始めとする食料品の調達で足取りが掴めた理由なのですよ」

「なんだそりゃ？ 首長飛竜ワイバーンの使用目的を誤魔化す為の偽装か？ 確か長距離輸送が可能だったろ？」

「ええ、それもなんです。驚頭獅子グリフォンも借りていたようですね。今は返却されたようですが、使ったのが日用品と食料品の運搬だけなんです。しかも中身は、商人ギルドで検査まで通ってます」

首長飛竜ワイバーンも驚頭獅子グリフォンも、かなり金のかかる運搬手段だ。元々が魔物である事と、転移門での移動や運搬が可能である事から、魔物使用テイマを雇ってまで行う価値が無いと言われている。転移門が設置されていない地域への運搬用などに、一部の商人と王国軍でも一部の部署が所有しているだけしかねえ。

飼育の難しさと育成にかかる時間と経費のバランス、それがこの国の軍でもあまり重宝されていない一番大きな理由だ。

この首長飛竜ワイバーンや驚頭獅子グリフォンを使った輸送を商売にする者もいるが、飼育には向いていないモノを魔物使用テイマが使役する事で、なんとか運用にこぎつけている代物だ。転移門が付近にない地域に物資を運ぶ事が一番の儲けになる訳だが、何らかの理由で転移門を通れない、つまり非合法でなおかつ急ぐ場合は、この輸送がよく使われる。急がないのであれば空路を取る必要もない。

この商売は転移門に左右されない運搬法として、魔獣輸送などと呼ばれ一部には重宝されているが使えば必ず目立つ。

本職の盗賊が大ぴらにやる事じゃない。

「そう考えるとおかしいわな。中身は転移門が使える程度には合法的な物、しかし輸送をやっているのは目立つのを嫌う本職の盗賊。魔獣輸送なんざ、盗賊ギルドに何かやってますよって教えるみたいなもんだ」

「そうです。普通はそういう目立つ行動はもう既に計画が終わりに

近づき、見つかったても構わない場合にしか使わないものです」

「その辺りのちぐはぐさが、意図が読めねえポイントになってるってことか」

「一応、その辺りもふまえた上で手紙を預けましたから、ルシイさんとミランダさんならなんとかするでしょう」

「じゃ、こつちはこつちで『死神の羽音』のアジト内の搜索か。しかし変な名前だな。死神には羽があるのか？」

「死神など誰も見た事は無いでしょう。元々は『死神の衣』というギルドだったらしいですが、ギャンザ皇国出身のミック・リックというふざけた名前の元冒険者が加入した事で名前を変えた様です」

「そいつの冒険者時代の職種は獵師ハンターか何かか？」

「いえ、魔法戦士の様です。本人は名乗っていないそうですが、一部では『竜の羽音』と呼ばれるほど風の系譜を駆使した剣術が得意だったようです」

おいおい。獵師ハンターから盜賊シーフへの転向なら気配遮断なんかの必須スキルがかぶるから問題ないが、戦士系からの転向は無茶だろう……

しかも、風で『竜の羽音』って事はアレか。竜の羽ばたきの様な豪風を使っつて事か？ それだけで手の内、晒しちまってるじゃねえか。ホントに強えのか？

「それで、火力不足だと言われてた『死神の衣』は『死神の羽音』へと変化した訳か……」

「そのようです。しかし盜賊の修練は今一つで、幹部試験にも上がってくる様子はありませんね。最近の『警告』の仕事の結果が『全滅』になったのも、そのミック・リック殿が先走ったせいじゃないかと聞いています」

「そりゃ、盜賊シーフじゃねえだろ。ならず者デスヘラーとでも名乗った方がいいんじゃないかねえか？」

やべえな。ルールすら守れねえガキが相手か……

変にツボにはまらなきゃ、何も問題は無いが。今はミランダとルシィを信じるか。関わってくるかと決まった訳ではないしな、心配するだけ無駄かもしれん。

「で、このまま帰路の途中で、アジトにでも寄って行くってわけか？」

「その通りです。元々『死神の衣』の時から、大したギルドではありませんでしたから。ちょっと寄るぐらいなら、どうという事もありません」

「へえ。それで？ どこにあるんだアジトは」
「すぐそこです」

どおりで、いつもと違う道を通る訳だ。

俺達はダントリン家の人間として活動してる時は、できるだけ大通りを通る。

しかし、グリントと盗賊ギルドの仕事の時は、裏道を通るんだがその裏道も何種類がある。今日はいつもと違い、やたらとルートを変えて歩いてやがる。

「監視者お客さんの心配か？」

「いえ、念の為と言いますか。」

計画が終わりに近づいていて、目立つ事を承知でグリフオン驚頭獅子を使用し、返却したのであればアジト周辺は、それなりの緊張感に包まれているだろうと予測していたのですが……」

「そんな様子もまるで無し、か」

「これは判断に困りますね。本当に。警戒心が無いのか、全く何も計画していないのか……」

と言っても、何もせずに黙って帰る訳にも行かねえのは事実だ。

どうなってるのかさっぱりだが、何らかの成果は持ち帰らなきゃならんからな。

「仕方ありません。正攻法で正面からいきましょうか」

「そうだな。仕方ないな……………ってオイ！ それでいいのか！」

「何か問題が？」

「お前はそれでも盗賊シーフなのかよ！ 潜入とか聞き込みとか色々あるだろうが！」

「ええ、コレでも私は一応、盗賊ギルド連盟幹部会名誉顧問をさせて頂いておりますが？ 第一、聞き込みなど相手が警戒しているからこそ、必要なのです。そうでない時は相手から聞いても、周りから聞いても同じです。潜入は中で何か特殊な事が行われているからこそ、見る価値があるのです。日常を覗き見る等、ただの変態ではないですか」

「グリント、お前え……………今の言葉で、大陸中の情報収集担当者を敵に回したぞ」

「さて、行きましょうか」

「もういい、好きにしろ……………」

満足そうにグリントは頷くと、何やら雑貨屋の様な店の前に立つと中に向かって軽くお辞儀をし、その後に入って行く。その動作はあくまで優雅かつ迅速で、見る者が見ればただ者では無い事が分かる。グリントはその行動を挨拶代わりとして、店の奥のカウンターにいた店員に用件を伝える。

「盗賊ギルド連盟幹部会名誉顧問が来たと主人に伝えて頂けますか？」

「え、あ、はいっ。只今、すぐに、急いで、迅速にお伝えします！」

グリントの振る舞いと発言の内容に、何やら意味不明な緊張のし

方をしている店員のお嬢ちゃんは、階段で蹴躓きながらも二階へと急いで上がっていった。

「ふむ。少し落ち着きの足りない店員ですね。ギルドとは無関係ならば仕方無いですが、ギルド員ならば教育をお勧めしますね」

「あほか。店先にいたはずの客が、瞬き数回の間いつのまにか自分の目の前にいたら、誰でも驚くわ。むしろ驚かない方が怪しまれるだろうが」

「そうですか？ まあ、普通の店員に偽装しているのであれば驚かない方がおかしいという事もありま……」
『あ、あのっお待たせしましたっ』……すが

「二階でギルドマスターがお待ちです！ すぐにお飲物をお出ししますっ！」

「嬢ちゃん、焦るのも分かるが、その声の大きさに二階にギルドマスターがいるとか言っちゃいけねえぞ？ 一応盗賊ギルドだろ？ 外に聞こえるとまずいんじゃないのか？」

「っ！」

思いつきり頭を縦に振りながら、口を押さえる店員は少し涙目だ。

「それとですね、お飲物を出しますと我々に伝える事ではないと思いますよ？ 我々が席に着いた後に『お飲物をお出し致しますが、何をお飲みになりますか？』と尋ねるのならば分かりますが……そもそも、ギルド員として常に冷静を……」

ああ、言い始めた俺も悪かったが、そろそろ言うのをやめてやれ。お嬢ちゃんが泣きそうだ。気付いてやってるよな？ そうだよな
グリントよ？

とりあえず肘で背中を押し、視線でカウンターの隣にある階段から二階に上がるように促すと、グリントは小言を言うのを止め、要

望だけ伝える。

「ともかく、飲み物は結構です。大事な話になりますので誰も入れない様にして下さい。よろしいですか？」

「　　っ！」

もう二度と言葉を話さないんじゃないか？　と思うほど頭を振る事と身振り手振りで返事をし、店のカウンターに戻る店員。可哀想に……後で怒られるんだろうな。

「此処のギルドマスターは三十代だったはずですが。さてどのような人物か楽しみですね」

「お前、初めっから正面から来るつもりだったな？」

「いえいえ。ギルドマスターと話ぐらいはできれば良いですね。と思っではいましたが、いない可能性も考えていましたからね」

グリントには何を言っても無駄だとわかつちやいるんだが……言いたくなるんだよな。などと考えながら、二人で足音を立てずに階段を上って行く。しかしグリントは本当に足音を立てずに歩くな。木造で建て付けの悪そうな古い建物で無音なら、どんな状況でも足音が出ないんじゃないか？

「失礼します」

下らない事を考えている内に、グリントはノックして扉を開けて入ろうとしているところだった………うん？　今こいつノックしたか？　しかも部屋の中にいる奴の返事聞かずに扉開けたよな？

「私は盗賊ギルド連盟幹部会名誉顧問のグリントと申しますが『死神の羽音』のギルドマスターで間違いないですか？」

「いかにも、私が『死神の羽音』のギルドマスターをさせて頂いているベルニールだ。それで？ ノックもせずに扉を開ける程、お急ぎの用事とは何ですか？」

「やっぱりか！ 俺は足音の事考えてたから、音が出たら気付いたはずだ。返事も聞こえなかった。この野郎、何考えてやがる？ ベルニールと名乗ったギルドマスターが言葉だけは丁寧だが、不機嫌である事を隠そうともしない口調で用件を急かしてくる。」

「大した話ではございません。先日のスローネとかいう商人の『警告』任務も失敗なされたとか？」

「あれは誰かに襲われた後だったのだ！ どうしようもなかったのだ！」

いきなりの誹謗中傷まがいの失敗の指摘から話を始めるグリントに、ベルニールとやらは、憤りと怒りを隠しもしない。そりゃ、怒るのも分かるが。グリントも部屋に入る前から怒らせるつもりで、言葉だけは丁寧に行動と言葉の内容で挑発してるんだらうが……

「そうですか。前もって後を尾行させていれば、誰に先を越されたのかの情報ぐらいは手に入ったはずですが。どうなんですか？」

「街で監視役が対象を見失ってしまっただけのことだ。移動ルートを先回りしていたし安心したバカのせいだ。しかし幹部である貴方の事だ、連盟に情報を上げていない事も分かっていて来ているのだらう。本題に入ってくれ」

「分かりました。しかし、本題といいますが、お聞きしたいのはその質の低下についてなのです。以前は大きな商隊を襲う程の力が無い為、個人や馬車二台程度のお仕事をコツコツとこなしていたと聞きます。何故今の様な大ぶりな、失敗の多い仕事ぶりになられたのです？」

「……それについては私の、部下に対する管理不行き届きとしか言いようがない。我々の方針が変わった訳ではない。うちのギルド単独では、今も大きな商隊の仕事は受けていない。単に失敗続きという事実があるだけだ」

そういう所は潔く認めるギルドマスターらしいマスターだな。な
んで問題になってるんだ？ 仕事の件数が減ってせいぜい収入が減るぐらいだろう。ん？ 収入？ それが運送の理由か？ 突っついてみるか。

「で？ 仕事が減って、収入に困って盗賊が商人の真似事か？ なんか企んでるんじゃないかねえかと噂になってるぜ」

「知っている。だが仕方あるまい。我々として部下に不自由はさせられぬからな。新入りが、少しまとまった金の入る魔獣輸送の話を持って来たのでな。今はそれで凌いでいるのが現状だ」

「それは裏のお仕事なのですか？」

「いや、表だ。裏の仕事なら簡単に情報を明かす訳が無かるうが。何でも大量のケーキ制作の話だそうだ。材料を運べば終わりだが、ギャンザ皇国からの直接輸入だ。この国は盗賊も概ね統率されているが、向こうはそうはいかん。故に顔のきくウチが頼まれた」

「依頼人は商人ギルドには未加入って事か。何度か続けて利益が膨大になれば、商人ギルドも問題視し始める。だが、一度きりで盗賊ギルドの仕事って事なら問題にやならない、か」

「そうだ。今回は名前貸しの様な物だ。それほどまでに切羽詰まっているのかと聞かれれば、そうだと答えるしかない」

まあ、でも悪くない話ではある。盗賊ギルドの仕事だという名前を貸すだけで少しの間もつ様になるんだ。一時凌ぎとしては問題ないレベルだ、一回きりならば。

「状況は把握しました。それで一時凌いで、盛り返す伝手はあるのですか？」

「ある盗賊ギルドの幹部に、部下の育成の依頼をしている。今回の仕事はその報酬と次の仕事までの飯の種の確保が目的だ」

嘘を言ってる気配もない、このギルド自体は白か？ だとしたら一体？ 全体像がつかめない事が、こんなにイライラするもんだとは思わなかったな。良くも悪くも、グリントの先読みが上手すぎるのも問題だな。

「理解しました。盗賊ギルド連盟には、復帰と挽回の意思ありと報告させて頂きましょう。そのかわり……」

「なんだ？」

「今回の魔獣輸送の最終日がいつなのかを教えて下さい。」

ああ。依頼主などは分かっているので、教えて頂く必要はありません」

「っ！ 三日後だ。報酬は前払いで貰ってある」

盗賊相手に前払いだと？ この国の人間ならばともかく、他所の国じゃ持ち逃げを警戒して、そんな事絶対やらねえぞ？ 何なんだ。白くなったり黒くなったり忙しい案件だな。

「ありがとうございます。それではこのギルドの汚名返上が、上手くいく事を祈っておりますよ。お邪魔致しました。失礼します」

「失礼したな」

さつさと部屋を出るグリントを追いかけ、部屋を出るが扉が閉まるまで、ベルニールと名乗ったギルドマスターは何も言わなかった。

「恐らく、追及や糾弾は覚悟の上、といった所でしょうね」

「やっぱりか？」

階段を下り、店を出ながら先程の事について話を進める。

「あの感じでは本気で挽回の手を打つ為の依頼のようですが……」

「これでもまだ、どこかに本命が隠れているのか。それとも『死神の羽音』の関与はただの偶然で終わるのか……」

「難しいですね。とりあえず三日以内に事が運ぶ事だけはルシィさんに伝えましょう。その情報は彼女達にも必要になりそうです」

「了解だ」

俺達は何か見えないモノに巻かれている様な、不思議な感覚を拭いきれないまま、屋敷へと帰るのだった。

第19話 侍従長、羨望する「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第19話 侍従長、羨望する「1」

私は孤児でした。

孤児院で育ち、エルガルド家の先代侍従長様に気に入られ、エルガルド家に仕えました。

孤児なので両親は不明ですが、種族は純粋な人間であるという事は、事前に調べて頂きましたので判明しております。

それがこんなにも悔しかった事はありません。

ええ、成人の儀でも何一つ祝福など受けなかったのは、何の血も混ざっていない純粋な人間の証ですから仕方ありません。

フィーリアさんも同じ思いなのでしょう。実に寂しそうな、悲しそうな目で眺めています。部族の衣装を身に纏って、皆の前で優雅に回って見せているミランダを。

ミランダは衣装を着れた事も、褒められる事も嬉しいのでしょうか。本当に素敵な笑顔で笑っています。私も、恐らくフィーリアさんも心から喜ばしい事だと思っています。何も問題はありません。

ありませんが……悔しいのです。なぜ。なぜ。

何故、ミランダの、……胸がそんなにも大きくなっているのですかッ！

「ご主人様。そのにやけたお顔を、もう少し引き締めて頂けませんか？」

「ルシイ、何をそんなに怒っているのかな？ 後ろの暗い般若のお面と怪しげな刀が、隠し切れていないか？」

「目の錯覚です。幻想です。とつとと頭を通常運転して頂けますか？ エロエロ運転では話に支障をきたします」

そう言っでご主人様の肩甲骨辺りを思いきり、つねってやりました。少し気持ちが晴れました。ふと横を見るとフィーリアさんは、まだつねっているようです。いつまでするつもりでしょうか。まあ、ご主人様ですから、死にはしませんので放っておきましょう。

「それで、ミランダ。祝福はどうだったんだい？」

「うんとね。ちよつとよく分からない系譜を授かって、体が少し成長したかな。もうちよつと、身長が欲しかったけど、仕方ないよね」

少し？ 今少しと言いましたか？ ミランダ。確かに背は少ししか大きくなっていないでしょう。

しかしっ！ その胸はどう見てもカナリーさんに匹敵、いえ胸周りが細い分、胸自体の大きさはレイチエル程もあるのではないのですかッ！？

「系譜については、ミランダちゃんが届けてくれた手紙にも書いてあるけど、ようわからんな。どっちにしる後回しやな」

「しかし、まあ見事に偏った変化だな。身長はそう伸びていないから、その服も着れてるから問題ないが……胸元がなあ。もとのサイズで作ってるから窮屈そうだな」

「御主人様、別に言葉選ばんでもええで。結果は変わらんし。ミランダちゃんのおっぱいが大きくなりすぎて、前の重ね合わせが胸の谷間を強調する様な開き具合で、エロエロな御主人様の欲望を刺激しまくるって言いたいんやろ？」

「カナリー……どうしてお前は、そういうも解っていないながら、火に油を注ぐような事を言うかなあ？ いい加減、痛いんだよ背中が」「そっぴや大きくなっただねえ。重いだろ？ ミランダ」

「うん。レイチエル、実はこれが一番困ってるの」

どうせ私は重さで困るほど大きくは無いです。そんな気持ちは分かりません。かろうじてご主人様の手では収まりきらない程度ですから。ふんっ。

「下着を買いに行かなきゃいけないね。この都市なら小人の職人くらい居るんじゃないかい？ 今はサラシで抑えてんのかい。それは良くないよ」

グノーム 小人とは大地の精霊たるノームの末裔と言われている種族です。

とても小さい亜人で、身長は人間の掌くらいで、手先が器用で主に女性用の下着やドレス、レース等の繊維加工品で生計を立てています。グノームはその小ささ故に力は無いですが、細かな細工や加工が得意なのです。その細工の美しさからグノームの職人の作る下着やドレスや服は貴族の女性のみならず、平民女性でも必ず一着は持っている程、人気が高いのです。

かなり昔に大陸中央付近にあった国の事件ですが、その国の王がグノームを嫌い、弾圧した事件があったのです。その時、グノームの職人は戦うのではなく、こぞって他の国へ逃げてしまいました。

結果、その国には綺麗な細工の下着や服が無くなり、娼館の売り上げは落ちるわ、民からの不満は出るわ、貴族の女性はそろって不機嫌になり旦那である貴族に当たり散らすわで、国王には原因がわからない不満が国中に蔓延しました。

それを聞いた隣国の貴族が、下着や服だと軽んじているからだ。と、困っていた一部の貴族に伝えると、その貴族は自分の領地にだけは、金に糸目を付けずに隣国から服や下着を輸入しました。

すると、その貴族の領地だけが元通りになり、それを聞いて驚いた国王は、すぐさま調べさせましたがグノームの足取りはつかめま

せん。自国にいたグノームと他の国にいるグノームとの見分けがつかないのです。実際、人間には違いの分かりにくい種族の様です。困った国王は周辺各国の王に頭を下げて、国に戻って来て欲しいとグノームに向けての正式な謝罪声明を各国の都市に張り出した、という実話なのです。

下着は高価ですが、女性にとっては必須の物であり、小人の作る物の人気の高さが窺えます。

「でも、もう買うんは一週間ほど我慢しいや？ 子供が生まれた時と同じように一時的に大きくなってただけらしいで？ 落ち着くと、もう少し縮むはずや」

「そうなのですか？ せっかくなんですから、ミランダも大きいままの方がいいでしょうに」

「まあ、でもウチの予想やけど、レイチエルはんがSランク、ウチがAランク、ミランダちゃんがBランク、ルシィ姐さんがCランク、フィーはんがDランクちゃう感じになるんちゃう？」

「なんなのだ。その微妙に不愉快なランク付けは……普通にBカットプしかないと言われる方が、まだ良心的な気がする……」

フィーリアさんの言う通りです。なんですかそのランクは。破壊力を表しているだけでも？ フィーリアさんは、だいぶ胸を気にしているようですね。まあ、気になるのも分かないではないのですが、少し気にしすぎでは？

何か心的外傷トラウマでもあるのでしょうか。

サイズで言えば、レイチエルはF。カナリーさんはE。私はC。フィーリアさんはBですね。前のミランダはまあ、何と言いますか。胸には下着も必要なかったですからね。今のミランダはFぐらいはありそうですが、Dぐらいに落ち着くと言う事でしょうか。まあ、

それならば私とも僅かしか変わりませんので、良しとしましょう。

「冒険者ランク制度を元にウチが考えた胸ランクや。これはあくまで大きさだけな？ 柔らかさとか肌の質感とかは日によっても変わるさかいな」

「それで行くと前のミルはGランクぐらいだったからな。よかったじゃないか。ミル。大きくなりたかったんだろ？」

「それはそうだけど。でも、まだ変わるんでしょ？ ゴシユジンサマはこのままがいい？ もうちょっと縮んでも平気？ それとも前みたいじゃなきゃダメかな？」

「何を言ってるんだ！ おっぱい……うん！ 胸の大きさなど関係ないぞ。今のミルでも前のミルでも大好きだぞ？」

「よかった。私も好きだよ？ ゴシユジンサマ」

全く何をデレデレと。ご主人様は。なぜご主人様は、デレデレしていないと生きていけない、生き物なのでしょうか。もしかや人間ではなく、何か新しい種族なのでしょうか。

確か、初めてミランダが屋敷に来た日には一緒にお風呂に入っていて、失礼ですが、つるべたのミランダの胸を堪能しておいででしたね。どこまで変態なのでしょうか。

きつと男しか生まれられない新しい変態種族なのです。

「主殿。それはそれで、問題なんじゃないのかい？ ミランダにや失礼かもしれないが、子供みたいなのも好きだって言ってるようなもんじゃないかい？」

「ご囚人様、流石にそれは変態ですよ」

「……じゃあ、なんて言えっただよ……ん？ おい、ルシイ。今、俺の事を犯罪者の様な呼び方で呼ばなかったか？」

「気のせいです。ご主人様」

「そうだぞ、侍従長殿はちゃんとご囚人様と言ったではないか」

「やっぱりか！ 囚人になってるじゃねえか！ フィリ！ ど・こ・がちゃんなんだ！ 言ってみろ！ 俺がいつ犯罪を犯して捕まったっていうんだ！」

「煩いご囚人様ですね。どうせ脳内はミランダとのエロエロな事一杯のくせに。生意気な。事実を突き付けてやりましょう。」

「具体的には、今週中には犯罪で捕まるのではないのですか？ 主に幼女に対する悪戯で。ちなみに生れた時から頭の中が犯罪です。ご囚人様」

「そうだぞ、ご囚人様。私がちゃんと王立騎士団団員として、捕まえて突き出すから大人しくしているんだ。抵抗すると罪は重くなるぞ？」

「お前が突き出すのかよ！ フィリ！ いつもは当主様って呼んでるくせに、なんで今だけご囚人様って呼ぶんだ！ 第一、俺はまだミルに何もしてねえ！」

「ほほう。今までは幼女やと思ってたミランダちゃんに、これから何かをするつもりやったんやんな。御囚人様は」

「カナ！ お前まで上げ足とった上に、言い方まで乗っかるんじゃねえ！」

「ッ！ いけません！ 退避です。」

「してくれないの？ ゴシユウジンサマ……」

「ミル、悲しそうな顔しながらもシユウジンって言うな！

「……………それと今晚すぐにでもするからな？」

「フィーちゃんにしてみたみたいに？」

「そうそう、フィリにしてみたみたいに……………え？」

阿呆なご主人様は気付いていなかったのですが、ミランダの後ろ

には……何でしょうか？ 白と黒の……クマでしょうか？ とにかく意味不明な怪物が浮かんでいます。その存在に気付いていた私と、レイチエルとカナリーさんはすでに部屋の隅に退避しております。

え？ フィーリアさん？ 白と黒のクマの様な獣に足を掴まれているようで、その場から動けていませんね。まあ、仕方ありません。当事者ですから、諦めて頂きましょう。

「あのね、ゴシユウジンサマ？」

「な、何かな？ ミル」

「ちよつとだけ時間あげるからちゃんとした説明考えておいて。ね？」

「……ハイ、ワカリマシタ……」

そこで逃げられないと悟ったのか、ご主人様は諦めて大人しく裁きを待つ事にしたようです。何故か、触れると灰になって崩れ落ちそうな危うさを感じますが、自業自得です。

「フィーちゃん〜」

「ひいっ！ な、何も悪い事はしていないのだ。ただ、私は許嫁として……」

「許嫁として、何かな？」

あれは私でも耐えられませんね。ミランダの顔は真っ黒に見え、どこが目なのかも判別不能です。さっさと謝った方がいいですよ。フィーリアさん。

私は声には出しませんが、心の中でアドバイスを送ります。

え？ 何故声に出さないのか？ 空気を読んでいるのです。何です？ 私が嫉妬しているだろう、と？

いえいえ。とんでもございません。

異国の旅行先で、まだ閨を共させて頂いていないのが私だけだったとしても、怒ったり、ましてや嫉妬など致しません。フィーリアさんの慟哭のあった日が、私の順番だったはずだったのに、などとそんな気持ちには欠片もございません。一応、お話をされる前には私の事も考えてくださったのか、ご主人様は私に視線でお尋ねになりましたから、納得して私もお譲りしたのです。え？ 話がおかしい？ そのような事もございません。

本当なら、今晚こそはと思っていたのにミランダさんが来てしまったのです！ などと、恨み言を言うつもりありませんよ。全くの事実無根です。

「うう……わ、悪かったとは思う。一応、侍従長殿とカナリー殿にも皆の事は聞いていたので、悪いとは思ったのだが……抑えられなかったのだ。もうこれ以上、苦しみに耐えられなかったのだ。それで当主様に全てをぶつけてしまった。そうしなければ自分が保てなかったのだ！ わ、私だって女なのだ！ 幸せになりたいのだ！」

「でも、フィーちゃんが一番最後に入ってきたよね？」

「はい……」

「ゴシユジンサマが悪いんだからそんなに怒るつもりはないけど、次はちゃんと守ってね？ それと、ちゃんと甘えすぎないようにしてね」

「はい。当主様にも甘えすぎないように気をつけます……」

「今晚はフィーちゃんは禁止ね？」

「そんなっ。私だってあれから一ふおも……ふが」

ミランダに頬を掴まれているフィーリアさん。貴方などまだ良い方ではないですかッ。私なんか、イメトウルの街を出てからはまだ一回も……そういう事では無くてですね。

あまり依存しすぎてもいけないのです。ご主人様はお優しい方で

すから、我々の望み全てを叶えようと無茶をなさって下さいます。ですので望みすぎては、甘え過ぎてはいけません。

「禁止。ね？」

「ふあい……」

流石に雰囲気から納得できたのか、返事するフィーリアさん。さて、崩れそうなご主人様の番の様ですよ。ご主人様？

「ゴシユウジンサマ、ゴシユウジンサマ？　なんで先にフィーちゃんなのかな？　気持ちを受け止めてあげるだけで、よかったんじゃないのかな？」

「それはですね……あまりにも、その。健気と言いますか……その場のフィンキと言いますか……勢いと言いますか……」

ミランダは獣人ですしね。匂いの変化でも気付いたのでしょうか。フィーリアさんもご主人様が初めてだったようですしね。

「その勢いでエント^{同調}レインまで先に済ませちゃってるのよね？」

「なんでその事ッ！　……はい、すいません……」

言った瞬間にカマをかけられた事に、気付いたようですね。『なんで』と言った時点で、白状してると同じじゃないですか。せつかく、私とカナリーさんとレイチエルは相談し、黙ってて差し上げましたのに。隣を見るとカナリーさんもレイチエルも肩を竦めていました。

「私はゴシユウジンサマにも一緒に、お祝いして欲しかったんだけどなあ。その時だけ帰って来てくれないかな、とかちょっと期待したんだよ？　でもそんな事もなくて。婆ちゃんとグリじいちゃんと

エヴァじいちゃん、それとリヴァルさんとヒース君でお祝いしたんだよ？」

「それはその、仕方なくと言いますか……一応仕事だし……」

「あ、そういえば来る時に、ヒース君がお見送りに来てくれたんだあ。成人の儀のお祝もしてくれたし。ヒース君の成人の儀の時はお祝いしようって誘われたしね」

「あのクソガキっ！ 拾って助けてやった恩も忘れて、誰のモノに手エ出そうとしてやがるッ！

よし、今すぐ帰るぞ。あのガキ、ブツ殺す」

「そんな理由だとすぐ帰れるのに、来てはくれなかったんだね……」

「あ、いや、あのな？ 今のは冗談というか……」

「手を出されてもいいとホントは思ってるんだ……」

「そんな事はない！ あのガキは絞める！」

「でも、私の為には帰ってきてくれなかったよね？」

「はい、すいません……」

いい加減、泥沼から抜け出す方法を考えて頂けませんか？ ご主人様。さつきから正体不明の白と黒のクマの大きさがどんどん大きくなっていますよ？

「分かった！ 今日、明日とミランダの為に時間を作るから！」

なっ！ そうですか。フフフ。私はさらに二日以上放置されるワケですね……

「朝から一緒？」

「夜も、寝る時も何もかも一緒！」

「ずっと？」

「ずっと！」

「でも、今日ってもう後夕食とお風呂ぐらいしかないよね？」

「そのかわり二人きりだから！」
「どうしよおかなあ……………」

なんて、うらやま…………もとい。我が儘な！ いくら一番年下のミランダとはいえ、その様な我が儘を言っではいけません！

「許してくれよ…………ルシイが背負ってる般若もいい加減やばいんだよ……………」

「そうだね。あの般若さん、いつの間にか二刀流になってるね。真つ二つどころか、四つに切り分けられちゃうね？」

何を言っているのでしょうか。私は冷静です。ええ全くもって冷静です。あら？ カナリーさんとレイチエルが、いつの間にか私から離れていますが、どうしたのでしょうか？

「じゃあ、あと二つだけ条件出していい？」

「二つでも三つでも、どうぞご自由に」

ま、まだ好き放題しようと言うのですかッ！ ミランダ、貴女は成人の儀を終えて、いささか気が大きくなっているではありませんか？ そのような増長は許しません。ええ。許しませんとも。侍従長たるわたく…………… 今晩はルイ姉と一緒にお願いね。コレが一目……………しのホコリにかけて…………え？

「二つ目は、これからはミルって呼ぶの禁止。ミランダをミルって愛称で呼んでるんじゃないよね？ 『ミルガルド』のミルだよね？ その呼び方は嫌。『ミルガルド』も師匠のくれた大事な名前だけど、それじゃ嫌。今日からはちゃんとレディとして扱ってね？」

「いつから思ってたんだ？」

「アルハンゲルっていう家名を貰った時かな？ 大体だけど」

「分かった。ミラ。これからはミランダ・アルハンゲルをそう呼ぶよ」

「うん。ホントはミランダって呼んで欲しいけど、今は我慢してあげる。だ・か・ら、大事にしてね。ゴシユジンサマ」

「お、やっとゴシユジンサマに戻れたようだ。大事にするさ。これ以上ないってぐらいにな」

な、何を言ってるのでしょいかミランダは。私と一緒に今晚ご主人様と閨を共にするだなんて。何を言い出すのでしょうか。だ、大体ですね、ご主人様は『比べたくないし、一人一人を大事にしたいから複数ではしない』と仰っていたではありませんか。いえ、嫌だと言う訳ではなのですよ。しかしですね、やはりその、ミランダとはいえ閨を共にしている最中の私を見られるのは、恥かしいと言いますか、いえ、ミランダがどのようなものかも気にはなるのですが、レイチエルもとても本人とは思えない様な、甘え方をしているのも聞いていますし、先日のフィーリアさんも初めてとは思えないほど、まるで子犬か奴隷の様に、ご主人様に甘えて可愛がって貰っていましたし、私ももっと積極的に甘える方が良いでしょうかと考えたらしい訳ではないのですが、それもやはり恥かしいので控えようかとも思っています。ご主人様が望まれるなら、どこまでも甘えてみようかなんて考えたりもした訳ですが……『ルシィ!』

『ルィ姉!』……あら?

「は、はい!？」

「カナとレチエはフィリを引っ張って、先代女王の所に行った」

「ルィ姉、お風呂いこ。ご飯は今日だけはゴシユジンサマのお部屋で三人で食べれるように用意しておいてくれるって。レイチエルが言ってた」

「いえ、あの、その。三人でというのはその……」

「あのね、ルィ姉。ご主人様を傷つけないから。だから一緒に

いて欲しいの。ダメかな？」

っ！　そうでした。私は恥かしい妄想に、頭がいつぱいになり忘れていました……

ミランダは獣人の血が濃く、発情期に差し掛かった時に耳を弄られて前後不覚になってしまい、一度ご主人様の首筋を切り裂いたのです。それが二人にとって関係を留める原因になっていたのです……

「ま、今回だけは例外だ。あんな事にもう一度なるつもりも、するつもりもないが。それでもミラを安心させるためにもルシィ、頼む」「はい。ご主人様。貴方がお望みなら、私は如何様にも致します」

恥かしかった。謝りたかった。忘れてしまっていた事も、閨を共にできると喜んでしまった事も。ミランダは真剣だったのに。ご主人様を守る為に。お傍にずっと居る為に。

そんな申し訳ない気持ちも、ミランダには悟られぬようにそっとミランダを見ると、ミランダはとても綺麗な笑顔で笑い返してくれていました。

第19話 侍従長、羨望する「1」（後書き）

サイズの事についての質問をされましたので、活動報告に記載しております。気になった方はどうぞご覧ください。

第20話 侍従長、羨望する「2」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第20話 侍従長、羨望する「2」

私は恵まれていたという事に気付いたのです。

孤児となる者は、ほぼスラムで育ちますし、そのなり方もよく知られています。

スラムに住む者達は六割が孤児、三割が世捨て人、残り一割が盗賊と言われています。広大な大陸の中で、最も治安の良いとされるラナルラ王国でも、孤児とスラムは無くなりません。他国から不法に侵入しスラムに住みつく者、子をスラムに捨てる者、挙げるとキリがありません。

そんな中でもミランダは獣人の暗殺者夫婦に拾われ、私は孤児院の職員に拾われました。これだけでも私が恵まれていると、実感できます。

だからでしょうか。私は甘く、ミランダは厳しい。常に現実的な思考を頭の片隅にでも置いていた様な、そんな雰囲気はミランダにはあります。

ですから今のミランダの様に、前後不覚になってご主人様を傷つけかねない程、乱れる姿はあまり想像できません。

まあ、ご主人様曰く『ツンドロ』という、とても普段の姿からは想像できない甘え方をレイチェルもする様ですので、私の認識が甘いのでしょうか。

「ふにゃああああん」

「よしよし。可愛いぞ。ミラ」

しかしですね。このまま二人の痴態を横で見続けているというのは、流石に私も恥かしいと言いますか。その、あ、いえ。今はまだご主人様はミランダの耳と尻尾をできるだけ優しく、撫でられたり弄られたりしているだけです。何と言いますか、猫を可愛がっている風景にしか見えなくもないのですが、ミランダのその表情がですね。かなり蕩けていると言いますが、ミランダは口元の涎がこぼれるのも気にせず、ご主人様の胸に顔を擦り付けて甘えているだけなのですが、何故か艶めかしく、淫靡と叫びますか……とにかく！恥かしいのです！

「ルシイ。こつち来い。それじゃ一緒にいる意味がないだろう」

「ふにゃっ。はにゃっ、ふあああつふにゃあ」

「いえっ。あの私は、ミランダが傷つけないようにお傍に控えているだけですからっ。そのっ。お気になさらず、お続けくださいっ！」

ご主人様の手がミランダの全身をゆっくりとかつ滑らかに刺激するように動いているのを見てしまうと、ああ、あれはすごく気持ちいのです等と思い出し………違います。私はあそこまで感じてはいませんでした。

し、仕方ないのです。エント^{同調}レインした状態だと敏感になってしまっのです！ わ、私達のはしたない訳ではないのです！

「ミラはもう大丈夫だ。エント^{同調}レインも皆の中で一番落ち着いているぐらいだ。今はただちょっと気持ちよくなってしまっただけだ。念話で分かる」

「いえ、でしたら私はもう退出させて頂き………きゃっ」

「ミラは一緒にと言っただ。お前もミラに負けないくらいにしてやるから覚悟しろよ？」

「いえ、あのっ！ ご主人様っ！？ んふうっ」

そう言ったクルカ様に、唇を強引に奪われてミランダごと押し倒されました。

三つの月が最も輝く頃まで続いた行為は、いつもよりも甘美で本当に私も前後不覚になってしまいました。何が起こったのかあまり覚えていません。月が最も輝いていますから、深夜二時頃。始めてから四時間ほど経過した事がなんとなくわかる程度です。

……… やつとの思いで息を整えつつ、ミランダを見ると少し息は荒いですが落ち着いているようでした。

「ルイ姉もみんなも、いつもこんな感じだったんだね。ちょっと怒りたくなっちゃうなあ。私が原因だって解っててもずるいつて思っちゃう」

「ミランダっ。そんな事はないのですよっ。い、いつもはもう少し大人しいというか……」 『そうだぞ。ルシイがココまで自分から乱れるのはめったにないぞ』……… そういう事ではありませんっ！ クルカ様！」

意地悪なクルカ様のお腹をつねってやると、クルカ様はいつもよりおおげさに痛がります。大げさすぎなのです。

「ルシイ、腹と背中では止めてくれ、今は爪跡がかなり痛いんだ」
「ごめんね。上に乗ってる時にお腹にも爪立てちゃったね。そんなに痛い？」

ミランダの方を見ると、私とは反対側で抱きついてたミランダ

が、クルカ様のお腹に付けられた大量のミミズ腫れの跡を、舐めてあげていました。その跡の本数と赤さは、流石に私でも痛々しいと顔をしかめる様なモノでしたが、血が出ているモノはありませんでした。

「ごめんね。背中もきつとすごいよね。最初はしがみついていたから、加減も分からなかったし、相当痛いんじゃない？」

「今はな。一応、爪切っておいてくれたんだろ？ 俺は生命活性していたからな。おかげで切れてない程度だ。大丈夫」

「す、すみません。こんなになつてるとは思わなくて……」

「ルシイの初めての時とそう変わらん。ルシイはめちゃくちゃ痛がつてなあ。あの時は背中から血が滲んだからな。ルシイの血より俺の血の方がシートから落ちなくなつて、困つたつてカナが言つてた」

か、カナリーさん！ 何て事をクルカ様にお伝えしているのですかッ！ これは折檻ですね。ええ、反省するまで何時間でもお説教をして差し上げましょう。

「ほんとにごめんね。明日の晩、あれ？ もう今晚かな？ 今晚は一人で来るから気を付けるね」

「おいおい。そりゃ俺は構わないが、大丈夫か？ 痛くないか？ 体は」

「そうですね？ 私の時は、クルカ様も初めてだと仰つて手加減して頂けなかったので、参考になるかは分かりませんが、二日は何か変な感じが消えませんでしたから」

「ううん。なんとなく分かるの。獣人の血かな？ 体が必要な事に適応するように変わっていつてる。そんな感じなの」

「ああ、子供を作る為の変化が人間よりも明確なんだな、きっと」

獣人は子供ができにくいですから、生存本能が子供を作ろうと、

体を整えているのでしょうか。それともミランダの気持ちが成せる事なのでしょうか。

しかし、ミランダが言っていた、負けたくないという気持ちも事実なのでしょうね。私にも、少しですがその気持ちは分かりました。

「まあ、いいさ。なんとかするよ。明日の夜が明けるまではミラと一緒にだ」

「うんっ！」

「よかったですね。そろそろお眠りになられますか？ クルカ様」

「ミラは？ 眠いか？」

「ううん、なんとなく起きていたい感じ」

「ルシイもそう言うよな。エント^{同調}レインせずにシた日は、疲れ果ててすぐ眠るのにな。ルシイは特に、そのまま気絶したりするもんな」

「く、クルカ様！ それはクルカ様が無茶をなさるから、耐えきれないので！ クルカ様のせいです！」

全くツ。ミラの居る所で、そんな事を言わなくてもいいじゃないですか。思わず、ミミズ腫れの残っているお腹をつねってしまいました。

「そうだ。ゴシユジンサマ。エルフの行方不明の件、どうなってるの？ グリじいちゃんも、おかしな感じだと言ってたよ」

「そうだなあ、色々聞いて調べた結果から言うと、この国の女王がいつでもケーキを食べれるようにしたいが為に起こった事件。という感じかな？」

「えっと……アホの子なの？ エルフの女王って」

ええ、ミランダがそう言うのも無理はありません。女王陛下が『闇の匣』に閉じ込められている以上、出てくるまで詳しい事情は聞けません。

ですが、ギャンザ王国から大量のケーキの材料と料理人数名、料理人の日用品などが運び込まれた場所も確認できております。

問題なのは何故、エルフの機構師である必要があったのか？ という問題が残りますが、女王陛下に聞くしかないでしょう。昨日の夕方から、グラッフ様が兵を引き連れ現地へと向かっております。明日の昼にはエルフの機構師を全員連れ戻してこられるとの事ですから、その時に何をしていたのかを聞けば概ねの事情は分かるでしょう。

「えっと、レイチエルも酷い目に合いそうになったんだよね？」

「そうだな。この城を壊しそうになったな。ルシイとカナが」

「あ、あれはクルカ様がやれと言ったのです！ まあ、死人は出さずに城を粉々に砕いてやろうという程度には、その気になっていましたか」

「えっと。女王が出てきたら、爪立てても許してもらえるかな？」

「大丈夫な気がするな。うん」

「クルカ様！ そういう事を言うのは冗談でもお止め下さい」

「ま、ミランダが何もしなくても、先代女王がとんでもない事するよ。あの『闇の匣』はな、「見る」と「聞く」と「考える」以外何にもできなくなるらしい、魔力も何もかも抑えられてずっと起きたままだそうだ」

「うわ、酷いね。それ」

「ああ、年もとらない、眠れない、疲労も感じない。そんな状況で前は三ヶ月間閉じ込めたらしい」

確かに酷い拷問ですね。発狂しかねません。自業自得ですので同情はしませんが、自分にはされたくないお仕置きですね。

「ですから放っておいても大丈夫でしょう。しかし、『エルフの秘仙薬』の対価の依頼にしては、なんという事もなく終わりそうですね」

ね」

「ソコがね、気になるの。グリじいちゃんはよく分からない、バランスの取れてない事件だって言ってたよ？」

「確かにそうだな。盗賊が絡む意味とエルフの機構師でないといけない意味が分からん。別にメイドにでも覚えさせれば良いだろうに。明日、エルフの機構師から事情を聴けば、分かるかもしれないが、なんとも予測できないんだよな」

何にせよ、明日には全体の概要が掴めるでしょう。今日の連絡で向こうの最終行動日が三日後、いえもう二日後ですね。そう分かっていますので二、三日以内には決着がつくでしょう。そうすればお屋敷に帰れます。あ、でも。もう少しクルカ様と、この国をゆくり見て回りたい気もしますね……いえ、もちろん皆さんで、ですよ？ 私が二人だけでデートしたいなどと、思っている訳ではありませんよ？ もちろんちゃんと皆さんの事も考えての事ですとも。

「ゴシユジンサマ？」

「んん？ なんだ、ミラ？」

「先代女王ってどんな人？」

あら？ 気になるのでしょうか。女の勘でしょうか。あの方もクルカ様を気に入られたようでしたから……しかしミランダは本当に鼻が利くと言いますか……

「あー。正直に言うとう夫にならないかと言われた。ミラ。『おっとぐらいでつねり始めるのは止めてくれ。まだ続きがある』

「何かな？」

「もちろん断ったし……『陛下の背中と腕を撫でまわしながら、です』が……」

ルシィ？ 何故今それを言う必要がある？ 頼むから空気は読め！

これ以上は血が出るから！」

ふんっ！デレデレしていたのは事実です！ 空気は読んでいます！

「なんとなく俺の態度に先代女王への好感が感じられるから、聞いてるんだろ？ レチエが死にかけたのに」

「そう。いつものゴシユジンサマなら許さないから、すぐに屋敷に戻ってくるんじゃないかな？」

「レチエがエルフの血を引いててな。生態やら知っとくべき事が多かったのが一つ。あとは本気で俺をこの城に置いてくれそうだったのが一つ」

「どういう事？」

「万が一な。上手くいかなくてダントリン領も出る事になったら、皆で世話になれる場所ってのは魅力的だった」

恐らく、私達の事を考えてくれたのでしよう。それがミランダにも分かったのか、つねっていた所を今は撫でています。

「分かった。分かったけど……」

「まだ何かあるか？」

「でも。他の獣人の娘に会うのも手を出すのも禁止ね？」

「な、何を言い出すかと思えば、そんなんするわけないやんか？」

「クルカ様。カナリーさんの様な方言になっています。それでは焦っているのも隠せませんよ」

「ムファちゃんのトコは特に禁止。抱いたんでしょ？ エリンちゃんを抱かれてないって聞いたから、街で会うぐらいは許してあげる。でも手を出したら駄目」

「やっぱり！ あの時、俺は手エ出してなかったのか！ 何たる不覚！」

ああ、撫でていた手が爪を立てていますね。あ。血が出ました。サイドテーブルにタオルがあったはずです。取りましようか。

「わかった！ わかったから！ もう獣人には手を出しません！ ミラだけにします！」

「約束だよ？ 破ったら酷いからね？」

「分かったよ。その代わりミラには出しまくるからな？」

「んふふ。大丈夫。嫌な時は逃げるから」

「私としては獣人だけでなく、増やさないで頂きたいのですが……」

「あ、ゴシユジンサマ左手貸して？」

クルカ様の右側に抱きついていたミランダが、クルカ様の左手を自分のお腹に乗せると自分の尻尾を何やら弄りだしました。

「んっしょっ。イタっ」

「ミラ？ 何してんだ？」

「ん。ちよっと待ってね……よしっ。これで良いよ。はい」

クルカ様が左手を胸の前ぐらにかざすと、ミランダの尻尾についでいたのと同じリングがクルカ様の左手の薬指にハマっていました。これは何でしょうか？ 綺麗なリングですが……

「これは何だ？」

「あ、やっぱり知らなかった？ エヴァじいちゃんがくれたの。アルハンゲル族は婚姻の時は夫婦が、出産の時には親子がこのリングを尾の付け根付近に着けるんだって」

「婚姻！？ 出産！？」

な、何と言う事を！ そんな風習は人間にはありません。尻尾がないのですから。せいぜい婚姻した夫婦はお互いの名前の入った腕

輪を着けるぐらいです。

「うお、コレ外れねえぞ!？」

「そういう風に、機構文字刻んでもらったもの」

「クルカ様! 手を貸して下さい!」

「コレ、ギメル双子尾輪リングで言ってるね。元々二つで一つなの。夫婦がお互いの名前の彫ってある物を着けるんだよ」

ううう。……外れません。ううう、ずるい! ミランダは、自分の尻尾に着けている二つのリングを、クルカ様に見せています。それはもう、とても楽しそうに。

「しかし、何故左手の薬指で指輪なのです? 婚姻なら右手の腕環なのではないですか? そういう風習なのですか?」

「わかんない。ソコが一番いいような気がしたの」

元々、右利きの多い人間は右手を良く使いますので、自分の右腕たる存在の伴侶がいるのだという意思表示と、握手の際などにも必ず見える様に、右手に婚姻済みを示す腕輪を着けます。妻が二人なら二つ着けます。

そうですね。邪魔にならないという点では薬指が良いかもしれませんが……クルカ様は何やら『エンゲージリングの風習がある訳じゃないのか……』などと訳のわからない事を呟いています。

「分かったよ。外れないし外さない。それで良いんだろ?」

「うん。約束だよ」

「クルカ様。それは他の方に知れたら婚姻した事に……」

「大丈夫だ。ミラの一族はもう滅んでるからな。ルシイも知らなかつたんだろ? 指輪一つでそう言いだすやつも貴族にはいないだろ。ミラと俺だけの婚約指輪だ」

「えへへっ。ゴシユジンサマ大好きっ！」

今日だけは、というこの日を狙うあたり、ミランダの強かさが窺えますが……私はいっ……いえ。まあ、そのうちクルカ様が考えて下さるはず、ですよ？　ですよ？　ですよ！？

「ルシイ。言いたい事は分かった。だから目で訴えながら左手を噛むな」

「ふふっ。ごめんね。ルイ姉。フィーちゃんにも先越されちゃったから、こういうのだけは一番最初にしたかったの」

「ミランダ……」

………解りました。みんなへの説明は自分でして下さいね」

「大丈夫。知らないのはフィーちゃんだけだから」

「そっか、エヴァンが初めから俺の名前を刻んで渡す訳がないわな」

「そ。カナちゃんに頼んだの。大急ぎでって」

だからお風呂の後、一時間ほどいなくなったのですね……レイチエルもその時にカナリーさんと一緒にいたのでしよう。全く。ミランダにはかいませんね。しかし、ご主人様？　カナリーさんとレイチエルも知っているのです。ちゃんと考えておかないと大変な事になりますからね！

「あゝ疲れた。精神的に疲れた。ミラもルシイも可愛かったが、問題なく終わるかどうかが心配で精神的に疲れた」

「お疲れ様。ゴシユジンサマ。今晩は楽しませてあげるね。カナちゃんから色々教えてもらってるから。楽しみにしててね」

「お。マジで？　期待しよう。フッフッフ」

「ミランダっ！　クルカ様も！　もう、下らない事を言わずに寝て下さい。明日もやるべきことはたくさんあるのですから！」

「ふあゝい」

「へーい」

「全く、カナリーさんも何をミランダに教えているのですか。そんな羨ま……もとい、いやらしい事をミランダに教えるなんて！これは折檻の時間を増やさなければいけませんね。何を教えたのかも全て聞き出さなくてはいけません。ええ、絶対に聞き出して見せましょう……………」
「ルシィ？ 初めから思いつきり声に出しているがそれは良いのか？」……………
「なんですかつ！ 良いから寝て下さいっ！」

「お、おやすみなさい……………」

「オヤスミ。ゴシユジンサマ」

そうですね。さつさと寝るのです。クルカ様が調子に乗ってミランダに数回、私にも数回もされるので疲れているのです！

「あ、そうだ。ルイ姉は、こういう時はずっとクルカ様って呼んでるんだね。あんな甘えた声で『クリユカしゃまあ』って言うてるルイ姉初めて見たよ。」

可愛いね。ルイ姉。オヤスミナサイ」

っ！もしかしてっずっと！？

「ミランダっ！ μ

っ！

っ！

っ！

っ！

その後、やはりと言いますか案の定といたしますか。翌朝どころか、お昼まで惰眠をむさぼった私達は、カナリーさんには色々聞かれ、

レイチエルからは料理を辛い物と辛い物だけにされました。

フィーリアさんにはミランダのギメルリングの事を気付かれてしまい、涙目で睨まれ続けながらグラッツ様のお話を聞く羽目になりました……

全部何もかも！ ご主人様のせいなんですっ！！

第20話 侍従長、羨望する「2」（後書き）

質問がありましたので最後のキリシヤ文字表記の意味について活動報告に記載しました。よろしければ一度お読みください。

第21話 侍従長、羨望する「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第21話 侍従長、羨望する「3」

人はどこまで醜くなれるのでしょうか。

心は移ろいやすく、嫉妬や憎悪など忌まわしき感情を捨て去る事など、誰にもできません。

神官様や僧侶様、果てはエルフの様な高貴だと言われる種族でさえ、自分達の階位に拘るのですから。

グラッフ様の報告を先代女王が受けておられる席に、我々が同席を許可して頂きました。

……元々、そういう約束だっただけなのですが。

今はもうお昼を過ぎ、此処は先日私達が暴れた茶室で、部屋の中央には女王の閉じ込められた『闇の匣』が置いてある部屋です。

ご主人様はミランダと共にソファに座り、ソファの横にはレイチエル、カナリーさん、フィーリアさんが立っており、そして私は起きるのが遅くなったご主人様が、ミランダとサンドウィッチ等で簡単に食事を取られているので、お茶をいつでもお出しできる様に後ろで控えています。

「メルフェイユ様。見つけられたのは五名の人間族の菓子職人と、二名の女性、一名の男性の機構師だけです」

「結局、行方が分からないのは女性一名という事ですか？ グラッフ」

「いえ。機構師達の話によると、集まった同族は五名で男性一名、女性四名だったという事です」

「やっぱり、家族も知人も少ない者がいた、か」

元々は昨日、私達が行く予定だったのでミランダが来るとい

う事と、グラツフ様の自分達近衛騎士団にも何かさせて欲しいとの嘆願により、足取りの分かった場所へと向かって頂いたのです。

もちろん、全員がそろっていれば何の問題もない訳ですし、事情を聴くだけで済むのなら近衛騎士団の方だけの方が良いぐらいです。種族を誤魔化す魔導具も、相手次第では見破られますしね。

それにグラツフ様ならば、近衛騎士団所有の首長飛竜ライバーンが使えるというのも大きな理由でした。取りあえず、行きはこっそりと包囲するように向かい、何かあった場合はすぐさま首長飛竜ライバーンで連絡に戻るといふ、ご主人様との約束をグラツフ様は守って頂けたようでした。

包囲も必要ない程、あっさりとその屋敷は見つかりお昼と同時に踏み込むと、中ではお菓子とケーキを一心不乱に作り続ける人たちがいるのみだったそうです。しかし話を聞くと、今朝から数名が人間に連れられて何処かへ向かったと聞き、グラツフ様だけが首長飛竜ライバーンで取り急ぎ帰って来られました。そこで軽く食事を取りながら、先代女王と話をしていた我々の元に、グラツフ様が戻ってこられたのです。

「ご主人様のお考えになった通りでしたね。少なくとも、あと二名のエルフの機構師が行方不明ですか」

「思ったよりも少なかったな。倍には膨れ上がるかと思ったが」

「クル力殿、そのような呑気な話ではありません。私達の同族が……『まあ、まちなはね。メルフェイユはん……カナリーさん？』」

カナリーさんは、ご主人様がどの様に考えておられるか、理解されているのでしょうか。その場の会話を一旦止めるとご主人様に話しかけます。

「それで？　ウチはどうしたらいいん？　グラツフはん連れて行ってよいか？」

「お前は頭の回転が早くて助かるよ。カナ。とりあえず結界や探知の罫の有無、そこに居た全員からの詳しい事情の確認は、カナとレイチエに任せる」

「ほな、グランプはん、三十分後に中庭の首長飛竜ワイバーンのトコ行くわな？ レイチエルはん。用意しにいこか」

「え、えっ？ あたしも行くのかい？ 主殿？」

レイチエルは何をすべきかを理解していないようです。そういう事には疎いのも仕方ありません。先月まではただの料理人だったのですから。

「こういう事に一番聡いはずなのは、フィーリアさんなのですが……お昼頃に起きた後、ミランダのギメルリングの話を聞くと子供の様に拗ねてしまいました。」

只今、周辺との感覚の拒絶　つまり、子供じみた無視なのですが　を行っておいでです。その癖、視線だけはご主人様の左手とミランダの尻尾の先を行ったり来たりチラチラと……ほんとに子供ですね。

初めて会った時の毅然とした態度は、どこに消えたのでしょうか……？

「お前じゃなきゃ、みんなが安心できる食事も作れんだろうが。カナには話そうとしないエルフも出てくるだろうしな」

「レイチエル」。美味しいお茶とお料理で懐柔して、お話聞いてきてね？」

「そういう事かい。まかしときな。行ってくる」

「いや、私はまだ報告が……」アホか。そんなんしてたら間に合わんくなるわ』……どういう事だ。流石に阿呆呼ばわりは許せぬのだから？」

「グランプさん。今は黙って現地に戻りな。ワケは後で俺から聞か、道中でカナに聞きな。これぐらい理解できねえと、側近失格に

なると俺は思うがね」

「……わかった。カナリー殿、十五分でお願いする。私はすぐに飛び立てるようにしておく」

そう言っただらう様は部屋を出て行かれました。そこでご主人様はカナリーさんとレイチエルに近づきます。ああ。やっぱり、そうしてから行かせるんですね。

「レチエ。カナ。こっち来い」

「あ、やっぱりしてから行った方がええ？ 御主人様は何かあると思っとる？」

「どういう事だい？………ウソッ」

唇を優しく、しかし素早く奪い、同調 エントレインを済ませてしまご主人様。レイチエルは驚きと怒りが混じった、どっちとも取れる真つ赤な顔で何か言っていますが、ご主人様は無視し、カナリーさんとも同じように済ませます。

「怒るなレチエ。時間が惜しいんだ。何かあるまでその感覚に甘えず、そのまま押し留める。解放はするな。今のお前達なら、半日はそのまま維持できるはずだ」

「何かあるってことかい？」

「無ければそれでえんやけどなあ。あつたらきついやる？ エルフを誘拐なんて考えるヤツや、絶対なんか対エルフ用に手段持つてるはずや」

もちろん二人もエルガルド流の護身術の手ほどきは受けていますが、それでは対エルフ用の強力な手段には敵わないでしょう。

しかし、同調 エントレインの状態だと二人はそれぞれ自分にしか使えない戦闘方法を確認し始めています。中途半端とはいえ、やすやす

と負けるとは思えません。」

「そういう事だ。油断するなよ」

「そういう事はちゃんと説明してくれよ。いきなりだって嫌な訳じゃないけどさ。それでも準備とか心構えとかあるんだし……」

「ほな、ウチとした後でもよかった？　ウチはどっちでも気にせんけど？」

「うう……それは先の方が良いけど……」

「ほら、その辺もちゃんと説明したるから、とつとと行くで」

ご主人様は時間のない中でも、レイチエルの気持ちは考えていた様ですね。レイチエルが誰かとキスした後に唇を合わせる事を嫌う、という事を考えて先にしたのでしよう。ですが甘いですね、ご主人様。恐らくレイチエルは………

「すまん。カナ。説明は任せる」

「今度、埋め合わせは考えといてや」

「ああ。ほら、レチエ。お前の腕にかかっているんだ頑張っ行って

……『ングツ………』……ぷはッ。オイ、レチエ」

「行ってくるよ。主殿」

やっぱり。レイチエルは自分と唇を合わせたのなら、その余韻すら自分とであって欲しいと願う程、独占欲が強いのです。口直し、という事でしよう。

「カナちゃんはああやって色々貸しを作って、ゴシユジンサマとお出かけしたり、買ってもらったりしてるんだね」

「カナリーさんは、そういうタイミングを掴むのは上手ですからね」

「マネできるかなあ……？」

「助けてくれる所は真似して欲しいが、無茶な要求は止めてくれよ

？ 下着選びに半日付き合わされるとかは、二度とご免だからな」

……ミランダ。何をそんなに先に止められた。という様な顔をして
いるのですか？

ちゃんと自分で選びなさい。その方がいいですよ？ 選んだ物が
当たりだった時のご主人様は、とても喜んで下さり、それはもう壊
れ……………ううん。さて、二人ほど可哀想な方がいますので、そち
らのお相手もしなければいけませんね。

空気になってしまっていた、先代女王が青筋を立てていますが…
…男日照りも続くところの様に嫌な顔になるのでしょうか？ 少しぐ
らい日数が開いてもあまり顔には出さないように気をつけましょう。
美しくありませんね。フィーリアさんはもう少し放っておきましょう。
う。ご主人様がなんとかするはずですよ。

「貴方達？ そろそろ、私にも説明して欲しいのだけど？」

「そんな眉間にシワ寄せると、ゴシユジンサマのエントレインでも
肌が綺麗にならなくなるよ？」

「クル力殿ッ！ 本当っ！？ もう、どうしようもないの！？」

先代女王、そんなに気にしているんですか？ 何百年生きようと、
女の敵は男よりも美容と健康というのは同じ、という事でしょうか？

「先代女王陛下。それはミランダの冗談です」

「というよりも、アンタも俺とのエントレイン同調で肌を綺麗にするつ
もりだったのかよ。俺は美容魔導具か何かか？」

「おほほほッ。冗談よ。ジョーダン。可愛い獣人のお子様の冗談
に付き合っただけだよ？」

あぁッ！ 駄目です。先代女王、ミランダを子供扱いしてはッ！

「……………ばばあ〜」
「なあんですつてえっ!!……………『〜んと絶妙なタイミングで冗談は言うべきだよ? 先代女王陛下さま?』……………え、えええ。そおねえ? ……そう思うわあ。私も」

さらに大きくなった胸で、ご主人様の腕を胸の谷間で挟んで、青筋を立てている先代女王に見せつけるようにした後で、先代女王のその薄い胸を凝視し……………『フツ』……………鼻で笑うミランダ。

……………この娘は子供扱いを特に嫌うのです、可愛がるのは怒らないのですが。確か王都に帰ったメリーも、屋敷に来た初日に子供扱いし、嫌な精神的ダメージでお返しを喰らっていましたね。何だったでしょうか……………胸が大きいと感度が鈍くて捨てられるとか、胸に血が行き過ぎて頭の回転が遅いとか。三日程、何かある度に言われていましたね……………

「そ、それで? 早く説明してくれるかしら? クルカ殿」

「そりゃいいがよ。落ち着けて。椅子の肘掛けが悲鳴上げてるぞ?」

恐らくとても立派な樹でできている筈の、椅子の肘掛けが軋む様な悲鳴を上げています。先代女王は居住まいを正すと、心を落ち着かせたように再度聞いてこられました。

「……………コホン。いいでしょう、では順に説明して下さい。貴方達が此処に残った理由も含めてね。……………何よ、その顔は。私だって先代女王です。それぐらいの意図は読むわよ。馬鹿にしてるの?」

拗ねているフィーリアさんを除く、三人共が驚いた顔をしていたようで、私達は顔を見合わせ頷き合ってからご主人様に説明をお任

せしました。

「とりあえず聞き込みをし直した結果からいこうか。」

エルフ達の認識では女王の為に、お菓子とケーキの技術を人間から学ぶ為の機構石を造る人材、つまりそれなりの腕の機構師が必要だという話だった。何故、学ぶ為の機構石なんて意味の解らないモノが要るのか。ソレについては解らん。カナ達が聞いてくるだろう。だが分かった事もあった。

「……………これは絶対に女王が一人で考えたモノじゃない。あの女王は料理人ぐらい代えが居るだろうとふざけた事を言っていた。ならば他所から連れてくるように言うはずだ。代えがきくと思っていたんだからな。そこで、だ」

「そうですね。わざわざ学ばせる必要などなく、連れてくればいいのです。ですが、そうしなかった、できなかった理由があるはずなのです。」

「恐らくだが、先代女王。アンタ、自分の娘のお菓子取ってないか？」

「ッ！」

「……………図星、という顔をなさっていますね。この親子はアホですか？」

「で、アンタに取られない様に考えたのが、作る量を増やす。もしくは盗まれない様にする。この二つだと思っ。詳しくは聞いてみないと解らんがな。誰かに相談したんだろう。盗まれない様にしよう。盗まれない様にするにはどうすればいい？ お菓子やケーキに鍵をかける？ 無理だろう？」

「……………ッ！ 魔導冷蔵庫！」

「その通り。機構師に鍵付きの魔導冷蔵庫を作らせればいい。自分の専用の」

ところがそう簡単でもないのです。レイチエル曰く、ケーキやお菓子の種類によっては冷やして保存では味の落ちる物があるそうで

「味を落とさずに保存するには、菓子やケーキの種類ごとの適温を知っている職人が必要だ。それを再現する機構師も、な」

「それでたくさんのお菓子を、森の中のお屋敷で作ってるの？」

「そうだぞ。ミラ。しかも捨てるのもつたいないから、街に運んで売ってやがった。そこからすぐに足取りが掴めたよ」

「なんで先代女王や近衛騎士団はその話を知らなかったの？」

「機構師連中は、『人間の力を借りなければ作成出来ない』という事実を隠したかったらしい。街の女性達は、自分が菓子やケーキを食い漁ってるのを知られたくない。もしくは、自分の買える分を減らしたくないっていう心境から、黙ってたんだろうな。それも先代女王と近衛騎士団が、行方不明者が出たと発表するのを躊躇ったせいでもあるがな」

先代女王は気付いているようですが、簡単な話なのです。エルフという種族は自然な環境を好みます。故に食材も自然な物を好みますので、料理などの技術の発達が遅いのです。

しかし、女性がお菓子やケーキを好むのには、種族の違いなど関係ありません。ですのでエルフといえど女性がお菓子やケーキを好むのも、独占したがるのも、隠したがるのも仕方ないのです。お菓子の食べ過ぎで太った等と、周りに言われるのも困りますし……

今回の件は、お菓子の製造技術の発達を促している女王の行動と、それを根掘り葉掘り調べさせている先代女王の行動を比べると、女性からすれば女王を応援し、先代女王が止めさせようとしているのならば、妨害したいくらいのはずなのです。

「だけど、アンタは立場や今後の影響を考えて、意図を明確にさせなかった。そのせいで、女性の不信感を煽った。女王の指示した、お菓子の製造技術の発達をやめさせようとしているのではないか？
そう思うエルフも多かつたんじゃないか？」

「それで、近衛騎士団の調査では何も出てこなかったと？」

「まあ、あくまで予想だ。街の全員から話なんか聞けないしな。恥でもいいから機構師は行方不明！ 探さないと！ って言ってるや、誰かから探されてる事が伝わって、向こうから『安心して下さい。生きてます』って言ってきたはずだ」

そうなのです。先代女王は神樹精霊のに聞いているはずなのです。危なくないのか生きているのかと。その結果、危なくもなく、生きてもいる。でもどこににいるか解らないが答えなのですから。誰かが安否を知っているはずなのです。

「さて話を少し戻すが、じゃあなんで、女王はこんなめんどくさい方法を思いついたのかって話だが。さつきも言ったが相談された誰かの入れ知恵だろうな。恐らくお菓子を盗まれない様に手を講じると、アンタがその阻止に動く。それをさせなければ相談された誰かの株は上がる。お菓子の普及拡大と技術の発展にも手を貸す形になり、エルフの女性からの指示も上がる。さあ、そんな事を企みそうな相談役って誰だろうな？」

流石に私達にはその先はわからないのです。エルフの大臣や評議会議員の顔も名前も知らないのですから。そこで先代女王は俯いて考えを巡らせていましたが、思い当たったのか顔を上げました。

「評議会議員のベリドッグ・サーフェン……」

「誰だそいつは？ 野心家なのか？」

「いえ、表立ってそのような行動はしていませんが、前々からエメルローザは親離れすべきだと言いつけています。評議会の序列は四位。それなりの力を持っています。先日も閉じ込めたエメルローザに会いに来ていましたから」

「そういや、大臣なんかの姿を見た事ないが何処にいるんだ？」

「この国は評議会制ですから。城の隣にある評議会講堂にて、大臣たちを含む評議会議員二十名が国政を話しあい、決まった事に我々王族が許可を出す形なのです」

「評議員は人気投票、か」

「人気、ではありませんが行った行動や風評がモノを言うのは確かですね」

「女性全員の投票があれば、エルフの半分は味方になったも同然だな」

「ゴシユジンサマの肌を綺麗にする方法を広めたら、評議員になれるんじゃないかなあ？」

「ミランダっ！ それは言うてはいけません！ 敵ライバルが増えるのは困るじゃないですかっ！

「ミランダ殿、それをするとエルフの女性が、当主様に嫁入りしたいと言いつ出すんじゃないか？」

流石にそのあたりは嫌なのですね。フィーリアさんが復活しましたね。

「別にいいよ？ 私の分は減らさないし、獣人は私だけってゴシユジンサマ約束してくれたもの」

「なッ！ 当主殿ッ！ 本当なのですかッ!？」

「うん、まあ、そうね。約束したな」

「じゃ、じゃあっ！ 人間は私だけにッ……………もう既に三番目で

した……」

復活したはずのフィーリアさんは、また拗ねた様ですね。しかし自分が三番目だとちゃんと認識はしているようですね。脳筋な割には偉いですが、お子様は放っておきましょう。

「大丈夫よ。私の夫にならないのに、他のエルフだなんて私が認めないから」

「先代女王陛下さま？ 本気なの？」

「二百年は待つてあげるつて、言つてあるわ。ミランダちゃん」

「私の分は譲らないから、他の人の分から貰つてね？」

「ミランダ。お前の中で、俺の意思はどうなつてるんだ？」

全くです。私だつて譲りませんからねッ！

そういう事では無くてですね。話を進めて頂きましょうか。

「ご主人様。話が逸れています。戻して下さい」

「そうだな。一番大事な、此処に残つた理由も残つてるしな。フィリ！ シャキツとしろ！ 此処からはお前の力が要になるかもしれない。いい加減その目をやめろ」

「だつて……当主様は……ミランダ殿に、ばつかり……」

「お前達の事も考えてるから。それとも、一人だけ仲間はずれが良いか？」

「それは嫌あ……ぐすつ……」

仲間はずれから何を想像したのでしょうか？ 半分泣いていますね……

「ったく。ほら。こつちこい」

ご主人様はミランダが離れようとしなかった為に、二人で座っていたソファの右側にフィーリアさんを座るように促します。フィーリアさんは子供の様に、両手を広げて抱きつく様にご主人様に縋りつきました。

ご主人様は斜め後ろに立っている私に、すまなさそうな顔を向けてつも、フィーリアさんの腰を抱き寄せてあげています。私はその向けて下さる顔を見ただけで、ご主人様の意思を読み取り、自重する事を決めます。

甘えたいという気持ちはあります。ですが、ご主人様が私という存在を重宝してくださっている理由の一つに、求められている役割をこなす事にかけては私が一番である、という事実があるのです。これこそが私にとって、ご主人様のお側にずっといる為の秘訣なのです。

もちろん、他の誰にも教えたりはしません。

そんな私の顔を見て安心されたのか、ご主人様は私に軽く微笑まされてから、先代女王に向き直って続きを話し始めました。

第21話 侍従長、羨望する「3」（後書き）

前話の最後のキリシヤ文字表記の意味について質問がありましたので活動報告に記載しました。よろしければ一度お読みください。

第22話 先代女王は決意する「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第22話 先代女王は決意する「1」

私と娘は、穢れ無き存在としてソコに在る事を求められた。

例え、数百年の時を生きようと、変わる事のない神聖さを求められた。

二代目のハイエルフの王であった、夫の様に。

その事実が、自分をこんなにも無知で無能な存在にしてしまうなどと、想像もしていなかった……

「そういう事なのね。クル力殿」

「気付くだけ、アンタはまだ価値がある」

そう言ってくれるのは、彼の優しさからなのかしら。それとも本気なのかしら。どちらでも構わないけれど、そこに愛情が在ってくれると嬉しいわね。

「まだ確定じゃないが、そいつに野望があるのならこの国は蝕まれる。なけりゃ本物の臣下になるだろうな。女王にとっての、な」

優しく、しかし真剣な眼差しで彼は私に伝えようとしている。傍から見ればなんて滑稽な事かしら。ハイエルフの先代女王たる私の前で、二人の女性の腰を抱えながら対等に話してくる。他の者だったら、きっと私は許さなかったわ。

でも理解^{わか}る。彼には悪意がない。私を諭^{なぐさ}そうとしている。脇に抱えた女性二人を愛し、慈しみ、安心させながらも、私も救おうとしている。

失敗したわ。依頼で出会うにはもつたない男ヒトだった。もつと違
う形でこの男ヒトに出会いたかった。

まだよ。私にとって、先代女王としてではなく、一人の女と
しての矜持ヒトぐらいはあるもの。

この男ヒトに私がどれほど高貴で、得難く、価値のある女なのを見
せて差し上げましょう。

「それで？ この『闇の匣』を今すぐ開けて、娘の話ヒトを聞かせると
？」

私は居住まいを正し、毅然とした態度を取り戻してこの男ヒトに話し
かける。

「できれば、そうしたかったんだが……」

「ええ、させない。それにできないわ。『闇の匣』は初めに決めた
日数を変える事はできないの。それに。貴方達への依頼は行方不明
のエルフを取り戻す事。国の内政や、子供の教育まで頼めないわ」

この男ヒトは本当に優しい。『やれやれ、ばれていたのか』と言わん
ばかりに肩を竦め、その仕草に引つ張られた二人の女性に『ああ、
悪い』と苦笑を向けている。

本当に、本当に羨ましい。何故、あそこに居るのが私ではないの
だろう。

そこにこの城のいつものメイドが一人入ってくる。

「メルフェイユ様。あの、その。また……」

「ああ、良いのよ。中庭に案内しておいて。私もすぐに行くわ」

「わ、解りましたっ！」

今回は文句を言われずに済むのだろう。嬉しそうに戻って行くメイドを見て、こんなところでも迷惑をかけていた、という事実には初めて気付いたの。

「クルカ殿、カナリーさん達が戻ってくるまで、できる事もないでしょう？ 手伝って欲しい事があるの。『闇の匣』も開くのはあと数時間後なのだし、構わないでしょう？」

そして左右の女性達にそれぞれ顔を向け、反論がない事を確認し最後に後ろに控える侍従長 ルシィちゃん、でしたね に目配せをすると、ルシィちゃんが柔らかな仕草で手元のお茶を片付け始めたわ。

ああ。この男キトにとっての一番は、このルシィちゃんね？ 皆さんを平等に扱っているように見せていても、隠しきれていないわよ？ それとも、この男キト自身も気づいていないのかしら？

「構わないが、何をするんだ？」

「あら、先程、ご自分でも言っていたじゃない？ フィーリアさんの力が必要になるかも知れない、と」

「結局、そういう事は手を貸す羽目になるのか……」

「当主様っ！ 私は当主様の為ならば、どんな事でも全力を尽くしますっ！」

「じゃあ、フィーちゃんは他の男に抱かれるって言われてもそうするの？」

「うっ！ そ、それはしない……」

「騎士に二言はないんじゃないかなかったけ？ ゴシュジンサマ？」

「うううううううっ……！」

「ほら、ミラも苛めてやるな。そういうのは屋敷でやれ。今は先代

女王の話が先だろ？」

本当に楽しそう。

恋人と言つよりは、お父さんと娘二人に見えなくもないのが、笑いを誘うわね。

「とりあえず、行けば分かるけれど先程、話に出たのベリドッグ・サーフェンに会えるわよ？」

「おいおい。そいつとやらせる気か？」

いつも通りなら腰巾着がいるはずだけど……今日はどうかしらね？

「騎士を連れていけば、騎士の相手かもしれないわね」

「フィーちゃん、頑張つてね。騎士とヤルんだって」

「と、当主様っ!? ほ、本気で私に他の男とやれとッ!？」

「アホか……シャキツとしろ! フィリ! お前は何だ! 言ってみろ!」

「ひゃいっ! 私は、当主様の剣です! あ、あと愛人で……恋人で……メイドで……奴隷です……」

「最後の方はココで言う事じゃないぞ……とにかく! 今はお前は俺の剣としての使命を果たせ!」

「はいっ!」

「おお〜! 『パチパチパチパチ』」

……煽っていたミランダちゃんが手を叩いているわ……この娘が一番厄介なんじゃないかしら?

そしてフィーリアちゃんを力強く引き寄せ、同調エントレインを済ませるこの男の行動は、主としては及第点だと思わせる威厳があふれていたわ。

隣のミランダちゃんに、無理矢理唇を奪われるまでは、ね。

私は魔法で浮かせて運んできた『闇の匣』を中庭の端の方に置くと、そこに待っていたベリドッグ・サーフェンが気付いて声をかけてくる。傍には騎士が一人控えていて、顔まで隠れるプレートメイルのせいで顔は分からないけれど、いつもの無愛想な騎士だろうと予測がつく。

「メルフェイユ様。御機嫌麗しく……」堅苦しい挨拶はいらないわ、謁見の間でもないのだから……そうですか、では。今日はもう神樹にはお籠りにならないのですね？ 数日前から、女王陛下にお会いしたとお願ひしているのにも関わらず、何故、お目通り出来ないのですか？」

「あの娘ねえ……今はそこに居るわよ？」

そう言つて、私が『闇の匣』を指さすとサーフェン卿はよく分からない、と言つた顔をしながら訪ねてくる。

「その。何ですか？ この黒い物体は？」

「冗談よ？ 気にしないで？」

サーフェン卿は『闇の匣』を知らない。その事実だけで十分だわ。

「で、エメルローザに何の用かしら？ あの娘は今、女王としての資質を養っているの。できれば邪魔したくないのだけど？」

できるだけ穏やかに。しかし、強く言い放つ。サーフェン卿は最悪の場合、殺さねばならない相手だ。

「それはいかに先代女王陛下とはいええ、現在の女王であらせられるエメルローザ様の許可がないと言えませんか」

「構わないわ。知っているもの」

「は？」

そう、そういう間の抜けた顔が貴方には御似合いよ？ サーフェン卿。

「お菓子とケーキを大量に作らせて、技術の向上を売りにしているんですって？」

「っ！」

「ええ、構わないわよ？ それを街中で売ったり、森の中の廃屋でコソコソと機構師を連れ込んだりしているのも知っていますから」

「……………それは、エメルローザ様からお聞きに？」

「あら？ 何故そう思うの？ 私はいつも神樹に籠っているのに」「そうですね、では神樹にお聞きになられたのですか」

本当に、くえない方ね。サーフェン卿は。神樹にはそれほど細かな答えは出せないと知っていて、まだしらを切るのね。

「どちらにしろ構わないわ。おかげで、同胞の女性機構師が二名行方知れずになったわ。恐らく他の国に連れ去られたでしょう」

「馬鹿な！ その様な事になる筈が無い！」

あら、この方が予想外だったみたいね。という事はサーフェン卿は誘拐に参与してはいないのかしら。

「事実よ。現地には昨日からグラフィックが向かったわ」

「馬鹿な……」

っ！ ヴォルフガング！ どういう事だ！」

サーフェン卿は傍に控えていた騎士に向き直り、問い詰めようとしている。

ヴォルフガング？ いつもの腰巾着はケイルだかカールだか言う無愛想な騎士では無かったかしら？

などと記憶を思い出そうと考え始めた時、私はよく分からない浮遊感が身体を包み込んだのを感じて、そこで初めて自分の今の状態を認識した。

宙に浮いていた。サーフェン卿と抱き合う形で。

あら？ 何故私はこんなところに？

私はサーフェン卿と抱き合わせになって誰かに抱えられており、目の前のサーフェン卿の顔に対し、嫌悪感が募る。きつと、今の私は苦虫を百匹ほど噛み潰したような、顔をしているわね。

「申し訳ありません。先代女王陛下、緊急でしたので我慢して下さい。すぐに下ろします」

そう言った声は先程まで一緒だった、ルシイちゃんの声だったわ。

「すまないな、先代女王。一瞬だったんでな、この男性と抱き合わせになっちまったようだな。しかし、よくやった。ルシイ、フィリ」

中庭の中央を見ると、透き通る水晶のような大剣をヴォルフガングと呼ばれた騎士に向けたフィーリアちゃんの姿がありました。

「な、何をするかっ！ この人間風情が！ 私を誰だと思っている！ 私は評議会序列四位のベリドッグ・サーフェンだぞ！」
「おじちゃん、偉い人なのかもしれないけど。助けなかったら、あのでっかい騎士さんに殺されてたよ？」

ミランダちゃん、おじちゃんはちよつと……

「少なくともサーフェン卿の思惑は人気取りまでだった、という事かしら？」

「その男性が、トカゲのしっぽ切りでなければ、な」

「ど、どういう事だ！ おい。人間、説明しろ！ ヴォルフガング！ 貴様！ 拾ってやった恩を忘れて何をしている！」

既に、フィーリアちゃんと剣を交え始めている騎士は、何を言われようと全く声を出す事もしないわ。あれは本当に騎士なのかしら？ 何か異質な感じがするのだけど……

「ミラ。どう思う？」

「たぶんだけど……剣が得意な暗殺者じゃないかなあ……」

「フィーリ！ らしいぞ。気をつける！」

「フィーちゃん、暗器に気をつけて」

あまり緊張感のない声援ね？ それだけフィーリアちゃんを信頼しているのかしら。この間はルシィちゃんを止める事も、グラッフにも敵わなかったと聞いているけれど……

「ヴォルフガング殿と申すのか？ せめて名乗りを上げ、正々堂々といきたいところではあるが、自分の主を抹殺しようなどという輩には、意味のない事かもしれんなッ！」

黙して何も語らず、ただひたすら剣を振る騎士とは対称に、声をかけながら全てを避けているフィーリアちゃん。そこにクル力殿からの指示が飛ぶ。

「フィリ、時間をかけるな！ 全力で叩き潰せ！ 万が一、相手が死んでもカナとレチエが何か持ち帰る。時間優先だ！」

お互いに牽制を繰り返していたような流れだった所に、クル力殿が声をかけると、それを聞いたフィーリアちゃんの姿勢が変わったわ。そして何故か服の色が変わっているように見えるのだけ……あれは全力で突っ込む獣と同じね。足に力が漲っているのが感じられるわ。しかも持っていた大剣の刃が、消えてる？ いえ。細くなつて真ん中にも残っているけど……先程までに比べて、見た目が頼りない剣になっちゃったわね。

「悪いな。当様のご命令だ。ここからは全力でいかせてもらう。死にたくなければ……」

全力で防御する事をお勧めするッ！！」

瞬間、フィーリアちゃんの動きが加速する。

正面から右後方へ一瞬で通り抜け
左腕全体の甲冑が破壊され。

右後方から左横へ一足飛びに飛び抜け
背中プレートが剥がされ。

左横から前面へ独楽の様に回り込み
右手の剣と籠手が床に落ち。

最後に正面から真つ二つに切り裂くように切り上げる。

前を覆っていた厚みのあるプレートが真つ二つに割れ、兜が後方

に転がり落ちた後、その場に崩れ落ちた騎士の目には、光はみえなかった。

フィーリアちゃんの四連の動作が一つにしか見えない程、早い動きに何もできるものはおらず、ただ見惚れるだけ。

後に残るのは、腰から下の甲冑のみを残した騎士だけだったわ。

「殺したのか？」

「いえ。刃を小さくし、できるだけ打撃にしましたので。恐らく、生きてはいるとは思いますが……」

私には死んでいる様にしか見えないわね。横に居るサーフェン卿は目を見開いたまま固まってるし……

「ミラ！」

「はあ〜い。神経麻痺でいいかな？」

「少なくとも半日は動けなくしておいてくれ。後、自害出来そうなものは回収」

「了解」

その手際の良さに少しあきれながら、言葉をかける。

「貴方達、ホントに手馴れているわね？」

「そうでもないさ」

「当主様、そちらの方はいいのですか？」

「この男性には、聞かなきゃいけない事があるからな。ルシィ。お茶の準備」

「既にこちらに」

ルシィちゃん……何時の間に……優秀な子ね〜私に出来ないかし

ら？

「では、あちらの席でお話の続きをしましょうか？ サーフエン卿」
「？」

「こら、フィーリアちゃん。真面目なトコなのよっ！ 頭を撫でてもらうのは後で部屋でもできるでしょっ。

「クルカ殿は、作業をしているミランダちゃんに声をかけると、一緒に『闇の匣』の傍のテーブルセットに移動し、席に着く。」

サーフェン卿は放心し、床に膝をついてしまっている。

「初めて見る貴方が驚くのも無理はないけど、今は同胞の事が先よ？」

「そうだな、あ、ルシィ。レチエの作ったお菓子あるか？」

「はい、こちらに」

「もう！ クルカ殿！」

「先代女王陛下は如何なさいますか？」

「……もらいます……」

「な、何なのだあれは！ あの娘は化け物か！？」

「人間よ。こちらのクルカ殿の専属メイドだって。愛人も兼ねてるらしいわ」

「な、何が目的だ！ この国を潰すつもりか！？」

「それはアンタだろ？ 評議会議員序列第四位のサーフェン卿？」

「私が何故、この国を潰さねばならんだ！ 言いがかりも程々にしろ！ この人間風情が！ 大体貴様らは何者だ？ お前等の方が怪しいではないか！」

「 煩いわね。少し黙りなさい」

私は威厳を見せつける様に、魔力の循環を高め、雰囲気だけでサーフェン卿を圧迫するように力を言葉と自身の内側に込める。

「ひっ！」

「サーフェン卿。貴方がエメルローザをそそのかし、色々やっているのは分かっていているの。その結果、二名の機構師が居なくなつたわ。奴隷にでもされて、他国で機構師として働かされていたら、どう責任を取るつもり？ 万が一、犯され性奴隷としても扱われていたら、貴方の家系の女全員に同じ事をさせるからそのつもりでいなさい」

「な、何をおっしゃるのだ、先代女王陛下！ そんな事にはなつていない！ 全員そろつて……………」

『揃つていないから、貴方にこの話をしているの。そんな事も分らないの？』……………」

「そうか、その人間の入れ知恵ですな？ 騙されているのです。その様な事にはなつていない。確認すれば分かります！」

「グラツフが確認してくれたわ。さつきも言つただけけれど、忘れたの？」

「きつと、何か用事で……………」

『いい加減になさい！！』……………」

「ひっ！」

本当に頭の回転も、顔も悪い男ね……………」

今の状況が解らないのかしら？

「ゴシユジンサマ〜これ見て〜」

「お、ミラ。いいモノ見つけたな。偉いぞ」

そう言つて、ミランダちゃんの頭と耳を撫でながら、受け取つた物を私に渡すクルカ殿。これは……………」

「サーフェン卿。どうやらあのヴォルフガングという男はギャンザ皇国の軍人の様ですね。この紋章は見た事があります」

「馬鹿な……………」

「あいつは……………」

「元冒険者で……………」

「エルフの少女と共に行き倒れかけている所を拾つたのだ。エルフの少女もずいぶん助けられたと言つていた……………」」

「その少女すら利用されたんだろ」

「だよ。この人はいい人だ〜って、思わせるにはもってこいだよね？」

「同胞を助け、その為に行き倒れる戦士。しかも腕は立つ。なかなか乙女の喜びそうなお話だな。その程度ではラナル王国では騎士団にも入れないが」

「フイリ、こいつは騎士団に入った訳じゃない。ただのこの男性の護衛だ」

「そうか、ならよかったですな、サーフェン卿。このような暗殺者まがいの、しかも他国の軍人を招き入れたうえに、自分の騎士として任命してしまっていたら、恥では済みませんからな」

きつと任命してしまっているのね〜

それにしても、みんな容赦ないわね。傷の突き方が塩を塗り込むようだわ。サーフェン卿はさつきから小刻みに肩が震えてるじゃない。でも、そろそろなんらかの情報を引き出さないといけないわね。『闇の匣』の解放までもう時間もないし、さつさと話を進めましよう。

「サーフェン卿。同胞を罠に嵌めた罪は重いわよ？ 覚悟しておきなさい？」

「ぐっ。……何故だ、順調だったはずなのに……あの親離れができない女王を親離れさせる機会だったのに……」

「それでも、自分の次回の評議員選出の為にもしてたんでしょ。自業自得よ？」

「その何が悪い！ この国を変えるには上に上がるしかないのだ！ 四位では足りなかったのだ。この国の危機管理はまだ甘い！ それでは同胞を守れぬのだ！ 女王陛下には親離れして頂かなくてはならなかったのだ！」

これは難しいところね……今回の件が終わった後は、グラフと
エメルローザの乳母を呼び戻して、教育を任せましょうか……

第23話 先代女王は決意する「2」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第23話 先代女王は決意する「2」

私は伝えなければいけない。

世界はこんなにも醜くて、それ故に美しいモノが求められる。

貴女はそんな存在なのだ。

私はもう、醜い感情を捨てる事も、隠す事もやめると決めてしまつたから。

「貴方がハイエルフを利用しようとした罪は重いわ……………」

「どんな理由があろうとも、ね。サーフェン卿」

「くっ」

立場は理解している様ね。普段は教師みたいにお小言が煩いのに、今は静かでいいわね。罪の意識はあったという事のような。膝をついて肩を震わせている貴方を、エメルローザはどんな風に思っているのかしら？

「でも何故、機構師を連れだしたの？ 料理人でもよかつたのではなくて？ 保存できなくても、技術を習得する事はできたはずよ？」

「………… 人間の調理技術自体を嫌がる料理人も多い…………」

だからこそ、保存手段と製造工程を記録した映像が必要だった。その為の機構師だったのだ…………」

なるほどね、水晶記録を使ったのね。たしかに水晶記録で残しておけば、調理の瞬間を立体的に記憶できるわね。でも記録に使われる機構石が、人よりも大きいから手間と時間がかかって、あまり使われないのよね。盲点だったわ。

「クル力殿はあまり驚いていない様ね。水晶記録を使う事は気付いていたの？」

「ん、まあな。それぐらい考えるかもしれないな、とは思っていたさ。しかしそうなると、これはいい方に向かうかも知れないな」

「どういう事だ？ 当主様」

「カナを行かせて正解だったって事さ。カナがうまく映像を手に入れて解析していたら、下手をすれば連れ出した者の顔まで映ってるかもな」

そうだわ。連れ出された映像があれば、たとえ他国に連れて行かれようと国に対し引き渡しも請求できるだろうし、お金で解決できる問題にもできる。

「サーフェン卿、よかったわね。行方不明の同胞を、取り戻せる可能性が出てきたわ。貴方の家族には罰が必要なくなるかもね」

「……そうか……しかし、何故だ……何故この様な事に……」

貴方の見通しが甘いせいではないの？ と言ってやりたいけど、自重するわ。

この国の事を本気で考えていたのは事実でしょうし、エメルローザが親離れできないといけないのも事実だものね。

「一ついいかな、サーフェン卿」

「なんだ、人間」

「この為に遠方から首長飛竜ワイバーンと鷲頭獅子グリフォンに食材等を運ばせたよな？ 盗賊に」

「………何処から聞いたか知らんがその通りだ」

「単純に金銭だけって事も考えたんだが、どうもじっくりこないんだ。盗賊にどんな餌をちらつかせた？」

え？ どういう事？ 盗賊に協力させていたというの？

「私は、エメルローザ様の希望を叶えて、女性達の信任を集めた上で評議会のトップに立ち、この国に盗賊ギルドを作ろうとした」

っ！ サーフェン卿。貴方は何を考え………いえ、そうですね。貴方の財務管理担当評議員としての仕事がそうさせたのね。

「各国に奴隷として囚われた、同胞の奪還が狙いね？ 多少の金銭で解決できない国からは力づくで奪い返そうというのね」

「その通りだ。無理矢理、連れ去られた者たちだ。こちらが金を払ってやる義理は、無い筈だ！」

毎回、同胞の回収にかかる金銭の額が、徐々に大きくなるのに危機感を覚えたのね。要求はどんどん上がるのではないか、と考えたのね。

「だが、そんな事をすれば戦争になるのではないか？」

「だから盗賊なんだよね？ 堂々と奪うんじゃなくて、隠れて盗むんだよね？ フィーちゃん、もうちよっと勉強しようね？」

「う、すまない。ミランダ殿」

「それと防衛も兼ねて、だろうな。蛇の道は蛇。連れ去られ難い環境作りには、盗賊スキルが必須だ」

考える事としては悪くないのだけど、高貴を謳うハイエルフの女王に、盗賊ギルドの管理をさせる訳にもいかないわよね。

ん？

……なる程、そういう風に考えたのね。

「サーフェン卿、貴方がこの国の盗賊ギルドのトップに立つ気だったのね。最悪の場合には、全責任を被るつもりで」

「……………そうだ。ハイエルフたる、お二方にはさせられない。ならば誰かが泥を被る覚悟が必要だった。ならば、私がその役でいいと思ったのだ。その為にはエメルローザ様には、もっと民の支持を集めて頂かなくてはいけなかった」

「何かあった時には、民に対して断罪する者とされる者の立場を明確にする為、ということね。確かにエメルローザには、もう少し女王としての覚悟と民からの支持が必要なようね」

「お菓子とケーキ、なんて手段は子供じみているが、悪くない発想だと思っぞ。だが、その為に盗賊を招き入れたのは失敗だな。逆に被害を出す結果になった」

「それは盗賊ギルドの性質上、横との繋がりを必要とするのだから仕方のない事ではなかったのか？ 当主様？」

「そうなんだけどね。ちょっと選ぶギルドを間違っただというか…

…ねえ？ ゴシユジンサマ」

「そうだな、今後のエルフとの深いつながりを餌に、盗賊ギルドを作る基礎が欲しかったんだろうが……………選んだ相手がホントに悪かった。

たぶん、このサーフェン卿はラナルラ王国が盗賊を国営で存続させてる事も知らなかったんだろ？」

「そだね。知ってたら、ラナルラ王国に相談する事で、解決できたんだもんね」

そう、先々代の 空の詠み姫 の時から盗賊ギルド連盟のトップには 空の詠み姫 が後押しをしている事を私は知っている。

「ば、かな？ それでは、正式にラナルラ王国に頼めば良かったの

ではないか」

「それじゃダメなのよ。盗賊ギルドを運営している事を公にすると、他の国がラナルラ王国に攻め入る口実を与えてしまう。でもあの国には、六つの血統を守る為に暗部が必要だったの。サーフェン卿は知らないだろうけど、他の国で捕えられたエルフが自力で戻ってこれた例は、一度もないのよ？」

恐らく、彼にはこれで伝わるだろう。

「そんなはずは無い！ 今でも年に二、三人は満身創痍ではあるが帰って……」

っ！」

私の表情と言葉の意味に気付いたようね。そう、空の詠み姫の力を借りて、同胞の奪還を力ずくで行った事も一度や二度ではないの。

この国でそれを知っているのは、私だけだった、今までは。

「メルフェイユ様、貴女は、まさか……」

そうだったのですか。だから、まだ相応しいとは言えないエメルロ―ザ様に座をお譲りになられ、神樹に籠られてばかりになられたのですか」

そんな可哀想な物を見る目で見ないで。私は望んでこうしているのだから。

「何故、何故言ってお下さらなかった！ この街を、民を守る為だと！ 貴女は高貴なままではないですか！ 私は、私は……間違っていたっ……」

それこそ、このまま死んでしまうのではないかと思う程、サーフエン卿は弱り果てている様に見えたわ。でもそう言ってもらえるだけで、私は救われるのよ？ 貴方には伝える訳にはいかないけれど。

「すまないが、俺達には何を言ってるのか、さっぱりわからないんだけど、教えてもらっていいか？」

ふふ、そうよね、クルカ殿が生まれた時には私は女王じゃなかったのだから、知っているはずも、解るはずもないわよね。

「クルカ殿、ハイエルフの女王は高貴であれと育てられるの。その高潔さを失っては女王ではいられないだから、先代の 空の詠み姫 同胞の尊厳 に初めてお仕事を依頼した時に私は女王である事を辞めたのよ」

そう、自ら辞めたのだ。夫がそうしたように。暗部に手を染めた者が上にはいけない。エルフ達はみな、高貴であるが故にハイエルフに従うのだから。

「たったそれだけで辞めなければいけない程、『ハイエルフの王』という冠は重いのか……」

いや、エルフらしいと言えらしいのかもしれない。私とてソルフィツシュ家の 星の召き手 を目指した時には、それほどの重みを感じていたはずだ」

あら、フィーリアちゃんはソルフィツシュ家なのね？ ならクルカ殿の第一夫人は彼女になるのかしら？

「誇り、か。俺には解らんよ。才能がないからな。泥水を啜る者の気持ちしか理解できねえ。」

だけどな……

先代女王、アンタは高貴だよ。高貴さなど何の役には立たないと吐き捨てる俺達でさえ。泥水を啜る俺達でさえ、目を奪われる程に美しい覚悟だ」

………。クルカ殿は、もう少し考えて話した方がいいわね。その言葉が嬉しかったから、絶対に教えてあげないけれど。ずっと黙っていたルシイちゃんが怒ってるわよ？

そう思いながら、クルカ殿の腕の中に手を伸ばしかけた、その時

「母上っ！」

もうそんな時間だったかしら？ このタイミングで『闇の匣』が開いちゃうなんて、本当に無粋ね。もう少しで、クルカ殿の腕の中に飛び込めたのに。

「ゴシユジンサマ。もうちょっと深く腰掛けて？」

「ん？ 構わないが……？」

クルカ殿の膝の上に座り直し、にっこりと笑顔を向けるミランダちゃんに、吊り上がった目で私を睨むルシイちゃん。フィーリアちゃんもサーフェン卿をじっと見つめたままね。

残念ね、次の機会を待ちましようか。

「母上っ！ どういう事ですか！ 先程の話は一体どういう事なのですか？」

「エメルローザ様！？ どちらにおられたのです？」

「黙れ、サーフェン卿、わらわを謀ったぬしに話す事は無い！」

頭に血が上っている様だわ。

クルカ殿に気付いてもらう為とはいえ、少し話し過ぎたかしら。それにしてもこの娘は……お話にもならないとはこの事ね。

「エメルローザ、落ち着きなさい。貴女はそれでも女王なの？」

「そのような事はどうでもよいのです！ 説明……」【ゴンッ！】

黙れ。馬鹿女王』……何をするのじゃあ！ ……うう……」

「それはこっちの台詞だ。お前まさか

……閉じ込められてる間にお前がレイチエルにした事が、チャラになつてるなんて思つてないよな？」

「そ、それはじゃな、ほら。もう無事に元気なのじゃし……」

「ミラ。好きにシて良いぞ」

「うんっ！」

元気良く返事をする、エメルローザのこめかみを硬く握った拳骨でグリグリと圧迫するミランダちゃん。

「んぎやあああああ！ いたい、イタイ、痛いのじゃああああああああ！」

あんな容赦ないわね。ミランダちゃん。でも跡は残さないであげてね？

そんな風に考えている私に、ウィンクするミランダちゃん。わかつてる、ということかしら？

「サーフェン卿、先程の黒い物体は『闇の匣』と言ってエメルローザを閉じ込めていたのよ。中からは全て見えていたはずだから、全部聞いてたわよ」

「そうですか。別にもう構いません。

私のやっていた事は全て独りよがりでしかなかった。今は機構

師が早く見つかる事を祈りましょう。私には、もう何もできる事は無い」

「それでもないのだけれど。ま、今は大人しくしていてくれる方が助かるわ。」

「ミランダちゃん、もう許してあげて？ 流石に跡が残ってしまいわ」

「ん〜。ゴシユジンサマ、我慢した方がいい？」

「ミランダに任せる。怒ってるのはみんな同じだろうからな」

「もう、それじゃ止めてくれないじゃない。クルカ殿。」

「……そうね、じゃ、ミランダちゃんの為に、私が一つだけ言う事を聞いわ。無茶でない限り、ね」

「うん、取引成立っ！ 離してあげる〜」

「おのれ〜 覚えておれよ、この子猫ごときがあ〜！」

この子は本当に私の子なのかしら……私はこんなにアホだった事
は無いと思うのだけれど……もしかしてあの人は元夫こうだったのかしら。

「止めなさい、エメルローザ。貴女のお仕置きはまだ済んでいません。乳母を呼びます。いいですね」

「っ！ は、母上、謝る、謝るのじゃ。ちゃんと謝るし反省もする！」

だから、婆やだけは堪忍して欲しいのじゃー！」

「もう決めました。ついでにサーフェン卿」

「はっはい！ 何でしょうか？」

「貴方も評議会議員を辞めて頂いて、乳母とグラフと一緒にこの子の教育係になって頂きます。民の為にならない政策や、この子の我が儘は全て止めなさい」

「いえ、しかし私は……」

「サーフェン卿。名誉挽回のチャンスが貰える、という事ではないのか？ 我々が言うべき事ではないのは理解しているが、受けておくべきだと私は思うぞ？」

「……………解りました。お受け致します」

フィーリアちゃん、いいフォローだね。こういう人って頭が固くって、自分が責任を取って首をくくります。とか言い出しかねないんだもの……

「よろしくね。近々、私はこの城から出るのわ。二百年ぐらいで戻ってくる予定よ？ 戻ってくるまで、ちゃんとエメルローザを躡けておいてね。」

私は母親失格だったみたいだから……………」

「そ、そのような事はありません！ 私のお菓子を盗み、嫌味ばかりの母上でも、私の大切な母上です！ 失格だなどと例え思っても、誰にも言わせません！」

「うふふふ。うふふつ。うふふふつ。うふふふふつ。うふふふつ。」

エメルローザ？ 貴女がその短絡的な思考で、お馬鹿な事をしでかすたびに私は皆にそう思われるの。言わせないというのなら！ もっとしっかりなさい！」

「ルイ姉もびつくりの般若さん、背負ってるね。三面六臂だよ？」

「ミランダ、あれは般若じゃなくて、阿修羅って言うんだぞ」

「手に持ってる武器はそれぞれ、とても痛そうだな」

「わ、私はあそこまで怖くありませんよ。ご主人様、そうですよねっ？」

「え、ああ、うん。そうだ……………ね。たぶん。」

「はつきり、あんなのじゃないと言って下さいー！」

周りで何か言ってる気がするけど、私には聞こえないわ。
ええ、聞こえませんがとも。

「し、しかし。メルフェイユ様、それでは神樹の巫女が……」
「以前は私が兼任していたのよ？ エメルローザにやらせなさい。
いい精神修業になるわ」

後はサーフェン卿を利用して、エメルローザにアホな事をさせた
元凶と、行方不明の機構師の事なのだけ……

「ギヤンザ皇国が絡んでるのは、間違いないのかしら？」

「分からん。だがあそこにいるエルフ全員に、一度里帰りさせてみ
たらどうだ？ 軍部が動いてはつきりするかもしれないぞ？」

「そうね。少し考えるわ」

…… エメルローザの巫女兼任式典でも催して、一度呼び寄せましょ
うか。

「まあ、盗賊ギルドの方に入り込んだヤツは任せとけ。近々捕まる
筈だ」

「そうになると、後は二人の機構師ね……」

「それも、カナとレチエの情報待ちだ」

「私が倒した、ヴォルフガングとやらからは、何も聞かぬのか？」

「それは騎士団に任せましょう。拷問でも何でもするでしょう」

今のままでは、あまりする事がないのも事実ね。ヴォルフガング
というこの男も、恐らくは相当な手練だったはず。近衛騎士団にさ
せていれば、本来はもっと時間がかかる相手なのよね……強力な手
札がある^トと楽ねえ……

「い、いきなり拷問ですか。エルフとは過激なのだな」

「フィーちゃん、あの男がゴシユジンサマを狙ってる、黒幕が居るって知ってたらどうする？」

「……拷問して吐かせた上で、八つ裂きだな。」

「なんだ。当たり前のことではないか。起きたら、大人しく吐く事だけは進めておいてやろうか」

ミランダちゃんとフィーリアちゃんの会話を他所に、私達は三人は顔を寄せて話を続ける。

「フィーリアさん、かなり染まっていますね。ご主人様。一体どこまで調教したんです？」

「嫌な言い方するな、ルシィ。俺は大して何もしてない。元々の素質か、きつと縋るモノが欲しかったんだろ？」

「ご主人様がお認めになったのなら、文句は言いませんが今後が心配です。ソルフィツシュ家の方は大丈夫ですか？ 家に戻る事もあるんですよ？」

「ああそれは確かに……変わり果てたフィリを見たら……」

「そんなに変わったの？ 彼女」

「先代女王陛下はご存じないでしょうが、屋敷に来た当初はグラッフ様以上の脳筋でした」

「今もところどころ、そう見えるけど……？」

「もっと酷かったのさ。今は忠犬か忠臣かってくらいだけだな」

「どちらにしろ、やる事は変わりませんし、今は少しゆっくり致しますしょう。ご主人様、お茶のお代わりをどうぞ」

そう言いつつ、優雅な仕草でお茶を入れるルシィちゃんの姿に癒されながら、お茶とお菓子を頂きました。

もちろん、エメルローザの分はありませんので泣いていましたが、私の分は譲りませんでしたよ？ 何か問題がありますか？ 無いです。ね。ではこの貴重な時間を堪能しましょうか。

第24話 先代女王は決意する「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第24話 先代女王は決意する「3」

運命。そんなものを信じた事は無かったのだけど。

幸運や不幸は訪れるから信じていても、『これが運命なのね』なんて感じた事は無かったけれど。

これは運命なのかもしれないと、長い長い人生の中で初めて思ったわ。

これからは、貴女が皆を守るのよ？

愛しい愛しい我が娘。

「何故、お隠しになり、話して下さらなかつたのですか。それ程までに、母上にとってわらわは頼りないのですか……」

あれから、カナリーちゃんとレイチエルちゃんがグラフィック達と共に戻ってきたのは、翌日の朝になってからだったわ。

私とエメルローザは今、二人で神樹の中にある泉で沐浴を行っています。

「母上、答えて下さい」

「確かに、頼りないわね」

沐浴用の絹の入浴衣が水に濡れ、肌に張り付く。

私は水面に映る、自分とエメルローザを交互に見つめる。

私もエメルローザも大して体型は変わらない。

あまり豊かとは言えない胸も、エルフ特有の細い手足も。

ハイエルフの証たるこの銀髪も。

嫌というほどそっくりだった。

「貴女は、もう少し落ち着いた方がいいわね。嫁の貰い手がなくなるわよ？」

「あと百年は独り身で過ごしますので構いません」

「はあ。貴女の結婚より、私の再婚の方が先になりそうね」

「っ！ 本気ですか！ 誰と再婚する気なのですか！？」

「もう、怒鳴るのはやめて。冗談よ」

そう、今はまだ冗談よ。裏に手を染めても闇に染まるわけにはいかないわ。

それを見極めるまでは、冗談のままね。

「それよりも、沐浴に集中なさい。神樹から得られる些細な情報から、民の気持ちを知るの。貴女はできなければいけない事よ？」

「聞こえております。民の不安も、安心からくる吐息も。母上よりも聞こえているかも知れませんよ」

「エメルローザ？」

「私にはわかります。民の心と神樹の心のバランスが。」

森の南側の獣が増えすぎている様です。騎士団に行かせ、五十匹ほど狩らせましょう。多く狩り過ぎないように注意は必要な様ですが」

……流石はハイエルフ同士から生まれた娘ね。この調整はこの娘の方が確実だわ。

泉から神樹の意識を汲み取るのは、巫女でもなかなか出来ないのだけだね。

この泉は神樹の中にある空洞に神樹の木の葉に溜まる水滴や、雨が集まってできたものだ。神樹の魔力がこの場に充満しているのが感じられる。

泉はかなり大きく、二十人の巫女達が一緒に来ても問題ないほどだ。

この空間自体は、小型の転移門しか出入口がない。無理やり入るというのであれば、上空から枝をかき分けて入ってくれば、入れない事は無いのかもしれないけれど。

「貴女はこの場では変わるわよね……普段から、そういう態度と話し方しておけば誰も文句も言わないのにね」

「その様な堅苦しい生き方は、息が詰まります。それでは精神が保てません」

そういうトコロは私に似ているのね。

あら？ エメルローザの表情が曇っているわね？ 何を考えているのかしら。

「……母上。ずっと聞きたかったのですが、聞けずに黙っていた事が……」

「何かしら？」

「母上は父上と愛し合われて、結婚された訳では無いのでしょうか？」

「……そうね。初めはただの憧れだったわ。」

憧れのハイエルフに自分が成れる。

憧れのハイエルフの皇子と一緒になれる。

……そんな夢物語の様な世界に、飛び込んだばかりの頃の私はその辛さも責任の重さも、何も考えていなかったわ」

そう。数いるエルフの中から選ばれ、ハイエルフとなった私は夢のような世界に浮かれていた。

憧れの銀髪を手に入れ、姉妹や友人達の向ける羨望の眼差しが心地良かった。

あの人に嫁ぎ、エメルローザが産まれた。そして、あの人を王を

降りた日まで、私はずっと夢を見ていたのかもしれない。

いえ、そこで初めて気が付いたのね。

自分は夢の中にいたのだと。女王となる事で、ハイエルフとして全てを背負って始めて知ったのよ。王という名の冠が、これほどまでに重いものだったのだと。

やがてあの人がその身を捧げ、神樹を含むこの国を外敵から守れる様になった時には、私はもう一つの事実にも気付いていたわ。

私は恋すらした事がない、と。

美味しいお菓子も、楽しい遊びも、何一つ知らなかった。

「だから、私は一人で重圧に潰されるのを恐れ、ハイエルフを増やしたの。素質のある娘を集め、巫女を増やしたわ。今では二十名ほどになったかしら？」

「男性がいないのは何故です？」

それも本当は秘密なのだけれど、今となっては伝えるべきよね。

「男性のがハイエルフになりにくいからよ。國中探したけれど、欲に染まらず、純粋で乙女のような者にしか、素質が発現しなかったのよ。」

……男性が駄目な原因は、狩りを行うからだと言われているわ。生ける者を其の手で殺すと資質を失うのかもしれないわね」

「どうしてそれを公表しないのですか、とは聞きません。恐らく、得られるかも分からない憧れを男が望んで、国の強さが損なわれるのを恐れたのでしょうか。評議員の阿呆どもの言いそうな事です」

「そうね。評議員の権力、騎士団の武力、機構師の技術力。どれをとっても欲の絡まないモノはないわ」

「どれも、国の発展と防衛には不可欠なのは解ります」

だから、私もエメルローザも評議員の面々が好きになれない。

「母上がこの城を出られる、という事は我慢しましょう。ですが一つだけ、今の内に聞かせて欲しい事があります」

そんなの質問を聞くまでもないわ。分かっているわ、エメルローザ。

「貴女は私たちの愛する娘よ？」

初めは憧れだったかもしれないけれど、私とあの人は貴女を全力で愛したわ。そして、あの人はその愛する娘の為にこの国に命を捧げたの」

私はエメルローザの手を引き、誰にも見せた事のない、泉の淵に刻まれた文字に触れさせる。

「わかるかしら。あの人の彫った文字よ。ここには金属を持ち込めないから、爪で彫ったのよ？」

「父上も無茶をなさる……」

「大変だったわ。爪は割るし、泉は血だらけになるし……」

「それは……」

「昔は今の様に巫女が大勢来る事もなかったのよ。だから助かったのよね」

そこにはこう彫られている。

『次にこの泉で祈る者が永遠の幸せを得らん事を願う』

「あの人らしい言葉だわ。受け継がれていく言葉ではあるけれど、少なくともあの人は貴女を想っていたわ」

「父上の記憶はほとんどありません。ですが、この文字だけで十分な気がします」

エルフは物にはこだわらないわ。形あるものは崩れると知っているから。でもそれでは伝わらない事もある。想いを残せない事もある。だからこそ、あの人は此処に言葉を残した。いつか自分の娘がエメルローザ気づき、癒されるように、と。

「心配だったのでしょう？ 自分は愛されていたのか、と気づかないと思った？ これでも私は貴女の母親ですもの、判るわよ」

「わらわは……」

「いいのよ。何も言わなくて。

……私は先に戻るわ。

貴女はもう少し、あの人の残した言葉の意味を噛み締めておきなさい」

エメルローザを残したまま、私はこの空間へと別れを告げる。

次に戻るのはいつかしらね。

娘をお願いね。神樹の精霊様……

沐浴を終えた私は茶室へと向かう。

そこにはクルカ殿達や、グランプ達がいるはずだ。

「あら？ もうお揃いかしら？」

わかつてはいるけれど、その声をかけてしまう。

「遅え……待たせすぎだ……」

「愛しい女の遅刻には目を瞑るものよ？」

「愛しい女の遅刻ならな。そうじゃないから怒るけどな！」

「意地悪ね。連れない人」

「冗談と分かっているのに、付き合ってくれるこの人は本当に優しい。」

「じゃあ、遅くなったけど聞かせて頂戴？」

「女王陛下はよろしいのですか？ メルフェイユ殿」

「いいのよ、後でグランプが伝えておいて」

「わかりました」

「カナ、頼む。レチエ、先代女王にもくれてやれ。ルシィ、お茶」

クルカ殿の指示に淀みなく、動き始めるメイド達。

「あいよ。ミランダ、そっちの箱支えておくれ」『これでいい？』

「フィーリアさん。お茶を入れてみましょう」『わ、わかった。二

人になった時には私がやるべき事なものな。練習しておこう』『御

主人様、詳しく話す？』『大まかにいけ。分かん事は聞くだろう』

本当に、仲のいい娘達ね。

「ほな、結果から言うわな？ 結果的には全員帰ってこれた。でも

首謀者っぽい男には逃げられたわ。これは相性の問題やわ、風の系

譜使いに全力で逃げられたら、ウチとレイチエルはんの戦闘方法で

は追いつかれへん。ミランダちゃんとか、残った三人に前衛型を固

めすぎたのが失敗やわな」

「グランプ？ 貴方でも無理だったの？」

「いえ、我々は他の盗賊と暴れた首長飛竜ワイバーンの処理に手を取られまして……」

「これに関しては俺のミスだ。近衛騎士団の数を抑えてもらったのも、カナとレチエだけしか行かせなかつたのも、俺の指示だからな」「せやな。御主人様にはもうちよつと、的確に判断してもらわんな」

「そこまで厳しくせねばならんのか？ 実際目的は果たした。確かに一人取り逃がしたのは悔しいが、他の者は捕えたのだ。問題無いのではないか？」

それは違うわね。恐らく、主であるクル力殿を守る為に必要な事なのよ。

「グランプ様の仰つておられる事は一般の範疇では問題ありません。ですが、我々は特殊ですので、盗賊相手ではそれで済ませる訳にはいきません」

「そうね。情報売り買いする、盗賊という職種を相手にする事からすれば、安心できる事ではないわね。クル力殿の周りの戦力の情報。良い値のつく情報になるでしょうね」

「逃がしたんは一人だけやから、報復とかは心配ないと思う。むしろ、ヤバイのは連れて帰つたエルフや」

どういう事かしら。戻つてこれたのに問題があるの？

「一人だけ、初めは居なくなつてる事も解つてなかつたのがおつたやろ？ アレがなあ。逃げた男に騙されて心酔しとる」

「どつという事？」

「逃げた男と結婚してギャンザ皇国に行くつて言つて、こつちの話を聞こうともせえへん。それがどうしようも無いねん」

「メルフェイユ様。捕らえた盗賊の話から、その逃げたミック・リ

ツクと言う男がギャンザ皇国の元冒険者だという事は解りました。ですが機構師を連れ出そうとしたのはその男の独断の一点張りです。話はそこで行き詰まっています」

「つまり、だ。先代女王。今回の件は、ごく少数での計画だったって事。それと、もしかするとその色ボケしてるエルフは、自分の意思で誘拐の手伝いをしようとしてたフシがあるって事だな」

恐らくクルカ殿の言う通りでしょう。最悪、切り捨てるつもりで誘惑したのね。

騙されているのに気付かせるには、その男を捕まえるしか無いのだけれど……………

「そのミック・リックとか言う、偽名くさい本名の男は運が良ければ見つかると思うねん。後は色ボケしてるエルフの前で騙してまじたって言わせたら、流石に正気に戻ると思うねんけど……………」

まあ、それは捕まってるからの話やから置いとくとしてもや。問題はフィーはんが捕らえた、ヴォルフガングと言う奴が持ってた紋章の方やねん」

「先程から、そこで話が拗れていたのです。メルフェイユ様。これを証拠にギャンザ皇国に抗議は出来ないと言われるのですよ。クルカ殿達は」

「ルシイ」

クルカ殿が名を呼ぶだけで、ルシイちゃんとカナリーちゃんは意図を理解し、ルシイちゃんが代わって説明を始める。

「はい。先程、グラツフ様には途中まで説明いたしました。得られている物証が余りにも中途半端なのです。階級章紋章ではありませんでしたし、本人がそう言っている訳ではありません。しかも名前や所属が明記されたものではないのです」

「しかし、そのミック・リックとやらもギャンザ皇国の……」出身の元冒険者だというだけです』……むう……それでは泣き寝入りではないか……」

「そうね。無理でしょうね。恐らくはギャンザ皇国の手の者よ。でも断定は出来ない。つまり向こうからすれば濡れ衣。戦争を起こすとまではいかなくても何らかの謝罪を、逆にこちらが要求される結果になるでしょうね」

ルシイちゃんの言ってる事は、概ね正しいわね。そういう風に考えて、中途半端な紋章モを持たせたのでしよう。

「それだけの策ではないと思われませう。こちらのデメリットを上げますと。」

一つ目は、元冒険者を使われる事で、冒険者ギルドとエルフ全体の関係の悪化。

二つ目は、エルフを助けた男という演出で、助けられたエルフが国からの離脱。

三つ目が昨日帰って来られましたエルフの方の誘惑による離脱。

そして、四つ目。これが一番大きな目的かと思いますが、サーフェン卿の盗賊ギルド設立がもし上手くいったのであれば、エルフの国では初の盗賊ギルドの内部に取り入る事も可能。

失敗を恐れず、色々な手の打てる嫌な意味での良い方法だと思われませう」

ルシイちゃんという通りね。最悪でも数名のエルフが手に入り、うまく行けばエルフを誘拐しやすい環境に入り込める手という事ね。

「しかも、ギャンザ皇国の紋章はわざと持たせたんだろう。持たせておいて、ヤバそうなら何処かの国の陰謀だと言い張る事もできる。エルフ側が証拠をそれしか持っていなければ言いがかりだと糾弾で

きる。まあ、そこまで甘くもないだろうが打てる手は全て打つ、という感じがするな。

ルシイはその辺りから相手はどういう奴だと思う？」

「ご主人様のおっしゃっている事と、カナリーさんがお調べになった現状。そういった点から見ても、用意周到でありながらぎりぎりの所で、身边には辿り着かせない大胆不敵な策を練る事のできる方、といったところでしょうか。」

その全ての利益が、ギャンザ皇国に集中しているのは間違いありませんし」

「人物の特定は可能か？」

「ギャンザ皇国の方だと想定してという事ならば、参謀長官補佐のベルフェレインという方が一番可能性が高いのではないかと思われませんが……」

「ベルフェレイン……あの蛙男か……ありうる。あの男ならやりかねないぞ」

フィーリアちゃんは知っている方のようね。

「フィーリアちゃんはその男性とお知り合いなの？」

「できれば知り合いたくなかった、という相手ですね。半年ぐらい前の六ヶ国合同のサンドウォーム掃討作戦で、出会ってしまいました。ゲフ砂漠のサンドウォームを掃討する作戦だったのですが、他国の兵だけではなく自国の兵まで盤上の駒の様な、使い捨てに考えている蛙顔の男でした。その時の作戦の組み立てが、何処までも兵を使い潰そうとする意思が見える様な作戦で、その男が指示を出していたのです。もちろん途中で交代になりましたが」

心の底から嫌だ、という顔をしてるわね。

でも確かに、自分の部下を大事にして他国の兵を駒のように使う、というのなら納得もできるけれど自国の兵までも、ね。

他人を何とも思っていない、という事かしら。
あと、そんなに蛙に似てるのかしら。

「ルシイちゃんも、そんな変な蛙男の事をよく知ってるわね？」
「私は、ダントリン家の執事から聞かされていましたので」

ルシイちゃん、嫌そうな顔が隠しきれないわよ？ 絶対どこかで会ってるって事ね。隠しきれないほど嫌そうなのだから。

「その方については今後も動向には注意する様にするとして。……結局、国の対応としては何も出来ないわね」

「くそう、わかっていても手も出せないとは……」

「グラッフ、短慮な言動は控えなさい。エメルローザを抑える役目も担う貴方が、簡単に頭に血を上らせてはダメよ？」

「はっ。申し訳ありません……」

グラッフは、こういう辺りが補佐に向いていないのよねえ。

本当にルシイちゃんあたりを、エメルローザに付けておきたいわあ……

「とにかく。行方不明かと思っていた者も無事だったし、クルカ殿達への依頼はこれで一段落としましょう。グラッフ。これ以降の事はエルフ族での問題です。後ほど、サーフェン卿を交えて今後の事も含めて話し合いますよう」

「ちょっといいか？」

「何かしら、クルカ殿？」

「昨日ファイリが捕まえた奴を含め、今回の捕虜全員の処分を引き受けたい。」

その代わり、ミック・リックという奴の確実な捕縛・処分と、色ボケエルフの正気に戻すのを請け負う。どうだろうか？」

何をやる気なのかしら。ヴォルフガングとかいう男に価値があるという事？

「どちらにしろ、エルフ側からは何も行動を起こせないんだ。もらっても構わんだらう？」

「そうね……エルフ側としてはギャンザ皇国の情報さえ手に入れば、対応の検討もできるし、言う事は無いのだけれど……連れて行って、どうするつもりなの？」

引き渡してしまって、エルフ族としては何もなかった事にしてみようというのは割といい案ね。相手は頭も回る様だし、確実な証拠でもない人間を抱えておくのはリスクが大きいわよね。コレも私達の為かしら？ それともクル力殿の都合？

もう！ クル力殿が何を考えているのかが気になるわね。

「エルフ側に迷惑がかかる様な事にはならんさ。情報は全てそちらに回させる。あの男達については……人体実験だな」

「お、じいじのトコに送つもりなん？ 御主人様」

「そうだ、カナ。後で屋敷への連絡は済ませといてくれ。やるのは明日の夜でいいだろ。0時で伝えておいてくれるか？」

「ちよつと？ まだいいとは言つてないわよ」

「顔に書いてある、それもエルフ側にとってはいい事だっと思つたら？」

そういう事には気付いても、言わないのが男の優しさなのよ！
これじゃ皆も苦労するわね。

そこでふと、目があったルシイちゃんは柔らかく微笑んでいて、ああ、クル力殿のこういう放っておけないトコも好みなのね、と気付かされた。

そして、ルシィちゃんとお互いに苦笑し合い、肩を竦めて諦める。

「分かったわよ、好きになさいな。そのかわりちゃんと情報集めてくれないと、

後で何を請求するかわからないわよ?」

「まかせろ。主に俺のメイド達に。こいつらは優秀だ」

そう言いながら左右の腕で、カナリーちゃんとフィーリアちゃんを自分の方へ抱き寄せる、クルカ殿。

更にレイチエルちゃんを引き寄せようとした左手は叩かれ、ルシィちゃんを掴もうとした右手は躲かれる。

そのタイミングに合わせ、首に抱きついたミランダちゃんを両手で支えると、左右の四人が寄り添うように並び、私に笑顔向ける。

「色ボケエルフも任せておきなつて。なんとかするから」

「エロい事しちゃダメだよ?」ゴシュジンサマ」

「ミランダの言う通りです。真面目にお願いしますね。ご主人様」

「わ、私は当主様と共に全力を尽くします!」

「主殿の真面目は、なかなか見れないけどねえ……なあ?」カナリー

「ウチらがおるから安心してるんやろ?」いっぺん、ほったらかしにしてみる?」

「……あとフィーはん、重たすぎる女は飽きられるで?」

うふふ。本当に、楽しい子達だわ。

クルカ殿は周りで騒ぐ五人の相手をしながらも、じっと私の目を見つめている。

貴方を信じて任せるわね?

そう口には出さずに思ってみると、クルカ殿は少しだけ唇の両端

を上げて微笑みかけてくれる。こんなに気持ち伝わる気がするのに、貴方は気付いてはくれないのね？

それとも気付いていて、私が行くのを待っているのかしら？

「聞いているのですか、当主様！」

「ミランダちゃん、はっきりさせなあかんで？」

「ゴシユジンサマ。こっち向いてちゃんと言って？」

ミランダちゃんに無理矢理、顔を回され『分かったわかった』と言いながら話に参加する彼に、私は声には出さずに想いを向ける。

いつか、私もその中に入ってみせるから。その時は覚悟しておいてね。

……未来の旦那様。

「『！』」

あら怖い。五人全員に睨まれちゃったわ。今日の所はこれで我慢します。

まだ、エメルローザの為にもしてあげなければいけない事があるものね。

楽しみだわ。この見えない先がこんなにも楽しみなのは久しぶり。今はこの感情を抱えたままで、何も考えずにこの子たちを見ていよう。

このかけがえのないひと時を、目に焼き付けておこう。今日という日を振り返った時にはっきりと思い出せるように。

第24話 先代女王は決意する「3」（後書き）

後三話程で、第二章本編終了予定。

また章間をはさんで、第三章へ……

という予定で書きたい事が決まっていますが……

納得がいかない……

もしかしたら変更するかもしれません。

何処を、とは言いませんが。

第25話 執事とは後処理係？「1」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第25話 執事とは後処理係？「1」

先入観、というモノは厄介ですね。

敵となる存在モノが大きければ大きい程、それを相手取るには更に大きな力が必要だと勘違いをしてしまいます。

今回の件も同じでしたね。大きな利益を狙エルブう為には、かなりの人数が組織力で行われていると、勘違いをさせられてしまいました。

ですが、表面上は無事に解決できそうだというのは、不幸中の幸いといった所でしょうか。これも日頃の行いの賜物でしょう。

「クソがああ！ 一体どうなってやがるッ!？」

いけません。

此処でこの男を逃がしては、せっかく上手く事が運んでいる現状に水を差してしまう事になります。それでは問題が増えてしまいませんね。

「『風よ！ 切り裂け!』クソッ！ 何なんだ、この糸はッ!」

おや、元冒険者といっても、大した事は無いようですね。各地にある古代王国迷宮に探索モクした事もないようです。それは『黄蜘蛛の糸』と呼ばれる、三つ目蜘蛛の糸ですよ。

それを『無限の落とし穴』と呼ばれる丸い魔導具に詰めてあるのです。三つ目蜘蛛は古代王国迷宮なら、よく出てくる魔物なのですから……

よく出てくるといふ事は、それだけ倒された実績があるという事

で、弱点も多いのです。吐き出される糸は、ミスリルの剣でも切れ難いという特性の割に燃えやすく、一度燃え始めると糸を切らない限り、本体まで燃えてしまうという阿呆な魔物なのですが。

もちろん。教えて差し上げる義理はありませんので放っておきます。

「ソウハク、炎は禁止です。いいですね」

【クウ】

小声でソウハクにしか聞こえないように伝えようと、再び糸を大量に振りまく為に二人で走り回ります。ソウハクは首輪に付けた『無限の落とし穴』から糸を垂れ流しにしたまま、空中を飛びまわり上空への脱出を拒みます。

私は相手の死角を中心に、木々の間を縫う様に移動し、糸を張り巡らせます。

『無限の落とし穴』は繊維関係の職人達には『糸玉』と呼ばれています。古代王国迷宮から見つかった物で、大人の握り拳ほどの石に親指を入れた様な穴が開いており、そこに魔力を込めると無制限にどんな物でも吸い込むという物です。

この魔導具には大きな問題が一つ。入れる事はできても取り出せないのです。

ですので無意味な魔導具と思われていたのですが、ある機構師が実験で発見した事実により評価が変わりました。

紐で結んでおけば、入れた物を引っ張り出せたのです。しかし親指ほどの穴の大きさに通る物で、大量に入れて意味のある物。しかも、万が一取り出せなくなっても構わない物というのは紐ぐらいしかなく。結果、繊維職人に糸を大量に保管する『糸玉』として重宝されるようになったのです。

この男が森の中で休憩しているのを確認してから、約一時間。既に『糸玉』から出た『黄蜘蛛の糸』を周囲を張り巡らせ、男の脱出経路を塞いでいます。気付かない内に糸に囲まれた男は、先程までは糸を切り包囲を抜けようとしていましたが。

ミスリルの剣でなんとか切っている最中に、麻痺針を左腕に撃たれた事で切る事を諦め、逃走へと切り替えました。

「こそこそやってんじゃねえ！ 出てきやがれ！」

もちろん出て行く訳がありません。逃走しても、向かった先の糸の多さに違う方向へと切り返す、という行動の繰り返しも限界だったでしょう。魔法での切断を再度、試みた様です。しかし、ゆったりと張られた糸は風を受け流し、その強靭さは真空刃でも切れません。

……夜の森に入るのに、松明の一つも持っていないというのも間抜けな話ですが、無いのでしょうかね。

持っていれば炎で焼いて、糸の包囲からは抜けられたでしょうに。まあ、その様な行動を取ろうとした時に、かくれんぼも終わります

が。
「なんでこんな事をする！ 何が目的だ！ 金目のものは持ってねえぞ！」

本気で物取りとでも思っているのでしょうか。こんな用意周到な物取りばかりなら、旅に出る人は今の三倍は護衛が必要になりますね。

「エルフ側の追手か……いや、転移門を抜けてこの国に戻ったんだ、

エルフのはずがねえ……」

その通りです。ラナル王国側の転移門で、待ち伏せさせて頂きました。そこからずっと一緒にしたよ？

「まさかつ！ 軍部の野郎、消しにかかりやがったのか!？」

ほう、やはり軍が絡んでいましたか。少し話を聞いてみますか。もちろん姿は見せんませんが。

「軍が絡んでいる事を簡単に口にするとはな。あの方の言う通り、他の者にも喋っているかもしれん。吐かせるか……」

「ま、待て！ 誰にも話してなどいない！」

「それを信じると？ 薬で吐かせてしまえば、後は廃人になる。口封じもできて一石二鳥だ。大人しく諦める事だな」

獲物は何処から聞こえてくるかも分からない声に対し、叫びながら交渉しようとしているようですね。

「待ってくれ！ エルフを一人、骨抜きにしてある！ そいつを引き渡すから、俺の命は助けてくれ！」

「あの方がそれを気に入るとでも？」

「ああ、間違いない。参謀長官補佐が媚薬で飼い殺しにしていたエルフが奪われたと言っていた！ エルフの上玉の女だ。価値はある！」

ふむ、間違いなく絡んでいるようですね。しかも、薬漬けのエルフというのは私達が先々に奪還した女性の事の様ですね。

「それは聞いている。だが他にも奴隷はいるだろう」

「その時に、人間以外の奴隷は全員奪われたと言っていた！ 亜人・獣人は喉から手が出るほど欲しいはずだ！」

確かに四名の獣人・亜人を奪還しました。しかし、まだ人間も居たとは……

いや、人間は閉じ込めなくても問題がないでしょうし、使用人達と同じように屋敷に置かれていると判別が難しいですし……

奴隷は暗黒魔法の奴隷契約を結ぶ事で作られます。奴隷契約に同意してしまうと主の命令は絶対に守ってしまいます。命令に逆らう行動を起こす事は不可能で、行動する瞬間に体の自由が奪われる為、事前に『一生、主に危害を加えるな、そして逃げるな。自殺するな』と言われてしまうと主を殺して逃げる事もできません。

意識まで乗っ取られる事はありませんが、言う事を聞かないで動かずにいると、徐々に頭が割れる様な頭痛に加え、呼吸が困難になって苦しむ事になります。

「どうなんだ！ それで見逃してくれないか！」

「エルフがこちらの手に渡るといふ保証は？」

「ある場所で落ち合う事になっている！ そこまでは指示に従おう！ エルフを手に入れた時点で解放してくれ！」

この男は阿保なのでしょうか。エルフを手に入れたからといって、貴方を解放する理由など無いでしょうに。まあ、構いません。乗って差上げましょう。

「いいだろう。ではその場で武装を解除しろ。鎧も脱げ」

「……分かった」

ふむ、このような阿呆に踊らされていたかと思うと、少し腹が立

ちますね……

「これでいいか」

両手を上げて、下に置いた装備から離れる男の全身に、麻痺針を投げつけました。男は各部に三、四本ずつ刺さった麻痺針により、力が抜け崩れ落ちました。

男が動かない事を視認した後、縛り上げる為に近づくと、

その刹那。

横から黒い塊にぶつかられ、その塊と共に近くの木にぶつかる羽目になってしまいました。

「チツ。外したか。なんだあ。その黒い獣は」

「……そういう事ですか。」

両手を上げた時に気付くべきでしたね。助かりましたよ、ソウハク。戻ったら美味しいお肉でも買って差し上げましょう」

【キャン！】

「切り札の一つだったんだが……爺さん、一人か？ 悪いが今から本気を出す。死にたくなけりゃ逃げな。そしてベルフェレインの蛙男に伝えな。エルフが欲しければそれなりの報酬を渡せつてな」

「どの程度の報酬を？ 確実にエルフが来るのですか？」

「ふむ、それが本来の話し方か？ 馬鹿に丁寧だな？ 蛙男の執事か？」

「ええ。執事です」

ベルフェレインという男に仕えている訳ではありませんがね。

「報酬は軍のどっかの部隊長クラスの士官と金と家だな。エルハイ

ムの一等地に小さくていいから一軒家を。金は金貨五百程でいいぞ」

ふむ、エルフの機構師の奴隷、しかも女であるという事の価値を考えると妥当、もしくは少ないぐらいと言ったところですね。

ギャンザ皇国の首都エルハイム、その一等地の家の価値が私には微妙に分かりませんが、ラナルラ王国の王都の一等地よりは安いでしょう。

「報酬に関しては、そのままお伝えしましょう。しかし、エルフが手に入るという保証と、貴方が今回の事を誰にも話さないという保証は？」

「両方ねえな。だから急いで伝えて手付として金を持ってこい。それしたらギャンザ皇国に出向いてやる。急げよ？ ラナルラ王国の盗賊ギルドに所属してるんだ、いつ言っちまうか分からんぜ？」

「それは困りますね……………ではさっさと片付ける事にしましょうか」

その言葉を聞いた瞬間、目の前の男が腕を羽ばたかせるように動かしたかと思うと、男はそのまま剣に向かって走り出しました。

追おうとした私を風の壁が襲い、またもや、飛び込んできたソウハクと共に大木に激突しました。なるほど先程のもこの攻撃ですか。直撃していると危なかつたですね。

「悪いな。俺の得意魔法は無詠唱の風の系譜でね。これから爺さんが死ぬまで、俺に近寄れると思うなよッ！」

なる程、腕に刻んだ機構文字の刺青のせいですか。それが無詠唱でも風の魔法を発動させる訳ですか。その魔法で中距離、遠距離を制し、剣で接近戦を行いますか。なかなかいいバランスの戦闘態勢

です。しかし、風の系譜では麻痺針がきかない理由が分かりませんが……

……………どちらにしろ、これで終わりです。

「ソウハクッ！」

声を聞き、ソウハクは男の傍を走り抜け、走って行って見えなくなりました。

「なんだあ？ 獣だけ逃がしてどうするよ。爺さん、死ぬ覚悟ができたか？」

「そんな覚悟は必要ありません」

「どうやって俺を倒すってんだ？」

「倒す？ その様な行為も必要ありません。貴方はもう捕まっています」

「ああ？」

言いきった後、私は空中に飛び上がり張り巡らされた糸の上に立ちます。そして糸を操作し、男のミスリルの剣が動かない様に縛りつけます。

「それがどうしたってんだッ！ 剣が動かなけりや、空中に攻撃できねえとも思ってたのかよッ！ 喰らいやが……『カツッ！』」

「

その瞬間、地面が黄色い光に包まれ、男の姿が消え失せます。

残ったのは空中に縛り付けられたミスリルの剣と、私。そしてよく見ると糸に吊り上げられ、ほんの少しだけ宙に浮いている男の荷

物と装備品。

そして、黄色い光が消えたのを確認すると、地上に降り立ち男の荷物や装備品から糸をほどいて、荷物を集め始めます。

最初に打ち合わせた時の指示通り、ソウハクが転移陣の機構石の一本を啜えて戻ってきたのを確認し、頭を撫でてやりながら話しかけます。

「残りの機構石七本も回収お願いします。明日の朝、街に出かけて美味しいお肉を買いに行きましょう。もうひと頑張りですよ」

【キャン！ キャン！】

首に機構石を入れるポーチをぶら下げたソウハクが走って行くのを見届け、たった今ソウハクから回収した『糸玉』と、私の持っていた分に魔力を流しながら歩いて糸の回収を行います。

この糸は回収がめんどくさいですね。もっとこう、一瞬で回収できるようにはならないでしょうか？ しかし転移陣の方は、上手くいったようでよかったです。転移陣の人体実験は昨日で既に済んでいましたが、ソウハクでも発動が可能というのは役に立ちそうですね。

今回は私ができるだけ正確に、正方形が二つ重なる陣を描きながら、あの男を糸で中央へ誘導しましたからね。大まかな設置でも発動できれば、投げて刺すだけでも発動できるでしょうから、もっと楽なのですが……

送った先は魔法が一切使えない牢屋になっていますし、牢の外にはエヴァンと御祖母様が待機しているので問題ないでしょう。

麻痺が効かなかった理由は未だに不明ですが、自由な状態で放り込まれた事から察して、何とかして下さるでしょう。

【キャン！】

「戻りましたか、ソウハク」

見ると、お座りの姿勢から器用に両手を使い、首にぶら下げられたポーチを外して差し出すソウハク。

この子の種族は一体何なのでしょうか。

確かに魔獣には、肉を焼いて食べる^{ファイヤーマンキ}火炎猿や水を生み出し野菜や果物を洗って食べる^{ウォータータイガー}水精虎なんかも居ますが……

しかも、今日初めて乗せてもらって気付きましたが、この狐の尻尾は二本あるんですよ。絡めてあるので一本にしか見えませんが、二本なんです。この狐は本当に分からない事だらけですね。

「ありがとうございます。あとは糸の回収で終わりですので、大きくなって待っていてもらえますか？」

するとソウハクは、首を横に振って右手の爪を一本出し、『糸玉』を爪で指さし示します。これは……寄こせという事でしょうか？

「回収を手伝ってくれるのですか？」

【キャン！】

では、とソウハクの右手に『糸玉』を渡すと器用に口に咥え、魔力を込めて飛び上がります。木々を蹴りながら螺旋を描くように上がって行き、枝から枝へと飛び移りながら糸を回収していきます。

では私は、地上の分を回収しますか。
所々絡まっており、ソウハクと連携しながら糸の回収を終わらせます。

「これで全部ですね。御苦労さまでした。では帰りましょうか」

【クウ。キャン！】

「お願いしますね」

大きくなったソウハクの背中にあの男の装備と道具一式を積み、私も乗せてもらって屋敷へと帰って行くのでした。

第26話 執事とは後処理係？「2」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第26話 執事とは後処理係？「2」

心とは弱く脆い物です。

故に人は何かに縋り、支えを欲します。

ですが、結局は自分の力で自分を支えないといけない。

そこに辿り着いた者が一人前と言われるのでしよう。

この場には我々三人、御祖母様、エヴァン、私の他にクルカ様に色ボケエルフ、と呼ばれている女性がいます。

そして、目の前の二つの簡易牢 機構文字が壁と床面全体に隙間なく彫られている特別製ですが にはヴォルフガングと呼ばれた男とミック・リックという名の元冒険者が別々に入っています。

この簡易牢は、扉は分厚い鉄製で、扉の上部に中を覗く用の小窓以外には何もなく、 恐らくも元は拷問部屋だったのではないでしょうが 全く何も置かれていません。

ここに閉じ込められると、彫られた機構文字のせいで、完全に魔法は無効化され、魔力を外に出すと壁に吸い取られます。そして床に接している場所から、どんどん魔力が吸い上げられ、空腹も生理現象も全てが止まってしまい、体の変調をきたし、一ヶ月程で死に至ります。

ちなみに、盗賊ギルド『死神の羽音』のマスターに今回の件のお話をした所、『他のメンバーが無事帰ってくるのなら、巻き込みやがった元冒険者はいらぬ』とのお言葉も頂いておりますので、このまま死なれても全く問題ありません。

本当は自分たちで処分したかった様ですが 恐らく面子の問題でしょう それはこちらの要件が済んだ時に生きていれば、とい

う事で納得して頂きました。

「さて、それでは聞かせて下さい。計画は失敗したのですかね？」

ミック・リックがまだ私をベルフェレインの執事だと認識しているという前提で話しかけます。

「そつだ。だが、まだヴォルフガングの方まで失敗したのかは分からん」

「そちらも失敗しました。隣に声すら出せない状態で、寝転がっていますよ」

「……そうか。ではなぜ俺やヴォルフガングは生きている？」

「これはおかしな事を。捕える前にも言つたはずですよ。全て吐かせる、そして口止めとして廃人になつて頂く、と」

隣で色ボケエルフさんが何かを言いたそうですが、朝食の時にちやんと説明をしましたので何も言いませんでした。もっとも、彼女はレイチエルさんとカナリーさんが、ミック・リックと戦闘を行っているのを知っていた為、レイチエルさんの作る食事に一切手をつけていませんでしたし、無実を証明すると息巻いていましたので、どこまで我慢してくれるかは分かりませんが。空腹になると怒りやすくなると言いますしね。

「待つてくれ。前にも言つたが取引をさせてくれ。ベルフェレインの旦那がエルフは絶対に欲しがるはずだ」

昨日は蛙男と言っていた癖に、今日は『旦那』ですか……しかし、彼の方からその話を持ち出してくれるのは助かりますね。

「そうですね。では聞かせて頂きましょう。どうやってエルフをお

びき出すのですか？」

「……二つ目の満月の次の晩に、イメトウルの街のルナル酒場で待ち合わせをしている。お互いに万が一来れない場合は毎回、満月の次の晩に待ち合わせと言っている」

「ほう、それでは二日後ですね。それではすぐに結果が出そうですね」

「間違いない。ルーランとは結婚をする約束もした。あくまでフリーだが」

隣では、胸糞悪いとしか表現のしようのない顔の御祖母様と、元山賊だからか何とも思っていないなさそうなエヴァン。そして血の気が引き、元からかなり白い肌が青くなってしまっている色ボケエルフさん。あ、お名前はルーランさんでしたね。

「ルーランというのですね。家名は？」

「ルーラン・フォルチェス、腰まである金髪に碧眼の典型的なエルフだ。俺がくれてやったミスリル銀の蝶の形の髪留めをしている」

ふむ、それだけ特徴も一致していれば、別人と言う事もないようです。隣にいる本人には可哀想ですが。

「では二日後の晩、私達の方で酒場に向かうにしましょう」

「それでは捕縛は無理だ。あいつは俺の言う事しか聞かん。戦闘になるぞ」

「ほう？ どうしてです？」

「簡易契約を結んで。だから行く時には俺を連れて行ってくれ」

隣を見て首をかしげると、辛そうに『本当です』と伝えるように首を縦に振るルーランさん。隣のエヴァンが顔で『アホかこの姉ちゃん』と言っていますね。

私もそう思いますが。

簡易契約は、暗黒魔法の奴隷契約の簡易版で効力は同じですが神聖魔法で簡単に解除できます。万が一の場合は神聖魔法の使い手に頼めば、解除できると安心してそうしたのでしょう。一時、流行した手口ですね。

あるギルドに所属するには間者を防ぐ為、新人は試用期間が済むまでは簡易契約をさせていると偽り、そのまま強制的に奴隷契約までさせるという手口です。

「貴方を殺せば、簡易契約は切れますね。連れて行く意味がありません」

「拉致では他のエルフに気付かれて、目をつけられるんじゃないか？」

「その心配はありません。輸送手段もありますので。ですが貴方がいないと隙が作れないかもしれませんので、生かしておいてあげましょう」

「ルーランが捕まったら俺は解放してくれるんだろうな？」

知らないという事は罪で、そして残酷ですね。ルーランさんは涙を流し、両手で口を押さえ、何とか嗚咽を堪えているようです。

「それはこれからの貴方次第です。今からそちらに奴隷契約書を入れます。自分で契約に署名して下さい」

「なっ！ ふざけるな！」

小窓から奴隷契約書のスクロールを投げ入れます。

「ふざけてなどいません。奴隷契約で本当に誰にも話していないか確認するか、もしくは薬で確認して廃人になるか」

「　　ッ！　それは……」

「好きな方をお選び下さい。私はどちらでも構いませんよ。主に言われた事をこなすだけですから」

務めて事務的に言いなち、考える時間を与える。その間にルーランさんを椅子に座らせ、飲み物を与えて落ち着かせます。

「……………本当に、ベルフェレインの旦那の事を誰にも話してなければ、奴隷契約は解除してもらえるんだろうな？」

「ええ、約束は守りましょう。ベルフェレイン様がエルフの誘拐の件に関わっていると、貴方の口から誰にも伝わっていない場合は、解除しましょう」

「　　わかった。今から書く」

血文字で署名の書かれた、奴隷契約書のスクロールを小窓越しに受け取ると、確認してから魔力を流し込み、効力を発揮させます。

「では、その牢屋の中は、魔法無効化の機構文字が刻まれていますので、出て頂きます。今度は食事もちゃんと出る部屋ですよ」

「そうかい、そりゃ助かる腹は減ってないが、何もなくて退屈してたところだ」

「では、出る時に注意して下さい。出た瞬間に効果が発揮されますから、一気に束縛が襲って来ますので」

エヴァンに扉を開けてもらい、ミック・リックが一步出た瞬間、ミック・リックが転び、全身をかきむしる様に抱きしめています。そこに主が奴隷に初めにかけておくべき楔の言葉をかけます。

「主が命ずる。主に危害を及ぼしてはならない。主へ虚偽の発言を

してはならない。主の言葉を曲解し、とらえてはならない。主の命令は絶対厳守せねばならない。今からは一日は何者をも傷つける事も殺害する事も許さない。この館を出る事も許さない」
「了解した。厳守する」

口のきき方が悪いですがどうでもいいでしょう。

「では、右を向いて立ちなさい。消して後ろを振り向かない様に。

ルーラン・フォルチェスの仮奴隷契約書はどこにあります？」

「ルーランとはやってる時に魔法陣で行った。だから契約書は無い」

という事は、ミック・リックに解除宣言させるだけで問題ないですね。

「ルーラン・フォルチェスの仮契約を解除しなさい」

「なっ！ 何を考えている！」

そう叫びながら後ろを振り向こうとして、命令違反の為か、体が硬直したようだ。

「解除しなさい」

「グッ！……ぐあっ……クソッ……」

耐えられる筈もないのに逆らおうとするとは……まあ、自分が何をしようとしていたのか実感するいい機会ですね。頑張って頂きましょう。

「振り向いても構いませんよ」

その言葉に反応し、ミック・リックは私達の方を振り向き私をにらんだ後、その後ろに見えるルーランさんを見て、驚くと同時に言い訳を始めました。

「ち、違つんだルーラン！ こいつらから逃げ出す為の芝居だったんだ！」

「嘘を言う事は許しません」

「ぐっ……グアアアアツ！！」

「ミック……信じていたのに……信じていたのに……」

ルーランさんは涙を止める事もせず、ただただ同じ言葉を発するだけでした。

そして、ミック・リックはついに苦痛に耐えきれなくなったのか。

「主たる……ミック・リックが命ずる……ルーラン・フォルチェスの……仮契約を解……除す、る」

ルーランさんの胸元が淡く光りました。恐らく、奴隷には必ず刻まれる心臓辺りの刻印が消えた光でしょう。

「解除したぞ！ これでいいだろう。誰にもベルフェレインの事も言っていない！ これで満足か！」

「ええ、結構です」

「奴隷契約を解除しやがれ！」

「何故？」

「何故だどつ。ふざけるなっ！ だ、騙しやがったのか！」

彼女を騙した、貴方には言われたくありませんね。しかし騙したなどと心外な。

私は嘘はついていません。

れします」

「任せときな。あたし達で聞ける事は聞いておくよ。その後はどうするんだい？」

「予定通り、一度『死神の羽音』に引き渡します。あ、ギルド名が『死神の衣』に戻ってるかも知れませんが……」

「で、ギャンザ公国の黒幕に関わりのある奴隷商人に、売り飛ばす訳か」

「そうですね、ギルドの方には依頼として伝えますよ。もし死ななかつたら、売り飛ばす様に、と。ミックリックの方はどっちでもでもいいのです。ヴォルフガングの方は確実に売り飛ばしてもらいませぬがね。」

聞こえていたのだろう。黙らされている為に何も言わないが、顔が蒼くなっている所を見ると、盗賊ギルドでどのような目に会うかを想像したのだろう。

恐らく生き残れませぬね。此処でお別れの様です。

「ではルーランさん、行きましようか」

「……まって、下さい……」

「え？」

するとルーランさんは、ミック・リックに向き直り、自分の髪を束ねていた蝶の髪飾りを手に取り、呪文を唱え始めました。

「何する気だ！ 止めてくれ！ ルーランー！」

「避ける事は許しません。受け止めなさい」

彼女が何をするのは分かりませんが、死にはしないだろうと判断し、受け止めさせます。

「ありがとうございます。執事さん

汝が姿を変えて刻み込まんフュージョン・カース『融合呪縛』

もう、二度と貴方には会えないと思うので。今そのミスリルの髪飾りは返しておきますね。さようなら。ミック・リックさん」

「ぐああああああつ！ 熱いいい！ 痛いいいいい！」

ミック・リックの腹に、溶けたミスリル銀の液体が焼ける様な臭いを放ちながら融合していくのを、顔をしかめながら見守ります。

どうやら彼女はエルフでありながら、暗黒魔法の使い手の様ですね。記憶に間違いがなければ、融合させた金属が生命を持った虫や寄生虫の様に、定期的に体の中を這いまわる呪いだっただでしょうか。

「すみません。お待たせしました」

「いえ、では行きましょう。主がお待ちでしょうから」

彼女を促し、屋敷の一階へと上がって行きます。後ろで『えげつねえ……』『女を食い物にしようとしたんだ、当然さね』『ルーラッ！ 許してくれ、頼む！ 解呪してくれええええ！』などと声が聞こえてきますが。まあ、気にする事ではありませんね。

「クルカ殿、でしたか？ あの方にも謝らなくては。私、酷い事を言いました。同じ人間でも最低な人間だって言っちゃいました」

「大丈夫ですよ。クルカ様はそういう文句には慣れていらっしやいますから」

「でも……」

「そんな事よりも、これからどうするのか考えた方が良いでしょう。今の貴女はエルフの誘拐の片棒を担ごうとした、同族の敵になってしまっていますから」

困っているのはそこなのです。エルフの城で彼女は盛大に、『ミ

ツク・リックは良い人です。私達に、もっと良い環境の職場を提供してくれようとしていたんです』等と言ってしまったそうです。恐らく今、国に戻ると同族から迫害されてしまうのは間違いないでしょう。しかも暗黒魔法の使い手ですからね……

「私っ、なんて事を……」

「この部屋です」

扉を開けて入ると、ベッドに座ったままのクルカ様と何故かこちらに背中を向けて服を整えているルシイさんがいました。

「んうん！ どうでした？ グリント老」

「滞りなく進みました。ルーランさんも理解して頂けたようで、問題ありません」

「こっちはお前に邪魔されたから、滞ってそのままお預けになりそ……』それはよかったですね！ 何時までも、騙されたままというのも辛いでしようし！』……：そうだな」

ルシイさん？ 騙されている時は辛いと感じたりは、しないんじゃないでしょうか？

しかも、何故それをクルカ様の頭を殴りながら言うのです？

「あ、あのっ！ すいませんでした。勝手な事とか、酷い事とかばかり言っつて！ このお詫びは、必ず、えつと……：あ！ あの、持ち物とかも全部、騎士団の方に押収されて……私無一文でした……：謝罪の言葉しか返せません……：」

「気にすんな、どうしても詫びたいって言うなら、態度で示してくればいい」

「態度、ですか？」

「ああ、たつた今、無理矢理中断させられた続きを……『バキツ！』……」

「ご主人様は、これから屋敷の人間に対する態度を気をつけて下さい、と言っているのですよ」

ああ、なるほど。ルシイさんとの情事のお邪魔をしてしまったようです。もう少し確認したい件があったのですが、今は早々に退出しましょうか。

「では、クルカ様。彼女は昨日、此処に来てから何も口にしていませんので、食堂に連れて行きます。食事が終われば、こちらにご報告に参りますので」

「分かった。じゃ、食事終わるまでは時間ができたな」

「ご主人様、時間ができたのならお仕事をなさって下さい。依頼でストレイタム共和国へ行っていた間に、未決済の書類が溜まっています！」

「そんな事言つて、ルシイだつてさっきまでフィンキ出してたくせに……」

何やら阿呆なやり取りが始まりましたね。この辺は、愛情表現ですから放っておきましょうか。

「ではルーランさん、ご主人様とお話は後ほどにして、全員に顔合わせだけ済ませておきましょう。皆さんにも相当、文句を言ったと聞いていますので謝っておいた方がいいでしょう」

「あ、はい。そうですね。みなさんにも色々言っちゃいました……」

ルーランさんを促し、クルカ様の部屋を退出しながら話を続けま

「誰も気にしていませんよ。多少は何か言われるでしょうが、みなさんの底から怒ったりしません。怒るのはせいぜいクル力様や家族が、不当に苦しめられた時ぐらいですよ」

「家族、ですか？」

「ええ、この屋敷にいるのはみんな家族です。血がつながっているかどうかではなく、ただ一緒に暮らす家族です」

「……それは、羨ましいですね。私もあの人と家族を作りたかったです。騙されてましたけど」

騙されていた事が分かった後では仕方無いのかもしれませんが、昨日とは打って変わってネガティブな思考の方ですね……ふむ。

「私は、長命種でしてね。こんな老人の姿ですが、あと二百年は生きるそうです。エルフは普通でも三〜四百年生きるんでしょう？」

ルーランさんがおいくつかは知りませんが、きっと家族ができますよ」

「そうでしょうか……」

「人と関わらずに生きて行く事は、誰にもできません。少しでも関わった人を大事にしましょう。それだけで、仲間や家族が自然とできますから。こちらの扉です」

まだまだネガティブな思考から抜け出せないのか、少し困った顔をしながら私が開けた食堂への扉へ入るルーランさん。

やはり、騙されていたという事実はショックが大きいのでしょうか。今は我々への申し訳なさ等から緊張し、なんとか平静を保つているように見えます。

これで緊張の糸が切れた時は大変ですね。

こういう時は誰に任せるのが一番良いでしょうか、などと考えながら私も食堂に入って行きました。

第27話 執事とは後処理係？「3」（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読み
ください。

第27話 執事とは後処理係？「3」

執事という職は、私が考えていたよりも大変なものだったようです。

今だけは、この職についた事を後悔しています。

「じいじ、何現実逃避してるん？」

「あ、いえ。大したことではないんですよ。カナリーさん」

「で？ グリントさん、どうなのかしら？」

「いえ、私の一存では決めかねますので……」

何を言ってるのかとお思いになられたかもしれませんが、私の方がそう言いたい気分です。

そう、この目前にいる女性に。

エルフの先代女王でハイエルフでもあられるメルフェイユ様に。

「しかし、何故ここに住むお話になるのでしょうか？」

「だ・か・ら。ストレイタム共和国に盗賊ギルドを作るの。エルフだけじゃなく、亜人や獣人を集めてね」

「それは伺いました。ですから、それとこの屋敷にお住いになる理由が結び付きません」

カナリーさん。レイチエルさん。ミランダさん。そしてフィーリアさんまで眉間に皺が寄っており、『何とか断れ。頑張れグリント』というような、声が聞こえてきそうな視線が、私に突き刺さっています。

「ちゃんと、先代の 空の詠み姫 には許可は取ったわよ？」

「御祖母様がですか？ おかしいですね……ここでの事は、クルカ

様の意思に任せると仰っていたのですが……」

「そうよ？ クルカ殿の……もうお城じゃないし、クルカ君でいいかな。クルカ君の許可を取れば別に反対はしないって言ってたわ」

「それは許可とは言いません……」

「あら。人間ってややこしいのね」

「人間に限ったことやないと思うでえ。たぶん考え方が古いんちゃうかな」

「そ、そおかしら。そんな事は無いと思うわぁ……」

カナリーさん、無駄に挑発するのは止めて下さい……

「ん〜。私まだ、二十年しか生きてないから分からないけど、価値観の違いって結構辛いよね。」

ね？ フィーちゃんもそう思うでしょ？」

「そ、そうだな。私も此処に来た頃は皆との価値観の違いから、当主様に全く相手にされていなかったからな。耳の痛い話だ。今は満足しているが」

ミランダさん、何故そこだけ強調して言うのです。しかもフィーリアさん、何時から貴方の序列はミランダさんの下になったのですか？ 全く逆らっていませんね……

「あたしや、別にどっちでもいいけどさ。その子まで一緒についてうのも気に入らないね。昨日までは無茶苦茶言ってたじゃないか。そりゃ、惚れた男を信じたい気持は分かるよ？ でも、それにしても都合よすぎないかい？」

「も、申し訳ありませんでしたっ」

「あ、いや、謝ってくれるのはもう良いんだよ。気にしてないから。そういう問題じゃないからさ、今は」

レイチエルさん？ どっちでもいいと言いながらかなり否定的な事を仰っていますね？

これはアレですか、やはり私になんとかして追い返せと……分かっていきます。解っていますよ。ミランダさん。視線が痛いです。

「とにかく、今は『お住みになって下さい』とは言えません。クルカ様の許可も頂けませんので。今は大変お忙しいご様子でしたから」「あら？ そう言えばクルカ君とルシイちゃんは？」

「お部屋でお仕事です」

「ふう〜ん。何のお仕事かしらね〜」

「ゴシユジンサマと五つ以上、離れてない人にしか勤まらないお仕事だよ？」

「そやんな。それ以上離れると、犯罪とか、特殊嗜好者とか言われるもんなあ。貴族って」

「あたしゃ、あと二年早く生れてたら駄目だったってことかい！？」

「私は確か、同い年か一つ上だった筈だが……グリント殿、カラック殿とクルカ殿は幾つ違いだ？」

「一つ違いですが……みなさん。そろそろラルラ王国とエルフの関係が、悪くなるので刺激するのは止めて下さい」

メルフェイユ様は、先程初めてお顔を拝見した時とは、全く違う種族にしか見えなくなってしまうています。鬼人族でしたか？ 犬歯が長く血を吸う種族だったでしょうか。

「とにかくですね。どちらにしろ、今すぐにといい訳には参りません」

「どうしてかしら？ 納得のいく説明をお願いするわ」

「まず第一に、今回の件の事後処理が盗賊ギルド連盟の方でも終わっていない、という事です」

そうなのです。未だ『死神の衣』の処分とギャンザ皇国への牽制など、検討すべき事は山の様にあります。その最中にエルフのストレイタム共和国の盗賊ギルド結成に力を貸した等と知れ渡れば、ギャンザ皇国と盗賊ギルド連盟の戦争に、引いてはラナルラ王国とギャンザ皇国との戦争の引き金になりかねません。

しかも、フィーリアさんが増えたばかりで、あと半年後に迫ったラナルラ王国武闘大会までに、選抜メンバーを決めねばなりません。

そのあたりを説明しましたが、少し納得がいていない様な表情です。

「どうして、その武闘大会にクルカ君達が参加しないといけないの？」

「しないといけないではありません。参加し、優勝する事こそが目標なのです。しかもクルカ様は出ません。出ても一回戦で負けるどころか死にます。」

「何か理由があるのね？」

「ありますが、お知りになりたければクルカ様に直接、お聞きください」

「それは教えてもらえないって事と同じっばいじゃない。ずるいわね」

「申し訳ございません。しかし、話に出しましたのでお伝えしておきましょう。フィーリアさん」

「うん？ なんだ。グリント殿」

「貴女の出場は決定です。優勝者に与えられる五大血統との模擬戦が、貴方にとつての本番になる、との事です」

「　　っ！！　　そ、それは……」

「はい。ソルフィッシュ家の　星の召き手　のお披露目が今年の大いに決まりました。そこにぶつけるそうです」

武闘大会はラナルラ王国の貴族の約九割が自分の家来、もしくは雇った冒険者などを三名ずつ出し合い、王国内のチームだけでも約百組参加します。それに加え、どこかの国の貴族の推薦を受けた冒険者、各国の將軍等が自分の力や国の威信をかけて参加します。

そして優勝したチームには、賞金と王国の血統持ちの中でも戦闘を得意とする、エルガルド家の 空の詠み姫、ルードブラッシュ家の 時の語り部、ソルフィッシュ家の 星の召き手 のどれか一人との対戦の権利が与えられます。

毎年持ち回りで行っていましたが、空の詠み姫 は先代である御祖母様しかおられないのでお歳の事もあり、ここ数年は他の二家をお願いしております。

そして今年は、ソルフィッシュ家の 星の召き手 の次代のお披露目を兼ねる事が決まったと、先程連絡があつたのです。

「そうか、それでは今年こそ……私は……」

「フィーリアさんにはフィーリア・ダントリンとして参加して頂きます」

「『ッ！』」

流石にこれには皆さん驚かれたようですね。

そうです。クルカ様がフィーリアさんを娶られる事を決められた、という事なのです。

「ついでに言うておきますと、すぐにも妾に数名迎えて何が何でもレイチエルには一番に産ませる。と力説しておられました」

流石に声に出して反対する者もいませんね。話が唐突過ぎましたか。

しかし、レイチエルさん……

「……………レイチエルさん？ 涙。こぼれてますよ？」

「う、うるさい！ ちゃんと自分で伝ええない主殿が悪いんだよッ！」

レイチエルさんは涙腺が緩いですからね。辛口の料理はまでは作って下さいますが、激辛料理も作れるのに絶対作ってくれません。もちろん、食事中に涙が出てしまうからだそうですよ？

「嬉しそうやな、レイチエルはん」

「だね。私はもうちよつと、ゆつくりでもいいけど」

「複雑だな、娶ってもらえるのに産めないとは……………」

「確実に入ってますって言える貴女達が羨ましいわあ……………」

「せ、先代女王様っ！？ 何をおっしゃっているんですか？ 旦那様がおられましたよね！？」

「ルーラン、よくお聞きなさい？ 死なないでっていった妻の言う事も聞かずに、二百年も前に死んだような旦那は、忘れられて当然なのよ？」

「いえいえいえいえ！ そういう事をおっしゃってはいけません！ 誰かに聞かれてもしたら！ ハイエルフなのに！！」

「ハイエルフでも女は女。覚えておきなさい。そんな事も分らないから、騙されるのよ？」

「グハッ！！ はい……………すびばぜんじだ……………」

なんと、傷口に塩をすりこむような真似を…………

「メルフェイユはん、容赦ないな。ミランダちゃん強敵かもしれんで」

「大丈夫。相手の弱点は、絶対克服できない物だから」

「ミランダちゃんも、カナリーちゃんもわざと聞こえる様に言うてるわよねッ！ 相手になるわよッ！」

「メルフェイユ様っ！ 私がみんな悪いんですっ！ だから許してあげて下さいっ！ お願いしますっ！」

「いや、ルーラン殿？ 流石にそれはおかしくないか？」

「いけませんね。どこでおかしくなったのでしょうか。軌道修正が必要です。」

「とにかくくッ！！！！」

これからは各々の準備が重要になってきますので、今晚は大事なお話をされるそうです。そのつもりでいて下さい。

それと、メルフェイユ様とルーランさんに関しては、今から御祖母様のおられます南館で寝泊まりして下さい。明日にはクルカ様からお話があるでしょう」

「今から？」

「大事な話や今はまだ聞かせられない事情もあります。それが納得できなければ覗き見でも聞き耳でもお好きなようになさって下さい」

「ちょ、じいじ。ええの？」

「ん〜いいんじゃないかなあ。」

ミランダさんは分かっているようですな。

「そんな事がばれたらまず間違いなくクルカ様に嫌われますから。」

覚悟の上であればお好きなように」

「説明せずに好きにしろって言うなんて……ミランダちゃん、怖いわあ……」

「え、あ、えつとつ。結局どういう事でしょう？」

「ルーラン殿。ただ黙って先代女王殿についていけばいいのだ。でない脳筋と言われるぞ？」

「フィーリア、さすが経験者だね。言葉の重みが違うね」

「レイチエル殿……古い事はもう言わないで下さい」

「まだ三ヶ月も経ってないよ？」

「ミランダちゃん……ホントに容赦ないわねえ……」

何故こうもわき道に逸れるのでしょうか……

しかし、これでメルフェイユ様も一旦は落ち着かれるでしょう。

メルフェイユ様のお話では、どうやらエルフの街にはお戻りになる気が無いようでした。

大人しくして頂ければいいのですが。

とりあえず、御祖母様のお帰りをお待ちになり、盗賊ギルド連盟の幹部　つまり、有名盗賊ギルドのギルドマスター達　との会談を開く予定で、この街に滞在されるそうです。

………探究実は武器が出来上がり次第、各それぞれと地方の古代王国迷宮に修行に行く為、不在になるのは言わない方が良いでしょうか……

ついてくる等と言われた日には。

いけません。厄介事の匂いしきしません。黙っておきましよう。

「ま、いいわあ。クルカ君との事はじっくりやるって決めたし。それよりもミランダちゃん。はいコレ」

「……？　なあに、コレ」
「影の系譜についての資料と、過去に発見された呪文の一覧。覚えたら焼却しておいてね？」

メルフェイユ様はあっさりとお出しになりましたが、それは門外不出の物ではないのでしょうか……

なにせ、王国の魔法院でも殆ど知られていない系譜だったので

よ？

「メルフェイユはん、コレどこから？」

「えーっと……北方の……リャンスキー迷宮？ だっただかしら？」

「ニヤスクー古代王国迷宮、一般に『ニヤスク迷宮』って言われてるところやな」

「そそ、そこへ行ったエルフからの報告書の影の系譜のまとめよ」

「エルフはやはり持っている知識量が違いますね」

「寿命がそもそも違うものね。でもそれ、二百年前ぐらいのものよ？ 私は『闇の匣』しか使えなかったわ」

ああ、だから許可が下りたのですね。メルフェイユ様に影の系譜が使える事も驚きですが、そういう理由でしたか。

「影の系譜の魔法を使える人間が外に出るのに、出し渋っても仕方ないでしょ？」

「そうですね。口頭で伝えるか、紙で伝えるかの違いでしかありません。後は処分と保管の問題さえ、しっかり対処できれば問題ないでしょう」

「ウチとしてはあの『闇の匣』が影の系譜やった事に驚きやわ。ミランダちゃん、読み終わったら貸してな？ 新しくなんか発見できるかもしれんし」

「うん。わかった。さっさと覚えちゃうね」

メルフェイユ様が言うには、エルフからハイエルフへと霊位を上げる際にいくつか使える系譜が増える等の特典があるそうです。大抵は最大魔力が増えるというのと、一つ系譜が増えるという事らしいですが……

「あとは、ソウハクちゃんだったけ？」

【キャン！】

「この子、たぶん神獣ね。ドラゴンもそうだけど殻が同じ感じよね。神獣の生まれる卵の殻は大抵希少金属なの。」

神獣クラスのドラゴンはオリハルコンの卵から生まれるし、ロツクタートルはアダマンタイトだしね」

「もろうたヒビイロカネは、どんな神獣の卵の殻やったん？」

「あれはね、フェニックス不死鳥の再誕に立ち会った時の物なのよ。そこにいた各種族の代表がそれぞれ貰ってたから。」

恐らくラナル王国の国宝の聖鍵剣に使われているのは、その時のヒビイロカネじゃないかしら」

ソウハクが神獣ですか。にわかには信じられません、八百年以上生きるハイエルフが言うのです。恐らく間違いないでしょう。

「あ、でも気をつけてね。今はただの魔獣よ？ 神獣になるには少なく見積もって千年以上はかかるらしいから。今はとても強いという事は無いと思うわ。むしろ強い魔物にも殺されるかも。フェニックスは何度も生死を繰り返すから、生まれた時から神獣の強さを持っているらしいけど」

「という事は今はただの魔獣の子供だという認識でいいという事か。まあ、別に神獣だからと何か期待する訳ではない。ペットで家族。それでいいではないか」

「フィーリアの言う通りだね。」

そっか、じゃあ。あたし達より長生きするんだね。この子は。料理覚えさせようかな。後々に伝えられそうだね」

ふむ。あまり深く考えず普通にしていればいいという事ですね。

魔物、魔獣クラスのドラゴンなら何度か出会いましたが、神獣クラスのドラゴンなんて出会う事も滅多にないでしょう。

ロツクタートル玄武なんて、海賊の噂話ぐらいにしか出てきませんし

ね。

「概ねこんなところよ。聞いておきたい事とかあったら早めにね？ 私も獣人達の所やダークエルフ、ドワーフ、鬼族、海の民。ちよつと数えただけで片手じゃ足りないくらい行くところがあるから。今週いつぱいぐらいなら、この街にいる予定だけれどね」

「なんですか、本気で此処に住む気だった訳ではないのですね。これで肩の荷が一つおりましたね。」

「ルーランはん？」

「っ。は、はい」

「解つてると思うけど、色々と言無用な？ 下におったアンタの元恋人、あんな風になりたくなかったら黙っとく方がええで？」

「えっと……知らない事実が多すぎて、何なら言っつていいのかわかりません……」

「もう、いつそのこと全部忘れといたらいいんじゃないのかい？」

「まあ、口封じなどしなくても喋れないでしょう。これからはメルフェイユ様がお付きとして使うとの事でしたし。恐らく楽しいんでいるのでしよう。ルーランさんの気持ちを和らげるためにも。」

「……どこまで相手の事を考えているかと理解しているのかは別として。」

「カナちゃん。確か忘却の薬の実験台探してなかった？」

「せや！ アレを試すいい機会やな！」

「じ、実験台ですかッ!？」

「危険は無いのか、カナリー殿？」

「大丈夫、こないだレイチエルはんに女王がやったみたいに、二十年ぐらい記憶飛ばかもしれんけど。エルフやし大丈夫やる？」

「に、に、に、二十年つて！！ 私、純血種じゃないんですよつ！
そんなに消えたら十歳からやり直しになっちゃいます！」

「ちようどええやん。嫌な男の事も忘れられるし、気分は処女に戻れるで？」

「気分だけ戻つても意味ありません！」

「我が儘な子やなあ……しゃあ無いな、メルフェイユはん、飲んでみってくれる？」

「クル力殿の事を忘れさそうつて言うのね？ い・や・よ」

「じゃあ、ルーランちゃんが飲まなきゃね？」

「えええええ！ だ、だめですよお！ 無理です。嫌です。死んじやいます〜」

「フッフ。ちよつとは元気が出た様だな。ルーラン殿」

「え、……あ。はい。あ、ありがとうございます」

「その調子で、あんまり力こめ過ぎても困るけどさ。しつかりやんなよ？ これからは先代女王陛下のお付きの侍従メイドたる？」

「……みなさん……皆さん……う、ううう。」

……ふ、ふ、ふえ」

「笛かいな？」

「不壊でしようか。何か壊れぬ物でも想像しましたか？」

「ふえええええん！ ひ、酷い事いっぱいいたのに、こんなに、こんなによくしてもらつて……えぐつ。ひぐつ……びえええええん……！」

感情の起伏が激しい子ですね。

「よくしてくれたと思うのは勝手だけど、私から見るとただ苛められてるようにしか見えなかつたわあ」

「メルフェイユ様、そういう事は黙っておく方がいいと思います」

「分かつてるわよ。だから小声で聞こえないように言ってるじゃない」

皆さんに慰められているルーランさんを見ながら、二人で小声で話します。

「ホントに此処は楽しいわね。本気で引越してきていいかしら」

「おやめ下さい。すくなくともクルカ様の身边が落ち着かれる迄は」

「あら、その後ならいいの？」

「私からすれば、五人も六人も同じですよ。クルカ様は苦勞するかもしれませんが、大した問題ではありません」

「ひどい執事ね」

「主が無能者と有名な方ですから」

「ふふふ。本当にそうなら、歯牙にもかけないんだけど」

「本人の才能だけ見れば間違いないですね」

「そういう事にしておくわ」

伊達に年を食って………いえ、何でもありません。北東地方の神殿によく見られる阿修羅神像が見えたなどと言う事はありません。ええ。まったく。

ともかく、後処理に忙しくなりそうですが、一応はこれで決着でしょうか。

本来はルーランさんに食事をさせるつもりでしたが、結局話が伸びてお昼になってしまいましたね。

そろそろクルカ様とルシイさんの用事も終わっているでしょう。呼びに行きましょうか。

行きましようか。と隣にお座りしているソウハクに目で合図し、メルフェイユ様に軽くお辞儀で挨拶した後、皆さんの邪魔にならない様にそつと部屋を出ます。

「この楽しいひと時がいつまでも続けばいいんですが。そうは思う

ませんか？」

【キャウン。クウ〜】

「そうですね。命がけで足場を固め、立場を確立する事になるでしょうね」

後半年ですか。間に合えばいいのですが……………

不安を胸に抱えながらも、信じてもない神に祈りを捧げようとして、思いとどまる。クルカ様は全くない才能を二十年かけて育て上げたのだ。神のお陰などにするのは申し訳ない。

私はその努力が無駄にならない事を願い、お傍で全力を尽くし支えさせて頂くのみです。

第27話 執事とは後処理係？「3」(後書き)

これで二章は終了です。

近衛騎士の得たモノ（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

近衛騎士の得たモノ

私は種族としても、近衛騎士としても誇りを持ち、生きてきた。しかし、その百年に及ぶ人生の中で手に入れた誇りは、今まさに空の彼方へ消え去ろうとしている。自分の五分の一も生きていない女性達の手によって。

「分かった？ グラツフはん」

「そういう事なんだねえ。あたしやてつきり、どっかに隠れてるのかと思つたよ」

私達は今、ワイバーンの背に跨り空を飛んでいる。このワイバーンは荷物運搬用なので戦闘力は皆無だが、その分スピードを重視するように育てられた種だ。

その背中にはどんなスピードにも同乗者が耐えうるように防風の機構石が設置されており、この中に居る限り我々は会話もできるし、食事だって可能だ。

「レイチエルはんはあんまりじいじ達と仕事行かへんしな。今の内に行つといた方がええで」

「なんでだい？ ゆっくり覚えちゃ駄目なのかい？」

「ん〜。ええねんけど。……ご主人様かて、それでええつて言^ゆつてくれると思うけど。それじゃ他のみんなと差がかなり開くで？」

「……そうか、騎士のフィーリア、元暗殺者のミランダにグリ爺から直接指導してもらってる侍従長……実践経験が足りないのは、あたしだけなんだね」

「そういうこつちや、ウチはそれを知識でカバーしとるから。実践じゃどう転ぶかはともかく、事前の準備とか、不測事態の対応とか、頭脳労働の間は役に立てるように知識は詰め込んでるからな」

おかしいのは私なのだろうか？ 彼女達はメイドでありながら護身術だけではなく、それぞれの得意とする戦闘スタイルの戦闘訓練さらには敵の戦闘スタイルに合わせた自分達の行動指針の変更。下手をすると近衛騎士団の班長クラスの戦闘教育を受けている。

しかも先程教えられたのは、身内が誘拐された場合の足取りの追いつ方、アジトでの待ち構え方など、まるで盗賊の事をよく知っているようだった。

だが一番驚いたのは、まるで自分達が誘拐される事も視野に入れている様な、自分達が誘拐されたのならばどうするのかという対策の立て方と、処理の方法だった事だ。

とにかく私は彼女達の言う通り、行方不明となった者達がいた屋敷へと大急ぎで向かっている。何故、大急ぎで戻り、迎撃の準備をし、罫を張り、待機するのか。先程城を出てからさんざん聞かされた。

私としても、何故自分がその程度の事に気が付かなかったのかが分からない。

行方不明のままの二人と、二人をどこかに連れて行ったという剣士風の男、この三名が戻ってくるかもしれないのだ。

その三人の分は昼食を用意していなかったと聞いたので、戻って来ないと判断した。そうレイチエル殿に伝えると、三人の分の夕食の準備を頼まれたかは何故聞かなかったのかと逆に言われた。

確かにそうだ。不甲斐ない事だが言われるまで気付かなかった。それを聞いておけば、戻ってくるかが分かったではないか。もちろん、用意させておいて帰って来ないという事も考えられるが、それを言い出せば際限がない。ただ単に、三人は戻ってくるのかという事を問い詰めるだけでもよかった。その事実は、あの時の私はできる事もせずに城へと舞い戻ったという結果を示しただけだった。

今頃は、他の団員が話を聞いているはずなので、まだ誰も食事を取っていないはずだ。彼女達は、喧嘩になってなければいいが、と言っていた。

人とは食事を抜かれると怒りやすくなる事がある様だ。逆に食事の直後は、何故か頭の回転が悪く、話も聞きやすいはずだと言っている。

確かにその様に感じる事もあるが……そんな事で上手くいくのだろうか？

「ところで、向こうには何名の騎士団員がおるん？」

「十名だ。クル力殿が『恐らくその程度で良いだろう』と言われたのでそうしたのだ。逆に大人数過ぎて意思の疎通が悪くなったり、指示に手間をかけるのは避けた方が良いと言われた」

「という事は食材は足りそうだね。向こうにも食糧はあるだろうけどね」

「でも大丈夫なん？ 料理人がおるんやろ？」

「任せときなつて。エルガルド家の厨房に立つてたあたしが、菓子職人に料理で負けるはずないだろ？ 唸らせて見せるよ」

彼女達はこれでも真剣なのだ……料理で腹を満たせば、快く何もかも話してくれると信じているのだ……いや、私が信じていない訳ではないのだが！ だが、私の知っている事件解決の為の行動とは、地道な調査と相手への尋問で情報を引き出し、裏を取って一斉に行動する。そういうのが当たり前だったのだが……

今回の私は、汚名返上の為に参加させてもらった。参加している他の団員の中には、先日の侍従長殿の力量を目の当たりにした者が半数以上いる。だから今は言う事を聞いてくれていたが『料理で誘導尋問』と言っても反発なく、従ってくれるだろうか……

「さっきからずっと、何を弱気な顔してるん？ グラッフはん。何

「心配事？」

「同胞二名が未だに行方不明なのだ。心配は消えぬよ」

「そうだねえ、でも考えてもどうせ何にも変わらないから気楽にしないよ？ いざって時に動けるようにさ。なあ、カナリー？」

「せやなあ、そんな堅い顔してて疲れへん？ もうちよつと、だらけとつても良いんちゃう？ ずっと気い張ってる疲れるやる？」

「……………私は、彼女達が我が家のメイドだったなら、雇っておく自信がない。確かに美しい女性ではある。しかも有能だと聞いている。カナリー殿に関しては、あの魔力の量と呼びだそうとしていたモノを考えると、とてつもない力量の精霊召喚ができる魔法使いだと分かる。……………分かるのだが……………何故この様にだらけていられるのかが分からない！」

「クル力殿もそうだ！ 初めて女王陛下にお目通りされた時の毅然とした挨拶。上に立つ者としての心得など、先代の 空の詠み姫殿の孫はやはりそれなりの人物かと思ったのだ。だが！ ……………三十分後には女王陛下と同じ視線で話をするわ、話し方はいい加減になっってしまうわ……………」

「なんなのだこの人間達は……………」

「カナリー、何故か余計に辛そうな顔になってやしないかい？」

「せやなあ。なんでやる？ 励まし方がおかしかったかな？」

「は・げ・ま・し・か・た！？ いやいや、怒る訳にも行かないので、私の口からは言えぬが。分かってくれ。もっと真面目に！ 真剣に！ 取り組んで欲しいだけなのだ！」

「しかも、あれで励ましているというのか……………」

「あかん。なんか血の涙流しそうな気がする。どないしょ。レイチエルはん」

「わ、分かんないよ。あたしやそういうのは苦手なんだよ」

「レイチエルはん、乳でも揉ませたつたら？ 元気になるかもしれない」

「ばっ、馬鹿言うんじゃないよ！ あ、あたしのは主殿だけしか触らせたりしないんだよ！」

「あ、御主人様やつたら、落ち込んでたらしあげてるんや。なる程。覚えとこ」

「そ、そういう事を言ってるんじゃないんだよ！ そこまで言うならカナリーがさせてやりやあいだろ！？」

「別にええけど……ウチの胸は高いで？ グラッフはん質素に生活してそうやけど鎧と剣は一流モノっばいからお金持ってないんとちやうっ？」

「か、金さえ払えば主殿を裏切るのかい！？」

「いい加減にしてくれ！！ 私は金で女性を買う様な真似はしない！！」

だ、駄目だ。限界だ。言わせてもらおう！

「もう少し真面目にできないのか！ 貴女方は！ 我々の同胞の安否がかかっているかもしれないのだ！ 真剣に取り組んでくれ！」

「す、すいません……」

「謝る必要はないで、レイチエルはん」

「カナリー！」

「カナリー殿にとっては今回の件など、どうでもいいと……そんな事言うてへん。アンタが頭硬過ぎて周りが見えてへんだけや……何ですと？」

「あのなあ、グラッフはん。あんた、女王のアホな行動で何学んだん？」

「あ、あれは確かに女王が悪いのです。レイチエル殿を代わりのき

く物のように扱おうとし……』ちやう。アンタが何を学んだん？』

……私が？」

「フィーはんと模擬戦に夢中になって女王の傍から離れて、それで女王が無茶したんちやうの？ その事から何を学んだんかって聞
いてるねん」

っ！ その通りだ…… 星の召き手 を排出するソルフィ
ツシユ家と聞いて、思わず模擬戦を申し込んだのは私だった。

「アンタは今、同胞、同胞って頭いっぱいにしてるんやろうけど。
ホンマにそれで柔軟な思考で対処できるん？ 必要な事は何？ 足
取り掴むのと話が聞いたら終わり？ 不安要素はないん？ 山ほど
の人数引き連れてその男が戻って来たらどうするん？ 戦闘で絶対
にエルフを守りながら撃退できるん？ 相手が戻って来^こうへんかっ
たらどうやって見つけるん？」

……… 解らない事、どうしようもない事ばかりだ。

「しかしっ！ そのような解らない事や、どうしようもない事ばか
りを考えていても仕方がないではないかッ！」

「せやな。アンタがさっきからしてるみたいにな。……… ちやう
？」

「ぐっっ！」

「そういうのは無意味やって分かってるんやんか。どっちにしても
不測の事態は起こる。だから、どの場合でも、どういう風にも動
ける様に、頭働かすのと余裕持つのを同時にすんねん。アンタがや
ってんのは思考の無駄遣い」

っ！……！

ガルグ殿の時と同じだ。彼女達には、大事なところでは譲らない

強さを見せつけられる。何故、真面目に取り組もうとする私がこの様に責められるのだ……

しかも彼女の言っている事はある意味、間違っていない。先程、城を出る前の事もそうだ。クル力殿は何の説明も無しに、現地に戻れと言う。確かに話を聞けば、男達が戻ってくる可能性を考え、待ち伏せの準備も必要だ。昼食の用意が不要と言う話から、読んでいるタイミングは合っているのだろう。

何故だ、何故なんだ？ 何故人間で我々に比べ、三分の一しか生きられない種族であるはずなのに、こつも聡明な答えを出すのだ？

「寿命が短いからや。今を大切にしろからや。何があっても後悔はしたくないから、今できる事に集中すんねん」

「……………何故だ？」

「それは何？ 何で考えてる事が分かったんかを聞いてんの？ それとも後悔したくない理由？」

「両方だ。失敗してもやり直せばいいではないか」

「分かった理由は顔に書いてあるからやで。私は女王と同じ考え方ですよって」

「どついう意味だ……………」

「失敗してもやり直せばいい？ 代わりがきくん？ 同胞が死んでもうても？ 料理人の代わりがきくつて言つた女王みたいに、そない言つん？」

「そうではない！

……………だが万が一の時は、次が起こらない様に力を尽くす事が務めだ！」

「だからアカンねん。ダメやった時の事なんか考えへんねん。死んでしまった後の事考えてどうすんねん。やりなおさんで済むように全力出せつて言つとんねん。その力の出しどころを間違えるんは、

アホのする事やで？」

そうか。彼女達は寿命が短い。次があるとは限らないのだ。だからこそ必要な時には全力なのだ。

そして人は非力な種族だ、鬼人族の様に腕力に優れた身体でもない、獣人の様に速さに優れた身体でもない、我々エルフの様に魔力に優れた種族でもない。だから常に全力ではいられない。故に力を蓄えるのか、今の様に。必要な時に爆発的に発揮できる様に。

カナリー殿にとって、それがあの時だったのだ。家族であるレイチエル殿を失いかけた、あの時こそが彼女達にとっての力の使いどころだったのだ。

ならば私にとっては何時なのだ？ 何時がそれにあたる？ 女王陛下が危険だった時、私は死を覚悟したではないか。あの時だけでよかったのだ。

あの後からずっと自分を律し、妻にも家に戻らぬと伝え、城で控えていた。何も起こらぬのに。無駄に肩に力を入れているから、街の様子に気付けなかった。

路上に普段はいない菓子売りが来ていた事など、妻やメイドに聞けば耳に入ったはずだ。それすら解ろうともせずに、目をつぶり、耳をふさぎ、近衛騎士団にも役割をくれと独りよがりでクル力殿に頭を下げた。だから、クル力殿はあの時、約束を守るのならばと条件を出したのか。

気付け、私よ。考える。私にも、近衛騎士団団長として行ってきた実績と経験がある。これから起こる事は何だ？ 必要な事は何だ？

今から必要なのは情報を少しでも引き出し、足取りを追う事だ。行方不明の二人の同胞を探すのも臨機応変が要なのだ。

情報を引き出すには言っていた通り、レイチエル殿の料理だろうが、尋問だろうが、少しでも聞き出しやすい方法が必要だ。そして聞き出せるのならば、おかしな言動や矛盾した話を見つけ、彼らから徹底的に引き出すのだ。その時の為に今は力を蓄えておこう。

「あかん、もっと固まっとる。どないしよ。レイチエルはん」
「カナリーのせいだぞ？ あたしや知らないよ」

ん？ 何の話をしているのだ？

まあいい。私は堅物などと言われる様な性格だ。彼女達のように気を抜いてくつろぐ事はできない。だが、少し心に余裕を持つ程度の事ならば可能だ。

理解した。己の持つ力の使い方を。それを考えると、自分は今まで何と安っぽい威厳を振りかざしていたのか。

うむ、帰ったら騎士団でも早速実践しよう。部下が騎士団控室で少々気が緩んでいても良いではないか。外でしっかりやっていれば。

「カナリー殿！」

「ひゃい！ も、もう何やのん。驚かさんといてえな」

「理解しました！ 私はやりますぞ！ 同胞の為にも！」

「あ、そう？ 何や知らんけど元気になったんなら、それでええわ」
「グラツフ殿？ まだかかるのかい？」

「もうすぐ着きます。もう見えています。あそこです」

私は、かなり大きく見える様になってきた、屋敷の屋根を指さしましたが彼女達は不満そうだった。

「ウチ人間やから、そんな遠くは見えへんねん」

「あたしも見えないけど……」

「見ている所が違っただけです。あの緑の屋根です。保護色で見え難いのでしよう」

「あ、あれか。ああもうすぐそこやん」

「すぐ着くね。降りる準備するかね」

「せやな、グラッフはん。その荷物とって？」

そっだ。しつかりやるだけでなく、ゆとりも必要なのだ。

彼女達の料理とやらにも期待しても良いではないか。今はこの二人と共に全力を尽くすのみだ。ゆとりも持ったままで。

「グラッフはん、聞いてる？ グラッフはん？ グラッフはん……」

……

「……………グラッフ。グラッフ！ おい！ 聞いておるのかグラッフ！」

「はッ！？ も、申し訳ありません。エメルローザ様」

「おぬし、何か悪いものでも食ったのか？ そのまま何処まで行く気じゃ？」

前を見ると、私は一人だけ評議院講堂の前を通り過ぎようとしていた。あわてて戻り、エメルローザ様についていく。

いけない、彼女達の事を考えて思考の中にどっぷり浸かってしまっていた。気をつけねば。彼女達はもう、自分の国へと帰って行く

た。あれからもう一週間だ。まさか、こんなに早くあの時に学んだ事を試される機会がこようとは。

「どうしたのじゃ？ 心配事か？」

「いえ、そうではありません。」

私は今回の事で彼女達からいくつかの事を学びました。そのひとつを実践しようと思っただけです」

エメルローザ様は本当に珍しい物を見たという顔をされていますな。

「ほう。おぬしが人間から学んだ等と言うとは。何を実践するのじゃ？」

「人間は短命故に、一つ一つの事柄のここぞという時に驚くほどの力を発揮します。恐らく我々は長命なせいで、失敗はやり直せるものと考えてしまっているでしょう。いつか正せばいい、そう思っ

てしまっていたのでしょうか」
「ふむ、そうじゃな。この都市の体制も、二百年は変わってないと聞いておるの」

今からそれを変える為に、エメルローザ様と評議員達の所へ行くのだ。

「私はこれから先、全てやり直しのきかない事なのだと認識し、全力で取り組みます」

「失敗したらどうするのかの？」

「その時に最善をまた考え、全力で取り組みます」

「過労死するのではないかの……………」

「大丈夫です。必要な時以外は力を抜く、という事も学びました」

「何時も毅然とした態度をたもて等と言っておった頃が嘘の様じゃ

の。しかし力を抜きすぎて講堂を通り越すなど、意味が無いではないか」

そうだ。我々は今から評議員どもの会議に乗り込み、この都市全体を変える。もう此処は、エメルローザ様と私にとって戦場なのだ。

「申し訳ありません。ですが、自分の役目は果たして見せます。ご安心を」

「悪いの。近衛騎士団団長自ら、自分を無能と言わせねばならんのはの」

「必要な事です。エメルローザ様と共に、全てのエルフの為に評議員どもを黙らせてやりましょう」

「うむ、覚悟は良いな？ サーフエン卿が中で話題の準備をしている筈じゃ」

目の前の大きな扉の向こうからは、議論する声など全く聞こえてこない。

昔は煩いぐらいだったと聞いているが。

「この静かな講堂に、嵐を起しに来たのじゃ。覚悟は良いかの？
グラフ」

「何時でも。何処までもお供いたしましょう」

「うむ、では参るか……」

自分の主の為に、目の前の扉をゆっくりと開いていく。

さあ、覚悟しておれよ。評議員ども。貴様たちの顔を真っ蒼にしてくれるわ。

近衛騎士の得たモノ（後書き）

女王の心(前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

女王の心

わらわはいつも迷い、怯えておった。
わらわはただの部品なのでは無いかと。

わらわは女王になるべくして生まれ、その通りとなった。
しかし、その霊位の高さ故にハイエルフという称号を得ておる事が、いつもわらわを不安にさせた。自分がただのエルフ族を守る為の、精霊や神樹とのパイプ役という部品では無いかと。

わらわは愛されておらず、愛する事が出来ぬのでは無いかと。

だからこそ、皆の前では我儘に振舞った。子供だと言われようと、親離れ出来ないと言われようと無視し続けたのじゃ。

じゃがわらわは気付いておらぬだけであった。愛されておった。顔も殆ど覚えていない父上ですら、わらわを愛してくれておったと教えられた。

ならば、わらわも愛そうではないか。愛してくれた父上や母上と同じように。

エルフという種族を。その為に全てを自分でこなそうではないか。もう、迷う事など無い。怯える事など何もない。我が儘も終わるじゃ。

わらわの戦いを始めよう。

「静まれ。席につくのじゃ」

「しかしッ……………』……………二度は言わぬ。座れ。皆もじゃ……………」

ハイエルフたるわらわの本領発揮じゃの。そう思いながら会議室が音を立てて軋む程、ハイエルフの特有の魔力を放出し、宣言する。

「もう一度言う。サーフェン卿の評議員資格は剥奪じゃ。反論は聞かん……………が、説明くらいはしてやろうかの」

突然、会議中の評議会に女王と近衛騎士が乗り込んで来た事で、講堂内は騒然となっておった。そこに加えてサーフェン卿の罷免を皆に伝えた結果、サーフェン卿の派閥の者は色めき立った。

言葉とわらわの言葉と雰囲気だけで納めるのには、流石に無理かと考えておったが、案外上手くいくもんじゃの。カナリーとかいう女に感謝じゃの。

人に魔力で無駄に圧力をかける。普通ならそんな事はせんものじや。しかし、慢心し、彼我の力の差、格の差を忘れた様な腑抜けの気付けにはもってこいじゃ。

それに当の本人の、サーフェン卿が何も言わぬのじゃ、誰も何も言わぬのも当然かの。サーフェン卿には事前に伝えておるし、演出はすべて本人じゃ、問題あるまい。

「さて、最近、街に菓子売りが来ていた事は知っておる者もおらう。

アレはサーフェン卿の考えた事じゃ。その伝手の中に間者が入り込み、数名の同胞が危機に晒された。

故に、サーフェン卿の評議員は罷免。全財産は没収じゃ。

今後はわらわの元で相談役として付けてもらう。

……………奴隷契約をした上でな」

「『 ツ！』」

事前に伝えておつた者以外はやはり驚いておるの。

まあ、実際に奴隷契約をするのはサーフェン卿とその妻じゃがの妻の方が主での。

「そつ、それは余りにも酷い仕打ちなのでは無いですか。女王陛下
！」

……こやつ、誰じゃつたかの？ ……

おお、サーフェン卿がコツソリ指で八を示しておる………八………
…確か序列八位のサーフェン卿の右腕とかいう男かの。

名前などわからぬ。評議員は嫌いじゃからの。三つの派閥の頭し
か名前と顔が一致せぬわ。

「誰が貴様に発言を許したのじゃ？ 先ずは宣告し、許可を得てか
ら言わぬか。下郎」

勤めて冷静に。そして、威厳と不機嫌を混在させ、恐ろしく怖い
時の母上を再現しながら言うてみる。そして魔力の維持も加えるの
を忘れぬ。

「も、申し訳ございません。序列八位、ブランドルでございます。

発言させて頂きますでしょうか」

「却下じゃ」

「『なツ！』』」

七割の者が驚いておるの。使えるのは三割かの。ふむ、サーフェ
ン卿は四と示しておるの。態と驚いた振りをしておるものがあるの
か？ うむむ、難しいのう。

「どこの世界に、自分の主の腰を折る臣下がおるのじゃ？ エルフとはいつから礼儀をわきまえぬ、低俗な人間貴族と同じになったのじゃ？」

「女王陛下、ご無礼を承知で言わせて頂きます。その発言は人間族を敵に回します。お控え下さい」

「ふむ、すまぬの。サーフェン卿。言い方が悪かったようじゃ。人間によくおる腐った貴族の様な者は、遠慮なく発言せよ。サーフェン卿、わらわの発言がエルフとしての尊厳を損なう場合は無礼も許す。言つが良いぞ」

「はっ。その際は発言させて頂きます」

殆どの者は今迄のわらわはと違いすぎて、驚きで声も出せぬ様子やな。

「では続けるぞ？ 此度の処分はサーフェン卿も同意しておる。本来なら死刑かもしれぬと本人は言っておった。其れを母上が止め、此度の処分となった。

ああ。母上がおらぬ事に戸惑いを覚える必要は無いぞ？

母上はこれより二百年程、城には戻らぬ。正確には、国外での活動に集中するとの事じゃ。未だ行方のわからぬ同胞もある様じゃしの」

次々に出てくる事実には頭がつかない者が五割、いや、六割かの？ そこに発言する者が現れる。

「エメルローザ様、序列二位のシュワブズと申します。発言をお許し頂きますでしょうか」

「ふむ、シュワブズ卿は確か、騎士団の運営管理も担当じゃったの。よい、申せ」

サーフェン卿が言うにはこの男を引き摺り下ろさねばバランスが保てないそうじゃ。なんとか追い詰めねばのなんのじゃが、さて

「国外の活動と言いますのは、同胞探しで間違いないでしょうか？
もし、そうであれば早々に予算を組み、メルフェイユ様の身辺警護に当てる者を選別いたした方がよろしいかと……『無用じゃ』……

…は？」

「いらぬ、そう言ったのじゃ。聞こえなんだか？ 歳かの？ 引退するなら良い別荘を貸すぞ？」

「……その様なご心配は頂かなくとも、問題なく聴こえております。ただ、仰られた事が、余りにも常識を覆す物でしたので……」

「常識のう……」

其れは何か？ 毎年予算を絞り取りながら、全く成果を出せていない騎士団の同胞探しの活動に、さらに金をつぎ込むのがお主の仕事という常識かの？」

「……結果は出せていない訳ではございません。毎年数名ずつではあります。先の大戦で行方不明となった者は戻って来ておりま……」

『空の詠み姫 のお陰での』……何ですと？』

ふん、知らぬと思うておるのかの？ お主らがやったのは、周辺の街に戻ってきたエルフの保護だけでは無いか。見ておれよ。その細長い顎をもつと長くしてやるわ。

「母上が 空の詠み姫 に依頼し、奪還されて周辺の街に送り届けられている同胞は毎年約三名。では、我らが騎士団は自力でどれだけ見つけたのじゃ？ グラッフ！」

「はっ」

グラッフに持っていた資料を渡し読みあげさせる。

「この十年国に戻った行方不明の同胞は三十三名。うち騎士団が自力で確保できたのは……………二名のみです」

ふむ、グラフもはっきりとした数字は知らなかったと見えるの。

「シュワブズ卿、この記録は近衛騎士団の正式なモノだそうじゃ。

……………さて、毎年の予算はどこに行くのじゃ。ん？」

「そ、其れは騎士団の維持と……………」

「ここにのう、近衛騎士団副団長と騎士団の団員の装備一式の購入目録があるのじゃがの。ついでに何故か、人間が保養地と言っておる場所ばかり羅列されておる、同胞探索地の目録もの。

……………『エメルローザ様』……………そうじゃったの。言うのを忘れておったが、副団長も側近とやらも、今朝から牢屋じゃぞ？」

「『……………どういう事だ？……………わからん……………』」

ふむ、シュワブズ卿の派閥の者以外は、意味が分からん者もおる様じゃな。

「……………静まれ！」

わらわは、皆の者は真面目に、この国に覚えておると信じておる。しかしの。何処にでもおるモノじゃ。腐った輩と言うモノはの

シュワブズ卿の顔が青くなったのお。母上も我慢せずにとっとここうしてやればよかったのじゃ。

何より、いつも威張っておった鳥頭どもが、青くなったりしておるのは楽しいのう。

「シュワブズ卿。エルフとしての矜持があるのなら、自分のしてい

る事の清算くらいはするべきでは無いかの？」

「……………解りました。私もサーフェン卿と同じ処分。もしくは極刑を。」

大変、申し訳ありませんでした…………リューレンベルグ卿は私の指示により行った者です。何卒、寛大な処分を」

ふむ、エルフの矜持と部下を想う気持ち、そのぐらいは残っておるのか。

シュワブズ卿も使えるやもしれんの。リューレンベルグ卿とは誰の事が分からの。ブラッフなら知っておろう。後で聞くかの。

「ふむ、よかるう。部下の方は心配するでないぞ？　ちゃんと考えておる」

流石にすぐに騒がしくなってしまうの。いちいち黙らせるのが面倒じゃのお。

まあ、仕方あるまい。此処は我慢じゃ。

「静まれ。皆の者。そしてシュワブズ卿と同じく、身に覚えのある者は申し出よ。まあ、わらわは出て来なくとも、一向に構わんがの？」

「エメルローザ様。その様なお戯れはおやめ下さい。……………」
『姿勢を』」

おお、ちょっと楽しくなって気が緩んだの。最後に小声で伝えてくれるとはサーフェン卿も良い仕事をするのう。

「どうせなら、騎士団を引き連れて該当者の自宅に乗り込みたかったんじゃがのう……………まあよい」

そして、足元においてあった鞆の中から、羊皮紙の束を三つ取り出し机の上に置いて話す。

「お主ら評議員が三つの派閥に別れておるのは知っておる。これは派閥ごとの不正の記録じゃ。派閥の中でも上位数名の者だけを上げておる。サーフェン卿、シュワブズ卿、そしてナルベルド卿。取りに来るが良いぞ。」

何じゃ、ナルベルド卿。

まさかとは思うが、自分の処だけは無事かと思っておったのかの？

……………阿呆か？ 貴様」

「ぐッ！」

「その足らん頭でよく考えよ。下っ端まで全てに罰を与えると、この都市は機能せんようになってしまふのはわかりきっておる。じゃから上位数名分しか持ってこなかったのじゃ。此処に載っていないと調子に乗るのはよいが、後から家族を泣かせたくなければ、お主ら自身でお主らの罪を考えよ。そして、お主ら全員の罰の内容をおぬしら自分自身で決めよ」

ふむ、まだわらわを舐めている顔をしておる者があるの。まあよい。その顔がいつまでできるのか見ていてやろうかの。

「それが終われば、今期の評議員を選出しなおすぞ？ 派閥も騎士団を頂点とする部門の派閥と財務担当を頂点とする商業や農業の派閥の二つに減らす。心しておけよ？」

そこでひと呼吸置き、目を閉じて、部屋内の魔力に自分の意識をしっかりと持ち、最後通告を行う。

「この改善が今日中に達成出来ぬ場合、ハイエルフの秘術の全てを

持ち、現在城におけるハイエルフと、その素質ある者全てを率いてこの都市を見捨てる」

「『 なあッ！』」

「高貴なる種族としての自覚を取り戻すためじゃ。着いてくる民は連れて行く。其れ以降、ついて来た者以外のエルフをエルフとは認めぬ。まあ、自分達で自省も出来ぬ様な、下らぬ種族に堕ちておらぬ事を祈ろつかの」

さて、時間はどの程度くれてやればいいのかのう。

「女王陛下、序列十八位、鍛冶ギルド統括のキュヒドと申します。

発言お許し頂けますでしょうか」

「ふむ、構わぬ。言うてみよ」

「確かに、商売の上で賄賂などを受けた事があります。しかし、そういったやり取りを全部否定しては他国の商人とは渡り合えません。そこは認めて頂きたいのです」

「うむ、許す。

ただし、エルフとして、高貴なる種族としての誇りを捨てるものだと自覚して行つたのじゃぞ？ 其れを任せるお主にはエルフを捨てよと言っているも同然じゃろう。しかしの、誰かが被らねばならん泥じゃ。其れを自ら被り、なおも私欲の為では無いと言える生活をせよ。そうできるのであればお主に全て任せる」

わらわも子供では無い、分かっておる。暗部の無い国など無いのじゃ。

しかし、其れを私利私欲で行うか、同胞の為に行うかで価値は変わる。同胞の為とはいえ、泥をかぶる者は蔑まれるじゃろうの。その者には悪いが、そう言う人材が国の為には必要なのじゃ。

「解りました。そこ迄、理解して頂けるのであれば、全ての泥は私

と腹心の部下で被ります。個人所有の一切の贅沢品は処分しまし
う」

「其れはいかんの、質素すぎても他国の商人に舐められるじゃろ
う？ 支給してやろう、鍛冶ギルドの建物の中分だけはな。服も仕
事着として贅沢なモノを用意してやろう。使いどころを間違える事
の無い様にの？」

「了解いたしました、エルフの血が高貴さを失わぬ様、全身全霊、
全力で支えさせて頂きます」

こういふ輩ばかりなら、苦労もせぬのじゃろが。ぬう……ん？
こやつ、ずつとわらわを見つめておるの、惚れたかの？

……解っておる。冗談じゃ。睨むなサーフェン卿。

「ふむ。覚悟を持つ者は強く高貴じゃの。此奴に泥を被せねばなら
んのは損失じゃの」

「ありがとうございます。ですが他の方々は、私よりも序列が上の
方ばかり。おそらくさらなる高貴さをもって、すばらしき判断を見
せて頂けるはずです。我々はエルフです。人間のように誰でもなれ
る貴族とは違い、高貴なる血が評議員に成らしめているのですから」

満足そうじゃの。此奴、頭も回るのう。序列上位の者の退路を断
つ為に、泥を被りよった様じゃの。コレでは評議員の連中も逃げの
処分案など出せんじゃろ。今のうちに畳み掛けるかの。

「食事は用意させよう。全員この場から出る事は許さぬ。自分がど
んな罪を持っておるかなど自分で分かるじゃろ。日が沈もうが月
が満ち様が構わぬ。結論を出す迄は此処にいてもらうのじゃ。グラ
ツフ。食事の搬入用意と騎士団の手配を」

「は、はい。騎士団はどの様に致しましょうか……」

「こういつ処で気が利かんのじゃ。グラフは政治向きではないの
う……」

「グラフ殿、牢に居る者以外は全員、この講堂の包围。誰も通す
などお伝えなさい。許可なく出た場合はそ奴はエルフではない。処
分で構わないでしょう」

「シユワブズ卿、主がそう言つたのじゃったら其れでよからう。行く
のじゃ、グラフ」

サーフェン卿は何やら羊皮紙に何かを書きグラフに渡している
の。

「何を頼んだのじゃ？」

「『時の鐘』の使用許可を出しました。此処に届けてもらいます。」

『時の鐘』とはエルフの秘室の一つで、鐘の効果範囲では時間が
早く流れるというものじゃ。先の大戦では、主に都市が強襲された
時に市民の撤収に使用されておつた。

音は鳴らぬが使用しておれば、この講堂の中では時間が早く流れる
じやろう。恐らく、一時間で一日分の会議ができる訳じゃな。しか
し、生理現象はどうする気じゃ？ ん？ 建物全体を範囲に巻き込
む気かの？

まあ、良いわ。わらわは会議には参加せぬからの。いつでも出て
いけるしの。

さて、会議の結果がどうなるか、楽しみじゃの。わらわは城に戻
つて、レイチエルとやらの残していきおつた、『しゅーくりーむ』
を食べるのじゃ。

「エメルローザ様。お菓子も持って来て頂けるように、グラフ殿に依頼しましたので、心おきなく会議が終わるまで『^{魔力}場』を維持して下さい」

「な、なんじゃと！ うん、ご、ゴホン！……う、うむ、そうか。ならば此処に居るうかの。この国の行く先も気になるしの」

おのれ、サーフェン卿め、わらわを謀りおったな！ くそう。そんなに時間が経過してしまつては『しゅーくりーむ』の味が落ちるではないか！

こつそり、ダントリン家の屋敷に貰いに行つてもらわねばならぬな……

母上が、皆に内緒でクルカ殿の所とつないだはずの個人用の転移門が開いておつたらいつでも可能なのじゃが……

グラフに確認させるかの。

しかし、覚えておれよ。サーフェン卿め、必ず仕返ししてやる。取りあえず食事には『タバコス』を山ほどかけてやるう………

鍛冶師の弟子の決意（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

鍛冶師の弟子の決意

親方に師事して5年が過ぎました。初めの4年は、親方にも兄弟子さんたちにも、男だと思われていて大変でした。でも腕は認めてもらえてたんですが。

逆に女だと解ってから、兄弟子さん達は腕を認めてくれなくなり、親か……師匠は何故か金槌の振るい方だけは、教えてくれなくなりました。前は師匠が後ろから手を回して、一緒に金槌を振ってくれたんですけど……

あの日は確か、みんなでお酒を飲みに行く約束だった日でした。そんな日に、私だけ片付けが遅れていて、少し遅れて着くと、既に酔っ払った師匠に聞かれたんです。

「おい、カレン。こいつら二人が言うんだがよ。お前は実は女じゃねえのか？ 男にしちゃ力が無さ過ぎだぞ？ 兄弟子に二人に馬鹿にされたくないや、此処でしっかり肉でも食え！ ほらっ！」

「親方。それは酷いですよ。俺達は女みたいな手の割には、ちゃんと槌が振れてるなって言ってたんですから」

「そうっすよ。カレンなんて、女みたいな名前の家名を持って生まれたのに、頑張ってるなあって言っただんじやないですか。俺なら泣きますよ？ こんな家名じゃ絶対に、自分の作品に銘が刻めないって」

「口答えすんなっ。親方っていうな！ 最近のドワーフは師匠って呼ばせるのが、流行らしいんだ。お前らもそうしろ。でなきゃ俺がモテねえだろ！」

「あの……親か……『師匠だっ！』……はいっ！ 師匠っ！」

「よし、なんだあ？」

「私、女ですけど……」

その時の師匠と兄弟子二人の顔は、一生忘れられそうにありません。時間が止まった様に、きよんとした顔をしていました。

「ぎゃははっはははっ」

「カレン。お前面白いな！ ねえ、親方！」

「お、おう。お前面白い冗談言うじゃねえか。ビックリしちゃったぜ」

「ですからっ！ 私、女なんですけどっ。冗談なんかじゃないですっ！」

「『……………マジで？』」

兄弟子二人が声をそろえて聞いてきたので、証拠にギルドカードを見せる事にしました。

「はい。もちろん。見て下さい。鍛冶ギルドのギルドカード。女になつてますよね。偽造とかじゃないですよ」

「え、俺。マルクス・カレンだと思つてた。お前の名前マルクスじゃないの？」

「それは家名です。マルクス家のカレンです。カレン・マルクスです」

「マジで？ 俺はそんな体してるし、絶対女じゃあり得ないと思つてた。だってどう見ても12歳ぐらいの少年だろ？ 顔なんて若い男の子じゃねえか」

「体とか顔とか！ 失礼なことばかり、言わないで下さい！ 私だってちよつとは気にしてるんです！ ついでにですが、もう24歳です！」

「ハア！？ カレンお前、24歳だったのか？」

「親方まで！ ちゃんと自己紹介の時に言いました！」

「いや、自己紹介って……お前、焦って噛み噛みだったじゃねえか。あん時、14だって言ってたろ？」

「24って言ったんです。確かに上がってしまっただけ、噛んではいましてが……」

そうです。噛んでいましたが、とぎれとぎれでも、ちゃんと言ったんです。親方は何故か、反応が鈍いです。

「……まあ、待て。カレン。落ち着け」

「あの、私は落ち着いてますが……」

「いや、そういう事じゃないんだな。うん。親方。俺、兄貴と一緒に釜の調子見てきます。明日は朝一で工房行きますんで、そんな時どつするか教えてください」

「おお。流石、バムス。それいいな。親方。じゃ、また明日」

そう言って、兄弟子二人は工房に戻ってしまいました。

「あ、あれ？ ルギルとバムスはどこ行った？」

「え、さっき、釜見てくるって行ってしまいましたけど？」

「くっそ、二人して逃げやがった！ ったく、まあ、俺のせいっちゃ、そうかもしれないなあ……よし。カレン。破門だ」

「そうですか……って。ええええええつ！ 何ですかっ！
「何でもくそもねえッ！ 俺んこの工房は男専門女人禁制なんだよっ！」

「そんなの聞いてないですよっ！ しかも、もう4年以上も働いてるじゃないですかっ。横暴ですっ！」

「ウチは鍛冶ギルドから『男しか育てない』って条件で、エルフの里で工房開かしてもらってたんだよっ！ お前は工房畳めっていうのかよっ」

「そんな……何で……」

困りました。今、他の工房に移ると、下積み明けからの再修業ですから3年分の実績がペアです。そりゃ、既製品よりちよつといい程度の武器しか、作れてないですが、希少金属レアメタルの『芯』作成だけは一流以上だつて褒められたのに……

あ、えつと。下積み明けつて言うのは、下積み期間は終了しましたつていう事です。それと『芯』つて言うのは剣ならば真ん中に仕込まれる芯棒ですね頑丈さを上げるモノです。お金のない方は、鉄の剣の『芯』にミスリルを使う事で、切れ味は鉄の剣ですが芯の強さにミスリル分が加わつて、折れ難くなります。

この技術は、普通の魔術用の杖はもちろん機構を組み込む前提の魔杖、魔剣や魔槍、魔弓などの核を必要とする武器では、絶対欠かせない技術なんです。ただ私の場合、中の『芯』は良いと褒められるんですけど、体が小さいので外側の作成時に力が乗りきらなかつたりして、鍛造なのに鑄造をちよつと上回るぐらいの成果しか、出せないんです……

「うう、じゃあ、親方の『燐晶剣』の共同制作証明だけ下さいつ。アレの『核』と『芯』は共同ですよ。でないとまた、下積み明けからになってしまいますっ」

「アホかつ！ そんな事したら、お前をウチで雇つてる事が、ギルドにはれるだろうがつ」

「うううう。それじゃ私はどうすればいいんですかアアア！」「お、おい。泣くなよ。」

「そんなごど、言つだつて。いま、どわぶのぐにもどつてば、あだらしいごうぼつでじだずびあげがらになじゃうじゃないですがああああ」

「ああ。もう、何言つてるかも分からんから泣くな。よし、ちよつとまで。明日までに考える」

「ぼんどに?」

しかし、ここで泣いていてもどうにもならない事は解っていたので、親方の言う通りにする事にしました。

「まあ、今日はゆっくり休め。な?」

「あい…………おやずびなざい…………」

そして、翌日まで一睡もできずに、そのまま工房へと向かいました。

「来たなカレン。まあ、座れ」

「はい……………ぐすっ」

既に兄弟子も達も来ており、その雰囲気から話があまり良いモノではないんだろうなあと思っていました。すると兄弟子のルギルさんが話し始めました。

「カレンも知ってると思うが、ドワーフは帝国に先の大戦で里を焼かれた。そのせいで圧倒的に女が少ない。

そんな中でガルグ師匠と二人の巨匠はそれぞれが使命を帯びて工房を開いている。鍛筒の天才ランドルさんと、鍛造ではガルグ師匠共に天才と言われるビオルーフさん。

この三人を含め、職人はみんな外に出たがった。ドラゴンにオリハルコンの作成を聞きに行きたかった人もいれば、エルフの刻印に興味を示した親方みたいな人もいる。でもみんな諦めたんだ。何でだと思っ?」

「わがりません…………」

その時はその話が何の関係があるのか、私は全く知らなかったん

です。すると続きをバムスさんが引き継ぎました。

「ドワーフの純血種は、天才鍛冶師が生まれる確率が高い。だから国に純血種が生まれたら、必ず今代の最高の師匠の元に置く、そう決まったんだ。ところが女が少ないから里から出す訳に行かなくなつた。それでも外の知識を入れる事が必要だで行つた三人の天才達が出した答えは鍛造は天才が二人いるんだ。一人は外で知識を吸収し、定期的に里に持って帰ろうつてな。ところが今度は、困つた事に女が怒つた。外に学びに行けない、と。そこで外では女には教えないが、持って帰つた技術は優先して女に教える。もちろん女は必ず、子供にそれを教える条件付きでだ」

そして最後には師匠がいつもより、ちょっと優しそうな声で言いました。

「だからな、里で外に出てくるのを我慢してくれてる天才ども、まあ、俺よりは凡才だが。そいつらにも悪い。俺だけ約束破って工房開いてるんじゃない。だから、女を此処に置く訳にはいかねえ。解るだろ。矜持を大事にするのが俺らの仕事でもある。それを無視し続ける訳にも行かねえ」

「はい……………それは、解ります」

そつだ、振るう価値もない方に武器を作るのは、矜持に反します。里のみんなの約束を破つて続ける事には意味はないです。

「じゃあ。やつぱり、里に帰らなきゃいけませんよね……………」

「……………だが、4年も気づかなかつたんだ。俺が次に技術を持って帰るのは2年後だ。2年くらいなら、お前を男だと思つておく事は、できるかもしれん」

「えっと？ どういう事でしょうか……………」

「ルギルさん、コイツ馬鹿ですよ。やっぱり追い返しましょう」

「バムス、ガulg師匠の決定だ。気付かなかった俺達も悪い」

「そういうこつたな。カレン。お前は男だ。少なくともギルド関係者には、そう言い張れ」

「ええええええ！ な、なんですかつ。そんなの嫌ですつ」

「じゃ、女だと言って里に帰って、男のフリして入り込んだって言われて。」

下手すりゃ下積みからやり直したが、そっちがいいか？」

ルギルさんはとても意地悪そうにそう言います。

「それはもつと嫌ですつ！！」

「じゃ、男としてあと二年だけここにいるしかないな」

「……………解りました」

かなり嫌そうなバムスさんの言い方には腹が立ちますが、言い返せません。

「ま、一本でいいから二年で仕上げてしまえ。そうすれば、ビオルーフに紹介状を書いてやる。エルフの里で単独で頑張っていたカレン・マルクスとして、だかな」

「……………えつと……………あれ？……………」

「おい、カレン。ビオルーフさんに見せるんだぞ？ 生半可なものじゃダメな事解ってつか？」

ルギルさんの意地の悪い顔とその言葉も、何故か優しさがある様に見えました。

「そうだぞ。俺らでもビオルーフさんに見せれるものなんて出来ないんだ。お前は外側は諦めて『芯』^{インジュット}だけ作れ、^{インジュット}鑄塊とな」

バムスさんの言う事は最もで、それならば師匠並みのモノが作れます。それを持って帰れば、師匠並みの方の元で勉強を続けられるんです。下積み以外で。

その時初めてちょっとだけ、この兄弟子たちが好きになりました。ちょっとだけですけどね。親方は……内緒です。

そんな事があり、私は親方の元にいられる事になりました。そして今、あと10ヶ月程で里に帰らないといけないのですが、とんでもなく大きな仕事が舞い込んできています。

目の前には、

ヒヒイロカネ	10kg
オリハルコン	60kg
アダマントイト	60kg
ミスリル銀	200kg

が鎮座しています。

私の仕事は、このヒヒイロカネを使って『芯』を作り、それを中心に埋め込んだオリハルコンとアダマントイトの『インゴット鑄塊』を作る事です。

そこから師匠が剣やら短剣やらに鑄造で作っていきます。研ぎはルギルさんが、装飾はバムスさんが行うそうです。

刻印はカナリーさんという依頼主の一人の方が自ら行うそうです。

「グラフィックさん、お疲れ様です。これがそうですか……すごいですね」

「いえ。これはあくまで、一度で制作が成功した場合の分だそうです。ヒビロカネ以外は、ガルグ殿の納得がいかなければ、女王陛下のお小遣いから更にお出しになるそうです。それに弓用の樹は神樹を使うそうですよ」

「ええええ!!! いいんですか!?!」

「いいらしいですよ。『芯』を作るのはカレン殿ですよね?」

「はい。そうですか……」

「エルメローザ様が、神樹にその『芯』を突き入れて、包み込ませておいて、カレン殿と一緒にその樹ごと引き抜く事で『芯』に包まれた『神樹の鑄塊』も用意するそうです」

「……あれ? 今、私と一緒に、と言いました?」

「言いました。エルメローザ様には『神樹の鑄塊』がどの程度の大きさが必要なのか、分かりませんからね。貴方も一緒に神樹に入るんですよ」

「き、聞いて、聞いてないですよおー!」

私は本気で聞いていない事だったので、ビックリしました。エルフの都市にいたのでエルフの方が神樹に対し、どれだけ敬意を払っているのかは、よく知っています。それはもう、神樹なら虫がいようが、汚れていようが、そのまま舐められるという方がいるくらいで……

「しまった秘密だったのか。

……秘密はギリギリに暴露した方が面白いと、カナリー殿に教えられたのに失敗したか……『面白くなくていいんです!』……

オホン。まあ、そういう訳で、ちゃんと事前に伝えましたからな。
カレン殿」

「ううう……拒否できないの知ってて、言ってますよね……」

「まあそうですね。まかり間違ってもこけて、樹に傷でも付けようものなら……の

……で……となってしまうからな。普通は誰も入りたがりませんな」

「ちゃんと言って下さい！ 所々聞こえなくてそっちの方が怖いです！」

「では、確かに原石は渡しましたよ。ちゃんこの家には昼夜問わず、交代で護衛をつけますのでご安心を。」

……他にも安心できない要素はあると思いますが……」

「グラツフさん！？ 今何が言いませんでしたっ!？」

「いえ、別に何も。ではこれで失礼します。」

また神樹に入る日にお会いしましょう」

そうして、グラツフさんは私の不安を煽るだけ煽って、帰って行きました。

うう……お腹が痛くなってきました……これから私も色々計画しなければいけないのに……

私は原石がちゃんとあるのか、確認しました。カナリーさん達のお屋敷から運ばれた分もある様で、包みがバラバラでちょっと時間がかかりました。確認し終えて、おおよその予定を立てましたが、恐らく私の部分の工程だけで10ヶ月。

それも、ぎりぎり間に合うか、という仕事です。もしこのまま10ヶ月で帰される場合、恐らく私は、四つか五つの完成品しか見れないでしょう。

ですが私は考えている事があるのです。

もしも。もしもですがガルグ師匠にお嫁さんができてしまったら、師匠はこの仕事の途中でも、里に連れ戻されるんでしょうか。

そんなはずはありません。受けた仕事をこなさない、なんてドワーフの恥になる事を、認めるとは思えません。それにそのお嫁さんは、新婚なのに旦那さんと離されるでしょうか？

ドワーフは、元々女性の方が家庭を守るので、女は火の扱いに詳しく釜の温度は女が調節する事が多かったです。だから家庭では奥さんに頭が上がらないドワーフが多いんです。

さて、上手くいけば親方に叩かれて、お嫁にいけない程低くなつた私の身長と、外見の問題も解決しますし、武器の完成をすべて見れます。神樹の中に入る事とか、いくつか不安要素はありますが……

さあ、カナリーさん達の御屋敷に、二人で行く予定の二週間が勝負です。

覚悟して下さい！ 親か……師匠！！

第01話 庭師は鍛え、送り出す「1」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第01話 庭師は鍛え、送り出す「1」

生きているだけで価値がある。生きていればやり直せる。

そんな事は、本当の絶望を知らねえ奴の戯言たわごとだ。

リツチに操られている人間を、見た事はあるか？

操られ、仲間を切り、殺し、ゾンビを作る。

そんな事をさせられてる奴に、同じ事が言えるか？

奴から開放されても、操られる時に使われた魔法のせいで神経は病む。

マトモに言葉を話せる様に戻る確率は一割以下だ。

そんな状況は幾らでもある。人間相手でもな。

それを、乗り越える強さを得る為に、此処にいる。

「ぐすつ……えぐつ……当主さまあ……」

「フィーちゃん、本当に幼くなつたね……」

「それが一番の誤算だあ。まあ、もう少しでクルカ様のいる拠点ベースだ」

此処はニヤスクー古代王国迷宮。通称、ニヤスク迷宮だ。

一番最初に武器の完成したミランダ。そして、主武器は元々、『

竜星剣』 散々もめた後、結局名前はこれに落ち着いた とい

う大剣に決めていたフィーリアが、先に修行の成果を試しにやって来た。

ミランダ専用の二振りの黒いダガーは、暗黒魔法の使えるエルフの嬢ちゃん　ルーランだったか？　の協力で完成した『崩壊』の呪いの付きのダガーだ。

二人共、予備の武器はまだ制作途中だが、どちらにしる武闘大会には間に合わないの、手元にある武器での最高の状態に調整する事になった。

エルフの御神体とも言える、『神樹』を使って作った魔弓神弓も完成したが、これはレイチエルが弓に関して素人の為、屋敷でルーラン嬢ちゃんに習っている。元々、料理人でしかないレイチエルに前衛、中距離援護に立てというのも無茶な話だ。これが一番無難だと、グリントも言っていた。

その割にグリントは、弓術の動作を研究している。実のところ、グリントは、自身や元暗殺者のミランダですら反応できねえ射矢を打つの拳動を、レイチエルに仕込もうとしてやがるのを、俺は知ってる。『私が教えているのですよ？　生半可なモノでいい訳がありません』と言うグリントの目は笑ってなかったぜ。完全に予測不能な、遠距離固定砲台を作る気だ。

あいつとはもう訓練しねえ。そう心に決めた瞬間だった。

そして当然の如く、一番強くなったのはフィーリアだ。

元々持つ、ソルフィッシュの剣術。それにエルガルドの武術が組み合わさり、直接近距離戦闘では、通常状態のグリントに勝てるま
でになりやがった。後は本気のグリントに勝てれば卒業らしいが、それは間に合わねえだろう。

本気のグリントは近距離じゃねえし、しかも剣を使う事はほぼねえ。奇策、奇術で相手の不意を突き、死角を攻める。斬鋼糸や投げナイフなんざ、可愛いモンだ。下手すると、空中に高くに放り投げられた石で気絶させられる。グリントの思惑通り、その落ちてくる場所に誘導されて。

エルガルド家には身体の運用法という形の武術はあるが、徒手空拳、剣術なんてモノの理論はほとんどねえ。歩法、体法って呼ばれてる、全ての基礎となる部分だけが奥義になる。

それに投げや関節を取る事で、相手を無力化するのがエルガルド流の護身術だ。

それを習得し、他の流派の剣術などを学び、合わせるのが基本だ。もちろん相性はあるが、他の流派の技を、一段上の技にする。それがエルガルド流だ。

カラック坊ちゃんは、ラナル王国正統剣術を選び、それにエルガルド流の体法を組み合わせ、正統剣術では二番目の強さを誇っていると言われている。

ベルファスト様はフローリア様が前衛型だった為、中距離型のガードナー鞭術という変わった武術を選びなされた。三種類から六種類の大小とりどりの鞭で戦う流派だ。手合わせを頼まれた事があるが、全く勝てそうに無え武術だった。攻撃がくる方向、タイミングが全く読めねえんだ。それだけならいいが、エルガルドの歩法のせいで、間合いが半端なく広い。逃亡不可の知らない攻撃の怖さ、そういうもんを思い知れたのは収穫だったが。

その経験から、ミランダとフィーリアには知らない攻撃による怖さ、そういうモンを殺し合モンスターとの戦闘いの中で経験して貰う為に、此処に来たんだが。

……だが。死者の迷宮と名高いニャンスク迷宮は、フィーリアの精神面の弱さを引き摺り出しちまった。

「何故だ、何故誇り高き騎士があのような……」

少し落ち着きを取り戻したフィーリアの言葉に、ミランダと共に答えてやる。

「多分、精神が耐えきれなかつたんだよねえ」

「そうだろうな。まあ、リッチに狂わされる者は、騎士だろうが何だろうが関係ねえからな」

「し、しかしだなっ。生きているのであれば治療も……」

「無理だよな？ エヴァじいちゃん」

「ああ、無理だ」

「何故だ！ 神聖魔法であれば、死にかけても蘇らせる奇跡がある
と……」

「甘いぞ、フィーリア嬢ちゃん。リッチは神聖魔法で治癒できねえように、暗黒魔法で魂を売らせやがるんだ。アレを契約すると、普通は解呪出来ねえ。より暗黒属性の強い存在を連れて来て、リッチを脅し、解呪させるしかねえな」

「より暗黒属性の強いモンスターって、どんなのがいるの？」

「ミランダは相変わらず飄々とした態度だ。おそらく、一番精神面が強いのはこの娘だろう。」

「ブラックドラゴンか……それか、砂漠の地龍蛇ククルカンぐらいか。知性がある奴ではな」

「そんなの無理だ……黒竜など、決闘しても死ぬ迄戦おうとして、負けを認めぬと聞く。地龍蛇ククルカンなど、誰も見た事ないのでないのか？」

「いや、御祖母様は一回殴りつけたって言ってたぞ？ 何でも、地龍蛇ククルカンが寝ぼけてサンドワームを大量に追い立てて、砂漠都市の一つが壊滅しかけたらしい。その時にちょうど運悪く、いや、運良くか。砂漠都市に居たらしくてな。原因を探ったら地龍蛇ククルカンのせいだったから、殴って正気に戻したってよ」

「あの方は一体どこ迄、規格外なのだ……」

「んー、でも。フィーちゃんもそれぐらい出来ないよ、ダメなんじゃないの？」

「そんなっ。流石にそこ迄求められても……」

確かに地龍蛇ククルカンは規格外な大きさだが、外見も戦い方も全ての普通の蛇と変わらねえ。知能があるがプレスも魔法も使わない魔獣だ。使えるかどうかは知らねえがな。戦おうと思えば、戦える。人間数千人分の体積と向かい合う根性があれば。そういった根性がフィーリアには無えんだよな。

「いや、ミランダちゃんは間違っつてねえ。武器に例えりゃ、フィーリア嬢ちゃんはクルカ様の盾だ。そして最強の大剣でもある。ルシイちゃんがショートソード。ミランダちゃんはダガーや暗器、レイチエルは弓でカナリーちゃんが魔法の杖つてトコか。俺とグリントは魔導具袋だ」

「だがしかし、幾らなんでも大きさが違いすぎる」

「あのなあ、フィーリア嬢ちゃん。」

今回の迷宮探索は、そういう先入観をぶち壊す為のもんだ。御祖母様だつて、何も通常状態で殴った訳じゃねえ。空の詠み姫の能力だよ」

「そ、そうか、私もエントレインで強化して……」

「いくらゴシユジンサマのエントレイン同調が強力でも、剣が切ろうと思わなかつたり躊躇えば、ゴシユジンサマ死ぬよ？」

「う………面目ない。気をつける……」

「フィーリア嬢ちゃん、大剣に刻印してもらった効果の意味、分かつてるよな？」

「う、うむ。分かっている。当主様が避けられないタイミングで、魔法が飛んで来たら私が射線に入り、弾く。その為の大剣だ」

フィーリアの剣の機構文字が刻まれている宝玉には、空きがあったらしい。その宝玉の空きに、カナリーが刻んだ機構文字は魔力障壁同調。

フィーリアの魔力が、エントレイン同調でのクルカ様の魔力を消費し、魔力障壁を剣身に宿す。屋敷で行ったテストでは、魔法の火球なら

打ち返せたし、雷は霧散してやがった。欠点は、弾こうとしてる魔法の強さに応じて、魔力を無理矢理本人から消費しやがる事だ。

今回の迷宮探索は、その剣の使用訓練も兼ねてるし、リッチの居る所に辿り着いちまえば、クルカ様も戦闘に参加してもらおう。ただ、死線を体感する為だけに。

この迷宮に限らなけりゃ『リッチ』そう呼ばれるモンスターは、かなり多い。その中でもニャンスク迷宮のリッチは、今だ倒された事の無い、A級モンスターだ。

そして、この迷宮のリッチの恐ろしいところは、探究に来た冒険者を捕まえ、生きたまま呪いで配下にしやがる事だ。死ねば、ゾンビと化して。さらに肉が腐り落ちれば、スケルトンになっちまう。そうやって、ニャンスク迷宮の戦力は延々と強化されていきやがるのだ。

今回の迷宮探索の目的は大きく分けて5つ。

- 一つ目、ミランダとフィーリアの精神面の訓練
- 二つ目、フィーリアの剣の使用訓練
- 三つ目、クルカ様の死線体験
- 四つ目、ギャンザ皇国の生み出したとされるリッチの排除

そして最後が、影の系譜の調査である。

このまま三人で探索し、クルカ様は各階層での拠点ベースの維持。拠点ベースはカナリー作の結界石による神聖結界で、侵入は出来ない様にしてある。理屈は知らねえが、もちろん維持しているのはクルカ様の魔力だ。今回の迷宮だからこそ出来る方法だ。此処には神聖結界で侵入を防げるアンデッドしか、魔物は居ない。昔はいたかもしれねえんだが、もう全部アンデッドに成っちまってるだろう。

「しかし、生きてた頃の意思リベリオンテックのあるゾンビ、か。胸糞下悪いな。あの騎士で最後にこの迷宮に入ったパーティの、意思リベリオンテックのあるゾンビは全員だな。これで安心だ」

「できれば、助けてやりたかった……」

「クルカ様の安全命には変えられん。それにフィーリア嬢ちゃんの言っただ、蛙男のトコの騎士だぞ？」

「まあ、その蛙男に騙されて、此処に来たみたいだから、チョツと可哀想だったけど。でも生きて戻っても、エルフのトコに入り込んでたヒトみたいに、殺されるだろうし。休ませてあげるのが一番だよ？ ちゃんと、あの人達の家族に渡す物とか、回収してあるしね。それだけでも幸せなはずだよ？」

フィーリアがエルフの城でエント同調レインして、四連撃で倒したらしい『ヴォルフガング』とか言う騎士は、もうこの世にやいねえ。

ギャンザ皇国に売り飛ばした後、成り行きをグリントが見守ったそうだが、蛙男の配下に買い取られ、処分されたいらしい。そうやって使い捨てにされたあげく、リツチの配下になっちまうんざ、流石にミランダにも可哀想に思えたのだろう。

クルカ様のいる拠点ベースにや、そのパーティ全員が身につけていた物が全員分、揃っている。女に関しちゃ髪の毛の束も。この探索の後に、家族に届けてやるつもりだ。

そして、フィーリアだけは気付いていなかったが、その家族への荷物の中に、迷宮で手に入れた金になる指輪や腕輪を、こっそり幾つか混ぜてやってた。

おそらく、死んだ冒険者の家族への配慮だろ。

増やしてやっている所を、クルカ様は見てたが何も言わず、黙ったままミランダの頭を撫でてやってくれていた。

「だな。きつと送り込まれたのは、初めてじゃないだろう。騎士風

の武器や鎧を装備した、スケルトン騎士ナイトが多すぎる。過去に騎士団一部隊丸ごととか、食われちまってそうだな」

「いつか絶対、あの蛙男を殴ってやる……」

「でも、ゴシユジンサマ言ってたじゃない、此処の探究が終わったら、喧嘩売りに行くって」

ミランダよ。間違っちゃあいねえが、それは素直すぎる言い方じゃねえか？

「ミランダちゃん、間違っちゃいねえが……表立っては争わない、意識的な宣戦布告だぞ？ 一応」

「一緒だよ？ 蛙男はきつと何かしてくるだろうし。ね？ フィーちゃん」

「そうだな。顔も醜いが、性格はもつと醜い男だったからな。何かしらしてくるだろうな。その時には思いっきり殴れるといいが……」
そう話しているうちに、クルカ様のいる拠点ベースに着いた。

「お、おかえり。どうだった？最後の一人はいたか？」

「当主様あゝ。ううゝ」

そう言いながら、回収した騎士の荷物を放り出し、クルカ様の胸に飛び込んで行くフィーリアに、ミランダは小さな石をぶつけちゃいたが、やめさせはしねえのは優しさなのか、それとも……

「お、おい。何があっただんだ？」

「いえねえ、クルカ様。蛙男に騙された騎士の身の上に共感しちまつて、『可哀想すぎる、助けたい』て言っちゃあ、聞かねえんですよ」

「……ふむ。まあ、それは……諦めるしか、しょうがないな」
「だって、だって」

少し考えた風のクルカ様はミランダに手招きし、また頭を撫でてやってくれている。クルカ様もわかる様になつたなあ。いい男の気遣いの仕方だな。

「フィー。お前、秘仙薬飲むのやめるか？ そうすれば復活の奇跡

と、完全回復の奇跡の分の金になるかもしれないぞ?」

「うう〜でも、でも。う〜」

「可哀想だけど、でも俺達は俺達で、するべき事の為に、他を捨てる覚悟も持たないとな?」

「はい……頑張ります。自分が体力的に辛いのかは、我慢出来るの……」

「ミラは偉かったな。トドメ、刺してやったんだろ?」

「うん。だから、もっと撫でて」

「よし。任せろ」

フィーリアが殺さない様にしながら戦うと、『殺してくれ』『家族に一言を』などと言いだす、相手の騎士の話聞いてやっていた。それが一段落した時にフィーリアの制止を無視し、ミランダがトドメを刺した。俺あ、今回は何もしねえ。

バックアップ
後方支援と、どうしても手が足りねえ時しか手は貸さねえ。

「うう、私も……」

「フィーリ! お前はお仕置き。正座30分」

「そんなんっ。だって〜」

「シャキツとしろ! 俺の剣がだらしないと馬鹿にされるのを、俺は我慢しないとイケないのか!」

その言葉に、フィーリアは「ビクンツ」と体を震わせ、真面目に正座を始める。

『……私は当主様の剣。私は御主人様の盾。私はクル力殿の嫁で剣。私は旦那様の最高の……』など姿勢を正して目を瞑り、ブツと呟いてやがるが。

……自己暗示か?

「ちゃんとすれば、褒めてもらえるのに……フィーちゃん、お馬鹿さんだよな」

ミランダはもうちょっと、黒くなっちまうのを、抑えられる様になつて欲しいモンだねえ。俺としちゃあ、だけどな。クル力様は、

そこも頼りにしてるみたいだからな。二人の関係は二人に任せるが……… リングも受け取ったみたいだしな。

「ミランダ。最後の騎士の分、ちゃんと用意してやるう。この遺跡に眠ってた、系譜の成果になる様な物は、除外しないといけないな」

「はあい。あ、そだ。これも」

「お、今度のは高そうだな。本当にいいのか？」

「いいの。装飾品はゴシユジンサマからもらう物と、尻尾のコレだけがいいから」

うんうん。ミランダ、お前は完全に悪女に育っちゃまったなあ……

お前の師匠の嫁さんとやらを、殴ってやりてえよ……

ああ言われたら贈るしかねえよな。それも男の甲斐性の見せ所ではあるが……

クルカ様の財布の中身が心配だ。今の指輪一つで、おそらく金貨200枚ってトコだぜ？ それと同等かそれ以上の物を、ミランダのたった一言で贈らなきゃいけないるんだぜ………

一応、手話でクルカ様に価値を教えてやる。クルカ様は目を見開いてから、諦めた様な表情でミランダの頭を撫でつつ、約束を口にする。

「今度、ロイド爺さんに、二の腕辺りに着ける腕輪を作ってもらいに行こう。腕輪の形まではガルグさんに頼んで、彫ってもらおうデザインは俺が考えるよ。機構文字の刻印はカナに任せればいいし、腕輪の原型を持ち込んで、ロイド爺さんに綺麗に彫ってもらおう」

「やたっ！ 約束だよっ！」

ミランダは目を輝かせ、クルカ様に抱きついてた。

「その代わり残りも頑張れよ？ 製作はガルグさんが暇になってからだからな？」

「それまでにロイドが死なねえ様に、高級お酒気付け薬でも持って行っ

てやるか」

俺も、ロイドとの約束は果たさねえとな。

「エヴァ爺ちゃん。ロイドさんによろしくねっ。んふふっやった」

「……………っう」

フィーリアがミランダとは対称的に、羨ましそうに落ち込んでやがる。

自己暗示はどうした……

「フィリ。ミランダはな、この冒険者達の家族の為に、此処までに手に入れたお宝の自分の分をほとんど手放してる。助けられないから、せめてもの、という事だ。偽善になるかもしれないが、それでも、もしかしたらそれで彼らの家族が、助かるかもしれない。そういうミラの優しさは、すごく愛しいと思う」

クルカ様の言った通りだった。

ミランダは手に入れたお宝モノのおおよその価値の目星をつけ、それを五等分して拠点ベースに置いている。そしてその中の自分の分を、冒険者達の遺品の中に混ぜてやってた。主に換金しやすい指輪や腕輪なんかを。

五等分つてのは、クルカ様、ミランダ、フィーリア、俺、そして、屋敷にいる皆へのお土産の分だろう。

「はい……………」

フィーリアは喚くばかりの自分との差を、考えてんだらうな。

「フィリは騎士だったからな。偽善は悪、絶対正義を目指せていう組織にいたんだ。仕方ないし、それを真に受ける素直さは可愛いでも、自分に置き換えるぐらいはしろよ？ もちろん出来る範囲だな」

「はい。頑張ります。当主様の為にも、自分の為にも」

『可愛い』って単語辺りでシャッキとできるあたり、ほんっと素直ではあるよな。直情型の阿呆かもしれんが。

「可愛いつて単語だけで、復活できるフィーちゃんが、ある意味羨ましいね」

「ミランダ。『今は』それは言いすぎ。今晚は一人で寝袋な？」

「むう〜！」

ミランダが頬を膨らましてら。

ははっ。確かにそれは、今は思っても言っちゃダメだわな。嬉し
いからって調子に乗りすぎだ。

間違つて落ち込ませちゃ、何の為にフィーリアの気分を上げてんだか、わかりやしねえ。この後には、本命のリッチとスケルトンが控えてるんだからな。

クルカ様のバランスの取り方も、上手くなったもんだ。グリントに何か仕込まれてそうだな。あいつの嫁さん二人も、本当は仲がいののに、普段は文句ばかり言い合ってるもんなあ。

「さて、そろそろお昼前だ。クルカ様、次が本番だからな。少しだけ腹ごしらえして、頑張りましょうか」

「ああ。」

「ミラ、ファイリ。頼むぞ？」

「はいっ」

「うんっ」

微笑^{ほほえ}んで、いい返事をする二人にや、先程まで抱えていた悲壮感は見られねえ。これなら万全の態勢で、迷宮の大将^{ボス}に挑めるな。クルカ様も色々考えてんだ、俺も美味しい飯でも用意してやるかね。レイチエルには及ばねえが。

第02話 庭師は鍛え、送り出す「2」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第02話 庭師は鍛え、送り出す「2」

いつの間にか、子は親を超えて行く。

だが、親の全てを超える事は出来ない。親にも意地がある。それが孫なら、尚更だ。

目の前には鞭術使いのスケルトンがいる。俺らがニャンスク迷宮に来る事に決めた、要因の一つでもある。

この鞭使いのスケルトンの生前の名は、ガーネット・ゲツペル。ベルファスト様の親友でもあり、ガードナー鞭術の同期生だったらしいが。

ベルファスト様が教えてくださったのは、目の前のヤツの双鞭は、全くの別の生き物の様に襲ってくる、という事だった。

「フィーちゃんっ」

「ああ！ 任せる！」

ミランダが鞭を避けながら接近を図ってるが……フィーリアに声をかけたのは、スケルトンの攻撃がミランダだけじゃなく、クルカ様への攻撃を兼ねていたからだな、ありゃあ。

ありゃあミランダが避けりゃ、間違いなくクルカ様を直撃する軌道だ。

俺あこのスケルトンは、俺がベルファスト様のお相手をさせてもらった時より、強いんじゃないかねえかと読んでる。

そりゃそうだよな。自分の使用人に全力でやる訳ねえし、何より殺すつもりじゃあやらねえだろう。

「クルカ様、鞭の軌道は見えなくても構いやしねえ。とにかく手元と鞭の当たった位置だけを、よぉーく見ててくれや」

「手元はともかく、当たった位置？」

「鞭の届く範囲、それが間合って呼ばれるもんですぜ」

「……なるほど。どうせ目で追えないもんな。振ってる手元と当たった場所で、距離とタイミングはわかる、か。おし、とにかく見る」「フィーリア嬢ちゃん、少し前で防いでくれ。クルカ様の視線遮らん様にな」

「わかったっ。任せてくれ」

このスケルトンはミランダの獲物と初めっから決めてあった。コレぐれえは一人で倒せねえとな。俺だって好きに戦っていいんなら問題ねえ。守るモンが無え一対一ならな。

「ミランダ殿、風切り音が一番正確な様だっ」

「なるほどっ、ねっ。ありがとっフィーちゃんっ」

ミランダはちょっと悔しそうに、礼を言っつてやがる。恐らくその事実先に気付かれたのが、悔しいのかもな。

このフロアには最初、様々な武器を持ったスケルトンが、20体ほど居やがった。それを三人で片付けた後、ミランダが予定通り一人で、双鞭使いのスケルトンを相手どつてる。

さっき迄は、スケルトンには全く攻撃出来ない位置までしか、近づけちゃいなかったんだが、今はもうあと数歩で届きそうになつてやがる。全く、経験の吸収が早い、若さつてやつか？

このニャンスク迷宮は北の砂漠地帯にある。

冒険者達による、最奥到達地点は今ほボスが陣取つてる位置で、そのボスが最奥到達地点フロアのリッチ、そして、一つ手前のこの鞭術使いのスケルトンだつてという情報は、冒険者のギルドからまわつて来た。

このリッチが現れやがる以前は、エルフの調査隊がもう少し下の最下層まで、行ってたらしいんだが。

ところがある日、ギャンザ皇国の魔法院の機構師が、何を血迷ったのかはしらねえが、この先のフロアを独占した。それを守る為に、自分で暗黒魔法の呪いをかけてリッチに成っちまいやがった上に、そのまま狂った。まあ、暗黒魔法でリッチや吸血鬼になっても狂わない、なんて事の方が少ねえから、当たり前前の結果らしいんだが。それ以降、誰も通さねえ難攻不落の迷宮と化しやがった。

冒険者や探索者、研究者、騎士、等を喰らって更に難攻不落に。それが皇国からの指示だったのか、自分の意思だったのか。

ギャンザ皇国に、資料が残ってねえ限りは解らねえ。ギャンザ皇国は無いと言ってやがるが、嘘だとエルフの先代さんは言ってたな。

近くのオアシスの町で、エルフのグラッフとかいう奴の率いてる、機構師と騎士団の総勢約100名が、クルカ様の転移陣の完成を待ってやがる。俺は、お前らも戦いやがれと思ったが、それではミランダとフィーリア、それにクルカ様自身の修行にならないと、自分で言ったクルカ様の意見に従う事にした。

予定ではリッチが倒れ次第、奥に突入して転移陣でエルフに突入合図を送る。すると、グラッフを除いた全員を三つに分けて、三交代で探索を続けるらしい。

その間、俺たちや他の上層階のスケルトンを追いこんで、クルカ様に倒させたり、フィーリアとミランダの徒手空拳での練習台にしたりと、やる事は山積みのも予定だった。今じゃフィーリアは、死んでいった冒険者達の為に、調査が終わるまでに『この迷宮のアンデッドは全て狩る！』なんて言ってたが。

グラッフは適度に仮眠を取りながら、一人だけ全行程参加とか言っただけだった。なんでも、『お菓子の味がおちていた怨みのとばかり』らしいが、エルフの考える事はよくわからねえ。現在のエル

フの女王が、神樹の中で大地の精霊に確認したら、リッチのいる階から下は、4フロアしか無えらしいんだ。探索自体は一ヶ月もかかるねえだろう。

終わり次第、蛙男へ武闘大会の招待状を届ける。という名目の宣戦布告。それから、ギャンザ皇国の皇都ギャンザに行って、遺留品を届ける。そういう予定だ。

もともと、エルフにはここを攻略する力はあつたらしい。だが、胡散臭すぎるギャンザ皇国の行動に、周辺国家は揃って手を出すのを避けていた。近くのオアシスの町では、皇国から援助された宿屋や酒場の利用が、ニャンスク迷宮に探究に入る者だけには、格安になるのだ。

サンドワームの討伐の時は2倍もかかったと、フィーリアは憤慨していたが。

皇国は観光名所にしたいからなどと言っていたが、リッチを倒して欲しいのだろうという事はアホでもわかる。オアシスの出入り口には『成果を横取りする気があります』と、言わんばかりに『出る者に厳しい検問』がありやがる。

しかし、エルフも機構師だけをその町に送り込んで、誘拐されても困る。しかし騎士団員を、ずっと護衛につける訳にはいかない。最後の手段は、迷宮の中で全て研究し尽くしてしまう、なんて馬鹿な計画だったらしい。

それもリッチを倒せなければ危険でしかない、諦めかけてたところに今回の修行の話聞きつけ、そして勝手について来やがった。まあ。エルフの先代女王がいなけりゃ、ここから見つかった影の系譜の資料も、貰えなかつただろうし、損得で言やあ得なんだ。研究結果は、カナリーには無償開放するっていう条件を聞いて、仕方ないと諦めたが。

しかし、何故かカナリーはエルフに認められてるな。やっぱり機構師だからか？

その打ち合わせの時、調子に乗った先代女王が、自分も行くと言い出しやがった時は、何がなんでも全員で止めていた。思惑は様々だっただろうが。本当にエルフという種族は訳がわからねえ……

ホントに至高の種族なのか？

本当は嗜好主義種族とかじゃ無いのか？

研究物に関してはカナリーの転移陣を使い、一気にエルフの城の元へ運ぶ事で、話は纏まつてる。手に入るもの全てを運び込むつもりらしい。『石だろうが柱だろうがとにかく全部だ！』とグラッフは力説してた。恐らく、判断する脳味噌が無えんだらう。

脳筋だな。

そして帰りはエルフ全員、検問無視。迷宮の最奥の場所からカナリーの転移陣に入り、それで帰るつもりらしいが。

転移陣の効果は約30分。今の境界石の大きさじゃ、それを超える事がない。再利用も可能だが、ウチじゃクルカ様しか魔力を籠められねえ。

今回の探索じゃ、一階層^{1フロア}下りる度に、屋敷に戦利品を送ってる。クルカ様が一緒だからな。転移陣の再利用は問題ない。放り込むのは一瞬だしな。

だが、エルフの方はそうはいかない。恐らく魔力と個数が足りないはずだが、そこはカナリーの指導の元、今もイメトウルの街の屋敷では、エルフの機構師がせっせと作っているはずだ。それを神樹の巫女が神樹に持ち入り、女王が魔力を込める。その繰り返しだとさ、ご苦労なこった。

そんな事を考えている間に、ミランダがスケルトンの懐に入り、横一線にダガーを振る。だが、あれじゃ浅い。そして、致命傷には

なつてねえ。そんなミランダの攻撃後の離脱の瞬間を狙い、スケルトンの鞭が上からと右から、数瞬ずらして襲いかかる。

なんて嫌なタイミングだ。そう思った瞬間、それが来た。

ミランダがかるうじて両方を躲す事に成功し、間合いを離れた直後

急に鞭の動きが変わり、縦横無尽にスケルトンの周りを鞭が走る。そのままスケルトンは下層に向かうドアの前に陣取り、ただ振り続けてやがる。ありゃあ、何も狙っていいえ。鞭の結界のようなモンだ。知つてりゃ、絶対に出させる前に仕留めるべき技だ。

「おい、エヴァン。あんなのどうすりゃいいんだ？」

「そうですなあ。ミランダちゃんも考えているでしょうが……」

「……無理だな。今のままでは不可能だと思う」

「フィーリア嬢ちゃんは、戦闘ではかなり鋭いな」

「戦闘では、と言わないでくれ。これでも気にしてるんだ……」

「無理って……どうするんだよ」

クルカ様がそう言った瞬間、ミランダがこちらに跳んで戻り、クルカ様に抱きついた。

「絶対無理。ゴシユジンさま。エントレイン同調お願い。でなきゃ勝てない！」

「正解、だな。ミランダちゃんの判断は正しい。あの技を知ってたんなら、俺あ絶対に出させねえ。アレに何かするのは自殺行為、ダメだ」

鞭の動きと技量を考えりゃ、最悪あんな攻撃もあるだろうと予測はつくはずだ。

「しかし、グリントの指示は、エントレイン同調無しでの攻略だっただろ？」

「ま、ミランダちゃんの訓練は失敗、そう言う事だなあ」

「しかたないよね。あんなの普通じゃ無理だし。悔しいけど、出さ

せちゃダメな技があるって事に気付けなかった、わたしの失敗だね。だから、ゴシユジンさま。お願い」

それでも自分が仕留める。というのは元暗殺者の流儀か、それとも気を使っただけなのか？ フィーリアはこの後、リッチと戦うからな。

「ああ、ミラ。わかった。エヴァン、説明しろよ？」

「もちろんだよ」

「ずるい……」

「フィーリ！ たたく、一分。稼いでこい。戻ったら、エントレイン無しでキス」

ああ、目の色が変わったな……

「行きます！ はあっ！」

その一言で、竜星剣を最大化し、スケルトンへと跳び出すフィーリア。

……んで、ミランダとエントレインを始めるクルカ様。なんていうか。緊張感がねえ気がするぜ……

『同調 エントレイン』

【ミラ、ちゃんと傷つかずに勝ってこいよ？】

【うん、ごめんね。失敗しちゃった。】

【ミラも無事なんだ、それならやり直せるし、いいさ】

【アリガト。ちゃっっちゃと終わらせてくるね。】

【おう、行ってこい】

一分どころか数十秒で済ませ、戦闘に戻るミランダは、かなり怒っている様だな。さて、クルカ様に説明……はあ。
もう戻ってきてやがる。

フィーリアとのキスが終わってからだな……

「んっ　　っ。はあっ」

「ったく。フィリ、戦闘中だぞ、加減しろ。で、エヴァン。どう言う事だ？」

「当主様、相手がスケルトンだから、問題なのです」

上機嫌になったフィーリアが、得意そうに言っただけ。まあ、その通りだ。

ミランダはエントレインして、さらに早くなったスピードで、懐に入れないか為してゐてえだ。ま、それも試しとく価値はあるな。

「あれがなあ、人間なら問題無かつたんだがな。呼吸もあるし、疲れもする。そして何より、こっちの動きに合わせて動いてくれる。

だが、あのスケルトンにはそれが無えんてさ。疲れねえ、動かねえ、振り続ける。しかも一方方向だけじゃなく、本気で縦横無尽ときてやがる。恐らくグリントでも無理ですぜ。余程早くないと躲せません。ありや」

「グリントでも躲すのは無理か。じゃあ、どうするんだ。フィリならどうする？」

「私なら竜星剣で鞭自体を切ります。長さがありますから。もしくは剣に巻きつけさせて地面に刺して、今は予備がありませんので、徒手空拳で本体を破壊します」

「それで正解だな。あれ相手にや武器破壊か、止めないといけねえが、触れる事ができねえ。何しろ良く見りゃ、ただの鞭じゃ無いからな」

「それか、ほつといて逃げ出すか。だろうなあ。下に行きたい探索者にはきついなあ。流石、父さんの親友の骸骨様だ。半端じゃない」

スケルトンの動きは相変わらずだ。奥の部屋への扉の前で、鞭の結果。その動きは読めねえし、二つが絡まらないのがおかしいと、俺が思うぐれえ、全く別の動きをしゃがる。

間違いない、奥の扉には下層階への階段があるんだ。という事

は、リッチが出てくるまでの時間稼ぎか？ まあ、ミランダなら気付いてるだろ。それにしてもあの鞭の輝き、あれはミスリルだけか？ 何か機構も刻んでそんな気がするな。

「恐らく、ミスリルを編み込んであるのでしょう。カナリー殿に見れば詳しい事は分かるでしょうが、速さと強度が尋常じゃない。恐らく普通の身体強化なら、していても、素手で触れば弾け飛びますね。指が」

「フィリ。怖い事をあっさり言うな」

「けどよ、事実なんだぜ。クルル様。だから、フィーリア嬢ちゃんが言っただけの方法でとにかく止めて、本体攻撃が一番有効。だがミランダちゃんにはそれすら出来ない」

「そうか、ミラの今の武器は二つセットのダガーだけ、か」

「そう言う事だな。」

「とか言ってるうちにミランダが決める様だな。」

ミランダは両手のダガーで、鞭の外側を削る様にしてたかと思うと、いきなり腕を鞭の間に突っ込みやがった。

そして、身体強化で全身を強化してある左腕一本に、二本の鞭を絡めてスケルトンの動きを止めてしまう。力比べになるかと思いきや、そのまま懐に飛び込み、頭と心臓のあった位置にその真っ黒なダガーを刺す。

スケルトンは鞭を手放し、ミランダに掴みかかるが、ミランダもダガーを刺し放して手を離し、スケルトンの腕を払う。

そして徒手空拳では届かない、間合いを開けると……

『崩壊』の効果か、スケルトンが灰になり、崩れ落ちた。

「リーチが長いから、ミランダちゃんがやっただけに、腕に絡め取る。予備に剣の一本でもありや、良かったんだが。けどよ、エ

同調

ントレインしてなきや、腕が干切れてたかもしねえ」

「そう言う事か。止める術が無かったんだな。ミラの体格と今の武器では、一対一じゃどうにもならなかったと言う事か」

それにフィーリアが補足する。

「もしくは、あのスケルトンがああ技を出す前に、仕留めるべきだった。一度は懐に入れている。その一度で決めれなかった事の方が、一撃必殺の戦闘姿勢スタイルのミランダ殿にとっては、悔しいのかもしれないね」

一応、他の場合なんかも説明しておく。クルル力様には小さな可能性でも、知ってもらっておいて損はねえ

「逆にあれが人間なら、絡め取られた時点で、他の武器に持ち替えるだろうがな。ま、単純なだけに強いスケルトン。それがあんな鞭の結界みたいなもん使った日にや、そりゃ通れる冒険者は少ねえだろうな。大人数のチームでここに辿りつけてりゃ問題無いだろうが、向こうもその時はリッチが出て来るんだろうがな」

それで済みゃいいが万が一、リッチの前であの鞭の結界やられてたら、攻撃もできずに、ただリッチの魔法を喰らい続ける羽目になるトコだ。

「む。ではそろそろ、私の出番と言う事か」

そこにミランダが、腕に鞭を巻きつけたまま、ダガーを持って戻ってきた。

「出てくるよつ。フィーちゃん、がんばって」

「ああ、当主様を頼む」

そう言ってフィーリアは竜星剣を半分程の大きさにし、構えて待っている。足元には先程までに倒したスケルトンの残骸が散らばっている。

恐らく、リッチが出て来るのは鞭術使いのスケルトンが危険と判

断した場合、もしくは倒された場合と決まっていたらどうかなあ。でなければ、20体ものスケルトンのほとんどを倒した後、直ぐに出てこなかった理由に説明がつかねえ。

ミランダが腕に巻きついてた鞭を綺麗に巻き直して、腰に着けてやがった。気に入ったのか？ まあ、さっきのスケルトンみたいに、あそこまでの事ができりゃ戦力として考えたくはなるわな。鞭術つてやつも。

「此処からがホントの死線ですぜ、クルカ様。さあて、リッチの野郎相手に、フィーリアはどれほどの成長を、見せてくれるんでしょうなあ？」

「エヴァン。言ってる事の発想が、グリントに似てないか？」

「やめてくたせえ。あいつにだけは似たくねえ」

「なんで？ グリじいちゃん優しいよ？」

それはミランダが知らないからだ。嫌な笑顔のあいつはやばい。

「ミラ、お前はその、可愛いままのミラでいてくれよ？」

「クルカ様、俺ももう手遅れかと思ってますが……」

「マジでかよ！」

「何が？ 私はゴシユジンサマの私だよ？」

可愛らしく首を傾げながら、猫耳をぺたんと寝かせるミランダに、クルカ様は頭を撫でて癒されてるようだが……クルカ様の方が手遅れだな。こりゃ、だめだ。

「大丈夫。ミラは大丈夫だ。エヴァン。怖い事言つなよ」

そして前方では、こっちの声が聞こえるせいで、背中であピールしている尻尾があれば私も構ってと振っていきそうなフィーリアに対し、『健気だが、アホだよなあ』と思う俺は間違ってる筈だ。

グリント、すまねえ。クルカ様に死線を体験してもらって、修
行すら失敗しそつだ。はつきり言って戦闘の雰囲気じゃねえ………

第03話 庭師は鍛え、送り出す「3」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第03話 庭師は鍛え、送り出す「3」

不測の事態。それは予測できちゃいなかったって事だ。
今が正にそうだ。まさか、こんな事になるとは。

全く、こんな事になるんならグリントに任せりゃよかった……
俺あ今、ここ数年で一番後悔している。

何故なら……俺にスケルトンが縋りついていてるからだ。

「助けてっ。お願い。もうあの闇の中は嫌あああっ」

「頼む、家族に一目会いたいのだ。頼むっ」

「恋人に、幸せになってくれと伝えてくれ。名前はルールラだ」

……訳がわからねえ……なんでこんな事に……

「とりあえず、順番に名前と出身聞いて、要望を纏めるしかないな。
エヴァン、書いといてくれよ」

「シユールだね、ゴシユジンサマ。エヴァじいちゃんにだけ、スケルトンが殺到するなんてね……」

そう、無数のスケルトンが、何故カリッチの支配下を離れ、俺の足にしがみつき懇願してやがる。これなら襲われた方がまだマシだった……

「コレ、全員ですかい？ クルカ様……」

「とりあえず、フィリガリッチを倒せば、なんか変わるだろ……」

そう、コレはフィーリアガリッチと戦闘を始めてから少し後に始まった。

今回のニャンスク迷宮の探究は、予定していたいくつかの条件下での戦闘は、失敗って結果になっちまった。

ミランダ単独で、鞭術使いのスケルトンの撃破。

フィーリア単独で、リッチの撃破。

両方共、同調エントレインは無しの予定だったが、どっちもしちまった。

「くっ。この竜星剣でもきついんで、なっ！」

そう言いつつ切り上げ、骸骨の顎を粉碎した……………10秒ほどの間だけ。

「またかつ。むうっ。キリがないな……………っ」と

フィーリアの体をつかめるような大きさの手が、少し前迄フィーリアがいた場所を薙ぎ倒す勢いで通り過ぎる。

それを後ろに飛び、躲し、通り過ぎた手を斬りつける。その間に人間の背丈の二倍ほどの大きさの頭蓋骨は他の骸骨を吸収し、元に戻る。

方針は決まってるんだ、後はフィーリアがタイミングを見つけ、実行出来れば終わる筈だ。

だが、そのタイミングがねえ。

こんなモノ、生身で相手できるわけがねえ。

グリントは知ってて、この条件を出したのか？

リッチが周辺の骸骨と合体し、巨大化するなんざ。

リッチは、その体の維持に魔力の大半を使ってるだろう。リッチの支配から逃れたスケルトンが、人間だった頃の未練を言いながら縋り付いて来やがった。

何故か、俺だけに。

始めは、生身でもフィーリアが押していた。

リッチの魔法を弾き、斬り伏せ、追い詰めていた。

だが、致命的な間合いになるかと思つた瞬間に、地響きが起こつて事態は急変しやがった。

魔法だけを使っていたリッチが、魔法を使わなくなって、魔力障壁で守りに入つちまった。そして、リッチから黒い波動が流れ出たかと思えば、周辺に転がってた骨が集まり出し、スケルトンが山のように生まれやがると、リッチに抱きつき骨の質量が増加していった。

今、前方に見えたハズの下層階への扉の前にや、肋骨から上だけの巨大スケルトンが立ちふさがつてる。そして、その四本に増えた手でフィーリアに攻撃を始めた。

鞭術使いのスケルトンの時と同じだ。今度はミランダが時間稼ぎに入り、フィーリアはエント^{同調}レインを済ませる。

その後、集められはしたが合体しなかつたスケルトンが、話しかけて来たのだ。

スケルトン達は最初、お互いの姿を見てモンスターだと叫び、喚いてやがったが、時間が経つて自分がスケルトンに成つた事を理解すると、俺に縋りついて来やがったのだ。

全く、仕方ねえ。さっさと終わらせてもらわねえとな。

「フィーリア嬢ちゃん！ こいつらが暴れ出す前に決めてえ！ かけるか！？」

そう叫ぶと、

「分かった！ 当主様！ いいでしょうか！」

「ったく。しゃあねえなあ……フィリ。出来るだけ早くしろよ。終

わった後、動けなくなるなよ？ 蛙男にそのまま差し出すぞ？」

まだ未完成のアレをする気なんだな。それならすぐに終わるな。

「わ、分かっていますしゅ……うん！ 今回は失敗しません……よっ！」

噛みやがった……不安だ……蛙男って聞いたせいか？

「行きます！ はあああっ！」

そう気合いを入れると、フィーリアの行つてた身体強化が、第二段階に移行した。白い肌は真珠のような輝きを放ち、紺瑠璃の髪は濡らしたみてえだ。

この数カ月の訓練で、同調 エントレインが可能な五人は、第一階段じや目以外の外見的变化は見られなくなった。そして、ミランダ、ルシィ、レイチエルの三人は第二段階も無事安定し、問題ねえらしい。カナリーとフィーリアは、第二段階に移行すると、消費する量とタイムングがつかめねえらしく、全身筋肉痛で動けなくなっちまう事が結構あつた。

全員が第二段階を修得するまでにや、名前を考えるとクルカ様は言つてたな。

確かに、第二段階とか第三段階とか、戦闘中に毎回言うのは危ないわな。

「気をつける！、両手で来るぞ！」

巨大スケルトンが祈る時のように指を組み合わせ、そのままフィーリアに叩きつけようとしてやがったが、いらぬ心配だったか？ フィーリアは一歩たりとも動かず、その両手の攻撃を、蒼く輝く竜星剣で受け止めていやがった。

巨大スケルトンの振り下ろされた両手の上から、更にもう一對の

両腕が振りかぶられ、叩きつけられ　　る事はなく、フィーリアは後方に跳び、抜け出してる。

蒼く輝く竜星剣を、肩に担ぐように構え、少し腰をかがめると全身のばねを使い、反撃も迎撃も恐れねえで、突っ込んでいく。叩きつける為に組まれてた腕が、解かれる瞬間を狙っていたんだろう。

「はあっあああああっ！」

頭蓋骨への道が見えた瞬間、その肩に担ぐ姿勢から、上段からの打ち込みへと移行し、巨大スケルトンの頭蓋骨に叩きつけようとする。

それをさせまいと再度、正面に腕が重ねられ、頭蓋骨の盾としかるが

その腕すら切り裂き、約半分振り下ろした処で、剣から魔力が溢れ、魔力障壁が展開される。

その魔力障壁は、剣の10倍程の大きさになり、頭蓋骨をも真っ二つにした。その打ち込みで止まらず、そのまま左切り上げ、逆袈裟、左薙ぎへと繋ぐと後方へと跳びすさり、フィーリアが息をつく。

「やったか？」

クルカ様がそう呟くが……

「たぶん、まだ……っ！　来るっ！」

そう言っつて、ミランダはクルカ様に飛び付き、そのまま壁へと叩きつける様にして、飛来した無数の火球を躲す。

一気に、人間十数人分の距離を跳びきり、躲したが若干、身に付けたクロークが焦げていやがる。一体どんだけの火球を打ちやがったのか……

俺あ二人とは逆に、後ろに跳び余裕で躲したが、クルカ様を庇っ

た分だけミランダには、時間が足りなかったか。

「ミランダ殿っ！ 当主様はッ!?」

「フィーちゃん、うるさいっ！ さっさと倒して!」

「う、うむっ!」

フィーリアは無事にかわ躲し……いや、自分の所に来たモノだけ弾いたか。

しかし、ミランダの判断は正しいぜ。この火球の火力もそうだが、恐らくこの数が問題だ。十や二十じゃねえ。俺も次は無傷では……

「ミラ、三段階行くぞ。来い」

クルカ様の顔が真剣になってやがる。こりゃ、死線は見れたかもな。

「……でも、失敗するかも……」

不安になり俯くミランダ。殺しかけた事、克服できてねえのか……

「俺のミラが俺を死なすか？ あり得ないだろ？ それにな、俺が死んでもミラは生かす」

「そんなのっ。やだよっ!」

「じゃあ、守れ。成功させる。フィリはあの巨大骸骨デカブツを倒すだろうが、エヴァンと俺をミラが守れ。いいな?」

クルカ様はミランダの頬を両手で覆い、額を合わせる様にして言い聞かせてる。

「うんっ……ふあうんっ」

返事をした直後にミランダの唇を奪い、同調エントレインの重ね掛けを行うクルカ様。その判断がなけりゃ、俺も罔か、攪乱で戦闘に参加するか、フィーリアに任せ撤退するか。どちらかしか方法はなかったらうな。

「……ふはっ。エヴァン！ こっち来い」

クルカ様の言う通り、ミランダに守ってもらうか。と、クルカ様の元へ駆け寄る。

「エヴァじいちゃん、リツチのいたあたりから、わたしの後、一直線に並んでおいて、ゴシユジンサマを最後尾で。私が左右に弾くから」

「おうよ。まかせろ、クルカ様は俺の後ろからは、欠片もはみ出させねえよ」

ミランダの意図を察する。三人がリツチに向かって一列に。これならば間違いなく、クルカ様が死ぬのは、一番最後になる。……まあ、身長の問題で、クルカ様だけが頭一つ分は、上にはみ出るが。

「フィーちゃん！ 何があっても弾くから！ 前に出て、絶対に下がらないで！」

死守。その覚悟を言葉に込めるミランダ。

「必ず！ 一歩も下がらないっ。後ろは頼んだっ！」
答えるフィーリア。

目の前のミランダの体が真珠色に輝く。元々灰色の様な髪と尻尾は銀色になり、両手に持つ黒いダガーも鈍く黒い光を発している。以前見た事があるから知ってるが、目は橙色になってるだろう。

向こうではフィーリアが戦う音が聞こえるが、ミランダで見えない。しかし、時折り火球が来ると、ミランダの全身がブレて、二人か三人ぐらいに見えたかと思うと、火球が霧散する。

弾かなくても、数十回と斬り伏せる事で消滅させてやがる。

「大丈夫みたい、さっきみたいな強さの火球は、もう撃てないのかも」

「なるほどな。フィーリア嬢ちゃんが時間を与えないのか、魔力が少ないのか……後者である事を祈るのみだな」

希望的観測を口にしながら、ミランダのもつダガーに目をやると、その刃は黒い影に覆われ、タルワール曲刀のような長さになっている。

「ふむ、どうだ？ ミラ、落ち着いてるか？」

「うん。魔法が来た時だけ、三段階にしているだけだから、大丈夫」
成る程な。それと影の系譜の技を併用しているのか。リーチを補う
為か。

「それならいいが。しかし、こいつを生身で相手と違って……あいつは鬼か？」

クルカ様の意見には同意するが……

「たぶん、グリじいちゃん気付いてたんだよ、そんなに甘くないって事は」

「なお悪いわ。ったく。そこまでせんでもいいだろうに。ミラの体に火傷一つでも残ったら、何か復讐を考えよう。うん」

クルカ様、怒るところはそこでもいいんですかい？

「まあ、おかげで死線は解った筈だぜ？ クルカ様」

「確かに。ソツとしたよ。訓練で魔法を、俺の目の前ギリギリを通過させるとかより、よっぽどヤバいわ。やっぱり安心感があるのか？ 絶対当たらないって」

「そうかもねっ！ うんっ！……っ」と

更に火球を切り裂きながら、返事もするミランダ。結構余裕だな

……

「しかし、フィリの方もやばいはずだが……フィリ！ 早くしないと一人だけ、今晚スケルトンと添い寝！ ついでにその分ミラにプレセント！」

クルカ様がそう叫ぶと。

「駄目っ！ それはだめ……！ 二週間も待ったのになっ！」

あゝ。迷宮に入ってからもう二週間だもんな。オアシスの町に帰ったら、転移陣で、屋敷にいる三人が押し掛けるだろうしなあ……一旦ここを封印して、宿に戻って一日。恐らくグラッフ達と、最下層へ行くのは最短で一日。後の打ち合わせと顔合わせに三交代で三

日。計五日しか時間がない。クルカ様の気分が乗らない日もあるだろうが……

「頑張れ〜ファイちゃん〜」

「ぬう〜さつさと死ねえ！ このツ！！」

「ファイリ〜。失敗すると筋肉痛で一週間は動けないぞー」

「分かっていますっ！ でいやあああつ！！」

必死だな。もう火球も飛んで来ないしな。

そろそろ終わるだろう。そう思った時

「はあああああああああああつ！！」

ファイリアの一際大きな叫び声と共に、壁の崩れ落ちる轟音が聞こえた……

その後、リッチチが消滅した事を確認すると、その部屋の全てを探索し、回収するべきモノは屋敷へと送る。

後は少し早い為、夕食は後回しで、予定の確認をする事にしたが。

「強かったね。リッチチ」

「そうだな。ファイリ、よくやったな」

「はい、なんとか倒せました。やはり第二段階を完全に使いこなせないと、いけませんね……」

「まあ、普通はパーティーで当たるレベルだからな」

「ミランダ殿はどう見ました？」

「ん〜、たぶん。第三段階ができれば、五分かからないと思う
なるほどな、第二段階途中と第三段階やり始めではそこまで違
うか。」

「ま、それも後二ヶ月の課題だな」

「だなあ、しかし、クルカ様は次は一ヶ月後のフェンフルウ迷宮で
のカナリーちゃんとルシイちゃんだな。そこもキツイらしいぞ？」

「たぶん、次はグリント殿だな……もつとキツイ気がする……」
フィーリアは、かなりグリントの嫌らしさが分かった様だな。

「クルカ様、とりあえずの予定だが、今からグラフのトコに行っ
て、すぐに準備させて下せえ。俺あ、こっちの各階に置いてある、
ボロ屑の鎧とかの準備ですな。三交代で入って行くのに、何も持っ
て出なかつたら、流石に怪しまれるでしょう」

「だな。取りあえず俺はフィリとミラを護衛にして一階層だけ降り
るよ。此処は崩れてるからな。そこで通行できない様に封印かませ
て、宿に戻る。明日の朝八時ぐらいに、この場所集合でいいか？」

「それでいいですか。後は屋敷への報告は……『最下層までの安全
を確認してから！』……と二人が言ってますんで、それでいいです
かい？」

「……ああ。それでいいよ。あ、コレも念の為持つといてくれ」

呆れたように肩をすくめるクルカ様から、転移陣と神聖結界の機
構石を受け取る。

「予定通り、借りた家の二階にコレの出口刺しとくから。明日から
使うからな」

「出る場所はどこですかい？」

「分かり難ければ何処でもいいんだが……多分二階にあった部屋の
壁にする。天井だと音が煩そうだ。あそこのオアシスの町は基本、
石造りだからな。目立つから、あまり音を立てたくない。屋根裏も

なければ覗きもできないだろ。これの発動の瞬間を見なければ」

「ふむ、そう言えば当主様、宿ではなく一軒家に泊まるのですか？」

「いや、違う。倉庫として借りたんだ。迷宮からホ口層の鑑ごか見せていいお宝置き場にな」

よく分かっているミランダが続きを捕捉する。

「それでね。毎日私達は、その家に入って此処に転移して訓練と探索、夜には寝に帰るの。エルフの人達は徒歩で迷宮までの道を往復してもらうけど、私達はゴシユジンサマが居るからね。転移陣使い放題だし。やっとベッドで寝れるよ……」

「なるほど……」

フィーリアのあの無表情な顔。ぜってえ、解ってねえな。

「たたく、3人が話してるうちに紙にでも纏めるか。でないといフィーリアが間違っても困るからな。説明と表も書くか……」

グラッフの部隊は、3つの班に分かれて探索を行う。一班、約30名だな。

この最下層までの約55階層の内、あまり荒らされていない26階以降が今回の範囲だ。というか、それより上は冒険者が入り尽くしてる。

今、居るボスの部屋 50階 から下が約20名程が常時探

索。49階から上が若い騎士10名と俺達4名の14名。

これが取りこぼしの掃討部隊、兼見せていいお宝の回収部隊になる。

後は部隊の運営ローテーションについてだが。俺たちは毎日朝に転移陣で来るが、エルフ達は徒歩だ。街から迷宮迄だと、砂漠を歩いてちようど1日かかる。そして、この階層まで潜るのには、俺達の作った地図があ

れば、最短で1日かからない程度だろう。街から2日もあれば50階に着く。予定の遅れも考慮してある。ここで3日間探索し、次の部隊がちょうどその頃に来る。2日かけて歩いて帰る。これで7日間。そして二日休んで再度迷宮へ、という流れを3班で行う。

	A	B	C
1日目	移動(迷宮へ)		
2日目	移動		
3日目	探索		
4日目	探索	移動	
5日目	探索	移動	
6日目	帰還	探索	探索
7日目	帰還	探索	移動
8日目	休息	探索	移動
9日目	休息	帰還	探索
10日目	移動	帰還	探索
11日目	移動	休息	探索
12日目	探索	休息	帰還
13日目	探索	移動	帰還
14日目	探索	移動	休息
15日目	帰還	探索	休息
16日目	帰還	探索	移動

そんな風に行われる訳だが、エルフは砂漠の民ではない為、砂漠の過酷な陽射しにも強くない。最悪の事態が何か起これば、転移陣で運ぶ。普段の俺達四人の移動の為に必要だが、念の為、各班にも転移陣は渡されている。一セットだけだが。

その出口が借りた空き家であり、探索を終え街に戻った班が、見

口屑の鑑とか

せていいお宝を置いておく場所になる。

そこが出入り口になる為、常時エルフが誰か詰めている　お宝を守っているという偽装を兼ねて　が、どうしてもここにエルフ達が誰も居ない日が、三日に一回できる。その日　迷宮にいるエルフ達の探索2日目　は俺達四人が休息の日になり、交代で見張りをしながら過ごす。

これで解らなければ……　フィーリアへの説明は諦めるか……

「エヴァじいちゃん？　何書いてるの？」

「ん、ああ。ほら、フィーリア嬢ちゃん」

同じく不思議そうなフィーリアに渡す。

「一応な。ちゃんと理解しとかんと困るだろ？」

「……　フィーちゃん。もうちょっとお勉強もガンバる？」

「……　だ、大丈夫だ！　グリント殿から色々と学んでいるっ……

……だが、貰う」

ま、分かってくれりゃ、それでいい。

「フィーリ……　まあ、そういうトコも一人だけなら可愛いと思えるけどな……」

「っ！　じゃ、じゃあ！　ミランダ殿みたいに、約束を！」

意味不明なフィーリアに、俺達三人は声を合わせて返す。

「『は？』」

「私みたいなのは私だけにしてくれ。いいだろう？　当主様？」

よっぽど、ミランダが出したらしい『獣人はミランダだけ』って

いう約束が、羨ましかったんだろっかなあ……

「えっと……　ねえ？」

「そっだ……　なあ？」

何とも言えない顔をする、ミランダとクルル様。

「駄目だろうっか……　うっ……」

フィーリアは、『アホ』だな。

「いや、良いけどな。その方が先の苦労も減るしな……」

「約束だぞっ！ 私一人〜。ふふう〜ん」

クルカ殿に抱きつき、嬉しそうなフィーリアはある意味幸せだな

……

そんなフィーリアを他所に、ミランダがこっそり話しかけてくる。

「ねえ、エヴァじいちゃん。あれって……」

「ああ、『脳筋のアホはフィーリア嬢ちゃんだけしか困わない』って事だな」

「それで嬉しいのかな、ホントに喜んでていいの……？」

「まあ、幸せは人それぞれってこった」

「深いね……」

「底は浅いけどな……」

聞こえていないからいいが、クルカ様は微妙そうな顔をしてるな

あ……

そうなるわなあ……

そうして俺あ、一番の不安要素が身内だという再認識をした後、

無言で転移陣と神聖結界の機構石の本数を確認し、この階の^{ホロ層}見せて

いいお宝を一箇所にまとめ始める。クルカ様は相変わらず、微妙な

顔で下層封印をし、オアシスの町へと帰還した……

第04話 猫メイドは手に入れる「1」 (前書き)

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 猫メイドは手に入れる「1」

寝る。とつても大事な事だよね。

睡眠を取らずに動けるのは、アンデッドとかスケルトンぐらいだよね。

二週間ぶりのベッド。

今日はゴシユジンサマと一緒に寝る。

フィーちゃんも一緒になっちゃうけど、それはガマンするの。

だって、そうしないと、どっちかが三日になっちゃう。

五日しかない。

ルイ姉達が来ちゃうまで。

ゴシユジンサマが『絶対に一番に……』って言ってたから、レイチエルの番はどうしても増えちゃう。

それはいいけど、わたしがほっとかれるのは嫌。

だからフィーちゃんを説得して、今日は三人で寝る。

このお邪魔虫を早急に排除して。

「いや、クルカ殿のご家族にかかると、あの死者の迷宮ですら、対した事もなくなるのですなあ。ハッハッハ」

グラッフのおじさんは、わたし達の事を家族と言ってくれる。多分、アレのせいだ。

探索に入る前、若いエルフの騎士がわたし達二人を『使用人風

情』と言って、ゴシユジンサマを怒らせた。その時にフィーちゃんが訓練と称して、『使用人風情に負けるのがエルフの騎士なのか？』とか、『口だけは達者な騎士だな、どうせなら話術師にでもなったらどうだ。きつと笑って貰えるだろう』とか言いながらエルフの騎士を数名、ボコボコにしたよね。

今回の探索に参加出来なくなっちゃうくらい……………

エルフって何で、毎回こうなのかな？ もっところ、普通に大人しい人は居ないのかな？ 騎士は脳筋っぽいのが一杯だし。グラツフのおじさんはマシだけど、問題があったの。

「そうでもないさ、俺だって死にかけたしな。しかし、良いのか？」「良いのです。あやつらにも、良い訓練になるでしょう」

よくない。サツサとおじさんも行っちゃって？ 邪魔だから。

グラツフさんは若いエルフの騎士に、迷宮への移動の準備をさせ、自分は食事を取っている。空気を読めずに、ここに来て。

ゴシユジンサマの寝室で。わたしとフィーちゃんの視線の意味に、気付かずに。

「今日は、各部隊の隊長と四人で現地確認だろ？ エヴァンによるしくな。ちよつと美味い物買って来たから、届けてやってくれ」

そう言って、夕方戻って来た時に買った果物とかを、預けるゴシユジンサマ。

そうだよね。エヴァじいちゃんは今日は向迷宮こうに五人でお泊り。30人も常時探索するんだから、寝床の確保とか準備がいっぱいらしい。

だから、おじさん？ それ持って早く行ってね。

「分かりました。間違いなく、届けさせて貰いますぞ。しかし、コレで少しは落ち着きますなあ……………」

「そうだな、ギャンザ皇国に居る亜人、獣人の内、半数以上は女王の巫女就任式展で、戻ったのが確認されてたしな。後は、ガルグのおっさんの結婚式に呼ばれる奴で、冒険者や機構師は全員だろ？後は一般人か？」

「その事なのですが……戻らせる事のできない者の傍には、一旦、青狼族の獣人が付いてくれる事になったのですが、絶対的に数が足りておらず、約十名程どうにかする為に、知恵をお借りしたいのです」

おじさんがゴシユジンサマと話してるのは、ギャンザ皇国からの総撤退の事。

結局、レイチエルを傷つけそうになった、お馬鹿エルフあの女王は評議会を立て直し、探索者ギルドを設立したみたい。表向きは、古代王国迷宮への探索を希望する、エルフの機構師の為の組織って言うてた。

迷宮探索に行きたいエルフの機構師に、ストレイタム共和国の保証する冒険者や騎士を紹介し、護衛につける。ゴシユジンサマ曰く、人材斡旋所とか言うらしいよ？聞いた事ない言い方だけど。でも保証って辺りで、冒険者ギルドとは折り合いが付いたみたい。冒険者ギルドには保証は出来ない、というか不可能だもんね。請け負った冒険者が逃げ出すような者でも、獣人と亜人気付けないしね。

それに、利用可能な資格は、ストレイタム共和国の国民だけ。対象となる冒険者は試験を受けさせられるし、出発前の暗黒魔法の誓約書も書かされる。もちろん、メリットもある。こなした依頼の評価が高く、それが何度も続けられれば、オリハルコンで製作した武器が贈られる。しかも、ドワーフの巨匠の作品だった。

多分、カレンちゃんとの結婚を控えた、ガルグのおじちゃんが作るのだろう。

もちろん、そんなのは表向きの話で、裏では盗賊ギルドの真似事ができる様に、イメトウルの街の盗賊ギルド連盟幹部が、教官になって訓練中。主に獣人が仕事を覚える為に頑張ってるって聞いた。

同じ獣人としては、人殺しをしないで済むなら、して欲しく無い
んだけど。でも、部族を守る為にも頑張つて欲しいと思う。奴隷
扱いされない為にも。その活動の最初の一步が、獣人や亜人のギヤ
ンザ皇国からの撤退。あくまで秘密裏に。

先の帝国紛争つて呼ばれる大戦で帝国側についたギヤンザ皇国に
は、あんまり獣人や亜人はいないっぽい。そもそも帝国側は獣人、
亜人を下位種族扱いして、戦争に無理に参加させた。そんな側
についたギヤンザ皇国には、居るはずもないんだけど。それでも、併
せて百人程度は居る様で、その一人一人への意思確認と数の把握が
ギルド『橋渡しの衣』協力者の前は『死神の羽音』だ
っけ？ に任された。

盗賊ギルド『死神の羽音』は、まあ、盗賊が騙された事もあつて、
裏のお仕事の信用度が落ちちゃったから、エルフの探索者ギルドに
所属する『橋渡しの衣』協力者に職種替えしたみたい。盗賊でいたい人は
移籍した様だし。

で、冒険者や機構師とは比較的うまく話が進んだらしいけど、困
つたのは奴隷と一般人。約20人の獣人と10人のエルフが、家族
もいてどうにも困つてるらしい。ほとんどがハーフだけど、だから
つて放つてはおけない。

そこに手を貸してくれたのが、青狼族の獣人。純血種以外は部族
を出されるつていう、徹底した血族主義の部族。全員がものすごく
強いはず。『各国の將軍クラスが、纏まって暮らしてるみたいなモ
ノです』お馬鹿エルフつて、グリじいちゃんは言つてた。

あの女王の『対等なる世界の調和の為に力を貸すのじゃ！』お馬鹿エルフつて
いう説得に応じたらしい。……青狼族つて……

とにかくそれで獣人は任せられるんだけど、やっぱり問題はエル
フ。一般人は非力だもんね。せめてドワーフぐらい強ければねえ。

エルフは本当に力がない。その代わり長命種で、機構師になると、
すごいモノを作るらしい。見た事ないけど。

……だつてカナちゃんの方が、いっぱいすごい物作ってるし……

とにかく、エルフは人間や獣人みたいに、十代でそれなりに強くは成れない。長い間　50年ぐらい？　鍛えられて、始めて若い騎士が生まれるぐらいだ。だからプライドばかりの、脳筋が多いのかな……

「……つまりアレな訳だ。一般人と奴隷は、軍にでも追っかけられたら、逃げ切れない。でも護衛が出せない。簡単に言やあ、金も力もない、だから知恵をつて事だよな？」

「はい。既に70人の確保と今回の探索に、今年度の予算は全て……流石にこれ以上は……10人のエルフの内、3名は奴隷です。後は養父がいたり、食堂を経営していたり、と。まあ、7名は出る意思がなく、困つてまして……」

おじさん達エルフは、素直すぎるんじゃないかな？　どうにでもなりそうな気はするけど……

「ミラ、こつち来い」

わたしの考えてる事が分かったのか、頭を撫でてくれる。

えへへ。この、頭の上の耳をフニフニされるの、好き。キモチ良
い。

「まあ、攫つちまうとか、騙して連れてくるとか。色々できるが、取り敢えず、そういうのは無しの方が良いんだよな？」

「はい……一応、グリント様にもそう教わったのですが、流石に、その後の心情を考えますと……」

何でグリじいちゃんは様付けなんだろ？　ま、いつか。今はキモチ良いし。

「ふむ……レチエ連れて行ってみるか……食堂の方は、イメトウルの街に支店を出させて……一般人は家族ごとか……グラフィ、その一般人の親か友人に、ここの迷宮に探索に入った奴がいらないか、確認してくれ。それで、なんとかなるかもしれない」

ゴシユジンサマはちよつと何かをブツブツ呟いた後、おじさんに指示を出した。

「はあ、やってみますが……『橋渡しの衣』の方に頼んでおきます」「どうするんだ？ 当主様？」

そう言つて、さり気なさを装つて、ゴシユジンサマの傍に寄り、手に触れるフィーちゃん。わたしの撫でられてるの見てて、『恥ずかしい』より『羨ましい』のが勝つたんだね。

実は、^{夜のお供}ご飯の後の為に、砂漠の民族特有の踊り子衣装なの。今のわたしとフィーちゃんは。

下着の上に、透けてる服を着てるみたいな衣装だから、フィーちゃんはおじさんがここに来てから、ほとんど何も喋つてないの。

恥ずかしいんだよね。耳、真つ赤だし。

でも、グラツフのおじさんは凄いね。こんな格好の二人を見ても平然としてる。

部屋に入った時のゴシユジンサマなんか、すごい興奮してたよ？ 食事はいらなくて、言い出しそうなくらい。

「ん、今はまだ、な。取りあえず、詳細まで調べた物を探索中に届けて貰つてくれ。この期間に無理だったら、そんな時は強制的に、つても考慮してくれ」

わたしの頭から手を離れたゴシユジンサマは、フィーちゃんの手に手を重ねてあげてる。

「分かり申した。直ぐにでも頼んで参ります。お邪魔しましたな！ それでは！」

そう言つておじさんは、来た時と同じく、唐突に帰っていった。

「ふう。あれで空気も読めりゃ、役に立つんだろつが……」
「そうだね。読んで欲しいよね。」

「と、当主様。あ〜ん？」

恥ずかしがりながら、口に持って行ってあげるフィーちゃん。
丸いパンの上に、色々乗せて焼いてある食べ物、食べやすく力
ツトした物だ。

ゴシユジンサマは『ピザ』って言った。

それに唐辛子のソースを、ちょっとかけるのが美味しいらしい。

「んむ、自分で食べれるぞ?」

食べてあげながら、そんな事をいうゴシユジンサマ。

「ダメ。ゴシユジンサマは、ちゃんと手はフィーちゃんとわたしの
腰に、ね?」

「ミラ?」

分かってなさそうな、ゴシユジンサマに教えてあげる。

「ハイ、お酒」

そう言っ自分で口に含んで、ゴシユジンサマに口移しで飲ませ
る。

「ミランダ殿、ズルい! 私も!」

「順番ね? 喉が乾いたら、どっちかに言ってね? ゴシユジンサ
マ。はい、あぁ〜ん」

今日のご飯は、ゴシユジンサマの手は使わせないの。フィーちゃ
んも分かったみたいで、お酒と『ピザ』を両方用意して順番を待っ
てる。

「当主様の手を、汚さない為だからな。なんとけしからん風習の街
だ。手で食べる料理が多いなど。では、と、当主さま、もう一度。

あぁ〜ん」

モノは言い様だね。フィーちゃん。そうやって二人で食べさせる
の。

「で、この空いた手は? 暇なんだが、どうすれば良いんだ?」

「好きにして良いよ? ゴシユジンサマ?」

エロエロなお顔だね、ゴシユジンサマ。

「そうか、じゃあ……」あ、あつ。当主さま、そこはつ。ひゃん

っ
『…………』

フィーちゃんだけなんてズルいよ。

「むう。私もっ。はい、あ〜ん」

ゴシユジンサマにそう言うのと、にやけた顔でフィーちゃんにしたのと同じく、胸の中に手を入れるゴシユジンサマ。

「ひゃうん。つまんじゃっ…………ダメっ。ちゃんと、ご飯も食べにやいとっ。あにゃんっ…………にゃふんっ…………あぁっ、にゃあ…………あっ」

「当主さま、お口…………んんっ…………ンハッ」

フィーちゃんは、お酒を何度も飲ませてる。寝ちやつたら困るから程々にね？

その後は予定通り、ご飯もそこに美味しく頂かれたよ？ お腹もいっぱい。満足したよね？ フィーちゃんも。

目を覚ますとゴシユジンサマは、頭を撫でてくれた。

「起こしたか？」

「ううん、今日はエントレイン同調してたから。フィーちゃんも起きるかも」

そう言っつて、ゴシユジンサマの胸に頭を乗せる。

この位置が一番、撫でやすいみたい。わたしもキモチいいし。

「で、やっぱり、レチエの事か？」

私はゴシユジンサマの右に。フィーちゃんは左に、抱き着いて寝ていた。向こう側のフィーちゃんのキモチ良さそうな寝顔が、チヨツと羨ましいと思う。

「うん、仕方ないけど、やっぱり、ちょっと羨ましいって思っちゃう。構ってもらえる時間が増えるのは、ね」

わたしはまだ今のままでいい。皆が一度に妊婦さんになったら、大変だもんね。

「だろうなあ。……あむ……だけど、二人が納得してるならそれも良いか」

ゴシユジンサマは残ってた『ピザ』をかじりながら、認めてくれる。食べ物粗末にするのクライだもんね。食べないと、体力が持たないのかも知れないけど……

ゴシユジンサマは、三人でベッドに入るのを嫌がって……というより、気を使ってくれてるんだよね。他の皆より胸が大きいとか、肌が綺麗とか褒められれば嬉しいけど、逆に比べられて劣るのは、みんな嫌だもんね。みんなを同じだけ、大事にしてくれるって、分かってても。

「何考えてたの？」

「ん？ ああ。さっきの話だ。食堂をやってるエルフな、イメトウルの街に本気で来てもらおうか、とな。あの街、不味い飯屋が多すぎる。リヴアルの店を倍の大きさにして、孤児ももつと雇う、とか」

普段食べてる、レイチエルのご飯が美味しいもんね。昨日の『ピザ』も普通に食べてたら、迷宮で歩きながら食事を取れる、携帯食料みたいに感じたかもね。

「そうしてくれると助かるよね。獣人と亜人の安心して通える店も、欲しいよね」

そう、どうしてもゴハン屋さんには、柄の悪いお客が増える。行儀の悪い、酔っ払いは要らないの。

「ま、娯楽が少ないからな。考えてたのは、ただ食事がしたい客と、そうじゃない客に分けられるような店。店が二つになる様に真ん中に厨房を作るとか、入り口も二つ。どうだと思う？」

ゴシユジンサマは色々、変な事思いつくよね。

「お酒飲む人と、間違いなく分けれるの？」

「んー。食事専門の方は、お酒は出さないとか。出しても一杯だけ」
「向こうが見えない工夫も要るよね。絡む人が居そう。厨房越しに」
「そうだな、私も騎士を酔っ払いがけな貶していれば、飛び込むと思う」
「何時の間にか起きてたフィーちゃんが、脳筋なこと言ってる。」

「だよなあ。まあ、その辺は後回しだ。一回やって見るさ」

「領主の金で店を出せるとなれば、店主は何かするのではないか？」

「そっか、お金の制限がないなら、何とか頑張ってくれるよね。」

「色々やるべき事は多いが………お、夜明けだな、約束の時間までに風呂にも入りたいが……」

「眠いんだよね？ ちゃんと時間前には起こしてあげるから、寝てもいいよ？ ゴシユジンさま」

「うむ、私は日課の鍛錬はしないと。グリント殿に怒られる。起こしにくるぞ？」

当主様

「そう？ じゃあお願いね。わたし、ゴシユジンさまと寝てるから」
「なっ、ズルいぞ！ ミランダ殿！ 嵌はめたなあ！」

「ふふ。今さら気が付いても遅いよ？」

「フィーリ、そうしてやれ、今晚はお前だろ？」

「そうそう。今晚は、フィーちゃんが添い寝だもんね。」

「ううう、当主様。わかりましたあ………私は何故こうも簡単に、引つかかるのか……」

「んふふ。ごめんね、フィーちゃん。」

「二時間後をお願いね。その後は、三人でお風呂に入って、昨日と同じ『ピザ』食べて。ね。フィーちゃん？」

「う？ ……うむ！ そうだな、それが良い。そうしよう」

「期待するのは勝手だよな？」

「昨日と同じ食べ方をするかどうかは、ゴシユジンさま次第だけど。」

「では当主様、二時間程お休み下さい。私は鍛錬に行つて来ます」

「フィリ、今日も一応探索だ、無理はするなよ。大事な体だからな」
そう言う事いうと……

「はい！ 無茶はしません。ではっ」

「ご機嫌でフィーちゃんは部屋を出て行った。あれはきつと、間近に迫った結婚の事、考えてる顔だよね。わかりやすいなあ……」

フィーちゃんは武闘大会の二日前に、ゴシユジンサマと結婚する。
フィーリア・ダントリンとして、ダントリン子爵第一夫人として、
社会舞台に立つ。

世間に公表する、表立った婚姻はフィーちゃん、レイチエル、カナちゃん、の順で決まってる。後はルイ姉だけ……何故か婚姻は嫌がってるみたい。私はもしかしたら、出来ないかもと言われた。それも納得してる。

その代わり、他の獣人には手を出さないっていう約束は、死んでも守ると言ってくれた。

婆ちゃんが、何とかなるよって言ってたから、気にしてはいないけど……ルイ姉はそれで嫌がってるのかもしれない。

でも、ゴシユジンサマが何とかしてくれるよね。きつと。

「オヤスミ。ゴシユジンサマ」

「おう………」

もう、ほとんど寝ているゴシユジンサマにキスをして、私も眠った……

第04話 猫メイドは手に入れる「1」 (後書き)

感想や評価を頂けると作者が大変喜びます。
何卒よろしくお願いします。

こちらの執筆が止まったりする分際で『吸血鬼にも愛は必要？』
という吸血鬼モノも書き始めました。

お怒りはあるかもしれませんが、あちらにも一読の価値が……
ないかもしれません。

それでもよろしければあちらもご一読下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6863v/>

義賊と貴族がメイドと主

2011年11月27日01時38分発行